KAIZO

# 改造

十二月號

1929

改造社版

# 日本地理大系

豫約募集

我社の日本地理大系は單なる机上の書籍ではない。日本國民は先づ吾國土が何を有するかを熟知し、海外に對つて國家的權威の發揚と雄偉なる民族的使命の展開とを企圖し、地理學に依て國民の自覺を促さんとして生れた意義ある出版である。多くの出版物に於けるが如き單なる寫眞の集成や漫然たる通俗科學書とは斷じて種類を異にする事を識者に訴へ以て江湖の支持を俟つ。

新興日本の金字塔・旭日の國に此大系あり!!

## 特色

**1 解說**

本文三百六枚の他に七百三十四面の寫眞に悉く學界の權威が署名して二百五十字乃至七百字の解說を付す、斯の如く詳細なる國土の記述は實に本大系のみ、絕對他にはない!!

**2 航空寫眞**

特設所屬の航空寫眞班を有するは斷じて我社のみ。本篇には我社の航空寫眞を補ふに東西大新聞社、陸海軍民間會社の航空寫眞を乞ひ得て粹を選び實に百卅二面を滿載す、この壯觀は絕對本大系のみ。

**3 原色寫眞**

地理の原則に依り一々畫家を現場に特派し天然色を航空普通寫眞に移したる特刷原色寫眞十頁を付したるは將に本篇の異彩、絕對他に模倣を許さず。

**4 地圖**

我製圖界の泰斗文部省囑託木崎盛政氏作製の近畿地方大地圖、石橋五郎、中村新太郎兩教授監修の特殊地圖其他合計十六頁に本文挿入十數面の地圖を付す。

**5 編輯法**

通俗に侯ず乾燥枯淡を避け、堂々國家的自負を以て永遠の生命を目的とし編纂せるは唯本大系あるのみ、斷じて他の追隨を許さぬ。

第一回配本

# 近畿篇（第七卷）

堂々五百四十頁

目下配本中

急ぎ書店、又は本社に！

## 航空寫眞班の特設

近代地理學の原理に則り全卷二千五百の航空寫眞を滿載す。陸海軍各新聞社航空班の援助は勿論だが特に航空寫眞班を新設し全領土を空中より撮影する我航空界の權威御國飛行學校長伊藤酉夫氏を班長に一等操縱士熊川良太郎氏を主任操縱士、二等操縱士藤田武明氏を豫備操縱士とし、三菱式 B1―2 型「改造號」を主機にアブロ式 504K 型二機を補助機とする改造社航空班は東京市外立川を根據地として活躍する。この國家的事業の爲め江湖の援助をお願ひする。

## 絢爛たる裝幀

高雅なる卵白色特製クロースに舶來羊皮を用ひ眞紅の旭日の黃金の輪光を現はしたる表紙に櫻花の見開を配し祖國日本を象徵せる裝幀は將に我出版界空前の美觀である。本大系が我が麗しの日本を如何に國民的矜持と周到なる科學的用意を以て取扱つてゐるかは此の裝幀に依つても知れる。

全十五卷

一冊 貳圓八拾錢

申込金不要

第一回配本に限り分賣

特典 新日本大地圖贈呈

會員には一人殘らず掛軸用

內容見本進呈

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



# 改造 十二月號 目次


回顧と展望……巻頭言……一

無産政黨問題の再吟味……山川均……二

金本位制の世界經濟的意義……土方成美……二〇

新藝術形式の探求へ……藏原惟人……三一

モルガン王國論……小島精一……四七

減俸問題の教訓……末弘嚴太郎……六一

政界展望台

犬養車中談。濱口内閣の鬼門。解散の存在理由。軍縮會議の目標。共産黨事件。……馬場恒吾……六五

經濟時評

金解禁の切迫と物價……前田繁一……七〇

「共産黨事件批判

犯罪學的觀察……長谷川如是閑……七七」

本書は西鶴の町人物最初の作であつて金を描いて深刻を極め國文學史上に於て最も珍らしい[illegible]のであるが悲しい哉難解な語彙特殊破格な文法の爲に從來その詳しい註釋書を缺いて居つた本書は弊館が特に著者に乞ふて學界最初の著述として出版したものである。勝れた鑑賞は正確な訓詁の上に立脚せねばならぬ西鶴一流の文脈を解きほぐし其特殊なる語彙文法に對して最も詳細な解説を施された本書は必ずや大方の國文學研究者に異常な歡迎を博する事であらう。尙口繪及語句索引をも添附せり。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 山名正太郎著 | ●思潮文献 日本自殺情死紀 | 珍らしく興味ある本と大好評初版再版また亦賣切増刷 | （三版） | 正價金武圓 送料十八錢 |
| 吉村重德校註 | ●院本名作 義太夫淨瑠璃詳釋 | 妹背山伊賀越一の谷嫩軍記の三篇合册詳釋す | （第二卷） | 正價金武圓 送料十八錢 |
| 吉澤義則校閲 奧里將建氏著 | ●詳註口譯 萬葉集長歌全集 | 長歌の全部を口譯し評釋し研究者に多大の利得を與ふ | （大好評） | 金三圓八拾錢 送料廿七錢 |
| 宇野哲人序文 笠松彬雄氏著 | ●唐詩選詳解 | 唐詩選絕好の註釋書初學者に好適書なり五版六版亦賣切增刷す | （七版） | 金武圓八拾錢 送料十八錢 |
| 文學博士 宇野哲人氏著 | ●增補改版 支那哲學の研究 | 博士の支那哲學に關する講演は皆納めて本書にあり。 | （拾貳版） | 金三圓八拾錢 送料廿七錢 |
| 大關增次郎著 | ●カント研究 | 千百餘頁の大册實質から云ふても近來稀に見る出版である良書 | （三版） | 金七圓八拾錢 送料廿七錢 |
| 吉村勝治氏著 | ●近世 世界政治外交史論 | 德富蘇峰氏が一大傑作近來の讀物と折紙を附せり | （大好評） | 金三圓五拾錢 送料十八錢 |
| 片倉藤次郎著 | ●社會主義夢物語 | 共產主義社會主義に非ず人は光明なしと思ふ人に一讀を薦む。 | （最新刊） | 金壹圓貳拾錢 送料十二錢 |
| 山名正太郎著 | ●政談演說の仕方と聽き方 | 際物でなく眞面目な研究書直ぐ役立つ書 | （五版） | 金壹圓五拾錢 送料六錢 |

# 大同館發行

振替貯金口座 東京八七貳番

---

「公式化した共產黨……赤松克麿…（…）

「前衞發展過程の犧牲……猪俣津南雄…（…）

# 回顧と展望

第一國際も、第三國際も、時代の把握を一面に於て過またなかつた。時代の機械性に對する把握がそこにはある。機械の社會力に對する把握がそこにはある。

既成國際に贊成な者の事は措く。それに不贊成なすべての者は、自身の國際を興こす必要がある。なぜか。善きにつけ、惡しきにつけ、賢にしても、愚にしても、思想は全社會を覊制または統制する決意と方法が、それの成功のためのミニマムの必要である時代が來た。既成國際に趨むかず、しかも自己の國際を造らざる者、その者の名が現代のリベラリストであり、國粹主義者である。

思想にむかふには行動をもつてすべし。その思想が社會思想であるすべての場合を通じてだ。地球が太陽の周圍を廻はるといふ。三角形の內角の和は二直角に等しといふ。これは社會思想でない。その問題の誤認には思想をもつて臨むことが主要方法だ。しかし社會思想は社會行動の選擇の問題だ。實質が行動だ。故に、正しからざる社會思想と認めたものにむかつては、その行動源を、正しき思想にもとづく新行動の實現によつて根絕することが主要方法であらねばならん。顧みるに、現在及び從來の政府及び民間の對思想策及び態度は、行動を變改せずして思想を處理せんとするものだ。社會思想にむかふには、斷じて必ず行動的經綸をもつてせざるべからず。現社會の惡制を改廢する形の行動が第一に必要であり、その次ぎのまた次ぎの末梢的行動目錄として、多少の浮菌的現象を石炭酸で皆滅に付する行動の必要がある。

不如意の變亂は古來薄弱なる統制の瞬間を選んで進出する。それが不如意のものであつてはすくなくともその立場からの恥だ。民政黨內閣たるもの、また深く此處に猛省を要するものを持つ。

今日のモットーは、積極的國際、行動、最も制限してもこれ以上のものであるほかない。日本に、現下の日本に積極的國際なる一つのものもないことは最も深憂すべきだ。そこには亦た一つの積極的なる、十分に社會的に行動的たる對思想策すらもがないことは、單なる能率眼から觀ても齒痒い至りである。

陣容は國際以下たるべからず、方法は行動以下たるべからず。日本の政治について殊にその必要を見る。回顧して缺くるところのものは新眞國際と行動的思想であり、展望して必要なるものはその二つだ。



# 無產政黨問題の再吟味

山川均

## （一）戰線統一問題の現狀

昭和二年末に初めて表面に現はれた無產政黨の合同、戰線統一の運動は、昨日（十月廿九日）の地方六政黨の統一戰線協議會の決議──社民、大衆、および近く結黨式を擧げる新勞農黨に對する卽時合同の提議──をもつて、一つの時期を閉ぢようとするものゝ如くに見える。

この前後二ケ年に亘る統一運動の唯一の收穫は、昨年八月の七黨合同による、日本大衆黨の成立であつた。日本大衆黨の成立は、一般大衆の戰線統一に對する熱望を代表したものであつたと同時に、たゞに關係七黨の黨員大衆ばかりでなく、一般大衆をして、戰線の統一に對する熱情を高めしめ、その實現に對して自信を持たしめた。かように七黨合同の成立は、一般大衆の凝視の的となつてゐたゞけに、僅々數ケ月後におけるその分裂は、大衆をして深刻な幻滅を味はしめた。日本大衆黨の分裂は、すべての反對理論を合はしたよりも有力に、事實によつて統一戰線の主張をその背後から襲擊し、合同運動に對して常に

懐疑と冷笑の態度を取り來つた意識的な右翼主義者のために、その立場を裏書きした。無意味な對立抗爭によつてすでに疲れてゐた大衆は、たゞ分裂するが爲めの無意味な合同によつて、一そう疲れ果てた。かうして、少くとも七黨合同に關心を持つた大衆の間には、言ふべからざる失望と共に、戰線統一の問題に對する無關心と不活動とが現はれた。かような心境におかれてゐる大衆に對して、かの分裂反對同盟の如き運動が何ら訴へる力を持たなかつたことは、當然自明のことであつた。大衆は、戰線統一に對する熱情と共に自信を失つた。合同運動の高潮のあとには、むしろ現狀を維持することによつて動搖を免れようとする退嬰的な氣分と、安定への意欲が、大衆を支配した。これは勢ひ大衆をして、事なかれ主義に終始する自黨の保守的な指導者の方針を、無條件的に支持せしめる。差當り自黨の勢力を固定化することをもつて滿足しようとする日本大衆黨の最近の傾向は、大衆のかような心理を代表するものと云ひ得られる。かように戰線統一に對する大衆の下からの壓迫は、今や著しく弱められた。

社會民衆黨のその後の著しい傾向は、少くともその有力な指導者が、この政黨を、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主主義政黨に固定化することを、最も意識的に努めてゐることであつて、これらの指導者自身が、公然と社會民主主義黨を名乘るにいたつたことは、注目に値ひする。彼らは社會民衆黨をかような性質に固定せしめるためには、恐らくは分裂の犧牲をも辭しないであらう。

近く成立する新勞農黨が、戰線統一の問題について、如何なる態度を取るかは明かでないが、提案書に現はれてゐる限りにおいては、依然として、謂ゆる『戰鬪的統一戰術』――輝ける指導精神による他黨の征服――といふ舊勞農黨の傳統を守るものと見做される。この點に變化のない限り、新勞農黨もまた、戰線統一への力としてよりも寧ろ既得の勢力範圍を固定せしめる力として働くものである。

この間において、地方六政黨の協議會のみは、變化を代表する力であつて、社民、大衆、および近く組織せられる新勞農の三黨に對して、即時合同の提議を決議した（昨二十九日の第二回協議會）。けれどもこの力が、三黨の固定化の方向に働いてゐる力に打ち克ち得るかは疑問である。三黨合同の提議が、一般の豫想の如く不成功に終つた場合には、これらの地方政黨は、全體的にまたは部分的に、いづれかの全國的政黨に合同するか、又は協議會として或る時期の間固定する。この地方政黨の動きが停止したところで、無產政黨の分野は三黨の鼎立または四勢力の並立の狀態において、一と先づ安定する。かように地方政黨協議會の統一戰線に對する最近の決議は、合同運動における過去二ヶ年間に亘る一つの時期の終結を意味するものであつて、大衆の間



# 無產政黨問題の再吟味

山川均

## （一）戰線統一問題の現狀

昭和二年末に初めて表面に現はれた無產政黨の合同、戰線統一の運動は、昨日（十月廿九日）の地方六政黨の統一戰線協議會の決議——社民、大衆、および近く結黨式を擧げる新勞農黨に對する即時合同の提議——をもつて、一つの時期を閉ぢようとするものゝ如くに見える。

この前後二ケ年に亙る統一運動の唯一の收穫は、昨年八月の七黨合同による、日本大衆黨の成立であつた。日本大衆黨の成立は、一般大衆の戰線統一に對する熱望を代表したものであつたと同時に、たゞに關係七黨の黨員大衆ばかりでなく、一般大衆をして、戰線の統一に對する熱情を高めしめ、その實現に對して自信を持たしめた。かように[illegible]黨合同の成立は、一般大衆の凝視の的となつてゐたゞけに、僅々數ケ月後におけるその分裂は、大衆をして深刻な幻滅を味はしめた。日本大衆黨の分裂は、すべての反對理論を合はしたよりも有力に、事實によつて統一戰線の主張をその背後から要撃し、合同運動に對して常に

懐疑と冷笑の態度を取り來つた意識的な右翼主義者のために、その立場を裏書きした。無意味な對立抗爭によつてすでに疲れてゐた大衆は、たゞ分裂するが爲めの無意味な合同によつて、一そう疲れ果てた。かうして、少くとも七黨合同に關心を持つた大衆の間には、言ふべからざる失望と共に、戰線統一の問題に對する無關心と不活動とが現はれた。かような心境におかれてゐる大衆に對して、かの分裂反對同盟の如き運動が何ら訴へる力を持たなかつたことは、當然自明のことであつた。大衆は、戰線統一に對する熱情と共に自信を失つた。合同運動の高潮のあとには、むしろ現狀を維持することによつて動搖を免れようとする退嬰的な氣分と、安定への意欲が、大衆を支配した。これは勢ひ大衆をして、事なかれ主義に終始する自黨の保守的な指導者の方針を、無條件的に支持せしめる。差當り自黨の勢力を固定化することをもつて滿足しようとする日本大衆黨の最近の傾向は、大衆のかような心理を代表するものと云ひ得られる。かように戰線統一に對する大衆の下からの壓迫は、今や著しく弱められた。

社會民衆黨のその後の著しい傾向は、少くともその有力な指導者が、この政黨を、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主主義政黨に固定化することを、最も意識的に努めてゐることであつて、これらの指導者自身が、公然と社會民主主義黨を名乘るにいたつたことは、注目に値ひする。彼らは社會民衆黨をかような性質に固定せしめるためには、恐らくは分裂の犠牲をも辭しないであらう。

近く成立する新勞農黨が、戰線統一の問題について、如何なる態度を取るかは明かでないが、提案書に現はれてゐる限りにおいては、依然として、謂ゆる『戰鬪的統一戰術』――輝ける指導精神による他黨の征服――といふ舊勞農黨の傳統を守るものと見做される。この政策に變化のない限り、新勞農黨もまた、戰線統一への力としてよりも、寧ろ既得の勢力範圍を固定せしめる力として働くものである。

この間において、地方六政黨の協議會のみは、變化を代表する力であつて、社民、大衆、および近く組織せらるる新勞農の三黨に對し、即時合同の提議を決議した（昨二十九日の第二回協議會）。けれどもこの力が、三黨の固定化の方向に働いてゐる力に打ち克ち得るかは疑問である。三黨合同の提議が、一般の豫想の如く不成功に終つた場合には、これらの地方政黨は、全體的にまたは部分的に、いづれかの全國的政黨に合同するか、又は協議會として或る時期の間固定する。この地方政黨の動きが停止したところで、無產政黨の分野は三黨の鼎立または四勢力の並立の狀態において、一と先づ安定する。かように地方政黨協議會の統一戰線に對する最近の決議は、合同運動における過去二ケ年間に亘る一つの時期の終結を意味するものであつて、大衆の間

に、戰線統一に對する熱意と自信とが再び燃え上るまでは、合同問題は暫らく後景に隱されることを免かれない。

かうしてわが國の無産政黨は、戰線統一の見地から見れば、二ヶ年間の努力の終りにおいて、その出發點においてと殆んど同一の位置におかれてゐる。かような形勢は、戰線統一の主張を支持し來つた人々の間にさへも、幾分の動搖と疑惑を生ぜしめてゐる。單一政黨とは何であつたのか？　共同戰線黨とは何であつたのか？　それは幻影に過ぎないものではなかつたか？　そして左右兩翼の對立政黨の存在をもつて必然とする右翼主義者の主張が、正しいのではなかつたか？と。

これらの問題を論じることは、或る意味においては、今日はその時機でない。けれども他の意味においては、今日は最も適切な時機である。

## （二）　共同戰線黨とは何だつたか？

單一共同戰線黨の實現を目標とした運動の、二ヶ年に亙る一時期を終らんとする時に、共同戰線の黨とは何だつたか？と問ふことは、幾分の皮肉を覺えざるを得ぬ。けれども戰線統一の運動が、さらに新たな一時期を開始するためには、この質問の提起は絕對に必要である。

大正十四年に初めて具體的な形を取つた無産政黨樹立の運動は、二つの言葉によつて、その努力の方向を明かにした。それは『單一無産政黨』と『共同戰線黨』といふ言葉であつた。この二つの言葉は、その實現に努力してゐる政黨の性質を、二つの方面から言ひ表はしたものであつて、兩者の間には、離るべからざる關係があつた。卽ち無産者勞働民の政黨が單一政黨の形態をもつためには、必然に共同戰線の特殊な一形態たる性質を持たなければならなかつた。

では單一政黨とは、何のためにする、何者と何者との共同戰線の一形態であらうか？　云ふまでもなく、ブルジョアジー、ことに帝國主義時代の特徵を漸く明確にして來たブルジョアジーの政治的支配に對して、共通の利害を主張する鬪爭のために、異つた社會層の間に形造られる共同戰線である。これらの社會層ないしは社會階級のうちには、先づ第一に、嚴密な意味でのプロレタリアたる工業勞働者と、小作農、種々なる頭腦勞働者または俸給生活者のほかにも、地方にあつては、小作農以上に窮迫した經濟狀態の下にある小農民の或る部分と、都會における多數の貧困なる小商人の或る部分、その他一般に、財産によらないで自己の勞働または勤勞によつて生活する無産市民が數ぞへられてゐる。

假りにこれらの要素が、無産政黨の構成要素を成すものだとしたならば、この政黨の內容は、決して純一な階級的構成をもつものではな

い。またこれらの社會層が、ブルジョア政治勢力に對して單一な戰線を形成するといふことは、必ずしもこれらの異つた社會層の具體的な利害が、悉く同一であるといふ意味において一致してゐることを意味しない。けれどもこれらの社會層のおの〳〵が、帝國主義ブルジョアジーの利害と相反したそれ〴〵の（よし互に異つてゐようとも）利害を有するとしたならば、個々の具體的な利害の同一によつてゞはなくて、反ブルジョア的勢力であるといふ事實において共通點をもつてゐる。從つてこの範圍においては、ブルジョアジーの政治的支配に對して、共同の戰線を形成することができる。

かように單一政黨は、横には、資本主義社會に同時的に並列する異つた階級または社會層の間の共同戰線であるが、縱には、異つた發展の段階または水準にある意識の間の共同戰線を意味してゐる。即ち共同戰線黨の內部には、最も成熟したプロレタリアの階級目的に對する明確な意識から、最も初歩的な反ブルジョア的利害の意識にいたるまでの、あらゆる段階と色合とを含んでゐる。

農民は、現に帝國主義ブルジョアの支配と鬪はざるを得ない狀態におかれてゐるにもせよ、嚴密な意味でのプロレタリアではない。頭腦勞働者は、或る場合には、新中產階級を構成するものだとさへも云はれてゐる。小商人と小農民とその他の謂はゆる無產の小市民群とは、大部分はブルジョア・イデオロギーによつて支配せられて居り、時としては反動主義の勢力の主要な源泉となることさへもある。從つてこれらの階級または社會層は、具體的な利害においては、帝國主義ブルジョアと一致することのできない何物かを持つてゐるにも拘らず、獨立で有力な反ブルジョア的勢力となることはない。これらの社會層の利害は、多くの場合、反ブルジョア的性質を意識しない反ブルジョア的利害であつて、從つてこれらの社會層の反ブルジョア作用は、眠つてゐる反ブルジョア作用、ないしは潛在的な反ブルジョア勢力であつて、共同戰線黨の一構成要素として、帝國主義ブルジョアジーの支配に對峙する獨立の反對政治勢力に結成せられた時にのみ、それは初めて現動勢力に轉形する。

共同戰線黨の以上の如き性質から、當然に次の如き結論が現はれる。即ち、共同戰線黨は、改良主義者をも、組合主義者をも、議會主義者をも、社會民主々義者をも（戰前の意味での）、××主義者をも、その他いかなる『指導原理』を奉ずる要素をも包容することができる。たゞこれらの要素が、反ブルジョア的な利害を有する限りにおいてゞある。そして共同戰線黨の結合の條件となるものは、これらの反ブルジョア的利害であつて、いづれの指導理論でもあり得ないといふ意味において、共同戰線黨は社會民主主義黨であり得ないように、××

主義黨でもあり得ない。右翼主義をもつて結合の條件とする政黨であり得ないように、左翼主義をもつて結合の基礎とする政黨でもあり得ない。かような政黨が、嚴密な意味において——即ち、プロレタリアの歴史的××を最後まで××するといふ意味において——の階級的政黨でないことは云ふまでもない。けれどもプロレタリア以外の社會層の反ブルジョア的利害が、プロレタリアの階級的利害と結合され、かくすることによつて、資本主義社會のうちに眠つてゐる反ブルジョア的潜勢力が現勢力に轉換され、帝國主義ブルジョアの政治的支配に對する反對作用が最大限度に發揮され、鞏固にされることが、プロレタリアの歴史的××に一致し、プロレタリアの階級目的と同一の方向を指してゐるといふばかりでなく、プロレタリアがその歴史的××を完全に××するために、必要缺くべからざる條件であるといふ意味においては、共同戰線黨は、階級的の政黨であると云ふことができる。

吾が國の無産政黨の樹立運動が、『單一政黨』と『共同戰線黨』とによつてその方向を示した時、それはかような性質を有する政黨の實現を目標としたことを意味してゐる。けれども共同戰線黨のかような性質は、これを主張する人々によつてさへも、しばしば限界から見失はれてゐた觀がある。

## （三）種々なる反ブルジョア社會勢力の結合

かような共同戰線は必要だらうか？プロレタリアの階級的任務を擔當し得るものは、プロレタリアのみではないか？プロレタリアが、その他の階級または社會層と提携することは、その階級目的の妥協ではないか？

共同戰線黨はそのうちに、プロレタリア以外の種々なる社會層を含むとしたならば、この政黨が、プロレタリアの階級目的をもつてその結合の基礎または條件とすることができないことは、云ふまでもない。この意味では、共同戰線黨はプロレタリアの立場から見れば、その他の社會層の利害に對する讓歩または妥協を意味してゐる。

けれどもプロレタリアの階級的任務を擔當し得るものはプロレタリアのみであるといふことから、プロレタリアがその他の社會層と提携または同盟することの必要を疑ふのは、資本主義と名づける社會形態は、たゞプロレタリアのみによつて新たな社會形態に××される、この社會的變形の過程には、たゞプロレタリアの勢力のみが作用するといふ、誤つた見解に基づいてゐる。資本主義は經濟的には、そのうちに包藏してゐる一切の生産力を發展し切らないでは消滅せぬように、ブルジョアジーの支配は、そのうちに包藏する一切の反對勢力の作用を

發展せしめることなしには、消滅せしめることはできぬ。しかるにプロレタリアは、資本主義の内包する特徴的な反對勢力ではあるが、決して唯一の反對作用ではない。資本主義は經濟的にも、その發展の各段階において、次から次と新たな矛盾を造り出してゆくやうに、ブルジョアジーの支配は、その發展の諸段階において、種々なる反對勢力を造り出し、若くは種々なる勢力を反對勢力に轉化し、種々なる社會層を、自分自身に對する反對の作用に變化する。これらの反對勢力がブルジョアジーの支配に與へる一切の作用は、云はゞプロレタリアの完成的な作業の準備をなし、その足場を築づき、これに必要缺くべからざる條件を造り出してゐるものであつて、これらの社會層が反ブルジョア的な作用を含んでゐる限りは、この作用を最大限度に發展せしめることは、プロレタリアに取つて必要缺くべからざることである。

そこで若し、反ブルジョア的な利害をもつた種々なる階級または社會層が、單一な政黨ではなくて各々の政黨に組織せられてゐるとしたならば——例へば、農民黨と、勞働黨と、多かれ少かれ中間階級的な傾向を現はす小市民黨と、嚴密な意味でのプロレタリア黨とに、別々に組織せられてゐるとしたならば——どうだらうか。この場合、これらの諸黨派が、その最終目標においてプロレタリアのそれと一致すると一致しないとに拘らず、苟もブルジョアジーの支配に對して現實に反對して利害を追求し、その作用が現に反ブルジョア的方向を取つてゐる限り、これらの黨と共同の戰線を形造ることは、プロレタリアの黨に取つて、絕對に正しい戰術であることは疑ひがない。

けれどもこれらの社會層は、何時でも、また如何なる條件の下においても、一定の反ブルジョア的作用をもつものではない。或る社會層は、闘爭の或る段階に達すると、その反ブルジョア的作用を喪失する。しかるに他の社會層は、階級闘爭のさらに進んだ段階に達するまで、その反ブルジョア的作用を保つてゐる。一定の改良を目標とする運動は、これに對するブルジョアジーの全部的または部分的な讓歩と妥協とによつて、その闘爭力を失つて凋落する。土地を要求する農民の××的作用は、土地の獲得によつて中和される。例へば若し農民に豐かな生活を保證するやうな、經濟的に合理にして しかも大規模な自作農創定の制度が設けられたと假定したならば（これは到底不可能であるが）吾が國における農民運動の少くとも一大部分は、反ブルジョア的作用を中和せられるに違ひない。

かやうに種々なる社會層の反ブルジョア的作用は、階級闘爭の發展の或る段階において、云はゞ飽和點に達し、若くは中和される。從つて反ブルジョア共同戰線の包容する社會階級的內容は、如何なる場合にも同一なものではない。

では、吾が國の現在の場合はどうだらうか？　私はこゝでは、吾が國の資本主義と階級闘爭との現在の發展段階においての、種々なる社會層の作用を分析する代りに、無產政黨運動において一般に認められてゐる一致の見解から出發した。即ち、すべての無產政黨は、勞働者と農民と無產小市民層とに呼び掛けてゐる。この點においては、日本×××も、舊勞農黨も、日本大衆黨も、社會民衆黨も、その他の地方政黨も（近く生れんとする新勞農黨も恐くまた）何らの違ひはない。若しその間の差異を求めたら、舊勞農黨が主として農民から成る政黨であつたのに對して、社會民衆黨が小市民層に重きを置かんとすること、等々であつて、これらの社會層を反ブルジョア的な勢力と認め、現に反ブルジョア的な作用を營んでゐる要素を見る點では、すべての政黨は一致してゐるのである。

しかしながら、斯ような共同戰線は、すべての場合に、必ずしも單一政黨の形態を取つてのみ實現せられるものではない。私は前段において、反ブルジョア的な種々なる社會層が、それ〴〵の政黨に組織せられてゐる場合を假定することによつて、同時に二つのことを暗示した。さらに異つた階級または社會層が、同時に反ブルジョア的現勢力として活動してゐるとは限らない。或る階級または社會層の反ブルジョア的作用が中和せられた後に、新たな階級または社會層が、初めて活動の舞臺に登場する場合もある。けれども、何づれの場合においても、資本主義社會から新たな社會形態への××は、これらのすべての反ブルジョア的作用と相互作用との總効果としてのみ現はれる。たゞプロレタリアは、これらの作用のうちで、決定的な役割を持つてゐる。またこれらの作用は、大部分は無意識的に行はれる。そしてプロレタリアは、その作用に對する明白な意識に到達する。

## （四）闘爭の種々なる發展段階の結合

プロレタリアのみが、反ブルジョア的作用を持つ唯一のものでないように、プロレタリアの階級目的を意識した闘爭も、如何なる場合においても、その他の條件から離れて、それ自身のみで決定的な役割を演ずることは、斷じて不可能である。資本主義に對する究極の勝利は、最も初步的な意識による闘爭から、最も發達し成熟した階級意識に基づく闘爭にいたるまでの、あらゆる意識に照應した闘爭、あらゆる部分的な目標のためにする闘爭の効果の結合としてのみ齎らされる。かようにプロレタリアの決定的な××には、より初步的な幾多の部分的な闘爭が、無意識的に貢獻する。たゞプロレタリアの階級目的を意識した闘爭は、これらの闘爭のうちに決定的な役割を持つばかりでなく、これらの闘爭の効果を、意識的に、そして最も有効に結合す

る任務を負うてゐる。

けれどもこれらの、より初歩的な闘爭は、同時的に行はれてゐるばかりでなく、時代的にも連續する。そしてこの場合には、闘爭の効果は意識的に結合せられないで、多くの場合、無意識的に累積せられる。そして明確な階級目的を持つプロレタリアが現はれて、初めてこの無意識的に累積せられた効果を、自分自身の闘爭に、意識的に結合する。

かように、意識の種々なる發展段階を代表し、そして種々なる部分的な目標のためにする、より初歩的な闘爭の効果が結合せられる方法と形態とは、一様でない。けれども如何なる場合にも、これらの効果の結合なくしては、プロレタリアの決定的な××を考へることはできぬ。いな決定的な闘爭の展開されることさへも考へることはできぬ。

二三の具體的な場合について、説明して見よう。現在の英國には、勞働黨と共産黨とが指導を爭うてゐる。勞働黨の見解によれば、共産黨は、英國の勞働階級の陣營を攪り崩さうとする、一握りの攪亂者の徒黨である。これに反して英國共産黨の見解によれば、勞働黨はブルジョア支配の手先きの黨、ブルジョア第三黨以外の何ものでもない。けれども、勞働黨の闘爭の効果から離れて、英國共産黨の闘爭を考へることができるだらうか。過去においても、勞働黨の四分の一世紀の間の闘爭の効果なくしては、英國共産黨の闘爭の出發點さへも無かつたであらうといふことは、疑ひの餘地がない。さらに現在と將來とにおいても、勞働黨が確實に政權を握るにいたることは、英國共産黨の闘爭が有効に展開される爲に缺くべからざる條件であつて、英國共産黨はこの時期において、初めて準備的な時代から眞實の舞臺に登ぼるものだと云ふことができる。この事實は、何を意味するだらうか。それは第一には、よし英國の勞働黨は、急速に、ブルジョア第三黨たる性質に轉化しつゝあるにもせよ、ブルジョアジーの政治的支配に對する本來の作用を、未だ全くは中和し盡されてゐないことを意味してゐる。言葉を換へて云へば、勞働黨は共産黨の主張するように、今やブルジョア第三黨への限界に立つてゐるにもせよ、その闘爭は、なほブルジョアジーの支配の上に何らかの作用を與へて居り、その効果は（無意識的にもせよ、または勞働黨指導者の意に反してにもせよ）プロレタリアの究極の目標のためにする闘爭の効果と結合せらるべき、何ものかを存してゐるといふことを意味してゐる。そして勞働黨のかような作用が、全く發展し盡され、中和し盡されるまでは、勞働黨にはなほ存在の意義が殘つてゐる（プロレタリアの立場からも）。そして英國共産黨が、今日まで大衆的に生長することのできぬ根本的な理由、もまたこゝにある。第二には、勞働黨と共産黨との間には、今日は、意識的には、何ら協力の關係はなくて、たゞ對立と排撃との關係があるば

かりであるが、それにも拘らず、客觀的には、英國プロレタリアの決定的な勝利は、兩者の鬪爭の効果の結合によつてのみ齎らされる。そして實際においても、それは現に、時々刻々に、結合されつゝあると云ふことができる。

ドイツの場合には、階級鬪爭展開の二つの段階を代表する鬪爭が、英國の場合よりも、一そう連續的な形を取つて續づいてゐる。卽ち、社會民主黨の反ブルジョア的勢力としての作用が殆んど中和し盡されんとするところに、初めてドイツ共產黨の鬪爭が始まつた。ブルジョアジーの支配に對するドイツ社會民主黨の作用は、一九一八年の××によつて、殆んど中和し盡された。ドイツ社會民主黨の政治上の立場は、××によつて到達せられた勢力均衡の新狀態を表はすものであつて、英國勞働黨のそれに較らべて、一そう安定的である。かような事實は、やがてドイツ共產黨が英國のそれに比して、遙かに廣汎な大衆の上に影響力を持つ大衆的政黨に發達した事實と照應する。けれどもドイツの場合といへども、ドイツ共產黨と社會民主黨との間に、共同戰線を形成することが必要であり、そして可能であつた限り、この範圍においては、社會民主黨にはなほブルジョアジーの支配に反對する何らかの作用が殘されてゐたものと云はなければならぬ。

資本主義の社會形態は、その他のすべての社會形態と同じように、如何なる奇蹟的な勢力によつても、唯だ××××倒れることはない。それが×××く××××××、××××××に常に倒れつゝあるからだ。かような意味で、すべての反ブルジョア勢力は、意識的に無意識的に、最終の結果に貢獻する。卽ち資本主義の××は、社會層において云へば、同時にまたは次々に作用するすべての反ブルジョア社會勢力の作用の總効果によつて來り、鬪爭の發展から云へば、同時または相次いで展開される鬪爭の種々なる發展段階の作用の、總効果として現はれる。そしてかような作用の結合は、意識的に行はれる時に、云ふまでもなく最も効果的に行はれる。プロレタリア××××××××××は、あらゆる反ブルジョア的社會要素の作用を最大限度に發展せしめ、すべての發展段階に屬する鬪爭を、最も有効に結合することに歸着する。そして一般には、普通の意味においての共同戰線、特別の場合としてはその特殊な一形態たる共同戰線黨は、かような結合の一つの方法、もしくは一つの形態にほかならぬ。

## 〔五〕英國からの引例

英國における勞働階級政治運動の發達は、これらの點について、吾々に最も興味ある例證を與へてゐる。

十八世紀の末年から十九世紀の三〇年代にいたる英國は、中世紀的

政治勢力の掃蕩によつてブルジョアジーの政權が確立され、そして全ブルジョアの上に、この政權の基礎が擴大せられた時代であつた。勞働者の產業上の不滿は、種々なる政治上の改革運動に結びつけられた。かうして勞働大衆は、ブルジョア政治運動に動員され、勞働者は初めて政治運動の舞臺に現はれたが、これらの改革運動は、新興商工階級の參政權獲得と共に凋落した。

依然として參政權の外に取り殘された勞働階級の不滿は、中產下層の不平と結合して、普選獲得運動（チャーチスト運動）となつて現はれたが、この運動は、英國商工業の前に開けた光明に滿ちた展望と、勞働階級の生活が無限に改善せられるかの如き希望の前に消滅した。

一八五〇―六〇年代の英國勞働階級は、種々なる反勞働者法の適用による資本家および政府の暴壓に對して、法律上の改革を獲得するために闘つた（組合主義政治運動）。この闘爭において、英國の勞働階級は、初めて勞働者自身の利害のために闘つたものではあるが、彼らは尙ほブルジョアの政治勢力から獨立してゐなかつた。從つて、彼らは主として議會におけるブルジョア急進分子の力を借りてその目的を達しようとした。そしてこの目的は、完たく資本主義の範圍內において到達しようとするものであつた。この闘爭は、勞働組合の法律上の地位が確立され、有力な組合の組織と豊富な共濟基金とによつて、熟練勞働者としての優越的な地位を擁護する權利の承認を獲得することによつて、勢ひ中和せられざるを得なかつた。

十九世紀の末葉から二十世紀の初頭になると、一そう廣汎な非熟練勞働者の擡頭と、社會主義運動との影響の下に、英國の勞働階級は漸次にブルジョア政治勢力から離脫し、勞働黨の樹立によつて、初めて獨立した政治勢力を形成した。

この時代における英國の反ブルジョア的勢力は、第一には組合運動であつた。云ふまでもなく、組合運動は、一八五〇―六〇年代の熟練勞働者の政治意識と全く同一の水準にある要素から、社會主義の影響を蒙つた要素にいたるまでの、あらゆる要素を含んでゐた。次には社會民主主義（戰前の意味での）を綱領とする英國社會黨、修正派社會主義に近い綱領をもつた獨立社會黨とフェビアン協會のほかには、主として消費者としての小ブルジョア下層と勞働者とを代表する消費組合運動があつた。これらの運動は、必ずしも共通の目標を追ふものではなかつたが、少くとも共通の方向を指してゐた。そしてこれらの運動の間に、意識的な協力が行はれてゐるとゐないとに拘らず、これらの諸勢力の作用は、英國におけるブルジョアジーの政治的支配に對する闘爭の一部分を成すものであり、これらの諸勢力の作用とその相互作用との結合されたものが、當時における英國のブルジョア支配に對

する反對勢力の總和であつた。言葉を換へて云へば、當年の英國に於ける反ブルジョア運動は、英國社會黨の運動、もしくは獨立勞働黨の運動、または組合勞働者の政治運動等々の、いづれの一つでもなくて、これらの全てを總括したものによつて代表され、これらの全ての運動の反ブルジョア的作用の結合によつて成り立つてゐるものであつた。そして以上の諸團體（英國社會黨を除く）によつて構成せられた勞働黨は、これらの反ブルジョア的政治要素の作用を、意識的に結合しようとしたものであつた。勞働黨は地方勞働黨の組織を通じて、これらの團體に屬せぬ小市民層の有する反ブルジョア作用をも結合しようとした。

かように、その後の英國勞働黨が、よしブルジョア第三黨以外の何者でもないものに轉化したにもせよ、當年の勞働黨はそのうちに、反ブルジョア的作用を含む一切の社會的要素を包容し、これらの要素の作用を一つの組織に結合しようとした反ブルジョア共同戰線の黨であつた。

世界戰爭は、英國の形勢を著しく變化した。けれども少くとも一九二〇年には、レーニンはなほ英國におけるかような共同戰線黨の意義と必要とを認めてゐた。これは當時の英國共産主義者が、勞働黨への參加に反對し、勞働黨に對立した宗派的な共産黨の組織を主張してゐたことをもつて、レーニンは英國における左翼小兒病の症狀と見做したことによつて明かであつた。それのみではない。レーニンは『ロイド・ヂョーヂとチャーチルとの聯合に打ち勝つためには、ヘンダアソン、スノーデンを助けなければならぬ』と主張した。そして『これと異つた行動を取ることは（レーニンによれば）××の發展を困難ならしめる』ものであつた。かようにレーニンの見るところでは、當時の英國における階級鬪爭の發展段階においては、勞働黨を構成する諸要素（ヘンダアソンとスノーデンさへも！）は、なほ反ブルジョア的な作用が中和し盡されないで殘つてゐる限りは、これを有りたけ用ひ盡さぬことは（ヘンダアソンとスノーデンにいたるまで！）、××の發展を困難ならしめるものであつた。

一九二〇年以後にいつても、少くとも英國共産黨は、勞働黨を構成する諸要素がなほ反ブルジョア的作用を有するといふ事實を認め、そしてこれらの作用を、共同戰線黨の組織のうちに結合することの意義と必要とを認めてゐたものと解釋しなければならぬ。なぜならば英國共産黨は、勞働黨から分離してこれと對立する方針を改め、勞働黨に加入する資格を獲得するために、最近にいたるまで努力をつゞけてゐたからである。しかるに最近にいたつては、英國共産黨はこの努力を棄て、明白に勞働黨と對立する立場に復歸した。この政策の變化が、

どの點まで、過去における誤つた對立政策の收穫として餘儀なくせしめられたものであつて、どの範圍までが、英國資本主義の狀況の急激な變化に照應した、進出的な政策であつたかは、こゝでは問題外である。

## (六) 共同戰線の諸形態

單一無產政黨ないしは反ブルジョア共同戰線黨といふ思想は、吾が國に特有の思想であつて、假りにかような政黨が實現し得られるとしたならば、それは吾が國に特殊な事情に基づくものでなければならぬと主張する人々がある。單一政黨の主張を支持する人々の間にも、その論據を、吾が國の特殊事情に求めようとする人々がある。けれどもかような見解は、根本的に誤つてゐる。苟もプロレタリア以外の階級または社會層が、反ブルジョア的作用を存してゐる限り、これらの一切の反ブルジョア的要素を動員し結合する共同戰線の黨は、いかなる時、いかなる處でも必要であり、また可能であつた。たゞに必要にして可能なばかりでなく、戰前の各國における勞働黨または社會黨の多くは、事實上、單一な反ブルジョア政黨であつた。

私は以上の反覆した說明によつて、次の事柄を明かにしようとした。

(一) プロレタリア以外の社會層が、ブルジョアジーの、特に現在においては帝國主義ブルジョアジーの、政治的支配に對立した利害を有する限り、これらの社會層は、反ブルジョア的作用を含んでゐる。すべてこれらの反ブルジョア的作用の效果と、プロレタリアの階級目的を意識した鬪爭の效果との有效な結合は、ブルジョア政治支配に對する××のために絕對に缺くべからざる必要條件である。

(二) ブルジョア政治支配の××は、プロレタリアの階級目的を意識した鬪爭のみによつて實現せられるものではない。反ブルジョア的な、一切の現實な具體的な當面日常の利害のためにする最も初步的な鬪爭を初めとして、階級意識の種々なる發展段階に屬する一切の鬪爭の效果と、最高の階級意識に基づき、そして究極の階級目標のためにする鬪爭の效果との有效な結合は、ブルジョア政治支配に對する××のために、絕對に缺くべからざる條件である。そして

(三) この結合された力が、階級鬪爭發展のそれぞれの段階における、總體としての反ブルジョア勢力を形成してゐるものである。

以上の事實は、共同戰線黨または單一政黨を必要とし可能とする一般的な基礎となるものであり、從つて單一政黨の主張の一般的な基調をなすものである。けれども、

(四) この結合は、必ずしも、常に意識的に、從つて最も效果的

に行はれてゐるものではない。と同時に、この結合が意識的に行はれてゐない場合にも、或る程度までは、無意識的、必然的に行はれてゐる。

或る一定の時期をとつて見れば、ブルジョアジーの政治勢力を代表する黨は、例へば保守黨と自由黨、民主黨と共和黨等々のやうな、互に對立抗爭するブルジョア分派に分れてゐるにも拘らず、すべてこれらの相扞格するブルジョア政治勢力の諸要素を總括して、全體としてのブルジョアジーの政治勢力、またはブルジョアジーの黨と見做し得るやうに、或る一定の時期における全ての反ブルジョア分派の政黨によつて、反ブルジョア黨が無意識的に構成せられてゐると見ることができる。従つて

（五）前述の如き結合は、必ずしも共同戰線黨の形態においてのみ實現せられてゐるものではない。共同戰線黨は、この結合の最も意識的にして効果的な一形態である。

例へば大戰後の多くの國々において見るやうに、社會黨または社會民主黨が（なほ反ブルジョア的作用を存してゐる場合にも）もはやあらゆる反ブルジョア的要素を包容することのできない一定の『指導理論』の上に固定しきつた所では、單一な共同戰線黨は、事實上、實現せられない。共産黨もまた一定の『指導理論』に基づく組織であつて、共同戰線黨のうちに溶解することはできぬ。従つて前述の如き性質を固定した社會民主黨と、これに對立して起つた反ブルジョア黨、例へば共産黨との場合には、作用の結合は、單一な共同戰線黨の形においては行はれないで、部分的な共同戰線の形成によつて行はれる外はない。そしてこの種の結合形態が、實踐の上で、概して効果的でなかつたことは、爭ふことのできない事實である。これに反して、社會黨または社會民主黨が共同戰線黨たる實質を保つてゐる場合には、前衞的黨そのものは、このうちに溶解し去ることはできないにもせよ、前衞的分子が共同戰線黨に參加することにより、または英國の勞働黨の場合には、團體的加盟の道によつて、單一な共同戰線黨と前衞黨とが、おの／＼その本來の性質を保ちつゝ、並存することができる。

以上の事柄は、勢ひ、よく共同戰線黨の性質について、次のやうな規定を附け加へることを必要とする。

（一）共同戰線黨は、階級鬪爭のそれ／″＼の發展段階における、一切の反ブルジョア的要素を包容する。

共同戰線黨がこれらの要素を包容するといふ意味は、たゞにこれらの要素の利害を代表するばかりでなく、現實にこれらの反ブルジョア大衆をその組織のうちに包容することを意味してゐる。けれども如何なる社會要素が、當然に共同戰線黨のうちに包容せられるかは、階級

闘爭の發展段階によつて異つてゐる。

(二) 共同戰線黨は、これらの諸要素の、ブルジョアジーの利害と對立した當面の現實な利害のためにする闘爭をもつて、結合の條件とする。從つて、一定の『指導理論』(例へば社會民主主義、共產主義等々)を有しない。

これらの闘爭の間に、大衆の意識は絶えず發展し昂揚する。けれども共同戰線黨が共同戰線黨たる本質を失はぬ限り、それは反ブルジョア大衆の、かような現實具體的な利害のためにする闘爭と、最も初步的な意識とから離脱することはできぬ。

(三) かゝる性質の政黨は、必然にそのうちに左翼的傾向と右翼的傾向とを包容する。

例へば共產黨のような、最も嚴密な意味において一定の『指導理論』を結合の條件として成立してゐる黨内においてさへも、左右兩翼の對立が生じ、現に各國の共產黨がそのために分裂してゐることを考へたなら、共同戰線黨の内部には、左右の兩傾向を生ずることは、その本質上當然のことであつて、寧ろ左右兩翼の傾向を包容するからこそ、初めて共同戰線黨といふことができる。從つて共同戰線黨は、左翼的影響と右翼的影響との相對的な大きさによつて、或は左翼『的』であり、或は右翼『的』ではあり得るが、謂ゆる『左翼黨』でも『右翼黨』でもあり得ない。統一的な共同戰線黨を目標としつゝ、同時に『左翼政黨』たらんとし、または『左翼政黨』をもつて自任することは、そのこと自體が無意味であつて、單一な共同戰線黨の本についての、完全な理解の缺乏を表白するにすぎぬ。

かような本質の結果として、共同戰線黨の場合には、左右兩翼のゐることは、一定の『指導理論』の上に立つ黨の場合のように必然に分裂を意味するものではない。若し共同戰線黨がそのために分裂するとしたならば、それは主として、指導者の不明のためであるか、または左からにせよ右からにせよ、共同戰線黨をして、共同戰線黨の限界を越えしめようとする、不當な試みの行はれた結果である。

かような性質の黨は、右翼政黨化する(流行の言葉をもつて云へば、社會民主主義の黨に變質する)危險はないか? 私は『右翼政黨化する』といふ言葉の意味を、反ブルジョア的な作用を減退し、または喪失するといふ意味に解しよう。そして慥かに、その危險があると答へたい。世の中には、『左翼政黨』といふレッテルを貼つた政黨は、このレッテルのために何時でも品質が保證せられて居り、社會民主主義に轉落する恐れは斷じてないと確信する素朴な人々がある! すべての反ブルジョア黨には、右翼政黨化する危險がある。一つ以上の社會層を含む共同戰線黨にあつては、この危險は甚だ多いといふこと

を、私は力說したいと思ふ。

現在は反ブルジョア的作用を營へてゐる種々なる社會的要素の各々が、必ずしも同じように、また階級闘爭の發展の××の段階に達するまで、その作用を保つものでないことは、既に指摘した通りである。假りにa、b、cの三つの社會層から成る共同戰線黨があるとする。そしてa、bの社會層は、階級闘爭發展のそれぞれの段階において、反ブルジョア的作用を中和し盡されたとしたならば、これらの要素は、漸次に共同戰線黨から脫落し、共同戰線の範圍は縮少される。さもなくば、これらの要素に對する妥協のために、この反ブルジョア共同戰線黨は、多かれ少かれその性質を變ずるに違ひない。かような社會的變化のために共同戰線黨の構成要素の範圍が縮少するとしたならば、これは當然の變化であつて、何らの弊害でもなければ、またこれを阻止する必要もない。たゞ必要なことは、反ブルジョア共同戰線の黨たる本來の性質を擁護することである。共同戰線黨のかような本質は、その內部における前衞分子の任務を、極めて重要なものとする。けれども共同戰線黨の內部における眞實の左翼的分子の任務は、共同戰線黨を、共同戰線黨の限界を越えた『左翼政黨』に變質せしめることでになくて、眞實の共同戰線黨たる性質を擁護することにある。

## （七）共同戰線黨とプロレタリア黨

既に所定の紙數に近づいたので、この重要な問題については、簡單に言及するに止どめよう。

吾が國における前衞黨または前衞的分子（をもつて自任する人々）がの共同戰線黨に對する見解には、大凡四つの變化（または動搖）があつたもの丶如くに見える。

第一の時期は、共同戰線黨は前衞黨の存在（當時の用語を借れば、『主體の確立』）によつてのみ、初めて意義を持つといふ見解が取られた時期であつた。謂ゆる『結合の前の分離』はこの『主體の確立』の方法であつて、この目的のためには、共同戰線黨組織の行程が犧牲にされた。この見解は、一方においては、前衞黨と共同戰線黨との意義の密接な關係を認めつゝ、他方においては、共同戰線黨を實現せしめる過程と、前衞の任務とを結合することを知らなかつた。

第二の時期は、前衞黨と共同戰線黨との關係を、機械的な支配と被支配の關係と解し、共同戰線黨を、前衞黨の無力を補ふための一機關とし、事實上、前衞黨の代用物とした時期であつた。その結果は、共同戰線黨をして、反ブルジョア共同戰線の組織たる本質を失はしめ、前衞黨（と自任するもの）の統制に最も都合のよい手頃な組織に變質

した。前衛黨と大衆的共同戰線との觀念上の混淆も、この時期の特徵であつた。

第三の時期は、共同戰線黨の必要が、原理的に否認せられた時期であつて、第四の時期は、原則的には無用な共同戰線黨は具體的には必要である(!)——言葉を換へて云へば、前衛黨の潰滅が初めて共同戰線黨を必要ならしめたといふ見解——さらに言ひ換へれば、共同戰線黨(勞働者と農民と無產市民の現實な利害を代表する政黨)をもつて、前衛黨の代用物と見做す見解が採用せられた時期である。

以上の見解は、悉く誤つてゐる。これらの見解は、互ひに相反してゐるにも拘らず、同一の誤謬をもつて一貫せられてゐる點においては、互ひに一致する。

前衛黨は、すべての活きたものと同じように、直ちに鑄造せられるものではなくて、環境との反作用のうちに生長する。前衛的分子が僅かに散在する狀態から、完成され成熟した前衛の黨にいたるまでの間には、無數の中間的な階梯と生成の程度がある。けれども前衛的任務は、成熟した前衛黨の出現によつて、初めて突如として生ずるものではない。前衛的分子は、かような生成と發達とのあらゆる時期において、常に前衛的任務を持つてゐる。それ故に、成熟し完成された黨といふ意味での『主體』の存しないあらゆる段階においても、いな最も初步的な段階においてさへも、萌芽的な形態と程度とにおいては、主體(少くとも主體的見地)は既に存するといふことができる。かような理解の缺乏が、吾が愛すべき『前衛』分子をして、共同戰線黨の出現に脅やかされて、初めて主體の無確立狀態に氣附かしめたことは、解放運動史上のユーモアと云つてよい。

共同戰線黨を前衛黨の代用物とする思想は、前衛黨の存在をもつて、共同戰線黨否定の理由とする見解と同じように、無產者運動における前衛黨の特殊な位地と、共同戰線黨の特殊な任務とに對する、二つの無理解を一擧に暴露するものに過ぎぬ。

前衛黨は反ブルジョア大衆の上に影響力を持ち得るように、共同戰線黨の上にも影響を與へることができる。けれどもその影響は、その戰術と指導の正しいことを大衆に實證した結果として生ずる精神的影響力であつて、如何なる場合にも、直接な機械的な支配であつてはならぬ。

共同戰線黨と前衛黨との關係には、後者が前者の上に有力な精神的な影響をもち、これを同一の方向に指導し得る場合から、兩者が互ひに對立する場合にいたるまでの、程度を異にする種々なる狀態を豫想することができる。けれども如何なる場合にも、共同戰線黨の作用は、前衛黨の作用に、意識的にまたは無意識的に結合される。例へば英國

の現在のように、勞働黨（假りに共同戰線黨と見て）は英國共産黨によつてブルジョア第二黨以外の何ものでもないものと認められ、激烈な對立の狀態にあるが、この場合といへども、勞働黨が政權を握ることは、英國共産黨に取つて必要缺くべからざることであつて、英國共産黨の作用は、勞働黨のかような作用と結合されて初めて充分な効果をもつことができる。共同戰線黨と前衞黨との間に、どのような關係が保たれるかは、要するに階級鬪爭の發展の段階の如何と、前衞黨の戰術の如何とにかゝつてゐる。言葉を換へて云へば、共同戰線黨が、プロレタリアの階級目標への作用を含んでゐる程度、その反ブルジョア作用の中和せられた程度如何と、前衞黨がこの作用を、それ自身の作用に意識的に結合するために取る方法の如何とにかゝつてゐる。

## （八）單一政黨の實現は可能であるか？

すべての反ブルジョア要素を單一な組織に結合する共同戰線黨が可能であるといふことは、これを不可能ならしめる社會的條件が存しないといふ意味であつて、必ずしも、必然的に實現されるといふ意味ではない。

單一な共同戰線黨を可能とする理由について、私が今日以前に幾度びも繰り返して主張し來つたことは、今日も尚ほ有効であつて、この期間の内に、吾が國の形勢に、何らかの根本的な變化があつたと認めることはできぬ。プロレタリア以外の社會層のうちに、なほ反ブルジョア的作用が蓄積せられてゐること、これらの要素が、一定の排他的な指導理論に基づく黨派として固定化してゐないこと、そして經濟上政治上の狀況が、これらの要素の鬪爭力の結合を迫つてゐること、對立政黨の構成要素がほゞ同一であつて、その分野が社會的條件に深く根柢をおいてゐないこと等々は、一般的に、單一な共同戰線黨を可能にする條件と見做される。

一方においては、對立狀態の繼續は、それだけ各々の政黨を固定化し、ことに戰線の統一を妨げる主觀的な條件を造り出す。例へば社會民衆黨の指導者が、社會民主主義政黨たることを公然と宣言するにいたつたことは、僅かに分裂狀態がそれだけ固定化したことを意味するものであつて、民衆黨の全體を包容する統一戰線の實現は、この障害においては、障害を增大したと云ふことができる。けれどもこの障害は、現に民衆黨を支持してゐる大衆の大部分は、少くともこれらの指導者の希望する程度には、社會民主主義黨として固定化してゐないことによつて割引きされる。

無産政黨のほかに、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主黨は、吾が國においても成立の可能がある。けれどもブルジョア第三黨

が、反ブルジョア共同戰線黨の一構成要素を成さぬことは、云ふまでもない。從つて、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主黨の出現は、反ブルジョア共同戰線黨の問題の範圍外にある。

新勞農黨は、謂ゆる『戰鬪的統一戰術』の傳統に愛着するもの丶如くに見える。けれども舊勞農黨が『勞働者と農民と無產市民との利害のために現實に効果的に鬪爭する』合法政黨として現はれたことは、大衆の必要と要求とに對して、指導分子が讓歩したことを意味してゐる。戰線統一の問題についても、大衆の要求が、指導分子の讓歩をよぎなくするに至ることは、必ずしも豫期し得られぬことではない。新勞農黨が、眞實にかつ誠實に、かような鬪爭目標を追求する限りは、それは單なる共同戰線黨たることに歸着するものであつて、自ら『左翼政黨』と呼ぶことは、左翼的言辭による快感のほかに、何らの意味もない。少くとも新勞農黨が、合法政黨を原則的に否定する態度を棄て合法政黨として現はれたことは、すでに統一戰線の分野が擴大したものである。

しかるに他方においては、金融資本の政策の露骨な遂行は、ますます廣汎な社會層の利害との間に、深刻な對立を造つてをり、ますます廣汎な社會層の利害を、反ブルジョア作用に變化しつ丶ある。その結果として、現存の無產諸政黨の分野が、未組織の反ブルジョア大衆に對する相對的のを大いさを縮小することは、現在の對立狀態の重要さをも縮少する。

×　×　×

單一共同戰線黨の實現は可能であるか？　慥かに可能である。單一共同戰線黨の實現は必要であるか？　疑ひもなく必要である。この必要は、大衆を驅つて、戰線統一の問題を再び當面の問題たらしめるに違ひない。けれども可能なことの大部分が、多くの場合、誤謬のために不可能となつてゐる。新興階級が獨立の政治勢力に結成せられるためには、いづれの國においても、長い年月を必要とした。ひとり吾が國のみがその例外たることはできぬ。無產政黨の現在の對立狀態と、統一運動の僅かな經驗をもつて、單一共同戰線黨の不可能を立證することは、現狀の維持をもつて唯一の生命とする保守的な指導者にのみふさはしい役割である。大衆は常に、現狀の打破によつて、今日の難解の問題をも、明日は容易に解決する。けれどもそれと同時に、若し過去における經驗と失敗とに、吾々を說得する力がないとしたならば、戰線統一は、來るべき機會においても同じく夢想に終るだらう。大衆的な共同戰線黨に對する吾々の準備は、大衆的共同戰線黨そのものに對する、明確にして動搖のない理解から始めなければならぬ。

(十一月二日)

# 金本位制の世界經濟的意義

## ―解禁後の金本位制―

土方成美

### 一　金本位制の世界經濟的意義

金解禁は早晩之を行ふべきであり、又行はれるであらう。そこで世人は金解禁の永久的利益と金解禁によつて起る一時的の不利とを比較考量の問題として論議してゐる。之もたしかに重要な問題である。しかし、金本位制度は世界の諸國を等しく利益すると簡單に解決する以前に、少しく頭を冷やかにして、金本位制が果して列國を等しく利益する制度かどうか。少くとも利益を受ける程度は國によつて違ふのではないか。進んで金本位のために拂ふ犧牲が相當に大きい國もあるのではないか。そういふ國としては同じく金本位制を採るにしても、どんな制度をとつたらよいか。これらの問題を考へることは無用のことではないのみか、必要の事であると思ふ。我國では目下金解禁に熱中するあまり、解禁後の金本位制度をどうするかの問題は比較的に輕視せられてゐるやうである。茲に少しく金本位制の世界經濟的意義を考へ金本位制を中心とする列國の利害對立を考へて見やう。

抑〻金本位制は今日では内國の取引よりも、國を異にする人の間の交易の最後の決濟、即ち交易の價額の相殺されない部分を決濟する點に重點のある制度である。しかし諸國は交易の最後の決濟を金で行ふ以上は金の授受を要せずして相殺される交易についても、交易の最後の決濟物たる金の一定の品位量目と一定の關係にある圓磅弗等を以て價格を言ひ表はすのが便利である。然らば圓、弗、磅、法などのそれぞれ呼方のちがつた通貨を、金の一定の品位量目と結び付けて置く、例へば金一匁はいつでも五圓であるといふ風に定めて置くにはどうすればよいか。之はいふまでもなく、一方に於て一匁の金は何時でも五圓で買へる、又一匁の金はいつでも五圓で賣れるといふ制度をたてなければならない。一匁の金はいつでも五圓で買へるといふ制度にはいろ

いろあるが、まづ五圓を持つて行けば一匁を含む金貨と兌換して呉れるか、乃至は一匁の金塊と兌換して呉れる制度が普通である。次に一匁の金が何時でも五圓で賣れることを實現するには、金一匁を五圓で政府乃至中央銀行が買ひ取るか、乃至は五圓の金貨に鑄造する制度をとることが必要である。かやうに一定の品位量目の金を內國通貨に對して一定する制度が金本位制度である。

國際貸借上の最後の決濟物を金にするか、何にするかといふことは決して列國間に利害對立を見ない等しく列國を利する制度ではない。なるほど一應は金本位制を採用する列國の間では通貨の換算比率即ち爲替相場が甚しく變動することがない。從つて金本位國間の取引に於ては爲替相場の變動によつて不時に利益し不時に損失をすることが少なく、各國の計畫的努力をなす者にとつて此斷は有別なることは疑がない。しかし一方、其最後の決濟物として何を擇ぶかといふことに關しては、其最後の決濟物——今では金が主として問題になる物であるが、——の獲得の容易なる地位にあるものと、獲得の困難なる地位にあるものとでは利害を異にする。

英國のやうに、世界の金の年產額の半分以上を供給する南阿の產金地を有する國や、世界の中央銀行政府の金保有額の四〇%までも保有してしかも衰へたりと雖も尙相當の金產額を加洲に有する北米合衆國の如きと、我國のやうに、工藝用の全消費を辛うじて滿するか滿さないかの產金を有する國との間では金本位制採用についての利害を異にすることはいふまでもなからう。前者の如き國にとつては金本位制の採用は金に對する確實なる販路を作ることであり、我國にとつては、他の犧牲を支拂つても是非或程度まで金の購買者にならなければならないといふことを意味する。大正六年まで金本位制維持のために我國が支拂つて來た犧牲については既に他の機會に之を述べたから、今は之を繰返すことは避けたいのであるが、兎に角金を得るためには外國へ財貨を賣らなければならない。之を成るべく金に對して安く賣らなければ、金が流入しないから、國際貸借のバランスを得るためには、財貨を比較的廉價に外國に輸出する必要がある。之をしないと、輸出不振になつて、輸入超過を來すから之の結末をつけるために外國から借金をして其利子を支拂はなければならない。之が企業者一般消費者の租稅負擔となり、企業の生產費が增加して輸出は益々困難になる。企業の生產費が高くなり、輸入に有利となつて、國內の或種の產業維持が困難になれば、輸入關稅を高めて、輸入防遏を計る、これが又消費者の負擔となり、消費者は高い財貨の購買を餘儀なくせられ、其結果勞銀も亦或程度まで高くならなければならない。又金の流出が甚しいときには中央銀行が金利を高めて兌換券を收縮する。金利は高く物價が安いといふ狀態が來て企業者は不利なる狀態を起す。之等の結果を避けやうとすれば、國內の財貨を金に對して廉賣し、企業家の利益は少くなる、勞働者も其勞銀が安くなり、結局金を得るために、國をあげて勞力物資を廉賣しなければならない。目下の緊縮政策といふの

も一面から見れば我國が金本位に復歸するために此政策の必要なることを稱道しつゝあるものとも見へる。願はくば成るべく、資力ある階級が、之薄利に甘んずることによつて、大衆の犧牲少く國際收支の均衡を得たいものである。

話は少しく岐路に入つたが兎に角金本位制は金獲得の困難なる國に多大の犧牲を課し、金產出國の產物に確實なる販路を提供する制度たることは間違がないと思ふ。尤も同じ產金國といつても、其產金が內地にあるか、それとも屬領地にあるかによつて金本位制の與へる利益も違ふ。又一國內に於ても產金業者の利害と他の企業者其他の利害とが一致するものではない。しかし、今は大きく國と國との對立といふ點から見て以上の如き利害對立のあることは否定し得ないと思ふ。國內に或企業の繁榮することは、多少ともに國內の他の企業の產物の販路を作り、勞働者の職を與へるものであらうから國內の產金業者利益は多少共に其國內產業全體を利益するものとも見られる。

他人に物を廉賣せしめることを搾取といふことが出來るならば、金本位制は金獲得に有利なる地位にある國、乃至金を多分に保有する國が他國を搾取する制度であると見ることも出來やう。

## 二　世界列國の金本位復歸と金本位の將來

以上の如く金本位復歸については、各國利害を異にするにもかゝはらず、又戰後學者の間でも通貨の數量を金によつて調節する金本位制度は合理的でないといふ非難があつたにもかゝはらず、何故歐米諸國は相ついで金本位制に復歸したのであらうか。その理由は一應金にとつて代る便利な國際貸借の最後の決濟手段がないといふことであらう金の如く耐久性を持ち、運搬が容易で、分割しても等質を害しない、殊に多數の崇拜の對象になつて居り、價値の變動の比較的少いものは目下の處他に求め難い。之が諸國の金本位復歸の理由であるといつてしまへばそれまでゞある。

しかしポール・アインチッヒもいつてゐる如く、歐洲諸國金本位復歸は理論的に見れば、時期尙早即ちまだ金本位復歸の充分の準備の出來てゐない時期に行はれた。かくの如く諸國が比較的に性急に金本位に復歸したに就ては、何か實際上の理由に基くものと考へなければならない。私は主として北米合衆國の利害から他の諸國は之に追隨したと考へても大過はないと思ふ。北米合衆國は一時世界の金保有額の五〇%までもの金を保有し其利害關係上金本位が諸國間に復活せられることを希望したと考へてよからう。實際自國の保有する財貨の用途が一つとも減少しないことを希望するのは北米合衆國としては寶の持ち腐れにならないために當然であると考へることが出來る。歐洲諸國が金本位制復歸を忙ぎ、ブラッセル會議、ゼノア會議何れも金本位制の復歸が望ましいことであると決議したのは之又何に基くのであらうか。歐洲の多數の諸國は莫大なる債務を北米合衆國に對して負擔し、且つ歐洲の復興は到底北米合衆國の援助なくしてはなしとげられない。北米

合衆國の援助を得んとせば、先づ金融を安定して、之と爲替相場を安定するために金本位に復歸することを急務としたのによるのであらう。要するに戰後の世界經濟は今更云ふを俟たざる如く弗の支配に追隨したのである。尤も英吉利は帝國内に産金地を有する點から、大局より見れば全本位復歸は其利益に合致するといへるであらう。米國についで英國の利害が世界の全本位制復歸の勢を馴致したものといへる。

しかし進んで考へれば金本位制の維持は金獲得に困難を生ずることに比較的少い列國にとつても果して有利なる制度であらうか。換言すれば金本位制を採用する諸國は將來極めて不便を感ずるといふことも考へられるのではなからうか。此點について、現在諸國の學者實際家の間に、將來金は缺乏するであらうか。それとも、金の過剩を見るであらうかといふことが盛に論議せられてゐる。

金本位制を施行してゐる諸國は、將來金の缺乏惹いて物價下落に苦しむであらうといふ論者にはカッセルがあり、ケインズがある。先づカッセルといふ所を聞かう。即ち氏によれば、世界の經濟は絕えず發展しつゝある。從つて金の價値、(物價)を安定せしめるためには世界に於ける金の總額が同一の歩調で增加することが必要である。一八五〇——一九一〇年の間に於ては、世界の金總額は平均して一ヶ年に二八%づゝ增加したが、此增加は世界の一般經濟界の發達と歩調を合すためには、缺くべからざるものであつた。此增加のため、世界の金の總額は、一八五〇年の百億金麻克から一九一〇年の五百二十億金麻克に增加した。しかも金の價値は下落しなかつた。即ち一般的物價水準は此期間の始めと終との間に於て何等變化しない。世界經濟の發展が將來も同一の歩調で進むものとすれば、物價水準を不變にするためには世界の金の總額が一ヶ年二・八%の割合で增加することが必要である。金の實際の磨損は一ヶ年〇・二%の割合であるから、毎年の産金額は各年初の總現在額の三%に達しなければならない。然るに此金の現在額は絕えず增加して行くのであるから、將來の産出額が不變であれば、相對的には次第に減少することになる。

歐洲大戰直前の數年間、毎年の金産額は豐富であつて、常に總現在額の三%を迥に超えて居つた。然るに戰爭中産金額は減少し、一九二二年には最低額十三億三千八百萬金麻克に減少した。此額は其當時の金の總現在額の一・九二%にすぎない。其後産額は增加して一九二四年には十六億三千金麻克になつた。然し、同年初の金の總現在額に對する割合から言へば一九二四年と同じである。一九二五年末には金の總現在額は七百五十五億金麻克であつた。故に今後兩三年間に金の總現在額は一九一〇年の一倍半になるであらうが、金の産額が之に順應するためには一九一〇年の所要産額よりも五〇%大きくなければならない。然るに近き將來に於ては金の産出額は金の現在高の二%以上になることはまづ出來ないものと見なければならない。又例へば十五年後に金の總現在額が一千億金麻克に增加するとすれば、經濟界が正常に發展して行くためには一ヶ年に三十億金麻克の金が産出されなければ

ならない。現在知られてゐる埋藏量を以てしたのでは、此所要額の半分の供給も期待することは出來ない。勿論新金坑の發見の見込がないのではない。又人口増加及び經濟進歩の率が低下して現在の金産額で間に合ふやうになることも考へられる。然し、經濟學者は既知の事實に基いて意見をたてなければならない。以上が大體カッセルの金缺乏の豫測の論據であつて、主として將來の金産額と、物價水準を推持するために必要なる金の正常増加との不均衡から金の缺乏、金本位國に於ける物價下落の豫測を下すのである。此カッセルの所説に對しては英吉利のケインズも賛意を表してゐる。氏はいふ。金が一般の崇拜物になつてゐるといふ事實を自分は看過してゐたが、一九二八年一ケ年の出來事から見てカッセルの豫想は當つた。

貨幣上の目的に使用し得る世界の金保有高を一九二八年に先づ二十億磅と見積ると此內で米國は約四千パーセントを所有してゐる。世界の金産出は最近に年額約八千萬磅であつて、其過半は工藝用及東洋の消費になるから、貨幣用には四千萬磅足らずであつて、卽ち世界の貨幣保有高の約二%しか殘らない。經濟生活の正常的發展に基いて起る需要の増加年額は一般に物價安定を前提して約三%と評價せられる。中央銀行が準備維持の態度を固執して渝らない限り、世界の物價は年年平均一%づゝ低落しなければならない。換言すれば物價が季節的變動を除外して安定したとすれば、中央銀行に其の金準備を年々一%づつ低下するやうに習慣づけなければならない。米國を除く自餘の諸國の中央銀行では發券高及當座預金高の平均約一〇%を超すほどの自由金準備しか有してゐない。そして佛蘭西銀行は國外に多額の金準備を有してゐるが、漸次之を內國に取り寄せるであらうから金不足の壓迫は絕えず他の銀行に及ぶであらうといふのである。

カッセル、ケインズ以外の人々にも以上の如き見解支持してゐる人があり、其他世界の經濟界が安定して來るにつれて、金の工藝用の消費は増加する、支那も漸次銀貨國やがて金貨國といふ徑路を取るであらうから之も亦金缺乏の原因になるのであらうといふやうな考へもある。

以上の世界は將來金缺乏の壓迫に苦しむであらうといふ考へ方に對しては、全然反對に寧ろ世界は將來金の過剩に苦しむであらうといふ豫測もある。之等の人々の論據は種々あるが、金の不足の問題は金産額の問題でなく交換の媒介物としての金の價値の問題である。世界の通貨が不足したのは、世界の金總現在額が減少したためではなくし、金の價値が減少し物價が騰貴したために取引に通貨を多額に必要とするやうになつたためである。バックハウス氏は此意見を主張して大要次の如く述べてゐる。一九一三年に於ける金の價値を基準とするとたしかにカッセル教授の說く如く金の價値は一九二〇——二三年に於て約二分の一に下落したことは事實である。しかしそれは交換の媒介物の必要を滿すために又信用の基礎として、一九二〇年乃至一九二三年に於ては、一九一三年に同量の取引を支辨するに要した額の倍額の

金を必要としたことを意味するに外ならない。其後の金價値は著しく上昇し戰前價値の半分から三分の二になつたが、未だ戰前價値の三分の一は不足してゐる。金の使用及移動を一九一三年と同樣に自由にし金を一九一三年と同じやうに潤澤にするためには、世界の金現在高は個人の貯藏を度外視して現在の價値では一九一三年に在つたよりも三分の一大でなければならないわけである。やがて此金が喪失した三分の一の價値は、世界が今後革命又は戰爭のために打擊を蒙らない限り回復するであらう。金價値が倍になるといふことは世界の金現在額が倍になつたのと同じことになるのであると。

尚金の缺乏に反對する人の論據には、諸國が實際上通貨の流通を節約して、銀行信用に訴へる傾向が高まること、中央銀行の準備率が漸次低下して行くこと個人の手に保有せられて中央銀行に歸らない金の保有量等を擧げてゐる。

世界產金の將來については何人も正確な豫測を下すことは出來ない。將來物價下落金價値の騰貴が起ればそれだけ產金業に有利であるから、世界の產金額は增加するであらう。しかし之も著しい增加を期待することは出來ないことは最近の事實が之を示してゐるやうである。

中央銀行の準備率も金の缺乏に應じて或程度まで低下されるであらうが、之も急激に低下して行くとは思へない。其他硬貨の使用が漸次銀行信用によつて代られるであらうが、之等は一面から見れば、金の缺乏に對抗して起る手段であるとも考へられる。何れにしても近き將來に於ては世界は金の過剩に苦しむことよりは寧ろ缺乏に苦しむ可能性の方が多いのではなからうか。勿論之は何人にも容易に斷言し得ざることであるから、私の考へることも一つの臆斷に過ぎないものであるが。

もし今後世界の諸國が金缺乏に苦しむものとすれば、金本位國に於ける物價は下落し其ために、利子年金等確定の貨幣額の收入に衣食する者は利益するが、企業家勞働者は絕えざる財貨勤務の下落に悩むと見なければならない。金本位制を施行する國としては金の缺乏より生ずる之等の惡影響を避けんがために出來うる限り金の節約を計るのが賢明である。實際歐洲諸國が相ついで金本位制に復歸したといつて、戰後の金本位制は戰前の金本位制に比して著しい特色を有することを注意しなければならない。その一つの特色は國內の流通用としての金貨の使用を廢止する方針を採つた國の多いことである。第二に、金本位に復歸した國の間に協定を結んで例へば和蘭と丁抹との間の如く、金本位國への金の流出は何等妨げないが、金本位國以外への金の流出を禁止する原則をとつてゐる。第三に各國の中央銀行は他國の準備に干涉する如き行動を採らないことを原則としてゐる。之等の特色は或意味に於て、金本位制に復歸したばかりの諸國が協力して金本位制を擁護するためでもあり、又一面各國が金の缺乏に虞れて、出來る限り金の使用を節約するとともに、金の流出を防止せんと努力してゐることに由來すると考へることが出來る。金の世界的缺乏が或程度まで起る

として、諸國は準備制度の改正其他によつて或程度まで之に備へることが出來るのであるか、依然として、其中金獲得の困難なる我國は特に不利益を受けることはたしかである。

## 三　解禁準備と我國の準備制度

以上述べた如く金本位制の將來に就て正確なる推測を下すことはもとより不可能である。諸國が金の缺乏に苦しみ、其間に猛烈なる金の爭奪戰が演ぜられ、各國の中央銀行は金利の引上げに熱中して、諸國は通貨の收縮、物價下落の狀態を呈し、不景氣に苦しむであらうといふ想像も出來る。反對に諸國は金の使用を出來る限り節約し、正貨準備の割合を減少して信用擴張を以て金の必要を節約し、且つ金價の騰貴即ち物價下落は金の產出增加を刺戟するといふ見地に立てば、世界は金缺乏のために困難することもなからうとの見解も成立つ。恐らく世界の金本位國は金缺乏の虞があれば、漸次無用の正貨準備の率を減少して、金缺乏のために起る物價下落を或程度まで阻止する政策をとるであらう。國內に金產地を有し、我國に比して金獲得上遙に有利なる地位にある國に於てすら此政策がとられる以上、我國の如き金獲得上不利なる地位にある國は、一層金缺乏のために物價の下落を導くことを出來る限り避ける準備をなすことが肝要である。

我國の現在の制度は人も知る如く、正貨準備のある限りは之と同額の兌換銀行券を發行することが出來る。その以上一億二千萬圓を限度として保證準備即ち正貨準備なくして、國債其他の確實なる有價證券を擔保として兌換券を發行することが出來る。尙此一億二千萬圓の制限も絕對の制限ではなく、市場の狀況によつて流通通貨の增加を必要とすると認められる場合には、此制限を超えて制限外發行をすることが出來る。尤も制限外發行に對しては大藏大臣の定める率に從つて制限外發行稅を納めなければならないことになつてゐる。この制限外發行は此制度を設けた最初の趣旨から見れば非常に對して備へる準備の如きものであらうと思はれるが、事實は此制限外發行が頻繁に行はれ、保證準備發行の制限は、それ程強い制限にはなつてゐないのである。そこで此我國の制限法は實際の事情に適合しない卽ち一方に於て兌換券の發行を制限せんとしつゝ、同時に他方に於て伸縮の餘地を與へんとする矛盾したことを行はんとするから、適當に運用せられない。もともと、市場の狀況に應じて伸縮すべき兌換券の流通を保證準備發行の制限を設けて、一定の金額を以て限らんとするところに無理があるといふ非難がある。

制限外發行の頻出に對して現在の制度を改めるのが適當であるとして改め方に大體三條の考へ方がある。一つは現在の制限法を根本的に改め、保證準備發行制限といふやうな制限法をとらず、比例準備制度にする。卽ち三分の一準備制度、乃至四割準備制度による、かくして一億二千萬圓といふやうな確定額による制限を廢止して今少し屈伸自在の比例準備制度に改めることがその一つである。第二は、現在制限

外發行が頻發するのは、現在の保證準備發行の制限が低きに失するからである。そこで之を改めるには保證準備の擴張を計るといふ考である。最後に、銀行券流通の制限を現在のやうに保證準備發行、正貨準備發行と分けて制限をせずに、全體の發行額について制限を設けるといふ考へ方もある。

我國が特に金獲得に不利なる地位にある點から、成るべく必要なる最少限の金準備を持ち、金の流出入によつて內地の物價に著しい變動を受けないやうにする、殊に金の缺乏によつて物價下落の弊を受けないやうにするといふ見地からは何れの方策が適當であらうか。先づ比例準備法を見やう。

此方策は現在の制度にくらべて逈に正貨準備少くして兌換券を發行することが出來る制度であるから、現在の制度よりは逈に上述の目的に適つて居るし、又我國に於て山崎博士の如き有力なる人々によつて提唱される案である。即ち同博士は三分の一準備法を提唱して次の如く述べられる。「此三分の一準備法は、後に述べるやうに、廣く歐洲大陸諸國に行はれたのであるが、其起源は英國だと云はれて居る。ナッセの言に據れば、債務(預金並に銀行券)の三分の一を常に正貨で保有せねばならぬと云ふことを英國の銀行が多年經營上の原則としたのが主たる原因で、比例準備主義が歐洲大陸諸國の法律に採用されたやうである。即ち、英國では銀行の內規であつたのが、歐洲大陸に於ては法律の明文となつたのである。(中略)例へば、獨逸に於て、一八七五年、帝國銀行の設立される當時存在した三十三の發券銀行は殆ど全部三分の一準備であつて、帝國銀行も之を繼承した。我國では往々比例準備法の代表者の如く云はれる佛蘭西銀行は法規上では全くさうでないが、第十九世紀の前半に存在した佛國の地方發券銀行は三分の一準備法を採らねばならなかつた。其他、白耳義、希臘、ブルガリヤ等の中央銀行も之を採用した。松方藏相の立案した明治十六年の兌換銀行券條例草案も三分の一準備を原則としたことは、曩に述べた如くである。正貨四割の比例準備法も其實例として瑞西、伊太利、和蘭、セルビヤ、ルーマニア等を擧げることが出來る。最近に於てユーゴースラヴイア、リツアニア、ダンチッヒ等が三分の一準備を採り、從前四割準備であつた墺匈銀行が分離して別々に設立された墺地利並に匈牙利の中央銀行は第十六年目から三分の一準備となるのである。之に反して、從來三分の一準備であつた獨逸の中央銀行は一九二四年の新銀行法に依り四割準備となり、白耳義國立銀行も一九二六年十月二十五日の勅令で、同じく四割準備に改められた。併しながら、此四割には兩銀行共に、外國爲替手形も含まれるので、金準備は、少なくとも三割となつて居る。其他米國の聯邦準備銀行、一九二二年設立の南阿準備銀行も四割準備法を採つたのである。斯の如く三分の一準備と四割準備と多少の差こそあれ、比例準備たる制度が從來既に廣く行はれ、近時益々多からんとするは何故であらうか。換言すれば、此等の比例準備法の選擇される原因は何處に在るであらうか。フルトマン氏の言

ふが如く、銀行券の兌換は、此等の割合の正貨を保有せしむることに依つて十分に保障されると同時に、銀行券の伸縮力も、正貨の二倍半又は三倍まで發行せられることに依つて相當に利用され得ると信ぜられる爲めであらう。要するに、極めて正確な學理的根據があるのではないが、決して漫然たる雷同ではなく、各國の識者が共通的に有する常識的判斷に基づくものと思ふ。而して之を實際に徵するに、例へば獨逸帝國銀行に於ては、制限外發行は極めて頻繁であつたが、三分の一準備は銀行創立以來世界大戰の初期まで完全に維持されたのである。(山崎覺次郎博士、若干の貨幣問題、二九五――七頁)

私は此三分の一準備法を提唱せられる根本の趣旨には贊意を表するのであるが、之が果して金から我國の通貨を解放することになるかどうかに就て多少の疑問なきを得ないのである。

それは博士も豫期して居られる如く、三分の一準備法は辛うじて準備率を維持してゐる場合には、正貨の増減は其三倍だけの兌換券の膨脹縮少の原因となる點である。擴張の方は是非之だけ通貨を増加しなければならないから差支がないが、減少した場合には三倍だけ兌換券を收縮しなければならなくなる。山崎博士も云はれる「比例準備法に對する非難は或場合に一枚の銀行券も增發し得られぬことである。例へば三分の一準備法に於て、一億圓既に發行され、之に對する正貨準備の保有額が四千萬圓のとき、一千萬圓の兌換請求があれば、發行額は九千萬圓に減ずるが、正貨準備が三千萬圓となつて、新發行は全然不可能となるのである。理論上では、斯の如きことも有り得ると云はなければならぬが、發行額の十分の一が一時に兌換請求を受けるが如きことは極めて稀で、恐慌等の場合に他ならぬ。斯の如き非常の場合に備へるためには一種の制限外發行制度を設ければ宜しい。從來白耳義では、大藏大臣の權能で準備の割合を低下し得られた。和蘭では、勅令を以て同じく準備率を改め得られるので、世界大戰の起つた際、之を實行した。日本銀行が三分の一準備法を採用するならば、同樣の規定を設けることが必要である。大藏大臣の認可に依り、一定の期間(例へば二箇月以內)一定の金額を限り規定の割合を超へて發行することを得と云ふ意義の條項を置くのである。」(山崎博士、前揭書二九八――九頁)

私は此點を憂へるのである。我國では正貨準備の多いのを憂へる必要はなく、其缺乏を憂へなければならないであらう。然らば、辛うじて三分の一の準備率を維持するやうな場合が屢々起るのではなからうか。若し又かくの如き場合が起らぬやうに絕えず準備を豐富にして置くといふのであれば、金の節約といふ趣旨が充分に達せられないであらう。

更に此三分の一準備法の三分の一といふことにはどれだけ理論上の根據があるであらうか。もとより之は經驗上の標準であつて、かくの如き比率について何か正確な理論上の標準を求めるのは求める方が無理であるかも知れない。經驗上の標準は尊重すべきものであるが、假

其經驗の一半は今日では之を基準にすることが不適當になつてゐるとも考へられる。それは諸國の戰前に於ける金本位制度には國內に於ける金貨流通するのが多かつた。そこで國內の兌換券流通額に對して一定比率の正貨準備を兌換のために用意し置くことは理論上も根據がある。戰後歐洲諸國の金本位制度が國內に金貨流通せしめる制度であれば、此經驗は非常に尊重すべきものであるが、金塊本位制や金爲替本位制の下では此經驗は果して基準とすべきかどうか疑なきを得ない。

戰後の金本位制の重點が國際間の支拂決濟といふ點にありとせば、而して少くとも我國に於ては、金準備は國際貸借上の支拂決濟の準備とするのが適當であると思はれるが、然らば理論上正貨準備は寧ろ年々の輸入額、或は貿易外の支拂勘定を含めて、之に對して一定の比例を保たしめる方が合理的ではないであらうか。しかし之も其時々の輸入額に對して比率を決定することは到底問題にならないから、例へば過去五ヶ年間の輸入額の平均をもつて正貨準備の最低額となす等の制度が合理的ではないかと考へる。此額も比例を以て定めず、上述の如き平均額をもつて定めるのが、かへつて金を節約する所以にならうと思ふ。此の如き方法によつて、通貨の內國流通額を不必要なる金準備から解放すると同時に、兌換券の發行額に伸縮力を與へる目的は三分の一準備法よりよりよく達せられるのではないかと思ふ。

しかし三分の一準備法を採らないとして殘るところの發券額の制限法は如何なるものがよいか。もとより銀行券發行額に何等の制限を加へないのは適當ではない。中央銀行當事者の濫用によつて非常なる兌換券の膨張に陷り、物價の暴騰を來す虞があることはいふまでもないことである。たゞ問題は從來の如く正貨準備による發行を別としてその上に保證準備發行額について制限を設けるのがよいか、それとも、正貨準備發行たると保證準備發行たるとを問はず全額について制限を設けるのがよいかといふことである。私は強いて正貨準備發行と、保證準備發行とに區別を設けず、全額について制限を設けるのが適當であると思ふ。兩制度の結果として違ふところは、正貨準備發行と保證準備發行とを別ち前者を無制限にし、後者のみに制限を附するとは銀行當事者が正貨準備發行を增減することによつて全額を動かす餘地が多い。然るに全額の制限法をとれば、此制限を超えては、いかに正貨準備を多く持つてゐる場合でも出來ないことになる。その代りに保證準備發行制限法の場合には、實際問題として、正貨準備發行の方がどれだけ增すか、それには一定限界がないわけであるから、其保證準備の制限は比較的嚴重に附さなければならないことになる。發行全額については正貨準備の多寡に制せられ、當局者の裁量の餘地が少くなる全額制限法の場合には、國內流通額は其範圍內に於て、或程度まで通貨準備如何にかゝはらず、伸縮する餘地が大である。國內の物價安定といふ見地から見て、此全額制限の方が合理的であらうと思ふ。勿論此全額發行法にも缺點はある。玆にも即ち多額に流入した金の處分に窮する場合が起り得るわけである。しかし、我國の實際に於ては山崎

博士も述べられる如く、金流入の多きを憂へる必要は先づないかと考へる。

然らば最高發行額は如何にして定めるか。之に就ては山崎博士の所說に贊したいと思ふ。例へば前五年の毎年の最高發行額を平均したものを採り、之に或割合（例へば一割）を加へたものを採る。卽ち漸次増加することは財貨の増加より考へて必要と見るのである。更に非常の場合を考へて制限外發行の方法を認めて置くのである。要するに私の主張する發券制度は、經驗上より得た基準によつて最高發行額を制限し、正貨準備は前數年の、輸入額の平均の例へば三分の一を以て最低限とするといふが如きものである。その趣旨は金保有を必要の最少限度に止め國內の通貨流通額が出來る限り金の流出入によつて煩はされることがないやうにすることである。

此制度は一面から見れば、輸入超過の場合にも、正貨準備の減少から兌換券收縮といふことを必然には導かないから、所謂金流出入による貿易調節作用が行はれ難い、從つて金本位制の妙作用が行はれないといつて非難されるかも知れない。しかし私は此金の貿易調節作用は一面に於てそれほど重きを置かないのである。金の流出が兌換券收縮物價下落を導けば、之によつて或程度まで輸出に有利なる狀態を起すことは事實である。しかし、之によつて入超の勢が必ず救はれて出超に轉ずるとは何人も斷言出來ない。進んで考へれば、金の流出入によつてあまりに中央銀行の金利政策が動かされ、兌換券が膨張縮少することは國內經濟市場の安定のために不適當なる場合が多い。貿易のバランスを得ることは、他の技術の改善、其他今少し根本的施設にまつべきであらうと思ふ。

しかし私の唱へる制度の下でも、入超續きは金の流出を導き正貨準備の推持を困難にするから、或程度まで矢張り金利政策を動かして、兌換券の收縮を計る必要に迫られるであらう。たゞ現在の如く其關係が直接でないといふまでゞある。

金解禁を目前に控へてゐる今日、我國の正貨準備が平時として多過ぎることは何人も認めることであるから之によつて一億二億の正貨が流出しても國內の物價に著しい下落が起らないやうにするためには、是非共上述の趣旨の發券制度の改正が必要であると思ふ。

しかし今金解禁を目前にして此改正が困難であるといふならば、何等かの經過的施設を施して、上述の弊害を避けなければならないと思ふ。例へば正貨が六億（此額は上述の趣旨により正確に計算するに）減少するまでは、兌換券發行總制限（例へば十五億）の範圍內に於ては保證準備發行の制限を擴張することが出來る等の規定を設け、金解禁後經濟界の安定するを俟つて根本的改正を加へるのでもよい。それも出來なければ金の六億位までの減少に對しては日本銀行當局者の裁量によつて金利政策を極端に動かして、兌換券の收縮、物價下落を起すことを避けるやうにすることが必要である。

尙將來は鑄造の費用節約の爲にも金塊本位制に移るべきであらう。

# 新藝術形式の探求へ

## ——プロレタリヤ藝術當面の問題について——

藏原惟人

### 一

最近わが國のプロレタリヤ藝術、その中でも特に文學は、少くともそのイデオロギー的具象化の方面に於いては、次第に過去の我々の藝術に纒りついてゐたブルジョア的要素と訣別して、その幾つかの尖端的な現れに於いて××主義藝術の素晴らしい典型を示し初めて來た。これはわが國のプロレタリヤ藝術に取つては實に飛躍的な進歩である。そして我々がこれまで特に藝術乃至文學に於けるイデオロギーとその藝術的具象化との問題に我々の理論と批評との焦點を集中して來たと云ふことは正しかつた、——何となれば、藝術を最後に決定するものは常にそのイデオロギー的内容であり、そして藝術の變革は何時も先づ此處から初められなければならないから。我々は今後とも藝術作品のイデオロギー的内容に對する我々の關心を少しでも緩めることがあつてはならない。

しかしながら藝術はこのイデオロギー的方面と共に心理的方面を持つてゐる。その思想的・觀念的方面と共に情緒的・感覺的方面を持つてゐる。そして我々は唯このイデオロギーと心理（プシコロギー）との統一體の中にのみ、社會現象として、また鬪爭の武器としての藝術作品を見ることが出來る。しかしこの後者、卽ち藝術作品の心理的部分は、その作品の藝術的形式と離すべからざる密接な關係を持つてゐるのである。

凡そ一つの藝術が、他の藝術と區別される所以のものは、決してそのイデオロギー的内容に於いてのみではない。それはまたその心理的内容に於いても、その藝術的形式に於いても區別され得なければ、決して新しい藝術とは云ひ得ないのである。だから若しもその作品のイデオロギー的内容が、如何にプロレタリヤ的であつても、そこに非プロレタリヤ的な心理が漂つて居り、それが非プロレタリヤ的な形式に

包まれてゐる以上、それはまだ眞實の意味に於けるプロレタリヤ藝術とは云ふことが出來ない。

この觀點から我々がこれまでのわが國のプロレタリヤ文學乃至藝術の諸作品を見る時、我々はそれが必ずしも順調に行つてゐないことを發見するのである。そこにはプロレタリヤ的なイデオロギーと並んで、小ブルジョア的な、時には封建的でさへある心理が平氣で同棲して居り、その形式に於いても自然主義的な、表現派的な、新感覺派的な形式が何等の批判なしに用ひられてゐる。このことはこれまでのわが國のプロレタリヤ藝術の發達に於いては當然であつたかも知れない。しかし今、我々はこれ等の現象を克服し得る所にまで成長して來たのである。だからプロレタリヤ藝術に於ける非プロレタリヤ的心理と非プロレタリア的形式との合理化の傾向は、それがどんな假面を被らうとも、反動的なものとして我々によつて排除されなければならない。

近代的プロレタリアートの心理の上に基礎を置いた新しい藝術形式の探求こそ、今わが國のプロレタリア作家及び藝術家が何よりも先に解決しなければならない當面の重要な課題の一つである。

然らば、この新しい藝術形式は如何なるものでなければならないか？――この問題を現實に解決するものは作家・藝術家自身であつて、批評家ではない。批評家の任務は唯その一般的方向を指示し得れば足りるのである。私がこの小論の中に於いて企圖する所も、その現實的解決への一助としての理論的方面をいさゝか照し出さうとするに他ならない。

これまでプロレタリヤ藝術の新しい形式の問題は、色々の人々によつて色々の場所で提唱された。しかしその多くが、現代社會の藝術の持つ形式的可能と、プロレタリアートの現實的必要とを無視した所の空想的な「藝術改造論」であつた爲に、新藝術形式の形成には何等本質的な影響を與へずに終つたやうに思はれる。

藝術形式發達の法則なるものがあつて、それを無視して我々は如何なる新形式をも論ずることは出來ない。すべての藝術形式は終局に於いてその時代の生産形式に規定されてゐる、そして生産形式の發達そのものが既に辯證法的であるが故に、その反映である所の藝術の形式は、それ以前の藝術形式の辯證法的發展としてのみ得られる。プロレタリヤ藝術の形式は、決して或る天氣清朗の日に天から降つて來るものではない。それは過去のブルジョア藝術の形式、殊に近代的工業に基礎を置いた所の二十世紀藝術の形式の發展――揚棄でなければならない。此處に我々の新藝術形式の現實的出發點がある。（註）

從つて我々がかつて一應內容的に非プロレタリヤ的なものとして排斥した所の、未來派、立體派、表現派、構成派、新寫實派等の藝術は、新しい觀點から、即ち純形式としての觀點から、もう一度我々の檢討評價を受けなければならない。かくて我々は問題を次の如くに提起する、――

近代的資本主義社會の產物として生れ、プロレタリアートによつて正當に繼承され發展さるべき藝術形式は何であるか？

註1　この點については私の前の論文「プロレタリア藝術の內容と形式」を參照せられたし。それは「戰旗」二月號に揭載され、論文集「藝術と無產階級」に再錄されてゐる。

## 二

夫々の時代、夫々の階級は、その歷史的發達の各段階に於いて、夫々の「美」を發見し、創造した。或時は人間裸形の美を、或時は自然の美を、或時は靜物の美を、更に或時は悲壯の美、エロチックの美、妖怪の美をすらも發見した。そしてこれ等の美は、或は時代と共に亡び、或は時代と共に姿を變へて今日にまで及んでゐる。――高度に發達した近代資本主義社會が發見して、我々に殘した美――それは大都會と機械の美である。即ち前者はウルバニズム（都會主義）とし、後者はメカニズム（機械主義）として、夫々近代藝術に反映した。

「大都會の美」についてはしばらく置くとして、我々は「機械の美」が如何にして發見され、如何にしてその後攝取されて行つたかを見ることにしよう。

機械が人類の生活に現れて來たのは決して新しいことではない。しかし機械が美の對象となつたのは極めて近代である。久しい間機械は現實の「卑俗」と「粗暴」の權化であり、藝術は機械と正反對なものとして、この二つのものゝ結合は夢にも考へられなかつた。この觀念は殊に我國のやうに經濟的に後れた國にあつては、我々若いジェネレーションの記憶の中にすら殘つてゐる。現在でも古いプシコ・イデオロギーを代表する詩人達は機械に對する自分の憎惡を隱さない。例へばロシヤ田園の詩人エセーニンは、農村の機械化を左のやうに歎いてゐる。

碧なす野邊の小道に
やがて鐵の斧があらはれ
その黑い手は、空映うつす
燕麥を集め去るであらう。

おゝ命なき見知らぬ手よ、
わが歌はお前と共にはゐられないのだ。

しかし資本主義的に發達した歐米の社會に於いては、既に十九世紀の後半に、その尖端的藝術家によつて「機械の美」が發見されてゐたのである。機械に對するこの觀念の變遷の際に我々は、地主貴族的乃至は商業ブルジョア的環境の中から出て來た藝術家から、近代的工業的ブルジョアジーの心理を代表する藝術家への推移を見逃すことは出

來ない。「機械の美」を發見した恐らくは最初の一人であるワルト・ホイットマンが、近代ブルジョア民主主義の使徒であつたことは決して偶然ではない。

ホイットマンは既にその當時に於いて、その日記の中で、落日の河に浮ぶ汽船の美についてから書いてゐる。

「それは唯單なる汽船に過ぎなかつた、しかしそれはその合目的性に於いて自然の藝術の最も美しい創造物に等しいものである。高くエーテルの中には海の鷲が舞ひ、此處、下の方には川と空の繪のやうな美しさの中に、或意味に於いて自然に劣らぬ完成さをもつた、この技術的美と、力と、運動との創造物が浮んでゐた。」

今から半世紀以前、卽ち一八七六年に書いた彼の「冬の蒸汽機關車に」と云ふ詩も特徴的である。

爾を歌はう！
吹きまく嵐、今のやうな――雪――暮れゆく冬のたそがれの中にある爾を！
鎧に身をつくろひした爾を、爾の規則正しい烈しい鼓動を、而して爾の鋭い脈搏を、
黑い圓形の五體、金色の黄銅、銀光の鋼、
重々しい側板、併行した棧條、それは爾の側部で旋回し、走せちがふ、
爾の旋律、或る時は高まりつゝ喘ぎ叫び、――或る時は距たるにつれて細まつてゆく、
突出した逞ましい前燈は車頭にかゞやき、
長くたなびく蒸汽の青白い捷旗はさゝやかな紫を含み、
黑々と重げな煙の雲は煙突から湧き立ち湧き立つ、
爾の骨組の頑丈さ――旋條と螺膜――細かく震へる車輪のまたたき、
後ろに連なる一列の客車は、從順に快活に爾に隨ひ、
はやてにも日和にも、迅くとも、おそくとも、小やみなく走せてゆく。
「近代」の典型！ 激動と精力との象徴！大陸の脈搏！（註1）

しかしこれは唯その「最初の燕」に過ぎなかつた。機械が藝術の中心的題目になつたのは、二十世紀になつて、未來派が現れて來てからである。最初の未來派の詩人マリネッツイは一九〇九年左の如くに宣言した。

「私達は、世界の榮光は一つの新しい美卽ち快速の美によつて富まされた事を宣言する。爆發的な息を吐く蛇にさも似た太い管で飾られた車體を持つ走り行く自動車……散彈に乘つて走るかのやうに吼える自動車は、サモスレスの勝利よりも更に美しい。」

「……電氣の亂暴な月の下の兵器廠や造船工場の夜の振動を、煙吐く

蛇の貪り食ふ慾深い停車場を、その烟の束によつて雲にまで連らなる工場を、體操家のやうに、日に輝く河の兇惡な刃物を飛び越える橋梁を、水平線を嗅ぐ冒險的な郵船を、長い管で緊められた鋼鐵の巨大な馬にさもにてレールの上を足踏する大きな胸の機關車を、推進機が旗の音や熱狂した群集の喝采に似て居る飛行機の辷り行く飛翔を、私は歌ふであらう……」（註2）

かくて未來主義者達は、自動車を、機關車を、飛行機を、發動機を、電氣を、都會の騷音を歌ひ初めた。ソウエートの藝術理論家フリーチエは、十九世紀のレアリズムからこの力學的、「未來派的」レアリズムへの發展の階級的基礎として中小ブルジョアジー（商業的、金利生活者的ブルジョアジー、小市民、教師型のインテリゲンチヤ）のインテリゲンチヤから、技術者的、從業員的インテリゲンチヤへの推移を見てゐる。（註3）これは現代の機械主義的藝術の本質を照し出す大きな卓見である。しかし少くとも未來派は、殊にその發生の當初に於いては、この中小ブルジョアジーから、技術的インテリゲンチヤ（我々は技師その他各種の從業員をこの名で呼ぶことにする）への移行はまだ極く不十分にしか現れてゐない。それは一つには未來派の主將であるマリネツツイその他が自ら金利生活者的ブルジョアであつたと云ふことにも基因してゐるのであるが、そのことは未來派に於ける機械そのものゝ性質によつて最も明かに知ることが出來る。

一、未來派の機械がすべて街頭の機械であること。自動車、機關車、飛行機、停車場、橋梁は、いづれも街頭の機械であり、云はゞ「消費的な」機械である。工場その他の場所でも唯外部からの眺めとしか取扱はれてゐない。生産的な機械はかつて未來派藝術の題材とならなかつた。これは藝術家が生産過程から離れてゐることを示す。

二、機械が單に快速力としてしか理解されてゐないこと。機械の目的、任務、その合理性は、未來主義者の視野の外にある。彼等は機械の盲目性、その無目的な驀進性を耽美したのである。これが生産に從事するインテリゲンチヤの心理でないことは云ふを俟たない。

三、機械のフエテイシズム（拜物主義）に陷つてゐること。未來主義者にあつては機械は、何等かの目的の爲の手段でなくして、それ自身目的であり、理想である。（註4）これも亦自ら機械の製作と運轉に從事するインテリゲンチヤの心理ではあり得ない。

以上の諸點は未來派の階級的性質を明かにする。しかしとも角も未來派が、假令それが「消費的」であるにしても、とも角も機械へその力學へ關心を向けたことは近代藝術史上に於ける沒すべからざる功績であると云はなければならない。この機械への傾向は歐洲大戰によつて更に強められた。即ち兵士として出征した詩人や、作家や、畫家達は、そこに機關銃や、速射砲や、その他、彼等の未だ知らなかつた機械に接して、それに影響されざるを得なかつたのである。詩人アポリネール、畫家レージエ、クローメール、小説家バルビユス等等）。

しかし此處に一つのレアクションが起つた。それは戰後のドイツを

中心とした表現派の運動である。表現派は一應現代を受入れ、機械もその一要素として彼等の藝術の題材となつた。それはゲーリングの「海戰」、カイゼルの「瓦斯」、トルレルの「機械破壞者」の中に現れて居り、そしてその機械はしばく生產的機械ですらある。しかし若しも我々がその機械に對する彼等の見解を見る時、我々はその反動性に驚かされるのである。彼等にあつては機械は、人間によつて作られ人間の目的に從ふ手段ではなくて、人間と對立して、人間性を絕滅する所の怪物である。――これは我々の良く知つてゐる農民的乃至小市民的イデオロギーだ。唯トルレルのみは流石に「機械は否定さるべきでなく征服さるべきである」とは云つてゐるが、それは唯意識的にさう云つてゐるだけで、心理的には彼も亦反機械的立場に立つてゐる。

要するに表現派は形式的にはそれを受入れてゐながら、本質的には近代的技術的工業社會に對する小ブルジョア的反動の藝術的表現であつたと云ふことが出來る。カイゼルやトルレル等がいづれも地方の商人の子であるのも決して偶然ではない。

註1 有島武郎譯「ホキツトマン詩集」第一輯二〇六頁

註2 神原泰氏譯「未來派宣言」に依る。

註3 フリーチェ「二十世紀ヨーロッパのレアリズム」。現代ソウェート第一のマルクス主義的藝術理論家であつた著者は去る九月五日モスクワで逝去した。

註4 この最後の點についてはマーイツアもこれを指摘してゐる。彼の著書「現代歐洲の藝術」藏原・杉本譯十三頁參照。

## 三

しかしながら、この未來派の機械に對する觀念的な傾向も、表現派の現實の機械に對する否定的態度も、空想的世界に於ける機械の役割を肯定するのを妨げなかつた。此處に板垣鷹穗氏の所謂「機械のロマンチシズム」(註1)が發生した。

それは先づ所謂人造人間の概念や空想的都市計畫の中に現れて來た。マリネツテイの戲曲「電氣人形」、チヤペツクの戲曲「ロボツト」、近くはラングの映畫「メトロポリス」、等は藝術に於けるその代表的な反映である。

元來この種のユートピヤは大きな發見や發明が相續いた時に、直接生產過程に携つてゐない者の頭の中に發生するものであるが、この未來派的、表現派的ユートピヤもそれ以外ではない。この點に於いて彼等の空想に於ける機械が極めてプリミチーヴであること、彼等のイデオロギーが形而上學的、反動的であること等は、極めて特徴的である。

この「機械のロマンチシズム」は、しかしながら、小ブルジョア的傾向の影響を多分に持つてゐる初期の社會主義藝術、プロレタリヤ藝術にもその印影を殘してゐる。エチ・ジー・ウエルスや、ブラスコ・イバニエスの如き「社會主義者」の小說については既に云はないとして

も、革命直後のロシヤの藝術にもこの色彩は非常に濃厚であつた。

初期のプロレタリヤ詩人達は、

火星の運河の上高く
世界コンミユーンの宮殿を打建てよう……

（ゲラシモフ）

と歌ひ、

我等は限りなく恐るべき「勞働」の軍隊、
我等は海と大洋と陸とを戰ひ取り、
人工の陽の光もて街々を燒き盡した、
叛逆の焔もて我等が誇り高き胸は燃えてゐる
……
我等が筋肉は巨大なる勞働を冀ひ、
集團の胸は創造の苦しみもて燃えてゐる、
いみじき蜜をもて蜜房を滿たさしめよ、
我等の遊星に輝かしい他の道を見出さう。

（キリルロフ）

と歌つた。

この傾向は、更に一九一八年の革命一週年記念日にアリトマン、シュテレンブルグ、レベジエフ、コブリンスキイ等によつて描かれたレーニングラードの冬宮を蔽ふ數千尺の大きな繪や、高さ四〇〇米に達すると云ふタトリンの鐵骨硝子張りの「第三インターナショナル記念塔」のプラン――この計畫は遂に實現されずして終り、それは遂に革命的ロマンチシズムの記念塔となつた――等の中に現れてゐるが、この同じ「機械のロマンチシズム」は、一九二三年モスクワ建築學會によつて募集された「モスクワ勞働宮」の餘りにもメカニックな、餘りにも空想的な多くのプランの中に尚濃厚に殘されてゐた。

だが近代工業のその後の發達と、技術的インテリゲンチヤの藝術への進出とは、この「機械のロマンチシズム」を所謂「機械のレアリズム」へと引下さずには置かなかつた。この方向へ、最も確信的な第一歩を踏み出したのは構成派の人々である。

技術的インテリゲンチヤのプシコ・イデオロギーの代表者として構成主義者達は、「機械の美」を未來主義者とは全く異つた斷面の中に見た。未來派の人々は機械を無目的な、驀進的な速度、力としてのみ見た、しかし構成派の人々はその同じ機械を、先づ第一に合理性、合目的性として見たのである。

一九二二年に雜誌「ブルーム」は構成主義について次のやうに記してゐる。

「構成は現代の最も特性的なもの、即ち、工業、機械、科學によつて

インスパイヤーされてゐる。構成は工業的過程に於いて川ひられたる方法を借り、材料を利用する。數學的精密さと構造上の論理によつて綜合的に結合されたる鐵、ガラス、コンクリート、圓、三角、正六角體、シリンダー等が用ゐられる。構成は美しさを嘲り、力、明瞭、單純、勇ましき生活への刺戟としての行動を求める。」（註2）

ソウエート・ロシヤの構成主義者ギンスブルグは、これよりもつと明瞭に機械の性質を次のやうに規定してゐる。

「獨立な組織體としての機械の基本的特性の一つは、その極度に精密な、正確な組織性である。」

「かくて機械は先づ第一に、他の種類の人間活動に於いても亦、創造の極度の組織性、創造的觀念の形成に於ける精密さと正確さとに我々を導いてゆく。」（註3）

これこそは寔に現實と生産に參與してゐる者の心理を代表してゐる。そしてこの觀點からは機械は決して未來派の云ふ如くそれ自身が目的ではなくて、何等か人間の目的に奉仕するものであり、從つてその運動も盲目的、猪突的なものでなくて、合目的的な、正確な、力學的なものとして現れて來る。かくして機械の重點が街頭の機械から生産的機械へと移されると同時に、自動車や、航空機や、機關車等も、唯單に速力としてのみでなくて、更にまた合理性の表現としてその美が見られるやうになつて來た。

この合理性、合目的性の表現としての機械の讃美に、時にドイツ、アメリカ、ロシヤの構成派、並びに家を「住む爲の機械」として規定したコルビュジエの建築の中に現れてゐるが、それは廣く文學、演劇、映畫の中にその反映を見出してゐる。ピエール・アンプの小説「軌道、」ケラーマンの小説「トンネル」及び幾多の機械を歌つた詩、構成主義の舞臺裝置、多くの映畫、特にルットマンの「ベルリン」等はその代表的なものである。

殊にこの最後の者を、前のラングの「メトロポリス」と比較することは興味がある。それは「メトロポリス」の機械が、「ベルリン」のそれに比して古臭いものであると云ふことを云はないとしても、この二つの映畫の中には機械の扱ひ方に於いて全く異つた態度が見られる。一つの機械は盲目的であり、神秘的であり、他は合目的で、現實的である。そしてそれは畢竟、古い小ブルジョア的インテリゲンチヤと技術的インテリゲンチヤとの機械に對する見方の相違に他ならない。

註1　板垣鷹穗氏「機械のレアリズムへの道」（東日、九月一〇、一一、一二日所載）參照

註2　村山知義著「構成派研究」に引川された所に依る。

註3　ギンスブルグ「様式と時代」（モスクワ、一九二四年）九三、九四頁。

## 四

プロレタリヤ藝術はこの未來派から構成派へと進んで行つた機械美

に對する見解を認承する。しかしその際彼は、構成派中にすらまだ殘存してゐる所の機械のフエテイシズム、機械に對する盲目的讃美（それは技術的インテリゲンチヤの心理である）と徹底的に訣別する。機械はプロレタリヤ藝術の主人公ではあり得ない。プロレタリヤ藝術の主人公は常に社會、人間である。機械は唯この社會の物質的方面に於ける、最も新しい、最も重要な要素として讃美されるに過ぎない。とは云へ機械はプロレタリアートの生活と密接に結びついてゐる。機械はプロレタリヤ藝術の重要な要素とならざるを得ない。

我々は現代ソウエートの映畫、殊に自ら機械技師であつたエイゼンシュテインの「ポチヨームキン」、ジーガ・ヴエルトフの諸作品に於ける素晴らしい機械の描寫、ソウエートの建築の到る所に利用されたメカニズム等々を擧げることが出來る。

しかし機械は更に文學の中にまで浸入して行つた。ソウエートのグラトコフ、リヤシコ、ニキフオーロフ等、ドイツのペツヘル等の諸作品にはその美しい描寫が少くない。グラトコフの小説「セメント」の中の次の句で初る一章の如きは、我々の忘れることの出來ない所である。

一絃のやうに電動機の輪は歌ひ、その鋳鐵の輻は色々の傾きや色々の断面に黑い翼を振り廻した。鋼鐵の索は腹太い車輪の溝に蜘蛛の巣のやうに絡みついては、解けてゐる。電氣技手、勞働者やコムソモールは……無言の魅惑の中に電氣のやうな車輪の飛翔を眺め、復活した機械の音樂に聽入つてゐる。」

それにしてもわが國のプロレタリヤ作家、藝術家が、僅かな例外（作家では葉山嘉樹、岩藤雪夫及び極く僅かな程度に於いて小林多喜二、片岡鐵兵）を除いて、機械について殆んど書いてゐないのは何故であらうか？それはわが國のプロレタリヤ藝術家と生産的勞働者との間に或種の隔離がある爲ではないだらうか？それがいづれであるにしても、わが藝術家達はもつと生産に近づいて行つて、そこから近代工業的感覺を攝得しなければならない。

機械と共に近代人の美意識の中に這入つて來たのは近代的大都會であり、近代的大都會が近代的の美意識の中に這入ると同時に群集が藝術の對象になつた。

群集が藝術に現れて來たのは決して新しいことではない。しかし群集そのものに對する藝術家の見解は時代と共に變遷して來た。そして群集を近代的意味に於ける力として歌ひ初めたのは恐らくこれも亦ホイットマンやヴエルハーレンに於いてゞあらう。殊に後者の詩「群集」は有名である。表現派になると群集はその戲曲の中で主要な役割を演じてゐる。未來派の詩人も亦、「我々は歌ふ――勞働や快樂やまたは叛抗の渦潮によつて動かされつゝある大群集を」と宣言してゐる。

だが此處に於いても亦、機械の場合と全く同じやうに、群集は唯盲目的な、何等か自然發生的な力として、人間に對立するものとして歌はれてゐるに過ぎない。例へばトルレルの戲曲「群集――人間」の

中では、幾度となく「群集は力だ！」「群集は必然だ！」「群集は盲目だ！」と云ふ言葉が繰返されてゐる。

群集を何等か合目的的な力學的なものとして、云ひ換へればそのメカニックな方面を強調して、初めてその眞實の美を表現したのは、プロレタリヤ藝術である。完にプロレタリアートの藝術、特にソウエートのプロレタリヤ藝術こそはこの意味に於いて非常に多くを爲した。

先づ第一にそれは映畫に於いてゞある。エイゼンシュテインの「戰鬪艦ポチョームキン」、「十月」、「全線」、プドフキンの「母」、「聖ペテルブルグの最後」等々に現れた群集のダイナミックな取扱ひは、恐らくはかつて群集を描いた最も美しいものであらう。殊に「ポチョームキン」の水兵の反亂の場面、「母」のデモンストレーションの場面等は、群集の目的的な素晴しい威力を表現したものとして、見たものの印象から消えることがない。

演劇に於いても亦群集はソウエートでは缺くべからざるものである。そして此處でも亦それは表現派に於けるやうな無政府的な群集ではなくて、一定の目的に向つてゆく規律ある群集である。メイエルホリド劇場の「吼えろ支那」、ＭＧＳＰＳ劇場の「暴風」、藝術座の「裝甲列車」等は、群集の美を遺憾なく表現した代表的演出である。

更に群集はプロレタリヤ文學の主要な要素となりつゝある。セラフイモウイッチの小説「鐵の流れ」はその題名の示す如く全篇鋼鐵のやうな群集の流れに對する讃歌の如きものである。そこにはやゝもすれば無政府主義的な原素的な力に支配されようとする群集が、鐵のやうな意志をもつた指導者に導かれつゝ、あらゆる困難に耐えて遂に、、、、、を決行する有様が描かれてゐる。ファヂェーエフの「壞滅」にあつても、兵士達は或ひは混亂し、或ひは無政府的に放縱し、或ひは酒に醉ふこともあるが、しかも一度事が起れば、彼等は一人の如くに一致してその共同の敵に向つてゆくのである。

「一齊に馬銜が鳴つた。騒がしく鞍が軋つた。そして夜の中を、あたかも淀みの中の巨大な魚のやうに揺れながら、密な人の列は彼方へ――古いシホテ・アリニの山々の蔭から、それと同じやうに古い、しかも若々しい朝の光が昇つて行つた彼方へと泳いで行つた。」

その他グラトコフの「セメント」にしろ、パフメーチエフの「マルチンの犯罪」にしろ、ショローホフの「靜かなるドン」にしろ、凡そソウエート文學の傑作と云はれてゐるものゝ一つとして、この群集のメカニックな美しさを描寫してゐないものはない。

所がわが國のプロレタリヤ藝術はこの點に於いても亦、時代から遠く後れてゐる。わが國のプロレタリヤ作家にしろプロレタリヤ畫家にしろ、この群集の美を表現し得たものが果して幾人あるであらうか？唯演劇のみはこの方面に於いてかなりの成功を見せてゐる。しかしそれとてもまだ群集の取扱ひに無政府主義的な所が感ぜられる。

最後に機械への傾向は、スポーツに對するプロレタリヤ藝術家の關心を喚起した。しかもギリシャの藝術家達が人間の裸體そのものに反

映したスポーツの靜的な美しさを表現したに對して、プロレタリヤの藝術家達はスポーツの動的な、メカニックな美に魅力を感ずる。スポーツへの關心は、スポーツが既にプロレタリアートのものとなつてゐるソウエート聯邦に於いて特に著しい。メイエルホリドの有名なビオ・メカニック、ダルクローズ、「スポーツ實家」ピーメネフの作品等は、人體の力學的な、合理的な運動の美しさを表現したものである。

## 五

機械の生活への出現は、藝術の純形式的方面をも根本的に變革せざるを得なかつた。

いづれの時代の藝術形式もその時代の生産形式によつて終局は規定されるものである。このことについては我々が、例へばロココ時代の建築や家具と現代アメリカのそれとを比較して見れば極めて明瞭に分る。ロココ藝術は十八世紀の手工業的生産が貴族社會に反映して現れた藝術形式であり、現代アメリカ藝術は、その典型的な姿に於いては、現代の機械生産の資本家社會に於ける藝術的反映であるが、この二つの藝術形式を比較して見ると彼處では無用なまでの裝飾性が、此處では極度の單純性が支配してゐる。一般に、極度の裝飾性への傾向は手工業生産の努力の現れであり、實用、經濟への傾向は機械生産そのものゝ基本的形式である。

しかし生産形式そのものは、既にプレハーノフが指摘してゐるやうに、必ずしも常に直接に藝術形式に影響するとは限らない。階級に分れた社會にあつてはそれは階級の心理を通じて反映する。即ち同じ手工業生産はその時代の貴族と手工業者とには異つた藝術形式を作らしめ、同じ機械生産は地主とブルジョアとには全く異つた藝術形式を與へた。一般に、裝飾への努力は消費階級の心理の反映であり、單純、正確への努力は生産階級の心理の反映である。

かくて近代の藝術に、一方からは、地主貴族の心理の反映であるロマンチシズムと生産から離れたインテリゲンチャの藝術である象徴派の裝飾的藝術形式と、他方からは、近代ブルジョアジーの藝術である自然主義と技術的インテリゲンチャのそれである所謂新リアリズムの藝術形式との、二つの全く對蹠的な藝術形式を生み出したのである。しかもこの際技術的インテリゲンチャの藝術形式が、機械生産の形式的反映と、生産への直接的參與とによつて、この後の傾向を二重に強めたことは理解するに困難でない。

單純さ、明瞭さ、正確さへの努力は、文學に於いては、先づその中心點が詩から散文へと移されたことによつて初められた。續いて詩そのものが散文化され、貴族的・手工業的な詩法のあらゆる拘束を無視した所の所謂「散文詩」が現れて來た。この散文詩の創造者が先のホイットマンであり、ヴェルハーレンであるのも興味あることである。

二十世紀の使徒である未來主義者は、この「散文詩」的傾向を更に進めて、彼等の所謂「自由語」を創造した。彼等の「自由語」の特質

としては第一に、テンポの早いこと、第二に力學的であること、第三に感覺的であること（この三つはいづれも相互に聯關してゐる）を擧げることが出來る。彼等は先づ第一にその言葉のテンポを早くする爲に、文章法を破壞し、あらゆる無用なる言葉を除去する。形容詞、副詞、句點はこの意味から除かれ、その代りに名詞の羅列と不定動詞とが好んで用ひられる。また力學的である爲に、一つの形象に停止することなく、種々様々な形象が同時に捉へられ、感覺的である爲に擬聲音や各種の音樂的、數學的符號が用ひられる。未來派のシンタックスの例は左の如くである。（註1）

「地平線＝最も明い太陽の光へ十五角形の影（長さ一米）……十三十の煙十二十三の砲火……」（マリネツテイ Zang Tumb Tumb）

「一發 2/3 笛 吠える聲 抱擁 ツウムツウム 警報……」（同、[illegible]）

感覺的描寫についてはマリネツテイは例へば「汽笛の音」と書かずにいきなり「ssss」と書き、その反響を「ffff」と書き、カンヂユルロは煙と云ふ字を《FUMER》と書いてゐる如きである。

藝術的形式としての未來派の功績は、今までの長つたるい描寫に代へるに、テンポの早い、感覺的な言葉をもつてしたことであるが、同じことは文學以外の藝術についても云ひ得る。そしてこの限りに於いて未來派の形式はプロレタリヤ藝術に多くの影響を與へて來たし、また現在も與へつゝある。

しかし未來派の致命的な弱點は、彼等が唯現代を表面的形式的にしか攝取してゐない所にある。彼等の形象は内面的に何等合理的な、合目的な聯絡、統一を缺いてゐる。從つて未來派の形式は、その外面的明瞭さにも拘はらず、實質的には不明瞭であり、その外面的單純さにも拘らず複雜であり、その外面的正確さにも拘らず實質的には不正確であつて、一般性、大衆性を持ち得ない。

この明瞭さ、單純さ、正確さへの努力は未來派よりも早く現れた立體派の中に見られるが、その觀念的、形而上學的方法の故に、立體派は近代藝術に幾つかの部分的形式的寄與を爲しただけで、遂にこの問題を解決し得なかつた。その時からこの問題の解決は構成派の人々に委ねられ、そして少くとも建築の領域に於いては、彼等は見事に成功してゐる。

構成主義者達が未來主義者と異つて、機械の特質を、その合理性、即ちその正確さ、明瞭さ、單純さの中に見たことは、我々の既に述べた所である。この心理は機械の直接的影響から現れたことは事實であるが、これはまた正確、單純を要求する生産に參與してゐるものゝ日常生活そのものによつても規定されてゐるのである。

それはとも角として、構成派の人々は、先づ第一に藝術の裝飾的傾向に對して宣戰を布告した。航空機や機關車には何等の裝飾もない、しかも彼等は最高の美をもつてゐる、實に實用性こそがすべての美の規範である、」と彼等は主張した。マルクス主義の上に立つソヴエー

トの構成主義者キンスブルグは、すべての時代の建築を、構成的、組織的、裝飾的の三つに分けて、構成的な建築は階級の擡頭期に、組織的なそれは成熟期に、裝飾的なそれは頽廢期に現れることを明かにした(註2)。またイデオロギー的に構成派に近いフランスの建築家コルビュジエは「椅子は腰掛けるためのものであり、電燈は照明の爲のものであり、窓は採光に役立ち、外氣の調節に役立つものであり……家は住む爲に造られる。」と云ふ自明な、しかし忘れられてゐる原理を高く掲げた(註3)。かくて出來るだけ裝飾を少くした、合目的的な、合理的な、明瞭で、正確で、單純な彼等の建築様式が生れて來たのである。

繪畫及び文學の構成派は、建築程多くの結果をもたらされなかつた。それは立體派、未來派に於けるやうに部分的な寄與に過ぎない。しかし此處に於いても亦、その合理的構成と、その同時的描寫(種々の現象を同時に表現すること)と、その物質性の強調(特に繪畫に於いて鐵、コンクリート、硝子等の物質的感覺を強調すること)等々に於いて忘るべからざる仕事を爲した。その他ポスター、ビラ、寫眞等、殊に舞臺藝術と映畫に於いて、構成派は、一般繪畫及び文學に於けるよりも、より多くの結果を得てゐる。構成派は更に產業藝術に進んで行つて、その方面で革命を起してゐる。

繪畫、文學に於いては構成派の精神は、寧ろ新レアリズムと名づけられる藝術形式に傳へられてゐる。繪畫に於いては或時代の傾向に於けるピカソ、ドウラン及び部分的にはレージエ等、文學に於いてはピエール・アンプ、フランツ・ユンク等である。

ピエール・アンプの小說は通常、「ロマン・レポルタージユ」、或は「報告小說」と呼ばれてゐる。彼は自身鐵道從業員で、鐵道の罷業を書いた「軌道」と云ふ小說を發表したが、その形式は、極度の正確さと客觀性とをもつて異彩を放つてゐる。彼はその正確さと、單純さと、客觀性とを同時に表現する爲に、統計や、現實の文書や、數字やを好んで用ひる。この小說の中に左の如き、部分がある。

「百人の線路工夫が、挺やら、鶴嘴やら、シャベルやらをつゝ立てて、列んでやつて來た。十六年勤務して千九百法のレルミネが、常用夫に取りまかれた一時間三十五サンチームの臨時夫の仕事を指揮してゐた。常用夫は初給一箇月九十三法、八十五法手取で、常人或は家族の養老手當として五パーセントは控除されてゐた。うまくいつた連中には、踏切の餘得があつた。彼等の妻が踏切の柵を開閉して、本線にあつては一箇月三十法、支線にあつては十五法を支給された。」

「彼は自分の手帳を出してその例を示した。―四〇一八列車にて午後七時操車場發。フウルヌ着。午前零時十二分。一時間延着。入車信號にて同零時五十分まで停車。一時五十分まで四〇一八列車の操車。二時〇五分再び機關車聯結。(註4)

單純な、テンポの早い、これも亦レポート的な同時的な描寫の例としてはフランツ・ユンクの「赤い一週間」に於ける左の個所を引用す

ることが出來る。

「波止場全體は立ち上つた。町では群集が店に押寄せ、すべての商品を出して、その場で分配した。町全體は立ち上つてゐた。首都では、噂によれば、政府は倒れた。詳細は分らない。港の官廳は何處かに隱れた。しかし今日彼等は探されてゐる。勞働者は××した。下の波止場の××は事件に關與しようとしない。」(註5)

註1　未來派の自由語については神原泰氏の「未來派研究」に負ふ所が多い。
註2　ギンスブルグ「樣式と時代」一二〇頁。
註3　コルビユジエ「建築へ」宮崎謙三氏譯、一一九頁及び以下參照。
註4　ピエール・アンプ「航道」內田傳一氏譯に依る。
註5　マーツア「歐洲に於ける文學とプロレタリアート」(一九二七年)に引用された所に依る。

## 七

プロレタリヤ藝術はこれ等の藝術形式のテンポ、力學、正確さ、單純さを受入れる。しかしプロレタリヤ藝術は、すべての新興階級の藝術と同じやうに、內容的藝術であるが故に、これ等の形式はプロレタリアートの藝術の實踐的目的と云ふ觀點から適度に撰擇され、整理されなければならない。またプロレタリヤ藝術は、本質的に大衆的なものとして、その形式も亦專門家的なものではなくて、大衆に理解されるものでなければならない。かくて未來派の無目的なテンポ、立體派やレポート小說の現實に對する無差別的態度、構成派(建築を除く)の形式主義、及びこれ等の藝術の多くに共通してゐる所のインテリゲンチヤ的難澁さ――これ等のものは我々の側から批判されてあらねばならない。

しかしプロレタリヤ藝術が古い、テンポの遲い、非力學的な形式の中に成長し得ると考へるものがあつたら、それは大きな誤りである。近代的プロレタリアートは工場や種々な無產者的組織の中に働くものとして、當然力學的な、敏捷な、正確な、合理的な、合目的的な感覺と心理とを持たざるを得ない。この敏捷と、力學と、正確と、合理性と、合目的性との最高の形式的表現は、中央で決議されたことが直ちに、正確に、、、、、、の、、に傳へられ、反對に、、、の、、の、、が、直ちに中央部に通ずる所の各國×××の、、の中に現はれてゐるが、それと同じものはまた藝術の形式の中にも入つて來なければならない。

そして實際プロレタリヤ藝術は此の如き形式を作り出しつゝある。ソウエート映畫の力學的な正確な撮影(それはアメリカの所謂高速度映畫とは違ふ)、メイエルホリド劇場や革命劇場のメカニツクな演出、ソウエートのプロレタリヤ畫家、特に「オスト」の人々の明快な彈力ある繪、構成派から出て來たソウエートの合理的な、モニユメンタルな建築、等、等。

文學に於いても同じである。ドイツのベッヘルの小說「$(CHCl:CH)_3As$——レヴイジート、或は唯一の正當な戰爭」は、既にその題名がそれを示してゐる。ドイツ、フランス、ロシヤのプロレタリヤ詩人は、好んで力學的な形式を用ひてゐる。種々な略語や符號が彼等の詩に入つて來たのもその爲である。小說に於いても、例へばセラフイモウイッチの如き年老いた作家までが新しい形式に對する敏感さを示してゐる。そのことは彼の小說「鐵の流れ」の全篇の構成を見、更にその中の左の如き斷片を見れば、うかゞはれる。

「鐵の響、がちや〱と云ふ音、裂ける音、叫び聲……タ、タ、タ、タ……

——何處へ！ 何處へ行くんだ？ 止れ！……

空全體に燃え立つたそれは何だ——火事か、それとも空映か？

——第一中隊、並足！

到る所夜明け前の灰色の中に、著用の鞍、頸輪。避難民、輜重の人々は棍棒を落し、互ひに氣嫌を害ねて、疲れることなく罵り合つてゐる。

……ブーム！ ブーム！……

熱病的に馬具を著け、心棒を打當て、馬を鞭打ち、そして炸音や飛んでゆく車輪と共に、絶え間なくそこを溯しながら、狂ほしく橋の上を通つてゆく。

……トラ、タ、タ、タ、タ……ブーム！……ブーム！

家鴨は餌を漁りに曠野にゆく、女達は絶望的に聲を立てゝゐる……

タ、タ、タ、タ……

砲手は熱病的に挽索の軸に獅子嚙ついてゐる。」

これは敵の襲來を受けた時の恐慌を描いたものであるが、表現派のやうに混亂した無政府主義的な所がなくて正確で而も力學的である。グラトコフの「セメント」の形式も亦合理的で、力學的だ。

「素敵だ。再び——機械と勞働。鬪爭によつて——焰と血によつて贏ひ取られた新しい勞働。素敵だ。

山羊は娘つ子のやうに叫び、子供達と一緒に笑つてゐる。豚小屋のアンモニヤの臭氣。雜草も、雞の散らばつた横丁も。

何故——山羊や、豚や、雄雞がゐるのだらう？ 以前にはそれは命令で嚴重に禁じられてゐたではないか？

コンクリートと石。石炭とセメント。金滓と燒跡。電動機の孔のある頂上。煙突は山よりも高い。數限りない電線の粒。しかもそこに！——百姓の家畜小屋の動物。鬼みたいな若者！ 彼等は田舍の尻尾を振つて引張つて來た、そしてそれは此處で黴のやうに蕃殖してゐるのだ。」

これは市民戰爭に出かけて行つた主人公のグレーブが、久しぶりで荒れた工場に歸つて來た所である。同じことはリベヂンスキイや、フアヂエーエフや、バフメーチエフや、ショローホフの小說についても云ひ得る。

然るに此處に於いても亦、わが國のプロレタリヤ作家はその冷淡さを表はしてゐる。わが國のプロレタリヤ文學は、僅かにその幾人かの作家――葉山嘉樹、岩藤雪夫、德永直、小林多喜二、橋本英吉、立野信之、片岡鐵兵、林房雄、藤森成吉、等に於いて幾らかの新しい形式の試みが爲されてゐるに過ぎない。それもプロレタリヤ的形式としては未だ不十分なものであり、その他の作家達に到つては今尙古い、自然主義的、表現派的、或は新感覺的形式に滿足してゐるものゝやうに見える。このことは文學以外の藝術部門についても云ひ得る。これには勿論わが國の工業化の不徹底や日常生活の非合理性と、わが作家達の多くが古い型のインテリゲンチヤから出て來たと云ふことが原因してゐることは事實である。そしてこの方面に於いてはドイツやアメリカの作家達はもつとよい立場にあると云はなければならない。

此處で一寸云つて置かなければならないのは、所謂アメリカニズムに二つの形式があると云ふことである。即ち一つはメカニズムのアメリカを代表し、一つはモダニズムのアメリカを代表する。前者は工業家、技術者及び勞働者のアメリカであり、後者は商業的、金利生活者的小ブルジョアジーのアメリカである。これを生產的文化形式と消費的文化形式とに區別することも出來る。消費的文化はモダン・ガール、モダン・ボーイ、カフエ、ダンシング・ホール、デパート等によつて、生產文化は工場、大建築、交通機關等によつて代表される。アメリカのモダニズムが、自分よりも工業の後れてゐる "Made in Europe" の、殊に商業的金融的文化の中心である巴里の形式を受けついでゐるのも決して偶然ではない。そして現在少くとも表面上ではこのモダニズムがアメリカを支配してゐるので、眞實にメカニックな形式は、反つてドイツやソウエート聯邦に現れてゐるのは興味ある事實である。

所がわが國のプロレタリヤ藝術の一部にはこの所謂モダニズムの影響がかなりに強い。これも亦わが國藝術家の階級的心理的地位に基因するのである。がとも角もわが藝術家達は意識的にこれ等を克服して、今、眞實にプロレタリヤ的な新しい形式の合理的な探求へとその第一步を勇敢に踏み出すべき時ではないだらうか?

以上はプロレタリヤ藝術の新形式の問題を唯一般的、理論的に解決しようと試みたものであつて、繰返して云ふが、その實踐的解決は藝術家自身の問題で、批評家の問題ではない。

――一九二九、一〇、六――

# モルガン王國論

## その一、米國金融資本の一般的說明

小島精一

### (一) はしがき

モルガン王國論などと言つてもモルガン家の系圖調べや個人的傳記や財產調べ等に沒頭しようとする氣ではない。

たゞ、モルガン王國を中心として米國金融資本の發展過程を考察してみようとするだけである。

米國の金融資本は今や全世界資本の征服者であり、モルガン王國は正に世界資本の最大の指導者となつてゐる。現に戰後の世界資本の行き詰りと崩壞の危機は弗資本によつて――それ故、又モルガン王國によつて救濟され、その指導の下に着々と安定をとりもどし、復興の途を辿ることが出來たのだ。

今後の世界救濟は、弗資本の――それ故、モルガン王國の指導政策如何によつて至大な影響を受けねばならぬ。例へば、世界的金本位の支持は弗資本の寛大な金融政策なくしては直に挫折せざるを得ないであらう。國際貿易は弗資本の寛大な對外貸付けなくしては直に萎縮してしまふであらう。賠償問題の折衝は弗資本の寛大な支拂ひ延期を前提とせずには直に行き詰つてしまふであらう。等々……

かゝる狀勢の際、米國金融資本の發展過程を檢討し、その內的機構を明にし、その產業政策の本質を研究するのは、私自身には、多少の興味を惹かずにはゐない。

×

だが、冗漫な序文は切斷して、直に本論に入らう。

先づ差し當りは、米國金融資本の特性・その組織等の一般的概說から始め、進んでモルガン王國を中心とした發展史の敍述に移るつもりである。

## (2) 金融(マネー)トラスト——「トラストのトラスト」

後に、追々説明するやうに米國では今から約半世紀程前頃から謂ゆる獨占資本期の段階に移り行きつゝあつた。そして一八八〇年代——九〇年代と確實に前進して、本世紀の初頭には全く高度の爛熟期的段階に迄進んでゐた。獨占體は、スタンダード・石油トラストやユー・エス・鋼鐵・トラストや銅や農具や砂糖やタバコや電信・電話や靴や電氣や、更に又、かの厖大な鐵道業や海運業や等々……その他殆どあらゆる重要部門に亘つて確立され、國民大衆は全くその「冷酷な」飽くを知らざる搾取の網の中に「捕り込められてしまつた。」

それで此獨占網を打破しようとして自棄的な國民運動が起つたが、それは結局失敗の繰り返へしに終つた。——とりわけ、最初の十數年間は最も無效果な慘敗に終つたが、それは一つは彼等が獨占的魔王の本體を理解してゐなかつたゝめでもあつた。換言すれば、彼等は個々の產業的獨占體あるを知つて、本獨占網を統括する「トラストのトラスト」あるを充分認識しなかつた。たとへ、漠然と氣付く者はあつても、充分此の全面的統制の內的機構を把握する者は少かつた。否、把握する者はあつても、此の全面的統制の王城めがけて征矢を打ち込む者はなかつた。個々のトラストの破棄を命令する判決は屢々現はれたが、此の全面的トラストには一指も染められなかつた。だからそれは結局無効果に終つた。

此の全面的トラストこそ實に私の當面の主題とする金融トラスト——謂ゆるマネー・トラストであり、モルガン王國こそは此金融トラストの支配を通じて、全產業界にその統制的觸手を擴充させてゐるのである。

然し、遂に暴露の時機が來た。一九一二年に「トラスト掃滅」の森嚴な旗幟を眞向にかざして、凱歌を奏することが出來た民主黨——その首領ウイルソンは徹底的トラスト征伐の最初の企圖として、いやしくも、始めて、此金融王國の徹底的な內情摘發を實行せしめたのである。(ピュージョ委員會の任命。)

これより先き、ウイルソンの發表した宣言書の中には「一の見えざる帝國が民主政治の形式の上に築き上げられ、全國民は冷酷な一大經濟網中に捕り込められてしまつた。」此恐るべき禍根を追求すれば金融トラストの張り廻した蜘蛛手の魔力の作用に外ならない。「凡ゆる獨占の本體こそは金融トラストである。……全產業界は信用網で支配され、その信用組織は強く集中されてゐる。そのために、國民的發展、否吾々の全活動は此少數の支配者に左右されてゐる。そして彼等は個人として假令如何程善良でも、その投資事業の利害を中心に行動しない譯には行かず、従て、必然に經濟的自由を拘束せざるを得ない。これこそ全問題の最大の禍根であつて、いやしくも人民の將來とその眞實の自由とに奉仕せんとする政治家は一大勇猛心を以て此魔城征伐に立

ち向はなければならぬ」……とあつた。

ピュージョ委員會――此官設委員會の報告の中にも「從來産業界の競爭排除として起つた、どんな危險にもまして、遙に危險なのは、これらの少數者の銀行及び工業支配を通しての、信用の統制である。……少數團が相變らず支配を支持する限り、通貨制度を改善して、銀行の資源を大にし得るか否かと言ふ問題の如きは寧ろ末梢的な意義しか持たない。……今日の如く、資金調達と證券大量發賣のあらゆる便宜とが、これらの少數大金融團一味の掌中に把握されてゐては、競爭を勵行することは不可能だ。……彼等はどんなトラストにも増して競爭を徹底的に破壞してしまふ。と言ふのは、彼等こそ、その支配下に屬する各部門内の潛在競爭のその核心を打破するから。……」と言つてゐる。

では如何にして彼等はかゝる絶大な威力を克ち得たのか？　それを語るために、私は一應現代産業金融の構成に觸れておかう。

### (3) 證券制度の役割り

現代産業金融の特性は單にその授與する金額が莫大なだけではなく、それが著しく固定的――長期信用的であることだ。之は言ふ迄もなく現代産業技術――大規模な機械的諸設備の發展の必然の要求に基く。

此長期的な、固定的な、大量信用の要求に順應するために資本家は證券制度を案出し、その巧緻な仕組みによつて、全社會的蓄積を吸收しながら、然も全財團の支配力は飽く迄自己の掌中にしつかと確保するに成功した。株式會社制の史的意義は實に主として此點に觀取されねばならぬ。

換言すれば證券化による資本の動員によつて、

(1)一方には、社會の各方面に分散してゐた少額の資金が集中され、容易に巨大な單一財團として利殖の途に就き得るやうになり、大資本調達の便宜が開けるが、

(2)他方には、かくして集中された全財團の支配權は、も早、個々の、小額所有者から分離して、極く少數の指導的大資本家の掌中に把握されるに到る。小額投資家も、成る程、形式的には株主として企業統御に參與し得るやうではあるが、實際には彼等の位置は、も早、企業の内部所有者と言ふよりは外部債權者――或は産業企業家と言ふよりは、單なる貸附け資本家に引き下げられてしまふ。その代り、彼等は企業の實際の管理に少しも參與せずに、毎期殆ど正則的に利益の配當を享受することが出來る。他方、企業の全管理權は少數の指導的大資本家に委託され、此の少數者こそ現實には專斷的に全財團を統御して行くのである。

かくて、此證券化の發達は小資本家にとつてもその資産の有利な利殖の途を開き、企業の實情を熟知せずとも、又企業の管理に參與せず

とも、企業の利潤を享樂せしめ、又、かく、長期投資として一旦資本を固定化せしめ乍ら、必要の際は、何時でも隨意に、その持分を轉賣して現金に還元する途をさへ打開せしめたが、それと同時に有力な大資本家にとつては散在せる社會的蓄積を吸收して、之を專斷的に行使し、ヨリ遙に有利なる利殖の用具に供する便法となつたのである。

分散せる小資本にはその有利な利殖の機會を開き、それによつて大企業にはその資本調達の途を開き、大資本家には莫大な他人資本に對する專斷的處分權を與へたのである。

上述せる金融トラストの絶大なる威力は、實に此の證券化による他人資本の統制の仕組みに依存するのである。

では、その過程は？

### (4) 證券投資の獨占化

かくて、證券化の發達は大資本調達の便法を打開したが、それが圓滑に利用されるには、そこに適當な專門的仲介者が必要となる。現代金融業者及び證券業者・投機業者等の特殊な一つの役割りが、こゝに與へられねばならぬ。

と言ふのは、工業會社はその大量資金を調達するためには先づ分散し、睡眠せる貨幣を目覺めさせ、之を蒐集せねばならない譯である。

だが、一般世人は財界の實状に慣れず、又投資の選擇能力をも持たないから、適當な專門家がそれを勸誘しない限り、自ら進んで工業企業等に投資することは稀であらう。又會社にしても一々かゝる小額の資金を勸誘して巡廻することは到底その煩勞に堪へぬであらう。そこで必然に證券投資には專門的の仲介業者が發生し、(1)一方にはその專門的知識を一般民衆のために働かせて適宜な投資上の指導者又は受托者となり、(2)他方には工業會社のために纏つた資金の調達上の代辯者となるに到るのである。即ち休息貨幣は此仲介者によつて惰眠から、たたき起され、蒐集されて、適宜な工業企業家の手に引き渡され、その資本的役割を附與されるのである。

こゝで注目すべきは、これらの仲介者中には單に證券發行手續きの事務的仲介を行ふだけの者ばかりではなく、自己の名で、證券投資を實行する者が重要な位置を占めてゐると言ふことである。例へば大銀行、信託會社、保險會社等はその事業の性質上巨額の他人資本を一手に集中して、保管し、然も全く自己一存的に之を適宜の證券に投資して利殖を企圖するのである。

かゝる、巨大な他人資本の貯水池が實際どんな支配的役割りを振つてゐるかを知るには、現に米國で巨額な長期資金が、どんな風に、調達されてゐるかを例證するがいゝだらう。

そこで、次に大工業證券――株券又は債券の――發行方法を簡單に說明してみよう。

例へば、紐育で大工業會社が巨額の證券を發行すると考へよ。大工業會社は一定の條件で此發行事務の一切を專門的な大發行業者――卽ち大投資銀行乃至大銀行に委托する。後者はその一味の同業者達と協働して引受シンヂケート團を組織し、その中最も有力な投資團がそのマネージヤーとなる。こゝで、彼等は工業會社の要求するだけの全證券を直に一手で引き受けて購入する。卽ち彼等はその厖大な資力――それは上記の如く多くは他人資本の集中的保管に過ぎないが――を以て、一先づ、卽座に全證券を成立せしめて、工業會社に所要の資金を供給する。そして、自ら此の證券の獨占的元賣捌者たる位置を把握する。

かうして元賣捌者が引受をなし更に之を公衆に賣捌かうとすると、彼等は地方的發行業者とシンヂケートを組織するか又は下引受をなさしめ、これらの全國的組織を通じて各地方へ分散せしめる。地方的證券問屋は勿論更にその下にある小地方銀行、證券業者又は仲買人等々に適宜に分散せしめる。一番底には多數の小賣業者があつて、直接に小投資家と接觸して、その最後の賣捌きに當る。此の全國的組織網の構成は國によつて一樣ではない。(イ)獨逸では大銀行自身の支店及び出張所網が完備して居り、元賣捌から小賣りまで終始一貫して之に當るのであるが、(ロ)英國では各地の仲買人及び銀行支店等が投資家の註文を引き纏める役目を果し、(ハ)佛國では元引受は特殊の證券銀行が、行ふが、下級の小賣は預金銀行の完備せる全國的組織網に依賴してゐる。(ニ)米國でも從來元引受は主として、投資銀行家(Investment-Bankers)と言ふ特殊の證券投資專門の大金融業者があつたのであるが、近頃では普通の大銀行や信託會社も之に參與するやうになつた。

が、何れにせよ、此證券引受業者はその厖大な資力の必要のために、特殊の獨占的威力を持つて居り、これらの極く少數者は――現在米國では、此元賣捌者たり得る者は僅々數個の大財團に限られてゐる――謂はゞ社會資金の總取締りの位置を占めてゐるのである。

だから、此の特殊の獨占的位置を利用して彼等が、此の引受業務から法外な高率利得を搾取してゐることは言ふ迄もない。

(1)彼等は先づ證券を發行せんとする事業會社から莫大な報酬を強要する。

(2) 彼等はその引き受けた證券を一般市場に賣却する際に、その價格を釣り上げるために、絶大な掛け引き的威力を振ふ。

(3)のみならず、彼等は證券發行の機會を利用して、工業會社の支配權に侵入し、之を繼續的に自己の利殖上の道具化することが出來る。工業會社の側では資金調達上の便宜が彼等との結合を歡迎せしめる。少くも、此侵入の前には多くは無抵抗ならしめる。

だが、かくの如く、投資銀行家が法外な利得を搾取すれば、その搾取額だけは、必然に工業會社の負擔を加重する。それは主として工業會社の資本の「水増し」的膨脹となつて表はれる。が、結局、商品の

價格を釣り上げて消費者の負擔に轉嫁される。

此消費者への轉嫁が充分、成功するためにはなによりも競爭は邪魔物である。競爭排除――獨占化への一つの強力な拍車が、かくて、投資銀行家の側からも加へられる、否、之が多くは結合と獨占とへの最後の仕上げを促進するのだ。

### (5) 米國金融資本の史的役割り

と、言つたからとて、企業の集中と獨占化とは勿論、投資銀行團の強要だけで發展するものではない。

分り切つたことだが、現代技術の發展は大企業化を要求し、生産力を擴大し、必然に、激烈な競爭戰を生む。競爭は單に激化するだけではなく、著しく執拗化する。のみならず、そこには又必然に大規模な、恐慌的混亂が頻發するやうになり、そのためにも競爭戰は愈々激化し、それは又逆に市場の混亂を愈々深刻ならしめる。

此の混戰狀態は、差し當りは、各生産者をして夫々その戰鬪力の強化を努めしめ、それによつて對手を屈服して競爭場裡の勝利者たらんと企圖せしめるであらうが、然し、その結果は劣弱者をこそ沒落せしめはしても、競爭その者は決して緩和せられない。否、存續した少數大企業者間の鬪爭こそはその激度に於て、從前のそれより遙に强烈となる。そして、結局競爭の當事者は何れも夫々疲弊してしまふだけだ。

そこで、彼等の間には必然に競爭その者を排除し、相互に妥協して、平和的に獨占市場を享樂せんとする熱望が生じる。かくて、競爭はそれ自體自壞して、獨占に轉向する。

だから、結合と獨占とへの要求は大企業化が或程度の成熟期に到達すれば、産業當事者間に必然に發生する熱望ではあるが、それは、大金融業者の介入によつて更に著しく强化されるのである。のみならず、その實現には大金融業者の援助に俟つ處甚だ大なのである。

現に米國の資本主義發展史上に於てモルガン財團の特殊の史的役割りは實に此大獨占化の促進と完成とを中心として居り、そして彼の意味が、今日全資本主義的支配權を把握するに到つたのも全く、此獨占化運動の指導的役割りのためである。

此點、例へばヴアンダービルト、グールド、ロックフエラー、ハリマン、ヒル、カーネギイ、シユワツプ、フオード等々……の群雄的大産業家と異つて、特にモルガンに綜括的大指導者――最高の判者の位置が與へられた所以である。

先代モルガンは常に平和的、協調的、結合的政策を提唱し、獨占化の完成に沒頭したが、之は必ずしもモルガン個人の人格的性癖のためではなく、實に一般投資金融業者の聰明なる合理的打算を代表するものに外ならないであらう。なぜと言ふに、

(1) 平和的協調によつて投資金融家の關係せる大産業會社は何れも高率な利潤を享樂することが出來るし、

(2) 投資業者は新結合のためにする證券發行によつて特に莫大な發起

利得を享樂し、產業會社への支配的侵入を一層深化せしめることが出來るから。

實際かゝる發起利得が如何に法外に莫大なものであるかは、後に多くの實例によつて例示することにしよう。

前にも一言したやうに米國の獨占資本期は前世紀の八〇年代から始まり本世紀の初頭に一應その絕頂に到達した。そして、モルガン團その他の大投資金融團の產業界への侵入運動――その作用の結果としての金融業と產業との大規模にして緊密な內的連鎖網の出現も亦必然に之と時期を同じくして居る。例へば‥‥

(1)大金融業者の本據たるウオール街の狼共が始めて產業投資に着眼したのは實に一八七〇年代のスタンダード石油トラストの刺戟によると言はれる。

(2)最初の大產業投資は尨大な鐵道事業の建設とその大結合化に向けられたのだが、然もモルガンが此領域への徹底的侵入――その獨占的結合政策への最初の出發は一八八五年以來のことである。そして、その稍や大規模な成功を克ち得るに到つたのは九〇年代以後のことである。

(3)鐵道に次ぐ、然も、未曾有の大獨占體たる鐵鋼業トラスト化の出現は一九〇一年であり、此領域へモルガン團が侵入したのは一八九八年にフエデラル・スチール會社を創立してカーネギイと對峙した時からである。

(4)その他モルガンの大海運業トラストが成立したのは一九〇二年のことであるし、

(5)電信、電話、農具機械等の注目すべき大トラスト化は何れも世紀の轉換前後のことであり、電氣事業界へは比較的に早くから侵入したが、それも注目すべき大結合體となつたのは一八九二年にジエネラル・エレクトリック會社を創立してからである。

(6)自動車工業の如きは世界大戰後に始めてジエネラル・モータースの支配權を把握したのである。

かく概觀し來ると米國金融資本史の全過程に於て次の一般的結論が抽き出されるであらう。――即ち、今日堂々たる大產業を構成せる諸部門は何れもその創業的時代には純然たる產業企業家の現實の支配の下にあつて、金融業者は殆ど之に關與して居らず、それが、幾多の創業的苦難を經過し、恐慌の激浪に弄ばれながらも、漸く事業の基礎工事が築上され終り、前途の發展の見込みが確實になると始めて金融資本の猛然たる侵入が行はれる。そして侵入の誘因となるものは或は

(イ)劃期的飛躍のための大資本の必要(創業的企業は大抵微小な規模である)か、(ロ)大勢としては極めて有利でありながら、創業期的動搖のために一時的行き詰り(それも主として豫備的資本の不足からくる。創業期には有利なら、有利な程、利潤を擴張のために、再投資

して手持ち遊金に乏しいのを普通とするから）に陥沒してしまつたものを救濟し、再組織するためか、或は（ハ）好況に乘じて擴大された過剰能力を整理し、大結合體を組織して獨占的安定の途を打開せしめるためか等・・・である。

何れにせよ、創業的企業家は、多くは鬪ひ疲れて、その辛苦の結晶を法外な廉價で大金融團に奪取されるか、偶々、一見有利な條件で取引したやうな場合にも、稍や長い眼で見れば、創業期には想像も出來ぬ程莫大な獨占利潤の源泉を大金融團に割安に讓渡したことになるのを普通とする。

而して、此の大金融業的侵入の最初の劃期的躍進期こそ前世紀末から本世紀初頭へかけての十數年間であつた。

### (6) 獨逸金融資本との對比

金融資本化――獨占化の發展に於て米國と對比されるのは獨逸であるが、此兩者の間には多少の相違がある。

(1)先づ金融資本の史的役割りの上で。――即ち米國では上述の如く大金融團の産業統制は既に産業資本が充分確立された後ちに屬するが、獨逸では、それは謂はゞ産業資本の創立期から始まる。それ處ではない。獨逸晩近の大重工業等は殆ど全くその大銀行團の投資によつて始めて確立されたのだ。そこから、大銀行團は、大工業の創業期から、緊密に之と結合し、且つその發展を助長し、又之を強く支配して來た。

然るに、米國では上述の如く、大金融團の産業支配は、産業資本の確立し終へてから十數年後或は二、三十年後のことに屬する。

恐らく、此兩者の相違は兩國の自然的環境の相違に依る處が少くなかつたであらう。と、言ふのは、米國でも獨逸でも産業資本の確立と成長とは急速且つ大規模には行はれたが、米國では、獨逸と異つて、その廣大、豐饒な自然的資源を開發しつゝ、短年月に莫大な資金を蓄積することが出來、從て、獨逸よりも産業資本の自立的發展の可能が大であつたらうから。例へばロックフエラーの石油事業に於ける、カーネギイの鐵鋼業に於ける、ヘーブマイヤの砂糖業に於ける、ヴアンダービルト、グールド、ハリマン、ヒル等の鐵道業に於ける近くはフオードの自動車に於ける如き、何れも初めは微小な資金で出發し乍ら、短年月の間に獨力、驚嘆すべき巨富を蓄積した例證に外ならぬ。

(2)右の事實から、更に大金融業と大工業の爭覇上の相互關係が獨逸と米國とでは、かたり相違するらしい。獨逸では大[illegible]業者は大工業に對して絶大な支配力を把握してゐたことは上述の關係から容易に推察される。が、米國では常に必ずしもさうではないらしい。

成程、モルガン團やキユーン・ロエブ團やナショナル・シチイ銀行

や經育第一國立銀行等の有力な大金融團は多くの大工業に對して、偉大な統制力を持つてはゐるが、他方、彼等は上記の大鐵道王や大工業王等に對しては必ずしも威壓的支配の態度をとることは出來ず、寧ろ逆に後者こそ大金融團の領域へ侵入して、それを支配することが少くなかつたらしい。

換言すれば、米國では大金融團以外にも大鐵道及び大産業の領域に固有の大産業資本家が發生した。そして、彼等は或程度の成長を遂げると、やがて、必然に大金融業の領域にも侵入して行かざるを得ない。と言ふのは、最早自己固有の領域だけでは有利な新投資の機會がなくなり――そしてトラスト化は此の新投資の、機會を減殺することを注意せよ――從て、必然一般的投資の廣き領域への接觸を求めて金融業に侵入してくる。こゝで、彼等は大金融業と結合し、後者の基礎を著しく擴大し、强化し、融合的大金融資本として更に前進する。

かくして、例へば既に一九〇二年にはロックフェラーは十一個の大工業會社と九個の大鐵道を支配する外に、八個の大金融會社に參與してゐたし、ハリマンも三十個の交通業を支配する外に七個の金融會社に參與してゐたし、五十八個の鐵道及び工業會社を支配するデピウも亦九個の金融會社に參與してゐた。

一九〇一年のエコノミストに載せられた次表も亦興味ある此關係の一班を例示するであらう。

| | 鐵道支配 | 同銀行 | 工業トラスト | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| | | 百萬弗 | | |
| (1) スタンダード石油（ロックフェラー）グールト、ハリマン連合團 | 一、九九七 | 八五 | 七四六 | 二、八二八 |
| (2) モルガン團 | 一、六九一 | 一三 | 一、六六七 | 三、[illegible]〇 |
| (3) ヴァンダビルト團 | 七五三 | 二 | 一〇 | 七六五 |
| (4) ペンシルヴァニア鐵道團 | 八七〇 | ― | 二〇 | 八九〇 |
| 計 | 五、三一一 | 一二九 | 二、四六三 | 七、八九三 |

ホブソンも註記してゐるやうに此粗雜な計算に對する主たる興味は當時のトラスト經濟に於ける重點の所在にある。

(3) とりわけ莫大なる鐵道業が遙に他群を拔いて全資本構成上の最大重點をなしてゐることは獨逸の金融資本の構成とは、全く異つた一特性を示すものである。獨逸では、周知の如く此領域は早くから國有化されて居り、從て大資本團の致富の源泉とはなつてゐないから。處が米國では正に此鐵道開發こそ最初の且つ最大な致富の源泉なのであり、此領域の支配者こそ、又他の全領域に向つてその支配權を振ふことが出來たのである。假令、石油業でも、大鐵鋼業でさへも、それだけでは決して全金融資本的支配權を把握するに足らない。たゞ大鐵道業の充分堅固なる統制權を土臺としてのみ、此の覇權は期待され得る。それ故、必然に大資本團の爭覇は此領域に於て最も差し迫つた緊張を示した。私は後章に於て、此爭覇過程を稍や詳しく話さう。

(4)尙ほ、一言附記するならば米國と獨逸とでは大金融團の形體上の相違がある。獨逸では普通の大銀行が謂ゆる兼營銀行として證券投資の領域をも支配してゐるのであるが、米國では、形式的には普通銀行と證券投資銀行家とは一應區別される。例へばモルガン商會とか、キユーン・ロエブ商會とか、ドレキセルとか、リー・ヒッギンソンとか、キッダ・ピーボデイとか……は何れも投資銀行家である。又此外に信託會社や生命保險會社が夫々證券投資家として重要な位置を占めてゐる。が、ナショナル・シチイとか第一國立銀行(紐育)とかは謂ゆる普通銀行で商業金融を主眼とする。

だが、實際は決して、かう明劃に職能が區別されてゐる譯ではない。殊にナショナル・シチー銀行や第一國立銀行の如き有力な普通大銀行も近來は盛んに證券投資に進出してゐるし、又これらの諸領域の機關相互の間には緊密な結合網が敷設されてゐるのだ。

だから、此相違は甚だ末梢的なものである。

## (7) 大金融資本網の構成

ピユージョ委員會の報告によつて米國大金融資本網の構成を概說しておかう。

上述によつて大體知られるやうに

(1) 支配の中心機關は投資銀行である。

(2) が、それは一方に普通大銀行、信託會社、生命保險會社及び諸證券業者と結合して居り、これらの諸機關から投資基金を吸收し、又彼等を通じて證券の販路を確保する。即ち、彼等は社會資金の吸收機關であり、證券發行、分散上の販賣機關でもあり、又證券の大購買者でもある。

(3)他方、大鐵道、大事業會社とも緊密に結合してゐる。そこで證券の大量製造の機會が把握されるのだ。前述の如く、これらの產業會社は大投資銀行家との結合によつて、始めて大資本調達上の便宜を、——證券發行の便宜を確保出來るのだが、投資銀行家側から見れば、此の結合こそ發起利得の源泉となるのである。

かくて、大投資銀行團は謂はゞ同時に證券製造者とも、證券購買者とも結合して居り、一方から安値に買つて、他方で高値に賣り放つ豐富な機會を兩手に確保してゐるのである。

そして此操作を通じて莫大な利得を搾取するのであるが、此の獨占的利得の根源は主として他人資本——巨大な金額に蒐集中された他人資本に外ならないのである。

次の假例は凡そ大金融資本網の作用がどんな過程を通過するものかを想像させるに恰好だらう。

(イ)モルガン商會がその支配下にある紐育・ニユー・ヘヴン鐵道をして社債を發行させる。モルガンは此鐵道の重役會を支配してゐるから、勝手に好都合な發行時機と發行條件とを選擇することが出來る。

(ロ)モルガン商會は之を引受けるための資金をその支配圏中のギャランチイ・トラスト會社から借入れる。

(ハ)かくて引受けた社債は、同じ系統内の生命保險會社へ賣却することが出來る。

(ニ)鐵道會社は此社債でやはりモルガン系のユー・エス鋼鐵トラストから軌條を買ふ。

(ホ)ユー・エス・トラストは同じ系統のジエネラル電氣から電氣と機械を買ふ。後者は前者から鐵材を買ふ。等々……

(ヘ)これらの諸取引に必要な資金は時々モルガン商會から證券を發行してもらふ。

(ト)すべての關係會社はその遊狀資金をモルガン系の諸銀行へ預ける。資金がそこに集中する。これは更に外部征服のためにも用ひられる……。

結局、かゝる莫大な取引上の操作が、も早、實際は同一系統財閥内部の單なる帳簿上の貸借だけに轉化してしまつてゐる。然も、それによつて、全領域の各會社が何れも巨大な獨占利潤を收めてゐるのであるが、之は全くこの厖大な領域を取り圍む外圍から、巨大な搾取が行はれるからに外ならぬ。

即ち鐵道や工業會社は高き獨占價格によつて、銀行は高き貸付利子によつて、證券發行者は高き發行價格によつて。等々々……。

最後に、金融資本網の一鳥瞰圖を引用しておかう。即ち、次頁の圖表は一九二〇年に上院議員ラフオレットが金融トラスト攻撃の資料として使用したもので、中央列にモルガン商會、ナショナル・シチイ銀行、第一國立その他の大金融團が、左翼に大鐵道會社が、右翼に大鐵道と關連せる鐵鋼及び機械會社が配置されて居り、中央から放射する條線によつて金融資本網的連絡が示されてゐる。

吾々は之によつて金融資本網構成の一斑を推察することが出來る。

## (8) モルガン團とキユーン・ロエブ團

全金融資本網の中に覇者的優位を占めてゐるのは、周知の通りモルガン及びその結合團と、ロックフエラー・キユーン・ロエブ結合團とである。

試に此の兩財團の主要領域に於ける對陣を表示すると……

第一　モルガン及びその結合

(イ)　銀行業――紐育第一國立、バンカース・トラスト、ガランチー・トラスト、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チエース・ナショナル等……

(ロ)　鐵道業――、モルガン系、ヒル系諸會社

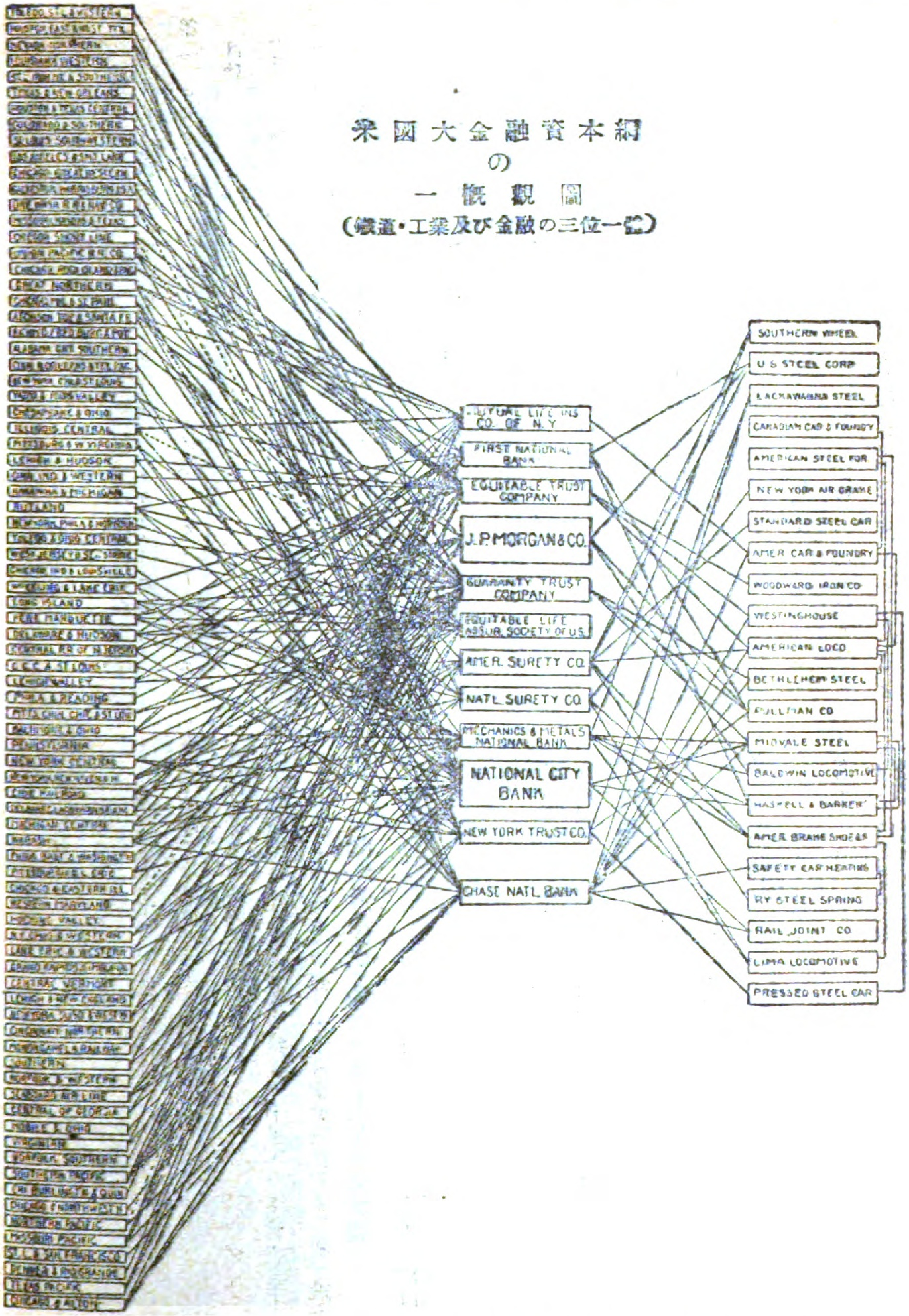
(ハ)　鐵鋼業――ユー・エス・鋼鐵トラスト

(ニ)　石油業――シンクレーア・コンソリデーテッド

(ホ)　銅及諸金屬工業――ガッゲンハイム

# 米國大金融資本網の一概觀圖

（鐵道・工業及び金融の三位一體）




（註）線條の種類は結合關係の深淺を示すものであるが、こゝには、それぞれに立ち入る必要はなからう。

(ヘ)海運業——インタナショナル・マーカンチル・マリン
(ト)化學工業——デユ・ポント
(チ)自動車製造業——ジエネラル・モータース
(リ)電力及電機工業——ゼネラル・エレクトリック、等々……

第二　ロックフエラー——キユーン・ロエブ系——キユーン・ロエブ商會

(イ)金融業——ナショナル・シチー・銀行、インタナショナル・アクセプタンス・バンク等々……
(ロ)鐵道業——ロックフエラー系、グールド系、ハリマン系等…
(ハ)石油業——スタンダード・オイル・トラスト
(ニ)銅及諸金屬工業——アナコンダ
(ホ)海運業——ハリマン團
(ヘ)電力及電機工業——ウエスチングハウス等々……

勿論かうした結合關係は絕えず動搖してゐる。現に戰前にはキユーン・ロエブ系と緊密に提携してゐたと言はれるナショナル・シチイ銀行は最近には寧ろモルガン系と、より親密な結合をなすらしい。

ピユージョ委員會の報告によるとモルガン商會、ナショナル・シチイ銀行、紐育第一國立の三者は緊密に結合して謂はゞ三頭支配をなして居り、此の三頭支配の領域は實に次の如き厖大さに達してゐると言はれる。

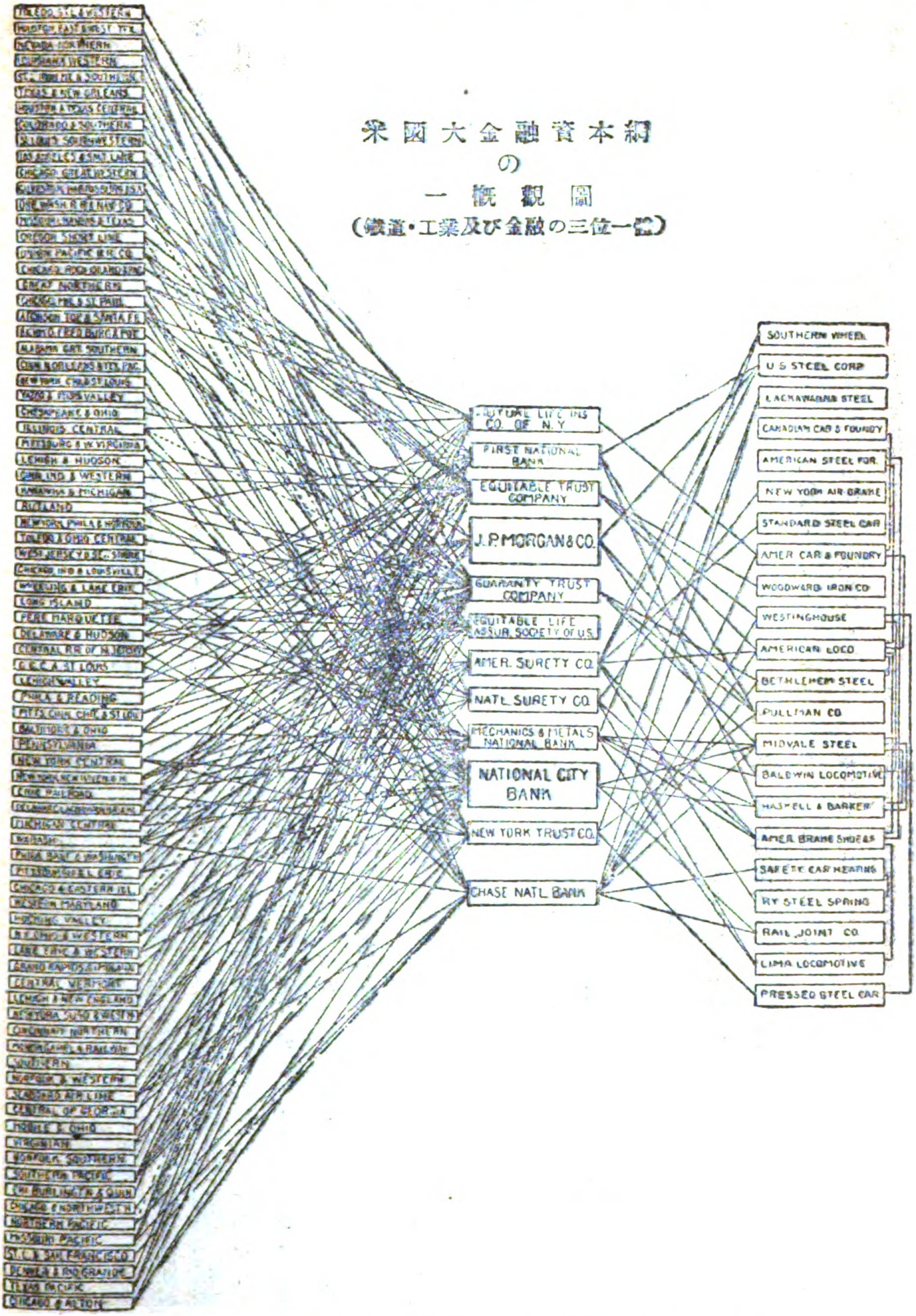
(イ)金融業——三十四會社、重役會議席百十八個、支配する總資産二十七億弗。
(ロ)交通業——三十二會社、議席百〇五個、總資本百十八億弗、鐵道哩數だけで十五萬哩。
(ハ)商工業——二十四會社、議席六十三個　總資本三十三億弗。
(ニ)公益事業——十二會社、議席二十五個、總資本二十二億弗。
(ホ)合計——百十二會社、重役會議席三百四十一個、總資本(又は總資産)二百二十二億弗。

然も之はたゞ主要會社の分だけで、決して全支配を網羅するものではない。

同じ報告によれば主要中心地に於ける此三頭結合體以外の主なる大金融團とその支配關係は次の如く要約される。

(イ)紐育——こゝでは勿論此三頭結合は絕對的支配力を持ち、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チエース・ナショナル、ギャランテー・トラスト、バンカース・トラスト等が彼等に隷屬する。又キユーン・ロエブ商會の如き拮抗的大勢力とは、好んで妥協的政策を用ひ、一定の勢力圏を割讓する代りに、謂ゆる「銀行道德」を遵奉せしめる。
(ロ)フイラデルフイヤ——こゝではモルガンと最も親密なドレキセル商會が支配してゐる。
(ハ)ボストン——ではリー・ヒッキンソンとキッダー・ピーボデイと

米國大金融資本網
の
一概觀圖
（鐵道・工業及び金融の三位一體）




（註）線條の種類は結合關係の深淺を示すものであるが、こゝには、それに立ち入る必要はなからう。

(ヘ)海運業――インタナショナル・マーカンチル・マリン
(ト)化學工業――デユ・ポント
(チ)自動車製造業――ジエネラル・モータース
(リ)電力及電機工業――ゼネラル・エレクトリック、等々……

第二　ロックフエラー――キユーン・ロエブ系――キユーン・ロエブ商會

(イ)金融業――ナショナル・シチー・銀行、インタナショナル・アクセプタンス・バンク等々……
(ロ)鐵道業――ロックフエラー系、グールド系、ハリマン系等…
(ハ)石油業――スタンダード・オイル・トラスト
(ニ)銅及諸金屬工業――アナコンダ
(ホ)海運業――ハリマン團
(ヘ)電力及電機工業――ウエスチングハウス等々……

勿論かうした結合關係は絶えず動搖してゐる。

現に戰前にはキユーン・ロエブ系と緊密に提携してゐたと言はれるナショナル・シチイ銀行は最近には寧ろモルガン系と、より親密な結合をなすらしい。

ピユージョ委員會の報告によるとモルガン商會、ナショナル・シチイ銀行、紐育第一國立の三者は緊密に結合して謂はゞ三頭支配をなして居り、此の三頭支配の領域は實に次の如き厖大さに達してゐると言はれる。

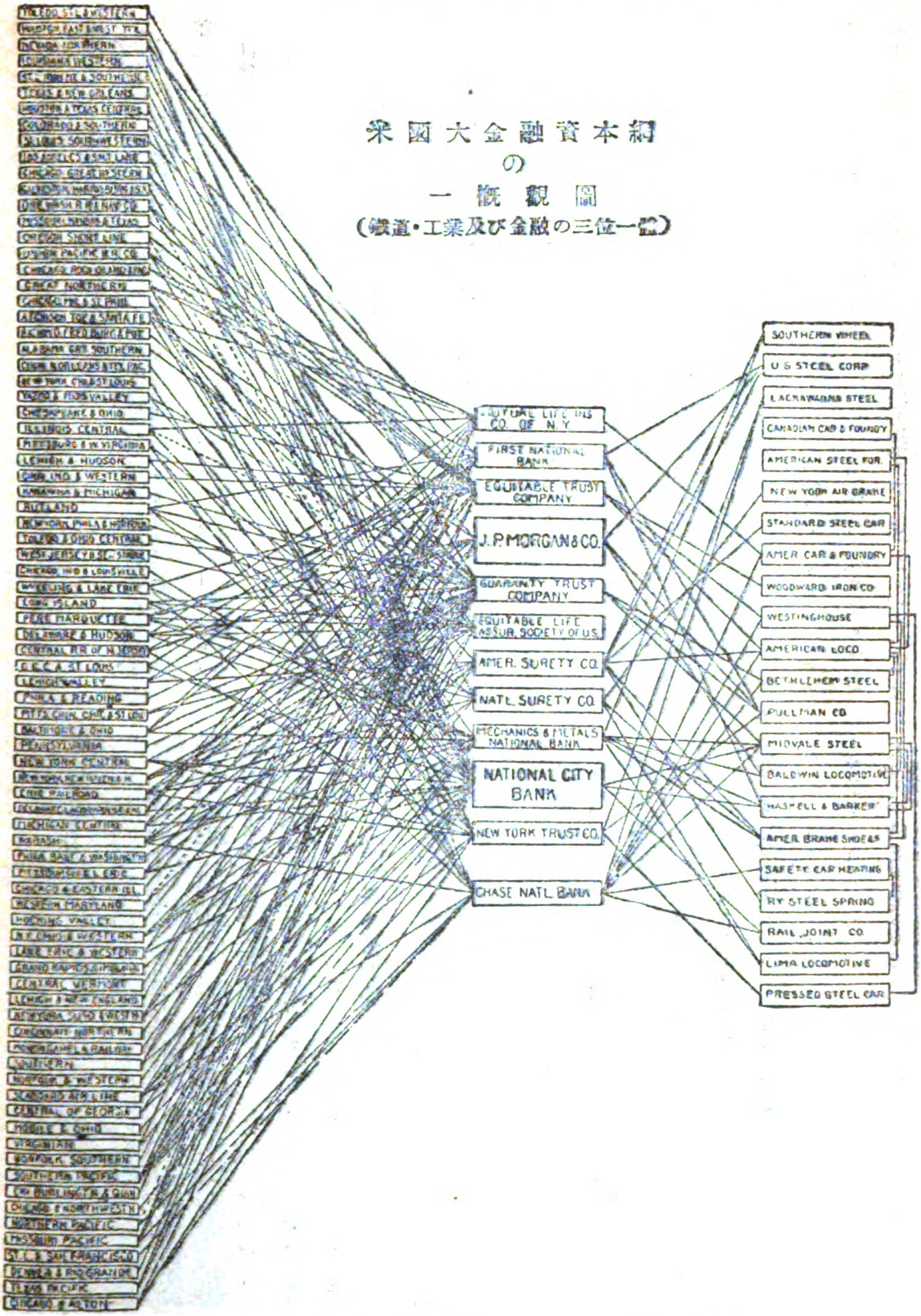
(イ)金融業――三十四會社、重役會議席百十八個、支配する總資産二十七億弗。
(ロ)交通業――三十二會社、議席百〇五個、總資本百十八億弗、鐵道哩數だけで十五萬哩。
(ハ)商工業――二十四會社、議席六十三個　總資本三十三億弗。
(ニ)公益事業――十二會社、議席二十五個、總資本二十二億弗。
(ホ)合計――百十二會社、重役會議席三百四十一個、總資本(又は總資産)二百二十二億弗。

然も之はたゞ主要會社の分だけで、決して全支配を網羅するものではない。

同じ報告によれば主要中心地に於ける此三頭結合體以外の主なる大金融團とその支配關係は次の如く要約される。

(イ)紐育――こゝでは勿論此三頭結合は絶對的支配力を持ち、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チエース・ナショナル、ギヤランチー・トラスト、バンカース・トラスト等が彼等に隷屬する。又キユーン・ロエブ商會の如き拮抗的大勢力とは、好んで妥協的政策を用ひ、一定の勢力圏を割讓する代りに、謂ゆる「銀行道徳」を遵奉せしめる。
(ロ)フイラデルフイヤ――こゝではモルガンと最も親密なドレキセル商會が支配してゐる。
(ハ)ボストン――ではリー・ヒッキンソンとキッダー・ピーボデイと

# 米國大金融資本網の一概觀圖
(鐵道・工業及び金融の三位一體)




(註) 線條の種類は結合關係の深淺を示すものであるが、こゝには、それに立ち入る必要はなからう。

(ヘ) 海運業――インタナショナル・マーカンチル・マリン
(ト) 化學工業――デュ・ポント
(チ) 自動車製造業――ジエネラル・モータース
(リ) 電力及電機工業――ゼネラル・エレクトリック、等々……

第二　ロックフエラー――キューン・ロエブ系――キューン・ロエブ商會

(イ) 金融業――ナショナル・シチー・銀行、インタナショナル・アクセプタンス・バンク等々……
(ロ) 鐵道業――ロックフエラー系、グールド系、ハリマン系等……
(ハ) 石油業――スタンダード・オイル・トラスト
(ニ) 銅及諸金屬工業――アナコンダ
(ホ) 海運業――ハリマン團
(ヘ) 電力及電機工業――ウエスチング・ハウス等々……

勿論かうした結合關係は絶えず動揺してゐる。

現に戰前にはキューン・ロエブ系と緊密に提携してゐたと言はれるナショナル・シチイ銀行は最近には寧ろモルガン系と、より親密な結合をなすらしい。

ピユージョ委員會の報告によるとモルガン商會、ナショナル・シチイ銀行、紐育第一國立の三者は緊密に結合して謂はゞ三頭支配をなして居り、此の三頭支配の領域は實に次の如き厖大さに達してゐると言はれる。

(イ)金融業――三十四會社、重役會議席百十八個、支配する總資産二十七億弗。
(ロ)交通業――三十二會社、議席百〇五個、總資本百十八億弗、鐵道哩數だけで十五萬哩。
(ハ)商工業――二十四會社、議席六十三個　總資本三十三億弗。
(ニ)公益事業――十二會社、議席二十五個、總資本二十二億弗。
(ホ)合計――百十二會社、重役會議席三百四十一個、總資本（又は總資産）二百二十二億弗。

然も之はたゞ主要會社の分だけで、決して全支配を網羅するものではない。

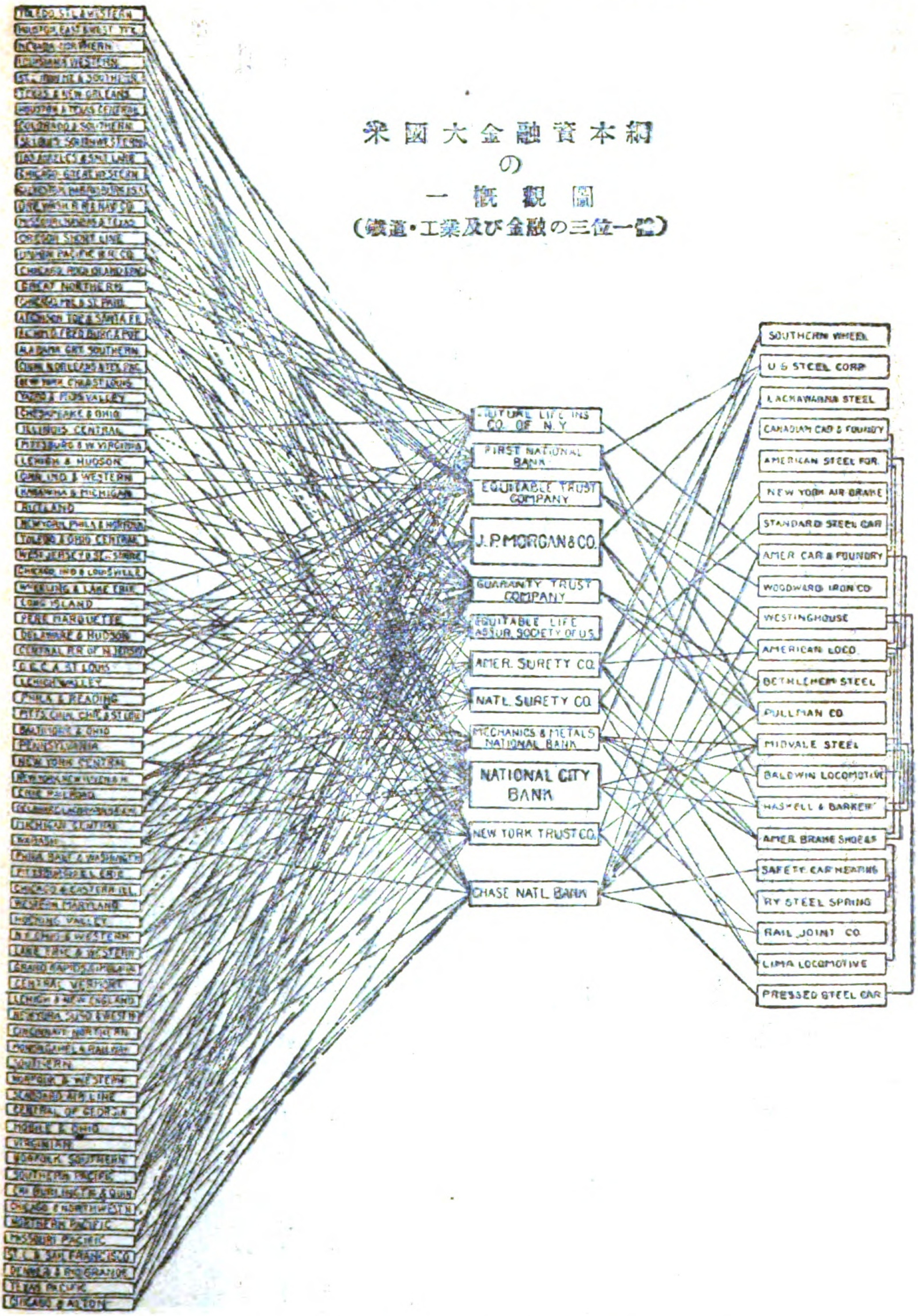
同じ報告によれば主要中心地に於ける此三頭結合體以外の主なる大金融團とその支配關係は次の如く要約される。

(イ)紐育――こゝでは勿論此三頭結合は絶對的支配力を持ち、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チエース・ナショナル、ギャランティー・トラスト、バンカース・トラスト等が彼等に隷屬する。又キューン・ロエブ商會の如き拮抗的大勢力とは、好んで妥協的政策を用ひ、一定の勢力圏を割讓する代りに、謂ゆる「銀行道徳」を遵奉せしめる。

(ロ)フイラデルフイヤ――こゝではモルガンと最も親密なドレキセル商會が支配してゐる。

(ハ)ボストン――ではリー・ヒッキンソンとキッダー・ピーボデイと

米國大金融資本網の一概觀圖
（鐵道・工業及び金融の三位一體）




（註）線條の種類は結合關係の深淺を示すものであるが、こゝには、それに立ち入る必要はなからう。

(へ) 海運業——インタナショナル・マーカンチル・マリン
(ト) 化學工業——デュ・ポント
(チ) 自動車製造業——ジエネラル・モータース
(リ) 電力及電機工業——ゼネラル・エレクトリック、等々……

第二　ロックフエラー——キューン・ロエブ系——キューン・ロエブ商會

(イ) 金融業——ナショナル・シチー・銀行、インタナショナル・アクセプタンス・バンク等々……
(ロ) 鐵道業——ロックフエラー系、グールド系、ハリマン系等……
(ハ) 石油業——スタンダード・オイル・トラスト
(ニ) 銅及諸金屬工業——アナコンダ
(ホ) 海運業——ハリマン團
(へ) 電力及電機工業——ウエスチングハウス等々……

勿論かうした結合關係は絕えず動搖してゐる。現に戰前にはキューン・ロエブ系と緊密に提携してゐたと言はれるナショナル・シチイ銀行は最近には寧ろモルガン系と、より親密な結合をなすらしい。

ピュージョ委員會の報告によるとモルガン商會、ナショナル・シチイ銀行、紐育第一國立の三者は緊密に結合して謂はゞ三頭支配をなして居り、此の三頭支配の領域は實に次の如き厖大さに達してゐると言はれる。

(イ)金融業——三十四會社、重役會議席百十八個、支配する總資產二十七億弗。
(ロ)交通業——三十二會社、議席百〇五個、總資本百十八億弗、鐵道哩數だけで十五萬哩。
(ハ)商工業——二十四會社、議席六十三個、總資本三十三億弗。
(ニ)公益事業——十二會社、議席二十五個、總資本二十二億弗。
(ホ)合計——百十二會社、重役會議席三百四十一個、總資本（又は總資產）二百二十二億弗。

然も之はたゞ主要會社の分だけで、決して全支配を網羅するものではない。

同じ報告によれば主要中心地に於ける此三頭結合體以外の主なる大金融團とその支配關係は次の如く要約される。

(イ)紐育——こゝでは勿論此三頭結合は絕對的支配力を持ち、ナショナル・バンク・オブ・コンマース、チエース・ナショナル、ギヤランティー・トラスト、バンカース・トラスト等が彼等に隷屬する。又キューン・ロエブ商會の如き拮抗的大勢力とは、好んで妥協的政策を用ひ、一定の勢力圈を割讓する代りに、謂ゆる「銀行道德」を遵奉せしめる。
(ロ)フイラデルフイヤ——こゝではモルガンと最も親密なドレキセル商會が支配してゐる。
(ハ)ボストン——ではリー・ヒッキンソンとキッダー・ピーボデイと

の二大國際銀行家がある。國立銀行ではボストン第一國立とナショナル・ショーマット銀行とが、支配的だが、何れも三頭支配の領域内に屬してゐる。

（ニ）シカゴ——第一國立、イリノイス・トラスト・エンド・セーヴィングス、コンチネンタル・エンド・コンマーシアル等の有力團が支配に屬する。等々……。

かくして、全國的なる獨占金融網が組織されてゐるのだ。

### (9) 金融的支配の便法としての「持株」

最後にかゝる大結合網を構成する現實の手段は主として持株、株式交換、重役交換等である。米國では「證券資本主義」は著しく發達し、その結果大資本家達は少額の資本で厖大な財團を支配する處の幾多の巧妙な方法を案出したのだ。

例へば、株式の種類を幾種かに分けて、その中特殊の株式だけに重役選擧權を限定するが如き、又は白紙委任狀で議決權の行使を豫め特定の代理人に一任する方法（謂ゆる Voting trust）の如き、——何れも此の集中的支配を強く促進するものである。

又最近盛んに論議される株式分散の傾向こそは少數大資本團の統制權を強化する效果を持つてゐる。と、言ふのは多數の小株主に投票權が分散してゐる場合には、大株主は、容易に反對派の陣營を攪亂して、その支配力を確立することが出來るであらうから。

かくて、或會社の支配權を把握するには、も早、決して總株數の過半を所有するを要せず、僅に投票權株の一五%乃至二〇%位で充分であると言はれる。然も、それも全株式に對してではなくして、投票權付きの特殊株式に對してゞあるから、全體に對する割合は實に僅少ですむのである。

更に進んで持株の支配はそれからそれへと實に數重的に擴延されてゐることを忘れてはならぬ。謂ゆるピラミッド型支配によつて、實に莫大な全系統が容易に統制されるのである。例へばロック・アイランド鐵道系では此數重的支配によつて首腦的親會社は百五十個の大會社、その總資本十五億弗を支配してゐるが、此全體系の最後の統制權者は僅に二千五百萬弗の投資をなすに止まつてゐる。

又アトランチック・コースト・ライン系では僅に五百萬弗の持株で七億二千五百萬弗が支配されてゐる。等々……。

尚ほ、株式の相互交換等の仕組みが、此の支配力を一層擴大せしめることは言ふまでもない。

×

さて、以上の要約的な説明で米國金融資本の一般的概念を與へ得たこととして、私は、これから愈々モルガン王國の發達史に筆を移さう。

（つゞく）

# 減俸問題の教訓

## ——官吏の團結的行動について——

末弘嚴太郎

減俸案は輿論の攻撃と官吏の反抗とに敵し兼ねて終に撤回された。最早かれこれ案そのものゝ是非を論議すべき時機は過ぎ去つたやうである。けれども今回の事件に際して勃發した官吏の反抗的行動が吾々に教へ與へてくれたものゝ中には到底單なる一時的のものとして看逃がし難い極めて貴重なものゝ存することを忘れることが出來ない。

今回の事件は吾々に色々のことを教へてくれた。特に政黨政治の下に於ける官吏の地位の何たるかゞ現實の鏡を通して極めて明瞭に吾々に示されたこと及び官吏制度の改革が吾國に於ても現實問題として大に考へられねばならぬことを痛感せしめられたことは其中最も重要な事柄であつて、此等の點に關して此際多少の批評的意見を述べて置くことは將來の爲め大に意義あることゝ考へる。

從來一般の考へ方によると、官吏はすべて光榮ある國家の機關であり國民の儀表である、官吏は勞働者その他一般の給料生活者のやうに賃銀を對價として有償的に勞働を供給するものではない、彼等は國民の義務として特に選ばれて國務を分掌し以て國家公共に奉仕する、無論國家は彼等に向つて其生活を保障し官吏としての體面を整へるに必要な費用を支給する、けれどもそれは飽くまでも彼等勞働の對價として考へらるべきものではなくして賞與支給乃至恩賞である、從つて「武士は食はねど高楊子」は今の官吏にも當てはまる大切な戒しめであつて、俸給その他物質的問題の爲めに要求的態度をとるが如きは彼等の最も潔しとせざるべき事柄である。又今まで一般の考へ方によると官吏は上大臣より下屬僚に至るまですべて國務を分掌して國家公共に奉仕する同一種類のものである。彼等の間に上級下級監督被監督の關係はあるとしても資本家對勞働者の關係に於けるが如き使用被用の關係はない、官吏はすべて上下の別なく心を一にして奉公すべきものとするのが大臣の教へでもあり又下僚の心得でもある。言はゞ封建時代の役

人思想がそのまゝ今日まで續き行はれてゐるのである。

けれども、社會の現實は既に〳〵此傳統的思想を裏切つて居る。その裏切つてゐると言ふ事實をマザ〳〵と吾々の眼前に曝露してくれたのが實に今回の事件である。封建的勢力による政治が沒落して、政黨政治の名の下に資本家的支配が確立するに伴ひ「政治」と「行政」との漸次に分離してゆく傾向は極めて顯著である。「政治」は專ら政治家等の獨占する所となり「行政」は政治の手段として政治的に利用される道具となつた。政治家は自ら行政の內容に付いて殆ど何等の專門的智識と經驗とをもつてゐない。それは恰も資本家が專ら利潤を追ふことのみを知つて自ら其經營する企業の內容に關して何等の技術的智識をもつてゐないのと同じである。此故に政治せむとする政治家達は——丁度資本家等が「技師」を使ふと同じやうに——高級の行政官吏を使用し、又——資本家等が勞働者を使用すると同じやうに——多數の下級官吏を使用する。而して彼等は彼等政治の必要さへあれば唯其必要の爲めのみに使用人たる官吏を勝手に任免することを辭しない。殊に彼等の政治的利害關係に直接する官吏例へば地方長官、利權に關係多き各省次官並に局長等は彼等の最も無遠慮に任免を敢てする種類の官吏であつて、而かも其事たる事態の性質上極めて當然の現象に外ならないのである。官吏は如何に忠實に其職責を盡してゐても一旦政治家の政治的利益を侵犯する限り直に免職される、如何に永年其職に在らうとも大臣にはなれない。成程官吏の內或る者は時々勅選議員その他の名義で政治家の間に拾はれてゆく。しかしそれは恰も資本家等が時たま技師其他高級使用人の或る者を勞働階級から引き拔いて彼等の仲間に拾ひ上げるのと同じ現象に過ぎないのであつて、其故を以て政治家たる大臣其他政務官と次官以下の行政官吏とを同一範疇に屬するものと考へるのは絕對に誤りである。

此現象は最近の政治事情が明に吾々に敎ふる所であつて何人も否定し得ない明々白々たる事實である。而かも封建的官吏思想に捉はれた人々は此爭ふべからざる事實をありのまゝに認めやうとしない。自ら政治家等の「賃金勞働者」たるに過ぎない地位に陷つて居る官吏その人すら或は傳統への妄信の爲めに又或は現實曝露によつて自己の、威嚴（？）を傷けられることを恐れるが爲めに此明々白々たる事實を認めやうとしない。そうして空に自ら官吏たるの光榮を胸中に畫きつゝ政治家の酷使と搾取とに甘じ、あわよくば政治家等のお目に止まつて彼等の陣營に拾ひ上げられやう、それが多數の役人によつて畫かれてゐる夢である。

しかしながら、かくの如き「行政」の「政治」への完全なる隷屬は一面に於て官吏それ自身の地位を不安ならしむるものたるのみならず他面に於ては國民に對して良き行政を保障することの妨げを爲してゐると言ふ事實を看逃がしてはならない。政治的利害關係に根據を置く理由なき官吏の交迭は、先づ第一に行政の中に政黨的偏頗を導入する機務を成すものである、第二には特殊の技能と熟錬とによつてのみ圖

満に運用せらるべき行政を不完全なる「素人行政」によつて蹂躙せしめる原因を成すものである、而して第三には政府の交迭毎に起る所謂「政策」の變更によつて行政方針に無意味な變更を與へる。そうして其間に起る努力と費用の浪費の著しきものあるを考ふるとき、吾々は吾々國民の日常生活に最も直接の關係を有する行政が政治によつて完全に蹂躙せられつゝある現狀を此儘看過するを得ない。吾々國民の福祉の爲めに「行政」を「政治」の外に獨立せしめることを要求せざるを得ない。

然らば其方策は何か？　其一は法律によつて行政の獨立性を保障することであり、其二は行政官吏自らの團結力による獨立性の確保である。現に司法官は裁判所構成法によつて其地位を保障されてゐる。此故に狹義の行政事務中司法事務に政治の侵犯を免れて完全に其獨立性を保持してゐる。そうして吾々國民はこれによつて如何に多くの幸福が吾々の爲めに保障されてゐるかの事實を明に知つてゐる。又吾々は事物の性質上最も政治の侵犯から除外されねばならない學問研究の自由が大學教授の團結的行動によつて或る程度まで保障されてゐると言ふ事實を無視し得ない。成程大學も最近に於ては――殊に思想問題に關聯して――或程度まで政治の侵犯を許して居る。けれども大學教授の任免が兎も角事實上大學そのものゝ自治に任されてゐると言ふ事實及び之によつて大學教授の研究及び教授の自由が可成りの程度まで保障されてゐると言ふ事實は何人も――「大學の顚[illegible]」を高唱される人々も――之を否認し得ないであらう。かう考へて見ると法律により若くは官吏自らの團結によつて「政治」の「行政」に對する侵犯を防ぐことは可成りの程度まで其目的を達し得るのであつて、之によつて官吏自らの地位を保障し得るのみならず、國民をして政黨「政治」の弊害より免れしめ得べき効果の相當著しきものがあると言ふ事實を看逃がし難いのである。

此故に私は一面に於ては獨り司法官のみならず一般行政官吏に向つて何等か其地位を保障すべき法制を制定して官吏の地位が單なる政治的理由の故を以て濫りに犯されることのないやうにする必要が大にあると確信する。又他の一面に於ては官吏自らの團結の力によつて政治の不當なる侵犯に對して自らを防禦することが彼等自らの爲めには勿論國民一般の福祉の爲めにも極めて有意義なることを確信するものである。

無論行政官吏に對する地位の保障は他の一面に於て惡い意味に於ける官僚主義を再生せしむべき原因となる、そうして又官吏の沈滞を誘發すべき原因となるであらう。此故に官吏の地位を保障して政治の不當なる侵犯を防ぐべき方策を考へる吾々は同時に官僚主義の再生及び官吏の沈滞を防止すべき方策を考慮する必要がある。それには現に司法官の制度上有する停年制、大學教授の事實上もつてゐる停年制の如きも或意味に於て沈滞防止の效果あるものと考へることが出來やう。しかしながら理想的に考へるならば吾々は更に一歩を進めて[illegible]

自らの間に嚴格なる自治的制裁の制度の確立せらるべきことを要求したいのであつて、此制度が有效に且公正に運用されさへすれば「行政」を「政治」の不當なる侵犯から防禦することが出來る、そうして國民の爲めにも能率良き公正なる永續的行政を保障することが出來るのであつて、吾々は一面自己の地位の安全を要求する官吏が同時に此意味に於ける自治的制裁の制度を確立せむことを要望して已まないものである。

今回の減俸問題に關聯して司法官は團結的行動を示した。世の中には之を非難して最も高尚なるべき司法官が勞働者の同盟罷業乃至怠業に類する態度をとることの不可なる所以を説くものが少くないやうである。けれども、現在の如く法律の制定が專ら政黨政治家によつて獨占されて居る限り法律の制定によつて官吏の地位保障を實現することは事實殆ど不可能に近い。官吏は自らの利益の爲めに、否進んでは國民に向つて良き「行政」を保障する爲めに、彼等をしてブルジョア・デモクラシー的政黨政治の危害より免れしむる爲めに宜しく團結すべきである。そうして「行政」をして「政治」の不當なる侵犯より免れしめることこそ官吏一般の責任でなければならない。かくして最も善き意味に於ける新官僚主義の確立されることが政黨政治の危害より吾々國民を救ふべき最良の方策たることを私は確信するものである。其意味に於て私は今回減俸案の提出によつて政黨政治の下に於ける官吏の地位の何たるかを事實に就いて教へてくれた現內閣に對して感謝の意を表したい、又此機會に於て官吏團結の威力と意義とを示してくれた司法官諸君に對して敬意を表したい。そうして一般の行政官吏殊に內務系統の官吏に對して眞面目に此問題を考へて欲しいと言ふ切なる希望を述べて此稿を終はるものである。

# 政界展望台

馬場恒吾

## 犬養車中談

犬養毅氏を政友會が總裁としたのは確かに成功だ。あの車中談だけでも總裁の價値はある。

田中義一總裁も汽車の中では新聞記者を相手によく喋つた。其尻尾を捉へられて、弱はつた例もある。それからは黨の幹部に、車中談の原稿を拵しらへて貰つたと傳へられた。さうなると紋切型になつて、少しも面白くなくなつた。

濱口首相の車中談は謹嚴そのものであるが故に面白くない。別に非難すべき點もないが、これはと思ふ點もない。

其所に行くと犬養のは天馬空を行く如しだ。傍如無人、思つた儘をブッ付けて、好い氣持に笑つて居る。聞く者も、讀む者も同じやうにいゝ氣持ちになる。

總裁になつて發表した政策か。あれは南無妙法蓮華經のお題目みたやうなものさ。人も判らぬだらうが、實は自分にも判らぬのだと他人の事みたやうに云つて退ける。それが正直な處だ。

此不景氣に解散は誰れでも厭さ。解散を望んでゐるのは安達と無產黨位のものだらうと、これも亦本音を吐いてゐる。實際の事情を聞いて見ると、政府は解散すると決心してゐる。それなら、政府與黨は解散を希望してゐるかと云へば、苟くも代議士になつてゐるもので、解散を希望するものは一人もない。尤も選擧運動費を多く集めて、其大部分を殘しておかうと云ふ者は別にある。併し今の緊縮時代にさう澤山の運動費は出來ないと見るときは、それらも亦解散忌避の方へ傾く。だから解散を厭がる空氣は野黨と與黨に共通してゐる。

代議士以外に解散を望むものは前の選擧に落選したもの、まだ代議士になつて居らず、これから代議士にならんと欲してゐるものである。併しそれらは實際の政治を院外から掛際をするのみだ。

政友會が解散を避けやうとすれば、それはいくらも方法はある。濱口內閣の就任の日がまだ淺く、內閣としての可否を云ふべき時期でない。それ故に不信任案は提出せぬと云へば、政府から強いて不信任案

提出を催促する譯けに行かぬ。其代りに政府與黨が内閣信任案を提出して、政友會をして反對投票をなさしめる手はある。其時、政友會代議士が百名許り機會を見て議場を出れば、これも亦解散除けになる。併し如何に皮肉な犬養氏でも其所迄は行き得ないであらう。

其上に政友會が政府提出の豫算案に贊成する可能性がある。元より贊成する迄には散々に毒づくではあらう。併し元來政友會は積極政策だ。何も仕度い、彼も仕度いと思つてゐる。だけれども衆議院には豫算を削る權利はあつても、新たな費用を提議する權利はない。所謂發議權がないのだ。だから已むを得ず、この切り詰めた豫算案に贊成すると云ふのである。政府の方で協贊して與れと云つて、同時に協贊したのは怪しからんとは云へまい。

兎も角も、今迄政治家の車中談と云へば、何日でも他所行きの議論ばかりしてゐたのに、犬養の如く赤裸々に眞實のことを云つて了うのは心持ちがよい。政戰五十年、隨分人を喰つた丈けの効能はある。虛僞より眞實へ。それは政友會を更生せしめるのみならず、日本の政治を更生せしめる。

處ろで犬養氏は今年七十五歲だ。この老人の力に依らなければ日本の政治の更生出來ないとすると、日本が如何に老いたるかが判る。犬養の皮肉よりは、其所に吾々が深く考へさせられる點がある。

× × × ×

以上は彼れの車中談に對する批評である。政友會總裁として全面的な批評は別だ。車中談で新機軸を出した彼れが、政黨統率の上に新機軸を出すか否か。それはまだ判らない。青森に於ける彼れの演説は紋切型であつた。

今日迄の所では、彼れは田中總裁が殘した遺產の上におとなしく乘つてゐる丈けだ。今日若し犬養内閣が出來るならば、床次、鈴木、高橋、久原などゝ云ふ顏振れが入るであらう。さうすれば、それは田中内閣の延長である。世人が犬養に期待する事は田中が行くであらう迄を行くのではなくして、過去五十年間藩閥、軍閥、官僚に向つて戰つた所の、その意氣で新しく行く道を開拓する事だ。舊い政治の型を擲つて、新らしき政治の型を作る事だ。それが出來るや否やは問題でない。さうする意志がありや、否やすら未だ判らない。

## 濱口内閣の鬼門

濱口内閣が官吏減俸を提唱したとき、下級官吏の騒ぐのは無理もないとした、樞密顧問官が反對を唱へたと云ふを聞いて、厭になつた。年に六七千圓を頂戴し、然かも極めて閑な役目であつても、減俸には反對らしい。

減俸案を早く引込めたからよいやうなものゝ、之を飽くまでも斷行しようとしたら、樞密院はどんな意地悪るき復仇をしたかも判らない。現に民政黨の先代たる憲政會の若槻内閣は樞密院の無理難題で潰れた。

それは無理難題であつた。昭和二年の春、若槻內閣は臺灣銀行救濟の勅令案を樞密院に掛けた。若槻首相は之を否決されては、日本の財界は大混亂になる。內閣は其職に止まり得ぬと豫告した。樞密院は議會を召集せよと云ふ。若槻は議會を召集する時間がない。財界は二週間待つ力がないと云つた。然るに樞密院は平氣で否決した。內閣は辭職した。銀行取り付けが起つた。それでも樞密院は責任のないやうな顏をしてゐた。今でもしてゐる。

若槻內閣の功罪は別論だが、其功としては樞密院が如何に暴威を振ふかを曝露した點が數へられる。

樞密院は憲政會內閣のみならず、政友會內閣にも祟つた。不戰條約問題がそれである。併し樞密院は憲政會內閣よりは政友會內閣の方に好意を示した。それには云ふに云はれない理由があつた。

今濱口內閣の最も頭を惱ましてゐるのは樞密院問題である。樞密顧問二名を補充しなければならず、惡くすると其上二名を増員しなければならぬ。其人選が惡るければ樞密院の逆鱗に觸れる。すると後の祟りが恐い。

樞密院がこのやうな恐ろしき存在になつたには歷史がある。が加藤高明伯が總理大臣であつた頃から、西園寺公の意見で、內閣が二つあつてはならぬ。樞密院をして內閣以上の權力を振はしめない爲めに、樞密院の貫祿を段々下げる。高等法制局程度にする。それには議長に大政治家を連れて來てはならぬと、此方針に從つて、憲政會內閣は議長候補としての山本權兵衞伯、淸浦圭吾子などを忌避して、學者肌の穗積陳重男、倉富勇三郎氏を議長にした。

所ろが西園寺公の意見も近頃變つた。かうして樞密院の貫祿を下げても、樞密院の權限は下らぬ。そして其權限は古參の樞密顧問に依つて振り回はされる。現在に於ては伊東巳代治伯、それと共鳴する平沼騏一郎男に對抗し得る顧問官がない。政府は伊東伯の一顰一笑を視はなければならない。それでは困ると云ふのである。

その弊害を直さん爲めには、伊東、平沼兩氏を壓へ得る人を入れねばならぬ。そこで若槻禮次郎氏、山本達雄男に樞密院入りを薦める者も出て來た。だが此等の人々は樞密院に入る事を好まぬ。それ故に樞密院をどうするかと云ふ事が、濱口內閣を少なからず惱ましてゐる。

此際、政府は總選擧を行つて、衆議院に絕對多數を占め、其威力で樞密院を改革せよと云ふ說がある。しかしさうした威力が果して樞密院を攻め落すに足りるか否かそれが疑問である。

政友會も原敬、橫田千之助時代には樞密院改革に熱心であつた。今若し假りに犬養の率ゆる政友會が、樞密院改革に關しては濱口內閣を援助すると申出でたならば、政府は果して何うするであらう。揃し拵ゆしで、結局何うにもなし得ないで濟むのではあるまいか。

## 解散の存在理由

議會解散に關する一つの迷信がある。解散さへすれば政治がよくな

ると云ふ考へがそれだ。選擧が政策の競走でなくして、金の競走である今日、吾々は選擧を愛好しない。選擧の金が如何に政治腐敗の原因になつてゐるかを見よ。此事實を前にして解散奬勵の議論をするものゝ氣が知れない。

民政黨は比較的よき黨派だ。それをして議會に多數を占めさし度いと云ふ輿論の意向も諒とせられる。だけれどもそれは比較的だ。彼等だつて選擧には幾百萬かの金を作る。無産黨はそれに對抗する金を作り得ない。金で負けたのを、政策で負けたかの如く見られるのが癪だ。

明治時代の藩閥政治家は無暗みに議會を解散した。松方、伊藤、山縣などがそれである。解散は彼等の武器であつた。彼等は其武器を振回はして、藩閥の勢力を不自然に永く維持したのである。若し彼等に解散と云ふ武器がなく、從つて政府は否でも應でも、衆議院の云ふ事に從はせられたなら、日本の立憲政治は少くとも二三十年を一飛びに進歩したであらう。佛蘭西や米國の如き解散のない國に於て、憲政が日本より後れてゐるとは云へない。彼等は人民を主とし政府を從とする。解散謳歌は政府が主、人民が從と云ふ所の、封建思想の殘滓である。

政策が行へない爲めに解散すると云ふならば、尙恕すべき點がある。政策は差支なく行へる。だが解散の爲めに解散すると云ふのだから、吾々は解散の存在理由を考へさせられる。

川育ちは川で溺れる。安達内相は選擧の神樣と云はれるほど選擧に興味を有つが故に、終に選擧に溺れる事を用心すべきだ。

## 軍縮會議の目標

倫敦に海軍々縮會議が開かれ、日本では陸軍縮少を要求する聲が起つた。此二者は關係なき如く見えて、實は大關係がある。傳統的に日本では陸軍と海軍が對峙してゐる。海軍を縮少せずして、陸軍のみを縮少せしめやうとしても實行不可能だ。それが不合理であつても、事實がさうだ。

世間では宇垣陸相なればこそ陸軍縮少が出來ると思つてゐる。所ろが宇垣にしても、陸海對立の傳統の殼を打ち破る事は出來ない。他にそれをなし得る陸相は見當らない。だから餘り難きを攻めると元も子もなくなる。

だから問題は倫敦の軍縮會議に移る。玆に海軍の大縮少が出來れば問題は急轉直下するであらう。

政府は前首相の若槻禮次郎氏を首席全權として派遣する。だが、若槻をして只海軍の拵しらへた案を代辯せしめる積りならば、何にも若槻を全權にする必要はない。海軍々人で澤山だ。若槻を遣る以上は、若槻に自由判斷をすべき廣範な權限を與ふべきである。

玆に會議に對する根本問題が引掛つてゐる。即ち此會議は戰ふ爲めの會議か、戰はざる爲めの會議かと云ふ事である。

會議に集まるのは日英米佛伊の五ヶ國である。それが將來も相互の間に戰ふと云ふ下心があるならば、今回の會議は、如何にすれば最少の武器を以て、最大の戰爭をなし得るかの懸引きに過ぎない。それならば戰略家の舞臺で、若槻の働く餘地はない。

だが若し反對に、日英米の三國が將來は少くとも相互の間には戰爭はしないと決心したとする。吾々は戰はない。吾々の海軍は他の國が戰ふのを止める力がありさへすればよい。三國の海軍で世界の警察をするのだと、かう話しが纏まれば、會議の色彩が一變する。會議の色彩が一變するのみならず、世界の色彩が一變する。

會議を其所迄進める積りでなくば、若槻を遣る必要はない。若槻を遣る以上は、彼れに自由手腕を振はしめよ。さうすれば日本の陸海軍の舊い殼は破れる。

## 共產黨事件

今迄に發表せられたる共產黨に關する新聞記事が正しいとすれば、共產黨恐るゝに足らずと云ふ結論が生れる。

共產黨の幹部級のものは、、、、から來た金を以て藝妓買をしてゐる。分つた金高丈けでも一萬二千圓に上る。窮乏の極に居る、、、の勞働者が出した金を、さうした贅澤に費う。費う方も費う方だが、そんな金を送る、、、は馬鹿だと思はしめる。

、、、から指令されたるスローガンなるものには日本の國情に適せないものがある。指令する、、、は日本の事情に暗い。だから頓馬な指令を出すのも已むを得ない。只それを金科玉條の如く擔ぎ廻る日本人の盲從振りが歯痒い。何故日本人は日本人として一見識立てないかと云ふ氣がする。

共產黨事件は日本の社會運動全體に害をする。其幹部級は贅澤の仕放題、平黨員は食ふや食はずで死生の巷に出入せしめられる。これは搾取の一種だ。それが社會全般に發表されたのであるから、大衆はすべての社會運動の幹部がさうであるかと疑ふ。

暴露されたる共產黨事件は凄味よりは寧ろ幻滅味を多量に含む。だから結論は恐るゝに足らずと云ふ事になる。

それならば、日本は將來永久に天下泰平かと云へば、さうは云へない。假りに、、、、から金が來なかつたとせよ。、、、の指令に依るスローガンが用ひられなかつたとせよ。幹部が身を持ち崩さず、黨員と共に精進潔齋したりとせよ。さうしたら彼等は恐ろしきものになる。

さうしたものを日本に發生せしめないやうにする爲めには、日本の爲政者階級、資本家階級が、矢張日本の大衆と共に精進潔齋する事が必要である。

# 經濟時評

## 金解禁の切迫と物價

前田繁一

### 金解禁愈々迫る

四圍の事情は我國の金解禁をして益々有利に導き、愈々其の實行期の切迫を痛感させるものがある。政府は必ずや此の四圍の好事情を逸せず、十一月六日頃から津島財務官をして交渉せしめつゝある一個の事務的金解禁準備、即ち紐育に於ける正金銀行の擔保付借入金の契約成立と同時に、又は他の適當なる機會に於て、何等かの形式に依つて豫め金解禁の實行期を國民に知らせる方法を講ずるであらうと觀る向が非常に多くなつた。一方豫告付解禁に反對して居た井上藏相も、爲替の回復極めて順調にして、爲替以外の四圍の事情も又一切整備して居る。從つて爲替がぐんぐん上つて正貨現送點まで行けば直ぐ解禁も出來るし、爲替相場に十分な底力があれば解禁期を豫告しても最早何等憂ふべき弊害がない。現在の爲替（四十八弗半）は正貨現送點に比して六ポイントしか差がないのであるから、もう四分の一弗回復すれば豫告するとしてもあと二ヶ月前の豫告にしかならぬ。と云ふに至つたのである。此の井上藏相の言は既に金解禁期を暗示して居るのである。即ち此の言の如くんば、假りに十一月中には他に爲替を昂騰に導く何等の原因が發生せずとするも、米國に於ける正金銀行の借入金成立十一月中に成立の見込は明かに替爲を昂騰させる原因であり、勢ひ豫告するとせば其の時であらうと思はれる。然うして金解禁の實施は此の豫告後二ヶ月目と云ふ事になるからである。何れにするも讀者諸君が本誌を手にせらるゝ前後には、愈々金解禁の實行期も明かになるものと想像される。そうして解禁期が不明なるが爲にかもせる財界の不安を除き、解禁期不明の爲に招來する各種の弊害を除

き去る事が出來るのではないかと思ふ。我々は斯くあらん事を熱望して止まないものである。それと同時に我々は物價對策として政府に今一段の考慮を促し、從來放任して顧みなかつた中小產階級を中心とせる金解禁後の對策を急いで行ふべきである事を要求せざるを得ないのである。

## 改善された國際收支

現內閣は其の最大の使命が金解禁の斷行にあるとし、組閣以來財政の緊縮、國際貸借の改善、物價の低落と爲替相場の回復に努力し來つたのであるが、好運にも本年下半期に入つてから我が國の對外貿易は著るしく好轉し、一月から十月末までの間に於て輸出は前年に比して一億七千二百四十五萬圓も增加したのに對して、輸入は八千二百三十萬四千圓の增加であつて、輸入超過額は九千三百二十四萬七千圓に減じ、大正三年から七年に於ける戰時好況時代を除けば、實に明治四十四年（七千五百萬圓）以來の最少の入超額と云ふ好成績を見るに至つたのである。斯くの如き好成績を見るに至つた主なる原因は、國產愛用熱の助長から來た輸入減退の現はれでもなく、內地物價低落から來る輸入の減退でもない。米國の好景氣による我が國の生糸輸出の盛な事が其の第一因であり、露支兩國の紛擾から支那に於ける邦貨排斥が下火になつたが爲に、支那及び南洋方面に對する綿糸布の輸出が增加したのが第二の因である。即ち生糸の輸出額は十月末までに既に昨年に比して六千二百六十九萬五千圓も激增して數年來見ぬ好況であり、綿織物も又四千八百七十五万圓の輸出を增し、絹織物が一千二百六十三萬圓增加して居るのである。一方金解禁氣構へに依る原料品其の他の輸入手控へも又、本年の入超額減少の一因として見逃がしてはならない所であらう。即ち棉花の輸入が多少手控へられて居ると稱せらるゝ以外に、十月末までに前年に比して砂糖が二千九百八十二萬圓、木材が一千五百萬圓、毛織糸が一千八十二萬圓、毛織物が一千三十四萬圓減少して居るのは、大體輸入手控へと見るべきであらう。然し何れにしても米國の好景氣と支那の排日貨終熄に我が國の對外貿易を非常に好轉せしめたものであつて、十月二十八日前後に於けるニューヨーク株式市場の大波亂も、米國の商工業の繁榮とは何等の關係がなく、米國の好景氣は依然たるものがあると稱せられ、米國に對する生糸の輸出は依然相當多額を維持するであらうと云はるゝから、若し此の觀測にして誤りなくんば、一方に於て棉花の大量輸入期に入つて輸入は增加するの外ないとは云へ、十一月は尙相當の出超を續けて本年中の入超額は內地だけで五六千萬圓程度に止まり、殖民地の對外貿易の入超額を合しても約一億五千萬圓の入超で終るべく、若し對外貿易の決濟尻が一億五千萬圓程度ですむなれば、貿易外の受取勘定と相俟し得て本年の國際收支はトントンと成る譯である。

## 爲替相場の回復

本年下半期に入つてからの貿易好轉と金解禁切迫氣構へは爲替相場の急激なる回復を促し、前内閣の命脈盡きた六月末に四十三弗四分の三であつた正金の建値が今日（十一月十日）は四十八弗半に上り、其の間四弗四分の三の昂騰を示すに至つたのである。四十八弗二分の一と云へば實に大正十二年（一ヶ年平均値）以來の最高値なのである。從つて今や法定平價に比して一弗八分の三、輸送費及び保險料の約三分の一弗を差引いた正貨現送點に比して最早約四分の三弗しかへだたりがないと云ふ事になつたのである。故に今假りに金解禁の時期を豫告する事に依つて無條件に爲替相場が正貨現送點に上るとした所で、其の騰貴の巾は僅々四分の三弗であり、百圓に對して約一圓五十錢、即ち約一分五厘の昂騰を見るに過ぎないのであるから、其の影響たるや殆んど憂ふるに足らない程度のものである。況んや豫告後いよ〳〵解禁實施までに、適當なる時日を置くのであるから、其の豫告後の實施期如何に依つて前述の微弱なる影響をも全然除き得るのである。井上藏相が金解禁期を豫告するも可成りと云ふに至つたのは必ずや斯うした事情に依るべく、吾人も又一日も早く「確實に解禁する」事の保證を得ん意味に於て、影響の最も少き今日、一日も早く解禁期を豫告する事に贊成するものである。

## 世界的低金利傾向

然うして今一つ我が國の金解禁をして有利ならしむるものは世界的の低金利傾向である。最近まで我が國の金解禁に對する一大支障なりとして各方面に於て懸念されつゝあつたのは、世界的の高金利から來る解禁後の金流出であつた。即ち米國に於ては商工業の繁榮から來る所謂フーヴァー景氣に伴ひ、今夏來ニューヨーク株式市場に於ける投機熱非常に盛となつたのに對して、紐育聯邦準備銀行は再三警告を發して投機抑制に努力したが一向に効果なく、遂に八月九日同行は其の公定割引歩合を五分から六分に引上げ、以つて投機熱の抑制を計つたのであつた。然も又此の高金利政策も殆んど効なく、投機熱は一時益々盛になつたのみならず、米國の此の高金利政策は英國その他の各國に大影響を與へ、英國はとう〳〵たる金の流出に堪へ得ず、遂に九月二十六日イングランド銀行は其の公定割引歩合を五分半から六分半に引上げて紐育聯邦準備銀行より五厘方上鞘に置き、以つて金の流出防止に努めたのであつた。英米の此の高金利政策は各國をして高金利に導き、世界的の高金利傾向となつたのであつた。從つて此の世界的高金利の中に於て我が國が金の輸出を解禁せんか、我が國の金はとう〳〵と流れ出て防止するに由がないであらうと云ふので、我が國に於ては各方面に英米の高金利をのろうの聲が高かつたである。

然るに英國に於ては九月に金利を引上げ、紐育準備銀行より五厘方高金利にした事に依つて金の流出を防止し得た事と、元來が低金利をモットーとする勞働黨内閣として永く高金利を續け得ない事情に在る事等に依つて、再び低金利政策に還元すべくひそかに米國の事情をう

かゞひつゝある時も時、ニューヨーク株式市場の投機熱漸次冷却し來るの傾向を看取し得たので、先づさぐりを入れる意味に於てイングランド銀行は十月三十一日に六分五厘から六分に公定割引歩合を引下げたのである。即ちニューヨーク聯邦準備銀行と同率にしたのである。然るに一方ニューヨークの聯邦準備銀行に於ても、株式市場の投機熱漸く冷却して最早投機抑制の目的を達成したのと、英國が高金利に惱める事情から必ずや英國に於ても利下の擧に出づるであらう事を看拔き、期せずして同じ十月三十一日に六分から五分に、一擧に一分の利下げを決行したのである。斯うなれば又英米兩國間に一分の利鞘を生じ、英國は一分上鞘となるが爲に、英國は必ずや近く再度の利下げを爲すべく、斯くして先づドイツ、オランダが追隨して利下げしたのを始め、今や世界各國が漸次低金利に向はんとするに至つたのである。故に一時英米の高金利に惱んだ我が國は、此所に其の心配が除かれ、金解禁に依る金の流出に關しては、餘り憂ふるに足らぬと云ふ事になつたのである。

## 在外正貨の增加

世界的の低金利傾向は、我國の金解禁後に於ける金流出の憂ひを殆んど除き去り得たのであるが、假りに解禁後多少の金流出を見るとしても、現內閣は成立後着々在外正貨の補充に努力した結果、前內閣の末期に七八千萬圓に過ぎなかつた在外正貨が、今や三億圓を數ふるに至つて居るのであり、棉花輸入決濟資金其他に充當すべき資金として正金銀行が米國に於て借入金を爲す事になつて居るのであるから、例へ解禁の結果輸入が增加して海外に對する支拂ひが增加するとしても、差し當り內地資金を持ち出す必要はないのである。從つて最早此の點から云つても、金解禁の結果金が流出すると云ふ心配になくなつた譯である。

## 資本家中心の準備

右の如く國際貸借の關係に於ても、世界的の金利關係に於ても、將亦爲替相場の上から云つても、我が國は最早何時金解禁を實行しても良い狀態となつたのである。況んや一定期間を置いてする豫告付の金解禁に至つては、最早何等差支へを見ないと云ふ狀態になつたのである。故に吾人は政府に於て、此の好機を逸せず、最も適當なる方法に依つて一日も早く多年の懸案を解決せん事を望んで止まない次第である。吾人は金解禁の一日も速かならん事を切望すると同時に、金解禁準備若しくは金解禁後の對策として、今日までに既に爲すべくして爲さゞりし、寧ろ知らざるかの如く放任して顧みられなかつた重要なる事項をも、此の際是非併せ行はん事を望んで止まないのである。

放任して顧みられなかつた重要事項？――云ふまでもなく物價低落の根本策及び中小產階級、庶民階級を中心とした金解禁の準備、金解禁後の對策である。

金解禁の準備として今日まで政府が提唱し且努力し來つた殆んど總てのものは、何れも資本家本位、資本家を中心としての準備であり對策であつた。例へば政府が金解禁に依つて生ずる爲替相場の昻騰、爲替相場の昻騰から來る輸入の増加、輸入の増加から來る內地物價の急激なる低落等を防止する爲に、解禁前に於て適當に物價を低落させる方法として採用せる財政緊縮、國民の消費節約も、其の實行方法に於て又其の奬勵の仕振りに於て、其の何れもが資本家本位、資産階級中心主義なりと斷ぜざるを得ないのである。彼の官吏減俸問題の如き、民間の銀行會社に對する職員俸給低減の勸奬の如き、又不親切極わまれる府金奬勵の如き、たまたま資産階級中心主義を露骨に現はしたに過ぎないのである。

即ち戰時好況時代に十錢であつたうどんそばが依然今日も尙十錢であるのを知らずに、又生活必需品たる食糧品や燃料其他の小賣物價の低落が極めて遲々たるのを知らざるかの如くに、國民生活とは直接關係のない卸賣物價の低落率のみを見て直ちに物價は大正九年に比して三割何分減じたりと斷じ、或は爲替がパーになれば物價もそれにつれて直ちに一割方低落するかの如くに思惟し、一割位官吏の生計は切り詰めたとて何等の苦痛を來たさしむるものでないと考へた事それ自身が既に庶民階級の生活狀態に餘りにも暗いと云ふ事を證據立つるものであり、政府が之れ以上如何ともし難いと云ふ所まで節約したと云ふ國庫の節約額(本年度の一般會計の分)が、僅かに總豫算の五分そこそこであるに拘らず、俸給生活者に一割の節約を強要せんとした事は不當と云ふか、亂暴と云ふか、全く言語に絶した處置である。況んや國庫の五分の節約は將來に それだけ餘裕を殘す事になるのであるが、減俸さるゝ官吏は生計を一割縮少しても將來に一文の餘裕も殘らないのである。更に又官吏の減俸に依つて官吏の購買力を假りに一割減退せしめ得たとした所で、それだけのものを政府が義務教育費の國庫負擔増額に使はずとも他の名目で支出すれば、購買力は少しの減退をも來たさないのである。結局官吏の減俸は官吏に對して一割の增税を強要する事に依つて政府の虛榮心を滿足させるに止まり、此の減俸を民間に於て實行せんか、雇人を苦るしめる事に依つて資本家の苦痛を輕くし資産家の腹を肥やすに過ぎない結果となるのである。斯くの如き方法を以て眞に物價の低落を期し得るものではないのである。政府が此の減俸實施を聲明するや否や、非難囂々として起つたのは當然であり、遂に「世間知らず」との冷笑を買つて撤回の止むなきに至つたのも當然である。

### 物價低落は牛の歩み

現內閣が減俸の理由として掲げたものは日銀調査に係る卸賣物價の低落であつた。成る程卸賣の總平均指數は大正十年の二七二が今日では一七二となつて居る。然し一歩其の內容に立ち入つて見ればうどんやそばが少しも下つて居らず、米を始めとして食糧品及び燃料など生

活必需品價の低落率は少いのである。

現に現内閣が組閣以來財政の緊縮に努力し、國民に消費節約の必要を力說せるに拘らず、一方又現内閣成立以來爲替相場が著々回復せるに拘らず、物價の低落極めて遲々たるものにして殆んど低落の見るべきものがないのである。即ち前内閣の末期の六月末に四十三弗四分の三であつた爲替相場は、今や（十一月十日）四十八弗二分の一となり其の間四弗四分の三即ち一割以上の昂騰であるのに對して、内地の物價は卸賣が十月まで二分五厘、國民生活に直接關係を持つ小賣物價に至つては十月までに五厘餘の低落を示すに過ぎないのである。

元來爲替の昂騰がそれだけ直ちに内地物價の急落を誘ふものであると觀る事が非常な間違ひで、棉花にしろ毛織物にしろ、海外から輸入する品物は爲替の昂騰したゞけ安く輸入し得る事は勿論であるが、之れを綿糸布に生產し、毛織物に加工するが爲に要する勞銀や輸送上の運賃其の他の爲に、其の商品價の低落率は餘程阻止されるのである。況んや内地の原料を以て内地で生產するものに至つては、爲替の昂騰に誘はれての物價低落は非常に遲れるのである。此の間の事情は前述した爲替相場の昂騰率と物價低落の割合を對比すれば自ら明白となるのである。故に内地の物價を爲替昂騰と大體同時期に於て低落せしめんとするには、對内的の物價低落策を講せねばならないのである。

物價低落の一策として財政の緊縮、國民消費節約の必要なる事は云ふ迄もないが、之れのみを以て到底其の目的を達し得るものではない。之れと同時に根本的の方策、即ち徒らに日銀や預金部の遊資增加から來る損害のみを考慮したり、公債の値下りから來る資產階級の損害のみに躊躇する事をやめて、或は日銀及び預金部所有の公債を賣却して通貨を縮少し、非公募主義を廢して市場の遊資を吸收したり、所謂購買力減退の定石たる金融政策に因る通貨縮少を計るべきである。然らして一面に於ては、鐵道が先づ率先運賃値下げを斷行して生產費低下を誘導し、鐵道運賃引下げ其他の爲に生ずる國庫の減少は行政整理、軍備整理、所謂行政組織の合理化、經濟化に依つて捻出し、之れに依つて產業の合理化、生產費の低下をも誘導すべきである。

## 放任された對策

更に吾人が政府の態度に對して遺憾千萬に感ずる事は、政府が徒らに金解禁に伴ふ資產階級の目先の損害防止にのみ終始し、金解禁後當然來るべき對等の地位に於ける我が國の國際的產業戰に對する準備を缺ける事と、所謂金解禁準備の爲に徐々立場を不利に導かれた庶民階級の保護に關して無策、無施設である事である。

金解禁の結果は海外から輸入する品物が安く入り、海外へ輸出するものは安價にして優良品でなければならなくなる。之れが爲には十分に產業の合理化を期し、經濟的な產業を大いに助長しなければならぬ。果して政府に何程の成算があるか、或は云はん國際貸借改善審議會をして折角調査立案せしめつゝあると、然しながら不幸にして吾人は未

だ愈々實行に決した政府の方策なるものを耳にしないのである。然も四圍の事情は金解禁を一日も早く實行しなければ好機を逸するの嫌ひがあるのである。況んや庶民階級保護の方法に至つては、未だ政府に於て考慮だに拂へる形勢がないのである。

金解禁の結果は當分不景氣の續く事を覺悟せねばならない。否不景氣は、當分更に深刻化すると覺悟せなければならぬ。內地の物價が低落し內地の生產品が其の價格に於て、其の品質に於て諸外國と對抗して決して勝るとも負けざる程度になるまでは、景氣は回復しないものと覺悟せねばならぬ。此の不景氣に備ふる爲に政府は、或は國民一般に對して消費節約と貯蓄を奬勵しつゝあるのだと云ふかも知れない。然し現在の貯蓄の奬勵は地方の資金、庶民階級の資金を益々枯渴せしめ、地方住民及び庶民階級をして益々金融難に導く以外何物もないのである。卽ち政府が膵を枯らして說く郵便貯金は、地方資金及び庶民階級の資金を吸收する事のみを知つて融通する事を殆んど知らず、銀行及信託又は保險會社等は、地方資金、庶民階級の資金を吸收して都市資金化し、資本家の資金化するのみであつて、地方及び庶民階級の融通機關として殆んど要を爲さないのである。故に郵便貯金や銀行預金、信託預金等が殖えれば殖えるだけ、地方及び庶民階級をして資金難に苦るしましむるのであり、殊に復興貯蓄債券や勸業債券其他の有價證券に至つては、地方住民及び庶民階級の無知に乘じて或は割增付、又はプレミアム等に依つて其の購入を誘導し、萬一必要に迫られて之れを手放さんとする時には安くでなければ賣れず、非常に損をしなければならぬと云ふ狀態であり、貯蓄する爲の有價證券の購入は、取りも直さず一割なり二割損をすると云ふ事に外ならない狀態なのである。

政府が眞に預金者自體の爲を思うてする貯蓄の奬勵であるなれば、預金者の必要なる時に十分金融をも爲し得る樣に十分なる考慮を拂ふと同時に、有價證券に對する投資に就いても、彼の英國に於て行ひつゝある國民貯蓄證券の如くに、貯金者の必要に應じて貯金者の投資したる元金は勿論の事、其の投資期間に應じて適當なる利息を付ける樣にする外、今少し預金者の立場になつて、今少し親切であつて然るべきである。況んや庶民階級は國民の大部分を占むるのである。國民の大部分は中小商工業であり、中小農家なのである。金解禁準備の爲に此の地方住民、此の庶民階級の資金が極度に枯渴し、爲に金解禁後之れ等の階級が資金難の爲に業務に努力し得ないと云ふ事になれば、金解禁後に於ける我が國の眞の產業發達も期して得られないのである。

政府當局者たるもの、此の際中小產階級を中心とせる各種の金解禁準備、金解禁後の各種の對策に遺憾なきを期すべきである。

# 共產黨事件批判

## 犯罪學的觀察

長谷川如是閑

一

共產黨事件のやうな出來事は、それに對する冷靜な科學的判斷が何うであらうとも、とにかく社會人の社會的意識の神經中樞を興奮せしめる頗る刺戟性に富んだ出來事に相違ないから、さらでだに非科學的の東洋人はこの場合、勢ひ東洋の昔の革命的文獻を想ひ出させるやうな、激越な、又は感傷的な英雄的な又は詩人的な調子でその感慨を語りたい誘惑を感ずるであらう。がそれは強ち彼等が東洋人たる故ばかりでもあるまい。それだけわれ〳〵は此事件に對するわれ〳〵の感想を乾燥せしめねばならぬ。

千人近くの多數が國體に關する犯罪で檢擧されたといふことは、日本の歷史に珍らしい例だといつて驚いてゐるものもあるやうだが、何がそんな驚くべき例を作り出したかを考へると、さう驚くこともないのである。

社會推移の過程の殊に進行しつゝある歷史のある時期に於て(削除)意識や行動やが『犯罪』といふカテゴリーに繰り込まれゝば、どこの國でも太規模の檢擧が起る筈である。同時にそんな意識や行動を犯罪視しない國では、同じ狀態を呈しながら何の檢擧も起らない筈である。

もしダーウヰンの時代に於て進化論者を犯罪者とする法律が施行されたら、各國の第一流の生物學者と無數の學徒とは一齊に檢擧を免れないのである。現に今日北米合衆國のある州では、進化論を教授する教師を體刑に處する法律を實施してゐる。もしこれと同じ法律が日本に施行されたら、理科の先生達は珠數繋ぎに檢擧されることを免れな

いであらう。

又例へば、日本の『治安維持法』のやうな法律を、今日のイギリスやドイツに實施したら、一擧にして數萬人の檢擧を見ねばならぬ。これらの國に於ける共產黨員の全部が免れることを得ないからである。又歐米諸國の無產政黨には『(削除)の撤廢』といふ綱領を掲げてゐるものも少くないから、これらの國々で『治安維持法』が急施されたなら檢擧されねばならぬ人數はとても千人や萬人の少數には止まらぬ。

これらの國々では國民の大多數を犧牲とする覺悟がなければ(削除)に反對する運動を犯罪とするわけに行かないから、治安維持法式の法律はこれらの國には事實上、成立することが出來ないのである。だから日本でもさういふ法律が成立してゐるのは、これによつて犧牲となる人間が七千萬の國民中の僅か千人足らずに過ぎないといふ事實によつてゐるのである。

## 二

犯罪學者は所謂『犯罪』を社會性による犯罪と反社會性による犯罪とに分けるが、犯罪學の對象となるものは後者だけで、前者はその手段としての行動が『犯罪的』ならざる限り、犯罪學の對象とはならぬものである。それは行動自體が、元來犯罪的のものではなく、それを犯罪と認める特別の秩序が、寧ろ社會的秩序以前の(削除)秩序として成立してゐるために發生するものだからである。たとへば封建時代には大名の行列の前途を横切つたものは死刑に處せられたが、これは(削除)秩序の犯罪だから、さういふ法律が廢止されゝば、翌日からその犯罪者も皆無となるのである。

犯罪はすべて何等の意味の秩序を破るものに相違ないが、反社會性による犯罪の衝動は、個人的慾望の社會的生活秩序に反する發動であつて、その目標とする所は、直接、さういふ個人的慾望を滿足させる財物、又は人體である。然るに社會性による犯罪は、その正反對に、新らたな生活秩序を要求する社會的衝動の發動――(削除)を求める運動がそれである――であつて、全く個人的慾望の反社會的滿足を求めるものではないから、決して財物や人體に對する侵犯となつて現はれるものではない。それが個々財物や人體に對する犯罪となつて現はれるのは、社會的動機による運動が、秩序的機關によつて行はれる方法を缺くためであつて、秩序的方法の(削除)犯罪的方法にそれを導くのである。

これに反して社會性に反する性質による犯罪、犯罪學の對象たる犯罪は、新らたな生活秩序を求めるものではなく、いかなる生活秩序をも破らんとする行動傾向である。その直接の動機は制度に對するものでなくして、財物又は人體に對するものである。それは例へば、私鬪的殺人行爲のやうに、いかなる秩序の下に於ても犯行たる性質の行動である。盜竊行爲の如きは或は私有財產制に特有の犯行で共產制に於ては皆無となるであらうと考へるものもあるが、然し共產制でも、個人が直接に享受せねばならぬ生活資料又は生產要具等は個人的占有を必

要條件とするので、さういふものに對する盜奪行爲は、共產社會に於ても犯行たること、私鬪的殺人と同様である。されば盜奪行爲も亦『反社會性による犯罪』である。而して反社會性による犯罪は、社會的生活狀態に於ける有形無形の缺陷から、個人の心理的又は生理的構成に變質を生じ、社會的生物の本性たる社會的協同性を拒否し反撥する衝動を起さしめるもので、社會現象としては、疾病、自殺、傷害事故等と同様に、必ず一定の社會狀態に應ずる一定の統計的數字となつて現はれるものである。即ち種々なる犯罪行爲の指數は一定の規則的波動を示し、その數字の法則はいかなる社會にもあてはまるものである。

その反對に、『社會性による犯罪』は通常は、本來社會的なる行動に對して、犯罪の烙印を捺すものであるから、而してその烙印を捺すものが却つて（削除）に基く場合も多いから、その犯罪行爲の指數は社會的動因から出て來る數ではなく、それを犯罪のカテゴリーに投げ込むものゝ『（削除）』『（削除）』から出て來るのである。たとへば、上述のやうに、進化論の教授を禁ずる（削除）學界に多數の犯罪者を生ずるやうなものである。

だからかういふ意味による犯罪の激增は、社會的見地からは、又犯罪學的見地からは、毫も（削除）ことではなく、（削除）は寧ろかういふ（削除）『（削除）』そのものである。

されば、『社會性による犯罪』が非常に增殖する――國家の手に終へぬほど殖へる――時は、結局（削除）社會の通則とする。近代的民主々義の勃興によつて、封建時代（削除）が全く改廢されたのは、その通則に從つたのである。

## 三

共產黨事件の關係者は、『（削除）』に屬するもので、それは（削除）個人的慾情の對象としての財物又は人命に關する犯行ではなく、（削除）をその目的とするものであることはいふ迄もないから、此種の犯罪者は、社會狀態はそのまゝで、法律の改廢によつて、明日は皆無となることを得るし、その反對に、いくらでも增加することもあり得る。

社會の（削除）目的とする犯罪は、社會の（削除）テンポが早くなればなる程增加するものである。それは元來（削除）なるのではなく、（削除）の動態を生活に實現する行動なのであるから、（削除）に比例して、それを生活に實現する人間も加速度で殖へて行くわけである。それはどこの國でも封建末期に王黨が殖へたやうなもので、日本の德川末期に勤王黨（削除）が急激に殖へて行つたやうなものである。

然し、かゝる社會的推移の過程を行動する人間（削除）は、次第に社會的協同性を失つて反社會性による犯行に依賴する傾向に導かれるものである。帝政ロシヤの歷史はその現はれであつた。その上これらの社會性による行動群のうちには、反社會性による犯罪傾向をもつものが絕對に含まれてゐないとは限らないから、それらの人々に於ては、社會的動機と反社會的動機とが一緒になつて、社會性による目的な

社會性による行動に訴へんとするに至るのは已むを得ない。

然し（削除）に對する動機による運動の目的が、秩序的に（削除）組織が發達すれば、自から犯罪性の行動は排除され從つて、犯罪者的傾向のものは運動から排除されるに至るのである。

故に（削除）は『社會性による犯罪』を、『反社會性による犯罪』に導くのである。

（削除）導いたのもその一例である。（削除）の進化に對して鮮明の意識目的をもつて行動すれば『犯罪』となるといふ事情は、人々をして、その行動から回避させるか、又は『犯罪』を犯して（削除）企圖せしむるかの兩途の何づれかを採らしめる。社會的推移の初期に於ては人々は、容易に前者の態度をとることが出來る。何となれば人々を強制する（削除）がまだ充分熟してゐないからである。然し、（削除）は人々をして後者の態度をとらしめる。

その結果は、『犯罪』者の大群となり、そのまゝ結果が法律の改廢となるの外なきことは前述の通りである。

# 公式化した共產黨

赤松克麿

## 一

思へば大正十年八月に起つた曉民共產黨事件以來、共產黨の戰ひの歩みにも、さまぐな波瀾曲節があつた。一體日本の社會運動には、陣營内に絕えず不安があり動搖があるので、人物關係や勢力關係に異動が劇しく行はれる傾向があるが、それは極左翼運動に於いて最も著しいものがある。昨日の同志は今日の裏切者となり、同志間の離合集散が急テンポで行はれ、谿谷を流下する奔湍のやうに、慌しく、目まぐるしく、騒がしく、突進してきたのが日本共產黨の運動過程である。

しかし今ま我々が今日までの日本共產黨の運動を回顧すると、その間に或る一定の方向を認知することが出來る。その方向とは何んであるかといへば、日本共產黨の運動方針が益々觀念化してきたことである。云ひかへれば益々公式化してきたことである。更に他の表現を以つてするならば、學生化し靑年化してきたことである。故に實際運動の立場から見るならば、共產黨運動は現實の戰線から次第に遠ざかつてきたのである。今や共產黨問題は、直接内務省の管轄より文部省の

管轄下に移動しつゝあるのである。共産主義者の運動舞臺が、工場、鑛山、農村を離れて、學園に移りつゝあるのである。

かくして日本共産黨の、、、運動史は、漸次峠を越したのである。

## 二

いふまでもなく日本共産黨は第三インターナショナルの（削除）である。第三インターナショナルの細胞勢力が、正式に日本に植ゑつけられたのは大正十一年頃と思はれるが、その最初の任に當つた指導者は、堺利彦、山川均、荒畑寒村等の人々であつた。彼等は日本社會主義運動の傳統的中堅勢力であつて、日露戰爭前後より長い間惡戰苦鬪をつゞけてきた歷史的人物である。明治時代から左翼社會運動の尖端に立つて苦鬪してきた彼等が、先づ最初に第三インターナショナルの運動に、、したことは極めて自然の徑路といふべきであつた。ましてや彼等の同志であり先輩である片山潜氏が、第三インターナショナルの最高幹部の地位にあるに於いておやである。

大正十年八月の曉民共産黨事件は、第三インターナショナルの正式な（削除）の運動ではなくて、むしろ正式な日本共産黨の序曲といふべきものであつたが、この構成分子は矢張り堺・山川氏等の系統勢力であつた。いよ〳〵日本共産黨が成立を告げて、堺・山川氏等が自ら采配を振るやうになつてから、政府當局の檢擧に遭つたのが大正十二年六月の第一次日本共産黨事件である。しかしその後といへども日本共産黨の運動は依然として繼續せられ、復た〳〵政府當局が檢擧の手を下したのが、昭和三年三月の所謂三・一五事件、次いで昭和四年四月の所謂四・一六事件である。司法省の發表によれば、最近の二個の事件を通じて、起訴されたもの即ち日本共産黨に加盟したものが八百二十五名に上り「我國の思想犯罪史上未曾有の犯罪事件」だといふことである。

ところで注意すべきは、さま〴〵の曲折のあつたうちに特に大正十二年の日本共産黨と三・一五事件及び四・一六事件の日本共産黨との間に大なる變化のあつたことである。前者の指導勢力は堺、山川、荒畑氏等であり、後者のそれは佐野、福本氏等である。前者には殆んど學生が加盟せず、後者には多數の學生が加盟して居る。更にまた前者には全く婦人がなく、後者には可成り婦人の黨員が加つて居る。前者には古顔の社會運動者が多いが、後者には新顔が多い。社會運動の閲歷からいへば、前者は先輩的であり、後者は後輩的である。

## 三

右に述べたやうに、日本共産黨の運動過程に於いて大きな變化を示して居るが、我々がこれについて最も興味を感ずるのは、福本和夫といふ人物の出現と活動である。彼れは大正九年の東京帝大出身であつて、私より一年後の三輪壽壯君等と同窓であつた。彼れは卒業後松江高等學校の教授となり、そしてドイツに留學したが、當時のドイ

產黨の理論的指導者ルカチ、コルシユ等の感化を受けたのであつた。彼れは大正十三年に歸朝し、山口高商に教鞭をとつて居たが、その頃から盛んにマルクス主義的論陣を張るに至つた。そして彼れの論文は日本共產黨の理論的機關たる「マルクス主義」に連載され始めた。

彼れは最初、福田博士、河上博士、高田博士、河野密、赤松克麿などの論文を槍玉にあげて居たが、そしてそこまでは無事であつたが、今度は鋒を轉じて山川均氏の論文に喰つてかかつた。問題はこゝに生じた。山川氏は從來共產陣營の理論的指導者であつた。不當に理論を尊重する共產陣營に於いて、最大の理論家たる山川氏を攻擊し、且つ壓迫することは、共產陣營の勢力關係に一大動搖を惹き起すことであつた。新進理論家福本氏は全力を擧げて山川氏を攻擊し、山川氏の思想に對して「俗學主義とマルクス主義との折衷主義」の烙印を押し、遂に見事にその理論的指導者の地位を奪つてしまつたのである。

福本氏は完全に青年思想分子を捉へた。彼れの新奇な文章法と唯物辯證法に立つた哲學的教養とは、共產陣營の理論分子をすつかり魅惑し、彼れは山川氏に代つて、日本共產黨の、、、理論的指導者になつたのである。まことに福本氏の出現と理論鬪爭とは、共產陣營に於ける一大驚異であつた。從つて彼れを中心として新勢力が擡頭し、これが進展して行つて、堺、山川氏等の傳統勢力を顚落すに至つたのは當然のプロセスであつた。

我々の興味のポイントはこゝにある。福本氏は何等の實踐的經驗を有せざる一學究である。唯だ彼れはドイツ留學中に、從來我國共產主義運動に最も缺けてゐた哲學的研鑽を積み、そしてこれを表現するに近代青年の好奇性に投合する新しい文章法を心得たところの一理論家に過ぎない。若しそれ現實の社會運動を批判する能力に於いては、遠く山川氏に及ばないことは明白である。また實踐的能力に於いて堺氏の足元にも寄りつけないことも事實である。しかるに最近の日本共產黨運動に於いて、堺山川氏等は弊履の如く放逐され、福本氏は太陽の如く輝いたのである。

## 四

共產黨の持つ最大の特徵は公式的革命主義である。客觀的狀勢の如何に拘らず、現實的効果の如何に拘らず、革命的公式に從つてつねに直線的に突進して行くところに彼れらの面目がある。彼れらは勞働者農民のために戰ひ、勞働者農民の政府を樹立するといつて居るが、彼れらの運動意識は最も勞働者農民の生活意識を離れて居る。彼れらはアヂテーションに於いて(削除)、運動の繼續的なる大衆的發達に於てはつねに失敗する。彼れらの觀念的なる、、意識(削除)に對して、無產大衆は到底追隨し得ないのである。明日のパンを考へ、失業を恐れ、妻子の生活を思ふものは、共產黨の命令に從つて、(削除)全身を(削除)燃やすことは出來ないのである。

共產黨に共鳴し、これに飛ぶものは、現實的生活利害を重んじな

い、そして頭の簡單な人々に多い。まことに共産黨の運動、生活は運動にあらずして、觀念運動である。年若き學生青年がこれに投ずるのは至つて自然である。また象牙の塔に立てこもる大學教授がこれに共鳴するのも自然である。更にまた世間見ずの有產者子弟がこれに飛び込むのも自然である。福本和夫氏が一躍して最大の理論的指導者となり得る日本共産黨である。その運動方針はあまりにも素朴であり簡單であり公式的である。

多少なりとも運動經驗を積み、現實的批判力が出來てくると、始めは共産黨に共鳴して居ても、次第にその誤謬を感じてくる。しかしその誤謬を強く主張すれば、裏切者として陣營から放逐されねばならぬかくして日本共産黨から退却した人々は少くない。大山氏一派は、形はちがつて居るが、最近の脱退組である。大山氏の退却は、大山氏の認識の進歩を示すものだ。彼れが早大教授から勞農黨の黨首になつたときは、まさに青年大山であつた。彼れが年少な共産青年群にかつぎ上げられて、われらの委員長として苦闘したこゝ數年の經驗は、大山氏の現實的批判力を成長せしめた。その結果は日本共産黨への離叛となつて現はれた。

現實的傾向を帶びたものは、次第に共産黨を去つて行く。しかし後から後へと觀念的分子が補充される。だがこうした激しい新陳代謝の行はれることによつて、共産黨は益々觀念化し公式化することになるのである。

今回の共産黨事件は、或は「我國未曾有の思想犯罪」であつたかも知れない。しかし注意すべきは、この共産黨は青年的であり、學生的であることである。そして斷じて勞働者農民的でないことである。故に今回の事件を以て、我國社會運動の中心勢力に起つた大事件の如く考へるのは大なる見當違ひである。從つてこの事件を見て、狼狽し、恐怖し、一般社會運動に對しても警戒意識を抱くが如きことは、自らの無知を暴露するものでなければならぬ。日本共産黨事件を唱へ保守的教化政策を行ふことは、(削除)反動主義的行爲に外ならぬ。

# 前衛發展過程の犧牲

猪俣津南雄

# 一

一九二八年三月十五日以來、（削除）日本共産黨は、今や全く潰滅に瀕したと宣告されてゐる。日本共産黨は（削除）、プロレタリアの階級鬪爭の光輝ある前衛部隊たらんと欲して力鬪した。かゝる前衛部隊は無産階級の長き苦難の鬪爭が生みいだす（削除）。一九二六年末に創立されたといふ日本共産黨を一應潰滅狀態に導くことは、或は日本ブルヂョアジーにとつて可能であつたかも知れぬ。だが、無産階級の前衛の發展過程そのものを（削除）たゞの一時も不可能である。

# 二

司法省の發表に從へば、日本共産黨は昨年三月の大檢擧によつて黨員の大部分を奪はれたにも拘らず、またそれに引續いて倍加せる迫害の峻烈さにも拘らず、本年二月末には早くも再び『全國各地に二百餘名の黨員を擁し、なほ黨員以外にも多數の候補者ならびに同情者』をあつめてゐた。此の期間には、周知の如く、緊急勅令によつて改惡された治安維持法が極重刑をもつて共産黨員をおびやかすに至つたのである。さうした威嚇をものともせず、身を挺して日本共産黨に加盟したものは、此の黨こそが無産階級の無二の前衛であらうと信じたからでなければならぬ。黨の構成については何等具體的に知るところなく、また黨のとれる戰術の當否に關する確信はなくとも、たゞ×××であり、前衛的であるといふ、そのことのもつ魅力が、鬪士等をひきつけたからでなければならぬ。前衛を強めやう、――此の一徹な希求の前に、すべてを投げ出し得たからでなければならぬ。

# 三

日本無産階級の階級意識の尖端は、プロレタリアートの前衛の（削除）を認識するのみでなく、身をもつて之れをまもらんとする情熱にさへ燃えてゐる。

だが、情熱は、客觀的に、鬪爭力として結實しなくてはならぬ。鬪爭力の擔ひ手としての前衛部隊そのものの生長發展となり、擴大強化とならねばならぬ。

結成後數ケ月にしてその組織を破壞され、再建後數ケ月にしてまたもやその組織を破壞された日本共産黨は、自己の意圖と願望と努力とにも拘らず、尙ほ鬪爭力と指導力とにおいて、全階級の前衛となり得てはゐなかつた。（削除）

# 四

日本共産黨を檢擧した支配階級は、これを機會に、勞働者・農民のすべての組織をも粉碎せんとたくらんでゐた。それは、勞働組合評議會、青年同盟、勞働農民黨の解散となり、香川その他の諸地方の勞働

組合および農民組合の襲撃となつてあらはれた。

かくの如く大衆組織に向けられた襲撃に對する勞働者農民大衆の抗爭は、まことに驚嘆に價ひした。少なからぬ地方に於いては農民でさへが、三・一五檢擧及びその後の迫害と戰つて鍛へられた意識と行動とをもつて四・一六檢擧に堪へてゐる。指導者と活動分子とを奪はれあらゆる威嚇を加へられても、農民大衆は組合を捨てなかつた。

けれども、大衆が身をもつてまもつたのは、大衆の日常鬪爭の組織であつて、前衛の組織ではなかつた。否な、大衆の日常鬪爭の組織の一なる勞働農民黨でさへもなかつた。解散直後の、勞働農民黨奪還のスローガンは、大衆を起らしめるに足らなかつた。日本プロレタリアートの先尖端の燃燒する意識と、後につづく廣汎な大衆の意識との間には大なるギアップがあらはれた。が、それにも拘らず、大衆は自己の意識相應に行動し鬪爭しつゞけたのであつた。

眞の前衛の結成・擴大・强化に向つて至要關心を有する前衛分子は、日本無産階級運動の現段階の最重要な特徴として、二つのことに最大の注意を向けねばならぬ。その一つは、日常鬪爭のための大衆組織——勞働組合、農民組合、及び勞働者農民の共同戰線黨——が、今や漸く大衆自身のものとして定着し始めたに過ぎないことである。他の一つは、大衆組織の未發達なるに加へて、階級的前衛はそれにも增して未發達なることである。まづ大衆組織を確立して然る後に前衛を、といふ考が誤りであるとすれば、先づ前衛黨を確立して然る後に大衆組織を、といふ考も劣らず誤りである。大衆組織の擴大强化と、前衛の結成及び擴大强化とは、不斷の交互作用の過程としてのみ實現される。と同時に、前衛がその發展の各段階において前衛たるの任務を果さんがためには否應なしに大衆と結びつかねばならぬとすれば、大衆が現に到達してゐる意識の程度は、從つてまたその組織的發展の程度も、前衛の行動を制約する。

## 五

日本無産階級の前衛分子が共産黨の受難から引出し得る教訓の一つは、現代日本における前衛運動のために與へられる特殊の諸條件の的確なる認識の必要であり、(削除)

その問題をこゝで詳論することは出來ぬ。が、しかし、大衆組織と前衛との關係に即して言へば、大衆組織はすでに公然たる存在として發展し始めてゐるのに、前衛分子は極端な彈壓下に立たしめられ、その地下への追込みによつて前衛への發展が極めて困難ならしめられてゐることは、さうした特殊條件の一である。言ふまでもなくそれは、支配階級による前衛孤立化の政策の奏効を意味してゐる。そして此の政策とその奏効とを客觀的に理由づけてゐるものは、現代(削除)の趨勢である。

現在の經濟・政治狀勢は、かの歐洲大戰前の英、獨、佛のやうに、改良主義の指導の下に大衆組織の大なる發展を可能ならしめるほどの

タンマリとした剩餘利潤を生み出すやうな、さうした繁榮や安定性は斷じてなく、從つて大衆組織の未發達なるに比して大衆の階級意識の發展は急速であり得るとはいへ、しかしかの一九〇五年前のロシアのやうに、自然發生的な大衆の政治的(削除)の巨浪をつくり出すほどに、それほどでは決してない。一九〇五年前のロシアにあつては、前衞と共にすべての大衆組織もまた地下に追込まれてゐた。今日の英、米、獨、佛にあつては、戰前における大衆組織の大發展と、戰後(削除)の後をうけ、すべての大衆組織と共に全階級の前衞もまた公然の存在をかち得てゐる。前者の場合には、大衆組織は未發達でも大衆それ自身が×××に燃えてゐたから、前衞孤立化の政策は不可能であつた。後者の場合には、大衆組織の發達してゐることと(削除)を經てゐることとの故に、前衞孤立化の政策は不可能である。

## 六

治安維持法は、現代(削除)による無產階級の前衞孤立化の政策の集中的な法律的表現である。

ブルヂョア政府は、治安維持法の制定に當り、普選議會の開設を目前に控えながら、特にその開設前の時機を選んで決行しなければならなかつた。更にまたそれを改惡せんとするに當り、特に議會閉會中の時機を選んで緊急勅令といふ非常手段によらねばならなかつた。

治安維持法は、無產階級の前衞の孤立化をめざすことによつて必然的に無產階級運動全體の鎭壓をめざしてゐる。此の治安維持法の本質は、公式的には、無產階級陣營のすべての先進分子によつて洞見されてゐる。が、しかし、此の法律を『運用』する支配階級は、廣汎な大衆を治維法の(削除)が、それにも拘らず、(削除)勞働者農民の鬪爭の發展は大衆組織と前衞との交互作用的な擴大强化を通じ、遠からず全大衆を治安維持法撤廢の鬪爭へ驅り立てずには置かぬであらう。

# 『世界大衆文學全集』愈々增卷

本社が『今日の讀物』として全大衆に提供した『世界大衆文學全集』は、各譯者の眞摯な飜譯態度と、本社の出版良心の具體的表現とは、從來飜譯物に與へられた無味乾燥、難解の評を退け、面白い、安價だ、ためになるの讃辭の裡に、昭和三四年度譯壇に劃時代的記錄をとゞめ、本年末、既定計畫三十六卷の配本を完了することとなつた。然るに、配本半の頃から會員の間に、三十六冊のみで我々唯一の慰安を奪つてはならぬ、萬難を排して增卷すべしとの聲起り、纏て回を重ぬるに從つて大多數會員の熾烈な叫びとなり、なかには原著を示して熱心に希望を寄せる向も多數現はれた。爾來本社は、外國文學飜譯移植の使命に鑑み、外國の風物事情を知らんとする現代大衆の熱意に酬ゆべく、研究を重ねた結果、左記作品を選擇して愈々增卷斷行を決定した。原作と譯者の堂々たる飜譯界の驚異とされる、この興味深き『今日の讀物』を明春一月から捧げる。

引續き御愛讀を願ふ。

- 第三十七卷 巖窟王（上卷）（佛、デュマ）黑岩涙香
- 第三十八卷 巖窟王（下卷）（佛、デュマ）黑岩涙香
- 第三十九卷 噫無情（佛、ユーゴー）黑岩涙香
- 第四十卷 野の花（英、ミセス・トマス・ハーデイ）黑岩涙香
- 第四十一卷 グランド・バビロン・ホテル（英、ベネツト）平田禿木
- 第四十二卷 水滸傳（支那、施耐庵）笹川臨風
- 第四十三卷 永遠の都（英、ホール・ケイン）戸川秋骨
- 第四十四卷 ロビンソン・クルーソー（英、デホー）十五少年（佛、ヴエルヌ）白石實三
- 第四十五卷 テス（英、ハーデイ）廣津和郎
- 第四十六卷 二都物語（英、デイツケンズ）名原廣三郎
- 第四十七卷 血と砂（西、イバニエス）鈴木厚
- 第四十八卷 カルメン（佛、メリメ）コロンバ 宇高伸一
- 第四十九卷 ポムペイ最後の日（英、リットン）小池寛次
- 第五十卷 小公子（英、エフ・エッチ・バアネット）小公女 佐々木茂索
- 第五十一卷 あの山越え二（米、ウイル・カートン）尾崎士郎
- 第五十二卷 赤襯物語 他二篇（佛、ボオル・ゴオロー）大木篤夫
- 第五十三卷 妖花アラウネ（獨、エーヴエルス）淺野玄府
- 第五十四卷 吾若し王者なりせば（佛、ミルン）鈴木彦次郎

東京芝區愛宕下町　改造社發行　振替東京八四〇二

# 日本金史

岩崎重三

## ——内容——

一、金の字
二、金は最古の金屬だ
三、南亞金鑛山の發見
四、朝鮮の金
五、本邦金の發見
六、陸奥の金
七、本邦金貨の初まり
八、前九年の役
九、後三年の役
一〇、中尊寺
一一、平家の金倉
一二、金賣吉次
一三、義經
一四、マルコポーロ
一五、金輸出
一六、亂世の英雄
一七、豐臣秀吉
一八、德川家康
一九、判金
二〇、金の流出
二一、金鑛業
二二、世界の金

## 一　金の字

元來金の字はカネと訓むべきもので今の語で云へば金屬と同一義を示し、今茲に說かうと欲するところの金の意味ではない。支那でも矢張さうで此金に種々の色を附して金屬を分けて居る。說文解字と云ふ本の第十四篇上に曰く「金に五色あり、白金、靑金、赤金、黑金之に黃金を併せて五色となす」と。其解に曰く「銀は白金なり、鉛は靑金なり、銅は赤金なり、鐵は黑金なり、而して諸金中にて黃金を稱賛となし獨り金名を得たり」と記す。されば金は元と金屬と云ふことなりしが其最も貴きが故に遂に全金屬を獨占して金と云ふに至れるものである。本邦でも昔は黃金と記しコガネと讀みしも今は其代りに金と記し之をキンとするに至つたものである。

此金の字は元とは杯の形で柄のついたコップのやうなものに象つたのである。此杯は銅で作つたので所謂カネと云ふ意味を示した字である。

英語の Gold. 獨語の Geld. と云ふのは Gelb 又 Yellow 等より來たもので黃色の意味であつて東洋の黃金と云ふのと變らない。又拉典語の Aurum は梵語から出たもので、Or 又は Aurora と同じで光ると云ふことから變つたものである。

## 二　金は最古の金屬だ

金は決して錆びない金屬で又最も重いものだから能く水中に淘汰されて砂金となり且つ其色の美しいことから最も早く蠻人の注意を惹いたものでエデンの花園の記事に砂金の事が載つて居り、且又錬金の術も容易であるから埃及の墓の中からも金の裝飾品が發見されて居る。そして其後も盛に金を採つたことが歴史に見えて居り、又印度、中央亞細亞、南部烏拉、地中海沿岸等から出たが亞弗利加内地の大金山からも金を產して之が古代の文明國に來たものだらうと云ふ人がある。

されど中世までは金の產額は至つて微々たるもので亞米利加發見の頃全歐洲にあつた金の總量は二億二千五百萬弗に過ぎなくて今日の一年の金產額の半分に過ぎなかつた。然るに千四百九十二年にコロンバスが初めて亞米利加を發見して後ち金の產額は大いに增加して來たのである。

## 三　南亞金鑛山の發見

此の如く米國發見後は金產額が增加したとは云へ尚ほ一年の產額は一億弗に過ぎざりしが千八百八十四年に南亞弗利加トランスバールに金鑛山を發見し千八百八十六年にトランスバール政府此地を公開し翌年其地に石炭を發見してから金鑛業は盛大となつたが其地の金は其粒の大きさが甚小でどうしても從來の混汞法では金は取れなかつた。混汞法とは金鑛を碎き水銀と水中にて攪拌し、金粒を水銀中に溶解させて後ち匣の鞣皮にて搾りて金粒を取るところの方法である。それで千八百九十一年マクアーサー及びフオレストの兩氏は青化法と云ふ新しい方法を發見した。此法では金鑛を細粉にして之に青化加里の千分の三溶液を掛けると金が此液に溶ける。之を亞鉛で還元するのである。此法は實に意外な好成績を現はし急に金の產額が一年に數億弗を增加して來た。實に學術上の發明の力は偉大なものである。此方法の發明があつた許りで世界の金產額が甚しく增加して來て其前には年に一億弗しか出なかつたものが今では五億弗即ち十億圓に達せんとして居るのである。此事は經濟學上決して見逃してならぬことである。

## 四　朝鮮の金

朝鮮は今でも金が出て居るが餘程太古の時から金を產して居る。我國の神代から此記事があるが其金が日本に入つて來たのは神功皇后の時から後のことである。其後應神天皇の時、推古天皇、皇極天皇の時にも彼地より金を我國に貢して居る。されど我國には金を出さざりしが天武天皇大寶元年に對島から金を貢したことの記事がある。其後一切其事がなかつたから此金の發見は恐らくは三田首五瀬の詐僞であらうと疑はれて居る。恐らくは朝鮮から來た金ではなかつたらうか。

## 五　本邦金の發見

聖武天皇は最も篤く佛を信じ諸國に國分寺を建て奈良に大佛を作り、費すところ銅四百八十八噸、金四十三貫五百八十一匁であつたが之に塗るところの金が不足するので諸國に令して大いに金を求めた。此大佛の出來た翌々年聖武天皇の末年即ち天平勝寶元年神武天皇千四百九年西洋紀元の七百四十九年に陸奥國小田郡より黄金を獻じた。此が本邦に僅かに金を產した初めである。「天皇喜ぶこと甚だしく幣を奉じ畿內七道の諸社に告げ四月甲午天皇東大寺に幸し盧舍那佛の前殿に御し自ら北面して佛像に對し皇后、太子、並侍し、群臣百僚殿後に列す」と云ふ大變な騷ぎで、之を賀する歌に、「すめらぎの御代榮えんと東なる路の久山に黄金花咲く」とある。此から黄金花咲く陸奥なる枕語が出たのである。

此に記する小田郡は何れなるか不明であるが傳ふるところによれば遠田郡涌谷の地箟嶽の麓で今でも黄金神社と云ふのがある。此地では今でも少しは砂金が出るが大した金の鑛脈がないから此傳說は誤謬であると云ふ人もある。

## 六　陸奥の金

此陸奥の金は初め砂金であつたが後は山金を取るに至つた。そして其產額は頗る多量であつたと見えて發見と同じ月に陸奥守百濟王敬福は黄金九百兩を驛馳して獻上した。發見後四年目には「陸奥國の調庸は多賀以北諸郡をして黄金を輸さしむ」と云ふことが記されてある。當時は金の價も大いに低廉で正丁四人をして金一兩に代へしむと云ふことが知られる。正丁四人とは壯健な男四人一日の給金を云ふのだから今の價で一日の給金を壹圓五拾錢としても六圓で金一兩即ち四匁が買へるのだから金一匁は壹圓五拾錢也に過ぎない。今は金一匁は五圓だから今の三分の一であつた。此でも奥州の金は如何に多かつたかが知られる。此の陸奥の金は本邦經濟界に重要なる位置を占め、それが源氏の鎌倉幕府まで續いて居る。

## 七　本邦金貨の初まり

陸奥の金の發見後二年にして駿河より錬金砂金を獻し、世上にある金は次第に多くなつて行き貨幣として使用するものが多かつたが私鑄稍多く人民の迷惑は少くなかつたので天平寶字四年即ち金發見後十二年に開基勝寶、太平元寶、及び萬年通寶の三種の錢を鑄る。皆同形で今日の一文錢と同一の形をして中に穴が明いて居る。此開基勝寶と云ふのは金錢で太平元寶と云ふのが銀錢で萬年通寶が銅錢である。此が本邦で金貨の出來た初まりである。此の時の銀錢十をもつて金錢一に換へたのである。但し重量はよく分らないが金銀の比價は十倍より廉かつたと思はねばならない。金錢と銀錢とは同形であつたらしいから如何に考へても此時の本邦の金產額は餘程多かつたと思はれねばならない。何となれば此時のみ金貨の鑄造があつて其後は全く此事がなく、只銅錢のみが作られたからである。

## 二　金は最古の金屬だ

金は決して錆びない金屬で又最も重いものだから能く水中に陶汰されて砂金となり且つ其色の美しいことから最も早く蠻人の注意を惹いたものでエデンの花園の記事に砂金の事が載つて居り、且又錬金の術も容易であるから埃及の墳墓の中からも金の裝飾品が發見されて居る。そして其後も盛に金を採つたことが歴史に見えて居り、又印度、中央亞細亞、南部烏拉、地中海沿岸等から出たが亞弗利加内地の大金山からも金を產して之が古代の文明國に來たものだらうと云ふ人がある。されど中世までは金の產額は至つて微々たるもので亞米利加發見の頃全歐洲にあつた金の總量は二億二千五百萬弗に過ぎなくて今日の一年の金產額の半分に過ぎなかつた。然るに千四百九十二年にコロンバスが初めて亞米利加を發見して後ち金の產額は大いに增加して來たのである。

## 三　南亞金鑛山の發見

此の如く米國發見後は金產額が增加したとは云へ尚ほ一年の產額は一億弗に過ぎざりしが千八百八十四年に南亞弗利加トランスバールに金鑛山を發見し千八百八十六年にトランスバール政府此地を公認し翌年其地に石炭を發見してから金鑛業は盛大となつたが其地の金は其粒の大きさが甚小でどうしても從來の混汞法では金は取れなかつた。混汞法とは金鑛を碎き水銀と水中にて攪拌し、金粒を水銀中に溶解させて後ち絹の鞣皮にて搾りて金粒を取るところの方法である。それで千八百九十一年マクアーサー及びフォレストの兩氏は靑化法と云ふ新しい方法を發見した。此法では金鑛を細粉にして之に靑化加里の千分の三溶液を掛けると金が此液に溶ける。之を亞鉛で還元するのである。此法は實に意外な好成績を現はし急に金の產額が一年に數億弗を增加して來た。實に學術上の發明の力は偉大なものである。此方法の發明があつた計りで世界の金產額が甚しく增加して來て其前には年に一億弗しか出なかつたものが今では五億弗即ち十億圓に達せんとして居るのである。此事は經濟學上決して見逃してならぬことである。

## 四　朝鮮の金

朝鮮は今でも金が出て居るが餘程太古の時から金を產して居る。我國の神代から此記事があるが其金が日本に入つて來たのは神功皇后の時から後のことである。其後應神天皇の時、推古天皇、皇極天皇の時にも彼地より金を我國に貢して居る。されど我國には金を出さざりしが天武天皇太寶元年に對馬から金を貢したことの記事がある。其以後一切其事がなかつたから此金の發見は恐らくは三田首五瀬の詐僞であらうと疑はれて居る。恐らくは朝鮮から來た金ではなかつたらうか。

## 五　本邦金の發見

聖武天皇は最も篤く佛を信じ諸國に國分寺を建て奈良に大佛を作り、費すところ銅四百八十八噸、金四十三貫五百八十一匁であつたが之に塗るところの金が不足するので諸國に令して大いに金を求めた。此大佛の出來た翌々年聖武天皇の末年即ち天平勝寶元年神武天皇千四百九年西洋紀元の七百四十九年に陸奥國小田郡より黄金を獻じた。此が本邦に僅かに金を産した初めである。「天皇喜ぶこと甚だしく幣を奉じ畿内七道の諸社に告げ四月甲午天皇東大寺に幸し盧舎那佛の前殿に御し自ら北面して佛像に對し皇后、太子、並侍し、群臣百僚殿後に列す」と云ふ大變な騒ぎで、之を賀する歌に、「すめらぎの御代榮えんと東なる路の久山に黄金花咲く」とある。此から黄金花咲く陸奥なる枕語が出たのである。

此に記する小田郡は何れなるか不明であるが傳ふるところによれば遠田郡涌谷の地箆嶽の麓で今でも黄金神社と云ふのがある。此地では今でも少しは砂金が出るが大した金の鑛脈がないから此傳説は誤謬であると云ふ人もある。

## 六　陸奥の金

此陸奥の金は初め砂金であつたが後は山金を取るに至つた。そして其産額は頗る多量であつたと見えて發見と同じ月に陸奥守百濟王敬福は黄金九百兩を驛馳して獻上した。發見後四年目には「陸奥國の調庸は多賀以北諸郡をして黄金を輸さしむ」と云ふことが記されてある。當時は金の價も大いに低廉で正丁四人をして金一兩に代へしむと云ふことが知られる。正丁四人とは壯健な男四人一日の給金を云ふのだから今の價で一日の給金を壹圓五拾錢としても六圓で金一兩即ち四匁が買へるのだから金一匁は壹圓五拾錢也に過ぎない。今は金一匁は五圓だから今の三分の一であつた。此でも奥州の金は如何に多かつたかが知られる。此の陸奥の金は本邦經濟界に重要なる位置を占め、それが源氏の鎌倉幕府まで續いて居る。

## 七　本邦金貨の初まり

陸奥の金の發見後二年にして駿河より錬金砂金を獻じ、世上にある金は次第に多くなつて行き貨幣として使用するものが多かつたが私鑄稍多く人民の迷惑は少くなかつたので天平寶字四年即ち金發見後十二年に開基勝寶、太平元寶、及び萬年通寶の三種の錢を鑄る。皆同形で今日の一文錢と同一の形をして中に穴が明いて居る。此開基勝寶と云ふのは金錢で太平元寶と云ふのが銀錢で萬年通寶が銅錢である。此が本邦で金貨の出來た初まりである。此の時の銀錢十をもつて金錢一に換へたのである。但し重量はよく分らないが金銀の比價は十倍より廉かつたと思はねばならない。金錢と銀錢とは同形であつたらしいから如何に考へても此時の本邦の金産額は餘程多かつたと思はねばならない。何となれば此時のみ金貨の鑄造があつて其後は全く此事がなく、只銅錢のみが作られたからである。

其後に至り金の出でかたが少なかつたから儉約するより外はなく、弘仁六年神武天皇紀元千四百七十三年十月には五位以下の者は金銀を飾りとすることを禁ぜられ、其後二十一年には公私とも金銀泥を用ふることを禁止するの勅令が出た。其後八年を經て甲冑飾の外金銀を用ふることを禁止せられた。

## 八　前九年の役

陸奥の俘囚即ちアイヌの頭目安倍貞任が亂を起したので其追討を源頼義に命じたのが天喜五年で本邦紀元千七百十七年に當り金發見より三百八年を經て居るが其間陸奥の金は引續いて出た樣に思はれる。そして貞任自身が金山師の頭であつた樣に思はれる。今でも岩手縣の地方を歩くと安倍貞任の掘つた跡と云ふのが所々に見られる。私は近時[illegible]私記と云ふのを見たが其中に南部金山の記事がある。此金山の附近に田畑の訴訟が起り其判決が容易に極らず明日にも其判決が下されようとするとき其原告である某婦は一包の薬籠を裁判官の家に持つて來た。之を能く見ると一杯砂金が附いて居り之を洗つたら澤山の砂金が取れた。それで賄賂として持つて來たのだらうと云つて之を責めたら其女の云ふにはそんなことではありませぬ。昔此地の主人安倍貞任の時は盛んに鑛業をしたと聞きましたが、今は何處だか知つた人もないが恐らくは此地が其金山の跡ではなからうかと申し、此偶然のことから金が發見され南部金山となつたと云つてゐる。此南部金山も何れを云ふのか今聢かではない。兎角安倍殿が金鑛業をしたことは確實と思はねばならぬ。かく金鑛業は安倍氏を助けて甚だしく奢侈を極め、前太平記第二十七卷に、「酒肉珍膳丘の如く充ち金銀財寶を水の如く費し」とある。此安倍氏も源頼義と清原武則等のために亡ぼされた。

## 九　後三年の役

清原武則は安倍氏を亡ぼした功により陸奥を領したが眞衡に至りて勢甚だ強く一族皆臣の如く從つた。眞衡の養子小太郎成衡のために多氣權守宗基の娘を取りて嫁となす。眞衡大いに喜び金銀絹布馬鞍に限らず家々の重寶を出して之を饗したが其時出羽國吉彦秀武は祝のために來り中庭に入り雨打の處に伏し拜み朱の盤に砂金を堆く盛り自ら手に捧げて久しく眞衡の挨拶を待つて居たが眞衡は奈良法師と碁を圍み一心になつてゐたので秀武の來て居つたことを知らなかつた。秀武は老いて居る上に長く捧げて居つたから手が萎へてもう捧げて居ることが出來ず、それに眞衡は何時まで立つても振向きもしない。秀武は大いに憤慨しつゝ辛々心に思ふやう前九年の役に眞衡のみが功があつたのではなく、秀武の一族何れも働いたのだ。それに眞衡のみが威張つて居るのはけしからん。よし覺えて居れと砂金を庭に撒きまいて歸つて了つた。眞衡は非常に怒つて追ひかけたが及ばなかつた。これから清原氏の一族は二つに分かれて戰ひ源義家は眞衡を助けて武衡を

討ち遂に之を亡ぼした。之を後三年の役と云ひ、此戰の直接原因は砂金であつた。

## 十　中尊寺

後三年役に清原の一族は二つに分れて爭ひ遂に二つとも亡びて了つた。其時藤原清衡功ありて陸奥の押領使となり清原氏の領地を領することになつた。此清衡は大なる金山師で居城平泉の附近に金澤と云ふ所があつて當時盛んに砂金が出たと傳へられる。其他又此附近の小川に砂金のある所は今日でも澤山にある。只其量が少いので今は仕事にならぬが其頃は能く砂金が出たものと思はれる。されはその金に飽かして中尊寺の建立を初めた。京都より態々佛師運慶（又は雲慶とも書く）を呼び降し丈六の佛像を作らせ其謝禮として金百兩、鷲羽百尻、七間經水豹皮六十枚、安達絹千匹、希婦細布二千端、糠部駿馬五十匹、白布三千端、信夫毛地摺千端、を贈り又別祿と稱して生美絹船三艘を與へた。此時東鑑には「佛師抃舞の餘り戲論して曰く喜悅極りなしと雖ども猶練絹大切なり」と。清衡の子基衡は折角贈つた品に佛師不足とありて悔み且つ驚き更に又練絹を船三艘だけ贈つた。此時作つた金堂にも全部金が塗つてある。又基衡の子秀衡は金雞山の土中に漆一萬杯黃金一萬杯を混へて埋めたと傳へられて居る。又此金堂の側には經堂があつて此に紺紙金泥の一切經が一杯に詰められ今日まで傳はつて居る。此經は實に國家の至寶として觀せられる。

## 十一　平家の金倉

此時藤原氏よりの一年の貢金は四貫七百七十七匁で仁平四年には金四百五十兩を貢した。此の他に平家には時々多量の金を贈つた。治承二年には陸奥國氣仙郡より砂金十二貫五百匁を平重盛に贈つた。治承四年には平重盛は嚴島神社に砂金千兩、南鐐百を祈禱料として差出した。之も奧州の金であつた樣である。此の如く平家の隆盛も實は奧州の金によつたやうに思はれる。

## 十二　金賣り吉次

此他に又民間の金は商人が買ひ集め之を京都に持ち出して種々の物と交換した。其一人が彼の有名な金賣り吉次である。金賣り吉次が奧州と京都との間を往復したに就いて京都では此人のことが評判となり遂には近衞公の御姫樣が此人の妻となつたと傳へられて居る。如何に吉次の名聲及奧州の金の名が京都にて高かつたかゞ窺はれる。

## 十三　義經

元來舊時代の税は米とか絹とかの品物であつたが此等は永く貯へると云ふことも出來ず又何時でも他の品物と交換すると云ふ譯に行かない。それで金銀銅の類を貯へて取扱に便にしたいと云ふのが英雄の希望である。殊に金であれば多額の價の物を所得することが出來る。そ

れで金を持つ者は天下を支配するに至るのである。金賣吉次が京都で名が高かつたのみならず、平氏の勢が半ばは奥州の金にあることを知つた義經が何で之を見逃さうか、早速金賣吉次に從つて奥州に伴はれることを懇願した。吉次にしても義經の樣な英雄を伴ふことは途中の危險を保護する用心棒ともなるのだから喜んで義經の請を容れた。案の定近江の國では熊坂の長範に襲はれ大亂鬪を演じて大功を現はした。そして奥州に行つては藤原秀衡に紹介され其信用を得た。

丁度其頃源頼朝は伊豆に兵を擧げたが元より一文の軍用金もなかつたので一敗地に塗れ、遂に大木の洞に隱れて一身を全うするに過ぎなかつた。そして再び兵を擧げた頃、義經が秀衡の後援を得て馳せ參じたので頼朝が喜んだのも無理はない。頼朝は義經の兵力よりも其後援者たる秀衡の金力の方が餘程頼みになつたのであらうと思はれる。

此金の援けで平家を亡ぼしたが愈々天下を取つて見れば鎌倉には軍用金はないし、義經には軍用金が充ちて居るとすれば之が頼朝に恐れられたに相違ない。腰越で頼朝の絶交狀を受け天下に五尺の身を置くところもなく又秀衡の懷に逃げて歸つたが此處に歸られては頼朝に取つて恐怖の極であつた。それに奥州の金を取つて鎌倉幕府建設の資金としたい一念から無理難題を言ひ掛けて義經の首を取り又遂に藤原泰衡を亡ぼして之を自領とした。そして金の採鑛は奥州に止まらず遂に北海道にまで及び元久二年將軍實朝の時には尻内に一大砂金地を發見し甲斐守荒木大學は八百名の坑夫を率ゐて彼地に派遣され此處に大金を得たことがある。

此の如くなりし奥州の金も北條氏の代に至つては大いに衰へ又幕府に輸さるゝものなく北條氏には軍用金がなかつたので無援となり遂に倒れた。

## 十四　マルコポーロ

頼朝の奥州征伐があつてより大凡八十年の後伊太利のマルコポーロは支那に來り日本の事を記して故國に傳へた。其文に曰ふ「ジパング（日本）人は多額の金を有し其源は掘れども盡きず」と。更に金にて屋根を葺き又柱を作る等の事を傳へた。此言は架空の如く思はれたが實は然らずして恐らくは中尊寺の記事又は同地毛越寺の事であらうと考へられる。此事は直ちに元王忽必烈の頭腦を刺戟して遂に元軍の來寇となり後にはコロンブスの亞米利加發見となつた。嗚呼金なる哉。

## 十五　金輸出

本邦より金を支那に輸出して他のものと換へたのは其後も久しい間續いた。承安三年には後白河法皇は胄及び染革三十張、砂金百兩を宋國に送つた。建治三年後宇多天皇の時には商人を元に遣はし金を持つて銅錢に易へしめた。應永八年には足利義滿金を明に贈つた。其他支那との交易には多く金又は銅を貿易の資となした。されど此頃の金は或は砂金のまゝ又は斤兩を計つて使用したもので貨幣の形としたこ

とは更に後世の事である。此頃の通貨は大抵支那より輸入したる銅銭で事は足りて居た。

## 十六　亂世の英雄

前既に述べた樣に亂世の英雄と云ふ者は如何しても金を持つて居なければ軍用を充たすことは出來ない。それで何れも鑛業殊に金鑛業に熱心になつた者で皆鑛業師である。大内氏は出雲石見周防長門等六ヶ國を領し大に鋼鐵を出したが、就中、出雲の大森銀山から盛に銀を出し天文年間には同山より大内家に毎年千枚の銀を貢した。此大森銀山は其後大内、小笠原、尼子、毛利、四氏の爭奪の中心となつた。九州にては大友氏が大鑛業家で大分縣の各所にて多量の金を取つた。此大友氏は熱心な耶蘇教信者で此に献じた金も甚だ多かつた。其代りに大砲等は海外より輸入された。應仁の亂で一方の主將であつた山名宗全が生野鑛山の持主で元龜年間には無限の銀を得たと記してある。飛騨國の國守金森長近は神岡茂住の銀山及大谷金山を採掘し美濃の稻葉貞通は畑佐鑛山を稼ぎ上杉謙信は佐渡の砂金を採つた。武田信玄は甲斐の金を採つて金貨百十九貫三百七十匁を作つた。此金貨は今のものと同じく圓形であつた。之を甲州金と云ふ。今川義元も金山師で享祿元年には駿河の金山より金を採つて判金を作つた。伊達政宗は半田銀山より大に金銀を採つた。岩代國輕井澤銀山は其後大に繁昌して年々精銀百四十四貫を領主蒲生氏に献じた。此時に於て前田利家のなした事業上の功績を忘れてはならない。利家が上杉、宇喜田、徳川、石田とともに五大老であつた際は實に金銀に豐富で內帑の充實して居つたことが其原因でなければならない。天正十一年には加賀國澤村山の金鑛を、四十二年には能登國寶達山の金鑛を開掘して大に金判を鑄造し又銀判をも作つた。加賀の南鉛及花降は即ち其銀判である。慶長十六年には越中國新川郡鑓谷に銀坑を開き其翌年德川氏に贈つた書に初花進上とある。此初花とは銀の事である。

## 十七　豐臣秀吉

豐臣秀吉は元と卑賤より身を起しただけあつて大に世情に通じ且つ金銀の貴むべきを知り極端なる鑛物國有主義を振り廻はし金銀銅鉛錫の類の產出したるものは必ず一度は京都に運んで來て秀吉に納め其檢閱を經て後ち入用の分だけ拂下げの手續を取らせた。又攝津の多田銀山を開いて多額の金を得、又奥州佐渡其他より金を集めた。殊に佐渡の金を取らんがために上杉氏を越後より會津に遷すことを敢てしたの其處では多くの金を取ることが出來なかつた。此樣にして集めた金銀は大名を買收するに供せられ天正十三年秋の初めには金五千枚銀三萬枚を大名小名に頒ち天正十七年五月には更に金銀三十六萬五千兩を諸侯に與へた。此の如く秀吉は兵に力を以つて威服した計りでなく一方には金銀を以て諸侯を買收した。人物の買收は決して近時の發明でなく秀吉の時より盛に此法を用ひた。家康も引續いて此法を用ひた。

## 十八　德川家康

愈々豐臣氏も大阪冬陣及び夏陣の二役に亡び、其有せる金の法馬も集まれる浪人の手に散らされ又一部は德川氏の有に歸した。家康ほどの智者にしてどうして金銀鑛業の必要を悟らずに居らうか、大々的發展とあつて先づ信玄の舊臣大久保長安を招き今で云ふならば鑛山局長と云ふ格となし大久保石見守と尊び盛に鑛業を奬勵した。而して此長安も亦中々の智者であつたと見えて到る處に仕事が當り先づ伊豆の金鑛山を開き、佐渡では一大富鑛に掘り當て、石見の大森銀山を改良し、元和中には信州松本に銀鑛を得、寛永中には生野の銀山が盛大となり、明暦中越後に金山が始まり、寛文中薩摩及播磨に金、銀山が興つた。家康自身が已に鑛山局長で又技師長の格となり天正九年即ち信玄卒し足利氏亡び愈織田氏の世となつた時、家康は駿河國日蔭澤の金山にあり山例五十三條即ち當時の鑛業法を自筆にて草し本多中務少輔に渡した。此山例中にて金に關係ある部分を拔錄すれば左の如くである。

一、名城の下たりとも楯うち於有之は掘採不苦候。
一、山師金掘師を野武士と號すべし。
一、山師金掘師山法師の儀は國々關所見石一通りして可打通事。
　但し見石の儀は兼て關所に於て備置、見分させ可通事、備無之は其關所不念たるべし。
一、金山見立候節其領主國主へ可訴は勿論村役人山先相添可申候。
一、山師金掘師に於ては山內諸事停止たるものなし舖內にては今日ある命ならざればなり。
一、山金、柴金、川金、何方に有之候とも勝手次第掘採候儀不苦事。
一、金山相働其內諸國に於て國法なりと申し格別麁末慮外の儀又は故なく差障むつかしき儀出來候仔細を改め不濟儀は奉行所へ可申達事。
一、山師金掘師人を殺し山內に駈こむとも留置仔細を改め何事も山師金掘師の筋明白相立候はゞ留置相働かせ可申事。
　但し主人親殺の科人は一切隱置き間敷其科後日相顯れ逃れ難く候はば早速繩を掛け差出可き事。
一、一山は一國たるべし、他の指揮に及ばず。
一、山師金掘師の筋紀は金山師正面、次に銀山師、次に鉛山師次に銅山師と順列たるべし。
一、諸人金銀の寶を以つて世を送るも偏に山師金掘師のする所にして其功甚大なり。
一、目前にこがねの山ありとも山師金掘師にあらざれば此を用ゆることを知らず。
一、一山の掟は諸山にわたり諸山の掟は一山にわたるべし。
　右の通急度相守可相背かば山例に可觸もの也。
　天正元年癸酉閏五月　家康判
　本多中務少輔へ

右御山例五十三條の儀は家康神君駿河日蔭澤に於て御自身御筆被遊仰出候事。

此山例によれば如何なる名城の下たりとも鑛床のある所掘穿苦しからずと云ふのだから今日の鑛業法より一段進んだものである。又鑛山業者及び鑛山技師は鑛物標本を持ちさへすれば手形がなくとも關所を通

行せしめた。即今日の地質學者鑛物學者の如きは無論關所御免と云ふとこである。又鑛山に大きな權利を與へ一山は一國たるべし他の指揮に及ばずとした。人殺の惡人でも主人殺か親殺でさへなかつたら鑛山に逃げ込んだら其罪を許して働かせる。席順は金山師第一で正面に座り次に銀山師、次に鉛山師、其次が銅山師であつた。こんなに金山を奬勵したから慶長六年即ち關ケ原役の翌年佐渡相川にある今日の佐渡金山を發見し其後三十九年に薩摩國に山ケ野金山を知り又二十年して同地に芹ケ野金山を出した。

此頃の佐渡金山の盛況は實に思ひ見るべしで慶長見聞集には、「佐渡島は只金銀を以つてつき立てたる山なり、此金銀を一箱に十二貫目入れ合せて百箱を五十駄つみの舟に積み、毎年五艘十艘づつよき風波に越後のみなとへ着岸す、」とあり、此文を一見する時は如何にも大きな法螺に見えるけれども實はさうでない。元來佐渡の金は多量の銀を含み其中に百分の五の金を有するに過ぎなくて銀一匁を十三錢とすれば一匁の粗金銀の價は三十八錢である。されば一箱十二貫の價は四千五百六十圓之を百箱一艘の舟に積むとすれば四十五萬六千圓となり、此の如き舟五艘で二百二十八萬圓、十艘で四百五十萬圓で其の位のものは毎年佐渡から出たたらうと思はれる。

## 十九 判金

此以前にも時々金貨を作つた記事はあるけれど、大判小判の形態を備へ大に世に行はれるに至つたのは、天正十六年秀吉の時代に大判及小判金を作りしを以て嚆矢とする。之を天正判と云ふ。續いて文禄四年に駿河墨判、小判金、及び武藏墨判、小判、が鑄造され、慶長年に又判金が作られた。是れは此頃産金の夥多となつたのを證するのである。慶長小判十兩の價は左の如くである。

一、慶長小判十兩、重四十七匁三〇〇四九三六

| | | |
|---|---|---|
| 内 | 金、 | 四十匁五三一七九二九六五八四 |
| | 銀、 | 六匁七四〇三二〇二三八 |
| | 雜、 | 〇匁〇二八三八〇二九六一六 |

| | | |
|---|---|---|
| 千分率 | 金 | 八五六・九 |
| | 銀 | 一四二・五 |
| | 雜 | 〇〇〇・六 |

價二〇三圓五二（銀一匁價十三錢とす）

德川氏の作つた判金に二様あつて一を大判と云ひ十兩であり他を小判と云ひ一兩である。そして前に示した如く一兩は略二十圓である。大判には必ず當時の造幣局長と云つた格の後藤光次の手記した墨字があつて此字が消えると通用しない。其時は又大金を拂つて光次の字を書いて貰はねばならない。それで一々眞綿に包み箱に入れて字の消えない様にする。所詮、大判は之を大事にして餘り通用せぬ様にしたものである。一兩の小判には政府の刻印があり又之を取扱つた人が自由に刻印をする。此大判と小判とは楕圓形で所謂小判形であるが二十

一分、二朱、等は長方形である。只一つ慶長二分金と稱するは圓形で今日の金貨に似て居る。慶長以後にも種々の判金が造られたが何れも同形で只裏の刻印を見なければ分らない。

此の如く德川幕府の初めには金の産額が夥しく此金を使つて諸侯を買收した位だから諸侯から税を取るの必要がなかつた。只其地の土産物を獻上したに過ぎなかつた。即ち德川幕府は税を取らぬ政府であつた。こんな理窟に合はない政府は世界にない。それで如何して幕府の費用を支へたかと云へば此判金を改鑄して粗惡なものとなし其益金で生活していつた。此の樣に改鑄に改鑄を重ねて遂に改鑄が出來ない程度まで墮落したところで幕府は亡びた。即ち幕府の滅亡は金の缺乏によつたもので豫定の事實で全く經濟的より來て居る。五代將軍綱吉は大公方で人民を苦しめた許りでなく財政方面でも放漫であつたから財用が足りなくなり、そこで柳澤保明に命じて判金吹替へをやつて元祿判と云ふものを作つた。其裏に元字の刻印があるので之を特徴とする。慶長判金中には一兩に四匁の金があつたものが元祿判には二匁六分の金しかない。それで物價は一時に騰貴する、幕府は恨まれる。此時に當つて幕府の惡吏が赤穗浪士に殺されたので世の喝采を得たのも無理はない。幕府は元祿判の惡貨と慶長判の良貨とを引換へたため五百萬兩を利益した。元來慶長判金はどれだけ作つたかは元祿年中に書類が燒失したので分らないが此時引換へたもの許りでも千五十二萬兩即ち二億一千萬圓で引換の益金は五百萬兩即ち一億圓に近いと云ふから實にぼろい儲と云はねばならない。かくの如くに幕府の財用は益々缺乏し而して山から金は殆んど出ない。それで惡貨を作るの他に途なく寶永七年即ち元祿判の作られてから僅かに十五年で又改鑄をなし一兩に金二匁を含ませた。之が乾字判である。

吉宗は中興の英主で惡貨の世を害するを知り寶永七年新貨を作り全く慶長判と同一のものを作り、之を正德判と云ふ。されば物價は下落したが米價の下落は却つて武家の困窮を招き且つ幕府には用は足らな鑄るだけの金が無かつたので元文元年又金貨を改鑄した。之を文字金とも云ふ。其一兩中に二匁二六九の金があり次いで文政二年文政判を作つた。其一兩には一匁九五二の金を含んで居たが、天明八年作るところのものは一兩中に一匁六九七の金を含み安政六年には一匁三六三の金を含める一兩判を作り其翌年萬延元年の萬延判の如きは實に五分〇七の金を含める一兩判金である。かくてそれより七年の後には遂に幕府の滅亡を見るに至つたのである。

## 二十　金の流出

本邦の金は初めは輸入時代で神代より聖武天皇末年までは朝鮮より金を輸入し之より自給時代に入つたが金が多くなるに從つて支那の奢侈品を輸入するのに金を以つてなし、平氏の頃已に金を以つて支那のものと換へたやうに思はれる。それは平泉の倉庫中に支那の輸入品の多かつたことによりて時々窺はれる。其後足利氏の頃には金を以つて

支那の文錢と交換したことがある。

天文十三年即ち西曆千五百四十四年の頃より外國貿易が初まり外國より輸入する物は羅紗、銃砲、雜貨の類にして本邦よりは主として金を出し又基督教牧師に捧げたものが多く慶長六年より正保四年まで四十六年間に金六百十九萬二千八百兩、銀百十二萬二千六百八十七貫、銅二億二千八百九十九萬七千五百斤即ち本邦の金の三分の一、銀の三分の二が流出したと新井白石は云つて居る。本邦の外國貿易に制限を加へたのも、基督教を嚴禁したのも此流出が一つの原因であつた。

殊に殘念で堪らないのは安政四年に於ける條約締結當時の金の大輸出である。當時倫敦に於ける金銀比價は一五、三八であつたのに本邦では僅かに六、三六であつたから其割は殆んど二十三割に相當し外國より銀を輸入して來て之を金に換へ此金を對岸香港に運んで銀となし此銀は本邦にて金に換へられた。此の樣にして香港との一航海の利益は實に二十三割に及んだ。此の如くして僅かに數年中に本邦より流出した金の總額は五千萬兩即ち十億に近かつたであらうと論ぜられるに至つた。此の如くして本邦には銀の充溢を見て物價は一度に騰貴した。當時人心の動搖は極度に甚しく其の頃の歌に「アメリカが來て金玉を引き上げるオロシヤ又來て引上げるかな」此歌の意味は穿いたと云ふのは表面上のことで實は外國人が來て金を引き上げて流出せしめると云ふことを諷したものである。かく物價が一時に騰貴したので幕府殊に井伊掃部守の惡まれたことは非常なもので其櫻田門外にて血染雪を降らした時國を舉げて大喝采したのも理窟があることである。

即ち徳川幕府は金があつたので貯り金が無くなつたので亡びた。それで明治となつては萬事維新とともに金貨にも一定の金を含ましめ一圓中に三分九九を含ましめたが明治三十年金本位制を布くに及んで其含有を半減して拾圓金貨中に二匁を含ましめることとなつた。

## 二十一　金鑛業

本邦古代の金鑛業は砂金であつたことは明かであるが、砂金は鑛業開始後數年にして採り盡されたので之より山金に移り之を碎いて砂金として淘汰して金を採つた。

水銀を用ゐ混汞法を行つたのは明治四年で生野にて混汞樽を用ゐ六年佐渡にて鍋混汞法を採用した。近頃まで各金山に用ゐられた混汞搗鑛法は明治九年佛人オーギエーが薩摩山ヶ野金山にて其法を傳授したのに始まる。

此方法が本邦に傳へられてから昔日の廢鑛も製錬盛に行はれ一時產金を増加せしめたが廢鑛の盡きるに從つて產金も減少したが、明治十八年頃より各所に鑛山が開かれ次第に產金を増加した。されど愈々鑛業の増加したのは明治二十七八年戰役の後である。此時臺灣も本邦に加へられ内地には薩摩の牛尾、大口及で肥前の波佐見、大分の鯛生野等の有名金山が一時に發見され且つ又北海道枝幸にも有望なる砂金地が初まり產金は急歩調で増進し初めた。

今日本内地のみの産金に就いて云へば、明治八年に四十六貫餘であつたものが二十年後の明治二十八年には五倍に増加して二百三十九貫餘となり、其後六年間に一躍して明治三十四年には十四倍の六百六十貫餘となつた。此中で増進の著しいのは三十二年以後で其年の産金を其前年たる三十一年に比するに約百三十八貫を増し四割の躍進である。此の様な急激な進歩は全く青化法の御蔭である。

此青化法は南亜弗利加トランスバールに於てマクアーサー及びフォレストの両氏の發明である。其頃此地に大金山が發見され混汞法にて之を製錬したが其金の半額を採取したのみで殘餘は鑛尾と一緒に廢棄され只山と積るのみであつた。此時青化法の發見があつた。此法によれば鑛石中の約九十五%まで金を採取することが出來る。故に本邦の産金も大に宜しく其後の産金は一時に増加した。然し明治三十六年頃に至つて其絶頂に達し鑛尾も次第に盡きるに至つたので日進月歩の學理を應用し大機械の運轉を開始し多量の金鑛を製錬することゝなり其結果は金産額の上に現はれ明治四十一年より急に産額を増し四十一年には四十年の二割二歩を増し四十二年には更に増して前年より一割二歩の増加であつて内地のみにて千〇七十八貫を出し明治八年の二十三倍に相當する。同年臺灣は四百三十六貫を産したので之を加へれば千五百十四貫となる。其後交通の便利が益々開けるに及んで金鑛は其山にて製錬するのを可とせずに遠く銅山に運び溶鑛製錬に附するのを可とするに及んで金山は獨立の鑛山でなく銅山の副業となるに到つた。

昭和二年本邦内地の金産額は二千五百六十貫、朝鮮で千九百〇八貫、臺灣で八十三貫合計四千五百五十貫で二千〇七十五萬圓にして明治八年の約百倍に相當するのである。明治三十年に金貨本位が本邦に布かれる時松方伯は嘆じて曰く、若し本邦の産金が五百萬圓に達したらには金貨本位は安泰ならんと。當時の本邦金産額は百四十萬圓であつた。若し伯をして今日の盛況を見せたならば何んと云ふであらうか。

## 二十二　世界の金

最後に世界の金産出の狀況を少し考へて見たい。千九百二十五年世界の金産額は三億九千萬弗であるが英國は各所に豐富な金産地を有し南亜弗利加トランスバール國のランドの産金地の如きは十數哩の間豐富なる金を含んだ厚い礫岩を有し其金は實に掘れども盡きない狀態である。加奈陀には彼のクロンダイクの砂金地があり、濠洲には其西方一般に廣い金野に覆はれ若し彼地に勞働者の缺乏がなかつたならば今より幾倍の産金があるかも知れない。其他新西蘭ローデシア等數へ來れば英領中の産金の豐富なることは實に羨望の至りである。今日でも英領中の産金は世界の七割三分に達しようとして居る。此に米國を加へれば世界の八割五分は實に英領國民の出すところである。何んと云つても今は實に英米の天下である。而して日本の金産額は世界の二分六厘に相當する。

此の如く金の尊ばれる所以のものは金即ち貨幣であるからである。

金以外の物は賣つて貨幣とするのである。此賣ると云ふことが中々困難な仕事である。又準備金を有することは紙幣の發行を容易ならしめ又世界の信用を集めることが出來る。昔徳川氏は貨幣政策に失敗して亡び今の政府は金解禁を實行して起たんとして居る。金解禁を忠實に實行せんとするには産業を興隆させなければならない。殊に金鑛業を振起させなければ到底その良果を得るとは出來ない。金鑛業を振起させる第一の方法は、交通の便を開き鐵道を以て銅山と金山とを聯絡せしめ、第二に金鑛石の運賃を引下げ、第三に硫酸鑛業を起し且硫酸を使用するところの工業、殊に硫酸アンモニヤ工業を助長せしめて銅山の煩累を除き、第四に金の地質鑛物の研究を盛んならしめて金鑛山の發見を容易ならしむる事などにある。

茲に千九百二十六年に於ける世界の金産額を左に列擧する、但し一瓩は一千三百三十三圓。

| | |
|---|---|
| 亞弗利加 | 三〇九、六三一瓩 |
| 米國 | 六九、六三〇 |
| 加奈太 | 五五、六〇〇 |
| 露西亞 | 三〇、八六〇 |
| 墨西哥 | 二四、〇三一 |
| ローデシヤ | 一八、四八二 |
| 濠洲 | 二〇、三一六 |
| 印度 | 一一、九四九 |
| 日本 | 九、五七五 |
| 西亞弗利加 | 六、五二〇 |
| 蘭領東印度 | 三、五八八 |
| 白領コンゴ | 五、二五二 |
| 新西蘭 | 三、九一二 |
| 朝鮮 | 五、九二五 |
| 秘露 | 二、九一〇 |
| 伯剌西爾 | 三、一七六 |
| 支那 | 三、四二一 |
| 哥倫比亞 | 二、三四七 |
| 中米及西印度 | 二、七七〇 |
| 比律賓 | 二、八三八 |
| 智利 | 一、八三九 |
| 羅馬尼 | 一、二六三 |
| 佛領ギニア | 一、三二〇 |
| 佛蘭西 | 一、一〇〇 |
| 其他 | 一、四九二 |
| 總計 | 五九九、七五三 |

**重要國金産額**

| | | 百分率% |
|---|---|---|
| 英國 | 四三六、四一〇瓩 | 七二、七八 |
| 米國 | 七二、四六八 | 一二、〇八 |
| 露國 | 三〇、八六〇 | 五、〇六 |
| 墨國 | 二四、〇三一 | 四、〇〇 |
| 日本 | 一五、五〇〇 | 二、六二 |

# 別天地マダガスカル

大山卯次郎

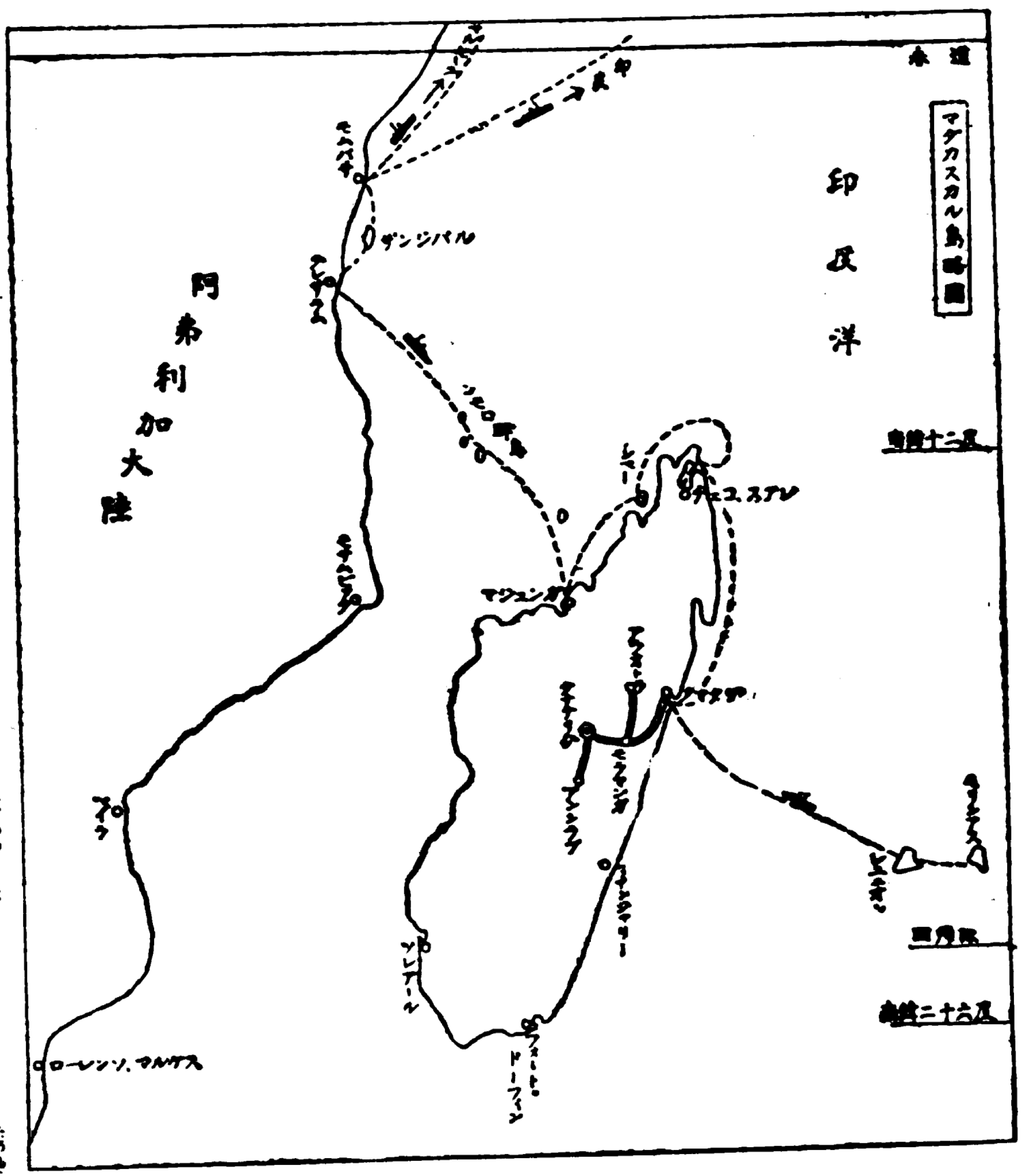
## マダガスカル島は眞に世界の別天地

マダガスカル島は南半球に於て阿弗利加大陸の東岸から少し離れた海上に在る佛蘭西の領土である。其の形は恰も人間の左の足跡の様であつて、南北の最も長い處は九百八十哩、東西の最も廣い處は三百六十哩、其面積は約二十二萬六千平方哩に達して居り、日本の全領土から北海道と千島を除いた位の大きさである。併し其位置が世界の大道から離れて居り、且つ佛蘭西の政策が極端な繩張り主義を採つて居る爲に殆ど他の世界から遠ざけられ、同じ阿弗利加の内でも特に別天地の様な趣がある。先づ第一に奇妙な事には、此島は阿弗利加大陸に接近して居るに拘はらず、其動物なり植物なりが大陸の夫と非常に違つて居るのみならず、其或ものは却て遠方の印度又は南洋諸島の夫に類似して居る。例へば大陸の方には世界に於て珍しい程獅子、象、豹、麒麟、縞馬抔が澤山居るに拘はらず、マダガスカル島には夫れが全く居ない。又植物の種類も餘程違つて居り、阿弗利加大陸の東側にはバヲバブと云ふ枝の少い裸體の様な巨木が澤山有るも、對岸のマダガスカル島には夫が全然見當らない。然るにマダガスカル島には有名な旅人木が至る處に欝叢と茂つて居るに拘はらず、大陸側には夫がないのである。そう云ふ様なことは其實例が非常に多いのであつて、マダガスカル島は其位置から云へば阿弗利加大陸の一附屬地の様ではあるが實際に於ては全然別世界である。右に付地質學者の云ふ所に依ると、此島は元阿弗利加大陸の一部であり、阿弗利加大陸は其當時現在の印度洋の北半を占めて居た舊大陸に依り亞細亞大陸と接續して居たのであるが、或太古の時代に地殼の大變動があつて、右の舊大陸が海中に陷沒した爲、阿弗利加亞細亞の兩大陸が今日の如く分立することと成り、其際東阿弗利加海岸も亦陷沒し、マダガスカル島が今日の様に切り離されたのであつて、今日此島なり大陸なりで見る動物及植物は其後に發生したものである。是れマダガスカル島の多くの生物が阿弗利加大

陸の夫と大に異る所以であつて、マダガスカル島を世界の別天地と云ふのは決して過言でないと考へる。

## 地理的特色と美しい風景

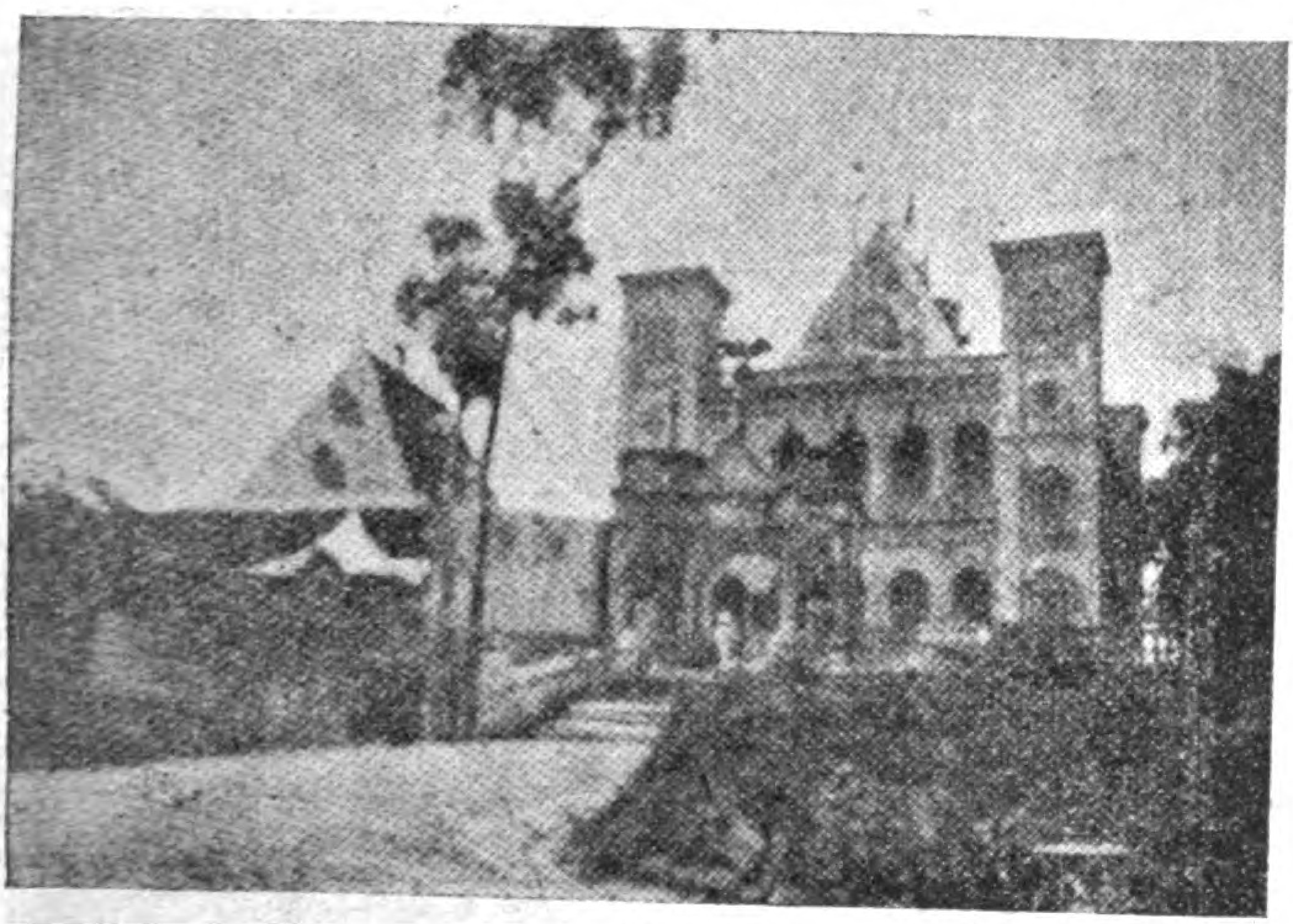
此島の地理的特色は内地が全體に大高原に成つて居ることである。即ち其形が平面的に人間の左の足跡の様である計でなく、立體的にも亦左足の甲の様に成つて居る。然かも其脊梁が東側に片寄つて居る爲に西部の方は土地の傾斜が割合に緩漫なるも、東部地方は全體に非常な急勾配の坂地に成つて居り、到る處に断岩絶壁が恰も屏風の様に重り合ひ、其間を無數の河川が激流となり飛瀑となつて落下して居る。加ふるに此方面は到る處鬱蒼たる森林で蔽はれ、又其森林が熱帯地特有の濃い緑なのだから、其風景が實に雄大であると同時に美しい。殊に中央高原に至りては峻山峻峰と云ふ趣はないが、地表全體に山又山と云ふ有様であつて土地の起伏が非常に多い。尤も森林は甚だ乏しい様であるが、彼方此方の山頂又は溪谷には緑樹巨巖が點々と聳えて居り、形勝の地には赤土造の土人の家屋が參々伍々と立ち並び、其地形の變化に富み且つ雅趣の豊なことは恰も箱庭の様である。殊に十月から四月迄は此島の春から夏の終に當る季節であつて、到る處の窪地は悉く米田と成り、稍小高い處には薩摩芋に似たマニオック、玉蜀黍抔が盛に栽培せられ、其風景の絶佳な事は世界に於て稀に見る所である。




マダガスカル島略圖

## 舊王朝の勃興と其末路

佛國がマダガスカルを占領したことに就ては中々の悲劇がある。元來舊王朝のウーヴ王室と云ふのは十八世紀の始に本島の中央高原に勃興し、大凡百年程本島を支配して居たのであつて、いざ是から西洋の文物を輸入し段々國の基礎を固め活躍し様と云ふ出昇を佛國の爲に挫かれたものである。尤も佛國は豫てから此島に野心を抱き種々畫策して居たのであるが中々思ふ様に往かない。殊に英國から烈しい裏面からの妨害があつたので大に當惑して居たのである。然るに當時英國は東阿弗利加の大陸に野心を抱き、ザンジバル島が甚だ形勝の地位に當つて居るので之を其手中に納めんとし、之に獨逸及佛蘭西の勢力が侵入して來るのを非常に恐れて居たのである。其處で一八九〇年に三國間で利益の交換が取り極められ、ザンジバルを英國、又マダガスカルを佛國の勢力範圍とすることに話が纒ふたので、佛國は直に



舊王宮

本島を其保護國とし様としたが、當時の女王ラボロナ三世は斷じて夫に應じない。其處で佛國は事面倒だと討伐の爲に軍隊を派遣し、一八九五年十月首府を陷ると共に本島を其保護國とし、翌年八月之を其領土とした。併しウーヴ王室は土民に對する政策上甚く傷けないこととし從來の榮譽を其儘保存せしめたが、軈て秩序の回復すると共に、當時の總督ガリエニーは此王室を保存することは有害無益と認め、一八九七年二月二十七日夜密に女王に謁見して退位並にレユニオン島に退去を迫り、否應なしに其夜の午前二時首府タナナリヴを後にタマタヴ港に向け下山せしむることにした。是れ實に馬島に於ける女王の永訣であつて其心情は眞に憐むべきものである。玆に於て總督は即時王朝廢止の府令を公布し府の内外に告示した。市民は曉に至り始て之を知つたが其時女王は既に去つて府中の人ではない、一同は只宮城を仰ぎ見て啞然たるのみであつたと云ふことである。因に女王は一旦レユニオン島に送られたるも、後佛領アルゼリアに移され遂に配所の土と成つた。

第二回關東篇近日配本

町下
所
社
二〇

# 第二回關東篇近日配本

町下 所 社 二〇

# 系

# 豫約募集

## 第一回配本近畿篇內容一班（重版出來）

特刷原色寫眞版十頁、並通寫眞版七百三十四面、航空寫眞百三十面 左の諸氏が擔當解說する。

京都大學教授文學博士**石橋五郎**。京都大學教授文學博士**西田直二郎**。京都大學教授川**村多實二**。奈良女子高等師範學校教授**帷子二郎**。彥根高等商業學校教授**田中秀作**。浪速高等學校教授**廣瀨淨慧**。京都大學地理教室**村松繁樹**。甲南高等學校教授**岡本重彥**。神戸商大講師、關西大學講師**田中薫**。和歌山師範學校教諭**三溝信雄**。風俗研究所長**江馬務**。橫濱高等商業學校教授**下田禮佐**。學習院教授**遠藤金英**。高野山大學教授**小野玄妙**。其他數十氏。

### 概論と地圖

◎近畿の地體構造概說　京都帝大教授　**中村新太郎**（二十枚）

◎近畿地方の自然地理　東京女子高等師範學校教授　**飯本信之**（八十枚）

◎近畿地方の人文地理　京都帝大教授文學博士　**石橋五郎**（八十枚）

◎近畿の天然產業　學習院教授　**遠藤金英**（三十枚）

◎近畿地方の商業と交通　彥根高商教授　**田中秀作**（三十枚）

◎近畿地方の沿革（歷史）　京都帝大教授文學博士　**西田直二郎**（八十枚）

□**特典**　豫約會員には**掛軸用新日本大地圖贈呈**

## 雄大な横斷鐵道

マダガスカルの大なる誇りは、東海岸のタマタヴ港から海拔五千呎と云ふ中央高原の首府迄、山又山の險路を突破して延長二百三十哩の横斷鐵道を敷設して居ることである。先づタマタヴを發し最初の五十哩程は狂瀾怒濤の印度洋岸を南に下り、夫より西へ西へと山を上つては又山に入り、谷を越え激流を横切り、或は晝尙暗き密林を通過し、或は斷岸絶壁の上に出で、天を摩する高峰を上り、遙に飛瀑の音を聞きつつ山脈重疊の奥地へ奥地へと侵入するのであつて、其光景は眞に壯又快絶である。此乘車約十四時間、旅行者皆苦を忘れ、時の短きを恨む感がある。但し線路は狹軌單線であつて、燃料は薪を使用し、速力鈍く且つ一週間二回の運轉なれば甚だ物足らざる感がないではないが、産業の未だ發達せない幼稚な野蠻地のことなれば已むを得ない次第である。因に此鐵道は一九〇四年十一月起工一九〇九年十月開通したのであつて、僅々五年の歳月で此難工事を成就した佛國技師の腕前は實に敬服の外はない。

## 氣候と風景の善いタナナリヴ

本島の首府はタナナリヴと云ひ、氣候が温和で風景が實に美しい。但し中央高原の中央部に於て海拔約五千呎の高臺の上に立ち、恰も本島の心核とも云ふべき形勝の地位を占めて居る。

此地は舊王朝の首府であつた處で、市街全體が小高い丘陵の坂地に築造せられ、赤煉瓦の家屋と鬱蒼たる樹木が互に反映する有樣は恰も一幅の名畫の如く、然かも其頂に宏壯な石造の舊王宮が在つて、同王朝全盛の昔を偲ばしむるものがある。殊に當市附近の地は到る處に丘陵が起伏し、地形の變化は實に名狀し難きのみならず、低き處は大抵水田に作られ、滴る樣な緑の稻穗が風に戰く有樣は眞に筆にも畫にも盡し難い風情がある。

當市で最も珍しいのは毎火曜日に極めて大規模な露店市が開かれることであつて、此日には遠近から市内の廣場に土人の商人、農夫、職人等が來集し、米、麥、砂糖其他一切の日用品又は手工品を陳列し、其處に數百人の顧客が群集するのであつて、其雜踏する有樣は恰も我國の歳の市の樣である。

人口は約七萬人、其内佛國人三千六百人、印度人其他の外國人六百人であつて、商業は雇用人及大資本を要する種類のものは佛國人及印度人に依りて支配せらるるも、小賣商はウーヴ種族の者に依りて行はれて居る。斯う云ふことは他の阿弗利加土人中には決して無い所であつて、獨りウーヴの本據地たるタナナリヴに於て見るのみである。

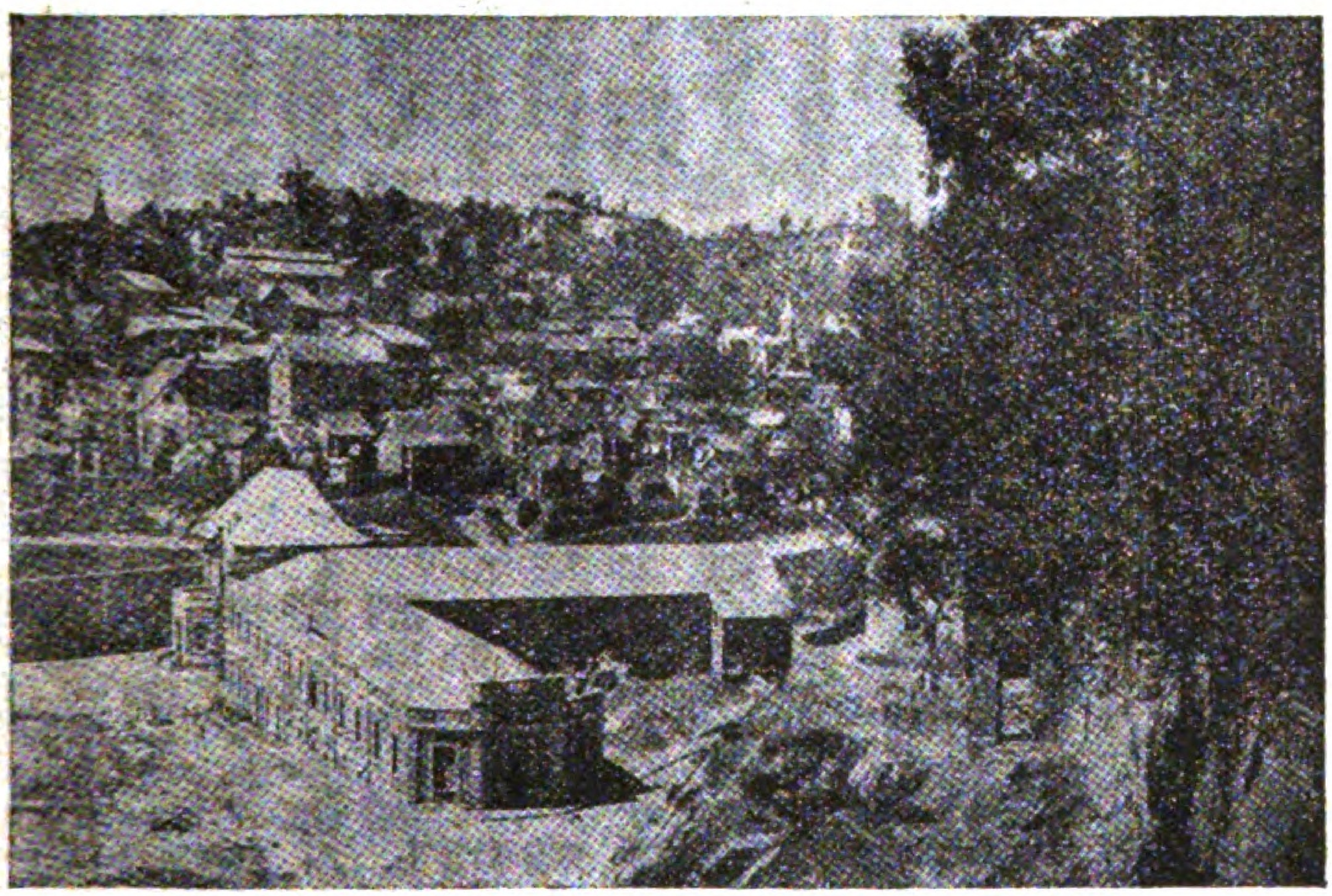
因に舊王宮は昔の總督府の博物館として使用せられ、其一部に舊王室の器具、式服其他の遺物が陳列せられて居る。

## 新年の行事

馬島には祭日が中々多い、併し其內で最も大事なのは新年の祝日である。尤も佛蘭西政府は太陽暦を用ふるも、土人はアラビヤから傳來の一年を三百五十日とする舊暦を用ひて居り、太陽暦よりは一ヶ年に十一日少い爲に、三十四年目に一年の閏年が出來るのであるが、此暦に依る正月は太陽暦の十一月に當るさうである。

傳ふる所に依れば、今日土人の間に行はれる正月の儀式は舊王朝時代に定められたのであつて、年始の五日間を祝日とし、其內に日曜日と木曜日があれば夫れを最も目出度い事として大に祝ふさうである。又年の暮の七日間も祝日とし休業すると云ふから、借金があつて年末を厭ふ連中は宜しく馬島に移住すべしと考へる。

然るに甚だ不便なのは其の長い祝日の間土人が少しも働かないことである。然かも彼等は其間生物の命を取ることを欲しない故、折角の御祭日でも大に食ひ大に樂むと云ふことが出來ないのである。其處で近頃は神様に御願をして、鷄とか家鴨とかは殺しても差支ないことにして居るさうである。



首府タナナリヴ

舊王朝時代の盛時に就き土人の語る所に依れば、正月の祝日には女王が盛裝して緋色の日傘を翳し、窈窕たる姿で宴殿の二階のバルコニーに現はれ人民に龍顔を拜せしめたものであつて、女王には多數の侍女が是亦盛裝して其左右に侍り、何れが菖蒲か燕子花かと云ふ出立で一同腰以上を顯はし其艶姿を競ふたものである。されば其日人民は此盛裝を拜觀するため遠近から雲の如くに來り集り、宮城附近は勿論市內の隅々から其附近一帶に亘り殆ど人で埋められたのみたらず、人民から獻上の米、黍、砂糖、蜂蜜、マニオック、木炭其他の産物は宮城內は云ふに及ばず、各所の空地又は路傍に迄高く積み上げ、御代の榮を祝ふたものだと云ふことである。又王朝時代に面白かつたのは、土語でハッセンドリナとて火の行列と云ふのが二晩あつて、第一日は王室の爲、第二日は人民の爲に新年を祝ふたことである。其日は夕方から子供若者等が竹竿に枯草、枯木又は其他の燃燒物を着け、わあわあ騷ぎながら市內を行列し

たのであつて、其賑かさは恰も吾國の提燈行列の樣なものであつたのである。

併し最も不思議なのは女王の入浴の儀式である。是は其昔王朝の盛時に人民の心を清めると云ふ趣意で、女王が正月の最初の日曜日又は木曜日の夜、王宮の廣場に文武百官を集め、其面前で人民に代り入浴せられたのであつて、馬島王室の御儀式中最も重要なものと見做されて居た。此日皇族並に總理大臣以下の諸官が威儀を正して式場に集ると、其處へ女王が金色燦爛たる正服を着け、金銀珠玉を鏤ばめた王冠を戴き、緋色のラムバ（肩掛）を纏ひ、後から大きな緋絹の天蓋を差しかけさせ、いと靜々と出御せられ、侍女に助けられて衣服を脱ぎ、豫て用意した銀製の湯桶に入られるのであるが、昔は何の目隱もせず衆人環視の中で其儀式を行はせられたものなるも、歐洲人が入り込む樣に成つてから聊か其方法を改め、湯桶の周圍に侍女が立ち、各人が肩に纏へる緋色のラムバで目隱する事とした。併し此儀式は元々女王が人民に代はり其身心を清淨にする爲のものなれば、餘り隱れて居ては人民の不信を招く虞れがありとて、チョイチョイと隙間を作り多少の思はせ振りをして見せたさうである。其處で女王は湯桶につかりながら、ばちやばちや水音を立て、ラムバの隙間を透し王體から水の滴る所を見せたり抔しつつ、「サムバ、サムバ、アンドリアマニツラ、アンドリアナナハリー、ホー、アリボー、チアトリニー、タヲナ、アニエツイー、ヒサラミアナ、カヴイー」と聲高に祈られる。其意味は「造物の神の惠に依り吾等は吾等の人民と共に離れざる一族として千歳の壽を重ね度い」と云ふのださうである。夫れに對し參列の諸員から女王萬歳と云ふ意でツラランチトラと異口同音に言上すると、女王は侍女の助で湯から上がり、玉體を拭ひ衣服を着け再び群臣の前に出御せられ、侍臣より差上げるジンガと云ふ見事な銀器に靈泉の水を盛り、降雨潤澤、米作成就と宣ひつつ參列者に撒布せられ、夫れより晩餐の御饗應があり、最後に女王は米を蒔き湯桶にて云はれた通りの言葉を又繰り返へし、總理大臣より女王に頌德表を獻げ、内治外交に關して政務の御報告申上げ、他の各員より祝品を獻上し、一同最敬禮をして式を終り入御に成つたものださうである。

### 舊王朝喪中の風俗

舊王朝の始祖ラダマ一世が一八二八年八月二日崩御した時の布告は、流石に別天地と云はれる馬島政府の命令だけあつて、其中には敎訓的な事も隨分あるが奇抜な面白いことも亦澤山ある。先づ第一に人民は皆頭髮を剃る事、女は七日間泣く事、目立たしい裝飾を爲さざること、香水香油を用ひざること、純白にして清潔なラムバ（土人常用の肩掛）を用ひること但し地上を引き摺るべからず、男女共に乘物に乘るべからず、已み難い場合の外は仕事を爲さざること、時候其他の挨拶をなし機嫌を尋ぬべからず、歌舞音樂を廢すること、寢臺を用ゆべからず抔は隨分振つたものである。

夫に宮殿の裝飾に就て當時之を目擊したロンドン傳道教會員の報告に依ると、壁は純白の木綿で之を覆ひ其上に紫色及緋色の壁掛を掛け、各室の入口には桃色及赤色の旗を立て、殯宮の屋根は赤の繻子で之を覆ひ、各所に金銀のレース其他珍奇な薄物の裝飾を施し、衛兵には皆美麗な制服を着さしめ、官吏には制服の上に白いラムバを纏はしめ、且宮中より半時間毎に號砲を發射せしめたと云ふから其の壯嚴さは推して知るべく、王室の威勢を察するに足ると考へる。尙傳ふる所に依れば、王妃は葬式の當日牛壹萬五千頭を人民に下賜せられ且つ色々な救恤を行ひ、王の玉體は銀製の棺に納め、墓側には金銀の器物其他王の愛品を埋めたと云はれて居る、以て馬島の一般を知るに足ると思はれる。

## 土人の祖先と其人種

本島土人の人口は約三百五十萬人であつて、之を總稱してマラガシー又はマルガッシーと云ふも、其實彼等は非常に多數の種族に分かれて居り、最も顯著な區別に據るも尙二十種の多きに達して居る。但し是等の土人の起源は明かではないが、多數の人種學者の意見に依ると、本島の最初の住人は一種の小人種であつて彼等は之をヴアジムバと云ふて居る。蓋し小人種と云ふ意味であつて、亞弗利加大陸の原人種と見做される南ローデシアのブッシユマン、コンゴー及ウガンダのピグミー杯の小人種と同種族のものであらうと想像せられて居る。現に中央高原の諸方面に於て多く發見せられる石塚又は石棺は即ち是等の先住人の墓であつて、土人は之に對し種々な迷信を抱いて居る。併し其次に來た人種が果して如何なる種族の者であつたかは極めて不明であつて、現今の亞弗利加土人と同種の者であつたか又は之と違つた者であつたかは斷言し難いが、夫が一種の黑人であつたこと丈けは疑ひがない。然も是等の先住人は其後に侵入して來た馬來人、爪哇人、其他の南洋人の爲に征服せられ次第に夫等の者と雜婚を重ねた結果今日の如き種々な種族を生じたものだと云はれて居る。

現今本島の土人の內で最も優勢なのはウーヴと云ふ種族であつて其人口は約九十萬人、之に次ぐものは五拾萬人のベチレオ、四十萬人のベチミサラカ、及十五萬人のサカラヴ等の諸族であつて、是等は孰も其容貌、風俗、習慣を異にし、智識及文化の程度に於ても大に異なる所がある。併し其言語は孰の種族も南洋系に屬して居り、地方毎に多少訛の相違があつて、或地方の土人と他の地方の土人と言語の通じないことがないではないが、大體に於ては一の言語に通ずれば容易に他の言語を解することが出來るそうである。殊にウーヴ種族が最も優勢であり、且つ嘗て本島を支配して居た關係上、同種族の言語は各地に於て容易に了解せられて居る。

夫ではウーヴ種族と云ふのは何う云ふ人種かと云ふと、彼等は今から三十餘年前に佛蘭西が本島を占領した時迄約百年間の間、其統治者として時めいて居たのであつて、其怜悧なることに於て阿弗利加の土人

中に傑出して居る。英國人は英領東阿弗利加のウガンダの土人を阿弗利加第一の優等人種と認め之を阿弗利加に於ける日本人と云ふて居るが、夫はマダガスカルのウーヴを知らない爲であつて、如何なウガンダ人も此ウーヴに比べては其足許にも及ばない。先づ第一に他の阿弗利加の一般の土人の家屋は、床も天井もない掘つ立て小屋であるに拘らず、ウーヴは多く土造又は煉瓦造の二階建である。尤も煉瓦と云つても極く粗造のものではあるが、兎も角家屋の體裁は充分に調ふて居る。況や舊王宮は堂々たる石造の二階建であつて、其昔英吉利人の技師が造つたものではあるが、ザンジバルの王宮でも、ウガンダの王宮でも、將又アビシニアの王宮でも、其雄大なことに於ては到底之に及ばないのである。傳ふる所に依れば、此種族は今より五百年乃至六百年位前南洋方面から渡來したのであつて、其容貌は馬來人又は南洋諸島の土人に酷似し、皮膚の色は阿弗利加大陸の土人の様には黑からざるも、日本人よりは稍淺黑く且つ多少オリーヴ色を帶び、頭髪は柔で黑く、中には少々縮むものあるも、多くは眞直で長くて、少しも縮んで居ない。且つ其體格は中庸であつて、色の淺黑い點を除けばまるで日本人の様である。但し此種族が中原に旗擧をしたのは十八世紀の末であつて、十九世紀の始に現在の首府タナナリヴに都を定め、漸て島内を平定し、英國人より西洋式の調練を學び、武器彈藥を買入れ盛に經綸を行はんとした所が、一八九五年佛國の爲に征服せられ、其王朝は遂に滅亡せしめられたのである。併し此種族は今日も尙ほ土人中最も優越した地位を保ち、商人、官吏、醫師、技術家等の如き智的職業に從事し、且つ刺繡、縫取、象眼細工等の如き手工藝的技能をさへ有つて居る。斯の如きことは他の阿弗利加土人には決して見當らざる所であつて、獨りマダガスカル土人に於てのみ之を見るのである。

## 出產から死亡まで

出產結婚死亡には此島の土人にも中々喧ましい儀式がある。其内には教育的なこともあれば奇怪至極なことも亦頗る多い。併し夫を一々述べる事は紙數に限りあれば、省略する事とし、特に奇抜な事を少々述べんに、此島では子供が生れると何はさし置いても先づ鹽を舐めさせるのが一般の習慣である。夫は人生は辛いものだと云ふ事を知らせる爲めであつて、此覺悟が人間に最も大事だと見做されてゐる。それから生れた子供の額に少しでも血が附いて居ると、其子は未來が繁昌だと云ふて大喜びするそうである。詰り生れた時に血を流す位苦勞して居るから、神様は此上苦しめないと解するのだそうである。馬島の土人も中々の哲學者だと云ふべきである。

最も奇抜なのは子供の生後一ヶ月目に親戚其他の年老な婦人を招て雜炊の御馳走をする事である。先づ其日は此婦人達が臺所に集り、牛の背肉、米、牛乳、蜂蜜、青物抔混じ合はして雜炊を作り、其内へ赤ん坊の頭の髮を少々入れて大きな鉢に盛り、少女に持たして座敷に運び、夫を婦人一同で掻き混ぜ食するのであるが、其時に姉妹が廻は

り合はした者は、軈て善い子供が生れるとて大層喜ぶそうである。併し出生に就て最も悲慘なのは、運星の惡い日に生れた子供を殺す事である。勿論政府は嚴重に取締つては居るが中々止まないそうである。其殺し方には種々あつて、一番普通なのは、、で、、、、、、、、、、させることとなるが、中には、、に浸す事もある。併しパナンドロと云ふ極惡日に生れた子供は狹い通路に寢かして置き、其處へ澤山な牛を追ひ込み踏ませるのだそうであるが、此危險を無事に通り拔け萬死に一生を得た者は非常な幸運兒として珍重せられるそうである。現にウーヴ政府の末路を飾る有名な總理大臣は、此危難に遇ひたるも幸に生き殘つたのだと云はれて居る。

次に結婚の第一要件は婿から嫁の里方へ贈物をする事である。昔は牛、羊、又は山羊を幾頭か贈りしも現今では夫を金で支拂ふ様に成つて居る。又其儀式には色々面倒な且つ面白い事が澤山あるも、最も奇拔なのは或種族の習慣に、結婚の晩新郎新婦が一枚の着物を着て、一つの食器から食事をするのがあるそうである。其處等邊の御目出度連は宜敷馬島に移住すべきである。



中央高原地方の土人風俗

然るに玆に最も難儀とすることは葬式の甚だ高價なことである。即ち誰かゞ死ぬ親戚友人等が悉く集つて來る。それに對し主人は牛を屠り酒を出して大に饗應せねばならぬ。然かも埋葬は早くも數日後、遲ければ一ヶ月以上後なれば、其間の費用は大變なものであつて、其爲主人又は家族が奴隷に身を賣らねばならぬことも有るとさへ云はれて居る。

それから面白いのは女の葬式の場合には、死體を一旦家から舁ぎ出した後、一度跡戻して家に入り、改めて舁ぎ出さねばならぬことに成つて居る。夫は女は外出の時屢々忘れ物をして家に戻る事があるからだと云ふことである。

最後に此島で最も違つて居ることは土人が東を尊位とすることであつて、死人は頭を東にして埋葬せねばならぬことに成つて居る。夫は祖先が東から來たから、死ねば故郷の東へ歸らねばならぬと考へて居る故だと云ふ事

である。

## 面白い土人の迷信

土人には色々な迷信がある。併し夫は必ずしも未開人だからと云ふ譯ではない、文明人にても笑ふべき幾多の迷信はある。併し未開人には夫が多くの場合に於て大切な教育の手段と成り、其生活上に文明人の想像し難い偉大な意義を有つて居る。故に野蠻人の日常の生活振りを知らんと思はば、其迷信に就て研究するのが一の近道だとも云へるのである。併し其迷信にも色々種類があつて一顧の價もない愚昧なものもあれば、吾等に取りても非常に教訓となるべき有益なものもあり、又茶話の材料とすべき滑稽なものも尠くない。其代表的なものと思はれるものの内に斯んなのがある。

女が姙娠中に惡い事をすると其子に罰が來る

畑の南瓜を盜むと啞の子が生れる

野菜を盜むと其子供が泥坊に成る

姙娠中に陰謀をすると流産する

人の物を欲しがると欲しいものが得られなくなる

人に物を遣る時に額を顰めると惡いことがある

人に物を遣る時は二つ遣るがよい、一つ遣ると片目に成る

人に遣つた物を取り戻すと舌が堅く成る、約束を守らない時も同じこと

人を馬鹿呼ばはりすると我子が馬鹿に成る

人を罵ると同じ樣な子が生れる

指の無い物、三つ口、皮膚に斑點のある者、片腕の者、吃を見て笑ふと自分の子供が其通りに成る

北より南に向ひ掃除すると仕合はせが惡くなる

日沒後掃除をすると物が無くなる

爐の横木を割つたり又は斧の上を歩むと跛に成る

出産の時に人が入口に立つてると難産をする

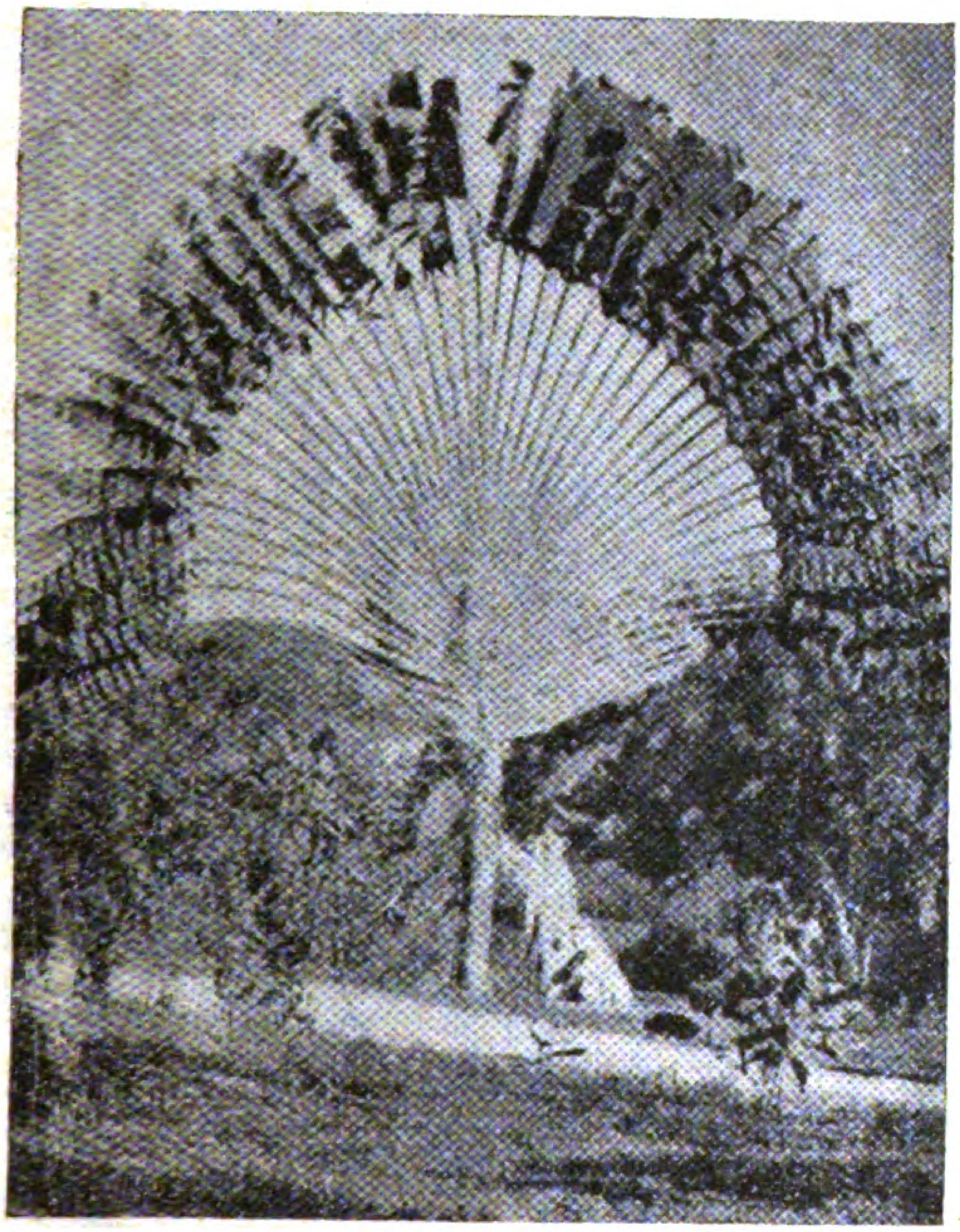
出産の時に農具を持つた者が這入つて來ると病氣が一緒に這入つて來る。

## 珍話一束

マダガスカルが山岳重疊の國であることは前に説明した通りなる
が、東部地方は海岸に向つて傾斜が急な爲特に其感じが深い樣であ
る。此事に付傳ふる所に依れば、一八六七年に當時の女王が東海岸のタマタヴ港に行幸を仰せ出され、一行五萬人と云ふ人數を引き具し、中央高原の首府から東に向つて山を下られたが、道路が險惡で通行が容易でない、或場合には隊員が全部一列となり、又或場合には森林を伐り、荊棘を開いて道を造り、山を下つては又山を下り、谷を越え川を渉り、幾日かの後辛じて目的地に達したが、女王は餘りに岳陵山岳の多いのに驚かれ、首府に還幸の後宮内大臣を間近く召されて其數を問はれた所、大臣は往きは四千五百九十、歸りは七千四百三十五と御答へ申上げた。女王は不思議に思ほし召され、同じ道でありながら往きと歸りと數が違ふのは何う云ふものかと御尋ねに成つたので、大

は夫は其筈で御座います、往きは下りでありますが、歸りは夫が皆上りに成つて居ります故、坂が增しました譯で御座いますと答へた所、女王は成る程と仰せられ、大臣の骨折を思召し位階七級を進められたとの事である。千鳥氣の拔けた洒落の樣ではあるが、以て道路の險阻なのを察することが出來ると思はれる。

本島は非常に珍しい草木に富んで居る。其内で最も美しく且つ重寶なは旅人木である。是は吾國の棕櫚に似て棕櫚にあらざる椰子樹の一種であつて、幹の太さが直徑二呎、高さが百呎迄成長し、長さ一二呎幅二呎位の葉が二十呎乃至三十呎の扇形に擴かり、夫が如何にも熱帶地らしく滴る樣な濃い緑の色をして美しい。併し此木の特色は其色と形の美しいことよりも、幹の内部が空虛に成つて居て、多量の水を蓄へて居ることである。旅人が若し長途の路上で水に渇し進退谷まつた場合に此木の幹に穴を穿つならば、其一本から三十人分位の水を得ることは決して困難でないと云ふことである。然かも其水は人間の爲に最も衞生的な飲料であつて、水質の不明な井戸水抔を飲むよりも遙に安全だと云はれて居る。加之旅人木の重寶なことは葉は之を重ねて屋根に葺き、幹は之を延ばして敷物となし、又板にして建築物に使用することを得べく、更に其柔かな部分は最も風味の豐かな上等のサラダとして食するに足り、其用途の廣いことは重寶な竹に劣らないと云ふことである。因に本島の東部の坂地に於て海拔二千呎以下の處には此木が茁る處に欝叢として繁つて居り、世界に於て最も珍しい光景を呈して居る。



旅　人　木

次に本島には他の熱帶地に於て見出し難い幾多の毒草及藥草がある。或西洋人の一八七九年の旅行記に、本島の西部に非常な毒刺のある葛があつて年中美麗な花が咲き、其爲に時々人間が欺かれて夫に近寄り、右の毒刺に觸れて燒けどの樣な大怪我をすることがあると報じて居り、又或處には雨の降る木と云ふのがあつて、其下に行くと如何な炎暑の時でも雨が降つて居り忽ち衣を濡らされるそうである。併し聞く所に依ると、其實此木に微細な昆蟲が居つて、其體から或液體を分泌し、夫が雨の樣に成つて居るのだと云ふことであるが、何れにしても

馬島は實に妙な處、詳しく探險すれば珍奇なことは他に多くあるべし。

本島で最も驚いたのは、中央高原一帶の地が數百哩の間蕨で蔽はれて居ることである。尤も此地方は全體に高原とは云ふものの、其表面は山又山と云ふ有樣であつて、其谷合は悉く水田と成り、水田に近い山又は丘の麓は大抵畝に開墾せられるも、夫れ以上は一面に蕨が叢生して居る。記者は嘗て米國太平洋岸のオレゴン州に居たことがある。オレゴンと云ふのは、土人の言葉でファーン、即ち齒朶と云ふ意味であつて、其處には其名の如く、到る處に齒朶が叢生し、春は蕨がウンと出る。併しマダガスカルの夫に比べてはオレゴンも其名に恥ぢねばならぬと思はれた。因に、或書物には馬島は全島處女林で蔽はれ、中央高原杯は貴重な樹木が一杯に繁つて居ると書いてあるも、是れは全然誤であつて、森林の多いのは東部の坂地丈けで、西方の多くの部分と中央高原全體とは殆ど草原であつて、樹木は此處彼處に點點と見るのみである。

蕨と共に詩的で珍しかつたのは、タマタヴ港を中心とした東部の海岸に驚くべき程螢が居ることである。記者の實見したのはタマタヴ港の南方五十哩に亘る鐵道の沿線であつたが、其居ること居ること兩側のブッシュはさながら小金で埋めた如く、然かも夫が暗を突いて飛ぶ有樣は恰も火花を散した樣であつて、其光景の珍しく且つ美事なことは他に其類を見ないと考へる。

中央高原は優秀人種が居る丈けに開墾が中々行き屆いて居り、水田の構造植付等は相當に良く遣つて居る。併し面白いことには、彼等は地面を耕す爲畑を狹く仕切つて水を湛へ、其處に牛を二十四位入れ縱横無盡に追廻はして居る。但し自身で牛を澤山所有しない場合には近所の農家同志で互に貸し合ふのださうである。尤もそう云ふ耕作法を遣つて居るが、稻は矢張り苗代を立て、適當の時期に移殖する樣に成つて居る。然し他の地方の耕作に至つては實に言語道斷である。彼等は單に種を散蒔するのみで移殖することを知らない。最近政府は是等の土民を指導し農作の改良を計りつつある由なるも、前途尙遼遠の感を免れない。

土人は優等の人種も皆んな跣足である。尤も身分ある者が人前に出る時は西洋靴を穿いては居るも、家庭では必ずしもそうでないらしい。記者が首府に滯在中懇意になつた若干の土人は孰も相當の身分の人々であつて、總督の招待會杯にも出席された連中だが、家庭では矢張り跣足で居ると見え、記者が其家庭を訪問した際本人も家族も皆跣足で居た。併し其點は日本人も同樣だから吾等には彼是云ふ資格はないと考へる。

朝鮮には官妓と云ふ者があつた。是は王宮に召されることがあると云ふ點に於て普通の妓生と違つては居るも、其實質に於ては普通の妓生、吾國の藝妓と大差がないのである。馬島にも舊王朝時代には數百人の官妓並に歌手があつて宮中の宴席に侍んべり、又は旅行の際王の

御供を仰付けられたものであつて、人民等は王の行幸の時には貢物を聞く迄に道路も厭はず集つて來たものだと云ふことである。記者の一行が西海岸のノシベーと云ふ港に着いた時、其地方の酋長の好意に依り、知事の官邸の宴席で官妓三十人程の舞踏及唱歌の饗應を受けたことがある。孰も色は少々黒かつたが相當の別嬪であつて、舞も唄も極めて面白く、殊に一行の船長が非常な美聲の大男であつて、夫が銀匙を振り立てて音頭を取ると、一同の官妓が舞ひながら之に和し、一高一低極めて面白く、馬島土人の藝術に吾等一同大に感興を催した。但し此地は日露戰爭當時、露國巡東艦隊の戰艦驅逐船等大小四拾隻が日本に遠征の途中約三ヶ月間其假根據地とした處、吾等は之に對し實に今昔の感なきを得なかつた。

本島にも樂器は色々ある。勿論原始的ではあるが、打つもの、彈くもの、吹くものが夫々揃つて居る。其重なものは太皷、ヴアリラと云ふ丸竹の琴、ロガンガと云ふ瓢簞に柄を付け絃を架けた三味線と竹の笛とであつて、三味線の絃は一筋から四筋まで色々ある。尤も樂器を用ひない時には歌の調子に合して手を拍くのであつて、夫が如何にも愉快らしくて面白い。

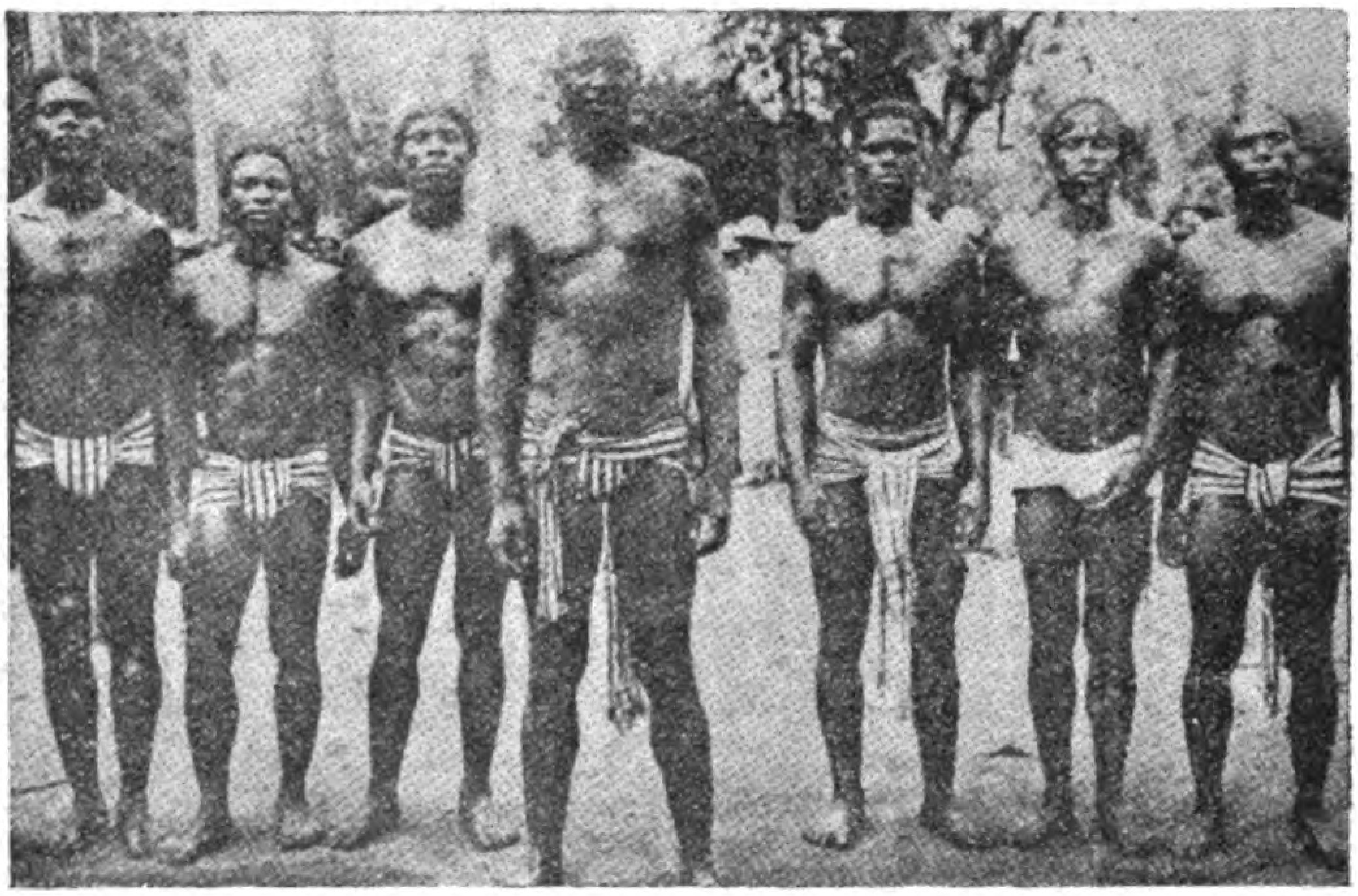
吾等が英領地ザンジバルの觀察を終り、マダガスカル島に向ふ途中コモロ群島中の一島でモロニと云ふ同島附屬の一小島に寄港したことがある。此は「バニラ」と云ふ香料の名産地であつて、商賣上には可なり大事な處であるが、總て同島知事の案内で歡迎會があると云ふことが知れて居たから、田舍の庄屋さんの御馳走位の積りで上陸した所が、豈に圖らんや其處には非常な用意が出來て居て、海岸の式場には千人に餘まる全島の土人が悉く集り、又此島の特色とされて居る多數のアラビヤ人が嚴めかしい裝束を着け、勳章を佩び、刀杯差いて並んで居た。そうして其處でシヤンパンを舉げ、彼我の間に辭令の交換があり、續いて參列の土人一同で節面白く歡迎の歌を唱し非常な御祭り騷ぎがあつた迄は良かつたが、更に知事樣の官邸で晩餐會があるからと其指圖に從ひフイランジヤナと云ふ椅子形の輿に乘せられ、行列揃へて其官邸に向つた所が、其間十四五丁程の路傍の家々は總て國旗と椰子の葉とで美しく裝飾せられ、然かも大勢の土人の男女老幼が其前に立ち、如何にも珍客を歡迎すると云ふ態度で節面白く囃し立て、又石油罐詰の明罐杯拍き大に祭り上げられたのは、聊か狐の行列と云ふ感がないではなかつた。但し馬島總督からの命令と知事の好意に依ることは勿論なるも、實は交通不便な一孤島のことなれば、開闢以來の珍客として盆と正月とを一所にして、一跳みはずんだものと思はれた。因に此島の中央には殆ど全島を掩ふ樣な富士山形の噴火山があつて、其頂上から煙を吹いて居り、其景色は沼津邊から見た富士其儘と云ふ樣であつたが、其反對の島影に馬島總督府で經營する癩病患者の收容所があるので稍陰鬱しの感がした。

馬島には到る所に溫泉がある。一體溫泉の透明なものは飲んで藥用と成るそうだが 土人の 考 に依ると人體の心は外面よりは逆に汚れ

て居るから、温泉は入浴して皮膚を浸すよりも飲むのが適當であると云ふて居る、さもありなん。土人の哲學にも中々感心な所がある。

熱帶は地球上の陸地五千萬平方哩の内二千萬平方哩を占めて居る勘定であるが、馬島には各熱帶地の總ての植物を有する外 世界の何處にもない種々な植物を有つて居る。殊に蘭科植物の如きは、夫で有名なフヒリツピン及南アメリカを併せたよりも遙に多くの種類に富んで居り、又各種の藥樹及藥草が極めて多く、キニイネの原料となるキナ樹も此島には尠からぬと云ふことである。因に此處からイラン・イランと云ふ樹の花から搾つた香油が夥しく輸出せられて居り、又ヴアニラと云ふ香料抔は世界の需要額の半分を此處から供給して居る。又近頃は丁字の栽培が盛になりつゝあつて、目下世界の丁字の八割半を供給して居るザンジバル島は、大に其脅威を感じて居るそうである。

馬島にはラムに似た酒がある。併し總督府は土人に酒は善くないとて其釀造を禁じて居る。尤も葡萄酒ならば 二ガロン以上土人に賣つても差支ないことに成つて居る。小量ならば兎も角も、其反對に大量ならば賣つても良いと云ふのは妙だと思ふたから此島に滯在中懇意に成つた佛蘭西の役人に其眞意を尋ねて見た所が 役人先生の答へるには「土人は酒を飲むと亂醉して喧嘩を起し始末に困るから、本人の保護やら又取締やらで釀造を禁じたのだが、二ガロン以上葡萄酒を賣ることを許しても、土人には夫れ丈けの購買力がないから別段弊害を生じない。併し若し土人が強て酒を飲みたいならば、二ガロン買ふ丈けの貯金をするから詰り勤儉の奬勵になる。現に彼等は其爲に勉勵するので、近頃は土人の間に葡萄酒が善く賣れる」云々と語られた。成程佛蘭西人は甘い所に氣を附けたものである、呵々。



本島南方部高原地パラ族土人の相撲取

首府では市街の土人は大抵男はシヤツの樣なものを着、女は廣い切れを腰に卷き、男女共にラムバと云ふ幅一メートル長さ二メートルの肩掛を肩に卷いて居る。併し中には中々ハイカラ者も澤山あつて、世界の何處に出しても、恥かしからぬ洋裝をしたものも尠くない。現に記者が或日曜日に基督教の會

附近を散歩して居た處が、圖らず教會歸りの多數の善男善女に遇つた。そうして夫が孰も流行風の華美な服裝をして居り、如何にも西洋人の信者としか思はれなんだので、是は妙だと思ひ近寄つて見ると、孰も馬島の土人であつて、平生の跣足に似ず皆んな靴を穿いて居たには感心した。併し市街ではそうであるが、遠僻の奥地に往くと男も女も腰だけ巻いたツンツルテンの裸體であつて、甚る時には皆夫を外づして枕にし、又は敷物にすることもあると云ふことである。

從來馬島には道路と云ふ程の道路は無い。又在つても、雨季には夫が河身となり泥濘となり到底通行が出來ないので、內地の旅行は乾燥季に限るものと定つて居る。但し季節は地方に依り多少の相違はあるも、大體に於て十一月から三月迄が雨季、四月から十月迄が乾燥季であつて、旅行は雨の無い四月から十月迄でないと不可能である。尤も最近政府は道路築造の方針を定め、首府を中心として四方に幅十六呎の自動車道を放射することとし、其內五百哩以上は既に完成し、政府の手で乘合自動車を走らして居る。從て右の道路のある地方丈けは雨季にも旅行し得るのみならず、政府は目下鐵道工事を進めつつあれば、本島の交通狀態も今後數年の內には大に面目を一新するであらうと思はれる。但し土人の旅行は云ふ迄もなく步行本位であつて、天候不良の時は外出しないことにして居る。尤も上流社會の者は、牛車又はフイランジヤナと云ふ二人舁きの椅子形の乘物を使用し、荷物は人足の頭に乘せ後から扈從せしめて居るのであるが、記者も本島旅行中屢々夫を使用したが、非常に乘り心地の良いものであつて、一日乘つて居ても一向疲勞を感じない。尤も舁手は旅行の里程に依り時々交迭することに成つて居る。記者が訪問した有力者の家庭には、大抵夫を二台か又は三台位備へ付けて居た所から見ると、是が馬島の上流社會の主たる交通機關だと思はれるが、近頃は道路の築造せらるると共に大分自動車が輸入せられ始められた樣である。併し夫れは遼隔の地方との交通のことであつて、首府其他の主なる都市では、盛に人力車を使用して居り、夫をプッスプッスと云ふて居る、但し佛語からの借來である。

本島に用ひられる外國語は佛語であつて、首府では土人の青年の間には此言葉が餘程普及して居る樣である。夫は政府並に宗教家の經營する諸學校で佛語を教授して居る爲であつて、英語は之れを學ぶ機會が無いと見え殆ど通用しない樣である。尤も中年以上の土人中には、佛國が一八九五年に本島を占領した以前、英國人が可成り活動して居た爲、英國人から英語を學んだものが尠くないとのことで、記者が內地旅行中是等の土人から屢々英語で話かけられて驚いたことがある。

本島の衞生狀態は極めて不良である。其重なる流行病はマラリヤ、霍亂、ペストであつて、呼吸器病、下痢病、寄生蟲病も可なり多い樣である。併し、阿弗利加の他の地方よりは特に惡いと云ふ意味では決してない、否或意味に於ては、馬島の方が却つて上位にあるかも知れない。又政府の衞生施設としても、治療上豫防上、可成り努力の跡が

認められないではないが、市場其他に對し清潔法の行屆かないことは何人の目にも否み難い樣である。例へば蠅の多いことは驚く許りであつて、市場の生肉、果實其他の食料品の如きは殆ど蠅を以て掩はれ、首府とアンチラブ以外の處では、一文商の小商店は云ふに及ばず、ホテルの食堂の如き處でさへ此々皆然りと云ふ有樣である。殊に驚くべきことは、政府の經營する病院も亦同樣であつて、記者の如きは病院視察の際常に蠅の襲撃に惱まされ、非常に危險を感じたものである。然し首府では滋石總督の盡力丈けあつて可成り衞生の注意が行き屆いて居り、汚物に對しては各戶に移動の出來る便器を備へ付けしめ、毎日午後六時以後各戶に不淨取りを廻はらし、之を市外に搬出し處置することに成つて居る。

牧畜は土人の主産業である。殊に農業の幼稚な西南地方に於てそうである。そうして他の多くの未開人と同じく牧牛を唯一の財産とし、之を富貴及名譽の表象として其數の多いのを非常な誇とするの風がある。從つて現今の樣に商賈氣の無かつた昔は、祝儀又は葬祭等の場合の外は、牛を屠殺することは甚だ稀であつたのみならず、今日でも彼等の牧牛を見ることは恰も婦女が寶石綺羅を愛すると同樣である。然かも牛を放つて置く處は人口の稀な荒漠たる原野であつて、其處には何の境界もないのであるから、牛盗人が非常に多い。夫に又或種族では牛を盗むのを男子の甲斐性だと考へ、夫丈けの甲斐性男でなければ嫁が貰へ無いことに成つて居る。現に此島の諺に「牛飼の牛は夫れを追ひつつある間に十倍に成る」と云ふことがあるが右に付首府に二十五年も駐在する英國領事の話に依れば、牧牛は本島で極めて有利な事業ではあるが、盗難が非常に多く之を監督するが容易でない。尤も盗難にかかつたことが知れた時土人に見廻はらしめれば容易に發見せられるも、夫れを取戻そうとせば、盗人は「ああそうか、夫れでは連れて往け、併し飼養料を貰はねばならぬ」と云ひ、二十法か又は三十法位請求するのが普通である。そうして夫を仕拂はねば取戻すことが出來ない。併し夫は不都合だと云ふので佛蘭西の官吏に訴へても、相手が一筋繩で扱へない野蠻人だから仕方がないと云ふ風をして取り合はないそうである。

## 佛蘭西政府の擴張主義

植民地に對する佛蘭西政府の遣り方は全然擴張主義である。夫は印度支那に於ても、北亞弗利加に於ても、又マダガスカルに於ても何れに於ても皆同一である。先づ第一に外國からの輸入品に對し高率の關税を課して居るから、佛國自身に供給し得ざる物品にあらざる限り、外國からの輸入は容易でない。然かも取締の嚴重なことは外國品の輸入に對する許りでなく、外國人の企業に就ても殆んど禁止的である。マダガスカル島の現行規定に依ると、外國人の居住、營業、土地所有及賃借、鑛山探掘權等に就ては原則としては禁止主義を取り、只總督の許可する場合に限り許されることになつて居る。然かも株式會社の

經營に關しては取締役會長、代表取締役、代表署名支配人、會計監査役が佛國人なること、又合名會社にありては取締役、理事會役員、監査役の半數以上が佛國人なる事を要し、公共役務、鑛山採掘、森林伐採、水力業、官有地の移譲及永代借地、並に其移轉は佛國人に限り許可せられ、其例外として總督は行政會議の諮問を經て除外の取扱を爲す事を得べき事に成つて居り、又外國人が右の事業を經營する爲土地を所有し、又は永代借地を爲さんとするには總督の許可を得ねばならぬ事に成つて居る。斯う云ふ喧しい取締があつては外國人の經營も中々容易でない。然らば本島に對しては絶望かと云ふに必ずしもそうではない、若し仔細に點檢する時は、外國の商品にして馬島に輸入せらるゝものが多少ないではない。例へばセメントは獨逸、白耳義、瑞西、諾威より、鐵器類、洗濯用石鹼等は英國より、マッチは瑞典より輸入せられて居り、是等は我國よりも輸出の可能性あるべく、又馬島よりの輸出品の内には皮革、ラフイア、牛骨、蹄、角、鞣皮用マングローヴ樹皮、ヴアニラ、丁字、米、マニオック、寶石鼈甲、牛肉罐詰、材木等があり、是等は孰れも遠き歐米諸國に輸出せらるるのであつて、其或物は本邦にも需要あるものなれば相當輸入の可能性はあるのである。又農業に就ては勞働者需要の關係上大規模の計畫は困難な樣なるも、一二萬英加以下の計畫ならば活動の餘地は決して尠くないと考へる。委細は最近外務省より發刊のマダカスカル事情閲覽ありたし。

## 日本人の成功者

記者が今回の旅行中最も愉快に感じたことは、本島北方の要港であり且つ第二の都であるチエゴ・スアレに、長崎縣天草郡高濱村出身の赤崎傳三郎と云ふ人が旅館を經營し非常に成功して居る事である。同人は明治三十七年日露戰爭の際殆ど無物で同地に渡航し、爾來奮闘の結果同地の旅館業を獨占し、且つ活動寫眞館を經營し、今日の富を爲したのであつて、同地の佛國官民より非常に信用せられて居る。同人は吾等七名の日本人が同地に着くと云ふことを聞き、非常に嬉しかつたと見え、千歳一遇の樣に大に喜び、吾等が同地に着くと、同地方の佛國官民、及吾等の同船者等合計三百人を招いで大歡迎會を催し、日本人の爲大に氣焔を上げられたが、萬里の異域に於て、單に日本人を見るさへ嬉しきものなるに、吾等は親しく其成功の實況を目撃し、然かも其本人から斯る優待を受けたのは、吾等の今回の旅行に際し最も欣快とする所であつた。因に同氏の家族は、本人夫妻、及東京府人横井岩吉と云ふ雇人一名であつて、之れを全島に於ける日本人の總人口とする。



# 丹波の牧歌

深尾須磨子

## △手紙

御ぶさたしました。何も書きたくはなかつたのです。完全に丹波の二十日間でした。

人間が雑魚になる。――赤七に、銀太に、權六に。それから鶏になる。――それも、いたつて太つちよの小母さん鶏にです。

あまりうるさいので、ひよこ上りの若い衆鶏は伏せてしまひました。納屋の隅つこに、小さなとたん針金の籠の中にです。大きな聲では云へませんが、あいつら、四百匁になりさへすれば、鶏屋のお吉つあんがやつて来るのです。秤を片手に……。やがて、ケエッ、ケエエッ、ケエエエッ！　です。閾を一跨げ、もうお吉つあんは羽根布團の中みを散亂させるのです。もしも佛蘭西あたりなら、お吉つあんはたちまち世帯持の悪るいおかみさん、と、云ふことになります。――あちらでは、かうした場合、うぶ毛の一本まで拾ひ上げるのが、儉約な女だとされてゐるのですから。

雑魚のくだりに後戻りします。大變なことながら、わたしは銀太を二尾釣り上げました。どんなに釣竿が重かつたか、おわかりですか。呑みも呑んだり、かなり大きな釣針を、お腹の中まで呑み込んでゐました。刺が怖いので、甥の練三にとつて貰ひました。それを二枚に割いて附け燒にすると、めつさうもない味なのを、姉が面倒がつて丸燒にしてしまひました。――「かうして置けばどうなとなる。」

麥藁の束に突きさされて、何百年色の天井からぶら下つてゐる銀太の姿には、非情の蠅も目を背けます。これを山椒醤油の附けあぶりにして、日傭の熊吉が食べなければならぬ日の、丹後の海の荒れ方が想はれます。

一體、人間が、雑魚になつたり、鶏になつたり、何てざまでせう。それから、山に、西瓜に、茄子に、竹箒になる。それらが人間になるのでなくて、人間がそれらになるのです。中でも、山は小面憎い。山と睨みつこして勝てる人間があつたら……。わたしは睨みつこの

中に、きまつておはゞかりに行きたくなるのです。穢な話。その山の谷間から、何とやら泉と云ふ銘酒、丹波の生一本が流れ出ようと云ふ、それが丹波の山の山なのです。

こんなことを書いてゐると、自分ながら自分が眺められます。いつそ山を食つた顔。さうした顔でも想像して下さい。

△

ギユウ、ギユウ、ギユウ、ギユウ、ギユウ、ギユウ、ギユウ！　明方になると蛇に呑まれる蛙の悲鳴が、そこでも、ここでも、やかましい。

福知山線の黒井驛に一里餘りの、山また山の一つ、三つ尾山の麓に近い大きな村である。坂を越えれば、篠山の町にも出られようと云ふ……。

昔、このあたり一帶を領した黒井の赤井悪右衛門が、織田信長勢に（と云つても、信長の家來の光秀の、そのまた家來の家來位のところらしいが）攻められた時のこと、――兩軍の放つ鏑矢が、ブウン、ブウンと唸りを立てて、村村を引つくりかへしたげな。もともと、織田勢の方が强かつたげなが、赤井の方も負けてゐなかつたげな。そこで、織田勢は、村村の水源地を占領して、たうとう赤井方を降參させたげな。げなげな話は噓ぢやげな。と、云ふのは噓ぢやげな。――まあから云つたやうな話の殘つてゐるところである。

このあたりを形作つてゐる主なものは、まづ山と田である。それから、藪と桑畑である。川も丹波になくてはならぬ點景の一つで、山山から流れ落ちる谷川が、積り積つて川となり、淵となるのである。丹波の生一本とも云ふべき地作りの銘酒の數數に、その水の淸さも想像が出來よう。川が展開させるよい景色も、福知山線下瀧あたりの溪谷ならざらに見られる。山北から小山あたりの景色よりは小さいには小さいが、それだけ、妹分とでも云つた可愛さがある。

「あの子どこの子、丹波の竹の子、煮ても燒いても食はれぬ竹の子。」の民謠がある位だから、その筍の味はあまり賞められないらしいが、とにかく竹も多い。川ぶちには大抵藪が並んでゐる。竹は、主に淡竹と眞竹である。

道主命時代からの（その點は朦朧だが）道しるべが、依然として東西をさし示す小徑を、今は圓タクが通るのである。（確に圓タク……）それも東京のなどよりはずつと乘り心地のいいのが、千町田の、滿喫して突つ走るのである。そのまた速力ときては、何しろ事故の心配いらずである。（泥田の中へ墜落することの他は。）そして、錢錢はとなると、一人增しいくらと云つたやうなけちなことを云はない。――「えらいたんとだつしやけど、一圓だけやつとくんなはれ。」その運轉手と云つても、夜間などは、浴衣がけに下駄ばきの若い衆で、ハンドルを握る。乘り手は乘り手で、これも浴衣がけの頰かむり姿で、一寸隣村まで盆をどりをかねてのドライブとくる。その隣村にはカフエエがあつて、蓄音機が出來たての流行歌を散らしてゐる。そ

れが丹波の山奥である。
昔なら、出稼ぎと云へば百日（冬期に限つて灘の酒藏へ雇はれて行く）位にかぎつてゐたものが、今では、都會や工場の魔力が、村村から若い男女を引つさらへて行く。そこいら中が草だらけになる。それも、せめてはそのかはりが、澤山の金にでもなればまだしものこと、彼等が持つて歸るのは、ことに年寄の考へるところでは、大抵は碌でもない物ばかりなのである。おまけに、人口は年年に殖える一方で、一村に割りあてても、六十人からの増加になるのである。何しろ、年寄の愚痴はいよいよ多くなるばかりである。

△

「盆のお月樣はまん圓こて圓て、圓てまん圓こてまだ圓い。」
修繕中の木屋の屋根から、松つあんの福知山音頭が降りどほしに降つて來る。そして、松つあんの金鎚の手が、正午へ正午へと、より忙しく釘を打つてゆく。
松つあんはこの村の模範青年である。小學校を出たばかりで、嚴しい親方の手に引きとられ、丸十年と云ふものを叩き上げられた。
「何ぼ何でも親方の方が無理過ぎる。」と云つたほどの辛苦のおかげで、二十そこそこの松つあんは、既に立派な一人前の大工である。
「學校學校云うて、誰も彼もが學校にばつかり行きたがるもんやで、卒業しても職にもありつけんやうになるのだす。しまひには食はれん食はれんの苦しまぎれに、〇〇〇〇な云ふ太い考にもなつて、〇〇〇の御機嫌もとらんならんのだす。人間が一人前に働くことも出來ないで、口でばつかりごてごて云ふほど、馬鹿らしいことがありまつしやろか。」
青年團の制服姿で、二三日前、町の講演會から聽いて來たえらいお方の話そつくりを、松つあんは頭領で受賣りする。
「さうか云うて、わし等やかて考へんこともないのだす。こんな時節だつさかい、さうさう田舍にばつかりくすぼつとりたいことやないのだつしやけど、都會へ行て見たとこで、手間賃が多けら多いやうに、かかりもそれだけかかりますし、どつちみちむつかしい事だつしや。」
これ位のところが正直な松つあんの話らしい。
「そう變つたもんだつせ。阿呆は田さへ作つとつたらよい、な云ふことは、今時通用しまへんさかいな。兵庫縣でも、この村あたりはまたそのい困つた事も起つとりまへんやけど、地主と小作人の間もまあまあだつさかい。第一、貧乏人の少ないと云ふことが大助かりだす。まあ今のとこでは安心だすけど、この上税金が殖えたりすると、どうなるのやら分りまへん。今やかて、太い者の一人や二人居らんとは限りまへんさかい。」
一休みの煙草をふかしふかし、松つあんは語り續ける。――舞鶴へ艦隊が來たと云ふこと、明日は青年團に加はつて觀に行くと云ふこと、それから、盆踊のこと、たせを

△

村の金滿家山田さんの息子は、その學校始まつて以來と云ふ優秀な成績で、去年の春、東京の大學を卒業した。おまけに、品行も方正過ぎると云ふので、いつそ案じられてゐた。

さて、その息子が、篠山の聯隊へ一年志願兵として入營中のことだが、ある日、はるばる東京から、おなかの大きな娘が、山田さんの内へ泣き込んだ。それは、何でも山田さんの息子が下宿をしてゐた内の娘だとか云ふことで、娘はおなかの大きな上に、肺病にもかゝつてゐた。山田さんの兩親は、ごくごくの内しよで、それを懇意な隣村の醫者の内に預けた。ところで、間もなく娘は七ケ月の死兒を生んだ。そして自分までが硬くなつてしまつた。山田さんの内では喜んだ。そして、あまりの喜びにまぎれたせいか、醫者への謝禮ものびのびに、遂には忘れた形にさへなつた。内しよの話は、いつの間にか明るみへ出た。

△

今、大阪の某大會社に勤めてゐる山田さんの息子は、近く同地の百萬長者の令孃と結婚をするさうである。

△

この村から、大阪その他へ出奉公をしてゐる娘達は、毎年盆正月の藪入りがへりを機會に、近村の、これも亦藪入りがへりの娘達と會合をする。そして、相互が主家から受けてゐる待遇について比較をした結果、かりにも自分にとつて不滿足な點を發見すると、彼女らは早速各自の主家へ談判開始とくる。

△

「内の進一が古井戸へはまりましてね、それを助けに行つてくれた銀さが、またはまつて死にましたで、一寸旦那はんに來てもろとくんなはれ。」

さう云つて、姉の内の入口に突立つた佐平さんは、どうしても生きた人とは見えなかつたさうである。

二人の死は炭酸瓦斯の中毒であつた。

進ちゃんは、佐平さんにとつての唯一人の男の子であつた。幼ない時から、心だての優しい孝行者であつたが、殊に、昨年佐平さんが中風をわづらつてからは、その孝行ぶりは他の見る目もいぢらしかつた。まだ十六位の少年でありながら、進ちゃんは家業の一切を殆ど一手に引受けて働いた。その日は盆の休日であつたが、進ちゃんはやはり平常の通り、午前中を田の草とりに精出した。そして、せめて今日だけは、と、親達にすすめられる餘りに、ためらひながら雜魚とりに出かけた。その途中、とある古井戸の中に、進ちゃんは數尾の鰻を見付けた。それが、やがて進ちゃんの悲しい運命であつた。

急を告げに歸つた連れの子供が、まづ驅け附けたのは、最寄の銀さ

んの家であつた。村中きつての親切者で、律義者の銀さんは、子供達の報告を聞きとるのもそこそこに、とり上げたばかりの稗餉の箸を投げ捨てて、これも悲しい運命に急いだ。

褒められた者が二人、しかも揃うてこんな死方をした。村中は總泣きに泣いた。佐平さん一家の恐縮ぶりと、哀しみと、それを慰める銀さん一家のけなげさとに、村中は更に泣いた。それ以來、兩家は、ことに骨肉も及ばぬよしみを結んでゐる。

△

「こんな廣いとこに置いてもろてよいの、內とはえらい違ひやろが、早う大きなつて、やつと玉子を産めよ。」

やうやう片附いた片荷の鷄を養鷄場に放しながら、鷄屋の親父は云ひきかせた。そして、母屋の方に向つて注意をした。

「ごりよんはん、當分の內はなるべくねり餌をやつとくんなはれ、粒餌はまだ食ひ慣れまへんさかい。」

雜草のくまの靑々とした、八坪ばかりの養鷄場に、放された赤茶と白茶の十一羽が、急に可憐な生命を躍動させる。その九羽が雌で、二羽が雄である。

「十一羽で八圓二十錢か、高いことはござへんで」

養鷄場の竹間ひを覗き覗き、まづ松つあんが評價した。

十一羽で八圓二十錢、そのひよこ上りの一族が來て以來、養鷄場は大騷動である。それでなくても、ヒステリックになりかけてゐた古參の小母さん鷄二羽が、ますます逆毛をたてる。殊に、新參の若い雄鷄達が、やうやう鳥冠の垂れはじめた分在をもかへりみず、とかく小母さん鷄達に近よりたがるので、小母さん鷄達は尙更氣色を損じるのである。――「何猪口才な、青二才のくせに！」と、云つたけんまくで、鋭い嘴の一撃で追ひ拂ふ。そこで、若い雄鷄達は、せめてもの心やりに、まだものにもならぬ娘鷄達の方へ挑みかけるのだが、これまたあまりに初心も初心、唯ヒイヒイと啼き叫ぶだけで始末に終へない。しかし、若い雄鷄達の猛心は、その位なことでをさまらばこそだ。再び小母さん鷄達の方へとつて返す。再び嘴の一撃を食ふ。いよいよ荒びに荒び、焦りに焦つて、果はめくら滅法に、娘鷄達の方へ突擊する。そして、足あたり次第に踏み倒すのである。

かうした狼藉に、昨日も娘鷄が二羽踏み殺された。それを涙ながらに御馳走になつたが、脂肪氣が無くて不味かつたことは！　何分、まだ九十日位にしかならないのだから、もともと脂肪氣どころの話ではない。啼聲にしても、まだほんのひよこ風である。それが、怖かつたり、狼狽したりする樣子は見てゐられない。

おまけに、古參の小母さん鷄達と、新參の若い雄鷄達との間の、餌の鬪爭、それがまた大變である。姉の話によると、元來、自分の孵したひよこでさへ、育てようともしなかつた位に、氣の強い小母さん鷄達のことである。どこの家鴨の骨か、軍鷄の骨かも知れぬ雄鷄達に對

して、意地悪るのありつたけをさらけ出すのは當然過ぎる。以前は、敵どうしであつた小母さん鷄達の仲が、打つて變つて睦じくなつたのも、實に一致團結で新參者達にあたる心組からしく、その陰險さ、殘酷さ、ときては、全く母性愛何のそのの雌鷄達である。

かなり乏しさに慣れてゐたらしい新參の鷄達が、喜んで食べるのを見かけるごとに、かつては見向きもしなかつた雜草や、蟲臭い小糠をも、爭つて食べる。それが、また、詮ずるところ、新參の鷄達に爪の垢ほどの物をも食べさせぬやうにするためであつて、新參の鷄達が、かりにも物を食べるやうな素振りでもするが最後、研ぎすました嘴を、相手の腦天めがけて、厭と云ふほどにお見舞申すのである。若い衆鷄達は、さすがに負けてもゐないのだが、あはれなのは娘鷄達である。あまりの痛さに、氣絶に瀕した二羽三羽が、今日も鳥屋のかげに棒立ちで、目を白黑させてゐる。つのる一方の若い衆鷄達の亂暴と、小母さん鷄達の呵責とに、實際、娘鷄達は身の置きどころがない。

「こんなことしといたらあきまへんで」

見かねた松つあんが案じ始める。

「別居をさせんと……」

義兄が同意する。

「伏せまひよか……」

姉が提議する。

つひには、憎つくき（？）小母さん鷄達と若い衆鷄達とを、別別に籠に伏せることに、衆議一決して、娘鷄達萬歳となつた。

玉子を産むことも忘れて、折檻に夢中になつた小母さん鷄達のその後は、報いとは云へ、みじめなものである。二羽とも、脂肪過多はますます激しくなる。羽根が抜け始める。玉子を産むことはおろか、追ひ放しても、最早散歩も出來ぬ鬱陶ぶりである。やがては鳥屋のお吉つあんが、秤を片手に引取りに來るだらう。

若い衆鷄達は、伏せられてゐてもなかなか元氣旺盛だが、餌を與へる度に繰返す姉の言葉が、萬一分つてゐるとしたら、さぞや心も心ならぬことであらう。――

「早う大きなれよ。四百匁位になれよ。鳥屋のお吉つあんが秤を持つて迎へに來るで……。」

因に、四百匁位の雄鷄の肉が、その軟かさと云ひ風味と云ひ、結局鷄肉の王位に當ることを、是非とも書き添へて置かなければならない。

△

隣村、大路村に、かつて小橋吉兵衞なる人があつた。その人の手になつた大路燒が、名陶として、近來好古家の仲間に珍重されてゐる。品は、主に大小の壺にかぎつてゐるらしいが、とりわけ小形の茶壺などには、雅致掬すべきものがある。

足駄の歯のあとと、小橋吉兵衞の文字、それが大路燒の銘であつ

て、本物はいたつて尠いとのこと。

骨董品の話の序に今一つ、——物持ちの寺の和尚さんが、うつかり蘆雪の半切を手放した。買手は屑屋の七で、値段は只の八十圓。念の上にも念を入れるのが常の和尚さんとしては、唯不思議と云ふより他のない失策であつた。

七はそれを大阪へ賣りに行つた。何がさて蘆雪一本、さる骨董屋が、右から左に二千何百圓かを奮發した。それを耳にした和尚さんが、齒ぎしりを噛んだ。地だんだを踏んだ。どうかして取り戻さうとした。手をかへ品をかへて七に談判をした。果は暴力に及んだ。しかしすべては駄目であつた。

以上、いづれも暇人に限つて役立つ話。

△

千軍萬馬の寄せ來るが如く、などと云ふ夕立の叙景は、美文の栞に譲るとしても、とにかく山の夕立には、いつも新鮮な生命がある。

ことに、この地方の夕立には、多分に個性味を持つてゐる。雷にしても、實に意想外な鳴り方をする。山々を境にして相呼應し合ふ雷鳴は、プロコフイエフの管絃樂中の、數十の大太鼓小太鼓を亂打する一節に似てゐるし、彼方の山から此方の村へ、しづしづとおし寄せて來る雨脚の趣は、弱から強へと移つてゆく、絃樂部の最高潮を想はせる。やがて、眼界のかぎりが眞白なものに包まれる。このところ、風は大多忙である。東奔西走、非常招集、また非常招集である。間もなく、それも靜まつて、樋口が久方ぶりの饒舌に耽る。草木が幸福の頂上におし默る。續いて、雷が一つ。間の拔けた鳴りやうをして、雨が晴れる。おきまりの虹が山と山とをつなぐ。何としてもけたされぬ風景である。

「よい雨だしたなあ。あしたは雨喜びだつ　さかい休んどくんなはれ。」

村の使ひが家ごとに布れる。

△

姉の息子の練三、色なら、正直なところ丹波栗色で、廣いのは庭、狹いのは腰と云ふ、鐵筋造りの代物である。

それが、水車屋の源さんに次ぐ村中きつての雜魚とりの名人で、雜魚に對しては、たしかに何かしら感覺以上のものを持つてゐる。泥鰌、彼のさぐりにかかつては、どんなに複雜な岩の中の、隱れ上手な鯰でも、忽ち正體を現はさずにはゐられない。また彼の得意な釣竿の魔術は、それこそ雜魚には運命よりも免れ難いものである。さうした彼が、竹筒、玉網、投網、などの武器携帶で、水かさの減つた日照りの川をさして出陣する、雜魚共の吃驚仰天ぶりは！

しかし、勿論彼とて水車屋の源さんにはかなはない。源さんの得意なのは夜網で、ここぞと狙つた流れの雜魚を、一尾殘さずさらへる膽略ときては、たしかに敵なしである。

「火床に火をおこしといとくんなはれ。二時間もしたら歸りまつさかい。」

さう云ひ殘して出かける練三の後から、魚籠持ち役のわたしが、釣竿まで慾張つて従いてゆく。

「雑魚に笑はれんやうにしなはれ。」

姉が、眞面目に串戲を云ふ。

練三が肩にした手網と投網に、夕日が樣々の形にうねる。路傍の櫟に蜩が啼きはじめる。明日も照りらしい。乾の雲が眞赤に焼けてゐる。

「取りながら行きまひよ。」

田の間を流れてゐる小川や溝で、練三が盛んに小鮒や石くじをすくひ上げる。魚籠が重くなる。瀬音と共に、目ざす大川が行てにせまる。

赤もと、山もと、銀太、赤七、だんぎり坊、みこてん、權六、はや、等、末は丹後の由良に流れ出ると云ふ村の大川には、これ等の他に、季節ごとには例の鮎もおこしになる。

△

八月も、もう半ばだと云ふのに、楠の古木は瑞々しい若葉を敷いてゐる。

「二度目ぢやあなあ。」

姉が云ふ。「一度目のはさつぱり栗鼠が食べてしもて、そら何とも云へんひどいもんぢやつたで、どうぞせんならんと思うても、しやうがないし、枯れなよいがと案じとつたら、また感心に芽を出したぢやあなあ。えらいもんぢやで。」

わたしも眞から感心する。そして楠の古木に敬意を捧げる。

△

姉と一緒に、村の氏神に盆踊を見る。

四隅に紅提燈を釣り下げた屋臺、音頭とり、囃子方、圓い月、涼風、などすべては昔ながらである。片隅では、カンテラの灯をたよりに、婆さんが駄菓子を鬻いでゐる。有平糖、砂糖板、生姜漬、それに、小さな瓢簞形の肉桂水の瓶や、未熟の梨子、などが並んでゐるところ、これも昔の通りである。

この界隈で一番だと云はれてゐる今宵の音頭とりは、なるほどうまいものである。決して踊を中絶させない。一つの音頭から他の音頭へと變つてゆくところなどは、とりわけ巧みである。から、片手を屋臺の手すりに、片手を耳の後ろにあてがつて、全身をひねりひねり、「右や左の踊子さんよ、かけ聲しつかりこと賴むぞよ。」などゝやつてのける。

音頭は、やはり黒井音頭と祭文音頭とに限られてゐるやうである。その文句にしても、一向變化のあとがない。しかし、踊子の方は、こ

れはまたあまりの縮りやうで、かつての面影さへ窺へない。變裝をした男女もゐなければ、何ら享樂の設らしいものも見當らない。整然と男女にわかれて、まるでおつとめ半分とでも云つた素振で、かたばかり手足を動かしてゐる。

彼らの服裝にしても、恐ろしく洗練されてゐて、それが木綿物であるだけに、倚更さつばりとしてゐる。ここには、所謂田舍者の若い衆や娘衆の姿は、決して見ることが出來ない。

娘達の髮形も都會の娘達と殆ど同樣で、探せば斷髮位は見つかるかも知れない。洵にここでの日本踊ときては、それこそ不思議な部類である。

考へるところ、ありきたりの盆踊と云ふものが、もはや彼等には喜ばれてゐないらしい。思想問題などの見地から、かたり當事者の推奨するところにもかかはらず、彼等はもはやさうした地作りの淡醪には醉はないらしい。田の畦道を陸タクが走り、橋本の飲食店がカフェエと云ふものになつて、破れ蓄音器がジャズをふり撒く今日である。彼等が、「右や左の踊子さん」で甘んじてゐられないのも道理である。

やがて、踊りの屋臺には、手風琴ひきや、ヴィオロンひきが現はれるだらう。そして、それらが奏でる陳ぬきのワルツやポルカに、踊子達が熱狂のステップを踏むだらう。それがあながちに遠い夢とは思へない。

△

「おしまひなはれ、えらい踊りだしたなあ。また一ぱい買ひに來ましたやで。」

「さあさあ、これも持つていて買ひまひよか。今とつたとこだつさかい。」

隣りの小母さんが牛の水を買ひに來てゐる。

但馬に近いせいか、丹波の牛もなかなか立派である。天神樣のお神を守つてゐる銅牛、まああれが想像して貰ひたい。こんなのに比べると、おわい車に附物の飴色のなどは、いかに運命とは云へあはれなものである。

古來、大食漢のことを牛のやうだ、などと云ふ。しかし、大食の點はとにかく、毛物の中でも、牛位食物について敏感なものは類が無い。一寸でも變なものを感じたが最後、直に戻してしまふ。ことに、魚の骨などは禁物で、萬一小骨の一つでも（ささらの竹切れでさへも）まじつてゐたとなると、忽ち食道にたてる。炎症をおこす。そしてあれだけのづう體が、衰弱死にいたる。

女の一毛にしばられるのも牛である。さてさて牛の細心さ！

△

去年から電話とラヂオとを引いた上に、この町はまたキネマア、

据ゑ附けて、村中をあつと云はせた豆腐屋六造の内では、もはや名物夫婦喧嘩のなごりさへない。

日にまし商賣が繁昌する上に、かつては火の車を廻した七人の餓鬼達が、不思議に成長して（まつたく不思議に！）それが、また、めいめいに、何かしら家のたしになるのである。

「今度と云ふ今度こそは、なんぼ旦那はんが云ふとくんなはつてもあきまへんさかい、どうぞ何も云はんとおいとくんなはれ。どんなことがあつても去んでしまひまつさかい。」

夫婦喧嘩の度毎に、必ず村の顔役のところへ泣き込んだきまり文句も、おかみさんには、もはや嫁入りの晩の記憶よりも朦朧としてゐる。今や六造夫婦の間には、離れぬまじなひの金の鎚（？）が、しつかりと打ち込まれてゐる。

「どうぞ六造が隠し酒（この頃はことにひどくなつた）を止めてくれるように、大阪へ出稼ぎ中の息子達が、どうぞ模範職工をとほしてくれるように、」

おかみさんの祈りらしい祈りとては、今のところこんなものである。

——二九・夏——



# 娯樂と大衆

## 映畫の社會學

大森義太郎

かういふ題の本は、『ぞちおろぎい・です・きいのす』ていふのがドイツにはたしかにあるんだ。と云つて、この私の短文はそれを種本にしたわけではない。なにしろ、あるといふことはカタログで見てるが、實はまだ讀んでないんだから。しかしいまは讀んでる必要もない。なぜつて、こんな大仰な題をつけて見たのも、たゞ、映畫を論じるにしてはひどく無趣味なことを此處で書くといふ、その斷り書だけの意味だけなんだから。

そこで。映畫館なるものは、日々數百萬の者が此處に來つて娯樂し、善導せられ、教訓せらるゝ所の民衆娯樂の場所なり、といふのは『アメリカ映畫館主連盟』の會長のシドニ・コーヘンが、ある時ある問題についての聲明書で上げた氣焔だつた。これは、人柄が人柄なんで、少し手前味噌だけれど、しかし日本でも映畫は民衆娯樂として盛んに論じられた、論じられてゐる。それやこれや、映畫といふものが現代の娯樂の先頭に華々しく立つてゐることは、みんな異存なく認める事實だらう。そしてこの娯樂たるや並大抵のものでない、大きな影響をもつてゐるほどである。芝居の新しい演出の仕方に、小

備に、いま銀座を二三分の散歩でわかるやうに若い男や女の着物や髪の好みに、映畫の影響がれきれきと現はれてゐるのを見給へ。

どうして、このやうに映畫はいま娛樂の帝王であるのか？　要するに娛樂のこの形態がいちばんよく時代の好尚に叶つてるから。しかしこゝで、どうして？をもうひとつ投げると問題はちよつとむづかしくなる。時代の好尚を解剖しなければならない。が、そんなことは止して、この最高の機械文明の產物が機械文明に、このもつとも近代的な娛樂が近代に喜び迎へられるのは、當り前ぢやないかとでも云つて置かう。

それにしても、映畫が現代の大きな娛樂機關である、その主要原因のひとつは廉く〳〵て濟むことだ、とわたしは思つてる。映畫より先に、いちばんの、西洋でも日本でも、娛樂の對象だつた芝居と比べて見るがいゝ。例へば邦樂座の入場料でもこれを歌舞伎座に比べると、──いやその前に我々は映畫が實際どの位に民衆の娛樂だかを見ておく必要がある。そしてそれには、小うるさい話だが、ほんの少しばかし數字を入れさしていただきたい。

映畫の盛んなのは、云ふまでもない、アメリカである。これは二〇・五〇〇といふ映畫館數を示しただけでもわかるといふもの。世界全體の映畫館數を五一・一〇三としてその半分に近い。（一九二七年）入場者の數でいふと、一日當り七・〇〇〇・〇〇〇、別の計算では全世界で一年間に映畫を見る延人員は六〇億の概數、その半分の三〇億はアメリカだと云ふ。またこんなこともある。人口一・五〇〇、と云へば大分田舍だが、それでも普通の映畫館で一週間の入場者は三五〇ある。しかも、これらの映畫館はせいぜい一週に二晚、多くは一晚しか興行しない。

しかしこれらはアメリカの話。で、日本へ來よう。まるで比較にならない。文部省統計によると、常設映畫館數は全國でたつた一・〇四三である（昭和二年五月末現在）。入場者はどうか。昭和元年の一年間の數は、市部—九一・八八六・六二三、町村部になると—四四・四〇四・四六七、全國の總計が一三六・二九一・〇八九である。そこでこれを人口と對して比率をとつて見よう。市部の方でも僅かに七・一一だが、町村部にならうものなら〇・九五しかありやしない。總計は二・二八。實に少い！　これでは民衆娛樂といふ、その民衆の字があんまり貧弱だ。それでも世間でいふとほり映畫が娛樂としていちばん廣く（相對的に）行はれてるんだと考へると、この國の民衆は實に『緊縮』した、そして修道士のごとくにも行ひすました生活をしてゐるわけである。アメリカにしてだつて、一億を越す人口數を考へ合せれば、映畫はさう民衆的でもないぢやないか。

この問題では我々はもう一歩進めることができる。前に戻つて、映畫く見られることが、映畫が大衆的な娛樂の對象だといふことの重要な原因である。出來た始めごろ映畫がいはゆる民衆から歡迎されたのは、もちろん物珍らしかつたからだが、しかしアドルフ・ズーカアだのマ

ーカス・ロオだの、今日の映畫大資本家がその時分に考へ出したニッケル・オデオンで白銅貨ひとつもつて行けば映畫が見られたからだつた。我々のところでだつて、子供の時分五錢で例へば『不如歸』を見たことなど記憶してる人が少くない筈だ。そしてこんな僅かな金で『不如歸』が見られるつて云ふんで、映畫館に足をはこんだ人が多かつたんぢやないか。

　映畫が發達するにつれて、しかし、この娯樂もあんまり廉くては濟まなくなつた。またアメリカの話だが、だんだん高くなつてきてゐて、遂に一九二三年にブロードウエイで入場料を二ドルにするといふ發表があつた。理由は生産費だとかその他の掛りがこの入場料でなくちやとうてい引合はなくなつたといふんだ。これは猛烈な反對も出て當時大問題になつた。(前のコーヘンの聲明書などもこの時のことである。)いまこの事件を詳しく書いてゐる暇はないが、しかしなんと云はうと結局は大體入場料はこゝへ落着いてしまつた。といふのは假りに現在(といつて實は一九二七年の調べだが)のニユー・ヨークの主な映畫館の入場料を見ると、まあ次のやうなもんである。エンパシー——二・二〇ドル、アポロ——二・二〇ドル、アスタア——一・一〇カラ二・二〇ドル、キヤピトル——〇・五〇カラ一・六五ドル、セントラル——一・一〇カラ二・二〇ドル、クライテリオン——一・一〇カラ二・二〇ドル。パラマウントやリアルト、リボリなどは割に廉くて、四〇セント——七五セント——九五セントである。だが、この値段でいつたい廉いのか高いのかは、話がアメリカだし、いろいろのことを考へのうちに入れなければならないから、ちよつと判斷がつきにくいわけである。たゞかういふことがある。さつき云つた二ドル値上げ問題の際、『ゼ・フイルム・デイリー』誌は「一流館に於て幾何の入場料を徴することが至當なりや」といふ質問状を發して回答を求めた。その回答の發表によると、大多數の者は最高五〇セント、最低は一〇セント乃至一五セントを至當と考へてゐて、七五セント乃至一ドルをもつて最高とすると答へた者は一〇〇人となかつた。もちろん見る方はなるべく廉くといふんでかなり蟲のいゝことを云ふ者だらうが、それでもこの紳士淑女達——回答は大學教授だとか大臣だとか婦人クラブ員だとかの「一流」の人々から集められたと云ふ——が適當と考へたものと前に擧げた現實の入場料とは大分ひどい開きだ。これで見ると、一・一〇ドルから二・二〇ドルなんていふのは決して廉い映畫見物料でないことは確である。(注意して置くが、アメリカではイーチヤ一本立てゞある。)

　で、日本は? この方は諸君がよく御存知だ。東京市内のいはゆる一流館だといちばん下で五〇錢、八〇錢、少し體を樂にしてあんまりひどくスクリーンの顔がいびつに見えないところへ坐らうと思ふと、一圓五〇錢ぐらゐすぐ取られてしまふ。そりや普通の館で汚れた寫眞で我慢する氣なら三〇錢でも濟む。それでも、わたしは聞いて見たい、この入場料は廉いでせうか? そして民衆娯樂としてゞす?

漫然廉いかどうか云はれても困るだらうが、例へば月收六・七〇圓の安月給取りにとつてどうだらう。飯を食つて、着物を着て、家に住んで……。から考へて來ると三〇錢の入場料はあまり廉くはないでせうが。まして日給一圓五〇錢ももらつてない賃銀勞働者にとつては全然手が屆かない。

こゝで我々が改めて考へていゝのは、たゞの民衆ぢやない、勞働階級は映畫を樂しむだけの餘裕すらも今日與へられてゐないことである。その映畫がいちばん民衆的だと云はれてるとすれば、ほかにどんな娯樂が勞働階級にあるのか！勞働階級はなんの娯樂も與へられてゐないんだ。もちろんこれは資本主義の社會に當り前のことで、わかりきつてる。しかし、わかりきつてるが、映畫、映畫と騒がれる時よく考へておいていゝことである。

このやうにして、映畫は民衆的だ、大衆的だと頻りに唱へられる。けれど、その民衆的、大衆的といふ場合には、いま明かにしたやうに、肝心のプロレタリアート――これがほんとの大衆的だ――がそのうちから漏れてる、これは忘れちやいけない。それかと云つて一方、貴族や大金持は娯樂を嫌になるほど澤山にもつてる、映畫なんか大して見向きもしない。そこでゞある。映畫を大切な娯樂にしてるのは主として小ブルジョア層でなければならぬ。

これも實は映畫館に一度足を入れゝば直きとわかることだ。實に小ブルジョア・インテリゲントが多いぢやないか、學生が多いぢやないか。それで、早い話が、今日のもつとも典型的な現象として、夜おそく銀座のカフェーから出てくる學生が、別れに「グッド・ナイト」と變に甘つたるい聲色を使ふんである。何かと思へば、『底拔け騒ぎ』のクレアラ・ボウの臺詞だと云ふ。

さて、と筆を新にするんだが、わたしは娯樂の對象としてばかし映畫を見てきた、しかしいやしくも今日映畫を語るには、娯樂としてだけではいけない。藝術としての映畫についても何か云ふ必要があらう。それを試みる。もつとも矢つぱり極く散文的に。

映畫は非常な進歩をした。假りにグリフイスの『國民の創生』をもつて、最近の――トーキーは別として――ストローハイムやスタンバーグやチヤプリンやの作品と比べて見るといゝ。日本映畫になつたら驚くべきものである。前に云つた『不如歸』の人物がぎこちなく小走りに動く活動寫眞から今日のカメラ技巧を縱横に使つた、現像室作業の完備した牛原作品や村田作品までには、なんといふ進歩だらう！けれども、今もなほ藝術批評家達は（決してわたしではない）映畫を藝術として何かなし低級だと考へてゐる。それから映畫のなかでも特にアメリカものは淺薄で低級であると輕蔑する。これは映畫批評家のなかにもある。フランス物やドイツものゝ方がずつと高級だと。

この事實は非常に興味のあることだ。まづ、もうひとつ次の事實をこのことと考へ併せていたゞきたい。

前に書いたやうに、アメリカではいちばん澤山の人々が映畫を見

る。ほかのどの國よりも映畫はこの國で、民衆的である。のみならず、アメリカのははなはだ合理的な企業經營法で民衆の好惡をはつきりと數字（貨幣の）で測り示すことができるやうに仕組まれてる。例へばさつき云つたニユー・ヨークのキヤピトル座だが、こゝで、——諸君になじみの深いものを擧げると——『メリー・ウイドウ』は第一週に六八・六七〇ドルを『キキ』は第一週に七四・二四一ドルを『ステラ・ダラス』は同じく五六・五二二ドルを『ヴオルガ・ボートマン』は同じく五六・六一二ドルを『ラ・ボエーム』は同じく六〇・八八九ドルを擧げたと一目瞭然表に出てくるやうに。この數字に制作者は左右される。だからと云つて『公衆はこゝで實際に趣味の獨裁官になつてゐる』などゝは云へない、制作者がすなはち資本家がいろいろな形でこの『公衆』の趣味をあらかじめ決定してることを見逃がしてはならぬが、しかし、アメリカではひろい民衆が相應に趣味の決定權にあづかつてはゐる。そこで、民衆がハッピイ・エンドが好きだとあれば、藝術批評家諸君がどんなに輕蔑しようと、アメリカ映畫はハッピイ・エンドだ。

これに反して、ドイツ、フランスでは映畫を見る者が少い、つまりいゝより選ばれたる愛好者である、アメリカと比べれば。だから、ドイツ、フランスの映畫は、例へばハッピイ・エンドがより少くて、藝術批評家のお目鑑にいゝより多く叶ふ。

映畫の發達についてもさうだ。入場料が高くなつて、映畫がより教養ある人々の手、といふより眼——さうして今では耳——の方へ移つてつて行くに從つて、映畫はひろい低い民衆のたわいのない娯樂（さう藝術批評家諸君は云ふ）から藝術といふものへ躍進して行つた。日本の場合を現實に見給へ。日本映畫の觀衆に學生や一般のインテリゲントが增へるにつれて、大變に藝術的になつて來たではないか！

これは當然だ。何が藝術的か、どういふ映畫が藝術的か、これを決するのは選ばれたる人々すなはち上層の階級の人々、その趣味である。だから、映畫がさういふ上層の人々の觀賞の對象にいゝより多くなるに從つて、それはいゝより藝術的になる。むしろ、映畫が藝術と呼ばれるやうになるためには、入場料を高くするなりして、少數の選ばれたる者に讓り渡されなければならぬ。資本主義の社會においては一般にいつも斯うである。後には大衆がぼんやりと殘されてゐる。そして彼等に當てがはれるものは、映畫についていへば、只である代りに愚劣極ない、、、映畫、緊縮版映畫映畫のみである。嫌だらうとなんだらうと、彼にとつてほかに見るものはない。まして、大衆の自己の藝術的精神、もちろん今日あるままの大衆のこの精神が明日の藝術を一〇〇％に正しく示してるわけではないが、映畫に現實に反映させるなんてことはどこか他處の大衆の樂園での話でしかない。

もうわたしは結論らしいものにひた急きに急がねばならない。上のことからいろんなことが導き出される。その一々は讀者諸君にお委かせするとして、要するにそれらをひつくるめて云へば、今日の映畫に

に甚だ面白カラザルコト多々アリト云ふことになる。いふまでもなく文部大臣や警視總監とは違つた意味でだ。では、この映畫について面白からざる點を除去するにはどうしたらいゝかと云ふと、それは大いに困難な仕事である。が、またもつとも容易な仕事でもある。なぜつて、今日の映畫を今日の映畫たらしめてるその社會的條件をひつくりかへせばいゝんだから。

こゝに映畫の、一般に娯樂の、もつとも根源的な社會性がある。

# 瘠せてゐる演劇

番匠谷英一

演劇は所詮民衆のものだ。我々は民衆なき演劇を考へることは出來ない。丁度民衆なき政治を考へることが出來ないやうに。藝術の一分野としての演劇、娯樂のための演劇、宣傳のための演劇――演劇は幾つかの横顔をもつてゐる。しかし常にくつついて居るものは、曰く『觀衆』、即ち民衆のシノニムだ。鑑賞者なき文學繪畫を考へることが出來ても觀衆なき演劇を考へることは出來ない。

私の演劇論の第一章は『觀衆』だ。獻題も『觀衆へ』だ。この傾向は現代に於ては珍らしいことではない。學者はえてして考へたがる。譬へば演劇の本質とは？ だがブルヌチエールの[illegible]志爭鬪說もアーチャーの危機說も現代人にとつてはあまりに書齋的だ。現代人は眼で考へる。その眼は演劇の本質がいつか戯曲の文學性を離れて觀衆の眞只中へ飛行遷座したことを見て居る。演劇は民衆に出でて民衆に終る。鑑賞も批評もこの角度を忘れてはならない。卑近な譬へだが、藝術的香氣いかに馥郁たりとも觀衆なかつせば、どうするのだ。眞逆そんなことがありえないとしても段々減つて行つたら？ しかし劇場燒くるも可なり、俳優死すとも苦しからず、觀衆あるところ必ず演劇ありだ。觀衆あつての演劇であつて、演劇あつての觀衆ではない。

そこで私は思ふ、そこらあたりの劇場人は何故その觀衆を輕視するのだ。現代演劇の不振は、不入は、エピゴーネン根性は正にそこに根ざして居る。或は彼等は口邊の一角に輕蔑的な微笑をたゝえて言ふかもしれない。『どう致しまして。我々は寢ても覺めてもお客樣の御機嫌ばかり氣にして居ります』と。しかし私は斷言する。彼等の苦心（？）は方法を過つて居る。彼等は目先の儲けに齷齪して居る。彼等は全國を、將來を考へなさすぎる。それでは演劇が、觀衆が可哀さうだ。『もつと觀衆の感情を考へてくれ』だ。一言註釋を加へる。これは迎合せよ、おべつかせよといふのではない。イージーな欲望の下へこそこそと這入りこめといふのではない。恥かしげもなく檜舞臺で輕業師の眞似をやらせたり、姥櫻どちにやたらに裸體露出症を獎勵せよといふのではない。寧ろ觀衆を叱りつけ、吃驚させ、ひきつけ、ひつぱり廻せ

といふのだ。精神的教化を藝術的情操教育を施せといふのだ。今日の慰安、明日の糧を與へ、明後日の生活を暗示してやれ、負けてやつていゝ氣にさすな、散々リードし勝つて勝つて勝ちぬけ、といふのだ。も少し説明するならば觀衆の生活感情にじかに接觸せよ。驀に飛込め。燒鏝を水につける時ヂュッと火花を散らす瞬間、あれを捕へろ。シャルムーズをどぶにぶちこんで明日の衣裳を供給せよ。心をだらけさせ、ぐんにやりさせるものでなくて、明快さ、健康、エネルギーを與へろだ。現代人誰しもその周圍に心を錨のやうに重くさせ、その肉體を道路のやうにふみつける有形無形の壓制者依存者の多くを持つて居る。それほど惱み多く逍遙少いのが現代の生活相だ。そのくせ彼等は内心その靈魂に呼びかけてくれるものをどんなにか待つてることだらう。眞の生活を暗示し、考へさせ、物を見る眼を與へてくれるものをどんなに要求してゐることか。そしてその役目を果し得るもの演劇の悲壯的サイドではなからうか。彼等は生活に疲れて居る。喘いで居る。やつと生存しうる人間が何と多く、眞に生活しうる人間が何と少きことよ。先づ彼等に明るさを、慰安を、希望を與へよ。たとひ須臾なりとも生活苦を忘れさせよ。この役目を果し得るもの演劇の滑稽的サイドではなからうか。或はこんな見方からして間違つてるかも知れない。要するにサイドはサイドにすぎない。彼等の靈魂に呼びかけうるもの正に一つだから。ギリシア劇の理想は偉大なる簡素と崇高なる靜謐だ。しかし現代の演劇はその躍動的で、鏡面的で、衝波的であることを必要とする。何等かの意味で我々の生活にアッピールする演劇でなくして現代の演劇と言ひうるだらうか。

演劇はいかなる藝術にも勝つて時代文化を反映する。現代は物質文明の天下だ。しかもせちがらい、きりつめた物質文明の。景氣不景氣の後者が見たかつたらプロメナードと劇場を覗け。演劇がたとひ逆立ちしても觀衆に頭の上らぬ所以だ。減俸問題が四五日新聞の植字工をまごつかせた。(そのこと自身何といふ悲喜劇の好題目だらう)すると三日を出でずして某大劇場は入場料を半減した。この心理を考へるだ。生活相は進展する。演劇も進展しなければならない。いつまでも觀衆を馬鹿にして貰ふまいだ。

譬へば歌舞伎だ。これは正しく昭和聖代の怪物の一つでなければならない。演劇は時代の尖端に立つことを必要とする。だから歌舞伎所會の存在は山椒魚以上の不思議だ。主人が私怨のために双物三昧に及んで切腹し、哀れお家は斷絶する。Aは偶然その敵を見んで居たが、[illegible]にこの命は主人の物だ(何と簡單なロジックよ)と言つて復讐に加擔する。(命の所有權爭議は此處では決して起らない)兄のBはそのために人を殺して割腹を切る――何と現代に交渉うすき芝居であることよ。これでは青年が歌舞伎から遠ざかるのも自然だ。しかもこの一幕が近頃での收穫であり、役者の技術がすばらしく秀拔であつたが故に一層私には腹立たしかつた。歌舞伎愛好者(?)の私でさへ近頃は觀劇ごとに腹立たしさを感じる。騙されたやうな、損をしたやうな、頭が

杯になり、夜行列車に乘つたよりも疲れ、（馬鹿々々しいから疲れるのだ）屋外の夜氣に當つて初めてほつとするのが常だ。しかも貴重なる七時間と妙齡の處女が百貨店内雜沓裡の十日間の勞働賃金相當の金錢がそのために浪費される。何とそれは不合理なことよ。形式に於て尊重すべき歌舞伎も内容的には何と過去の藝術であることよ。劇場人はこのことをどう考へてるのだらうか。先づ狂言はどうだ。やゝ鑑賞するに足る中幕か何かの一幕か關の山で、他は低腦の奧樣むきの活人畫式時代物、常套的人情物、レヴユ以下の人形展覽會が大部分だ。（尤も歌舞伎は現代的レヴユなるが故に客を呼んでるのではあるが）それから筋といへば殿様の放埒、お家の頽廢何とか丸の詮議、一枚の折紙のために切腹する侍、そのために身を賣る娘、彼女を身受けするために黄金をまきちらす敵役──一體それが現代人に對していかなる交渉があるのだ。對岸の火事では駄目だ。舞臺の上で我々の心の中の出來事を見せてくれ。生きた人間を舞臺の上で働かせてくれ。特に歌舞伎の宿弊としてあぐべきものは濟度すべからざるスターシステムと病膏肓に入つた俗衆の役者崇拜である。他所目にもお義理の狂言に得々としてはね返つてる役者も役者だが、ひいきの役者さへ見れば眼を細くし涎を垂らしてる見物にもうんざりする。名門子弟をのさばらす仕打も仕打だが、可愛いゝとか聲が似てるとかいつてほめそやす一等席連中の無智暴露はどうだ。第一蟲酸が走るのは某々名優たちの觀衆を馬鹿にした面構へと拙劣なそのくせ投げやりな技藝だ。これこそ盜人たけだけしの類か。しかも役者そのもの今やすでに危機にひんして居る。早い話が雀右衞門の死、歌右衞門梅幸の老衰は決定的に女形の衰滅を物語つて居る。女形なくして歌舞伎がやれるか。また長唄清元常盤津の氣息奄々的狀態は中幕物の上演不可能を證明若くは豫告して居る。恐らく吉右衞門菊五郎を最後として歌舞伎は滅んでしまふのであらう。劇場人は言ふかもしれない『御心配有難う。でもお客様がいらして下さるんですからね』と。ところがそいつがいけないのだ。觀客は常に流動する。青年の、新興階級の時代が來たらどうするのだ。シネマの隆盛は何を語るか。いゝ加減に眼をさませ。今の内に思ひきつて整理の鉈を揮へ。歌舞伎必らずしも愚劇のみならず。まして傳統がある、フォルムがある。思ひきつて刈込め。枝葉より幹をだ。そしたらフォルムの藝術として（そのフォルムも最早頽れかゝつて居るのだが）最大限度に殘存しうるだらう。どうせ滅ぶものだ、しかも演劇革命の邪魔物、いつそたゝき毀した方が──さうした過激論者が出るのも一應頷かれる所以である。

次に所謂新劇を一瞥しよう。文藝協會自由劇場の創設以來最近築地小劇場の分裂に到るまで、これは明らかに演劇におけるインテリゲンチアの對舊芝居階級の擡頭だつた。しかし二十年の長き日子に拘はらず何とこれらの運動の效果鮮少なりしことよ。原因はいふまでもなくインテリゲンチア自身の生活的危機である。これは實際仕方のないことだつた。尤もその中にあつて築地小劇場の仕事だけは何といつても

稱讚に値する。仕事それ自身に於て、また新劇運動の總和的意味に於ても。彼の功績第一は演劇の本道を公衆に明示したことである。レパートリーに於ても一時的流行物叫喚的表現派並びにチエホフその他の啓蒙的外國作品に滿足せずして創作物に手を染め出したことも充分[illegible]かれるやり方である。功績第二はスターシステム蹂躙の絶對的勝利と清新潑溂たる舞臺美術的飛躍である。その後の新劇運動のすべてが、所謂プロ演劇運動さへ、何等かの意味に於て彼を母胎として居ることを考へるならば、何人も私のこの花環に不同意を表さないであらう。

現今築地小劇場の名は所謂殘留組によつて繼承されて居るが彼自身の仕事は分裂をもつて一段落告げたものと見るべきである。一は松竹、一は帝劇を背景として僅に月末的興行を惠まれて居ることは一面慶賀すべきであるとともに一面大に警戒を必要とする。さうして今や新劇運動は一時的（？）スランプに入つた。成程『母』や『吠えろ支那』は一つの收穫であつた。だがあの脚色物連投は何といふ醜態だ。しかも當年の意氣今や漸く影をひそめ、公表するにたるレパートリーなく、主張すること少なく、徒にヂヤーナリズムに追隨し、觀衆に阿諛するの傾向著しきことは彼等の無方針暴露でなくて何だらう。せめて脚色競爭だけは勘忍してくれ。笛を火吹竹にするな。假に劇作界不振を認むるとするも隱忍自重局面打破に努めてさきの聲譽にそむかないでくれ。諸君が天才のひこばえを見つけなくて誰が見つけるのだ。新派凋落の原因は新聞小說上演の連續ではないか。フォルムに於て歌舞伎亞流者の域を出なかつた澤田が、ともかくあれだけの人氣を博しえたのは一に創作物連投のためではないか。それによつて潑溂たる意氣を觀衆と交流しえたためではないか。右せんか左せんかと迷ふなかれ。一路邁進せよ。一時的好所に魂を奪はれて同志を裏切るなかれだ。

最近プロ劇團の進出、さうして今月新興劇團協議會聲明書によつて敷かれた四劇團の共同戰線はその目覺ましさに於て、相互扶助的興行に於て劇界の祥事でなければならない。最近『全線』の壓倒的成功は何を語るか。——しかし此處に附言しておきたいことは、民衆の要望する演劇、單に『啓蒙的並にアヂテーションのために最も有効なる演劇』では決してないといふことだ。無産階級解放運動の一翼としての演劇それも結構、しかし決してそれが全部ではないといふことだ。演劇は演劇である。決してポスターではない。

終りに一部の嗤笑を豫想して二三の提言をする。

一、東京に市立劇場をつくれ。少くともその機運をつくれ。理由は簡單だ、演劇は民衆のものだから。但し監督の[illegible]その他に關し演劇をアカデミックなものにしない用心が肝要。賢明なる市民諸君、いかがです。

一、新聞は率先して演劇新興運動の尖端に立て。それは卿等の誇にして義務だ。極りきつた評語並びに[illegible]の劇評が何と演劇を腐らしてることよ。劇場から金一封を頂戴する劇評家に何が書けるといふのだ。

一、警視廳よ、檢閲制度を改善せよ。理由は明瞭だ。

一、入場料を低下せよ。これはスターシステム排斥、時間縮少と相關關係をもつ。外山正一は明治十九年に夜分四五時間にすべしと主張してる。少くとも意見そのものは卓見だ。

一、劇場は最高給の脚本選定者をおけ。フォルムよりも內容をだ。脚作家養成演劇興隆の道はそれによつて開かれるだらう。よき例を學ぶことは恥ではない。

一、よき劇作家よ。どしどし出て來い。現代の演劇は何よりも卿等を待つて居る。

さて日本演劇の將來は？——勿論私は大に期待して居る。準備は完了した。これからが實行期だといふ氣がする。嵐の前の靜けさを感じる。でなくてどうしてこんな生意氣な饒舌を、憎まれ口をたゝくものか。

（十月三十日）

# 娯樂讀物の効用

林房雄

講談や探偵小說を輕蔑するのは、それは輕蔑するものの勝手だ。しかし、彼等高級な文化的紳士諸君の感情の如何に拘らず、これらの低級にして通俗的の興味讀物は、深く現在の大衆の間に根を下して、動かすべからざる勢力を保持してゐる。

元來書籍といふものは、寶石とか舶來の煙草などとはいくらか違ふかもしれないが、やはり一種の贅澤品であつて、——だから、節約の必要に迫られた、といふやうな場合に、まつさきに家庭から放逐されるものゝ一つは、書籍である。いざ緊縮といふ場合、主婦が婦人雜誌を節約し、主人が圓本を解約することは、他の生活必需品を切棄てることに比べて割合に苦痛なしに行はれる。

或る書店の若い主人とこんな會話を交したことがある。

「どうです。近頃の景氣は？」

「景氣だけはつけてゐますがね、なにしろひどいものですよ。昨年にくらべると、今年は毎日の賣上げが四割以上少いんですからね。」

「ほう、そんなですか。」

「なんといつても緊縮時代でせう。ぎりぎりの生活費の中から、さて何をきりつめやうかと考へるとき、先づ氣のつくのは書物でせうよ。書物ならやめても命にはかゝはらないし。………」

「なるほどね。だとすると、本屋の主人の見地からしても、文化は經濟に先行するなんて、そこいらの學者先生みたいなことは、いへない義理ですね。」

「どうぞ、お手柔かに。——あんただつて同罪者ですよ。ほら、ブック・メーカーといふ言葉もあるし。……」

圓本流行でよほど安價になつてゐるとはいへ、それが直接腹の足しにならないものだといふ意味で、書籍は高價な贅澤品の一つに數へられざるを得ない。しかも本を讀むためには、一定度の教養と閑暇が必要である。大衆の生活が逼迫して、金と暇と教養がだん〳〵少くなつてくるにつれて、書籍は大衆の生活から追ひ出され、本屋の主人と世のブック・メーカー諸氏のしかめつ面を結果する傾きを持つ。

金と時間と教養の缺乏に極度に惱んでゐる農村に於いて、この傾きは特に顯著だ。相當に富裕な村でも、新聞雜誌の購讀者は、それこそ「十指と屈すれば足る」程度であり、高級な書籍を讀むものに至つては、東京の大學を半途退學した文學かぶれの地主の息子か、ナトルプ、コーエンをいまだにかつぎまわつてゐる若い小學校の先生くらゐなものである。

この悲しむべき狀態は、むろん農村のみに止まらない。都會の勞働者街についてみても似たりよつたりである。そして特に最近に於ては、從來讀書階級の中堅をなしてゐた官吏俸給生活者、學生の間にもこれと同じやうな狀態が支配しようとしてゐる。中間階級インテリゲンチヤの貧困化は、彼等の高級な書籍への關心を加速度に減退させ、彼等に與へられてゐた知識階級といふ名前を、空辭に歸せしめかねない有樣である。

これは、いふまでもなく國民文化の一般的な頽廢である。資本家經濟のゆきづまりを打開しようとする「合理化」の進行が、大衆の極度の貧困化を導き、大衆の生活から金と時間と教養の機會を奪ひ、次第に一切の「文化」なき、一切の娯樂なき緊縮時代を出現させようとしてゐる。──即ち「帝國主義段階に於ける文化的頽廢」の一つの現れだ。

それにもかゝはらず講談、探偵小說等によつて代表される娯樂讀物、興味讀物(講談、落語、怪奇探偵冒險物語、情話、實話、漫談ナンセンス、性讀物、その他)は、深く大衆の間に根を下し、勢ひ動かすべからず益々枝を伸し、葉を繁らしつゝある。

この通俗讀物、興味小說の全盛は、日本のみに止らず、世界の資本主義國家に共通する現象であるらしい。アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス、共にその例外でない。──アメリカの或る批評家は、高級讀物が、國民大衆の間に殆んど零に近い勢力しか持つてゐないことを指摘して、通俗讀物こそが、現代アメリカ人の唯一の生活指導者であり、人生觀の基礎であると歎いてゐる。ドイツ、フランスに於ても同じ狀態が看取される。日本出版界のナンバー・ワンが彼の××社式の「低級俗惡」な出版物であることは人も知るとほりである。惡貨が良貨を驅逐する。高級な讀物に代つて低級な讀物が繁茂する。明かにこれは、文化の後退に外ならない。高級な文化人たるものは、この世界的惡傾向と身を以て戰はなければならない。──がしかし、私としてはこの文化人的義憤に無條件に共感することはできな

い。何故なら、この低級化、この通俗化、は決して大衆自身、文學自身の罪ではなく、もつと深いところにその原因をもち、高級な文化的紳士諸君の悲歎や、憤慨によつて、決して阻止できるものでない。

現在の大衆の生活から、金と時間と教養の機會を奪つたものは、ゆきつまつた現在の經濟及び政治の作用であつて、文學そのものの作用でない。經濟的に、時間的に、教養的に困窮してゐる大衆は、讀物そのものから離れ去るか、でなければ直接に娯樂の要求を滿足させてくれる興味讀物につくかである。高級な書籍にふれることなく、低級な讀物に滿足してゐるのは、いふまでもなく文化の退歩である。しかし、生活そのものが、それを強制するのだから仕方がない。

現代の大衆には金がない。

しかし、いくら金がなくとも、人間だ。娯樂なしには生きて行けない。が、すべての娯樂には金がかゝる。酒でも女でも芝居でも活動でも、旅行でも、スポーツでも……。そこで、「面白い本」などは、まあ、一ばん安い娯樂機關たといふことになる。家の中に寝ころんで讀めば、電車賃がいらないだけでも助かる。

小さな疲弊した農村の雨降り休みに、くさい臭ひのする床の上に、村中が集つて、一人の若者が讀みあげる「國定忠次」に聞きとれてゐる状景を豫想せよ。

また工場街の、また月給日には間のある休日。――かまぼこ長屋に寝ころんで、昨夜夜店から買つて來た一部五錢の「講談クラブ」によみふけつてゐる青年職工の姿を想像するがいゝ。長屋を下宿の二階にもつてくれば、貧乏な會社員、官吏、或は學生が、「××××」や、「新青年」を讀みふけつてゐる姿が現れて來る。

そして現代の大衆には暇がない。――暇がないといふ意味は、極度の疲勞が支配してゐるといふことだ。そして疲勞は娯樂を要求する。

現在で最も激務に從事してゐる人間は、ブルジョアジイとプロレタリアートの前衞的人物であらうが、これらの前衞的人物――ブルジョアの政治家、實業家、プロレタリア黨の闘士、勞働組合の指導者等が、興味讀物、大衆讀物の愛讀者であることは、甚だ興味ある事實である。

故田中義一が講談の愛讀者であり、能辯大統領フーヴアが探偵小説の愛好者であるといふ事實は甚だ暗示的である。プロレタリアの側にしても、死んだ渡邊政之助が講談クラブの愛讀者であり、佐野學が、マルクス主義の原書と一しよに、何時も「苦樂」といふ娯樂雑誌をカバンに入れて歩いてゐたことを私は覺えてゐる。組合の本部には「マルクス主義」といふ雑誌や理論書とならんで、講談や探偵小説がころがつてゐる。……

だから、通俗讀物、娯樂讀物の効用は、決して輕蔑できる種類のものでない。現代のあらゆる階級と職業は、金と時間と教養の三つのものの全部、或はその中の一つ、または二つを奪はれてゐる。金に不足

のないブルジョア政治家や實業家は、時間と教養から、教養に不足のない知識階級は、時間と金から、勞働者と農民の大衆は、この三つのもののすべてから……。この事實の中に「低級俗惡」な娯樂讀物の恐るべき繁榮の原因がある。贅澤品の一種であるべき書籍が、逆に最も輕便な娯樂機關に變化する、といふ一見矛盾してゐて矛盾してゐない現象が起る。

だから自ら高級なりと稱する作家や思想家が、講談や探偵小說や通俗講話を輕蔑するのは勝手だ。彼等の思ひあがりは、只、彼等自身を輕蔑に價する無用物に化せしめる効用を持つにすぎないのだから。通俗的娯樂讀物全盛は、作家や思想家が「流れに抗して」高級な作品をつくり出すことによつては、矯正されない。流行の原因が深く現在の政治經濟の中にある限り、社會組織そのものの、、に待つより外はない。科學や文學を裝身具扱ひにしてゐるディレッタントならいざ知らず、いやしくも文章經國の志、とまではゆかずとも、文學及び科學の人生價値を積極的に認めるものは、この通俗化娯樂化の傾向を、意識的に逆利用するだけの心構へが必要であらう。この點、生半可なプロレタリア文學論者よりも、ブルジョアジーのイデオローグの方が、一步進んでゐる。――早い話しが、×××××の「金解禁××」(それが彼の直筆であるか否かは問題でない。)または××××先生の名著「×」を見るがいゝ。如何にそれが××社式の最たるものであるか。そして××社式なるが故に、如何に大きく、且つ強く、彼等の階級的方向に大衆を煽情し得てゐることか。

早くから大衆讀物の分野で、プロレタリア的方向を作り出すことに努力してゐる大衆作家貴司山治氏は、最近或雜誌で、××社(恐らく、、社であらう。)の編輯について、次のやうな事實を暴露してゐる。

「あそこでは菊池寬の原稿でも、山本有三の原稿でも、又何々、何てといふさして有名でない人の原稿でも、一々その雜誌の編輯員全體の廻讀する。そしてその作品が讀者に受けるかどうかといふことについての各々意見をのべる。

そして、多數決を以て掲載の決定された原稿は決してそのまゝ印刷所へ廻されるやうなことはなく、一應少年社員によませる。

××社には百人位の少年社員がゐる。これらは尋常小學校程度のものばかりで決して高い鑑識眼を持つてゐるわけではない。しかも、讀んだ上でおの〳〵面白いとか、面白くないとか意見を提出する。この意見が作品の價値を(大衆的價値を)決定する上に重要なる要件として取入れられる。

かくて、この二つの機關(?)を百%で通過した作品は、最も理想的な大衆的よみ物だといふ絕大な自信のもとに大々的に廣告される。即ち××社の場合では封建的な、反階級的なそのイデオロギーが最大なる大衆層に持ちこまれ、その獨自の働きを行ふのである。」

現在の大衆讀物、娯樂讀物とはかくの如きものである。その流行

原因、大衆の生活への浸潤もかくの如きものである。吾々は、その低級さを嘲笑し、その反動性を呪ふ聲は、耳にたこの出來るほど聞いた。が、嘲笑や呪咀では問題は解決しない。己れ一人高しとして、高級を誇ることによつては尚更である。

解決の鍵は自らペンを持つて、眞に大衆に愛せられる娯樂讀物を書くことである。そして、その際に必要なものは、ブルジョアジーのイデオローグ等が、すでに細心の注意を以て行ひつゝある、あらゆる用意が絶對に必要なのだ。

××社的な用意は、現代の進歩的なイデオローグにとつて決して恥ではない。それをやらないことの方が、大きな恥だ。

# 寄席とラヂオ

礶田保之助

○

『代り合ひまして、替り榮えも致しませんが、御贔屓の餘榮を持ちまして、相も變らずお舊いお笑ひを一席伺はせて戴きまして、お後の連中、お見當てと交代させて戴きます』といふ寄席か『何がさて御當節は何事によらず新しいものがお宜しい樣で、殿方、お女中がたは申すまでも無く、お坊つちやまがた、お孃ちやんがた』にまで、段々と縁が遠くなつて行くとは、「松の内には一度は寄席へ行くものだ」といふ不文律で、毎年正月には必ず一度は、此の晩ばかりは親父を留守番にして、お袋を先頭に、下女のお三や小僧の松どんまでも引き連れて出掛けては、お女郎買ばなしを聞かされたあの幼かつた頃と比べると、何と樣子が變つたことであらう。寄席の不振も、もう久しい話ではある。

○

寄席衰微の動因には或る社會經濟的な大きな力が横はつてゐ、史的根據があることは言ふまでも無いが、其外面的に現はれて格段に目立つ事柄は「活動寫眞」の出現であつた。「活動」が興行として頭を擡げ出して來た明治末期から大正初頭に、「寄席」と「活動」の爭の火蓋が切られ、寄席不振のスタートが切られ、かくて「活動」の進出は「寄席」の退却を結果しつゝ、大正の時代は移り行いたのである。此の「活動」を生み出した社會經濟狀態と、更らに此の「活動」が生み出した社會思想傾向とが、「寄席」に深い傷手を負はせ、少くとも「寄席」の舊い形式に終焉を告げさせたのである。

然しながら「寄席」と「活動」とは、その興ふる娯樂のものがらに差別がある。「活動」の興ふる興味を喜ぶ多數の外に、「寄席」の空氣が興ふる趣味に陶醉する少數が尚ほ殘つてゐた。のみならず「寄席」そのものにも、見棄つるには餘りに惜しい過去があつた。其處に一寄

席」は『江戸趣味』を矜恃して、選ばれたる人の寂しさに却つて一種の誇をさへ感じながら、「……へえ、まことに江戸趣味たものでげして、其處へ行くと、「活動」なんかを有難がる手合の氣が知れません』と、澄まして冷やかな嘲笑をさへ仄見せた。

○

所が「寄席」に取つて思ひも掛けぬものが跳び出した。それは即ち「ラヂオ」である。ラヂオは江戸趣味とは丸つ切り仲違ひな「活動」とは違つて、寄席者の所謂『江戸趣味』を、其儘の丸出しで放送する。其處で「活動」に對してこそ『江戸趣味』を誇り得た「寄席」も、「ラヂオ」に對しては、まさかに「ラヂオ」の落語や音曲は江戸趣味では御座んせぬとは言ひ得なくなつた。

「寄席」は衰微する。少くとも舊い形式の「寄席」は益々振はなくなる。寄席不振の原因が假令深い所に横はつてゐるにせよ、「寄席」に取つて矢張り憎いは「活動」であり、「ラヂオ」である。所が「活動」は全く他人の仕事である。苦情を申し込んだにしても、それを聞き入れるも入れないも先き様次第である。然るに「ラヂオ」はさうではない。味方の陣營にある、然かも一方の旗頭である面々を狩り出して「寄席」の旗印『江戸趣味』を其のまゝに數十萬人の前で振つて見せる。正に裏切者である。「寄席」にとつてこんな不埒な裏切者はあるまい。

才の結果が、落語の協會に屬してゐる藝人の放送不賛同聲明とまでなつた。要は『江戸趣味』の獨占權を「寄席」に確保して、「寄席」王國の利益を保障せんとする企てに外ならない。それにしても夫れで果して「寄席」は安泰となり得たか、榮え行く見込が立つたであらうか。抑此の專賣特許品『江戸趣味』は「寄席」の世帶を支へ行き得る丈けの利益を生み出して呉れるだらうか?!

○

然かし此の「寄席」の世界に住む人の中にも、早く已に此の『江戸趣味』の呪文の御利益が甚た薄いことに氣が付いた人があつた。其人は『江戸趣味』によつて將來の「寄席」を打ち樹て行くことを斷念して、新しい客の趣味を土臺として、其處に新しい「寄席」を萌えさせやうと考へ付いた。その一人は三語樓君であつた。

大正の初年「活動」が勃興して「寄席」の轉落が始まつた頃、わが三語樓君は『江戸趣味』にそろ／＼見切りを付けはじめた。そして新しい趣味を「寄席」の中に作り出さうとした。彼はその爲めに小咄に目を付けたのである。本咄に手を觸れるには餘りに臆病であり、これに對しては依然傳統を墨守してゐた彼は、「まくら」の振り方に彼の奔放と叛逆とを氣持よく表はしたのであつた。兩の寫實、彼の纖細な社會觀察と、彼の犀利な生活描寫とは彼の機智と炯眼とを十分に現はして、古臭い『江戸趣味』ならぬ新しい生活の趣味の一斷面を私達の前に示して呉れた。彼の生命は全く此の小咄にあつた。であるから彼が得意の小咄から本咄に入るや、私達は何時

でも「かつたり落ち」を感じたものである。斯くて此の缺陥を十二分に心得てゐた彼は、後には小咄其物に獨立性を認めて、これを以て咄の本體とすることにまで成功した。

然しながらわが三語樓君が舊い『江戸趣味』から脱却して、「寄席」の中に創作しようとした新しい趣味は、何人の趣味を目標として打ち樹てようとしたのか？ それは神田本鄕を中心とした學生及び知識階級者を目標としたものであつた。本鄕界隈に於ける當時の彼の人氣は大したものであつたに引き代へて、下町に於ては殆んど一顧にさへ値しなかつたのも、無理からぬことである。そして當時の藝人仲間、席亭側では、わが三語樓君を目して「落語界の外道」とさへ呼んだ。然るに此の「落語界の外道」であつた彼と其一黨とが十數年後の今日に於ては落語界を動かす中心勢力として活躍してゐることは、まことに興味ある推移と云はざるを得ない

「寄席」より『江戸趣味』を引き離して、新しい趣味を其處に創作して行かうとした人々の中の一人としてわが三語樓君の慧眼と努力とは忘るゝことの出來ぬものである。然しながら彼は尙ほ「寄席」てふものゝ囚はれから脱し得なかつた。彼は『江戸趣味』の殘滓である「寄席」に集り來つて然かもそれに滿足を見出すことが出來ずにゐた僅數の學生と知識階級者の新しい趣味あるを發見しながら、遂に『江戸趣味』の殘肴たる「寄席」に集まり來らざる多數の社會人の滿たされざる趣味あることに想到し得なかつた。

○

わが親愛なる三語樓君の此の痛ましい努力は、同業者のあらゆる無理解な壓迫に拘らず、着々として其歩武を進め、その門下は云ふも更らたり、同業の間にさへ尠なからぬ影響を與へたのである。斯うして寄席界の革命兒が隨所に名乘を揚げたのであるが、其の最も勇敢にして、最も巧智あり、しかも最も間の拔けた代表者としてわが金語樓君を其處に發見するに至つたのである。

わが金語樓君が、その痛ましく傷い體驗から滲み出した「兵隊」を揭げて高座に現はれた時には、私は其處に「寄席」の將來の或る一面をまざまざと見せつけられたやうな氣がして、胸のすつきりしたのを覺えた。假令それは社會の一般生活からは隔絶した一生活であるにもせよ、其處には尙ほ現代生活に於ては直ちに相響く實生活の斷片がある。而してその生ける生活の生ける記錄としての此の「兵隊」が、その體驗者の實感から迸り出づる時、「寄席」の生くべき將來の片影が其處に示唆されたやうに感ぜられたのは當然である。所がわが金語樓君は、不幸、此の「兵隊」の與へた社會的反響の根據を、その『形式』に解釋して、その『內容』に求むることを忘却した。即ち彼の「兵隊」が喝采を博し得たのは、一つにその取材の『新』に據るものであるとのみ解して、その「兵隊」の革新的威力は實はその生々しい無産者的生活の體驗に根據したものであることに氣が付かなかつたのである。然かも氣が付くには、彼は餘りに賣れッ兒になり過ぎて仕舞

つた。而して一兵隊一の、、、、、は却つて彼をして誇大妄想の一種の英雄たらしめた。巧智と勇敢の點に於ては三語樓師匠に數倍を勝つた彼、なほ若い衒氣に滿ち溢れた彼は、此の情勢を見て「新しき寄席」の誕生、極めて易々たる而已との安價な確信を贏ち得たのである。斯くて此の空しい確信は、彼をして落語「野球」を新作せしめ、「行進曲五景」にレヴューの向うを張らしめ、「モン・パリ」の踊に新し味に對する理解の説明を爲さしめ、「ジャズ・バンド」に彼がより豐滿な尻を振らしめてゐる。而して體驗を缺いた虚構とあて、、、振りの人生の遊戲の上に、金語樓式モダーニズムが悲鳴を擧げてゐる。

それでわが勇敢なる寄席革新派の鬪將雜兵どもは「ラヂオ」に對抗して「寄席」の將來を開拓し得ると思つてゐる。勇敢にして且つ間の抜けた作戰ではあり得る。

○

忽焉として出現した「ラヂオ」に對して、「寄席」は以上の如く二種の作戰に依つて之れに對抗せんとしてゐる。一は曰く、『江戸趣味』に對する獨占權確得、他の一は曰く、サモア・ジャズの尻振りダンス！その二表現の餘りに極端なる背反に、私は其處に一種落語的な興味をさへ感ずる。

思ふに、「ラヂオ」に對する「寄席」の認識には二重の錯誤がある。即ち一は「寄席」が「ラヂオ」と喧嘩し得ると考ふる無鐵砲であり、他の一は「ラヂオ」で紹介される「寄席」が「寄席」の全體であり、「寄席」その物であると思ふ錯誤である。此の無鐵砲が「ラヂオ」から「寄席」を引き離しさへすれば、「ラヂオ」には「寄席」的趣味は出せぬものと安心する誤解を生ぜしめるし、此の誤解が「ラヂオ」から聽人を引き離して置きさへすれば、「寄席」は何時までも『江戸趣味』や、『金語樓式モダーニズム』で立ち行けるものとの無茶を飛び出させるのである。

それは全然あべこべである。本末の顛倒なのである。「寄席」は『江戸趣味』の爲めに出來た博物館でもなければ、サモア・ジャズをやつて見せるお客樣をアッと云はせる村の素人狂言の趣向でもない。逆に『江戸趣味』が「寄席」を生み出した。江戸末期の社會相が此の「寄席」を必然的に創り出したものである。高座の上の餘技が時代の趣味を規定したものでなくて、時代の大衆の生活が高座に反映して、其處に落語が生まれ、講談が生じ、音曲が出現したのである。

昨夜、四谷の「喜よし」に金語樓を聞きに行つた、否な見に行つた。其時直ぐ隣に坐つた二人連れの寄席通らしく思はせる洋服紳士の話が耳に入つた。『寄席も此のまゝぢや困つたものさね。それでどうしても二つの行き方しきや無いと思ふがね。その一つはもつとずつといゝ本格に行くのさ、江戸趣味で徹底させるのだね。それから別に思ひ切つて新作を板にかけることだ。え？ 其のいゝねたかね？ それは文士に賴んで相當原稿料を出して書いて貰ふんだね……。』私は其處で考へた。江戸趣味の博物館なら、さう澤山市中に置く必要もあるまいから、府方

或文庫のお隣にでも適當な席亭の一つも建てることだ。それから新しい落語のねたが幾何かの原稿料で文士に書いて貰へる位なら、「寄席」は『寄席』であることをやめて、講談落語の雜誌になるがよいと。

寄席の更生！　新しい寄席の創造!!　それはなまやさしい話ぢやない『江戸趣味』のいゝいゝしやぶりからして出來上るものでもなければ、書齋の机の上で原稿紙の桝目から生まれ出づべきものでもないのだ。それは現在の社會生活の實感から、大衆の生活體驗から自らに滲み出して來るものでなくてはならぬ。實生活の眞劍な涙と汗とから絞り出された醒慘な笑の結晶でなくてはならぬ。江戸末期のあの社會相が、崩壞せんとする封建貴族と新興金融資本階級との交錯せる社會經濟狀態が、已にあの從來の形式の「寄席」をあみ出したものではないか。

○

寄席の更生と、新しい寄席の創造！　この爲めに今日の「寄席」を出發點とする程大きな間違はないと思ふ。何となれば、その理由は極めて簡單である。曰く、今日の「寄席」が惡いからである。更らに詳しく云へば、今の「寄席」には『大衆』が缺けてゐるからである。今日の「寄席」の客を構成してゐるものは、變態『江戸趣味』の亡者に非ずんば、自己遁逃を快とする有閑者流に外ならない。

此處に於ては私は、新しい寄席の創造を、大衆の享樂の直射する『淺草』の地に期待せざるを得なくなる。淺草の寄席?!　それは斷じて言葉の概念による寄席ではない。その形式に於ても、又その内容に於ても、新しい寄席の概念に叛逆してゐる。大正十年頃以降震災前後にかけての安來節中心の興行、引續いて盛んであつた萬歳の時代を經て、レヴュー・歌劇・奇術・落語・音曲・萬歳の一切を取り入れてゐる現今のそれ。大衆は直ちに舞臺―高座に呼びかけ、高座は直接大衆に話しかけるあの心持の間に、大衆生活は今、新しい寄席の創作に喜悦してゐる。

新しい「寄席」が「ラヂオ」との歩の惡い鬪爭に身を細らせてゐる間に、大衆は全く別に、新たな自分達の「寄席」を創造しつゝある。勇敢なる金龍館君よ、君はその偉大なる尻をジャズの音樂につれて、江戸趣味の亡者と自己遁逃の有閑者の前に打ち振ることに甚だ熱心であるが、願はくば君が一日も早く、大きな忘れ物をしてゐることに氣付いて欲しい。然らばその君の大きな忘れ物とは何であるか？　曰く、それは『大衆』である。『大衆の生活』それである。（四・一一・三稿）

# カツフヱ・治安日本

高田保

カツフエもダンスホールも、見てみれば僕には佗しい。こゝでは溝川に月が[illegible]ぬのである。

一週のうち、銀座の一番賑かなのは何とあらうと日曜である。のに對して例へばカツフエは、この日曜が一番淋しい。蓋し通勤階級いはゆるサラリー・メン諸君が客として多いからの事である。

サラリー・メンは佗しい。この佗しい人達が何でカツフエへさうも通ふか？

希望がない。明日何になれるか？　重役には重役の子供がなるのである。僅かにたゞ月給の昇率だけが希望である。しかもこれはあまりに果敢なすぎる。

しかもその身は大學を出た。大學は出たけれど――この知識階級過剩といふことが、そしてあまりにも明日に希望の無いことが、どんな人心へ彼等を導くか？　といふこの事を考へて見給へ。鬱として氣を酒にやり、女にやり、といふほどの明確な意識を持たぬにしても、自然なんとこれは仕方のないことではないか。

そこで僕は、時としてカツフエの一隅に席を占めて、ずらり一瞥するとき、哀傷と同情と、それから一種譯のわからぬ――實はわかつてゐるのであるが――憤激を感ずる。

平役の子は重役になれる、俐口でなくてもなれる。少々ぐらゐは低能でもなれる。となればこれは明らかに古い封建時代と同様である、階級儼として天地の如く、瞭らかであつて、これを動かすべくもない。

アメリカのある記者が、（削除）報じた文章に「まことにそれは古い封建の美しさであつた。整然として一糸亂れざる美、しかしなんとこれは、わが故國シカゴの整然たるに似てゐたではないか！」

新しい資本の都シカゴと、古い（削除）と！

いや、僕はこんなことを語るのではなかつた。

とにかく「明日に希望の無い時代。」その時代に於けるカツフエとダンス・ホールとの繁盛（實は、それも最近では、決して繁盛ではなくなつたが。）

野暮なロンドンでさへ、いはゆるナイト・クラブなるものの最近横行が問題になつてゐるらしい。

トーキー映畫「ブロードウエー」でこのナイト・クラブなるものを觀た。全く仰山なものである。ではあるがしかし、僕は古風にもあそこに「吉原」を觀た。金持があり、金があり餘り、あり餘るに任せて太鼓末社の馬鹿騒ぎである點に於て、あのナイト・クラブなるものは、大江戸の昔の大門内の繁盛と大して變るものではない。

でわがカツフエは、このナイト・クラブに類するものではないといふことになる。

わが日本のサラリー・メンは、とても佗しい財布を持ち、それ故にの暦に對しては決して鈍感ではないのである。昔の吉原には晦日に月が出た。しかし今の銀座では――といふやうに言はずとも、カツフエの客が、決してあり餘つた金を散じ盡す客のみではないことを知つて

くれられるならばそれでよろしい。月も半ばを越すともうげつそりと客が減り、二十日過ぎから二十八九日の月給日まではからもう駄目でして、とどこのカッフエでもいふのである。

晦日に月が出ぬのでは、決して「ナイト・クラブ」ではない。況してや、當局は十一時以後の客を斷然押えてしまつた。不景氣日本でもあり風紀日本でもあり、映畫「ブロードウエー」などは到底この國の人々にとつて一場の夢にしかすぎない。

智識階級人の生活逃避所――。

希望のない生活の中では、僅かにたゞ「侍女」が希望であつたり何だかするのでもあらう。とにかくそこで感傷極まりなく、そのため感傷詩人「西條八十」の「愛して頂戴」などが臆面もなく愛誦されたりするのでもあらう、とかう觀じ來つて見るならば、カッフエもダンス・ホールも決してアメリカニズムではないことが判るであらう。

アメリカニズムとは何であるか？

資本主義末期の形態は世界の何處でもの筈である。(削除)。カッフエやジャズやダンスは、雨後の茸の如く、自發的に、何處へでも濕氣のある所に從つて發生する。ただアメリカの茸が大きくて馬鹿げてゐるといふだけの事かも知れない。

となると、結局、かのナイト・クラブも、わがカッフエも同じことだ。分け上る麓の道は多けれど、とは反對に、墮ち行く先は同じ――一つの穴であるのか！

さてこゝまで來て僕は膝を正して眞面目に次の事を云ふ。

もしも今日のカッフエやダンス・ホールやを淨化しようとするならば、當局者諸君よ。……いや、僕の言はうとする事は、多分彼等の忌諱に觸れて、ためにその雜誌が發禁を喰ふか、でなければ編輯者が先を越して伏字にしてしまふだらう。

が最後に一つ、

その「佗しきカッフエ」ですら、一場の夢のごとく、望んでも望んでも望み得られぬ人々の、なんとなんとこの世の中に多いかを諸君に告げる。そしてその人々がなんとなんと日に日に多くなりつゝあるかを諸君に告げる。

最近のカッフエが決して繁盛ではなくなつたと、一句僕は括弧して書いて置いたが、それは、曾てそこに集まつた人々が、顚落し、淪落して、その夥しい人々の中へと一緒になつたがために外ならない。

百人の中の五人、それがカッフエでカクテルを擧げながら「愛して頂戴」を彼女と和して唄ふとき、殘る九十五人が、茫冥の闇空に眼を擧げて――何か叫ばんとするのを(削除)――これこそが(削除)なのか？――は、口に緘して、いやそれ以上の事によつて封殺しやうとする。

となつて、こゝに治安日本！

風紀日本！　治安日本！　あゝ何たる――とかうなれば今度こそ、

以下伏字。

# 簡野道明先生著

# 唐詩選詳說

（四六判布裝全二冊　總紙數千二百頁）

定價上下各金參圓　送本料各拾八錢

**新刊發賣**

支那の古代文化は唐代が第一の盛期であり、其の中心を成すものは詩である。我國奈良朝以來の文化が唐の學問、藝術、法制等に刺激されたる中にも、文學は特に唐詩の影響多く、李白、杜子美、王維、白樂天の如き詩人の名の普遍的なると共に、邦人の思想と趣味が如何に廣く深く唐詩に由り擴充されたるかは言ふまでもない。「唐詩選」は浩瀚なる全唐詩より其の代表的傑作を撰錄したるもの、久しく邦人の愛誦する所であるが、茲に我が簡野先生の宏博精緻なる研究の結果、初めて「唐詩選詳說」の好著が完成した。讀方、字解、故事、釋義、評言等の明晰と深切に加へて、作者の傳記、原本の異同、古今地理の對照、支那古代制度の說明、製作當時の事情等に至るまで解說の周密を盡し、一讀初學者にも漢詩の文學的眞價と妙味とを傳へて遺憾がない。此の書に由つて漢詩は更に現代化し、昭和新日本人の精神生活上に豐富なる一大營養素を提供するものと確信する。

■簡野先生著■

大學解義　定價壹圓七拾錢　送本料拾貳錢

論語解義　定價參圓八拾錢　送本料拾八錢

縮刷 孟子通解　定價貳圓八拾錢　送本料拾六錢

和漢 名詩類選評釋　定價參圓五拾錢　送本料拾六錢

增修 故事成語大辭典　定價六圓五拾錢　送本料廿四錢

用字便覽　定價壹圓六拾錢　送本料拾錢

東京市神田區三河町二丁目　株式會社 明治書院　振替東京四九一九

（出版目錄進呈）

ミハレフスキイ著◇荒川實藏譯

# 經濟學入門

四六判上製

定價壹圓八十錢

送料二十二錢

## 最新刊

マルクス主義の立場から書かれた經濟學入門で、原書は勞農露國の諸學校で廣く用ゐられてゐる評判の名著。價値貨幣剩餘價値等經濟學上の重要理論を學ぶに先だち、實際問題によりて十分な豫備知識を與へ、幾多の繪畫圖表によりて興味を惹き理解を助ける等、初めて經濟學を學ばんとする人々にとつて間然する所なき入門書であり、一般研究者にとつては最新最良の新興經濟學解說書である。譯文は內容と相俟つて平易明快である。

**上篇實際の部** （一）資本家的社會に於ける生產　（二）勞働力　（三）經營主　（四）貨幣及び信用　（五）商業

**下篇理論の部** （六）價値　（七）貨幣　（八）剩餘價値　（九）利潤、生產價格　（十）地代　（十一）勞働賃銀

（十二）資本家的蓄積と恐慌　（十三）資本主義の成熟と崩壞　（附）索引

ブルガコフ著
島野三郎譯

# 經濟哲學

（四六判上製 クロース）

定價貳圓五十錢
送料廿二錢

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

# 世界聖典全集

見よ!!全人類の法燈・莊嚴と神秘の一大寶庫!!

## 豫約募集・全三十卷

前輯全十五卷
後輯全十五卷

### ★前輯書目 全十五卷★

日本書紀神代卷（神道）全　文學博士 加藤玄智纂註　早大講師 安藤正次解題

四書集註（儒教）上・下　東京帝大教授 文學博士 宇野哲人譯

聖德太子三經義疏（佛教）上・下　高楠順次郎 境野黄洋 佐伯定胤 義曉 菅原得成 鼎 共譯

印度古聖歌（婆羅門教）全　東京帝大教授 文學博士 高楠順次郎譯

耆那聖典（ジャイナ教）全　鈴木重信譯

アヹスタ經（波斯教）上・下　木村鷹太郎譯

死者之書（埃及）上・下　マスター・オヴ・アーツ 田中達譯

新約全書解題（基督教）全　前青山學院長 神學博士 高木壬太郎譯

新約外典（基督教）全　立大教授 哲學博士 杉浦貞二郎譯

コーラン經（回々教）上・下　文學士 坂本健一譯

### ★後輯書目 全十五卷★

古事記神代卷（神道）全　文學博士 加藤玄智纂註　早大講師 安藤正次解題

道教聖典（道教）全　文學博士 小柳司氣太　學習院教授 飯島忠夫 共譯

舊約聖典（基督教）全　立大教授 哲學博士 杉浦貞二郎譯

アイヌ聖典（アイヌ種族）全　東大助教授 文學士 金田一京助譯

印度哲學ウパニシャット全書（婆羅門教）九卷　東京帝大教授 文學博士 高楠順次郎監修　譯者 二十七氏

舊約全書解題（基督教）全　東京帝大助教授 文學博士 石橋智信著

世界聖典外纂 全
前後兩輯に包容した神道・儒教・佛教・基督教・回教・道教・婆羅門・波斯教・耆那教等九大教以外の諸教の來由及び沿革

執筆者 二十氏

## 第二回配本

新譯外典（基督教）前輯第十三卷

古事記神代卷（神道）後輯第一卷

## 第一回配本濟

コーラン經（回々教）上 前輯第十四卷

ウパニシャット全書（波羅門教）1 後輯第三卷

（注意）甲種會員には兩書を、乙種會員には前輯のみを配本

### 豫約規定

**體裁** 菊判・五號活字・背皮鍍面クロース・天金函入・毎卷平均約四百頁・挿頓圖雅麗

**頒布方法** 全三十卷、これを前輯十五卷、後輯十五卷の二期とし、會員を甲種（毎月前輯後輯各一冊宛配本）乙種（毎月一冊宛配本、但前輯より始め後輯に及ぶ）の二種に分つ。豫約者のみに頒つ。

**刊行期日** 昭和四年十月第一回を刊行、「甲種」は毎月二冊宛刊行にて昭和五年十二月完結、「乙種」は毎月一冊宛刊行、昭和七年三月を以て完結す。

**申込方法** 先づ御申込の際申込金として「甲種」金貳圓、「乙種」金壹圓を御拂込下さい。これは最後の月の會費に充當す。最初の月の會費は別に御拂込願ひます。申込金は中途御解約の方には御拂戻し致しません（前金一時拂の方は申込金不要）

**會費** 甲種―毎月拂（二冊に付）金五圓、乙種―毎月拂（一冊に付）金貳圓五拾錢、一時拂（全三十冊）金七拾圓

**送本料** 會費の外に左の送本料を申受けます。甲種（二冊に付）廿四錢・乙種（一冊に付）十六錢・尚書留附を希望の向は別に書留料十錢を御増下さい。東京市内は甲乙兩種とも六錢、書留料六錢増

**拂込方法** 振替貯金又は爲替で其月一日迄に着金する樣お拂込下さい

**締切期日** 昭和四年十一月三十日限

**内容見本進呈**

世界九大宗教の燦然たる秘義解放さる!!

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

# サラリーマンの恐怖時代とその解放

青野季吉

## 1

サラリーマン――俸給生活者階級――の恐怖時代は、いまさら初まつたことではない。『腰辨』『洋服細民』といふ輕蔑的な、乃至は自嘲的な言葉が誰からともなく工夫された時から、既に恐怖の谷がサラリーマンの足元に口を開いてゐたのである。が、たゞ時折の社會經濟のバランスの如何によつて、その恐怖の谷に或は紫色の霧がかゝつたり、或は薄いヴエールが張られたり、また或はまざ〳〵と物凄いその光景を露出したりしたに過ぎない。

最近その物凄い現實の光景が、まざ〳〵と露出されたのは、濱口・井上コンパニーの減俸案の場合であつた。減俸案の據つて來るところなどはここで問題ではない。とにかく濱口・井上コンパニーは、義務教育費國庫負擔の財源として、官吏の減俸といふ蟲のいい政策を工夫し、宣教師のやうな顔附で、内閣の名においておごそかにそれを宣布し、下これに見倣へと言つた口振りで、それでなくてさへ饑首の口實を熱求してゐる資本家階級に、一大福音を齎したのである。

そこでまた我々の記憶に新らしいやうに、先づ司法官がこれに反抗して立つた。そうして明らかに總罷業の氣勢を示して、濱口・井上コンパニーを、、した。（司法官諸君は、いや總罷業の氣勢を示したこともなければ、、、したこともないと辯明するかも知れない。が、勞働者の場合、あゝ云ふ行動にたいして司法官諸君の下す解釋は、正に××的、、といふにあることをお忘れないやうに。）この司法官の第一聲に應じて、音のこだまするやうに、各省の官吏が反對の意志を表示し、一般のサラリーマンが、自己の運命にかゝつて來た呪ひに目醒めて、これに合流し、こゝに減俸案にたいする一つの大きな大衆的反抗運動が捲き起らうとした。

そこで濱口・井上コンパニーの餘りに名譽でもない減俸案の無條件取下げといふ段取となつて、この數日間の社會喜劇乃至社會悲劇は、最後の幕を急テンポで下ろし、サラリーマンはこの大詰に喝采するよりも先に、ホツト胸を撫下したのである。

いつも從順そのものゝやうな官吏が、この尖鋭な反抗運動を起し、平素容易に歩調の揃はないサラリーマンが一齊にこれに呼應して、反對・反抗の一大狂騷楽となつたのは、それならばいつたい何故か？言ふまでもなく、直接には減俸・減給によつて齎らさる可き眼前の生活苦からであり、間接には常に意識に潜在してゐる生活不安の爆發である。言ひ換へると、サラリーマンの恐怖の谷が、この時ほどまざまざとその物凄しい現實の姿を露出したことはないのである。濱口・井上コンパニーは正に、この現實暴露をやつてのけたところの、『名譽ある』アイコノクラストでなければならない。

ところでこの度びのサラリーマン――主として官吏――の反抗運動の過程を見ると、よくその階級的特質が表現されてゐる。減俸案に向つて團體的な統制の下に、、、、をもつておびやかした行き方は、勞働階級に劣らぬ鬪爭力の持主と言つた觀を確かに與へた。だが、ひと度び濱口・井上コンパニーが意氣地なくそれを撤回すると、運動は時計のゼンマイの切れたやうに、ピタリと止んだ。そして恰かも昨日の鬪爭が無かつたかのやうな、靜かであり、無風的である。

減俸案で立つた運動だから、それが消えれば運動も消えていいのだ、と言つてしまへばそれまでである。だが、減俸案が楽屋へ引込められたところで、サラリーマンの生活不安が微塵も去るわけでなく、行政整理とか合理化とか言つた定石が、ちやんと後に控えてゐる。減俸等にたいする鬪爭も、この次の頻々と寄せて來る彈壓の大波にたいする鬪爭へとつゞかなければ、不徹底であり、無効であると言つてよい。にも拘らず、一向それらしい準備がない。あれほどの毒杯を強いられ、あれほど強くそれを押返しておいて、さてそのあとは、平素の無鬪爭に返り、毒杯を強いた、、、に恭順をもつて對してゐる。

こゝにサラリーマンの階級的特質が、立派に暴露されてゐる。その鬪爭性は、時に熾烈にもえ上るが、閃光的であつて、持續的でなく、昨日の對立者に向つて、今日は同盟する。まことにその特質は、マルクスが喝破してゐるやうに、『自慢には長けてゐるが、行動にたいしては全然無力で、、、、、、ことには甚だ、、である。』溢し、華々しい一時的反抗は、その長けてゐる自慢の現はれであり、徹底的鬪爭の回避と、對立者への急轉的妥協とは、、、、、、、、ことにたいする、、の證據以外の何ものでも無いのである。

## 2

サラリーマンと一口に言はれてゐるが、その概念は、あまりハッキリとしない。文字通りにサラリー（俸給）で生活してゐる階級といふ風に、俗識的に解すれば、濱口や井上もサラリーマンだと言つた矛盾が生れる。

また一部の學者の説くやうに、謂ゆる新中間階級（ノイエル・ミッテル・シュタンド）の大部分を構成する官吏（ビアムテ）及び被傭用人（アンゲステルター）をサラリーマンと解したところで、いま指摘した矛盾が除かれる譯ではない。であるからやはり普通に行はれてゐ

るやうに、官吏及び被使用人のうちで、一定額以下の收入者に限つてそれをサラリーマンの階級と呼ぶのが、分りもよければ、現實にも適應してゐると言つてよい。

それならばその收入の限界は、どれほどであらうか？　これも勿論絶對的に確定されることでなく、時の物價及び生活水準との相對的關係において始めて確定されることであるが、大正十五年九月から昭和二年八月までの東京市役所統計課の『家計調査統計原表』では、給料生活者の一ケ月平均實收入として、二人世帶百三十五圓餘から八人世帶百八十九圓餘までを擧げており、協調會の調査では、俸給生活者調査として、月收入五十圓から三百圓までの者をあげてゐる。また大正十一年十一月の東京府內務部社會課の『中等階級（大部分は俸給生活者）生計費調査』では、家族數二名以上八名以下の家庭で、月收入六十圓以上二百五十圓までを取扱つてゐる。これらの數字には多少の相違はあるけれども、その間に自から一定の規準が存在してゐる。即ち月收入およそ二百五十圓以下五、六十圓までの官公吏及び被使用人をサラリーマンとして階級づけてゐるのである。

こんどの減俸案の紛擾の時にも、月收二百圓以下の官吏の減俸に、生活の抑壓だと言ふ非難があり、三百圓以上の官吏の減俸にたいしては、むしろ一般に是認的の態度が執られてゐた。が、これも知らず知らずのうちに、右の規準に據つてゐるのである。だから、サラリーマンと言ふと、非常に漠然としてゐるが、その間暗默の中に、收入上從つて地位上の限界が一般の認識の內部に畜へられてゐると見てよいのである。西洋ではいろ〳〵と限界づけられてゐるが、一般に採用されてゐるシュモラーの意見では、月收入において二百二十五マルク（戰前——わが約百十二圓五十錢）から六百六十七マルク（同約三百三十三圓五十錢）の者をミッテル・シュタンド（俸給生活者を含む）としてゐる。わが國の基準も、一見して分るやうに、この限界づけにほゞ符合してゐる。

これではほゞサラリーマン階級が、收入的に限界づけられたやうであるが、しかし實際にサラリーマンに關する現實を理解しやうとすればこれでは極めて不充分である。この範圍において、更にその間に內在する差異を見逃してはならない。

第一が同じサラリーマンであつても、官公吏と被使用人との別である。官公吏は或る意味では、その收入が保證されてゐるが、被使用人はそれに比して收入の安固性がない。その上、世間の所謂景氣不景氣によつて、官公吏と被使用人との實際上の收入が非常に相違して來る。第二に、被使用人の場合でも、官公吏の場合でも、月收二百五十圓乃至三百圓の層と、百圓內外の層との別である。同じサラリーマンではあるが、この二つの層は生活線の上と下とにある層で、その區別は彼等の生活上、觀念上重要である。第三に、やはり同じサラリーマンであつても、俸給の外に多少の恒產的收入を持つ者と、全然恒產のない者との差別である。多少の恒產收入を持つサラリーマンは、以前に比

して今日では、被使用人のうちには比較的尠くなつたが、官公吏には、それに比して、今日また尠なからぬ數において殘存してゐることは事實である。同じく月收入百圓内外のサラリーマンでも、多少の恆産的收入が有るか無いかは、やはり生活線の上下に關する事柄であつて、その差別は同じく生活上、觀念上に重要な關係を持つてゐる。

要するにサラリーマン階級は、勞働階級に比して、その構成が多樣的である。勿論この多樣性は漸次に失はれて行つて、一樣に『無産俸給生活者』化することは事實であり、必然でもあるが、それにしても現存するその構成の多樣性は、サラリーマンの動向を見、又はそれを左右する上に、重要な要素でなければならない。

（こゝで揷言しておくが、減俸案反對の大聲音が捲起つた時、無産者黨の諸指導者が政友會も加へての一般の反對とすつかり融合して仕舞つて、減俸案に全體的に反對し、乃至は尠くとも全體的に反對するやうな外觀を與へたことは大きな誤りではなかつたかと私は考へる。無産者黨はプロレタリア化してゐる官公吏の減俸には絶對に反對であるが、例へば月俸三百圓以上又は幾分の恆産的收入を合せ持つ官公吏の減俸に反對すべき理由を持たない。寧ろ無産者黨の立場からすれば、そういふ層の官公吏の減俸を是認し、積極的に、プロレタリヤ化した官公吏の生活の保證を主張し要求すべきである。かくて無産者黨は、その主張や政策において、常にブルジョアジーとの間にハッキリした一線を示すべきではないかと思ふ。且つ同じサラリーマンであつても、生活線の上と下とに在る二つの層の間には、暗默の中に對立がある。例へば薄給官吏、薄給被使用人の、比較的高級官吏、比較的高級被使用人にたいする、仕事の上、生活の上、その他での反感、嫉視もその一端である。無産者黨は、つねにこの内的の矛盾を捉へて、無産俸給生活者の結合、支持を企圖しなければならない、と私は考へる。）

## 3

サラリーマンは、だいたいそういふ官公吏及び被使用人を網羅する階級として、第一に考へられることは、それが所謂文化を維持する階級だといふことである。法制上、經濟上、觀念上の專門的技術は、もつぱらこの階級によつて維持され、發展されてゐると言つてよいのである。普通に謂ゆるインテリゲンチャは、嚴密にはこの階級にふくまれず、主として自由職業者に屬するが、しかし廣い意味において、サラリーマンの大部分はインテリゲンチャである。ところでインテリゲンチャが一國文化の維持者であることは、つねにこの層によつて誇りをもつて說かれる通りで、世界戰爭の直後、インテリゲンチャの沒落が露骨になつて來た時、文化保持階級としてのインテリゲンチャのために、大いに社會にその不當の鳴らされたやうな例も、まだ我々の記憶に新らしい。

サラリーマンのそういつた專門技術家的性質は、自然また、彼等の社會的地位を決定してゐる。こゝでサラリーマン階級の發生の事情を

說いてゐる暇はないが、その發生は近世の資本主義的經濟組織の發展完成と關聯してゐる。即ちその組織の發展・完成につれて、一方では小商工業が驅逐され、滅亡されて、小商工業の謂ゆる舊中間階級（アルテル・ミッテルシュタンド）が衰退し、それに代つた大組織、大經營の商工業が發展し、こゝに極めて多數の被使用人が使用されることゝなつた。他方經濟組織のその變化に應じて、國家組織にも大きな變化が生れ、近世的の謂ゆる中央集權國家がデヴェロープして來た。この統一國家はそのとり扱ふ職務の範圍が以前の國家の場合とは比較にならぬほど廣大であり、したがつて以前の封建的國家に見たやうな、世襲的官吏では間に合はなくなつた。そこで「百姓の子でも大臣になれる」(?)制度が設けられて、極めて多數の官公吏が、庶民の間に求められた。かくて被使用人、官公吏のサラリーマンの數が飛躍的に增加し、一つの社會的に有力な集團となり、階級となつたのである。

この發生史に見ても分る通りに、サラリーマンの階級は、近世の資本主義的經濟組織、中央集權的國家の發展と運命的に結びつけられてゐるものであつて、從つてその政治的、社會的地位も、その事情によつて決定されてゐる。近世の經濟組織の統帥者たる資本家階級、國家組織の統帥者たる支配階級は、自己の統帥する政治上、經濟上の組織の極めて重要なる中間關節として、サラリーマンの階級を保護し、扶翼することを忘れなかつた。特に日本にあつては維新後、近世資本主義經濟組織及び中央集權的國家組織を、急速に構成し、完成する必要上、サラリーマンの養成に國家的に努力を支拂つて來た。かの「官尊民卑」といつた風習は、この時代の遺物なのである。

サラリーマンのこの中間關節的地位は、またそれに相應するイデオロギーを生長させて來たらざるを得ない。それは即ち、政治上、經濟上の支配階級にたいする隷屬的イデオロギーであつて、つき詰めて言へば、支配階級のイデオロギーと同質的なそれである。しかもサラリーマンの中間關節的な地位が、その重要性を次第に失つて、その實際上の社會的地位が甚しく下落した後でも、イデオロギーがそれに相應して變化するといふことは、中々容易なことではない。今日のサラリーマンのおかれた困難の一つには、この矛盾もたしかに有力に作用してゐると言つてよいのである。

## 4

サラリーマンはいまも說いた通りに、社會の文化的專門技術の維持階級であり、その意味において、かの謂ゆる近代性をその社會的個人的生活に最も強く反映してゐる階級である。近代性（モダニテー）といふ言葉は、一般にさかんに使役される割合に、その意味が明瞭を缺いてゐるが、若しそれを近代的の物質上、精神上の急進性の反映といふ意味に解すれば、サラリーマンの生活ほど、近代性の反映の強いものはないと言つてよく、特にインテリゲンチャにあつてはそうである。今日の社會が醞釀する近代性の空氣は、實にサラリーマンの社會的、個人的の生

活の發散する空氣である。

サラリーマンのこの近代的性質は、また彼等のイデオロギーに反映を見出さずにはおかない。一方政治的、社會的の中間關節的存在としての地位から來るところの、支配階級にたいする隷屬的イデオロギーは、まへにも述べたやうに容易に變化しないとは言へ、その文化的專門技術を基礎とする生活の現實と、それの生成する心理とは、漸次に彼等獨自のプシコ・イデオロギーを生長させずにはおかないのである。特に彼等のおかれてゐる經濟的地位が漸次に下落し、不安となつて來るにしたがつて、その新らしいプシコ・イデオロギーの生成の過程が促進される。その新らしいプシコ・イデオロギーとは、言ふまでもなく自由主義的といふ言葉で總括的に最もよく表現されてゐるものである。

サラリーマン階級のこの自由主義的プシコ・イデオローギーの生長の最も早く發現したものが、かの日露戰爭の直後、日本の文學的インテリゲンチヤの間に一つの觀念上の運動として起つた自然主義運動である。しかもこの文學社會に發生した運動が、廣汎なインテリゲンチヤの間に急速な波動を呼んだのは、既にその廣汎な層の間に、自由主義的のプシコ・イデオロギーがかもされてゐた證據と言つてよいであらう。その後、文學的インテリゲンチヤの間に文學上のいろ／＼なイズムの發展を見たが、その何れもが自由主義的なプシコ・イデオロギーに立たないものはない。

實に、今日、全體として、大衆的に見れば、(即ち政治的に見れば)サラリーマンのプシコ・イデオロギーは、自由主義的のそれであり、自由主義が何程かの意味において徹底してゐるのは、サラリーマンの階級のうち以外には求められないのである。これのよき傍證として、新聞社會の現實を引合ひに出してもよいであらう。新聞の統帥者が或は頑迷な保守主義者の場合もあれば、固陋な復古主義者である場合もあるのは事實である。だが、新聞記者の全集團を形ちづくるサラリーマンはそのプシコ・イデオロギーが自由主義的であり、しかも新聞の實際上の技術的擔當者は、そのプシコ・イデオロギーの持主であるが故に統帥者の觀念の如何に拘らず、今日の新聞紙の大部分は、その報道主張の基調を自由主義の上に据えて居り、乃至はその上に据えてゐるが如く觀られるのである。

とは言つても、そのプシコ・イデオロギーの故に、前に指摘した隷屬的イデオロギーが容易に拔本されると言つた風に、機械的に考へてはならない。そのイデオロギーは長く殘存する。それはサラリーマンの一個人について眞實であると共に、大衆的にも眞實であつて、自由主義的のプシコ・イデオロギーが比較的に徹底してゐる部分と、隷屬的イデオロギーの方の混在の割合が、比較にならぬほど高い部分とがこの大衆の間に現存する。しかもそれは、帝國主義的文化政策——觀念論の武裝——の進むと共に、ます／＼確固たる姿をとつて來るのである。

であるからサラリーマンの階級をもつて、一方においては自由主義者の貯水池であるとして理解すると共に、他方においては反動主義者の、或る契機においては戦闘的反動主義者（ファスシスト）の貯水池であるとして理解することは、最も現實的であり、それ故に最も肝要である。

だが、その何れの場合にしても、人は問ふであらう。サラリーマンの階級には果してその内部に、闘爭性が潛在するであらうか？と。特に我國のサラリーマンの非闘爭性、乃至閃光的な闘爭性を眼中におけば、この反問は自然と言はなければならない。

事實我國のサラリーマンは非闘爭的である。否、多少の闘爭性を內有してゐても、それは瞬間的、一時的に冷却する底の闘爭性である。がこれも歴史的なものであると觀なければならない。わが國のサラリーマンは、いまだ曾つて、それ自身の組織を發達させて、何等かの方法によつて、他の階級――特に支配階級――と闘爭した經驗を持つてゐない。否、かゝる組織と闘爭とを經驗するに到るまで、彼等はそれ自身として發達し得ない事情に在つたのである。それは言ふまでもなく彼等を生産し、生長させた我國の近世資本主義經濟組織が、サラリーマン獨自の發展を許すほどに長い間、その最盛期を持つて居らず、最盛と共に急速にあはたゞしい沒落の過程に轉入したといふ事情である。かくサラリーマンはそれ自身の存在においても惠まれず、且つサラリーマンの組織・闘爭の力をうながすべき、勞働階級の運動が、我國ではまだ極めて新らしく、或る意味では幼稚であると言ふ事情が存する。これらの作用のために、サラリーマンは未だかつて、正しい意味において、それ自身として支配階級と闘爭した經驗もなければ、勞働階級との共力の下に、その闘爭性を發揮した經驗もない。この歴史的事實は我國のサラリーマンをして、非闘爭的たらしめ、乃至は非闘爭的に觀えしめるに十分である。

だが、それだからと言つて我國のサラリーマンを非闘爭的と定めてしまふことは、確かに間違つてゐる。勞働階級の闘爭性に比してサラリーマンの闘爭性が、弱く且つ非持續的であることは、世界何處においても變りはないが、特に我國のサラリーマンを非闘爭的と見做すのは觀念的である。

闘爭性があるか無いか、それが有力に發現するか否かは、或る階級のおかれた物質的事情と、他の階級とその階級との力學的關係によつて定まる事柄であつて、抽象的に定められる事柄ではない。我國のサラリーマンの自由主義的プシコ・イデオロギーの浸透してゐる部分が政治的自由獲得闘爭のために、いかに勞働階級のその闘爭に合流して相應する闘爭力を發揮するか、又は我國のサラリーマンのうち封建的保守的イデオロギーに貫通されてゐる部分が、いかに勞働階級と對立して、支配階級の支持のために『、、、』に闘爭して來るか――それは、一方では我國のサラリーマンのおかれてゐる現實によつて決定され、他方では支配階級の中間階級政策（ミッテル・シュタント・ポリティク）と勞働階級の對自由主

義者戰術(對社會民主々義者戰術と言つてもよいであらう。)との力の關係において決定される事柄である。

## 5

サラリーマンの沒落についてはまへの個所で一寸言及したが、その沒落の原因は一般的に言へば、近世資本主義經濟組織が行詰つてしまつたといふ基礎的事實である。卽ちその行詰りの結果として、經濟的政治的支配階級は、サラリーマンの大群を以前と同樣な程度においてか、又は今日の生活事情に相應した程度においてか――賄つて行くことが出來なくなつたからである。こゝにサラリーマンの過剩が生ずるに到り、その社會的地位は急激に陷沒せざるを得ないのである。

サラリーマンの沒落を觀察するにあたつて、諸專門學校、諸大學の側における知識階級の生産過多に、その因を求め、引いてその生産制限を說く人々がある。これは失業現象の因を人口生産の過多に求め、引いてその救濟を出産制限に依賴しやうとするのと同樣、大いなる誤りである。それ〴〵の經濟時代には、それ〴〵の人口法則がある。今日の經濟組織の下にあつては、人口の過剩は資本家階級の賄ひ得る範圍を基準としての相對的な現象である。それを人口生産の過多と云ふ絕對的な現象として考へるのは、大きな錯誤であると共に、資本家階級の欺瞞に合流するものである。サラリーマンの沒落は、その生産過多――過剩――から來たのではなくて、その過剩は沒落の發現に外ならないのである。

彼等の沒落は然らば、どう云ふ方向にその苦悶の發散を求めたか――現に求めてゐるか? 言ひ換へると、沒落しつゝあるサラリーマンは、いかなる生活姿態にその沒落を反映させてゐるか?、

この沒落の運命にたいするサラリーマンの態度は、大衆的に見て、無抵抗であり、甘受であり、服從である。この態度は、同じ生活不安にたいする勞働階級の態度と、對蹠的だと言つてよい。勞働階級はサラリーマンにおけるやうな意味での沒落的な路をたどつてゐる階級ではないが、支配階級からの抑壓、その結果としての生活苦においてはサラリーマンにおけると變りはない。この抑壓にたいして勞働階級はこれと鬪爭し、これをはね返し、常にそれ自身の『地位』を戰ひとつて來てゐる。サラリーマンの無抵抗、服從とは正反對である。(これについて想ひ出されるのは、減俸案の際、官吏の一部がそれに反對する理由として、官吏は現在、勞働者よりも薄い收入に甘んじ、しかも忠實に國家に奉仕して來てゐる、然るにいま減俸をもつて酬ゆるとは不都合である、と叫んでゐたのを私は記憶してゐる。これはその官吏の認識が間違つてゐる。全體的に見て、勞働者の收入が官吏のそれよりも厚いかどうか――それは問題外として、現在少しでも勞働階級がその收入を多少高く維持してゐるとすれば、それは勞働階級の長い年月に亘つての、文字通りに、、、、、、、鬪爭の結果に外ならないのである。勞働の生産過程には『忠實に奉仕』したが、資本家的支配

には常に抵抗と、闘爭とをもつて立ち向かつたが故である。サラリーマンも、馘首や減俸をもつておびやかされまいとすれば、つねに勞働階級と同じ態度をもつて、對立者に臨まなければならぬのは勿論である。）

サラリーマンの右のその無抵抗と、甘受と、服從とは、當然な理由から、何等の摩擦なしには實現されない。その摩擦の表現が、サラリーマンのうちの敏感な層に見てとれるところの、謂ゆる近代的頽廢（モダン・デカダン）である。彼等の現實直視の回避、彼等の瞬間的忘我慾、彼等の不滿の安易な發散慾は、彼等を驅つて、プレハノフの謂ゆる『色彩と感覺のパラドックス』の中に沒入せしめる。その諸種の光景が、モダーン・デカタンスである。アメリカから響いて今や世界的に音波を高めてゐるチヤズ的狂騒の空氣は、その一面の要素たるデカタン性の故に、いまやサラーリマンのために、あつらへ向きの世界をつくり出してゐる。これが彼等の沒落を最もヴイヴイドに反映した生活姿態の一つである。

他方そういふ敏感性を持ち合はせない層は、徹底的に、無感覺的、無性格的、無色彩的な生活に沈湎し、その姿態は死の靜いつに近いものがある。この層の發散する青白い亡靈的の呼吸と、モダーン・デカタンの發散する狂騒的な奇怪な呼吸との交錯したものが、實に今日の『都會』の生命のつく呼吸なのである。

だが、この回避も、逃避も、忘却も、そこに一定の限界がある。この限界を出ることは死滅を意味する。そして惱めるサラリーマンは現在、その限界に達してゐるのではないであらうか？一度びこの限界に到達し、死滅に抗しやうとすれば、再び回避と忘却に耽溺することは出來ない。、か、、か——この二者擇一の運命が、今やサラリーマンを襲ひかゝつて居り、彼等の先進分子は敢然として闘爭にその生命の方向を向けて來てゐる。これが現實である。そしてこれもまた勿論彼等の苦悶を反映した生活姿態の一つとして數へらるべきである。

## 6

サラリーマンのかゝる運命と行衛にたいして、それならば、支配階級はどう言ふ態度をとるであらうか？支配階級の中間階級政策の大部分は、この中間關節層の沒落を一時的に防止し、そのイデオロギーの「、、」を出來得る限り阻止すると言ふ點に、その原則の存することは言ふまでもない。

それが具體化としては、第一に直接的に支配階級の諸多の政策である。物理的方面で言へば、これまでその生産を助長して來た支配階級が今や一轉して、諸種の拘束を設けて、サラリーマンの貯水池たる專門學校卒業者を減少せしめやうとする。また現存のサラリーマンにたいしては、一時的な方策を設けて、生活線の下位においてでもこれを維持しやうと努める。他方精神的の方面で言へば、『思想善導』の名において、支配階級はサラリーマンの現實を反映する思想を退治しやうと決死的に努力する。更に『高等な行き方としては、、、學者を動員

して、學說的假裝の下に、『惡化した思想』に對抗せしめる。――ところでこれらは積極的の方面であるが、消極的にはサラリーマンの回避、忘却の手段を拘束して彼等をして生活線以下の生活に甘んぜしめやうと企圖する。かのカッフエーの取締、ダンス場の壓迫は、この方策の一端の現れである。

だが、支配階級の對サラリーマン政策には、また別個の方面がある。それは、支配階級の陣營内を去つて、勞働階級の陣營内で營まれるものである。サラリーマンの一部がその現實に目ざめて、支配階級にたいして批判的な立場を執り、勞働階級と結合するのは仕方がないとして、そのサラリーマンの一部分を、勞働階級の一部分と共に、何等かの形態においてか支配階級の側に惹きつけておからうとする政策、是である。現在その內部に多かれ少かれサラリーマンを擁しておるか、將來その見透しが十分にあるところの社會民衆黨が、既に支配階級のこの政策の網に引寄せられてゐると傳へられるが、その眞僞はともかくとして、支配階級がかゝる政策に出ることは、ヨーロッパでは既に普遍的な事實であり、我國の支配階級がこれを移植しないと言ふことは、有り得ないのである。

だが、こゝに明白なことは、支配階級のこれらの物理的・精神的の、或は對立階級內でのもろ〳〵の政策は、要するに一時的な、姑息な手段であつて、全體としてのサラリーマン階級を解放することは愚か、救濟すらし得るものでないと言ふ、動かすべからざる事實である。

例へば知識階級の救濟といふことが唱へられてから既に久しい。だが、その地位の低下と沒落とは加はるばかりである。サラリーマンの生產制限は、人間の知識的要求を窒息させることの出來る限度以上には出づるを得ない。サラリーマンの生活線以下での維持策は、決して彼等の不滿・、、を持續的に抑へ得るものではない。對立階級內での政策は、勞働階級の陣營に××××が貫流しない間だけ有效であるに過ぎない。

更にイデオロギーの方面での支配階級の對抗策は、サラリーマンの現實生活に基く意識によつて、絕えず批判され、絕えず裏切られて行くと言ふところに、その越ゆべからざる障害がある。支配階級の諸種の『思想善導』政策が、いかに本質的に徒勞であるかは、減俸案反對における司法官たちの指導氣分を見れば、一見明白である。外部から術策的に注入された『思想』よりも、生活の現實が自然に引寄せる思想の方が、遙かに根本的であり、實質的である。

だが、これは言はゞ自然發生的の現象であつて、サラリーマンが支配階級の、、的な政策に向つて、自らの批判とそれに基く行動を有力に展開し、その自然發生的な現象をして、確實な、意識的な意圖の下に發展せしめるためには、サラリーマン自身の鬪爭の組織を持たなければならぬのは、言ふまでもないことである。且つそれを持たなければ、自己の救濟も、解放も、遂に架空の望みに屬せざるを得ないのである。

# 7

支配階級の態度はそうであるとして、サラリーマンに對する勞働階級の關係はどうであるか?

勞働階級とサラリーマンとの間には、確かに心理的、イデオロギー的に隔離したものがある。それは彼等のおかれた政治的、經濟的の地位の當然の反映と言つてよい。勞働階級は最初から支配階級と對立的な關係におかれた階級であるが、サラリーマンの階級はそうでない。最初から中間關節として存在し、謂ゆるブルジョアジーとプロレタリアートとの近代社會の二大基本階級の間に介在して、最初はブルジョアジーに隸屬し漸次にプロレタリアートに接近して來てゐる階級である。それだけに勞働階級とサラリーマンとの間には、歷史的に、根柢の深い隔離がある。勞働階級の內部で、何等かの『混亂』が齎らされると、常に定つてそれが解決と『知識階級排斥』とが結びつけられる事實は、その內實を物語るものである。

だが、曩にも說明したやうにサラリーマンの沒落――プロレタリヤ化は、極めて急速に進行しており、今や彼等は一個の『頭腦勞働者』(コップ・アルバイター)と化してゐる。從つてその程度に應じて、プロレタリアートとサラリーマンとの接近が、極めて急速なテンポで齎らされてゐるのである。即ちサラリーマンが勞働階級にたいして從來多かれ少かれ抱いてゐた社會的地位の上、又は一般的のカルチュアの上での優越意識は、今では、サラリーマンの一部では全然、その大部分はほとんど、その影を殘してゐない。またプロレタリアートがサラリーマンにたいして投かけてゐたところの、對立意識、鬪爭上の不信も、プロレタリアートの一部分では全然、その大部分では以前と比較にならぬほど、その影が薄れて來てゐる。かくて今こそ、サラリーマンが自身の組織を持つて勞働階級の組織と結合してよい、また結合すべき時だと言つてよいのである。特にプロレタリアートの政治鬪爭が生長し、政黨的體制による鬪爭が進展して來るにつれて、技術的に言つても、プロレタリアートの鬪爭は積極的に知識階級の先進的分子を必要として來てゐる。この事實がまた、プロレタリアートとサラリーマンとの接近、結合を促進するに作用することは言ふを俟たない。

ところで今日までの實踐から考へて見て、サラリーマン乃至は頭腦勞働者と勞働階級の結合關係は、勞働階級と云ふよりも寧ろ頭腦勞働者の側で、ヨリ多くそれに障害を構へてゐるやうに考へられる。そうしてその由つて來るところは、言ふまでもなく頭腦勞働者の側における小ブルジョア的の風習なり、ものゝ考へ方なりである。

それについて想起されるのは、一九一七年の革命の翌々年、『專門家の公開狀』にたいして與へたレーニンの答である。その公開狀はボロネゼンスキー農業經濟研究所主事のエム・ドケリスキイが發したもので、そこにはボルシエヴイキの勞働者・兵士の專門家壓迫について、ロシア共產黨の責任が痛烈に問はれてゐた。これに對してレーニンは、

かにも眞摯な態度で答へてゐる。『問者の供述は、大衆的見地と彼等の眞實を現狀に照らすといふ見地から事件を考察し得ないで、そこには個人的に發せられた憤怒が勝つてゐる。』『知識階級のサボタージュにたいして勞働者・農民が憤激したのは止むを得ないことであつて、もし誰かに「責任を負擔させ」得るとすれば、たゞ、、、、、と、意識的無意識的に、、、、、、、、、、人々である。』『我々は單に國民に向つて、知識階級にたいする反抗を教唆しなかつたばかりでなく、黨の名によつて、當局の名によつて、知識階級によき勞働條件を與へねばならぬと傳道した。私はこれを一九一八年（革命の翌年）四月に爲したのである。』『我々は知識階級の一般的生活條件が、一足飛びに下位まで低下することに反對した。だが、戰爭は凡ての努力をそれに注がしめてゐる。而して兵士の休息に席を與へるために、知識階級は身をすぼめねばならぬ。（夫婦で二つの寢臺を持つてゐた知識階級が、その一を兵士に占有されたについて抗議したのに對する返答）これは侮辱的要求ではなくて、正當な要求である。』『問者は知識階級と我々との同志的關係を要求してゐる。これは正しい。我々もこれを要求しており、わが黨の綱領にも正にこれと同じ要求が、明白・率直・正確に記載されてゐる。……（諸君は先づ）苦闘せる兵士、幾世紀に亘る搾取に憤激せる、過勞した勞働者を同志的に取扱ひ給へ。その時には筋肉勞働者と頭腦勞働者との接近の問題は大きな進歩を爲すであらう。』『（諸君）が個人的にお互に知つてゐる人々を組織し、彼等の名によつて、ソヴイエットの諸官廳に忠實に働くこと、即ち公開狀の表現を用ふれば『勞働者に奉仕する』ことを申出づるならば、その時は、我社會組織の生みの苦しみは、著しく短縮され、容易になるであらう』。——

こゝにプロレタリアートの側からの知識階級一般にたいする態度、不滿、要求が、簡單に明瞭に表現されてゐる。しかもそれは、、、、、、、、背景としてるだけ、最も力強く表現されてゐるのである。

## 8

サラリーマンの階級が自己を救濟し、解放し得る唯一の道は、繰返し述べたやうに、それ自身の組織——組合——をつくつて、勞働者の組織と結合し、その闘爭力を合體する以外にはあり得ないし、また既にヨーロッパのサラリーマンは、戰前に既にそれを實踐してゐる。否ドイツにおけるサラリーマンの協同的自助運動は、その萠芽を十九世紀の中葉に有してゐると言はれてゐる。

現在ドイツでは官公吏及び被使用人がそれ／＼自己の組合を組織して、謂ゆる三つの柱の全國的組合組織（キリスト教組合、ヒルシ・ドウンケル、アー・デー・ゲー・ベー）に、それぞれ合同關係乃至協定關係を結んでゐる。而してそこに組織されてゐるサラリーマンの數も極めて多數であつて、例へばアー・デー・ゲー・ベーに屬するかの有名なアーファー（一般被使用人總同盟）は、四十二萬の組合員を有すと記錄

されてゐる。かく官公吏及び被使用人の組合は、右翼的、中間的、及び左翼的の全國組織にそれぐ\結合してゐるが、しかし官公吏の組合は組合で、また被使用人の組合は組合で、自己の階級に屬する獨自の問題の場合には、その屬する縱斷的の全國組織を離れて、横斷的に共同委員會を持ち、共同鬪爭も行つてゐる。フランスでは現在、全國組織はシー・ヂー・テイ（＝勞働總同盟）とシー・ヂー・テイ・ユー（＝合同勞働總同盟）の二つの中心を持つてゐるが、サラリーマンの組合はほとんど凡てシー・チー・テイに屬し、しかもその主要勢力を形成してゐると言はれてゐる。

サラリーマンがかく自身の巨大な組織を持ち、勞働階級の全國的組織と結合してゐる結果、その勞働階級の全國組織の質の上にどう言ふ影響が來てゐるか——それはこゝに問はないとして、ともかくもヨーロッパの俸給生活者の運動は、勞働階級の運動と同じ線に沿つて、進行してゐる。そして勞働階級の鬪爭力とならんで、自己の鬪爭力を發揮してゐると言つてよいのである。

わが國のサラリーマンの運動は、これに比べると極めて微々たるもので、嚴密に言へば有るか無きかの有樣でさへある。然るにわが國のサラリーマンのおかれてゐる條件を見ると、ヨーロッパのそれに比して、遙かに劣つてゐるのである。卽ち客觀的に見れば、サラリーマンの運動の發展すべき條件が熟してゐる。それにも拘らずいま言つたやうな有樣であるのは、一つには勞働階級の運動が、わが國ではまだ新らしく、且つ發展の度が低いからであり、二つには、謂ゆる政治的自由がまだ獲得されてゐないからである。由來、勞働階級の運動は謂ゆる政治的自由が獲得されない以前でも、その激烈な鬪爭力によつて、多かれ少かれ發展せしめられ得るけれども、サラリーマンの運動の場合はどの程度にか政治的自由の獲得の後でなければ、飛躍的に發展し得ない。事實、ドイツに於けるサラリーマンの運動の飛躍的な發展も、一九一八年十一月の、、があつて、團結權、罷業權等の認められて後のことである。例へばかの國內各種の專門的聯合組織を全國的に統一して巨大な「ドイツ官吏總同盟」の成つたのも、、、の翌月卽ち一八年十二月二十四日のことである。

そう云ふ譯でわが國のサラリーマンには、今日まで運動らしい運動はなかつたと言つてよい。時に觸れ、事情によつて、サラリーマンが團體的體制の下に、反抗運動を起したことは勿論一二に止らず、こんどの減俸案反對の場合もその一例であるが、しかしそれは常に一時的、瞬間的の運動に止まつて、持續的なものでなく、恆常的運動組織の形成にまで發展したものではなかつた。

尤も恆常的運動組織も全然求められないと言ふのではない。サラリーマン・ユニオンとか、無産俸給生活者組合とか言つた組織があつて、それぐ\勞働階級の全國的組織と結びついて、運動を展開しやうとはした。だが、それはサラリーマンの運動として、何程の發展性も持ち得なかつたし、また持ち得ないことは實踐が示した通りである。

しかもすぐまへにも述べた通り、わが國のサラリーマンの置かれてある客觀的生活條件は、勞働時間的に云つて、設備的に言つて、報酬的に言つて、ヨーロッパのそれに比して甚しく劣惡なのであつて、その意味において、その運動の擡頭すべき條件が成熟してゐる。その上、普通選擧の實施によつて、その運動の擡頭すべき一つの契機が與へられてゐる。

それにも拘らず、既成のサラリーマンの組織も大して發展性を持つことが出來ず、新らたにその組織運動の擡頭する氣運も、鮮かには見えて來てゐないについては、前に述べた事情の影響の外に、更にそこに何等か根本的な原因の存するものと觀なくてはならない。而して私はそれを、サラリーマンの運動にたいする根本的な方策の缺如に求めるのである。事實、我々のところには、日本におけるサラリーマンの組織をいかに確固たる基礎に据え、いかにそれを擴大すべきかについて、具體的な根本的の方策も理論も、確立されてゐないのである。

## 9

我々はサラリーマンのプロレタリヤ化の一面だけを觀て、それが組織を直ちにプロレタリヤの組織と同一か、ほゞ同一の方法によつてはならない。サラリーマンのプロレタリヤ化は一面の事實ではあるが、サラリーマンの階級は、その勞務の條件において、その報酬の點において、したがつてそのプシコ・イデオロギイにおいて、プロレタリアートとは異つてゐる。したがつて、それが組織の方法も一樣であり得ないし、それが鬪爭の仕方も、自ら異らなければならないし、勞働組合の全國組織との結合の過程も、プロレタリアートの場合とは、當然に別個の行方を執らなければならない。

最も觀易い我々の失敗は、サラリーマンの萠芽的組織が出來上るや直ちに、勞働階級の組織と結合すべきであるといふ原則、かくて勞働階級の鬪爭性によつて誘導さる可きだといふ原則を、機械的に適用して、あはたゞしく勞働階級の、しかも左翼的な全國組織に結合させ、その『嵐のやうな鬪爭』に捲込んだことである。これがサラリーマンの組合としての組織の確立、擴大によき展望を與へないことは、實踐を待つて知るまでもない事柄であるが、しかもこの失敗が繰返されてゐたのである。サラリーマンとしての組織を確立、擴大しやうとすれば、右の結合のまへに、サラリーマンの組織としての或る程度の獨自の發展と、獨自の運動を持たなければならない。それでなければ、勞働階級の全國組織に結びついたサラリーマンの組合は、組合として確立し、發展する以前に、早く行詰りが來るのである。

またサラリーマンの萠芽的組合を、プロレタリアートの場合と同樣に、直ちに資本家との正面的鬪爭にまで押し出したことも、その確立、擴大と云ふ點から見て、我々のところに行はれた失敗の一つである。サラリーマンの組合は、さういふ鬪爭に立入る以前に、乃至はさう云ふ鬪爭とならんで、ヨリ多く相互扶助的な活動によつて、それ自身を

確立・擴大すべきではないか。たとへばドイツのサラリーマン組合に自身で銀行を經營して、自階級及び勞働階級の鬪爭に役立ててゐると聞いてゐる。銀行經營と言つた困難な事柄でなくても、差詰め協同組合的な事業の展開によつて、それ自身の强化を圖る可きである。

またその組織形態においても、わが國のやうな事情の下に於て、いかなる場合でも、勞働階級の組合に型どつた形態から出發しなければならぬといふ理論はない。發展的にはその形態に到達しなければならぬのは言ふまでもないとしても、最初には周圍の事情の許す程度において、例へば一つのアッソシエーションのやうな形態をとることも、また許さる可きであり、それが大いに發展性を持つ場合がある。特に我國の官公吏の場合において然りである。

更にサラリーマンの萠芽的組合にたいするイデオロギー的の教育においても、我々のところに誤謬がなかつたとは言へない。知識階級はたしかにイデオロギー的に飛躍し得る素地を持つてゐる。だが、大衆的に（即ち政治的に）見たサラリーマンの階級は、決してイデオロギー的に飛躍し得るものでない。そのプシコ・イデオロギーは曩にも述べたやうに自由主義的であり、しかもそれが本質的と言つてよいまでに浸透してゐる。常にその現實のプシコ・イデオロギーを基礎として、その上に立つてイデオロギーの教育が施されねばならぬ。それを無視して、謂ゆる『尖鋭な』イデオロギーを急速に外部から注入しやうとすれば、それによつて獲得されるものは、極く少數の知識階級の先進分子であつて、それによつて失はれるものは、實にサラリーマンの大衆である。組合組織をもつて先進分子の養成所乃至釣上所と解する『極左』理論からすればそれでよい譯であるが、これを大衆の經濟上の日常鬪爭の組織と解する正しい觀方からすれば、その教育方法は甚しい誤謬と言はなければならぬ。

次にサラリーマンの組合及び鬪爭の質にたいする運動の先進分子の側における概念的な過重視が、サラリーマンの組織の確立・擴大を妨げる一つの因素となつてゐることも事實である。サラリーマンの組合と鬪爭が、勞働階級のそれに比して、遙かに力の弱いものであるの事實であり、またそれが最初から謂ゆる日和見的偏向を多分に具へてゐることも事實である。だからと言つて、それを蔑視して、その確立・擴大に見切りをつけてよいといふ理論は成立たない。否、それであればこそ、その大衆的組織が肝要であり、その正しいイデオロギー的指導が重要でもあるのである。

これを要するに、サラリーマンの組織、その運動は、これらの根本的な準備があつて始めて展開すると言つてよく、今やその準備を充實して、急速に組織を確立し、運動を擴大すべき時期に達してゐると考へられる。

減俸案反對の場合におけるサラリーマンの大衆的の自然發生的鬪爭は、我々にその時期の到來を有力に物語つてゐる。サラリーマンの階級はいまや正に鬪爭による生か、それともデカダン的な死か、二者擇一を迫られて居り、しかもそれを骨身にしみるほど自覺してゐるのである。

いまは正にサラリーマンの恐怖時代であると共に、その解放への出發の時期である。（一一・四）

# 慶應義塾論

石濱知行

一

幼いころを思ひ出す。それはたしか明治三十七八年日露戰爭前後のことだ。當時僕は三田四國町に住んで、遠い麻布の鳥居坂にある小學校に通つてゐた。聖坂の下を綱町に拔けて慶應の幼稚舍の前を通り、蜂須賀邸について左に曲り更に右に、飯倉小學校の前を河に沿つて歩いて行つた記憶がある。その學校への往き返りに常に一緒だつたのは札の辻に住んでゐた淺野總一郎氏の子息であつた。殘念ながら名前は今日すでに忘れて終つた。この二人は往き返りには必ず前に述べた道を歩み天氣の好い日には綱町のグラウンドをのぞいて野球の練習を見物した。元氣潑溂だが時々トンネルをした神吉三壘手、輕快隼のごとかりし佐々木遊擊手、この二人は今でも頭に殘つてゐる。ある日にはまた二人で幼稚舍の横から慶應の山に上り臺場の浮んでゐる品川の海を眺めた。當時、海は今の省線より、内部まで來てゐて、料理屋の「いけす」はたしか海にのぞんでゐたと記憶する。

それから思ひ出すのは、中止前最後の早慶戰を見に行つたことだ。同郷の知人で、時々僕のうちに遊びに來てゐたMといふ早稻田の學生が連れて行つて呉れた。Mさんは、あれが河野だ、こつちが山脇だといろいろ教へて呉れた。まだ幼かつたので、どつちが勝つたのか敗けたのか、また、どつちに應援したのか、忘れて終つた。Mさんはその頃から島中氏（雄三氏の方か雄作氏の方か僕には未だに判らない）や大杉榮氏と交遊してゐた。先日「經濟往來」に出てゐる白柳秀湖氏の「財界太平記」を讀んでゐたら當時の社會運動家としてこのMさんの名前が出てゐたのを憶えてゐる。今日慶應の名前をきくと、いつもこの二人、一人は時めく大富豪の息子、一人はそれと反對の社會運動家の名前を想起する。その後、この二人には會ふ機會を持たないが、Mさんは田舍に歸つて學校の先生をしてゐると聞いてゐるか、幼友達淺野君の消息はその後全く判らない。或はどこかの會社の重役にをさまつて、シガーでも燻らしてゐるのかも知れない。

日露戰爭の最中、旅順の陥落、遼陽の大戰、日本海々戰の時には、

慶應の學生が房のついた角帽を被つて當時では全く珍らしいカンテラ行列をやり、三田の通りを増上寺の方へ繰り出して行くのを見たことがある。日露戰爭の終末後、例の講和談判に憤慨して東京市民が國民大會をやり（その時の反抗兒小川平吉は收賄して今では市谷別莊に居る！）官邸、警察、交番を燒打した。當夜、僕は三田の山に上つて赤くなつた日比谷方面の火焔を見た。

――ここまで來て、慶應義塾にまつはる僕の記憶は斷絶する。その時地方へ移轉したからだ。

今、改造子より、慶應義塾論を徴せられてはからずも以上のことを思ひ出した。僕と慶應との因縁は僅かこれだけだ。年月にしたらごく短かいが、幼い時代の記憶としては頗る鮮明に今でも殘つてゐる。だから、一寸、この論の序文にして見たのだ。

## 二

社會はつねに進轉をやめない。あの時代に於いて、時代の轉換、進展に對して大なる役目を勤めたものが、その轉換の完成とともに、時代進行の重要なる樞杆たることをやめて、ごく平凡なるものとなり、更に時代の進化が盛となるにつれて、その時代の進轉にとりのこされかへつて時代の進化をはばめる桎梏となることが多い。明治維新の前後は實に日本の社會が、封建制度から次の時代へ脱殼する重大なる轉廻期であつた。古き衣は最早身に合はず、さらばといつて新しき衣はいまだ出來てゐない時であつた。新しき時代への轉換の氣運は脈々として熟しつつあつたに拘らず、古き時代への執着も未だ斷然と斷切ることを得ない時期であつた。安政五年は、ペルリが來朝してより五年目、開港論が朝野に喧傳せられ、十二月には伊井直弼が大老となり、五ケ國と條約を締結した年である。始まらんとする政治的變革の序曲が急激に奏せられつつあつた。この安政五年はまた同時に慶應義塾の前身が福澤諭吉氏によつて、築地鐵砲洲の奥平藩邸内に設立せられたのである。

『斯くして慶應義塾は明治維新に先立つこと十年、時論はまさに攘夷の頂上に達し、洋學者を見ること殆んど惡魔外道の如くなりし世の中に生れ、その經營すこぶる困難なるものありしにもかゝわらず、創立者たる福澤先生の剛毅大膽なる、所謂滿天下を敵にするの覺悟を以て獨り自ら居り、維新の前後およそ四十年間一日のごとく、内に孜々として文明の學を講じ、外、社會に向つては、つねに時勢に先んずること一歩なる、最も聰明にして且つ着實なる意見を發表し以つて時人をして、あだかも暗夜に燈火を仰ぐの思あらしめたるは、いやしくも公平に我が新日本の歴史を語るもののともに首肯するところならん』

『慶應義塾五十年史』は以上のごとく創立當時の慶應義塾を評してゐる。思ふに、當時に於いて洋學をとなへ、外來思想をとり入れたることは、今日社會科學の徒が、社會主義の研究に從事するよりも危險な

ることであつたであらう。私は當時の狀勢を福澤諭吉氏彼自身の言葉によつて語らしめやう。次の文は、明治二十八年十二月十二日の福澤諭吉六十一回の誕生日たる還曆の賀筵において、福澤諭吉氏が、慶應義塾學生一同に向つてなした演說の一節である。創立者自らの體驗にもとづいた演說であるだけに當時の狀況まさに手にとるがごとくである。すこしながいが、創立當時に於ける慶應義塾を知るうへに貴重なる文獻と信ずるがゆゑに、つぎに主要なる部分を拔書する。

『今を去ること三四十年、老生が二十歲より三十歲のころは、二百七十諸侯封建の日本國にして、學問は儒學、兵法は何々流、文武兼備と稱する武家は、その地位家祿を世襲し、門閥の固くして神聖なるは、今の憲法もたゞならず、天下唯鎖國攘夷の議論のみ。この時に當りて吾々洋學者は、所謂成らず者の仲間なれども……私議して曰く、弓矢は役に立たず、折て薪にすべし、緋威鎧は見世物に等しく、明珍の兜は花瓶に代用して可ならん。甲州流の貝太鼓聞ておかしく、絕倒するのみ……現に老生のごときは重代の刀脇三腰ばかり、到底無用のものなれば……とて芝日蔭町の刀屋田中重兵衛なるものに賣却したるは、文久年間攘夷の最中、刀劍大流行の時なりき。武事にしてかくの如くなれば、文も亦然り。洋學者の眼中に儒者なく、漢儒が四角な文字を弄んで、祖先以來相も變らず、青表紙の經史を講ずるは、寺の坊主が阿彌陀經を繰返すに等しく、之を聞いて珍らしからず、苟も實學に益なき限りは、漢文と共に漢儒をも廢すべしと云ひ、(當時洋學者の仲間こそ漢學者を目するに、火燵櫓の名を以てして、竊に冷評したるは、其文字の四角なるを嘲りたることにして罵詈も亦甚だし。新古兩者の衝突なからんと欲するも得べからず、是までの頂上に達したることなれば、鎖國の時代に洋學者が身を危ふしたりと云ふも、一方より見るときは、自ら招きたる災にして訴ふる所なきが如し)

偖進んでは、三百年來の門閥政治に對して不平を抱くこと甚だしく、諸藩の大名と云ひ、其重役、家老、奉行と云ひ、祖先の功勞にも似ず、今昔正しく反對にして、智恵もなく、勇氣もなき者が、最上の地位を占めて、社會の上流に居然たり、吾々洋學者流は人の智德を問ふと、門閥の空名を知らざるものなり。諸藩士にして苟も藩政に滿足せざる者は、竊に之を教唆し、又實際に周旋したることもあり。然り而して其洋學者の目的如何を問へば、唯西洋の書を讀み、其文物習俗を聞見し、其富國强兵の現狀を明にして、千思萬慮、理論より推すも、又實際に徵するも、西洋の新主義に非ざれば、一國の獨立を維持するに足らずと信じて、之に附するに文明開化の名を以てし、苟も此主義に背き、又これを妨ぐるものは、事物の性質を問はず、其大小輕重に拘らず、一括して除き去らんとしたることなれば、當時の人心に如何の感を成す可きや、恰も武陵桃源の仙會に、醉漢の亂入したるに等しく、學者の亂暴虛誕妄說として驚くのみ。……三四十年前の事情斯くの如くにし

て學者も殆んど絕望の折柄、種々の紛紜よりして、王政維新の大革新に逢ひ、日本國人は、上下貴賤の別なく、政府と共に心事を一轉して、鎖國の極より開國の極に移り、凡そ其以前に、洋學者の閑に議論したる空論、大言、法螺は、一として實行せられざるものなし、否な實際に於いては、曩の法螺以上に達して、流石の學者も、之を吹くこと足らざりしに赤面するの今日こそ愉快なれ。……左れば老生は三四十年前に空論し、大言し、また法螺を吹きたる、同學流の一人にして、今日より見れば、その空論空ならず、大言大ならず、法螺もまた吹き當てたるものなり、愉快にあらずして何ぞや。』

慶應義塾は、かゝる空氣のうちに、初めには蘭學、後には英學をもつて洋學の先頭に立ち、もつて時流の尖端に立つて一世をひきゐたのであつた。福澤諭吉氏及びそれによつて統率せられた當時の慶應義塾は萬代不易と思はしめたる數百年にわたつて築かれたる中世封建制度に對する反抗兒、破壞兒として出現したのである。封建制度階級制度を唯一絕對としたる守舊者流にとつて慶應義塾は實に叛逆の徒の集合であつたと言つてもよい。今日一般に『御坊ちやん』の集合所と言はれてゐる慶應義塾は、その苦心慘憺したる創業時代に於いては、實にかくの如く、舊制度に對する反抗者を首領とした一團であり、多くの儒者、幕府者流の誹謗、嘲笑、のうちに敢然として時代の向ふべきところに猛進したものであつたといふことを記憶しなければならぬ。かくして舊時代打破、新時代開拓の警鐘のもとに努力し、時代の尖端を切つて、一代をリードし、時代の轉換を促進せしめたところに、慶應義塾のレーゾン・デートルがあつたのである。このことは、慶應義塾を論ぜんとするものの決して見落してはならぬところである。

## 三

慶應義塾はかゝる變亂のうちに誕生したので、塾生のうちにも實際行動をなしたるもののすくなからざりしことは、例へば、明治元年彰義隊變亂の際に『國内變亂の最中にて生徒中國事に奔走するもの多く生徒の總數わずかに十八名に減じたり』(慶應義塾沿革概略、三田評論、三百八十四號)といふ事實でも推測しうるのである。その他、舊形式を打破し、新しき時流をつくらんとして守舊者流に常に反抗したことは例へばつぎのごとき事實がこれを示してゐる。

學生は一般に角帶をしめ、『角帶書生を見れば、あたかも今日のベ印同様、問はずして新錢座の塾生たるを知る』ことを得たといふ。これのごときも、儒教的思想、武士的思想に對抗して新興町人階級の味方たるを示したものといふことが出來る。

また明治元年前後には、塾生安岡雄吉、熊谷辰太郎、小幡篤次郎、中上川彦次郎等は衆に率先して斷髮を決行したと言はれる。

明治十年西南戰爭當時には、大半の學生がその變亂に加はつた。

明治十三四年頃、自由民權の論おこるや、それとともに國會開設促進の運動がおこされ、慶應義塾も亦率先してこれに加はつた。

「明治十三四年頃に於ける慶應義塾は、單に學問教育の點のみならず、政治上に於いても、亦自ら隱然一敵國たりしやの觀ありき。乃ち當時義塾の先輩は、殆んど毎週京橋區木挽町明治會堂に出でて、民權論、國會論を唱道せしのみか、塾内に於いても演說館は勿論、各教場とも殆んど一夜として演說會の開かれざりし夜はなかりしと言ふ。加之義塾先輩の間には「私擬憲法」を起草し、あるひは各地有志者の聘に應じて、出張演說をなし、あるひは某新聞のために、先生自ら國會請願書を代筆し、あるひは元老院の議事規則によつて、擬國會をひらき、あるひは大隈伯朝を退いて野に下り、新たに改進黨を組織するに當ては、矢野文雄、尾崎行雄、犬養毅等の諸氏、袖をつらねて之に赴く等、義塾的熱の流行は、實にこの時をもつてその全盛をきはめたるものなりといふ。」(五十年史)

慶應義塾の創立者福澤諭吉氏は、その生存中は、義塾の氣風を代表し、それを教育することを以て目的としたのであるから、福澤氏の思想はまた同時に、當時に於ける義塾の思想乃至氣風であつたといふことが出來る。それで、當時に於ける福澤氏の思想は如何なるものであつたかと言へば、「慶應義塾五十年史」によれば、

一、幕府門閥の壓制および鎖國主義を厭ふの念の深かりしこと、

二、當時の所謂勤王家なるものは、幕府よりも一層攘夷主義なりしこと、

三、役人根性絶無なりしこと、

等のために、幕府勤王何れへも加担することがなかつたと言ふ。

また、「福翁自傳」によれば、氏の考ふるところは、

一、明治新政府は爵位など設け、維新の精神を沒了せしも、先生自身は何としても之をなすに忍びざりしこと、

一、役人全體の氣風は、とかく、支那流の磊落をよろこぶも、先生の性行にはまつたくこれと相容るる能はざりしこと、

一、幕末に於ける勤王佐幕者の心事は、先生のともに感服せざりしところなれば、たとへ幕府はほろぶるとも、すゝんで明治政府の役人たるあたはざりしこと、

一、千百年來漢學教育の餘弊たる、官尊民卑の陋習を破り、もつて文明獨立の大義を明かにせんと期したること。

であつたのである。福澤諭吉氏は中津藩の下士であつた。當時に於いて、下級の武士は、封建制度の崩壞に近づくとともに、壓制を受け極貧に陷つて門閥制度、及びそれの階級制度に對する反感はすこぶるひどかつた。「福翁自傳」を讀むものは、上級武士階級に對する氏の熱烈なる反撥心を感ずることが出來る。その點に於いて當時の被壓迫階級たりし商人と同一境遇であつた。下級士族及び商人等は、力もなき封建的階級制度にあくなき反感をいだいてゐた。いまここに、當時商人階級であつた大倉喜八郎氏の武士階級に對する反感を左に摘記して見やう。これに、かつて、昭和二年四月某日の東京日々新聞に、「その頃の

階級抗爭』と題して、載せられたものである。

『わしは、子供の頃からさむらひ階級に對しておびたゞしい反感をもつてゐた。百姓町人といへば、塵芥のやうに心得て、二つとない人の命さへのみかなでのやう捻りつぶす暴虐は、全くわしの腹の虫をこねくりかへしたのである。わしが故山を後に江戸表へ出る抑ゝの動機は、少しの過失の爲に殿から閉門仰せつけられ、その家を青竹で圍れてゐるある友人の樣を見て悲憤の涙を流したことである。殿の行列が來れば、土下座といつて人間が土の上にひざまついて畏まるとは何たるぶざまだらう。……そこは流石江戸だ。町人の意氣は火の樣に盛で侍――殊に田舍から出たての二本差なんぞは痛く町人から馬鹿にされてゐたよ。物語や傳說は町人が常に彼等に虐げられてゐる事ばかり傳へてゐるが、實はどうして侍もいゝ加減町人から馬鹿にされたもんぢや。……『やい侍わちきの尻の香でもかぎねー』といつてな散々な惡口雜言をついて、侍の鼻の先でぽんぽん尻つぺたをたゝいて逃げる勇み肌なんかゞあつたよ。……そんな光景を町で見る時、おれ達はどんなに喜んだか、武士共が沒落しやうとする氣風は、すでに町人の尻太鼓に見えたとでもいふか。いや痛快至極な思出ぢや。』

しひたげられた下級士族は封建的階級制度に對しておそらくこれと同じ反感を抱いて居つたことであらう。從つて明治維新の政變に主として働いたものは、不平貴族、下級士族、商人等であつた。かくして明治維新は成つた。しかし出來上つたものは、封建的階級制度の代りに薩長等の藩閥政府であつた。かつて武士に苦しめられたそれらのものは、更に新しい藩閥のために苦しめられなければならなかつた。それら下級士族、商人の行く道は、野にあつて財を握り、それによつて經濟的勢力を確保するに至るよりほかに自由を求むる道がなかつた。福澤諭吉氏はつとに實學の奬勵を呼唱し、ことに、明治十四年の政變、および有名なる集合條例發布のために、慶應義塾出身者は一時に官海をしりぞくとともに、福澤氏もこの事變に感ずるところあり、もつぱら實業を奬勵せし結果、義塾卒業生は、みな、農工商、なかんづく商業に赴くに至つた。當時これを拜生師商論と言つたと言ふことである。慶應義塾が今日ブルジョアジー養成の重要なる搖籃といはれるに至つた源は、實にかゝるところに發してゐるのである。

## 四

明治維新は成つた。固定したる階級制度のうへに立つた中世の封建の、、は俄然として倒壞した。進歩をはゞむ桎梏は排棄せられて新しき世界、制度への途が拓かれた。廣く世界に向つて手をさし延べて、あらゆる新らしきものの到來をむかへた。文物制度のおくれた東方へ、先進國からの新らしきものの流入は、歷史のつねに示すとほり、壓倒的である。今まで夷ととなへ、南蠻と稱して、鎖國のせきをもつて排除した西洋の文物は、滔々として、島國日本に殺倒し來つた。洋語が輸入された。自由主義經濟學が將來された。自由民權の思想、立

「明治十三四年頃に於ける慶應義塾は、單に學問教育の點のみならず、政治上に於いても、亦自ら隱然一敵國たりしやの觀ありき。乃ち當時義塾の先輩は、殆んど銀座京橋區木挽町明治會堂に出でて、民權論、國會論を唱道せしのみか、塾内に於いても演説館は勿論、各教場とも殆んど一夜として演説會の開かれざりし夜はなかりしと言ふ。加之義塾先輩の間には、「私擬憲法」を起草し、あるひは各地有志者の聘に應じて、出張演説をなし、あるひは某某員のために、先生自ら國會請願書を代筆し、あるひは元老院の議事規則によつて、擬國會をひらき、あるひは大隈伯朝を退いて野に下り、新たに改進黨を組織するに當ては、矢野文雄、尾崎行雄、犬養毅等の諸氏、袖をつらねて之に赴く等、義塾的熱の流行は、實にこの時をもつてその全盛をきはめたるものなりといふ。」(五十年史)

慶應義塾の創立者福澤諭吉氏は、その生存中は、義塾の氣風を代表し、それを教育することを以て目的としたのであるから、福澤氏の思想はまた同時に、當時に於ける義塾の思想乃至氣風であつたといふことが出來る。それで、當時に於ける福澤氏の思想は如何なるものであつたかと言へば、「慶應義塾五十年史」によれば、

一、幕府門閥の壓制および鎖國主義を厭ふの念の深かりしこと、
二、當時の所謂勤王家なるものは、幕府よりも一層攘夷主義なりしこと、
三、役人根性絶無なりしこと、

等のために、幕府勤王何れへも加擔することがなかつたと言ふ。
また、「福翁自傳」によれば、氏の考ふるところは、

一、明治新政府は爵位など設け、維新の精神を沒了せしも、先生自身は何としても之をなすに忍びざりしこと、
一、役人全體の氣風は、とかく、支那流の磊落をよろこぶも、先生の性行にまつたくこれと相容るる能はざりしこと、
一、幕末に於ける勤王佐幕者の心事は、先生のともに感服せざりしところなれば、たとへ幕府にほろぶるとも、すゝんで明治政府の役人たるあたはざりしこと、
一、千百年來漢學教育の餘弊たる、官尊民卑の陋習を破り、もつて文明獨立の大義を明かにせんと期したること。

であつたのである。福澤諭吉氏は中津藩の下士であつた。當時に於いて、下級の武士は、封建制度の崩壞に近づくとともに、壓制をうけ極貧に陷つて門閥制度、及びそれの階級制度に對する反感はすこぶるひどかつた。福翁自傳を讀むものは、上級武士階級に對する氏の熱烈なる反撥心を感ずることが出來る。その點に於いて當時の被壓迫階級たりし商人と同一境遇であつた。下級士族及び商人等は、力もなき封建的階級制度にあくなき反感をいだいてゐた。いまここに、當時商人階級であつた大倉喜八郞氏の武士階級に對する反感を左に摘記して見やう。これは、かつて、昭和二年四月某日の東京日々新聞に、「その頃の

『階級抗爭』と號して、乘せられたものである。

『わしは、子供の頃からさむらひ階級に對しておびたゞしい反感をもつてゐた。百姓町人といへば、塵芥のやうに心得て、二つとない人の命さへのみかなでのやう捻りつぶす暴虐は、全くわしの腹の虫をこねくりかへしたのである。わしが故山を後に江戸表へ出る抑ゝの動機は、少しの過失の爲に殿から閉門仰せつけられ、その家を青竹で圍れてゐるある友人の樣を見て悲憤の涙を流したことである。殿の行列が來れば、土下座といつて人間が土の上にひざまついて畏まるとは何たるぶざまだらう。……そこは流石江戸だ。町人の意氣は火の樣に盛で侍——殊に田舍から出たての二本差なんぞは痛く町人から馬鹿にされてゐたよ。物語や傳説は町人が常に彼等に虐げられてゐる事ばかり傳へてゐるが、實はどうして侍もいゝ加減町人から馬鹿にされたもんぢや。……『やい侍わちきの尻の香でもかぎねー』といつてなきちく散ゝな惡口雜言をついて、侍の鼻の先でぽん〳〵尻つぺたをたゝいて逃げる勇み肌なんかゞあつたよ。……そんな光景を町で見る時、おれ達はどんなに喜んだか、武士共が沒落しやうとする氣風は、すでに町人の尻太鼓に見えたとでもいふか。いや痛快至極な思出ぢや。』

しひたげられた下級士族は封建的階級制度に對しておそらくこれと同じ反感を抱いて居つたことであらう。從つて明治維新の政變に主として働いたものは、不平貴族、下級士族、商人等であつた。かくして明治維新は成つた。しかし出來上つたものは、封建的階級制度の代りに薩長等の藩閥政府であつた。かつて武士に苦しめられたそれらのものは、更に新しい藩閥のために苦しめられなければならなかつた。それら下級士族、商人の行く道は、野にあつて財を握り、それによつて經濟的勢力を確保するより外に自由を求むる道がなかつた。福澤諭吉氏はつとに實學の奬勵を呼唱し、ことに、明治十四年の政變、および有名なる集會條例發布のために、慶應義塾出身者は特に官海をしりぞくとゝもに、福澤氏もこの事變に感ずるところあり、もつぱら實業を奬勵せし結果、慶應義塾卒業生は、みな、農工商、なかんづく商業に赴くに至つた。當時これを書生隊商論と言つたと言ふことである。慶應義塾が今日ブルジョアジー養成の重要なる搖籃といはれるに至つた源は、實にかゝるところに發してゐるのである。

## 四

明治維新は成つた。固定したる階級制度のうへに立つた中世の封建の、、は俄然として倒壞した。進歩をはゞむ桎梏は排棄せられて新しき世界、制度への途が拓かれた。廣く世界に向つて手をさし延べ、あらゆる新らしきものの到來をむかへた。文物制度のおくれた方へ、先進國からの新らしきものの流入は、歴史のつねに示すとほり、壓倒的である。今まで夷となへ、南蠻と稱して、鎖國のせきをもつて排除した西洋の文物は、滔々として、島國日本に殺倒し來つた。洋學が輸入された。自由主義經濟學が將來された。自由民權の思想、功

「明治十三四年頃に於ける慶應義塾は、單に學問教育の點のみならず、政治上に於いても、亦自ら隱然一敵國たりしやの觀ありき。乃ち當時義塾の先輩は、殆んど銀座京橋區木挽町明治會堂に出でて、民權論、國會論を唱道せしのみか、塾内に於いても演説館は勿論、各教場とも殆んど一夜として演説會の開かれざりし夜はなかりしと言ふ。加之義塾先輩の間には「私擬憲法」を起草し、あるひは各地有志者の聘に應じて、出張演説をなし、あるひは某新聞の爲めに、先生自ら國會請願書を代筆し、あるひは元老院の議事規則によつて、擬國會をひらき、あるひは大隈伯朝を退いて野に下り、新たに改進黨を組織するに當ては、矢野文雄、尾崎行雄、犬養毅等の諸氏、袖をつらねて之に赴く等、義塾的熱の流行は、實にこの時をもつてその全盛をきはめたるものなりといふ。」(五十年史)

慶應義塾の創立者福澤諭吉氏は、その生存中は、義塾の氣風を代表し、それを教育することを以て目的としたのであるから、福澤氏の思想はまた同時に、當時に於ける義塾の思想乃至氣風であつたといふことが出來る。それで、當時に於ける福澤氏の思想は如何なるものであつたかと言へば、「慶應義塾五十年史」によれば、

一、幕府門閥の壓制および鎖國主義を厭ふの念の深かりしこと、
二、當時の所謂勤王家なるものは、幕府よりも一層攘夷主義なりしこと、
三、役人根性絶無なりしこと、

等のために、幕府勤王何れへも加擔することがなかつたと言ふ。
また、「福翁自傳」によれば、

一、明治新政府は爵位など設け、維新の精神を沒了せしも、先生自身は何としても之をなすに忍びざりしこと、
一、役人全體の氣風は、とかく、支那流の磊落をよろこぶも、先生の性行にまつたくこれと相容るる能はざりしこと、
一、幕末に於ける勤王佐幕者の心事は、先生のともに感服せざりしところなれば、たとへ幕府はほろぶるとも、すゝんで明治政府の役人たるあたはざりしこと、
一、千百年來漢學教育の餘弊たる、官尊民卑の陋習を破り、もつて文明獨立の大義を明かにせんと期したること。

であつたのである。福澤諭吉氏は中津藩の下士であつた。當時に於いて、下級の武士は、封建制度の崩壞に近づくとともに、壓制をうけ極貧に陷つて舊制度、及びそれの階級制度に對する反感はすこぶるひどかつた。福翁自傳を讀むものは、上級武士階級に對する氏の熱烈なる反撥心を感ずることが出來る。その點に於いて當時の被壓迫階級たりし商人と同一境遇であつた。下級士族及び商人等は、力もなき封建的階級制度にあくなき反感をいだいてゐた。いまここに、當時商人階級であつた大倉喜八郎氏の武士階級に對する反感を左に摘記して見やう。これは、かつて、昭和二年四月某日の東京日々新聞に、「その頃の

階級抗爭』と譯して、載せられたものである。

『わしは、子供の頃からさむらひ階級に對しておびたゞしい反感をもつてゐた。百姓町人といへば、塵芥のやうに心得て、二つとない人の命さへのみかなでのやう捻りつぶす暴虐は、全くわしの腹の虫をこねくりかへしたのである。わしが故山を後に江戸表へ出る抑々の動機は、少しの過失の爲に殿から閉門仰せつけられ、その家を青竹で閉されてゐるある友人の樣を見て悲憤の涙を流したことである。殿の行列が來れば、土下座といつて人間が土の上にひざまついて畏まるとは何たるぶざまだらう。……そこは流石江戸だ。町人の意氣は火の樣に盛で侍——殊に田舍から出たての二本差なんぞは痛く町人から馬鹿にされてゐたよ。物語や傳說は町人が常に彼等に虐げられてゐる事ばかり傳へてゐるが、實はどうして侍もいゝ加減町人から馬鹿にされたもんぢや。……『やい侍わちきの尻の香でもかぎねー』といつてな散々な惡口雜言をついて、侍の鼻の先でぽん〳〵尻つぺたをたゝいて逃げる勇み肌なんかゞあつたよ。……そんな光景を町で見る時、おれ達はどんなに喜んだか、武士共が沒落しやうとする氣風は、すでに町人の尻太鼓に見えたとでもいふか。いや痛快至極な思出ぢや。』

しひたげられた下級士族は封建的階級制度に對しておそらくこれと同じ反感を抱いて居つたことであらう。從つて明治維新の改變に主として働いたものは、不平貴族、下級士族、商人等であつた。かくして明治維新は成つた。しかし出來上つたものは、封建的階級制度の代りに薩長等の藩閥政府であつた。かつて武士に苦しめられたそれらのものは、更に新しい藩閥のために苦しめられなければならなかつた。それによつてそれら下級士族、商人の行く道は、野にあつて財を殖り、それによつて經濟的勢力を確保するに至るよりほかに自由を求むる道がなかつた。福澤諭吉氏はつとに實學の奬勵を呼唱し、ことに、明治十四年の政變、および有名なる集合條例發布のために、慶應義塾出身者は一時に官海をしりぞくとともに、福澤氏もこの事變に感ずるところあり、もつぱら實業を奬勵せし結果、義塾卒業生は、みな、農工商、なかんづく商業に赴くに至つた。當時これを指して書生商論と言つたと言ふことである。慶應義塾が今日ブルジョアジー養成の重要なる搖籃といはれるに至つた源は、實にかゝるところに發してゐるのである。

## 四

明治維新は成つた。固定したる階級制度のうへに立つた中世の封建の、、は俄然として倒壞した。進步をはゞむ桎梏は排棄せられて新しき世界、制度への途が拓かれた。廣く世界に向つて手をさし延べ、あらゆる新らしきものの到來をむかへた。文物制度のおくれた東方へ、先進國からの新らしきものの流入は、歷史のつねに示すとほり、壓倒的である。今まで夷ととなへ、南蠻と稱して、鎖國のせきをもつて排除した西洋の文物は、滔々として、島國日本に殺到し來つた。洋書が輸入された。自由主義經濟學が將來された。自由民權の思想、立

憲主義、キリスト教等も移入された。すでに産業革命を經過して資本主義的經營を營みつつあつた西ヨーロッパ諸國からは機械、動力、技術、工場制度等がもたらされた。これらの精神的・物質的の資本主義的諸要素が陸續として渡來し來つた。明治新政府はこの趨勢に應じて、産業保護促進の政策を採用し、明治十三年ごろまでは、官營の模範工場の設立、金融交通機關に對する保護干渉、産業資本の貸與等をもつて日本の初期資本主義的經濟政策を行ひ、さらにすゝんで、明治十四年以後は、民間の産業助長政策を行ひ、ここに日本の經濟政策もやうやく歐米直輸入の域より脱し來つた。日清、日露の大戰に於ける日本の勝利は、ここに日本に於ける産業革命をもたらし、商工業は空前の發達を遂げ日本資本主義が確立され、つづいて千九百十四年ヨーロッパ大戰に於いては、西歐諸國が各自戰爭に沒頭し、商工業の發達を期するいとまなきに乘じ、ここに日本の商品は、西歐諸國の販賣區域をうばひ、工業、商業、交通業、金融業等は飛躍的に好況を呈し所謂成金輩出時代を實現した。ここに至つて、明治維新以來、生成しつつありし日本の資本主義は全くその絶頂に達したと言つてもよい。

封建的諸關係の徹底的破棄をさけび、文明開化をとなへ、實學實業をモットーとし、自由主義的經濟學を最も早くとり入れ、獨立自尊なる個人主義的思想をふりかざし、國會開設・自由平等を叫號したる——一言にして言へば資本主義的イデオロギーの尖端的代表者であつたところの慶應義塾が、この順風に帆を擧げて進むがごとき日本の資本主義的發展の波に乘つて、最も得意なる、最も順調なる發展を示したることは怪しむに足らぬ當然の結果である。安政五年、封建制度に反抗して發生したる慶應義塾の理想は、ここに至つて全く實現せられたわけである。明治四年春、芝新錢座より三田山上に移り、一十三年には大學部を新設し、三十年更に政治科を加へ、大正六年に醫學科を設け、大正九年には大學令によつて綜合大學となり、その他幼稚舍、普通部、商業夜學校、商工學校、高等學部を包含する慶應義塾今日の發展は、いかに慶應義塾が、資本主義そのものと密接なる關係をもつて進展し來たるかを明かに示してゐる。

社會史的に觀察すれば、慶應義塾創立當時およびその後の行動綱領は、まさしく封建制度打破、資本主義建設であつた。そしてそれをかざして、時流にぬきんでて、一世の尖端にたつたところに、社會史上に於ける慶應義塾の偉大なる使命と目的とがあつたのである。その點に於いて個人福澤諭吉はえらかつたとともに慶應義塾も文化史上一つの使命を果したと言へるのである。

## 五

明白に、時には露骨に、資本主義的イデオロギーを代表したる慶應義塾の教育方針は、その結果として、封建時代に代つて出現した資本主義時代の大寵兒を甚だ多く輩出した。今日資本の陣營の司令部に名をつらねる慶應出身の財人の如何に多きことよ。次に思ひ出すまゝ

に出身者中に於ける、現代財閥の著名なる首脳人を若干列記して見よう。井上角五郎、池田成彬、門野幾之進、成瀬正行一家、矢田績、山本久三郎、山名次郎、權哲、藤山雷太、小林一三、福澤大四郎、鈴木島吉、磯村豐太郎、西野惠之助、岡崎忠雄、奧田竹松、門野重九郎、藤原銀次郎、福澤桃介、朝吹常吉、平沼亮三、鈴木梅四郎、今村繁三、名取和作、益田太郎、北川禮弼、森村開作、吉村萬次郎、三好重道等の諸氏はそのうちでも錚々たるものである。その他中堅、小壯の商業使用人に至つてはまことに枚擧に暇ない。こころみに塾員名簿を見よ。僅かの例外をのぞいて殆んど大部分が商事會社、銀行等の使用人であることに吃驚するであらう。その他、我國著名の實業家を網羅する時選を加へれば、慶應義塾が、如何なる方針のもとに教育を發展せしめ來つたかを事實をもつて證明する。三井、鐘紡、千代田等は慶應閥を以て有名なる會社である。交詢社系の實業家は殆んど大部分慶應出身である。

かくのごとく、資本家に多くの先輩を持つ慶應義塾は、金萬能の現代に於いて何事でも出來る。次のエピソードはその間の消息を語るものである。

「慶應義塾が三田から東京橫濱沿線の日吉臺に移轉することになつた。塾では小田急沿線西武沿線あれかこれかと盛んに物色したが思ふようにすゝまぬ。それをきゝ傳へた橫濱電鐵の小林一三氏膝を進めて「よし然らば會社の所有地五萬坪を無代提供しませう」と來た。それに動かされた塾長林毅陸先生早速交渉まとまつたが五萬坪ではどうすることも出來ぬ。とあつて更に塾の方では十五萬坪を買收した。……五萬坪を無代寄附した橫濱電鐵はその附近の値上りによつて所有土地二百萬圓の利益を占めたよし」（飯田町人、財界天眼鏡、財界往來昭和四年九月號、七十八頁）

これは事實であるかどうか筆者は全く知らぬ。もし事實とすれば、慶應義塾を相手にして蝦で鯛を釣り上げた名人小林一三氏が慶應出身であるといふことはますます生きて來る。

費用のかゝる醫學部を創設し、さらに日吉臺を買收し、そこに校舍を建て、又三田山上の校舍を改築するに要する費用の額は、筆者のごときには全く見當すらつかぬ。それを數年間で完成させようといふのだから、數年かゝつてたつた一つの學士會館の建築費をさへ集め得ない帝大出身財閥の貧乏は慶應財閥の前に愧死しなければならぬ。

## 六

しかし、日本の資本主義が、その發生に於いてヨーロッパ資本主義の影響を蒙つたと同樣に、歐洲戰後に於けるヨーロッパ資本主義の動搖と矛盾の深刻化はまた同時に、日本資本主義のうへにも大影響をあたへ、歐洲戰役當時頂上に達した日本資本主義もまた、その內部に多くの矛盾を顯現しはじめた。反資本主義的思想と無產階級の社會的

憲主義、キリスト教等も移入された。すでに産業革命を經過して資本主義的經營を營みつつあつた西ヨーロッパ諸國からは機械、動力、技術、工場制度等がもたらされた。これらの精神的・物質的の資本主義的諸要素が陸續として渡來し來つた。明治新政府はこの趨勢に應じて、産業保護促進の政策を採用し、明治十三年ごろまでは、官營の模範工場の設立、金融交通機關に對する保護干渉、産業資本の貸與等をもつて日本の初期資本主義的經濟政策を行ひ、さらにすゝんで、明治十四年以後は、民間の産業助長政策を行ひ、ここに日本の經濟政策もやうやく歐米直輸入の域より脫し來つた。日清、日露の大戰に於ける日本の勝利は、ここに日本に於ける産業革命をもたらし、商工業は空前の發達を遂げ日本資本主義が確立され、つづいて千九百十四年ヨーロッパ大戰に於いては、西歐諸國が各自戰爭に沒頭し、商工業の發達を期するいとまなきに乘じ、ここに日本の商品は、西歐諸國の販賣區域をうばひ、工業、商業、交通業、金融業等は飛躍的に好況を呈し所謂成金輩出時代を實現した。ここに至つて、明治維新以來、生成しつつありし日本の資本主義は全くその絕頂に達したと言つてもよい。

封建的諸關係の徹底的破棄をさけび、文明開化をとなへ、實學實業をモットーとし、自由主義的經濟學を最も早くとり入れ、獨立自尊なる個人主義的思想をふりかざし、國會開設・自由平等を叫號したる——一言にして言へば資本主義的イデオロギーの尖端的代表者であつたところの慶應義塾が、この順風に帆を擧げて進むがごとき日本の資本主義的發展の波に乘つて、最も得意なる、最も順調なる發展を示したる ことは怪しむに足らぬ當然の結果である。安政五年、封建制度に反抗 して發生したる慶應義塾の理想は、希望は、ここに至つて全く實現 せられたわけである。明治四年春、芝新錢座より三田山上に移り、一 十三年には大學部を新設し、三十年更に政治科を加へ、大正六年に醫 學科を設け、大正九年には大學令によつて綜合大學となり、その他幼 稚舍、普通部、商業夜學校、商工學校、高等學部を包含する慶應義 塾今日の發展は、いかに慶應義塾が、資本主義そのものと密接なる 關係をもつて進展し來たるかを明かに示してゐる。

社會史的に觀察すれば、慶應義塾創立當時およびその後の行動綱 領は、まさしく封建制度打破、資本主義建設であつた。そしてそれを かざして、時流にぬきんでて、一世の尖端にたつたところに、社會史 上に於ける慶應義塾の偉大なる使命と目的とがあつたのである。その 點に於いて個人福澤諭吉はえらかつたとともに慶應義塾も文化史上 一つの使命を果したと言へるのである。

## 五

明白に、時には露骨に、資本主義的イデオロギーを代表したる慶應 義塾の教育方針は、その結果として、封建時代に代つて出現した資 本主義時代の大寵兒を甚だ多く輩出した。今日資本の陣營の司令部に 名をつらねる慶應出身の財人の如何に多きことよ。次に思ひ出すまゝ

に出身者中に於ける、現代財閥の著名なる首腦人を若干列記して見よう。井上角五郎、池田成彬、門野幾之進、成瀨正行一家、矢田績、山本久三郎、山名次郎、槇哲、藤山雷太、小林一三、福澤大四郎、鈴木島吉、磯村豐太郎、西野惠之助、岡崎忠雄、奧田竹松、門野重九郎、鎌田榮吉、武藤山治、久原房之助、中上川一家、松永安左衞門、藤原銀次郎、福澤桃介、朝吹常吉、平沼亮三、鈴木梅四郎、今村繁三、名取和作、益田太郎、北川禮弼、森村開作、吉村萬次郎、三好重道等の諸氏はそのうちでも錚々たるものである。その他中堅、小壯の商業使用人に至つてはまことに枚擧に暇ない。こころみに塾員名簿を見よ。僅かの例外をのぞいて殆んど大部分が商事會社、銀行等の使用人であることに吃驚するであらう。その他、我國著名の實業家を網羅する特選を加へれば、慶應義塾が、如何なる方針のもとに教育を發展せしめ來つたかを事實をもつて證明する。三井、鐘紡、千代田等は慶應閥を以て有名なる會社である。交詢社系の實業家は殆んど大部分慶應出身である。

かくのごとく、資本家に多くの先輩を持つ慶應義塾は、金萬能の現代に於いて何事でも出來る。次のエピソードはその間の消息を語るものである。

「慶應義塾が三田から東京横濱沿線の日吉臺に移轉することになつた。塾では小田急沿線西武沿線あれかこれかと盛んに物色したが思ふようにすゝまぬ。それをきゝ傳へた横濱電鐵の小林一三氏膝を進めて「よし然らば會社の所有地五萬坪を無代提供しませう」と來た。それに動かされた塾長林毅陸先生早速交渉まとまつたが五萬坪ではどうすることも出來ぬ。とあつて更に塾の方では十五萬坪を買收した。…五萬坪を無代寄附した横濱電鐵はその附近の値上りによつて所有土地二百萬圓の利益を占めたよ」(飯田町人、財界大眼鏡より往來昭和四年九月號、七十八頁)

これは事實であるかどうか筆者は全く知らぬ。もし事實とすれば、慶應義塾を相手にして蝦で鯛を釣り上げた名人小林一三氏が慶應出身であるといふことはますます生きて來る。

費用のかゝる醫學部を創設し、さらに日吉臺を買收し、そこに校舍を建て、又三田山上の校舍を改築するに要する費用の額は、筆者のごときには全く見當すらつかぬ。それを數年間で完成させようといふのだから、數年かゝつてたつた一つの學士會館の建築費をさへ蒐め得ない帝大出身財閥の貧乏は慶應財閥の前に愧死しなければならぬ。

## 六

しかし、日本の資本主義が、その發生に於いてヨーロッパ資本主義の影響を蒙つたと同樣に、歐洲戰後に於けるヨーロッパ資本主義の動搖と矛盾の深刻化はまた同時に、日本資本主義のうへにも大影響をあたへ、歐洲戰役當時頂上に達した日本資本主義もまた、その內部に多くの矛盾を顯現しはじめた。反資本主義的思想と無產階級の社會

動は、以前のごとき自然發生的のものから目的意識を有するものへと發展した。不景氣は永續の傾向を示し、會社銀行にして破綻をするもの族出し、カルテル的獨占企業結合が急激に増加し、合理化がさけばれ、失業の增加は永續的となり來つた。これは乃ち、日本資本主義がヨーロッパ大戰前に於けるがごとき、順調なる發展をなすこと不可能となり、時代が新らしき方向へ轉換すべき點に到達したることを示すものである。

まさに時代のターニング・ポイントである。

慶應義塾は、さきに、封建社會から資本主義社會へのターニング・ポイントに、封建制度への反對物として出現した、重大なる文化的任務を果したこと前に述べた通りである、しからば、いま、この第二のターニング・ポイントに際して、慶應義塾は如何なる地位に立つか。一言にして言へば、第一のターニング・ポイントには急進的〇〇的であつたが、第二のターニング・ポイントには全く反動的な役割を勤めてゐる。資本主義的イデオロギストの一團たりし慶應義塾は、明治維新前後乃ち封建的諸關係がいまだ新らしい文化發展への桎梏をなしたる時代に於いては、時代の反抗兒であり、また同時に新文化創造運動の尖端に立つてゐた。しかし、いま資本主義が頂上に達するとともに慶應義塾はそれに應じて時代の寵兒を多く生んで得意の境に入つたと同時に、資本主義そのものに固定し、時代は資本主義より更に先に向けて發展しつつあるにかゝはらず、それらへの運動は見られず、社會的には全く保守的な地位に立つに至つた。かつて慶應義塾は、福澤諭吉氏をその代表者として、封建的階級制度に反抗した。しかし、いまは資本主義的階級制度を肯定して、資本家階級的立場、及び資本家階級的イデオロギーの上に、教育が行はれてゐる。かつて反封建の旗をひるがへして立つた勇敢なりし慶應義塾も、いまは時代の寵兒あまんじて、新らしき反資本への運動に對して無關心乃至反動の役割をつとめてゐるのである。この點、社會的には慶應義塾は、一般ブルジヨアジーと全く同じ地位に立つと言つてよい。

それにはまづ慶應義塾出身者の社會的地位を見やう。前にも述べた樣に、その出身者の大部分は、大財閥の司令部、中堅、乃至それに隷屬する商業使用人である。

また政黨關係について見れば、塾員代議士總數十四人のうち十名、（犬養毅、板谷順助、堀切善兵衛、高山長幸、高橋光威、久原房之助、山田又司、木暮武太夫、平出喜三郎、松田三德の諸氏）は、皆政治界に於いて最も保守的であり、反動的である政友會に屬する。しかも犬養毅氏はその統領であり、久原房之助は立役者の一人であることは、世間衆知の通りである。今日慶應義塾々長の榮位にある林毅陸氏もかつては政友會の代議士として議院に立つた。殘る四名のうち、武藤山治氏は別に一黨派を立つといへども色彩は政友系である。また尾崎行雄氏は、かつては憲政擁護運動で民衆の先頭に立つたが、今日はその精彩を全く失つてゐる。殘る二人（降旗元太郎、戸田由美

氏）は民政黨所屬である。かゝる政黨に於ける分野を見れば、慶應義塾が、今の時代に如何なる階級を代表し、如何なる地位に立つかが明瞭であらう。

たゞ僅かな例外を示すものとしては、青木徹二、堀江歸一、永島今四郎等の諸氏がある。堀江氏は、社會民衆黨の發生當時、吉野作造氏とともに、産婆役を勤めた。しかしその後社會民衆黨と實質的に如何なる關係にあつたかは明瞭でない。永島今四郎氏は、永洲と號し、時事新報社員であり、同時に、雜誌「少年」の主幹であつた。一方氏が社會主義運動に多大の同情と同感を有して、かゝる方面に多くの知己を有してゐられたことは、堺利彦氏の「自傳」を見れば明瞭である。今日義塾出身者であつて無産階級運動にたづさはれるは、野呂榮太郎氏、野坂鐵氏ほか數名にすぎない。

出身の學者としては、高橋誠一郎、小泉信三、加田哲二、故堀江歸一、野村兼太郎、平井新、三邊金藏、向井鹿松、等の諸氏が社會科學方面に於いて著名である。しかし、これらの諸氏は傾向から言へば自由主義者であり、社會主義的學説に對しては懷疑的である。

更に文學の方面に於ける義塾出身者の活動を見ると、出身者中の著名の文士としては、久保田万太郎、水上瀧太郎、三宅周太郎、南部修太郎、小島政二郎、北村小松、加島貴一、水木京太、久野豐彦、勝本清一郎等の諸氏がある。これらの人は、二三子を除いて、文學界の通流に屬するか、あるひはその後活動を停止してゐることは衆知の通りである。文學界に新らしい境地を開拓して、尖端に立つと思はれる人はゐない。勝本清一郎氏がプロレタリア文學的評論をなせるほか、プロレタリア文學に屬する人達は皆無である。「戰旗」「文藝戰線」に屬する文士としても、筆者の知れるかぎり、一人もない。

かくのごとく出身者のうち、活動をしてゐる人達を一瞥すると、慶應義塾は、過去に於いては、あるひは現在に於いては、時代の文化に寄與する所大であつたが、この時代の轉換期に、尖端を切つて、新しい時代に向つて舊きものを打破して行く役目を完全に遂行してゐないことが明であらう。

## 七

次に現在の學生の方を一瞥しやう。がしかし、私はそれについては殘念ながら何の智識も持合せない。たゞ幸に、慶應義塾出身でありかつ、かつては慶應義塾に教鞭をとつてゐた經驗のある從つて義塾學生の生活をよく知つてゐると想像される勝本清一郎氏の「學生生活とその社會的背景」なる文章がある。（中央公論、昭和三年七月號所載）これは、慶應義塾の學生の傾向を我々局外者に知らして呉れる好個の文獻である。その主要なる部分を左に摘記する。

「現在の慶應義塾の學生の間には、特に極左的なとか極右的なとかいふやうな積極性を持つた運動は甚だ微弱である。……大摑みに見てこの學校全體の空氣は、現代日本の資本家階級的支配に順應して

動は、以前のごとき自然發生的のものから目的意識を有するものへと發展した。不景氣は永續の傾向を示し、會社銀行にして破綻をするものの族出し、カルテル的獨占企業結合が急激に増加し、合理化がさけばれ、失業の増加は永續的となり來つた。これは乃ち、日本資本主義がヨーロッパ大戰前に於けるがごとき、順調なる發展をなすこと不可能となり、時代か新らしき方向へ轉換すべき點に到達したることを示すものである。

まさに時代のターニング・ポイントである。

慶應義塾は、さきに、封建社會から資本主義社會へのターニング・ポイントに、封建制度への反對物として出現した、重大なる文化的任務を果したこと前に述べた通りである、しからば、いま、この第二のターニング・ポイントに際して、慶應義塾は如何なる地位に立つか。一言にして言へば、第一のターニング・ポイントには急進的〇〇的であつたが、第二のターニング・ポイントには全く反動的な役割を勤めてゐる。資本主義的イデオロヂストの一團たりし慶應義塾は、明治維新前後乃ち封建的諸關係がいまだ新らしい文化發展への桎梏をなしたる時代に於いては、時代の反抗兒であり、また同時に新文化創造運動の尖端に立つてゐた。しかし、いま資本主義が頂上に達するとともに慶應義塾はそれに應じて時代の寵兒を多く生んで得意の境に入つたと同時に、資本主義そのものに固定し、時代は資本主義より更に先に向けて發展しつつあるにかゝはらず、それらへの運動は見られず、社會的には全く停滯的な地位に立つに至つた。かつて慶應義塾は、福澤諭吉氏をその代表者として、封建的階級制度に反抗した。しかし、いまは資本主義的階級制度を肯定して、資本家階級的立場、及び資本家階級的イデオロギーの上に、教育が行はれてゐる。かつて反封建の大旆をひるがへして立つた勇敢なりし慶應義塾も、いまは時代の寵兒にあまんじて、新らしき反資本への運動に對して無關心乃至反動の役目をつとめてゐるのである。この點、社會的には慶應義塾は、一般ブルジヨアジーと全く同じ地位に立つと言つてよい。

それにはまづ慶應義塾出身者の社會的地位を見やう。前にも述べた様に、その出身者の大部分は、大財閥の司令部、中堅、乃至それに隷屬する商業使用人である。

また政黨關係について見れば、塾員代議士總數十四人のうち十名、(犬養毅、板谷順助、堀切善兵衛、高山長幸、高橋光威、久原房之助、山田又司、木暮武太夫、平出喜三郎、松田三德の諸氏)は、今日政治界に於いて最も保守的であり、反動的である政友會に屬する。しかも犬養毅氏はその統領であり、久原房之助は立役者の一人であることは、世間衆知の通りである。今日慶應義塾々長の榮位にある林毅陸氏もかつては政友會の代議士として議院に立つた。殘る四名のうち、武藤山治氏は別に一黨派を立つといへども色彩は政友系である。また尾崎行雄氏は、かつては憲政擁護運動で民衆の先頭に立つたが、今日はその精彩を全く失つてゐる。殘る二人(降旗元太郎、戸田由美

氏）は民政黨所屬である。かゝる政黨に於ける分野を見れば、慶應義塾が、今の時代に如何なる階級を代表し、如何なる地位に立つかが明瞭であらう。

たゞ僅かな例外を示すものとしては、青木徹二、堀江歸一、永島今四郎等の諸氏がある。堀江氏は、社會民衆黨の發生當時、吉野作造氏とともに、産婆役を勤めた。しかしその後社會民衆黨と實質的に如何なる關係にあつたかは明瞭でない。永島今四郎氏は、永洲と號し、時事新報社員であり、同時に、雜誌「少年」の主幹であつた。一方氏が社會主義運動に多大の同情と同感を有して、かゝる方面に多くの知己を有してゐられたことは、堺利彦氏の「自傳」を見れば明瞭である。今日義塾出身者であつて無産階級運動にたづさはれるは、野呂榮太郎氏、野坂鐵氏ほか數名にすぎない。

出身の學者としては、高橋誠一郎、小泉信三、加田哲二、故堀江歸一、野村兼太郎、平井新、三邊金藏、向井鹿松、等の諸氏が社會科學方面に於いて著名である。しかし、これらの諸氏は傾向から言へば自由主義者であり、社會主義的學說に對しては懷疑的である。

更に文學の方面に於ける義塾出身者の活動を見ると、出身者中の著名の文士としては、久保田万太郎、水上瀧太郎、三宅周太郎、南部修太郎、小島政二郎、北村小松、加島貫一、水木京太、久野豐彥、勝本清一郎等の諸氏がある。これらの人は、二三子を除いて、文學界の舊派に屬するか、あるひはその後活動を停止してゐることは衆知の通りである。文學界に新らしい境地を開拓して、尖端に立つと思はれる人はゐない。勝本清一郎氏がプロレタリア文學的評論をなせるほか、プロレタリア文學に屬する人達は皆無である。「戰旗」「文藝戰線」に屬する文士としても、筆者の知れるかぎり、一人もない。

かくのごとく出身者のうち、活動をしてゐる人達を一瞥すると、慶應義塾は、過去に於いては、あるひは現在に於いては、時代の文化に寄與する所大であつたが、この時代の轉換期に、尖端を切つて、新しい時代に向つて舊きものを打破して行く役目を完全に有してゐないことが明であらう。

## 七

次に現在の學生の方を一瞥しやう。がしかし、私はそれについては殘念ながら何の智識も持合せない。たゞ幸に、慶應義塾出身でありかつ、かつては慶應義塾に教鞭をとつてゐた經驗のある從つて義塾學生の生活をよく知つてゐると想像される勝本清一郎氏の「學生生活とその社會的背景」なる文章がある。（中央公論、昭和三年七月號所載）これは、慶應義塾の學生の傾向を我々局外者に知らして呉れる好箇の文獻である。その主要なる部分を左に摘記する。

「現在の慶應義塾の學生の間には、特に極左的なとか極右的なとかいふやうな積極性を持つた運動は甚だ微弱である。……大摑みに見てこの學校全體の空氣は、現代日本の資本家階級的支配に順應して

ゐる。――即ち帝國大學等と違つて所謂絶對主義な勢力が殆んどなく……直接的に現實のブルジョアジーに、交渉をもつてゐる事情がある。――從つてかういふ私立大學こそ、この現代で最も純粹にブルジョアジーの一手によつて支持されてゐる典型として考察に價ひする。

先づ慶應義塾とその支持階級を知るには、幼稚舍への入學兒童の家庭筋を認識すればよい。この頃幼稚舍へ行けば、新入學の兒童に附添つて來るその母親達の姿を澤山見る事が出來る。それらの若夫人達は大概女中を一人づつ御供に連れてゐて、そして毎日のやうに着物を取換へては學校の廊下に現れる。俳優菊五郎の子供等も新入學して自動車で毎日送り迎へされてゐるところから、そこで彼女達の間には次のやうな會話がまじへられる。「入學式の時には菊五郎も參つたさうで御座いますよ。」

我々はわけなく彼女達の背後にある階級的生活を把握することが出來る。尙幼稚舍の修身の課程を見れば、決して所謂忠君愛國主義の國定教科書は用ゐてゐない。ブルジョアジーの根本的な觀念上の武器である所の個人主義的倫理思想――「獨立自尊」の道德的感情を最初から專一に吹込む。それは日本ブルジョアジーの嘗つての觀念的分野に於ける攻勢的時代の面影を傳へてゐるものなのである。……

ブルジョアジーに屬す學生の大學生ぶりからして觀察をはじめる。彼等は大學に來る頃にはすでに自己の階級的位置を自覺してゐる。彼等は自分勝手に重役にとつて必要なことだけを學びはじめる。即ち他人を最も巧妙に頤使することを稽古しはじめるのである。自分自身で教場に出席するやうなことはなるたけしないやうになり、同級生又は他級生中の誰彼をして自分の代理に出席させ、又代理のノートをとらせる。かういふ助手を三四人かゝへておけば學業の取得は最も組織的に能率的に勞力せずして行はれ、十一時頃に起きて東洋軒あたりで氣取つてゆつくり食事でもしてゐれば、午前中の他人の勞作が自然と自分の手許に到着するやうになる。……

一方彼等の忠勤をぬきんでゐる「助手達」は必ずどの級にも見出されるものであつて、それらはその忠勤によつて補助金にありついたり書生に傭はれたり、その他卒業後の就職に心配しなくてもすむやうになる。……この連中の救ひ難い生活は、その主人と殆んど同じである。……

最後に一番大多數の中層階級的學生の生活態度を見やう。彼等も亦プリントを買つたり、苦學生にプリントの謄寫を賴んだりしてなるべく能率的に勉強してあとは矢張消費生活の方面を、たとへば運動とか、映畫とか、音樂とか、社交ダンスとか、銀ブラとか、その他あらゆる種類にわたるそれ／＼の文化的會合の組織をとほして、充實させやうとして餘念がない。即ち彼等は自分自身勝手に會社員になる爲めの學び方をすでに早く實行してゐるといふのである。

この事實の當否について、私は何も知らぬから全然責任を有たない。しかしかつては學生であり、また教鞭をとつたことのある勝本氏の文章であるから、事實と見るを至當とするであらふ。

この勝本氏の文章に現れた慶應義塾學生の姿は、模型的に資本家的乃至プチ・ブルヂョア的である。かゝるところから資本の陣營にせまる新興階級的の要素の醗酵を期待することは、それこそ木によりて魚を求むるに等しい。義塾には、教授を會長とする官許讀書會——社會科學研究會があるときいてゐる。しかし、それがどれ丈の仕事をなしうるやは疑問である。學校騒動、社會科學事件にからまる學生問題も、帝大とか早大に比べれば、殆んどないといつてよい。その意味で、この慶應義塾は、その方面で最も安全なる地帶である。

## 八

私は慶應義塾にとつて何の恩怨もない。また、この論は、塾員とか學生とかの個々を批判の對象としたのでもない。個々のうちには上にのべたものの例外をなすものもあることであらう。私は樂園としての教育機關としての慶應義塾を論じたにすぎない。

そこで、結論にいそぐ。

慶應義塾は、過去に於いて、乃ちその創業の時代に於いては、封建制度の反對物として勇敢にそれと闘爭し、日本資本主義の成立および發展に貢獻した。その文化史上の功績はみとめられなければならない。しかし、そのスローガンたりし資本主義が爛熟し、「文明開化」が持ち來された今日、現代のまゝの慶應義塾では、たゞ大任を果して滿足した形であつて、文化史上何等の意義もなくなつた。時代は一變しつつある。慶應義塾が更生するか、またはそのうちから、封建の末期にそれに反抗するものとして福澤諭吉氏が慶應義塾を打たてたやうに反動に抗する新らしい學校を立てるのでなければ、慶應義塾存立のレーゾン・デートルはない。今後も學生は增加するであらう。校舍は增築せられ、壯麗なるものとなるであらう。しかしそれは、文部省の統制にあまんずる學校屋としての發展にすぎないであらう。

ひそかにきく。明治元年上野の森に、官賊兩軍の銃火の響が喧しかりし折、福澤諭吉氏は靜に次の社會へのための學を講じつつあつたといふことである。神宮外苑の森に「都の西北」と「陸の王者」の聲が喧しくひびく今日、それらに眼もくれず冷靜に次の社會へのための學志を養なふ學生は、一萬一千三百一名の塾生中果して何人あるであらうか。

**正誤**　本誌十一月號大宅壯一氏執筆「早稻田大學論」中——三五頁一二行——「早稻田學生新聞」とあるは「早稻田大學新聞」の誤りなる旨正誤の申込がありました。依つて訂正いたします。

ゐる。——即ち帝國大學等と違つて所謂絶對主義な勢力が殆んどなく……直接的に現實のブルジョアジーに、交渉をもつてゐる事情がある。——從つてかういふ私立大學こそ、この現代で最も純粹にブルジョアジーの一手によつて支持されてゐる典型として考察に價ひする。

先づ慶應義塾とその支持階級を知るには、幼稚舎への入學兒童の家庭筋を認識すればよい。この頃幼稚舎へ行けば、新入學の兒童に附添つて來るその母親達の姿を澤山見る事が出來る。それらの若夫人達は大概女中を一人づつ御供に連れてゐて、そして毎日のやうに着物を取換へては學校の廊下に現れる。俳優菊五郎の子供等も新入學して自動車で毎日送り迎へされてゐるところから、そこで彼女達の間には次のやうな會話がまじへられる。「入學式の時には菊五郎も參つたさうで御座いますよ。」

我々はわけなく彼女達の背後にある階級的生活を把握することが出來る。御幼稚舎の修身の課程を見れば、決して所謂忠君愛國主義の國定教科書は用ゐてゐない。ブルジョアジーの根本的な觀念上の武器である所の個人主義的倫理思想——「獨立自尊」の道德的感情を最初から專一に吹込む。それは日本ブルジョアジーの嘗つての觀念的分野に於ける攻勢的時代の面影を傳へてゐるものなのである。……

ブルジョアジーに屬す學生の大學生ぶりからして觀察をはじめる。彼等は大學に來る頃にはすでに自己の階級的位置を自覺してゐる。彼等は自分勝手に重役にとつて必要なことだけを學びはじめる。即ち他人を最も巧妙に頤使することを稽古しはじめるのである。自分自身で教場に出席するやうなことはなるたけしないやうになり、同級生又は他級生中の誰彼をして自分の代理に出席させ、又代理のノートをもとらせる。かういふ助手を三四人かゝへておけば學業の取得は最も組織的に能率的に勞力せずして行はれ、十一時頃に起きて東京軒あたりで氣取つてゆつくり食事でもしてゐれば、午前中の他人の勞作が自然と自分の手許に到着するやうになる。……

一方彼等の忠勤をぬきんでゐる「助手達」は必ずどの級にも見出されるものであつて、それらはその忠勤によつて補助金にありついたり、書生に傭はれたり、その他卒業後の就職に心配しなくてもすむやうになる。……この連中の救ひ難い生活は、その主人と殆んど同じである。……

最後に一番大多數の中層階級的學生の生活態度を見やう。彼等も亦プリントを買つたり、苦學生にプリントの謄寫を頼んだりしてなるべく能率的に勉強してあとは矢張消費生活の方面を、たとへば運動とか、映畫とか、音樂とか、社交ダンスとか、銀ブラとか、その他あらゆる種類にわたるそれ〳〵の文化的會合の組織をとほして、充實させやうとして餘念がない。即ち彼等は自分自身勝手に會社員になる爲めの學び方をすでに早く實行してゐるといふのである。

この事實の當否について、私は何も知らぬから全然責任を有たない。しかしかつては學生であり、また教鞭をとつたことのある勝本氏の文章であるから、事實と見るを至當とするであらふ。

この勝本氏の文章に現れた慶應義塾學生の姿は、模型的に資本家的乃至プチ・ブルヂョア的である。かゝるところから資本の陣營にせまる新興階級的の要素の醱酵を期待することは、それこそ木によりて魚を求むるに等しい。義塾には、教授を會長とする官許讀書會――社會科學研究會があるときいてゐる。しかし、それがどれ丈の仕事をなしうるやは疑問である。學校騷動、社會科學事件にからまる學生問題も、帝大とか早大に比べれば、殆んどないといつてよい。その意味で、この慶應義塾は、その方面で最も安全なる地帶である。

## 八

私は慶應義塾にとつて何の恩怨もない。また、この論は、塾員とか學生とかの個々を批判の對象としたのでもない。個々のうちには上にのべたものの例外をなすものもあることであらう。私は集團としての教育機關としての慶應義塾を論じたにすぎない。

そこで、結論にいそぐ。

慶應義塾は、過去に於いて、乃ちその創刱の時代に於いては、封建制度の反對物として勇敢にそれと闘爭し、日本資本主義の成立および發展に貢獻した。その文化史上の功績はみとめられなければならない。しかし、そのスローガンたりし資本主義が圓熟し、「文明開化」が持ち來された今日、現代のまゝの慶應義塾では、たゞ大任を果して滿足した形であつて、文化史上何等の意義もなくなつた。時代は一變しつつある。慶應義塾が更生するか、またはそのうちから、封建の末期にそれに反抗するものとして福澤諭吉氏が慶應義塾を打たてたやうに反動に抗する新らしい學校を立てるのでなければ、慶應義塾存立のレーゾン・デートルはない。今後も學生は増加するであらう。校舍は増築せられ、壯麗なるものとなるであらう。しかしそれは、文部省の統制にあまんずる學校屋としての發展にすぎないであらう。

ひそかにきく。明治元年上野の森に、官賊兩軍の銃火の響が喧しかりし折、福澤諭吉氏は靜に次の社會へのための學を講じつつあつたといふことである。神宮外苑の森に「都の西北」と「陸の王者」の聲が喧しくひびく今日、それらに眼もくれず冷靜に次の社會へのための學志を養なふ學生は、一萬一千三百一名の塾生中果して何人あるであらうか。

**正誤**　本誌十一月號大宅壯一氏執筆「早稻田大學論」中――三五頁一二行――「早稻田學生新聞」とあるは「早稻田大學新聞」の誤りなる旨正誤の申込がありました。依つて訂正いたします。

ゐる。——即ち帝國大學等と違つて所謂絶對主義な勢力が殆んどなく……直接的に現實のブルジョアジーに、交渉をもつてゐる事情がある。——從つてかういふ私立大學こそ、この現代で最も純粹にブルジョアジーの一手によつて支持されてゐる典型として考察に價ひする。

先づ慶應義塾とその支持階級を知るには、幼稚舍への入學兒童の家庭筋を認識すればよい。この頃幼稚舍へ行けば、新入學の兒童に附添つて來るその母親達の姿を澤山見る事が出來る。それらの若夫人達は大概女中を一人づつ御供に連れてゐて、そして毎日のやうに着物を取換へては學校の廊下に現れる。俳優菊五郎の子供等も新入學して自動車で毎日送り迎へされてゐるところから、そこで彼女達の間には次のやうな會話がまじへられる。「入學式の時には菊五郎も參つたさうで御座いますよ。」

我々はわけなく彼女達の背後にある階級的生活を把握することが出來る。尙幼稚舍の修身の課程を見れば、決して所謂忠君愛國主義の國定教科書は用ゐてゐない。ブルジョアジーの根本的な觀念上の武器である所の個人主義的倫理思想——「獨立自尊」の道德的感情を最初から專一に吹込む。それは日本ブルジョアジーの曾つての觀念的分野に於ける攻勢的時代の面影を傳へてゐるものなのである。……

ブルジョアジーに屬す學生の大學生ぶりからして觀察をはじめる。彼等は大學に來る頃にはすでに自己の階級的位置を自覺してゐる。彼等は自分勝手に重役にとつて必要なことだけを學びはじめる。即ち他人を最も巧妙に驅使することを稽古しはじめるのである。自分自身で教場に出席するやうなことはなるたけしないやうになり、同級生又は他級生中の誰彼をして自分の代理に出席させ、又代理のノートをもとらせる。かういふ助手を三四人かゝへておけば學業の取得は最も組織的に能率的に勞力せずして行はれ、十一時頃に起きて東京府あたりで氣取つてゆつくり食事でもしてゐれば、午前中の他人の勞作が自然と自分の手許に到着するやうになる。……

一方彼等の忠勤をぬきんでてゐる「助手達」は必ずどの級にも見出されるものであつて、それらはその忠勤によつて補助金にありついたり書生に傭はれたり、その他卒業後の就職に心配しなくてもすむやうになる。……この連中の救ひ難い生活は、その主人と殆んど同じである。……

最後に一番大多數の中層階級的學生の生活態度を見やう。彼等も亦プリントを買つたり、苦學生にプリントの謄寫を頼んだりしてなるべく能率的に勉強してあとは矢張消費生活の方面を、たとへば運動とか、映畫とか、音樂とか、社交ダンスとか、銀ブラとか、その他あらゆる種類にわたるそれ〴〵の文化的會合の組織をとほして、充實させやうとして餘念がない。即ち彼等は自分自身勝手に會社員になるための學び方をすでに早く實行してゐるといふのである。

この事實の當否について、私は何も知らぬから全然責任を有たない。しかしかつては學生であり、また教鞭をとつたことのある勝本氏の文章であるから、事實と見るを至當とするであらふ。

この勝本氏の文章に現れた慶應義塾學生の姿は、模型的に資本家的乃至プチ・ブルヂョア的である。かゝるところから資本の陣營にせまる新興階級的の要素の醱酵を期待することは、それこそ木によりて魚を求むるに等しい。義塾には、教授を會長とする官許讀書會——社會科學研究會があるときいてゐる。しかし、それがどれ丈の仕事をなしうるやは疑問である。學校騷動、社會科學事件にからまる學生問題も、帝大とか早大に比べれば、殆んどないといつてよい。その意味で、この慶應義塾は、その方面で最も安全なる地帶である。

## 八

私は慶應義塾にとつて何の恩怨もない。また、この論は、塾員とか學生とかの個々を批判の對象としたのでもない。個々のうちには上にのべたものの例外をなすものもあることであらう。私は一團としての教育機關としての慶應義塾を論じたにすぎない。

そこで、結論にいそぐ。

慶應義塾は、過去に於いて、乃ちその創業の時代に於いては、封建制度の反對物として勇敢にそれと鬪爭し、日本資本主義の成立および發展に貢献した。その文化史上の功績はみとめられなければならない。しかし、そのスローガンたりし資本主義が圓熟し、「文明開化」が持ち來された今日、現代のまゝの慶應義塾では、たゞ大任を果して滿足した形であつて、文化史上何等の意義もなくなつた。時代は一變しつつある。慶應義塾が更生するか、またはそのうちから、封建の末期にそれに反抗するものとして福澤諭吉氏が慶應義塾を打たてたやうに反動に抗する新らしい學校を立てるのでなければ、慶應義塾存立のレーゾン・デートルはない。今後も學生は增加するであらう。校舍は增築せられ、壯麗なるものとなるであらう。しかしそれは、文部省の統制にあまんずる學校屋としての發展にすぎないであらう。

ひそかにきく。明治元年上野の森に、官賊兩軍の銃火の聲が喧しかりし折、福澤諭吉氏は靜に次の社會へのための學を講じつつあつたといふことである。神宮外苑の森に、「都の西北」と「陸の王者」の聲が喧しくひびく今日、それらに眼もくれず冷靜に次の社會へのための學志を養なふ學生は、一萬一千三百一名の塾生中果して何人あるであらうか。

**正誤**　本誌十一月號大宅壯一氏執筆「早稻田大學論」中——三五頁一二行——「早稻田學生新聞」とあるは「早稻田大學新聞」の誤りなる旨正誤の申込がありました。依つて訂正いたします。

ゐる。──即ち帝國大學等と違つて所謂絶對主義な勢力が殆んどなく……直接的に現實のブルジョアジーに、交渉をもつてゐる事情がある。──從つてかういふ私立大學こそ、この現代で最も純粹にブルジョアジーの一手によつて支持されてゐる典型として考察に價ひする。

先づ慶應義塾とその支持階級を知るには、幼稚舍への入學兒童の家庭筋を認識すればよい。この頃幼稚舍へ行けば、新入學の兒童に附添つて來るその母親達の姿を澤山見る事が出來る。それらの若夫人達は大概女中を一人づつ御供に連れてゐて、そして毎日のやうに着物を取換へては學校の廊下に現れる。俳優菊五郎の子供等も新入學して自動車で毎日送り迎へされてゐるところから、そこで彼女達の間には次のやうな會話がまじへられる。「入學式の時には菊五郎も參つたさうで御座いますよ。」

我々はわけなく彼女達の背後にある階級的生活を把握することが出來る。御幼稚舍の修身の課程を見れば、決して所謂忠君愛國主義の國定教科書は用ゐてゐない。ブルジョアジーの根本的な觀念上の武器である所の個人主義的倫理思想──「獨立自尊」の道德的感情を最初から專一に吹込む。それは日本ブルジョアジーの嘗つての觀念的分野に於ける攻勢的時代の面影を傳へてゐるものなのである。……

ブルジョアジーに屬す學生の大學生ぶりからして觀察をはじめる。彼等は大學に來る頃にはすでに自己の階級的位置を自覺してゐる。彼等は自分勝手に重役にとつて必要なことだけを學びはじめる。即ち他人を最も巧妙に驅使することを稽古しはじめるのである。自分自身で教場に出席するやうなことはなるたけしないやうになり、同級生又は他級生中の誰彼をして自分の代理に出席させ、又代理のノートをもとらせる。かういふ助手を三四人かゝへておけば學業の取得は、最も組織的に能率的に勞力せずして行はれ、十一時頃に起きて東洋軒あたりで氣取つてゆつくり食事でもしてゐれば、午前中の他人の勞作が自然と自分の手許に到着するやうになる。……

一方彼等の忠勤をぬきんでゐる「助手達」は必ずどの級にも見出されるものであつて、それらはその忠勤によつて補助金にありついたり書生に傭はれたり、その他卒業後の就職に心配しなくてもすむやうになる。……この連中の救ひ難い生活は、その主人と殆んど同じである。……

最後に一番大多數の中層階級的學生の生活態度を見やう。彼等も亦プリントを買つたり、苦學生にプリントの謄寫を頼んだりしてなるべく能率的に勉強してあとは矢張消費生活の方面を、たとへば運動とか、映畫とか、音樂とか、社交ダンスとか、銀ブラとか、その他あらゆる種類にわたるそれぞれの文化的會合の組織をとほして、充實させやうとして餘念がない。即ち彼等は自分自身勝手に會社員になる爲めの學び方をすでに早く實行してゐるといふのである。

この事實の當否について、私は何も知らぬから全然責任を有たない。しかしかつては學生であり、また教鞭をとつたことのある勝本氏の文章であるから、事實と見るを至當とするであらふ。

この勝本氏の文章に現れた慶應義塾學生の姿は、模型的に資本家的乃至プチ・ブルヂョア的である。かゝるところから資本の陣營にせまる新興階級的の要素の醱酵を期待することは、それこそ木によりて魚を求むるに等しい。義塾には、教授を會長とする官許讀書會——社會科學研究會があるときいてゐる。しかし、それがどれ丈の仕事をなしうるやは疑問である。學校騷動、社會科學事件にからまる學生問題も、帝大とか早大に比べれば、殆んどないといつてよい。その意味で、この慶應義塾は、その方面で最も安全なる地帶である。

## 八

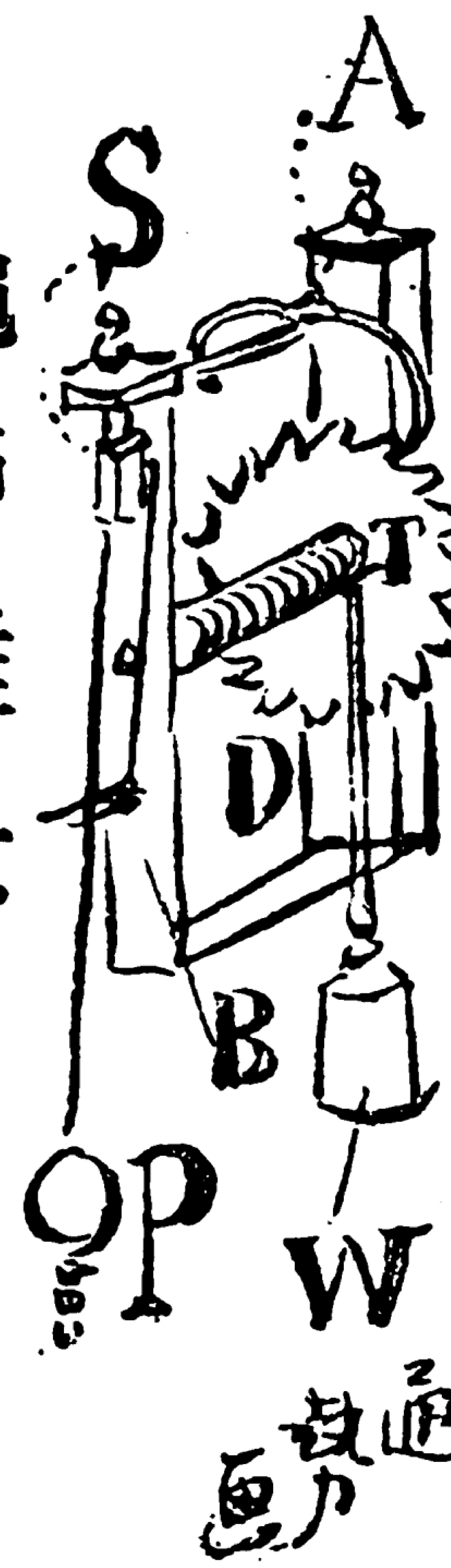
私は慶應義塾にとつて何の恩怨もない。また、この論は、塾員とか學生とかの個々を批判の對象としたのでもない。個々のうちには上にのべたものの例外をなすものもあることであらう。私は樂園としての教育機關としての慶應義塾を論じたにすぎない。

そこで、結論にいそぐ。

慶應義塾は、過去に於いて、乃ちその創業の時代に於いては、封建制度の反對物として勇敢にそれと鬪爭し、日本資本主義の成立および發展に貢献した。その文化史上の功績はみとめられなければならない。しかし、そのスローガンたりし資本主義が圓熟し、「文明開化」が持ち來された今日、現代のまゝの慶應義塾では、たゞ大任を果して滿足した形であつて、文化史上何等の意義もなくなつた。時代は一變しつつある。慶應義塾が更生するか、またはそのうちから、封建の末期にそれに反抗するものとして福澤諭吉氏が慶應義塾を打たてたやうに反動に抗する新らしい學校を立てるのでなければ、慶應義塾存立のレーゾン・デートルはない。今後も學生は增加するであらう。校舍は增築せられ、壯麗なるものとなるであらう。しかしそれは、文部省の統制にあまんずる學校屋としての發展にすぎないであらう。

ひそかにきく。明治元年上野の森に、官賊兩軍の銃火の響が喧しかりし折、福澤諭吉氏は靜に次の社會へのための學を講じつつあつたといふことである。神宮外苑の森に、「都の西北」と「陸の王者」の聲が喧しくひびく今日、それらに眼もくれず冷靜に次の社會へのための學を志を養なふ學生は、一萬一千三百一名の塾生中果して何人あるであらうか。

**正誤**　本誌十一月號大宅壯一氏執筆「早稻田大學論」中——三五頁一二行——「早稻田學生新聞」とあるは「早稻田大學新聞」の誤りなる旨正誤の申込がありました。依つて訂正いたします。




# 龜戸雜景

中本たか子

漸く闇の底から午前五時を、各工場のサイレンが一齊に吹き上げる。と、續いて、街路に足音や車輪の軋しむ音、物賣の呼び聲などが流れ始めて來る。高く低く、強く弱く、それ等の音響は心よくとけあひ混り合つて、一つのハーモニイを持つた吹奏樂となつて緩やかに闇を押し除け、生活の謳歌となつて天地にこもつて來る。

曉の色が全く透明になると、各工場から廻轉し始めた機械の動力が大地を搖つてひゞいて來る。やがて、モーターに合せて金屬の相摩擦する音、總身がぴりぴりする鐵を裂く音、甲高い響きで腦髓に打込む鐵板を叩く音、さては、明快に汽笛を吹き上げて通過する總武線の汽車の進行等が、一日のテンポの基調となつて、生活の謳歌を統制して來る。それ等が生活の歡喜と同時に憂鬱を、鑛物的な臭氣と共に軌條の如く人々の頭にくり擴げる。

空は灰色に染つて、營々と意志する力を或者に押へつけられ、林立する煙突から吐き出される黒煙をのみ込んで凝結してゐる。空間には、降り灑ぐ、煤煙、煤煙、煤煙……。

午後四時ともなれば、一日中雲を押し破るに努めた太陽は、やつとその光輝ある姿を西空の裾にかゝげる。巨大な煙突がその資本の威大さを象徴するごとく突立つてゐる向うに、蹴り上げた赤いフットボールのやうな太陽が、黒煙にいぶされながら奈落へと急ぐ。――一日中の最も華やかな瞬間も、須臾にして、九尺二間の裏窓へ反射した陽映から先に、徐々にその光輝を失つて行く。

太陽を全く燻し落してしまへば、黒煙も次第に密度を薄めて來る。と、工場内に滿ちてゐた金屬的な騒音のすべてが、サイレンと共に一齊に息の根をひきとつてしまふ。

家々からは秋刀魚を燒く臭が高く昇つて來る。夕靄がしめやかに、暮色に包まれて路次の奥をかすめて來る。わい〱群り遊ぶ我等の共が、父親を迎へに路次の角へ走つて行く。彼等は高らかに唱つて行く。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、……

中には五つ位の子供もゐて、片ことまじりに抑揚もなく吟んで行く。次第に濃くなつてくる夕闇は、彼等の營養不良な黄色い顔の陰影や、だらりと濃く垂れた二本の鼻汁をも塗り潰し、家々にともつた灯

をせめてもの最大限に浮き立たし、この時たけなつかしい土着の風景に一まつの生氣を與へる。路次の角へ出た子供達はいち早く彼等の嗅覺を奪つた、いゝやき屋や煮賣り屋の前に集つて、指を啣へてゐる。

菜葉服の襟を立て、油煙で煤けた頰を包み、工場から歸つて來る勞働者の長い群が一しきり街路を埋める。彼等は深い呼吸をし、いらいらしく唾を吐きすて、言葉少なに歩いて行く。

海藻のやうに裂けはてた着物を纏つた蓬髮の老爺が、探してゐた塵箱をすて、闇から出て街路の光にその正體をさらすと、忽ち闇へかくれて行つた。

本所區につゞいて、城東電車を縱貫させてゐる龜戸町は、北の吾嬬町、南の大島町の間に介在して、それ等の町と共に重要なる南葛の工業地帶となつてゐる。この町にある工場の主なるものは、東洋モスリン、東京モスリン、日清紡績、日本化學、日立モートル、ライジングサン石油、大和スレート等であり、その他に金屬、藥品、硝子、染料等のマチ工場（小いからこの稱あり）が、無數に散在してゐる。龜戸驛から十三間通りを眞直ぐに北へ向つて進むと、吾嬬町との間にかかる福神橋の袂に出る。それから右手、北十間川に添つて行けば、之等のマチ工場が錆茶けた亞鉛板をつぎはぎにした塀をめぐらし、雜草の生えかけてゐるのも平氣に、門を並べてゐるのを發見するであらう。

二十度位傾きかゝつた細い煙突を針金で支へて、老後家の細腕に縋つてゐるやうな工場、窓硝子の毀れた工場、そんなのでも、奥から勇ましく機械の音がひゞいて來る。製品を運搬する人夫のかけごゑが洩る。それ等の響きは、人間が意味をなさうとして唇から發する詞よりも、より的確に生活の意義をつたへる。それは、生活を全的に默認させるほどのものではないまでも、誤謬や錯覺の多い言葉ほどに人の心を萎びさせはしない。まして大工場となれば、そこに絶大な感情と思想が、跳躍し軋轢してゐる。

龜戸町七丁目「モスリン裏」停留所に立つて、錦糸町行きの電車を待つ。煤煙で萎縮してゐる若い街路樹が、いた〱しく痩せてゐる。突然に裾から吹き上げて來た旋風が、埃を舞はせて立昇ると、街路樹の黃色い葉が一枚、秋の深さを知らせて落ちる。その向うから黑い上衣に黑い袴を穿いた若い女が、三々五々、手に何か包みを持つて、脛骨に出した裸の足に赤い鼻緒の下駄をつゝかけて歩いて來る。あれが東洋モスリンの女工達だ。血の氣のない黃色い皮膚、陰影の淺い顏、鈍く瞠つた眼。彼女等は何か低く話して、薄い唇に僅かな微笑を漂はせる。停留所に集つた人たかりの方へす早く眼を走らせたが、忽ち、彼女等は視線を落し、首垂れてそこを通り抜ける。そして、停留所の後の小道を工場の方へ行く。

日本資本主義の第三期的傾向を示す主要原因の一たる、販賣市場の獨占化と原料供給の困難とから、洋モスは工場閉鎖の憂き目に遭遇

た。それになやまされた從業員達は、工場閉鎖の對策を講ずる爲に從業員幹部會を開き、或は町民達と結束するなど、彼等は必死となつて戰つて來た。

か細い少女等の腕に、飽くことなく、押し寄せて來る產業合理化の波。勞働の强化。深夜業廢止後の纖維工業界に於ける增產に注目せよ、現代では、數學が最も感情的である。

――一人一月の能率增加は一割八分。月收額は三分增。更に、九月中の綿糸生產高は有史以來の巨額にして、約廿萬梱である。從つて、モスリン界も、之と步調を同じくしてゐるのは云ふまでもない。

街を步いてゐると到る所の電柱や壁などに、こんな傳單の貼りつけてあるのを見つける。

「家賃三割値下ゲ要求。不當家賃ノ不拂贊成。全國借家人同盟。」

「東洋モスリン工場閉鎖絕對反對。資本家同志ノ喧嘩デ勞働者の口ヲ乾スナ。小賣商人ノ生活ヲ奪フナ。」等々……。

これ等の傳單は、紙の肌がもはや黃色くなり、謄寫版のインクもうすれて、裾を裂かれ、引剝かされ乍ら、尙も執拗にくつゝいてゐる。

こゝの住民の生活態度は、丁度その傳單と同じだ。山の手の閑靜な生活に馴れてゐた者がこゝに足を踏み入れたなら、いかばかりか激烈に軋轢してる二つの生活層が對立し、その各々の逼迫せる生活にたゞ眼を瞠るのみであらう。小賣商人は一錢でも多くかすり取らうとする。買手は一錢でも多く負かさうとする（但し、物價は略新宿

だ）夕方の市場へ行くと、髮をひつゝめてぐるぐる巻にした長屋の女房連が、押し合ふ人波を瘦せ尖つた肩で切り拔け、魚屋の前で、野菜屋の前で、或は煮賣り屋の前で、勇しく値段のかけ合を始める。相手の商人達も負けてはゐない。彼等の常識法たる恐しく口早な說明で商品の評價を數十倍に高める。うつかり、その光景を立停つて見てゐると、瘦せ細つた彼女等の長い爪で、ひつかゝれるかも知れない。

從つて、小賣商人等のイデオロギイも獨自なものが生じて來る。彼等は、、、、、、、、、、、、、平常は勞働者と利害が相反する存在である。彼等は資本家の御用をつとめ、資本家と結んで工場內に販路を獲得してゐる。それ等になると、市價の四割五分といふ暴利を貪る。

女工を相手の吳服屋は、寄宿舍にゐる彼女等へ賣りつけるために、先づ女工に絕對權力を持つ部屋長に一割位の利潤を分けて、强制的に女工へ商品を押しつける。女工達はそれを知つてか知らないでか、月末拂ひといふ一寸融通の利いたやり方につい心を動かして、五割位は高い小商人の吳服に手を伸す。生產部面に於て賃銀を搾取された彼女達は、更に消費部面に於て、そこに構へてゐる狼の舌で骨の髓までしやぶられ、吸ひ盡されて行くのだ。

此處の商人達は、その理由の如何を問はず、握つた金は一分でも多く手放さないでゐようと努めてゐる。それに、彼等は概して、あま

り現金を握つてゐたいようだ。時々、不正手形を發した人の話などをきく。

又、商人相互間の競爭も激甚である。殊に新聞配達となると全く凄まじい。この町に既に直配所があるのに、隣の大島町からやつて來て、僅か一圓か八十錢の購讀費のために、毎日々々、哀訴し、嘆願し、挑み合ふ。

龜戸町と大島町との間に堅川が挾まれ、その兩岸に並んだ長屋が、その界隈で最も危い存在だらう。原油のやうに黒々と濁み澱んだ河水と床の高さを比べた家が、九尺位の幅を持つた數十軒つゞきの長屋となつて河岸を埋めてゐる。錆びた亞鉛板をつぎはぎにした屋根、傾いた柱、そして障子などは殆ど破れはてゝゐる。食物の饐えたやうな河水の臭が胸を刺る上に、岸には排泄物を運搬する御船が多く横づけてある。

でも、そんな家々にも人は住んでゐるのだ。屋根の上高く、ボロ、半纏、菜葉服等の洗濯物がかゝげられてゐる。まるで降伏旗のやうに。

堅川の上にかけた木橋「中ノ橋」を渡つて、大島町に入る。道を眞直ぐに少し行つて左手に、薄暗い長屋が立並んだ路次が幾つもある。その二つ目か三つ目かの道の惡い路次を折れて稍行くと一寸した空地がある。震撼させた、かの、、、、のあつたのは、實は龜戸ではなくて、この邊である。（削除）そのためか、そこにはまだ家も立たないで、空地のまゝで當時の情景を暗默に語つてゐる。堅川が原油に似てゐるのは、當時の夥しい人間の脂肪や石油等が地に滲み込んで、浸潤して來る水に誘ひ出されるのではなからうか。

堅川の夕景に向つて中ノ橋へ佇めば、林立する煙突から横殴りに吹きつける黒煙に面を拂はれつゝ、河面から漂ひ來る死體の臭ひを感ずる。錯覺か執念か、慄然として襟筋に冷氣を覺える。

城東電車を「五ノ橋」で乘り捨てゝ「十三間通り」を行く。宵。ガードをくゞれば、秋風に瘦せ細つた街路樹が形ばかりの列を舖道の兩側に見せ、商店の名入りの照明燈の弱い光を壓して、鮮かに店を張つた家々から迸り出る光が街路に交錯してゐる。街路樹の根に並んだ夜店をあまり振りかへらうともせず、うそ寒い夕風に唇を噤んだ人が肩を相摩して舖道に縞を織る。尻の裂けたすーパー、背をまげ、[illegible]高にズボンを穿いた職工さん、顔を白く塗つた娘と連れ添ふインバネス……。

十三間通りの中央、アスファルトの車道を、自動車は、ヘッドライトで威嚇しながら、滑らかな車體で文明の後塵を人々に蹴りかけて走る。

こゝは龜戸の銀座で、感じから云へば横濱の伊勢佐木町に似てゐる。併し、伊勢佐木町よりも、こちらの方が道幅が廣く、屋並が低

く、且感じが頗る散慢だ。彼の街の體臭には異人のワキガが交るが、この通りには機械油と垢の臭が擴つてゐる。
　飲食店の紅殻色の暖簾や藍色の暖簾を潜つて、半纏の男が出入すると、その隣のカフエーの窓から、甲高い女の笑聲と共にレコードのジヤズが吐き出されて來る。活動館からは、サムライの繪看板が微笑みかけ、その前の赤い幟がへんぽんと靡る。勞働服や半綿毛織のレディ・メエドが首を吊つてゐる店が、特に多く眼につく。が、哀れ！それ等は、失業者の姿にも似て寒々と秋風に曝されてゐる。
　道が丁字形になつた所で左に折れゝば、天神通りとなる。藤で有名な龜戸天神は、この通りの右側にある。それを行き過ぎて、橋の袂から右側の道を河添ひに行く。濁み澱んだ河水は、此處でも原油のやうに黒々とたまり、腐つた惡臭を放ち乍ら對岸の巨大な工場の姿を映してゐる。それ等の工場の山形の屋根の上には、遠い大都の赫灼たる反映が赤く夜空を染めてゐる。
　光の乏しい道を肩をすくめて稍行けば、取り毀した邸らしい空地の角で、湯氣の中から醤油の香を散らす一個の屋臺店を發見する。そこから右手に下る細い路次がある。立停つてその方を眺めると、犬の列のやうに默々とその路次をうろつき廻る男の列を見る。
　その方へ下りて行くと、一間許りの路を挾んで、新築らしい白木肌の格子窓付きの家が、二間位の間口を持つて、數十軒長屋作りで兩側に對峙してゐる。こいつは壯觀だ。併し、この路次に入るとすぐ、じめじめした陰性の空氣を感じる。十三間通りに金屬的なひゞきがあるなら、此處には慥かに隱花植物的な幻想が落ちてゐる。
　開け放した玄關の云ひ譯ばかりの土間に足を踏み入れるまでもなく、既に戸口から、障子の中腹の摺硝子へ、程よく開けた間隔に眉と眼を嵌めたペツピンを撰擇することが出來る。（削除）これはデモか、それともラツシユ・アワアか。（削除）――性的失業者の群が、潮のやうにこゝへ押し寄せてゐる。（削除）その商品價格を上下してゐるのだ。この頃の時價、、、！
　こゝへ集つた男達の中で、パーセンテージの高位を占めるものは洋服姿だ。それから店員風な和服。それから稀に菜葉服。
「えい、、、、、、とは高いや！」
と云つて、鳥打帽の男が飛び出すと、その隣では、黄色い聲を出す耳かくしの女が、檜の板戸を叩いて、馴染らしい男の名を呼んで顏をかくした。その隣の硝子には今一枚の硝子を嵌めて見えなくしてある。（削除）次の家の硝子には日本髪の顏が映つてる。
「こいつ、恐しい婆だ！」
　やさ姿の和服が、叫びつゝ飛び出した。女達はみんなおそろしく厚化粧だ。その故に、彼女等の顏は更に冷く化石し、生氣を失つて白けてゐる。これは全く、陰性の靜物だ！
　路次を行き詰ると、更に右へ左へ道が折れ、そこにも同様な屋並が勇しく整列してゐる。女連れの男が群集の中に交つて歩く。女が物珍

しげに家の中を覗くと、忽ち、激しい一喝が降つて來る。

「縁起でもない、女なんか出て行け！」

その女の連れになつた男が、這入つて交渉すると、女達はぴしやりと窓を閉めてしまふ。敏感な彼女達は、この男の遊戯的なひやかしを、見事に拒絶するのだ。

こゝで、彼女等は市場價格、、の中の七割位を女將に搾られるときく。彼女等を、、の十字軍として、此處に追ひやつたのは誰か。將來、彼女等の解放はその最後に解決される運命ではなからうか。

表通りへ出ると、「婦人救濟會」といふ看板の出てゐる家がある。中を覗くと、頭の禿げた赭ら顔の男が、鷲の爪のやうな鼻先に老眼鏡をひつかけて、帳簿をめくつてゐる。彼は表の看板の蔭で、病毒で體が朽ちた彼女等――陰性の靜物等から、更に最後の血の一滴をまで搾りあげるのだ。

東洋モスリンの向う側に「モスリン横町」と云つて北へ伸びた通りがある。スレートを敷いた表通りから這入ると、既に、眞黒な土がじめ／＼としてゐて、物の腐つた臭が漂つてゐる。これは、この通り一體が沼地であるために、沼の濕氣や惡臭か、午後は殊更につよく立昇る。夕刻になれば夥しい蚊の群が唸りながら襲つて來る、もはや十月末といふのに。

入口に近く、モスリン聯盟湯がある。一回三錢で、夕方ふの混みあ時はまさに「里芋を洗ふやうだ。」通りに面して汚い小店が身を狭めて並んでゐる間に、洋モス從業員組合、全國借家人同盟支部等がある。これへ通りの裏には、傾きかけ或は朽ちかけた長屋が立並んでゐる。住む者は主として、洋モスへ出る職工達及びその家族達だ。

右手の奥に「勞働女塾」と云つて、洋モスの女工を集めて、教育する所がある。この女塾は、織本貞代氏が獨りで經營し、指導して行かれつゝあるのだ。一體にこの町の織物勞働者は階級意識が非常に低く(之は昨年、組合のダラ幹が組合費を持合で費消したゝめに反動派が勢力を占めた爲) 從つて女工達もその状態から免れ得ない。この女塾では主として裁縫を授け、一週一日學科として勞働婦人當面の問題及び政治經濟の基本問題を研究させてゐる。集つて來る女工達はかなりしつかりしてゐる。今日の女學校教育の名目的存在を顏色なからしむる日もあまり遠くない。

このモスリン横町で米穀薪炭商をしてゐる森忠さんといふ四十前後の威勢の好い人がゐる。長屋相手の商賣の常として、あまり捗々しく米代の上げのとれない時、或は失業して困つてゐる者にはどし／＼米炭を與へる義俠肌だ。この人、表面は笑つてゐるが、腹の中には尖銳なイデオロギイを締め込み、そして又熱心な「改造」の讀者である。

勞働の女が街を歩いてゐる、じみな黒いセルを着て、木綿の羽織を着て。(この種の住民は、この町としては非常に珍しい) 濁み澱んだ川

べりに、古いブリキや亜鉛屑や真鍮などを積んだ車をひき捨てた老爺が膝を抱いてゐる。女はそこへ近づいて腰をかゞめた。ボロを着て手拭を被つた老爺の手足や顔などに黒々とたまつてゐる垢を眺めながら。

「こんな商賣をして、一日に幾ら儲るの？」

老爺は、鰐皮のやうにキメの荒い手の甲で眼脂をこすつて、不審げに女を眺めてから、

「ま、一日一圓だね。」

「それで、喰つて行けるの。」

「行けるとも。四人の孫を養つてゐなけりや、今日五百や千の金を持つてるがな。」

「どこに住んでますか、をぢさん。」

「へえ、住居かね。わつちやカサイ川といつて、吾嬬町の向うの方へ住んでまさあ。そこには立派な木賃宿があつて、一日二十錢出せば、蒲團も借して泊めて呉れるよ。小學校の先生もゐるよ。そこにゐるのはみんな心がけの好い人間許りだ。みんなよく働いて、好い賃銀をとつて來る職工さん許りだ。朝鮮人はひどく嫌はれて、ゐないよ。」

「をぢさんは幾つ？」

「これで八十二だよ。誰でも、六十位にしか見ねえかな、へへへへ………」

指貫の破れてゐる手袋を嵌めた手で、老爺は顔をつるりと撫でた。

断髪の女は、老爺の日に焼けた皮膚に浮き出てゐる脂肪をつくづく見てやをら腰をあげた。

「さようなら、をぢさん。」

「さようなら。どつこい、俺も行くべい。」

彼も立上つて、古金を積んだ車をひいて、河べりの道をぎくしやくと女と反對の方へ行き出した。濁み澱んだ河には、舳の朽ち落ちた和船があつて、その上に子供の衣服が乾してある。老爺の車をひいて行く姿は、その船と岸との間の河面に歪み乍ら長く映つた。

# 政友・民政の選擧陣

阿部眞之助

帝國議會の解散は颱風の一種だ。氣まぐれな低氣壓は道草を食ふことがある。一路東京方面へ急いでゐると思へば途中でヒョイと向きを變へて有耶無耶になることもある。若槻が三黨首妥協でひどく天氣豫報を狂はせた例から見ても、來議會は必ずかうなる、と言ひ切つて仕舞ふのは少し危險に思はれる。が大凡の見當は付く。

政友會が過半數を占めてゐる。それを敵に廻はす內閣の行く手には、妥協か、解散か、それとも裏道へ出て政友會を切り崩しに掛かるか、道は三つに一つしかない。

ところが妥協では若槻がサン〴〵に味噌をつけてゐる。彼は三黨首妥協によつてどうやら議會を切り拔けた代りにすつかり弱腰を見透かされて仕舞つた。若槻內閣の沒落は三黨首妥協に對する天罰だと思はれた位である。

しかも若槻は政界の主流から離れた今日に至るまでなほ多少はその妥協に祟られてゐる事實から見て、妥協といふ道は完全に試驗濟みである。又さういふ軟派的の遣り口は濱口の柄でもない。

裏道はどうか。大浦兼武の古事を引き合ひに出すまでもなく近い所で田中內閣が『締切り』騷ぎを演じて醜を天下に曝らした記憶は未だ生々しい。議員買收、切り崩しといふやうな邪道は官僚內閣と一緒に姿を消した筈である。曲りなりにせよ普選が布かれ、憲政の常道が開通しやうといふ今日、そんな邪道を通れるものかどうか、考へるだけ無駄である。

そこで妥協の道は通行止め、切り崩しは廢道と決まれば、殘るのはメーンストリート一本だ。解散は避けられない。颱風はアスファルト道路に添うて來る、といふ見當である。

○

併し、少々怪しげな雲も滿更見えないでは無い。現にあちらでコソコソこちらでコソコソと解散恐怖病者が動いてゐる。

代議士は解散を恐れる。なぜか。言ふまでもない、選擧に金が要るからだ。當選するのに必要な運動費は一人前約四五萬圓といふ處が相場になつてゐる。一番金を使はない無產黨の議員でもみんな一萬圓內

外の運動費を使つたさうだ。多い所となると例へば秋田縣では『十五萬圓以上當選確實、八萬圓以下落選確實』と言はれる。それだけ莫大な金を出して買ひ入れた品を臺無しにして仕舞ふのが解散である。

犬養は『いま解散を希望してゐるのは安達と無産黨だけだ』と言つたが、安達のことはしばらく別として、無産黨の議員だつて一人々々の胸を叩いて見たらどんな音を出すか知れたものではない。

解散、そして總選擧となればすぐ運動費を作らねばならぬ。既成政黨の公認候補者は大てい一萬圓から二萬圓位の公認料といふものを貰ふにしても、それだけではとても足りない。いゝ親分でも附いてゐれば別だが、大ていは無理な工面をせにやならぬ。しかも昨今は不況時代、緊縮時代、疑獄時代と來てゐるからよけいに苦しい。それでも、首尾よく再選されゝばまだ結構だが、落選でもした日には目も當てられぬ勘定になる。

だから解散回避運動はなか／＼深刻だ。おもて向きに出來ない運動だから人目にはつかないが裏面ではかなり波が高い。

この際解散回避の最もいゝ方法は政友會の分裂である。三四十名が一團になつて政友會から脱け出してすぐ民政黨へ投ずるか、一黨を爲して政府支持と出ればよい。が、分裂常習犯の床次は總裁の後釜を狙つてゐるからもう洞ヶ峠へは歸るまい。誰か解散恐怖の汚名を引つ被つて三四十名の同志を纏め、脱黨を敢行すればその男は議員全部から救ひ主として蔭ながら滿腔の感謝を受けることは請合ひなんだが、サテそれだけの勇者はゐない。

そこで次善の策として、政友會は挑戰しない方がよい、といふ聲が起つてゐる。もつと進んで『金解禁のために忍び難きを忍んで政府を助ける』がよいといふ議論まである。まさかそれに動かされたわけではなからうが、犬養は頻りに『政策本位』といふことを唱へてゐる。それは、政策次第では反對しない――『不信任案を出さぬ』といふ意味に取れないことはない。

一方、政府與黨の内部にも解散よけの運動がある。最近にある有力な筋から濱口の耳へ『あまり無理な戰をするな』といふ忠告がさゝやかれたといふ、たしかに妖雲ではある。

○

しかし、濱口は一本調子である。濱口から一本調子を差し引いたら殘るものは何か。きつと彼は不自然な多數を少數に戻し、不自然な少數黨を多數黨にしたいと考へてゐるに相違ない。憲政の常道によつて政權を得た彼は憲政の常道によつて議會を解散すべきものと思つてゐるに相違ない。まして彼の懐刀であり大番頭であり副總理である安達は、犬養の指摘した通りに解散熱望者である。黨勢第一主義の安達としては是か非でもこの際わが黨内閣の手で選擧を行つて置きたい處だ。トランプのオールマイチーみたいな内相の權力を握つて思ふ存分に『選擧の神樣』ぶりを發揮して見たい、といふ心理も無いとは言はれない。大衆的な解散回避運動の力を以つてしても濱口の信念と安

達の希望を曲げさせることはむつかしい。

たゞ、少しばかり氣懸りなのは濱口が善良過ぎることだ。政友會が挑戰的な態度に出て來ない時に、無策な濱口は困りはしないか。田中內閣が第五十四議會を解散した時に、田中は施政方針の演說をやつて反對黨に質問の機會を與へなかつた。それを非立憲だといつて民政黨が攻擊したことを覺えてゐる濱口は來議會を解散するにしても敵に質問の機會を與へねばならぬと考へるほど立憲政治家病的に正直である。その質問戰で敵があまり攻擊的でないとすると濱口は解散の機會を捉へるのに苦しむ。若しさうなれば颱風は道草を食ふ。

野黨の總裁犬養は政策本位を唱へたり、『解散はいやだ』と言つて見たり、頻りに軟風を吹かせてゐるが本當に彼は解散が怖いのか、それほど彼は老耄れたのかと言ふに、どうして／＼鬪志滿腹である。喧嘩が彼の身上だ。喧嘩好きの犬養が降參や休戰の申込をするやうな氣遣ひはない。『賣られる喧嘩なら買ふ』といふ、彼は上手に喧嘩をしたいと考へてゐるだけだ。ジメ／＼したことは彼の性格が許さない。まだ今は空とぼけた容子をしてゐるものゝ、立つべき時には一刻の猶豫もなしに白牙をむいて本性を現はす。

假りにもライオンと言はれる濱口と、狼の名ある犬養との取り組みである。低氣壓を呼び起こすに充分だ。氣象台の豫報は颱風來である。ライオン實は猫、狼實は犬、でない限り、その豫報が外れることは無い。●

○

この大勢を前にして、上述のやうな回避運動もあるが、回避運動をやる者自身が一方ではもはや選擧準備に取り掛かつてゐる。地方には既に選擧氣分が漲つてゐる。中央の政民兩黨は無論のこと、小會派でもそれ／＼戰備を進めてゐる。犬養は青森における東北大會を皮切りとして行脚をつゞけてゐる。濱口も豫算閣議が終り次第地方遊說の途に上る筈である。去年の今頃は御大典で全國に瑞氣が漲つてゐたのに引きかへ、今年の政治季節は解散の豫想に彩られて今から殺氣に滿ちてゐる。

さて、愈々總選擧となれば朝野兩黨はどういふ陣立をするか。

民政黨の采配を振るのは言ふまでもなく安達である。選擧の元締になるために生れて來たやうな安達は內相の椅子に付くと間もなく地方長官の大更迭を行つた。彼の戰意はその時既に明かだつた。一刀の下に切りも切つたり約三十人。それから後にも二人三人五人と小刻みに切つたのを合せると前內閣時代の知事で生き延びてゐる者はもう幾人もない。選擧と最も密接な關係のある警察部長も大部分は顏が變つてゐる。その配下たる警察署長の全國に亘る大異動はあまり露骨すぎると言つて非難があつた位に安達の對選擧準備は周到である。

安達は、鈴木のやうに議會否認の聲明書を出したり、怪文書を作つたりなんか、ヘマなことはやるまいが、合法的に見える範圍で精一杯陰性な權力利用をやるだらう。

選擧本部の賄方も殆ど安達が一手に引き受けるものと見てい丶。安達はかねてから幣原と結ぶことには努めてゐる。仙石を滿鐵總裁に引つ張り出したのも半分は安達の才覺だ。それでほゞ軍資金の入る途は付いてゐる。それを適宜に候補者へ分配するのも安達の役である。たゞ今度は内相といふ官職にあるから直接金の受け渡しなどは幹事長の富田が安達の指圖通り事務的に行ふことになるだらう。

公認候補者の選定も大部分は安達の胸三寸にある。政治生活四十年の間、寢ても覺めても全國に亘る選擧地盤のことばかり考へて來た安達は、どの區で誰を立てたらい丶か、その參謀には誰がい丶か、敵は誰を立てるか、といふ風なことをすべて暗記してゐる。彼の秘藏する數册のノートブックに至つては、精緻無比の選擧戰圖と言はれる。今度のやうに民政黨が勝利を見越して公認候補者を前よりもずつと多くしやうとする場合には、各候補者が同士討を恐れて方々から苦情を持ち出して來る。その苦情を抑へる力は安達にしか無い。

人に對する愛憎が強くて、陰氣で頭領の資格に乏しい安達が民政黨で斷然他の追隨を許さぬ勢力を築いてゐるのは選擧費用の出納を一手に收めてゐることと、地方の選擧事情に精通してゐるためだ。どこまでも選擧の安達である。その彼が今度は權力まで握ることになつたから鬼に金棒、いや神樣に金棒だ。安達がどれ位まで腕を揮ふだらうか、といふことが來るべき選擧戰のもたらす大きな興味である。

○

民政黨で安達に次ぐ大役を勤めるのは幹事長の富田である。幹事長は平生でも一黨の仕事を切り盛りする中心人物だが、わが黨内閣の方へ黨の頭株を取られてゐる場合の選擧には一層の大役となる。殊に富田は濱口と同鄕でその信頼も厚い。民政黨には珍らしい野性タップリの親分肌である。それでゐて目先も利けば押しも強いから、今度の選擧で第二世「選擧の神樣」の地位を獲得するかも知れない。それにつけても三木の失脚は淋しい。

安達の手足となり、富田を助けて働くのは中野と永井あたりだらうが兩人ともピッコだから面白い。

安達は別格として大臣の中で最も選擧に力を入れるのは江木と小橋である。江木は未來の總裁を夢見てゐるやうだがそれはともかく、今度大臣になる前でも黨務に熱心なことは拔群だつた。その精進ぶりは次第々々に何物かを生みつ丶ある。最近では、ある意味で安達の勢力に對抗する氣勢をさへ示してゐる。今度の選擧には種々の劃策で軍費調達の方でも、應援演説でも彼れ江木が有りたけの力を揮るだらうと想はれる。彼の系統と見られる松村義一なども丁度浪人であるを幸にかなり活躍するだらう。この一戰は江木にとつて官僚江木から黨人江木の轉向をしるし付ける標柱になるのではないか。

小橋は舊本黨系の統率者であるが、近ごろでは舊憲政系の誰彼まで彼の許に出入する。茫洋とした中に親切氣のある處、乾兒を集める素質がある。彼は曾つて清浦内閣の書記官長時代に政府與黨の選擧元締。

をやつた經驗もある。今度の選擧は彼に高見の見物を許さないし、彼もそれを欲しないだらう。必ず重要な一部面を擔當するに違ひない。

その外、小泉、町田、松田、俵がそれ〱働くであらうことは言ふまでもないが、幣原は兵站部の重大な役割を演ずる以外には知らぬ顔だらう。井上も相當に軍費を運んで來る外は金解禁に沒頭して仕舞ふかどうか、黨人としての彼の未來をトする上にその擧動が面白い、書記官長の鈴木も相當な働きをするだらう。

○

政友會の陣容はどうか。

そも〱政友會は今、受難時代に逢着してゐる。二百五十余名の代議士を擁して頭には政界切つての古強者を頂いてゐるもの丶、實體はヒヾの入つた大瓶と同じやうなものだ。表面は納まつてゐても内部では次期總裁の椅子を狙ふ床次、鈴木、中橋、久原、山本等の諸勢力がおの〱違つた方向に流れて瓶の中で渦を卷いてゐる。

來るべき總選擧は果して民政黨との爭ひであるのか、それとも次期總裁を決する對内戰であるのか、鳥渡判りかねる有樣だ。從つて總選擧の元締になる人を選び出すにも一と苦勞だ。床次でもいけない。鈴木でもいけない、で結局、望月が元締になると見られる。

望月は古顔である割合に黨内には威望がない。内相であつたけれども今の地方官に對してはあまり睨みが利かぬ。もつと困ることには軍資金調達の能力に乏しいことだ。その三つの點で望月よりも上わ手である鈴木を元締に据ゑたい處である。或は床次に對する振合ひを構はずに鈴木を元締とするやうなことにならぬとも限らない。それほど政友會は苦境にある。

鈴木の手並みはこの前の選擧で大抵判つてゐる。遂には内相の椅子から滑り落ちるやうなブザマを演じたとは言へ、我武者羅に突進するところは痛快でもあり、味方にして見れば頼母しさもあると言ふものだ。金作りにかけては久原にこそ及はないが、床次には負けない腕と言はれる。それに鈴木には乾兒のいゝのが付いてゐる。鳩山、森、宮田、内田、松野、等々、みんな相當の働手だから質を以て、床次側の量に對抗することが出來る。たとへ望月が元締になるとしても、鈴木は張り出し元締として正元締以上の働きをするものと斷定してよろしい。

床次は元締といふやうな人柄ではないが、鈴木に對抗する必要上、ノホホンと觀兵式の大將を極め込んでゐるわけには行かない。永の放浪を共にして來た手下には無論のこと、その他の者にも一人でも多く恩を賣つて置く必要に迫られてゐる。こんな時にせめて櫻田でも居て呉れたら、と嘆きが出るだらう。

中橋は金はあつても乾兒が少い。金の出し振りがよければよいけれど、希望の彼岸に近付くわけであるが……。

久原は犬養にはとても田中に對するやうなわけには行かないだらうが、犬養と諒解の程度に比例して援助するものと見られる。山本、勝田、水野、三土なども夫れぞれ援兵を出すだらう。

が、政友會では幹事長森が重任を帶びることになる。森は横田の後繼ぎを以て任ずるだけあつて精悍だ。頭も働くし顔振りも利く。彼は鈴木に良く、久原に良く、山本系にも良いから、諸派交流の眞ん中

立つて采配を振るのに適してゐる。望月、鈴木、森の三人の力を合はせて政府黨の安達に當るわけにならう。彼れ森にとつては來るべき選擧こそ無二の活躍舞臺である。苦しむだけは必ず報はれる。解散は彼だけに幸運を惠みさうである。

元幹事長であつた秦と前幹事長の島田が有力な選擧幹部になることは言ふまでもない。

○

かうして朝野兩黨が爭つた結果、勝利はどつちに惠まれるか、と言へば民政黨の方に手をあげねばなるまい。民政黨には政府黨といふ絕大た利益がある上に人の和がある。政友會にはそれがない。金の點から見ても民政黨は政友會より少い金で戰ふことに馴れてゐる。しかも犬養といふ金に緣の遠い總裁を持つ政友會は果して民政黨ほど軍資金を作り得るかどうかさへ疑はしい。それに、政友會の現代議士の中には再選覺束ない顏ぶれがウンとあるのに民政黨の方には危なさうなのが少い。前の選擧に野黨の苦難を切り拔けて出て來たゞけに割合粒が揃つてゐる。一般の人氣に至つては政友會が明かに不利である。

民政黨にとつての惱みは金解禁の前後における財界の不況である。その點には政府は深甚の政治的考慮も拂つてゐるだらうが、多かれ少かれ經濟界が沈衰狀態に陷つて行くことは免れないから、選擧には不利である。しかしその不利は一面において金解禁といふ大事業を遂行した事に對する賞讃によつて償はれる。減俸問題の如きは選擧の時分には忘れられてゐるだらうから殆ど惱みとするに足りない。

これに反して政友會は田中の內閣印象に禍されるのみならず、その後に頻發して止まる處のなさゝうた疑獄沙汰にどれだけ祟られるか知れない。犬養を總裁にしたことで幾分か淸黨を斷行したやうな効果を生んでゐるのは事實であるにしても、それだけで罪障消滅とは行かない。

總ての點で政友會は勝味が少い。これから總選擧までの間に何か現內閣に不利な事情が湧いて來るか、それとも戰さ上手の犬養が何か恰好な鬪爭題目を見つけて來るかしない限り、政友會が負けさうだ。

○

それでも政友會本部側の豫想では二百二十名の當選は確實とある。民政黨では最少に見積つても今より七十名の增加は保險付であると言ふ。若し兩黨の豫想に誤りなしとすれば兩黨だけで議員定員の四百六十六名を殆ど占めて仕舞ふ勘定になり、中間の小會派からは僅かに尾崎、安部、武藤の三人位しか出る餘地がない譯である。

しかし、いくら小さく見積つても、無產黨が十人を下ることは有り得ない。國民同志會は御大武藤の悲壯な努力に拘らず發展性に乏しく、革新クラブは文字通りに淸瀨の殘花一輪であり、明政會また新自由主義の笛に人を踊らせる魅力がない。とはいへこれらに若干の中立議員を加へて合計十五人より少くなることは考へられない。

さうすると、政民兩派の中どちらかに廿五名乃至三十名の違算がある。

果して民政黨と政友會と、どちらが勝つか。この勝負と早慶野球戰とどちらに多く興味があるかと訊かれては鳥渡困るが、この勝負もおもしろい。

# 新刊批評

## 「日本地理大系」を讀みて

吉田絃二郎

もし常に坐右に置きて樂しむべき書籍といふものがあるとすれば日本地理大系はたしかにその一つである。年中旅を歩いてゐるわたくしのやうな者には殊になつかしい書籍である。同時に必要な出版である。從來、旅を愛する者にとりて最も不自由であつたことは確實な地理的刊行物の欠如してゐたことであつた。部分的なものとしては地方地方に刊行せられてゐたし、また案內記的なものもあつたが、全體としての日本の眞の姿をはつきりと見せてくれるやうな物の乏しいにはいつも不滿を感じてゐた。

日本地理大系の近畿篇がわたくしの書齋に送りとゞけられた日、わたくしはたうとうまる一日緣側に出て秋の日を浴びながらページからページをめくつて過してしまつた。それほどわたくしは旅の誘惑をこの一書の中に見出すことができた。近畿篇の中に盛られてゐる名所、舊蹟、都市、山川、湖沼等の中には曾て幾度か遊んだ場所もあり、或ひは遊ばんと欲してなほ機會を得ないところもあるが、ともかく頁をめくるたんびに旅人らしい感興に胸ををどらせざるを得なかつた。

從來の地理地誌といふものがきはめて事務的に編纂され、通りいつぺんの事實(ファクト)の記述に終つてゐることに對してわたくしたちは常に不滿を感じてゐた。成る程地理地誌といふものは一つの科學であるにちがひない。事實(ファクト)を基礎としての記錄であるにちがひない。しかしこの考へ方はあまりに概念的であり、舊時代的な考へ方である。われ〱が要求してゐるところの地理は最も精確であると同時に人の心を動かすところの一種の人生記錄でなければならぬ。決して理知のみに訴ふるばかりのものであつてはならぬ。われ〱の魂にまで訴へて來るところの藝術的な魅力を內容として持つてゐなければならぬ。

日本地理大系をひもどくにつれてわたくしはこの考へ方のあやまりでなかつたことを信ずることができた。この本が終日わたくしを惹きつけたところの魅力はたしかにそこに見出さるゝところの科學以上の藝術的な存在、一種の人生記錄的な新しき試みに潜んでゐるのであらう。

開卷先づわれ〱は飛行機上から撮影せられた數葉の京都全體の眞の鳥瞰圖を見出す。京都驛附近東本願寺を中心としたものが第一に掲げられてある。七條から伏見に通ふ街道であらう、白く斜に走つてゐる。今年の或る春の日午後、伏見から京都へ還

る時わたくしはその街道を歩いたことがあつた。わたくしはそこを歩いてゐた虛無僧のことを思ひ出した。第二の寫眞は京の四條通りが中心になつてゐる。烏丸の大通りが四條通りと交叉し、錦小路や蛸藥師などが細くしかもはつきりと寫眞の上に浮き上つてゐる。懷しき京の街を思ひ出す。第三には勁いほど蒼々たる比叡の嶺を傳ふて走る八瀨ケーブルの眞つ白な曲線を中心として洛北の靜かなる村々谷々が映つてゐる。第四圖は高野川を中心に柔かな洛北の赤松山にとりかこまれた村々である。三千院や寂光院を訪なう人々は秋の日を高野川に沿ふて歩む。第五圖は四明ケ嶽將門岩から京都盆地をながめた鳥瞰圖である。高野川、加茂川加茂の森を眼下に見てはるかに洛中の街々を眺むる景色はたしかに旅を愛する人々の胸を踊らすに足る。つゞいて淀町、桂、宇治、木津三川の合流點、或ひは淀川に沿ひて山崎を見たる鳥瞰圖を飛行機上から撮影したるもの等まつたく從來の記錄を破り、最近代の科學の力を最も適確に、最も藝術的に生かし得たものといふことができよう。

その挿入せられた寫眞の選擇からいつてもその苦心と努力には驚歎すべきものがある。門外不出の逸品とも稱すべき種類の寫眞を蒐集したる編者の努力に對しては、われ／＼旅を愛するものとしてまことに感謝すべきである。仙洞御所、修學院離宮、桂離宮の寫眞のごとき殊にうれしき物である。鞍馬寺、鞍馬火祭、八瀨村聚落、丹波街道、文樂座人形、千早、赤坂の城、灘酒井戸、淡路三條の操人形、奈良高畠の塀のごとき、これ等はその一例に過ぎないが、これ等の事象の觀察に對する細心な注意と努力のほどがしのばれる。

奈良の法蓮造農家、稗田の垣內、奈良盆地の農家等の寫眞を蒐めた一事によつてもわれ／＼は日本地理大系編者の頭の働き方を想像することができる。

奈良、つゞいて三重、滋賀縣の卷に至りて、最近代の科學の力は、從來の地理に對して革命を齎らし得たことを痛切に感じないではをれぬ。われ／＼は大和平原も、鳥羽の港も、伊勢の松坂も、津も、伊賀上野も、さらに琵琶湖、比良、大津も天空よりさながらに鳥瞰することを得るやうになつた。われ／＼は文字通りに鳥人の眼を以てわれ等の山を見都市を見ることができるやうになつた。かくして日本地理大系はまさに劃時代的な一つの計畫であり、大なる成功を贏ち得たといはなければならぬ。

卷末には近畿の地貌概說、近畿地方の自然地理、同人文地理、歷史總記の諸篇に分ちて中村新太郎、飯本信之、渡邊光、石橋五郎、遠藤金英、田中秀作、西田直二郎、池田源太の諸氏が分擔執筆をしてをる。この企ては一般の人々をして極めて容易に地理の科學的研究に興味をいだかせるに効果がある。漠然として旅をしてゐた者も、さらに一つの確實な觀點から出發して自然を見るやうになるであらう。

われ〳〵はわれ〳〵の祖國がいかにすぐれたる自然につゝまれ、いかに愛すべき傳說を持ち、いかに愛すべき人事に充たされてゐるかといふことを日本地理大系により て今更のごとく考へさせられる。現下のわれ〳〵にとりて一番大切なことは眞に自分等の祖國を知るといふことである。眞に世界無比の美なるわれ等の鄕土の相を如實に見るといふことである。架空的な議論や抽象的な概念は決して國民をして眞に祖國を愛することを敎へはしない。先づその國民をしてかれ等の祖國の麗しき山を知らしめなければならぬ。美しき川、都市、溪谷、人事、傳說すべてを見せなければならぬ。日本地理大系はこの目的に對しても偉大なる役目を持つてゐる。

もと〳〵かくのごとき大事業は當然國家がその任に當るべきである。この大きな仕事を完成するといふことは一改造社のみの名譽には止まらないとわたくしは信ずる。

（東京市芝區愛宕下町四ノ六改造社發行）

猪俣津南雄著

## 『現代日本研究』

### —マルクシズムの立場より—

向坂逸郎

本書の何より特徴は、現代日本の研究がマルクシズムの立場によりてなされてゐる事であらう。マルクス－エンゲルス－レニンによりて與へられたる目を以つて、現代日本が見られてゐる事である。マルクシズムの理論の光に、吾々の直前に展開する所の現象が照し出されてゐる事である。

無產者階級はその社會的地位の故に、一切を眞正面から見る事が出來る。一切を赤裸々に分析し、究明することが出來る。この事によりてこの階級は、何等かを失ふ事を恐れるを要しない。否な、この事こそこの階級の階級的利益に合致するものなのである。この無產者階級の立場、これすなはちマルクシズムの立場である。それ故にマルクシズムの立場こそ正しきもの、究明に向つてひたすらに突き進み得る唯一のものである。

「現代日本の研究」その著書の數少しとしないであらう。だがその多くは「公平なる立場」からの研究である事をその本分としてゐるであらう。ブルジョアジーはその存在を確保するために現代日本の階級的構成を否定しなければならない。それ故に現代日本の階級的對立の上に超然たらんとする立場、即ち存在するものを抹殺せんとする立場は、即ちブルジョアジーの立場でなければならぬ。かくて「公平なる立場」は畢竟ブルジョアジーの立場、存在するものを否定せんとする不公平なる立場でなければならぬ。無產者階級の立場、從つて又マルクシズムの立場こそ、はつきりと「マルクシズムの立場より」するものなることを掲げる事が出來る。何者、この立場のみが一切を何等の狐疑と逡巡なく解剖する事が出來るからである。この立場に於てこそ人は眞實

に徹することが出來るからである。

『現代日本研究』と名告る著書は、事實その數少しとしないであらう。だが本書はその理論的統一と包括的なる點とに於て他の何れをも拔いてゐる。本書は『現代日本の政治、經濟、及び階級諸關係の基本的諸相の分析として、研究として、かなり包括的な一體系をなしてゐるのである。

本書の第一篇は現代日本の經濟狀勢と題されてゐる。こゝで現代日本の經濟的機構を分析した著者は第二編に於て、現代日本の政治情勢の分析を始める。本篇に含まれる第五章、ブルジョアジーの政治的地位は特に光れる部分であらう。以上二篇に於て現代日本の經濟的政治的情勢の理論的分析の結果を以つて、現代日本の無產者階級は如何なる態度に出づ可きかの問題が、第三篇及び第四篇に於て論ぜられる。こゝに於ては著者は單なる書齋裏の學者でなく、無產者階級運動の實踐に於ける理論的指導者の姿を現はし來る。

著者の理論的強靱さと迫力ある文章とは既に人のよく知れる所である。

私は本書を熱意を以つて推薦したい。（東京市芝區愛宕下町四ノ六改造社發行、定價貳圓八十錢）

## 新刊紹介

◇**規範經濟學**（岡本利吉著・「新しい經濟學であると同時に新しい倫理學でありまた新しい社會學である」と說く共働農園經營者たる著者の九百頁の大著・東京麴町下六番町一〇・平凡社・價四圓八十錢）

◇**自由人の社會學**（室伏高信著・東京市本鄕金助町二八批評社・定價壹圓三十錢）

◇**女子體操科教科書**（東京赤坂青山南町二ノ六三體育聯盟會出版部編・價七十五錢）

◇**ロシア大革命記**（大竹博吉監譯・ロシア大革命の裏面史譯選輯の第五輯二月革命篇・麴町內幸町一ノ五ロシア問題硏究所・價三圓）

◇**ペリカン**（井上康文詩集・本誌懸賞當選者なる著者の處女詩集・東京本鄕本鄕三丁目本鄕ビル時雨堂出版部・定價壹圓）

◇**文化社會學概論**（關榮吉著・東京市神田區錦町三ノ一八東京堂・價貳圓五十錢）

◇**マルクスのロビンソン物語**（大熊信行著・著者の新研究たる配分の原理を論究し全部四章第一章マルクスのロビンソン物語は嘗て本誌に掲載されたもの、裝幀極めて高雅・東京神田表神保町二・同文館・價二圓八十錢）

◇**西部戰線異狀なし**（ルマルク著・秦豐吉譯・戰爭の恐怖と慘虐とをかくまでリアルに、無慈悲なほどに感銘的に描いた書は稀有であらう。しかも著者は沁々させる人情と微笑ませるユーモアを加味させ乍ら、呼び掛けんとする意圖を忘れてゐない・東京麴町丸ノ内丸ビル五八八・中央公論社・價壹圓五十錢）

◇**アダムの昔**（岡田禎子詩集・東京市外野方町上沼袋七三詩集社・價壹圓）

◇**轉換期の日本**（清澤洌著・著者が熱愛をこめた新日本への批判・東京京橋第一相互館千倉書房・定價壹圓八十錢）

◇**社會科學辭典**（杉森孝次郎編輯・社會學、政治學、經濟學、法律學、哲學、社會問題、社會運動、マルキシズム、新教育並に無產者教育等に對する各新進專攻學者の解說辭典で誠に手頃の好著・東京西巣鴨町宮仲二三九三社會思想研究所發行・定價三圓五十錢）

# 福本氏からダリアの花を送られるまで

白柳秀湖

本年五月十一日、獄中の福本和夫氏から出版書肆を通じて、左掲第一信を接手した時、僕は何を措いても福本氏に返信を認めねばならぬ義務があるやうに感じた。それは自分に體驗のない、他人の苦痛には、人間として餘程氣をつけて情誼を盡して置く必要があるといふことを病氣のことや、子供のことから近頃沁々感じて居たからである。福本氏の罪狀は分らぬ。福本氏に對する一般の氣うけも果して何處にあるのか分らぬ。又、此際福本氏と文通することが自分の利益であるか、不利益であるかも分らぬ。併し、自分には獄中生活の體驗がない。それにひとしい、それによく似た、寧ろそれ以上と思はれる體驗は幾らも嘗めて居る。併し兎にも角にも僕は監獄を知らぬ。それだけでも福本氏に返信を認めて、せめて五分でも十分でも自分に體驗のない苦痛を嘗めて居る人の心を他に紛らすことは自分の義務であるやうに感ぜられた。それで僕は福本氏から申込まれた著書のことに關し、筆の走るまゝに返書を認めて差出した。

その後　第二信、第三信と往復が重るにつれて、福本氏からは僕のやうなものに對して寧ろ敬虔に過ぎるやうな音信があつた。さうして第三信では、到頭机上に赤いダリアの花まで送つて貰ふことになつた。

最近、『改造』の友人が訪ねて來て、何處で聽いたものか、支障なくば福本氏の手紙を見せてくれといふ話である。友人は一讀、再讀、『改造』に發表したら何うかといふ話になつた。濫りに私信を發表するといふことのよくないことは勿論である。併し福本氏と僕とは事前に、一面の識もなく、思想の上から云つても兩極端を歩いて居るし、福本氏も赤の他人に送る心持でお互の思想のことなどには一言も觸れず、此手紙を書いて居る。福本氏が僕の著書を、殊の外愛讀してくれたことは事實であるらしい。併し福本氏はその中に盛られた僕の思想に對しては一言半句も觸れて居ぬ。

『改造』の友人と共に隨分氣をつけて、三通の手紙を繰返し〱讀んで見たが、何と考へても、此手紙が福本氏の今日の立場に迷惑となりさうな箇所は見當らぬ。さうしてこれらの消息を通じて間接に幾分でも、福本氏の現在の心境が窺はれぬでもない。之を發表したとて、不信の叱りをうけさうにも思はれぬが、若しそれをうけなければならぬものなら、一切の責任は之を承諾した僕にある。（昭和四・一一・一〇・秋霖錚々として窓を打つ日）

## 第一信

拜啓　全く唐突失禮の申出、御許容被下候はゞ幸甚の至に存申候。

小生は目下△△△に籠居　この數日間、貴著「財界太平記」を最も有益にむさぶり讀み居申候。我々にとつては全く限りなきの興趣、御健筆の愈よすこやかならんことをひそかに祈居申候。

固より此の、、、「蓬頭垢面、無名の一青年」には、將來と雖も敢て、あなたにならひて、「斯樣な有益な歴史を綴りうる」の自信は少しも無之候へ共、貴著によりて大いに啓發を蒙りたきの念禁ぜざるもの有之、失禮をも顧みるにいとまなく、敢てこゝにあつかましき御願を申出候次第に有之候。　敬白

五月十一日　　繩本和夫

白柳秀湖樣

貴著のうち、小生友人によりて入手比較的困難と思はるゝ左記數册何卒あなたの手にて、、、買求め又は暫く拜借の便宜を蒙りたく厚く御願申上候。

なほ、買求めの便宜、お與へ下され候節は、其代價御しらせ下されば候はゞ、こちらより直に御支拂申上ぐべく、あなたの手においても入手の方法なく、暫く御借り願ひ得候場合は、その期間御指定の上、お送り下され候はゞその期間に御返却申上ぐべく候、古本にても勿論よく候へども、、、書入れあるものは、一切許可仕らず候に付、左樣御了承おき願上候。

一、坂本龍馬(大衆文學全集)
二、英雄篇
三、俠客篇
四、浪人篇
五、大日本閨門史
六、社會講談選集

追記
1、差入屋へでなく、直接當刑務所宛御郵送願上申候。
2、小生宛所は表記の通りにても通じ申候。
3、御多用中恐縮に存候へ共何分の御返事御一報被下候はゞ好都合に存申候。

▼註＝△△△は刑務所々在地名、自發的に伏字にして置く。

## 第二信

△△△あての御手紙並に御著書二册うれしくいたゞきました。唯今くりかへし繙讀いたしてゐます

早速御返事いたし上ぐべきのところ、先日來或る仕事のため殊の外忙しく、それに暫く消化不良でなやんでもゐましたため、心ならずも相遲れまして誠にすまなく思ひます。いろいろと數へらるゝことの深く

且つ多いのを心からうれしく感謝いたしてゐます。

お互の道は恐らく相異りませうとも御仰せの如く、これを機縁に將來いつまでも豐富なる實生活上の御經驗により御鞭撻下さいましたならまことに此上なき仕合はせと存じます。此頃は「西園寺公望傳」の御執筆あり由、今迄の傳記ものと異なり、新しき史觀によつて綴られたる人物傳〃得むことをよろこびます。進んで更に、明治大正の政治史を編んでいたゞいたら、あの「財界太平記」「近世日本經濟發達史」の著者に、かやうな著者にして、かやうな史眼をもつてしてはじめてあみうる政治史を。

これは恐らく私だち一個の希願のみではありますまい。蘇峰の「近世日本國民史」あの歴史は從來のアカデミイツクな歴史に比して全く御話しにならぬ程多くのものを私だちに敎へてくれます。たしかに近代における大きな業蹟の一つとして永く輝くであらうものと考へますが、直接次の時代のための、新しき時代のための、（削除）歴史こそは、必ずや、更に新に、新なる史眼によつて準備されなければなりますまい。

しかも此の任務此の重要な仕事は何人によつて果され得るでありませうか。

かくの如きは、全く、あの押強い（心にくき迄にぐんぐんと大きく重く押してゆく力。それはその著書のいたるところににじみ出てをり、またあの耶馬篇卷頭の肖像が物語つてゐます、あの押し強い）力。恐らく絶倫の精力あるあの「財界太平記」の著者によりてのみはじめて、なし遂げ得らるゝところの仕事ではありますまいか。ぶちつけな希願を述べさせていたゞきました。しかしきつと、大きく笑つて御許し下さることと存じます。

「財界太平記」、先日の二書、「近世日本經濟發達史」以外の御著書でももし御手に入りましたらどうか、御送り下さるやう御願ひ申し上げておきます。或は失禮かもしれないと恐れますが、近日中不取敢圓御送附いたします、御收めおき下さる樣願ひます。

隨分暑くなりました、どうか元氣で御執筆相成度、今日はこれで失禮いたします、亂筆お許し下さい。

先日〇〇〇〇〇へうつされました。

七月二日　　橋本和夫

敬具

白柳秀湖樣

▼註＝〇〇〇〇〇は△△△から移された刑務所々在地名。

## 第三信

相變らず御壯健のことと存じます。

まことにながい間、返事を怠りまして、おわびいたします。

實は、あのあつさに、しらべやら、あるさし急ぐ勉強やらで、全く忙

しくくらしました上、それが偶々その以前から引續いてゐました消化不良で少しく健康をいためてゐたのを、いくらか無理をしましたせいか、やがて肩が石のやうに凝り出し、眼がまた、折々に朦朧とかすんで來りなどしました。平生かなり健康な私なんですが、いささかくたびれてしまひましたのに、またあひにく、眼鏡がこはれて、暫く不自由してゐましたので、とうとう心ならずも、失禮してしまひました次第、あしからずお許しを願ひます

今日は久しぶりにペンをとることにしましたが、さて何から申上ぐべきか。

「聲なきに聞く」、「事實の叛逆」、「西園寺公望傳」の三書と、それに御手紙と、勿論とつくに、いたゞき、うれしく、難有く、有益に、くりかへし拜見しました。いづれの讀者の感想に向つても耳傾くる旨、其の述作のすべてに書きそへられてゐるあなたに對しては、殊に、讀後の所感を玆に詳しく申述べますことが、恐らく、まことに御厚意に酬ゆる所以かと考へますが、健康上、また厄介な檢閲を受けねばならぬ狀態におかれてゐます關係上、こゝ當分は、なほ、永い手紙を自由にしたため難いのを遺憾に思ひます。いづれそのうち、適當な機會もあり得ませう、暫く後日を期することに願ひます。御手紙によりますれば、近く「親分子分」篇が改版せられます由、「西園寺公望傳」に約束せられてゐる「續財界太平記」の刊行と共に、最も私の文字通り首を長くして待つてゐるところです。

こちらに移されましてより最近までの數ケ月、私は努力の中心を、專ら現在における我が經濟狀勢の研究――研究といふのは、いささか大ゲサすぎましたが――を續行することにおいて、毎日毎日、乏しい計數字をいぢくりながら、くらしましたが、最近、ある小さな一段落になりましたので、また暫くは、最初の如くいろいろなものを見たいとおもつてゐます。

折々にお心づきのもの、何にても、御ひまの節、御示教願へますれば幸甚です。

今日は、一つ御多忙の机上に、赤いダリヤを一輪さゝげませう。

△二百二十日の　嵐のあとに、
高い窓から　背のびしてみれば、
猿のやうな恰好して、
柿色の法衣に　クリクリ坊主の囚人らが、
土砂を運びゐる　かたはらに、
赤いダリヤが　二輪さきてをれ。

（九月十二日、近景、我が窓の下）

勿論うたでも、詩でもありえますまいが、御多忙な御執筆のお疲れにしばし御笑ひ下さらば滿足です。

唯今、「雜獄篇」一冊御送り下さいました旨を、領置係から知らせてくれました。うれしく思ひます。今日は土曜日で、もう手許に受けるわ

けにはまゐりませんが、來週をたのしみにしてゐます。深く感謝しつゝ全く御健筆の程に驚き入つてゐます。今のわれわれには、外部からの書物と手紙、これほどうれしいものはありません、御推察下さい。

△ただ一つ　ブラリさがれるヘチマの上に、
　小春日の光ホカホカ遊び居り。
　　（九月十四日、近景、我が窓の下）

△小春日の光ホカホカさす窓に、
　かるく疲れて、ふせば、のどけし。

これは今朝のうたゝです。勿論うたにはなつてゐますまいが、全くいい氣候になりました。益々ウント御執筆の程を祈りつゝ今日はこれで失禮いたしませう。

九月十四日午後　　福本和夫

白柳秀湖様

# モダンに於ける野蠻主義

赤神良譲

×

卒直にいふならばモダンは野蠻である。素敵なるモダンの感じを、吾々近代人は、きつと猛烈なる野蠻主義の中に發見するに相違ない。だから又モダンの尖端を行くものは、野蠻の姿であり、そしてその野蠻の姿は、そのまゝ辨證法的に反對物たるモダンに鋭く逆轉して、打倒的なる驚異と魅惑とを、吾々の中に投込んで來る。

肉厚く赤く臙紅にて染められたる生々しきモガの唇は、野牛の生血を啜る生蕃娘の唇を、その潜在意識の裏に於いて聯想せしめ、血のインジョーイに對する本能をば、いやが上にも攪亂して、近代人の焦心をば煽動せしめんとするものである。だから近代人は、その糜爛色の唇よりモダンの強き閃きを認識すると同時に、その野蠻を享樂する者である。それ故に又近代人彼等は、黒蠻の烈に鮪の「トロ身」を二つ載せたが如き黒奴の、あの偉大なる唇に——その唇をちつと見詰め、強度なる吸盤の如き原始的力を豫想して、その野蠻の力に——強き淫惑をば感ぜしめられて來るのである。

冬枯れて、鈴懸の實の灰色空に揺れ、朽葉のカラカラと吹き立てられてゐるセーヌの河畔を、毛皮の外套にてその身を包み、三萬法の毛皮のショールに、その小さき眞白き顏を埋め、慓悍なる容貌、魁偉なる體軀の黒奴を、そのステッキ・ボーイとして誇り顏に縋り行く、超モダンの婦人を見るならば、吾々はその背景として東亞弗利加の密林を、幻に描き出さねばならない。然るにそれは白晝の巴里であり、遠くにアンバリードのエフイル塔を見るのである、全くそれは私にとつて、驚倒に値する光景でなければならなかつた。

「何だ？」と私は思はず叫びをあげて、そしてＯを顧み、「ロケエションか知ら……？」と問ひ足した。Ｏは、「何のロケエションか……」と目で笑つて答へない。私は、「……『オセロ』ぢやないか、將軍の娘が黒奴と戀に墮た、シエクスピアーの劇ぢやないか……」と更に附けたすと、Ｏは噴出した。「オセロか、ハハ……、オセロか、成程ね、それにしちやカメラ・マンがゐないぜ、……何に、唯の『黒ちやん』だよ、あの黒い天鵞絨の樣に滑かな油ばんでゐる肌、あの獰猛な顏、そ

して無智の幸福に輝いてゐる眼、白人種や黄色人種が理智的に發達する爲に、その肉體を惜氣もなく犧牲にし、虐げて來たのに、あの黑奴達は、腦味噌を犧牲にして、その肉體の發達にのみ專心して來たから、見ろ、あの眉、盛上つてゐる、そこにモダンの婦人にとつて、堪へ切れない魅惑がある、畢竟するに現代はババリズムの復活である、今に、それが君にも解つて來るだらうよ」とOは、自分にそれが解り切つてゐるかの樣に、一人で點頭いた。

それから私は、屢々この黑いステッキ・ボーイを携へてゐる婦人共に出會ふことによつて、そしてその度が重ねられるに從つて、そのモダンの鋭角味を、朧氣ながら理解することが出來る樣な氣がし出して來た。そして遂に、何時とはなしに、私はその「黑奴の美學」に、共鳴し得る一脈の心理をば、自ら摑つて來たのであつた。比較宗教學をやつてゐる男の話によると、白人が長く黑奴の村に共に住居してゐると、遂にはその剝げて白茶けた樣な、白色の皮膚におくれを感じ、氣恥しくなつて來るさうである。そして黑奴の宗教思想に現れてゐる惡魔や惡神は、どれもこれも白奴であるのに、美の神、善の神、福の神、武の神、それ等は總て漆黑の色に光つてゐるさうである。屢々出會ふ「黑ちやん」に注意を拂ひ出した私は、考へてゐる中に、本當の美は決して白色ではなくつて、寧ろ黑色であるかの樣に觀念されて來た。某といふ女歌人が、「美男におはす」と鎌倉の大佛をば褒めあげたのも、その光澤ある黑色の魅力を大膽に表現した點に於いてモダンであり、又その點に於いてのみ、モダンの心に共鳴の波を傳へ得るものである。

×

だから今や、審美の世界に於いて、黑人の時代がやつて來、亞米利加美學の時代がやつて來た。そして彼のフオン・ホヴが、ブルッセルの美術館に於いて殘したる黑奴の彫刻に、再評價が試みられねばならなくなつて來た。

健康色の極致として黑色の肌が、モダンの人々を惱殺し出し、斯くして野蠻の勝利が開始されて來た。そして白き顏料は橙色となり、現に紫色の顏料へと變化しつゝある。巴里のモガはそのコンパクトを開いて、目の端から頰にかけて、如何に近代人としての惱ましさをば、その紫色によつて表現せしめてゐるか、そして又吾々の心理は、既にそれからモダンの感じを、充分漁り得るまでになつて來た。今、その色調の變化から推すならば、やがては應用化學の研究者によつて、「黑いお白粉」否「お黑粉」が發明され、紫外線の應用によつて黑化用美顏器が創製されて、新聞紙はその誇大の廣告を以つて、一面をば埋めて來ることであらう。

曾つては吾々の間に、絕世の美人であつたと云はれてゐるクレオパトラの色が、問題とされて來た。「白い、大理石の如く、白玉の如く白い」と主張する者があれば、「黑い、現代の埃及人の樣に栗色であつたに相違ない、美人即ち白いと考へるのは、それは現代人、いや、近く

人崇拜熱からやつて來た訪れるイデオロギーである、大きな目、その上下の目縁の濃く黒ずんだマロン色、凄い銀箭の如き秋波、美はそこにあつた、蓋世の英雄をして沒落せしめた美貌、それは斷じて白ではなかつた。現に、世界に於ける享樂の都、それは最早や巴里でもなければ、又ニース、モンテカルロでもない、それはニール河によつて口づけられ、千古の椰子林によつて抱擁されてゐるカイロである。世界の各地から、近代的享樂をそこに求めて、年々數十萬の最もモダンなる人々が、蝟集し來ることを考へるならば、白き美人は、最早や黒き美人の敵ではあり得ない、といふ主張が絶對に勝を制さねばならない、だから眞のモダンは黒き美人にある」と反對に强論する者があつた。

私はその議論の勝敗が、何れに歸したかを記憶してゐない、然し私はカイロを見、その大きな目に出會ひ、カイロ博物館に於いて、タイヤの頭と通稱されてゐる女神ムートの黑曜石の顏を見た、メネヒターの胸像、メセリウス王の黒き巨大なる石像を見て、私は無條件に後者の議論に贊成しなければならなくなつた。それから私は、「タレオパトラは黒い」と斷定し、「黒きが故に彼女はより魅惑力を有してゐた」と結論するに至つた。然るに私を驚し且つ喜しめたことは、ジヰゼフイン・ベーカーが巴里の舞踏界に、彗星の如く現れ出でたことであつた。そして彼女は栗色の女であり、亞米利加產の蠻人の娘であり、野蠻のモダンを遺憾なく象徴して、私の説に、最も有力なる支持を與へる者であつたからである。

巴里に裸踊りの二大劇場がある、その一つは、巴里市營のカジノ・ド・パリであり、他の一つは有名なるムーラン・ルウーヂである。その後者に於いて、ジヰゼフイン・ベーカーが踊るならば、廣きクリシの大通りに長蛇の陣を敷いて、觀衆はその開場を待つのである。又吾吾は、その入口に近く二三人の男が、大聲で半狂亂の如く觀衆の中を叫び廻つてゐるのを見る。そしてその男の一人を捕へて「何か？」と問ふならば、「二百五十、二百五十」と連發し、又時としては、「三百、三百、五百、五百」と繰返すのである。彼等はプレミアー附きの切符を賣る者であり、そしてステーヂー眞下の平土間が、最もその高値を呼んでゐる。五百法のプレミアーも拂つて、綾なす脚光に纒りつかれてゐる、黒きジヰゼフイン・ベーカーの裸の足、裸の背、その筋肉のどよめきを見んものと、太西洋を渡つて來たヤンキーの紳士が、大きな弗入れから、千法の紙幣を無造作に撮出すであらう。舞臺の上よりそれを見渡すならば、爺捨山の田毎の月の如く、脚光の反映を浴びて光る無數の禿頭、「素敵、素敵！ アンコール、アンコール！」と熱狂して送る拍手の尾花を、望見することが出來る。それのみではなく、吾々はモダンの變態性、その變態性のパパリズムへと轉化して行く心理的過程に就いて、考へさせられねばならない。

×

私は、このモダンに於ける野蠻主義、換言すれば野蠻そのものに、

モダンの感じが發見せらるゝに至つた、その心理的過程をば說明する理論として、「社會過程の螺旋循環說」を考へる。そして社會過程の變位によつて、その社會心理が變質されるならば、要するにその社會心理を分享してゐるといふ關係に立つてゐるに過ぎない個人の心理は、その時代精神によつて、等しく變化せしめられねばならぬ者であるからである。

「社會過程の螺旋循環說」は、轉化の轉化であり、二重の辨證法である。今、ヘーゲルの考によるならば、世界は雜多なる相の對立によつて充されてゐる。そこに燦然たる光があるならば、又底知れない暗黑がある、包みきれざる歡喜に震へてゐる胸は、常に盡きざる哀愁に喘ぐ胸とその背を合せてゐる。斯くして富貴は貧賤と相對立し、善は惡に、美は醜に、正は邪に、各々その對立を見出してゐるのである。又吾々は、理想主義の對岸に唯物主義を發見し、古典主義に對して浪漫主義をば思ひ浮べることが出來る如く、「正」と「反」との對立を、あらゆる方面に於いて求め出すことが出來るのである。だから又近代的文化は古代的野蠻に對立し、モダニズムはバーバリズムと鋭く相對立するのである。

而もヘーゲルは、單にこの對立を認めるのみではなく、一つの「概念」は、その內既にそれと全く正反對なる概念の胚芽を、含んでゐるものである、そしてそれは唯に概念のみではなく、現象に於いて、又運動に於いて、それはそれと正反對の働きをば包有してゐるのである。今、右に向つて動くといふことは、左に向つて動く所の力を呼び覺し、熟するといふことは、腐敗するに冷却に向つて腐敗することであり、憤怒することは、又冷靜に歸らんとする第一歩である、だから利を追ふて狂奔する者は、却つて不利に向つて突進する者に外ならない、と考へて來たのであつた。マルクスによれば、彼はその原理を、「資本家は彼自らの墓穴を掘る」と呼び、淮南子は、「狗彘は器を擇ばずして食ふ、偸くも其體を肥せども、顧つてその死に近づく」と、即ち「家は彼自らの死の爲に肥ゆる」と、その警句をば發したのであつた。

今、この辨證法的過程を考へて行くならば、野蠻に對して文化が對立し、而もその野蠻の中には、既に反對物たる文化の胚芽が、存在してゐたのであつた。そしてその文化の胚芽は成長して、その培養したる野蠻を克服し、所謂文化時代を生み出して來たのであつた。けれどもその野蠻は全く消滅しされるものではなくつて、その文化の中に於ける大切なる要素として、——例へば、マッケンチーをして、野蠻的衝動の滿足の爲にする野蠻的制度と云はしめたる、又彼のグレーをして、野蠻人的なりと論ぜしめたる運動、競技、遊戲、戰爭の如き要素として、——介在し、又既に文化の中に、その反對物である野蠻の幼蟲か、存在すると云はるる所のものとなるのである。

ダーウヰンは、この事實を、「文化人は曾つて野蠻人であつたといふ證據を共有してゐる」と述べ、「現存する風俗、慣習、信念、言語の中

に、依然として以前の低き社會狀態を殘留してゐることによつて、明にその痕跡を辿ることが出來る」と論じてゐるが如く、この野蠻の幼蟲は、サムライ蜂の幼蟲の如く、その文化を母體として寄生し、文化の極點に近づくに伴ひ、その母體を蠶食して生長し、發展して來るのである。從つて鋭端化されたる文化は、再び野蠻化されて來なければならない。そしてそれは文化の野蠻への復活であり、轉化である。「歴史は繰返す」けれどもそれは單なる繰返しではなくつて、換言すれば、それは平面の上に於ける循環ではなくつて、時と所とを異にし、殊にその社會的意義を異にしたる聯鎖的なる循環である。それ故に私はそれを立體的循環と呼び、螺旋狀循環といふのである。

だから現代の野蠻は、一度文化の最高峰を越えたる野蠻であり、モダニズムはその中にこのババリズムを、散見せしめねばならない、必然性を有してゐるのである。

然らば何が社會をして、この螺旋狀循環の過程を取らしむるやが、問題となつて來る。社會現象は到底數へ切れない無數の原因の、無數の平行四邊形の關係、即ち合成・組合せの關係によつて結果されて來るのであつて、一二の原因によつて、完全にその結果を說明することは出來ない。けれどもこの場合に於いては、その最も有力なる原因として、人間の心理が、「感覺を算術級數的に增加せんとするには、刺戟を幾何級數的に增加せねばならない」といふ、ウエベル＝フエヒネルの法則に從つてゐるといふことと、又その刺戟の增加に際しては、遂てが或程度の限界性を有してゐるといふことでなければならない。

×

原始的野蠻人、彼等はホッテントットの如く、ブッシーの如く、全くの眞裸で生活してゐたに相違なかつた。從つて眞裸であるといふことは、恰も三助に對する如く、相手方を魅惑する何等の力をも特に有してゐなかつた。

長き惱みの後に或天才が、蔓草を腰に卷き、赤き葉をその性の機關の上につけることによつて、異性の注意を惹くに成功し、多くの人々も亦、その生殖欄の優越の爲に、爭ふて腰に蔓草を卷き始めたのであつた。やがて文化の幾分進むにつれて、フイジー土人の如く、蔓草は赤き小布片となり、小さき前垂樣のものとなつて來た。斯くしてその前が隱されるに及んで、人間の好奇心は強く誘發され、誘發した好奇心は又性的欲望をば引づり出して、その目的を達成せしめたのであつた。そこで小さき前垂は次第に大型の前垂となり、遂には腰卷となり、腰卷は臺灣の生蕃の如く、肩より袈裟がけにする風呂敷樣のものとなり、風呂敷樣のものは、全身を包む衣服と發達し、遂に足を包み、顏を包み、スカートを曳き、十二單衣となり、マリア・テレサ、マリア・アントネットの如く、腰を淺草觀音の大提灯に入れしが如き服裝となり、顏に網をかけ、全身を悉くその異性から、隱蔽して來たのであつた。

然し隱すといふことは、この極點に於いて、必然その限界に達して

來たのであつた。そこで人々は、再びホッテントットへと逆轉せざるを得なくなつて來た。そして吾々はそれを、歐米婦人のモダンなる服裝に見るのである。極端に包みたる彼女等は、その生殖權競爭の爲に、又魅力競爭の爲に、再びその服裝をば解き始めて來た。彼女等は先づその襟より頸を出し、次いで兩手兩腕を出し、肩を出して來た、そしてそれは愛人の接吻を、その唇に受ける前に序曲としてその肩で受け止めるためばかりではなかつた。彼女等は次に胸をばはだけて來た、又何時の間にか彼女等は、大膽にもそのスカートを、斷然切り取つて了つた。そして保安警察官の冷汗をよそにして、そのスカートは、寸又寸と短くされて來た。遂にはその薔薇色の膝小僧が、スカートから覗き出すに至つた。斯くして當局は、スカート條令を出して、そのホッテントットへの逆轉を、漸く喰止めたのであつた。然るに彼女等は、より新しき戰術を發明して來た。そしてその短く切詰められたるスカートをば、足を組み重ねて、ともすれば現れ出んとする膝小僧を絶えず氣にしてゐるが如く、異性と對話しながら、時々引下げ引下げて、特にそれを隱さんとするが如く努めるのである。「短きスカートを引く女」彼女は、隱すべきものをば持つといふことを、本能的にデモンストレーションせんとする者であり、フイジー土人が、小さき赤き前垂を下げてゐると、何等その野蠻性に於いて異る所はない。けれども近代人は、その野蠻性に素敵なモダンの感じを持つて來る、然し彼女等はそれに滿足してゐる者ではない、今やその靴下をも脱ぎ捨て了ふ、と陳腐なる社會を威嚇し、背中の中程、否腰部までも、その背筋の布を裂き取つて、露出して來たのである。それはモダンの極致でありとすれば、モダンの極致であり、野蠻の極致でありとすれば、又その野蠻の點に於いて、亞弗利加土人のそれと雄を競ふのである。だがそれは確に近代人の心に、悩しき魅力をば投與するものでなければならない。

×

こうやつて現代に於ける野蠻主義を考へて行くならば、先づ私は、眼の先に、「新婚旅行」の現象をば、思ひ浮べねばならない。私が土曜日の夜遲く、東京より大磯に歸るならば、その汽車の中に於いて、必ず一二組、時としては三四組の盛裝したる新婚旅行の人々と、乘合はすことを常とするであらう。そして私は、若き幸福にわなないてゐる、より善き半身とより惡き半身とのこの旅行に、何時も野蠻人の姿を見出さねばならない。そして私の友人Aが、「新婚旅行をなさいますからね」といふ媒酌人の申出に、「あれは野蠻人のやることでしてね、殊に多忙な私には、そんな時間もなければ、馬鹿げた眞似は出來ません」と答へたことによつて、「そんな古い心臟の男に、大事な娘はやられません、豪共の家の格式から申しました處で、新婚旅行位を致しませんでは、親戚の手前もありますので……、宜しう御座います、どうぞ斷つて下さい」と成金で、半可通で、モダンかぶれをしてゐる娘の母親から、切角纏りかけた婚談を斷れて了つた。そして彼は、

に、「君のいふことたんぞは、百害あつて一利もない、眞理は何つも貧乏で、砂利道をてくり、宜い加減の出鱈目や胡麻化は、自動車で何時もぶ飛してゐる、だから眞理をそのまゝ率直に云ふならば、君は時々友人の貧乏を製造して歩くことになる」と私に愉快な恨を述べながら、その片目を顯微鏡から放そうとしない、彼の結婚挿話を思ひ出さざるを得ない。

だが眞實に於いて新婚旅行は、野蠻人のなす掠奪婚そのものである。彼は先づ山奥に小屋を私に建築し、相手の女の油斷をば附狙つて、棍棒でその頭を擲る、人事不省となる、彼はその女を運んで、その山小屋に行く、そして彼は娘の親爺が諦めをつけて了ふまでは、決して人里には出て來ない。然るにその掠奪行爲はやがて結婚の儀式となつて來た、帝國ホテルに結婚の披露がなされるや、その會の半に新郎新婦は辭して、その野蠻人の夢を運んで、熱海に走り、或は箱根の森に隱れ行くのである。

又彼等野蠻人は、若しその掠奪せる女が美人であるならば、彼等はその逃亡を恐れて、腕環を嵌め、足環をかけて繋ぐ、——近代人はそれを婚約の指環として、蒲鉾形の黄金の指環で、「金の力で俺れの物とした」といふことを、資本主義的に象徴せしめてゐる、——又彼等は再び他人によつて、その妻が掠奪されることをば防止しやうと、その妻の顏に肌に文身をやり出して來た、——今、吾々はその風習を手近く臨アイヌ族の中に見ることが出來る、——のみならず、やがては文身を持つことが、美人であるといふ證跡であると考へられ、——男子の文身が、爭鬪の際に受けたる槍傷刀傷より發して、それが勇士の證據とされ、遂には自らその顏を傷け、臆病者までが、「これで本當の男だ」と考へる樣になつたと、同樣の心理過程によつて、——掠奪する者なき醜女までが、文身をやり出すに至つたのであつた。吾々はこの文身を、モダンの尖端を敢然として行くといふ婦人に見る、彼女等はその白き頰に、青黑き蜥蜴を彫り、赤き蝎を入れる。又彼女等はその愛人を更へるごとに、大きな黑子を入れて來る、だからそれは近代的なる「紋じらしのお芳」である。然るに吾々は、その黑子を多く書き込みたる半・モダンの女を、銀座の薄暮に見る、そして彼女等は、その黑子にモダンの感じを蠢かせ、モボは、その黑子の故に、彼女等を美人なりと誤斷する、そこに又蠻人心理の隔世遺傳がある。

吾々は猶この蠻人心理のアダピズメンを、近代人の驅落に見る。驅落の起原は古く原始野蠻人の生活に發し、それは家庭の束縛、部落社會の禁制、總てを無視するものであり、殺人罪と等しく重刑に處せられたのであつた。

而も相愛の彼等は、その死線を越えてその部落より走り、渡りし谿ての橋を燒き捨てて、當時自己の部落を離れては、殆どその生活が保障され得なかつたにも拘らず、猛然と愛の左證の爲に、決して再び歸らざる受難の漂浪に出たのであつた。今、吾々はその驅落の愛を誇示し、その驅落を謳ひ、その驅落を吾等の……驅落として讃美する、そ

ダンの一群を見るのである。

×

ダンス、殊にモダンのダンスに、吾々は野蠻を見る、そしてその野蠻性が吾々を、ダンスに引付けてゐる。今迄の文明、萍の文明、飾りに人巧的な虚飾文明は、人間の人間らしき本能を、總て資本主義の水壓機にかけて斃たばらしてゐる。吾々はだからそこに反逆、そこに、、そこに、、、總てを無茶苦茶にして了ふ、「野蠻」の翹望を持つてゐる。亞弗利加の鼓で踊られたる戰爭ダンスのジャズ、原始耶子林で踊られたるハワイの踊り、「目茶無茶にやらうよ」といふ合言葉、急調な、攪亂的な、非階調的な、貴族主義、古典主義をば大地にたゝきつけ、くちやくちやにして了ふ様な音調、それは聽覺の反亂である。そして吾々はその反亂につれて、運動感の泥醉的暴行を求めて來る、Jazz Jazz それは運動感のカクテールであり、パパリズムのモダニズムへの急轉である。

老い疲れたる人、得意滿面なる人、彼等は必ずその故郷に歸つて來る。虚飾文明に虐げられたる人、虚飾文明の最高波頭に立つ人、彼等は又必ずその心の故郷たる「野蠻主義」へと歸つて來る。そこに彼等の休養があり彼等の享樂がある。ベースの野蠻、憂然とブン擲く剛球、それは數萬のファンの血を沸かしむるに足る。ラグビーの野蠻、猛然たる體當り、決死の面魂、それは溂々たるモダンの興奮を呼び起して來る。拳鬪の野蠻、突き出す互腕、堂然と仰向け様に倒れる鬪士、流るる血、見る見る紫色に變る目の凹み、……三秒、四秒、よろよろと立ち上る疲勞困憊の肉塊、それは觀衆に窒息を强要する。競馬の野蠻、ドライブの野蠻、それはそのスピードの持つ恐怖の快感である、總てを突き崩し、總てを突破する興奮である。見よ！ 現代人の「蹴る・打つ・擲る・投げる・ブッ飛す」スポートに持つ興奮を！！ 血の攪亂、强猛なる刺戟、それは極度の神經衰弱症の爲にいら立つてゐる、全現代人の心理に對する痛烈なる慰安である。

又吾々にモダン味を與へてゐる總てのもの、それは何等かの形式に於いて、或は又その實質に於いて野蠻である。美術、彫刻に於ける近代的傾向の野蠻化、後期印象派、未來派、野獸派の野蠻味、そして又そのモダン味、演劇に於けるオストロフスキー派の幼稚さに於けるモダン的感興、手工、工藝、染色、圖案に於ける野蠻への降服と追從、クララ・ボウの手にするオペラ・バックは、そのモダン味に於いて、ヒリツピン土人のビーズド・バックに及ばざること遠く、又ある土人のジャケツは、圖案に於いて確に、洒落者ロイドのそれより數等モダンである。ハワイ土人の皮外套は、世界流行の源泉である巴里第一流の百貨店、ルーブル又はガリレー・ラファイローに於いてさいも、到底見ることの出來ないモダンの色調に於いて輝いてゐる。又モダンの建築に於いて、吾々はノアーの箱舟を銀座の中央に發見し、日本橋の十字街角に立てる白木屋に於いて、セントラル・エスキモーの原始住宅を考へることが出來る。そして丸ビルに於いて、吾見の百

を聯想し、ライト式建築の帝國ホテルに於いて、穴居生活をば實現する。ライトは云ふ、「建築物は人間の墓である、然るに今迄の建築物は人間を壓倒してゐた、故に吾々は穴居の生活に歸り、反對に建物を壓倒せねばならない」と、そして彼は土色の壁、低き天井、薄暗き間接光線の部屋をば造出したのであつた。又モダンの人々は、その穴に坐して、蛙を食ひ、蝸牛を食ひ、豚の孕み兒の蹄を食ひ、羊の腦味噌の丸茹でを、その皿に載せる。斯くして彼等は蠻人の如く、食はざる所の物なきを以つて、モダンの生活なりと誇示し、その腹にまでババリズムのモダンを、侵潤せしめて行くのであつた。—(終)—

## 新刊紹介

◇**産業合理化**(小島精一著・世界最近の經濟的大勢としての産業合理化運動の技術と效果とを組織的全面的に檢討し、勞農ロシアの合理化的計畫に迄研究は及んでゐる。商學全集の第一回配本・東京京橋第一相互館・千倉書房發行・價壹圓五十錢)

◇**敢然頂角を往く**(三荒芳德著・氏の論集である、東京京橋實業之日本社・壹圓五十錢)

◇**善き隣人**(村島歸之著・大阪府方面委員後援會の委囑により書かれたもの、成人教育に於ける公民科教科書として好適・大阪創元社・定價壹圓五十錢)

◇**勞働婦人問題**(織本貞代著・小形婦人パンフレットの一册・東京麴町八丁目二〇・無産者發行・定價十五錢)

◇**平野國臣傳**(春山育次郎著・六三〇頁に亘る志士國臣の詳傳・東京麴町下六番町一〇・平凡社・定價參圓八十錢)

◇**勞働宰相マクドナルド**(澤田謙著・發行所同前平凡社・定價壹圓五十錢)

◇**一自由人の放浪日記**(石川三四郎著・著者の大戰中滯歐八年間の放浪記と、思ひ出の印象記とを集めた肩の凝らぬ示唆多き紀行、通信、隨筆集・發行所平凡社・價二圓五十錢)

◇**遠き山脈**(長岡孝一詩集・小石川區小日向臺町二ノ二六・詩洋社・價壹圓五十錢)

◇**現代生活者**(鴇田英太郎著・死に直面して出した戲曲集、現代生活考以下七篇執れも夭折を惜しむに足る鋭才と熱情を藏す・東京本郷湯島切通坂町一九ロゴス書院・定價二圓八十錢)

# 文藝に就ての二三の考察

武者小路實篤

○

好き嫌ひは個人的なものである。甲が好きなものは乙がすきとはきまらない。比較的多くの人にすかれるものがあるが、それもその好きな程度が人によつてちがふ。

食ひ物なぞはそれが露骨である。ある好き嫌ひは習慣でかはり得る。しかしもつと根本的に生理的に先天的にきめられてゐる場合も多い。

ひどい例をとると菜食の動物は、いくら肉の御馳走があつても食ふ氣にはならず、餓ゑ死にする。肉食獸は又、草や葉を見て食慾は起さない。それは好き嫌ひ以上かも知れないが、しかし直ちに血や肉になり得る分子があるのはたしかだ。たゞそれを消化する力がないだけだ。自分に消化する力がないものは、いくらあつてもないにひとしい。

果實なんか實にうまいものと思ふが、嫌ひなものにとつては、うまいとは思へないにきまつてゐる。

甲の好きなものがなぜ乙が嫌ひであり、乙が嫌きなものがなぜ甲が好きであるか、それは化學的に調べて見たらば説明がたつ時がくるであらう。その人の血液と食物の成分との關係によつてきまるものかと思ふ。或はその人の味覺の神經の成りたちによつてきまるものかと思ふ。どつちにしろ、理窟ではない、理窟より前である。勿論嫌ひなものを無理にたべてゆくと、ある所まで好きになる場合がある。それはその人の血や、肉がいく分變化したことを意味する。味覺の神經なぞも、ある刺戟がくりかへされるとたしかに變化するやうに出來てゐるかと思ふ。煙草や酒が始め嫌ひな人が、すきになると夢中で好きになる事實はそれを證明してゐる。

だから始め嫌ひだつたものが、いつまでも嫌ひとは云へない。同じことが藝術についても云へる。始め嫌ひだつたものが、好きになると云ふことはあり得る。

しかしそれは好きになつたから好きになつたので、以前嫌ひだつた

時は嫌ひだつたのだ。

だから今僕がある作品にたいして、好き嫌ひを感じてゐたからと云つて、あとでその反對にならないとは限らない。しかし今の僕は好きなものは好きで、嫌ひなものは嫌ひだと思ふより仕方がない。

個人の好き嫌ひでもの丶價値はきまらない。

たとへば僕は正直に云ふと、ドガやロートレークはさう好かない。しかし二人の作品の價値は認める。秀れた天分は認める。そしてそのデツサンにしろ、色彩にしろ、實にしぶくつて、進んでゐることを認める。そして中々頭も動き、神經もかよつてゐることを認める。ただその彼等の最も得意の方面が、僕の内面生活とはごく少しの共通點切りもつてゐないのだ。

ドガを實に尊敬するルノアールの畫は僕は實に好きである。しかしドガはさう好かない。尊敬はするが、又嫌ひではないが、夢中に好きとは云ひない。その冷たさを好まない。その冷たさが又い丶にはちがひないが、どうもその世界の範圍がかたよりすぎてゐる。しかしからは云へても、あるドガの女の肖像や、裸體なぞで中々すきなのがある。それだけ見てゐれば滿足する以上、之が一番すゝんだ藝術だと思ふかも知れない。ともかく類のない世界をもち、其處で徹底してゐる。

僕は以前嫌ひだつて、今隨分好きになつてゐる最大の一人はルオールだ。ルオールは今日本で最も大きな影響を與へつ丶ある一人だ。ルオールの價値を認めるものは中々多いと思ふ。或はルオールの價値を世界で一番認めてゐるのは日本かも知れない。我等は本物を多く見る機會がないから、想像を多く働かせる。ルオールの畫は恐らく想像以上の處へ入つてゐるだらうが、自分達はいく分自己流的に考へて感心してゐる所があるかも知れない。

僕は始めルオールは隨分不愉快な代物と思つてゐた。實に奇怪を好む、こけおどしな、取る所のない畫家だと思つた。こんな畫家がどうしてフランスでは問題になつてゐるのだらう。新しもの好きにも程があると思つた。しかし今になると、ルオール位ゐ自分に正直な、孤獨な道を追求していつた人は少ないやうに思ふ。奇を好むなぞと云ふ、或は見物をおどかすと云ふやうなことから恐ろしく緣の遠い人だと云ふことがわかつた。あすこまで行つたのは、あすこまでゆかないとおさまりがつかなかつたからにすぎないことを知つた。

今の自分にはルオール程かつちりしたものをひたすら求めてゐる畫家はないやうに思へる。ゴオホは燃えてゐる。實に熱烈に仕事をしてゆく、彼は髮をさかだて丶仕事をして行つたやうに思ふ。しかしルオールは又まるでちがつた方法で、實に力づよくかつちりした仕事をして行つた。セザンヌ程大きくはないかも知れないが、ある點ではもと追求して、がつちり肉薄してゐるやうに思ふ。

セザンヌは廣がりをもつてゐ、構圖を考へ、色の關係を見つめ、一方熱烈ではあつたが、靜かさと、餘裕をもつてゐた。其處がセザンヌ

を大きく深かくしてゐる。しかしルオールはそのためにある點でセザンヌより一歩進んだ、肉薄した、動かせぬものにぶつかつた。

　これ以上追求出來ない所まで、畫を突つめていつた。鋼鐵のやうな畫をかいた。僕にはそんなやうに思へるのだ。僕風の考へ方かも知れない。そして益々唯一の道をより深かく歩いてゐるやうに見える。彼は變化しないのである。轉身しない、ひた押しにゆくやうに見える。餘裕がない。そして無駄なものや、浮なものはとかされて形を失なつてしまひ、のこるものはエッセンスだけになる。かう云ふと少し云ひ過ぎかも知れないが、ともかくがつちりしてゐる點、追求してゆく點で無類のやうに思へる。

　かう云ふ畫になると好き以上になる。

　色は思ひ切つた色だ。顏なぞも美しくはない。ガラス繪をかいてゐたせいか、線がふとすぎる。そんな人間はあり得ないやうなものをかく、だが其處までゆかなければ、おさまらない畫家の力と氣ハクが感じられる。自分の生命力を出し切らなければやまない、そしてそれを對稱を得て生かし切つてゐる、彼が宗教的な畫をかくは當然と思ふ。彼は人間の內にすむ、最も奧底のものを生かさうとし、それを生かす呼吸をのみこんでゐる。レンブラントの宗教畫の最も深いものと、共通なものがあると云つても、ほめすぎではあるまい。しかし彼はこゝまで來られるまでには隨分ながい間の努力が必要だつたと思ふ。

　自分はこゝでかう云いたい。

藝術には社會性は人が思つてゐる程必要なものではないと云ふことを。

　孤獨な道を歩いてゐる藝術家の方が、社會的な要求を滿足させる藝術家よりも遙かに人類的であり得ると云ふことを。

　このことはあたりまいすぎることだが、しかし今の日本では一般的にはその反對が信じられてゐる。

　人間は實に澤山のかずにわかれてゐる。しかしその精神には肉體に共通な點が多いやうに共通點は多いのだ。そして異人種の間にも立派な子供が生れうるやうに、心の方にも共通があり、お互に接觸することで子供が生れ得るのである。お互に愛し得ることも出來、秘密を話り得ることも出來、美を樂しむことも出來る。

　たゞある畫のよさがわからない人があれば、それはその人にその畫がわかるまでの用意が出來てゐないのである。

　一人の人が自分の內心の要求に從つて畫をかくのは、同時に他の人の內心の要求に從つて畫をかくことになるのだ。

　多數が協力することは肉體の世界に於て必要なのである。しかし藝術の世界では、多數が中途半端の仕事をするよりは、一人でもすぐれた仕事をするものがあれば、その方がいゝのだ。學問の方でもさうだ。ある眞理は、多數が發見するのではない。その眞理を生かすのは多數であらうが、それを發見するのは、二三人、或は一人である。勿論その人は用意されてゐるから發見出來るので、先人と無關係に發見

するのではない。しかしそれも發見するのはごく少數だ。それをあとの人が人類全體の智識にするやうに骨を折る。そしてそれがやがて人類全體の常識になる。しかしその本當のことがわかるわかり方には等級がいくらでもある。だから發見者が同時に解說者である必要はないのだ。解說の方は他の人にまかせていゝ。殊に通俗的に說明するのは他の人に任せていゝ。そして自分はもつとすゝんでゆけばいゝ。たとへばアインスタインの云ふことがわかる人は十人なくともいゝ。その五六人の人が、百人の人にわかるやうにしやべれば、百人が、千人、萬人に、そして千人、萬人がつひに人類全體に、信仰的にこれが本當だと云へば、あとは、よくわからないなりにさうかと思ふ。そして反對說が勝ちを得るまでは、わからずなりにそれを信じて安心してゐる。

だから學者は誰にでもわかる文章をかゝなければならないことはない。五人か、六人の人にわかる文章をかいてもいゝのだ。

碁の名人の石のおき方が、本當にわかるのは高段者であらう。その高段者の說明をきいて、二三段の人が尤もと思ひ、それからあとはわからずなりに、人が感心するから感心するので滿足する。

美術の方でもさうである。誰にでもわかつてその上、うんといゝものをかく人もあり得る。それは又それですばらしい。しかし同時に、心ある人が見ると、ごまかしでくだらないものが、一般の人には尊敬されると云ふことはいくらでもあり得ることだ。文學なんか殊にさうである。しかしさう云ふものは、いつのまにか、少數の眼のいゝものによつて眞價を露はし、そして遂に一般の人も下らないことに氣がつく。

それに反して本當にいゝものはごく少數の人に切り理解されないことがあつても、その少數の人が、より多數の人にそのものゝよさを知らせ、そしてその多數の人が一般の人にそのよさを知らせる。たとへばセザンヌの畫の如きはそのいゝ例である。一般の人がセザンヌを認める前に、ごく少數の人が感心し、影響をうけた。その影響をうけた少數の人が世界の美術を指導する位置に立つ資格のある人々だつたから、つひにセザンヌが世界の美術に實に大きな影響を與へた。同じことがマネーについても云へる。

だから通俗的なものでなければ、民衆を動かすことが出來ないと云ふことはない。むしろ通俗的な民衆に理解されるために、自分の調子をさげたものは、（民衆の心にしみこむためにより調子を高くする人もゐる。それならいゝ）まもなく民衆からおいてきぼりされる。それに反して、眞に人類の生長に役に立つ仕事をしたものは、直接に民衆に理解されないでも、多くの進んだ人々を通して民衆の生命に交涉する。人類にはいろ／＼の役割をする人があり、適所適材につくことで、全體がより生ればいゝので、眞理の發見と、それを通俗化するとは、一人でやる必要はないのである。だから自分の實力を知り、自分の天職を知るものは、孤獨な道を歩くのが、自分の道なら孤獨の道を歩き切るのがいゝのだ。それがやがて人類の心にふれるのだ。

○

僕がよく人類と云ふ言葉をつかふと、誤解することの名人は人類なんてゐない。人類の意志とか、心とかはないと云ふ。

しかしさう云ふ人は人間と云ふものが共通なものゝ上に立つてゐることを知らないものだ。そして個人は人類の一部であることを知らないのだ。そして個人が人類の生長のために存在してゐると云ふ簡單明瞭な事實を知らないのだ。正義と云ひ、道德と云ひ、プロレタリアの運動と云ひ、美と云ひ、皆それ等のものは人類全體が完成に向つて生長しやうとする事實のあらはれにすぎないのだ。だから人類の生長に害のある處までのさばつた思想や行動は罰せられねばならないのだ。

我等が仕事をするのも、自分の生命を出來るだけながいきさせたく思ふのも、又戀愛や、親の愛も、皆すべて人類の生長に有益な時、それは美であり、それに有害な時、それは醜になる。他人と競爭するのは美しい。兩方が生長することは、ごく少しにしろ人類の生長に役に立つから、しかし競爭するために他人を落し入れるのは醜い。それは人類の生長に反する行爲だから。萬事この物指ではかれば、我等の美とするもの、醜とするものは、一つの目的に我等を進めさせうと思つてゐるものゝ意志を感じるであらう。その意志こそ我等を導く源動力である。

火藥が大砲の丸をとばす、それは事實だ。そしてとばされたものは、とばされただけとぶより仕方がない。我等人類も、人類の生命力の事實に從つて生てゆくより仕方がない。最後までとまることは出來ない。

天才と云ふものは、この意志に一番從順な人間を云ふのだ。彼は途中ではとまれないのだ。ゆく處までゆく、それもすべつて足をふみはづして行くのではない。内心の要求に最も忠實になつて、ゆく處までゆかないとおちつかないのだ。彼等は妥協は出來ないのだ。

其處が實に面白いのだ。

彼等は決してその當時の社會や、民衆と妥協はしない。彼等はそれ等の内で、實に自己の内心に忠實に生るのだ。自己の確信通りに生るのだ。さもなければおちつかないのだ。だから當時の社會の人から見ると、馬鹿に見えたり、野蠻人に見えたりする。

今から見ればあまりに巴里人と思へるマネーなぞも實におどろくべき野蠻人に思はれてゐた。ムアーがマネーがスペインから歸つて來た時、國境をこえる時、旅行劵でマネーと云ふことがわかると、皆さわぎしてその野蠻人を見に來て、野蠻人に見えないのを不滿がることをかいてゐたやうに思ふが、それは當然なことである。

レンブラントは進みすぎて、皆に愛想をつかされ、貧乏のどん底におちた。彼等とて他人に嫌はれるのが好きなのではないが、自分の心をあざむくことが出來ないだけだ。

自分は今日ルオールに同じタイプの人を見出した。

しかし正直云ふと、自分はこゝでルオールのことが云ひたいのでは

ない。ルオールのことでは他に僕よりよく知つてゐる人がゐる。

○

僕の云ひたいのはある藝術家についてだ。

日本では今プロレタリアの文藝でないと、本當の生命のある文學ではないやうに思つてゐる人が多いらしい。しかし本當のことを云ふとプロレタリアの人々の生命を正しく生かすことが人類の生長に役に立つ仕事だから、その點で、その爲に役に立つ文學も價値があるが、人類の生長はあらゆる方面に人間が働くことを要求し、あらゆる方面に人間の心が働くことを要求してゐるのだから、プロレタリア文藝以外でももつと人類の生長に役に立つものは大いに尊敬せらるべきで、このことを本當に知らないものは、人類の生長に役に立つものまで否定して得意になる愚をほこりにしてゐる。

プロレタリアのために人類があるのではなく、人類のためにプロレタリアが人間らしく生られるやうになることが必要なのだ。つまりプロレタリアの人々の内にある天命も個性も生ることが、人類の生長に必要なことだから、プロレタリア文學が存在の價打があるのだ。つまりプロレタリアの文學の價値は何處にあるかと云ふと、各個人の生命が健全に生きることが必要であり、又各個人が自分に一番適當な仕事をたのしみをもつて自發的にやつてゆけるやうになることが必要だから、その内心の要求から生れるプロレタリア文學だけが、文學としては價値があるのだ。

だからプロレタリア文學の主張者たちが、個人の内心の要求を無視する傾きのあることは、本末を轉倒してゐるのだ。

このことは今のぼせてゐる人達にはわからないであらうが、いづれわかる時が來ると思つてゐる。

それと同時に、プロレタリアではない人間の書いたものでも、人類の生長に何等かの意味で役立つものは十分價値があるものである。人類は大きな木のやうなものだから、あらゆる枝、あらゆる根が生長することが、大きな木に必要なやうに、人類にとつても、あらゆる方面で、人々が働き、そして自己の仕事をより完成に近づけてゆくことが必要なのだ。しかしそれは金もうけや、位置の高まることを意味してゐないことは當然である。自己の所謂、天職を何處までも果してゆくことが必要なのである。だから本當の畫家の仕事の出來るものは、その方で、うんといゝ畫をかいてゆけばいゝのだ。なまぢつかの畫をかくものは人生の娛樂を供給するものとして役に立つだけであるが、しかし本當の藝術家は各個人の生命に生長力を與へる。生命の源からくる血を各個人に供給する一つの泉になる。

さう云ふ泉になつた藝術こそ人類的な藝術と云へる。

階級鬪爭專門家は、かう云ふ文藝の存在を否定する。しかしそれは事實を無視した議論であり、文學の發生した第一の原因を見ないものだ。文學の生れた最初のものは歌である。そしてそれは異性を求める歌か、生命力のあふれた鬪爭の歌である。しかしその鬪爭は階級意識

から生れてゐない。狩りの歌や、敵と戦ふ時の歌だ。野蠻人が獅子狩をする前にうたつておどるのを活動で見たが、勇氣を鼓舞する、生命の唄だ。階級と云ふものは人爲的なものであり、人間の弱點から生れたものだ。人間が萬能なら階級は生れない。人間は殺されやすいものであり、死にやすいものだから、生るためにはいかなる屈辱もしのび、勞働も辭さない。そして一方人間は他人を奴隷にしても樂をしたい虫のいゝ根性がある。だから學校に通ふ子供時代から腕力の強いものは、餓鬼大將になる。そして弱いものは連合してやむを得ず服從を強ひられる。そのかはり弱いものは餓鬼大將をやつつけることもある。之等は自然ではあるが、しかしそのよくないずるい性質が、社會の病所を利用して發達しすぎた今日では、社會の關係は自然とは隨分ちがつて來てゐる。金をもうけるなぞと云ふことは、人間の生れつきに知つてゐることではない。こんなことをかくと切りがないが、僕の云ひたいのは、文學は自然の聲である所に特色があると云ふことだ。だから純粹の文學は詩である。人間の本來の生命からあふれた言葉なしには文學も、藝術も生れないことを自分は斷言出來ればいゝのだ。そして社會は、どう云ふ時に文學の材料になり得るかと云ふと、その人間の本來の生命を脅迫する時に、文學の材料になり得るのだ。なぜかと云ふと、人間が生きやうとする時、それに邪魔になるものには無關心ではゐられないから、本氣になつてそれにぶつからないではゐられないから。

だからプロレタリアの人々が今の社會に無關心でゐられないのは當然である。彼等は生きる力が強ければ強い程、今の社會とぶつかるのはやむを得ない。だから今の社會のことが問題になるのは當然だ。柵のなかの動物が柵が氣になるのは當然なことだ。生命力の強い動物程、柵が氣になるであらう。尤もあまりに柵になれたものは存外平氣かも知れない。プロレタリアの作家の内でも、純粹のプロレタリアの人より、學生上りの世間知らずの人の方が早く過激になると云ふことは當然なことでもある。

しかしどつちにしろ、文學の生れる目的は社會を研究することではなく、本心を生かすといふ點にあるのだ。だから文學上の偉大な作はその人の本心のまゝに生きやうとする力の偉大さに比例するのだ。

トルストイ、ドストエフスキーのやうな人間が今のロシヤの文壇にゐないと云ふのは、二人に比敵する程、強大な力をもつて根本から根氣よく生きやうとする人が居ないと云ふことになる。

―ロシヤの今の社會で滿足する作家は段々社會的に關心を持たなくなるであらう。そして最も非社會的な作品をつくるであらう。さうでない人だつたら、その社會の缺點を最も痛切に感じてゐる人にちがひない。

人間は身體がわるくなければ身體のことは忘れてゐる。社會がよければ社會のことは忘れる。金に困らない作家は今の社會にはあまり不服を感じないから、社會のことはさう問題にならないのは當然であ

る。

しかしそれはその人の素質にもよる。

こゝで自分は一歩進んで云ふが、文學にとつては社會のことをかくのが目的ではないのだ。社會のことをかくのは生命の生きやうと思つても、生きられない程度がかきたいからだ。つまり嵐にまげられた木は嵐の強さを示したいからまがるのではなく、まがりたくはないが、仕方がなしにまがる、しかしいつでも起き上らうとしてゐる。見る人は嵐の強さによつて木の強さを知り、其處に力を感じる。

我等は文學以外のものでは人間の本心を知ることが出來ないのだ。少くも今の我等にとつては、人間の言葉を通して本心にふれ得るものは文學以外にはないのだ。

所が、近頃はその文學にさへ人間の本心は不必要になりかけてゐる。プロレタリア文學の政治意識、通俗小説の讀者意識は、やゝもすると人間の本心をごまかす。

自分の好きなものを好きと云へなかつたり、自分でそら〴〵しいことを知つてゐながら、だまされて見たりする。それでは困る。本當のプロレタリア文學はます〳〵人間の本心をかゝなければならない。通俗小説はます〳〵人間の本心にふれるやうにしないといけない。それが出來れば、本當の文學になる。

○

文學は何のために存在するか。

それはいろ〳〵の方面から説明出來ると思ふ。自分はそれをこゝでは腦の細胞の生理的性質から説明して見たい。

之には多くの獨斷があるかも知れない。しかし僕には自明の事實だと思つてゐる。そしてかう云ふ見方をする人がゐないのが、自分には不思議に思へる。

僕は人間がなんのために存在してゐるか知らない。しかし草木が何のために存在するか知らないが、たゞ自然の許された範圍で生長しやうとしてゐることだけはわかる。それは草木の性質だ。

人間も自分の身體をよくしたいと思ふのは、さうするのが氣持がいゝからに過ぎない。身體を丈夫にすると氣持がわるかつたら、人間は身體を丈夫にしやうなぞとは思はないであらう。腹がへると飯が食ひたくなるから食ふ。食ひたくないやうに出來てゐたら食はないだらう。

小説だつてさうだ。よみたいからよむので、よみたくなかつたらよまない。

だから問題はなぜよみたいかにある。

階級闘爭をしたいから飯を食ふのではない。又小説をよむのではない。

腹がへるから飯を食ふのだ。なぜ腹がへると飯が食ひたいのか。それはわからないが、生きる爲にそれが絶對に必要だと云ふことはわかる。

なぜ小説をよむか。この方はさう簡單にはわからないであらう。

しかしそれは讀まないと、心が空虚になるからだ。退屈するからだ。何故退屈したり、心が空虚になつたり、淋しくなつたりするか。腹がへるのには生理的原因があるやうに、人間が孤獨にしてゐては淋しくつて仕方がないことにも生理的原因があるにちがひない。

自分は説明する必要のない程自明なことを云ふ。筋肉が發達することが筋肉のよろこびであるやうに、腦の細胞も發達したがつてゐる。そしてそれには他人の腦の細胞の動きに自分の腦の細胞を共鳴させることが必要なのである。つまり人間の腦と云ふものは一人でも發達するがそれでは不完全で、矢張りいろ／＼の人の腦の細胞の動きをとり入れて、そして自分の腦をより完全に發達さしたい代物に出來てゐると思ふのだ。

だから自分の腦の細胞よりも、よりよく動ごく腦の細胞の活動に接することがよろこびなのだ。之は運動競技についても、畫や音樂についても同じことが云へる。その他、いろ／＼の人のことをきくよろこびも、つまりはそれによつて自分の腦が發達するよろこびなのだと僕には思へるのだ。

音樂や畫については他日にゆづるとして、文學はその點、一番露骨なものと思ふ。心を動かさずに文學をかくことは出來ないと思ふ。しかしその心の動かし方が、人によつても、時によつてもいろ／＼である。頭が緻密に動く人もあれば、粗雜に切り動かない人もある。緻密に動いても一部切り動かないで、他は眠らされてゐる人がある。碁や將棋の名人だとか、骨董にこつてゐる人だとか、又ある專門のこと許りやつてゐる學者など、その方には頭が實におどろく程動いてゐるが他は動かない。だから他の人には中々通じない。なぜあすこに石をおいたのか、それがわかるためには一生碁をやらなければならないでは困る。さう云ふ人も一人や二人、何百萬人に一人位ゐはあつて面白い。勿論さう云ふ人の心がけを聞くのは面白い。誰にもわかることがあるが、專門的な話になつてはとてもわからない。文學はさう特殊的であつては困る。文學者はもつと一般的に、全部的に頭を動かし、鍛えてゆくことが必要だ。

人間の腦はより賢くなりたいと云ふ本能をもつてゐる。いろ／＼のことを深かく知りたい、又出來るだけ緻密に動きたいと同時に、出來るだけ大きく、活潑に、廣々と動きたい。

文學はこの要求に(無意識的ではあるが)應じて生れて來たものと見ることが出來る。

だから文學は子供の時から、生理的に要求されるものである。

どの階級に屬するものも、ともかく飯は食はなければならない。そのやうにどんな人間でも、他人と話をせずに、自分の理解はつきりすると云ふことはないのだ。又他人と話をせずにゐられない。そしてこの話の要求を出來るだけ完全に滿さうとするのが文學である。そしてその文學の要求は、腦の細胞が生理的に要求する要求で、僕は賢くな

りたい、すべての腦の細胞が出來るだけ活動したいと云ふ要求にすぎないのだ。

だから我々の尊敬する作家と云ふものは、我々よりも、よく頭を動かしてゐる作家であることが必要なのだ。それは全的に我々よりもよりよく頭を動かしてゐる人ならばなほいゝ、しかし部分的でも、我等の腦をよりよくしてくれる力がある人なら存在の價値があるのだ。

なぜさう我等の腦が完全に生きたがつてゐるか。それは我等がさうつくられてゐるからと云ふより仕方がない。

文學に我等の腦を生々させる力がある限り文學はいつになつてもこの世に存在するものであらう。

神には文學は不必要だ。完全にいつでも腦の細胞が動くものには文學は不必要以上だ。だが他人から教はるものがあり、他人の頭の動きにあはせて自分の頭を動かすことが時には必要であるやうな人間がつくられてゐる以上、文學は存在する價値がある。

どんな流派に屬さうと、どんな主義に屬さうと、この目的に叶ふ文學は存在の價値があるのは當然である。その他の文學はあれば、健全な胃の腑からは食慾を起されることは出來ないであらう。(二九、一〇一九)

# 蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　德富猪一郎

## 第五十二　所謂る自治黨

話後に戻る。明治二十年『國民之友』は、發刊以來の傾向よりすれば、予は當時世の所謂る自治黨と稱する、井上侯の仲間に加入すべきであつた。この仲間は井上侯を首領として、青木、野村、陸奥、西園寺、光明寺三郎、其他の新進氣鋭の士等、その中に數ふべき者多かつた。彼等は世の所謂る歐化主義者にして、予の言葉で云へば、貴族的急進主義者であつた。予は從つてその連中には、悉くとは云はぬが、大概ね親しかつた。就中、井上、西園寺、陸奥、青木等の人々とは、最も親しかつた。併し予は彼等の所謂る貴族的歐化主義が、予の平民主義と何處やらしつくり喰合はぬ所があるかの如く感じ、その爲に彼等の傍には近付いたが、彼等の仲間とはならなかつた。併し當初の關係は、最後迄順縁、逆縁、種々の意味に於て取り續いた。

予は陸奥伯がその身を民間黨に投ぜん事を、期待と云はんよりも寧ろ希望して居た。併し陸奥伯は却つて山縣内閣の働き役者となり、恐らくはその力に依つて土佐派を懷柔し、遂に第一議會の解散を見ずして終はるに至らしめた。これに就いては、當時の予は寧ろ不平であり、不服であつた。

×　×　×

予は何處迄も藩閥政府とは絶對反對にして、憲政樹立の急務は、唯だこれを打破するにありと考へ、その爲には全力を盡し

りたい、すべての腦の細胞が出來るだけ活動したいと云ふ要求にすぎないのだ。

だから我々の尊敬する作家と云ふものは、我々よりも、よく頭を動かしてゐる作家であることが必要なのだ。それは全的に我々よりもよりよく頭を動かしてゐる人ならばなほい丶、しかし部分的でも、我等の腦をよりよくしてくれる力がある人なら存在の價値があるのだ。

なぜなら我等の腦が完全に生きたがつてゐるか。それは我等がさうつくられてゐるからと云ふより仕方がない。

文學に我等の腦を生々させる力がある限り文學はいつになつてもこの世に存在するものであらう。

或者には文學は不必要だ。完全にいつでも腦の細胞が動くものには文學は不必要以上だ。だが他人から教はるものがあり、他人の頭の動きにあはせて自分の頭を動かすことが時には必要であるやうな人間がつくられてゐる以上、文學は存在する價値がある。

どんな流派に屬さうと、どんな主義に屬さうと、この目的に叶ふ文學は存在の價値があるのは當然である。その他の文學はあれば、健全な胃の腑からは食慾を起されることは出來ないであらう。(二九、一〇一九)

# 蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　德富猪一郎

## 第五十二　所謂る自治黨

前後に戻る。明治二十年『國民之友』は、發刊以來の傾向よりすれば、予は當時世の所謂る自治黨と稱する、井上侯の仲間に加入すべきであつた。この仲間は井上侯を首領として、青木、野村、陸奥、西園寺、光明寺三郎、其他の新進氣鋭の士等、その中に數ふべき者多かつた。彼等は世の所謂る歐化主義者にして、予の言葉で云へば、貴族的急進主義者であつた。予は從つてその連中には、悉くとは云はぬが、大概ね親しかつた。就中、井上、西園寺、陸奥、青木等の人々とは、最も親しかつた。併し予は彼等の所謂る貴族的歐化主義が、予の平民主義と何處やらしつくり喰合はぬ所があるかの如く感じ、その爲に彼等の傍には近付いたが、彼等の仲間とはならなかつた。併し當初の關係は、最後迄順縁、逆縁、種々の意味に於て取り續いた。

予は陸奥伯がその身を民間黨に投ぜん事を、期待と云はんよりも寧ろ希望して居た。併し陸奥伯は却つて山縣內閣の働き役者となり、恐らくはその力に依つて土佐派を懷柔し、遂に第一議會の解散を見ずして終はるに至らしめた。これに就いては、當時の予は寧ろ不平であり、不服であつた。

× × ×

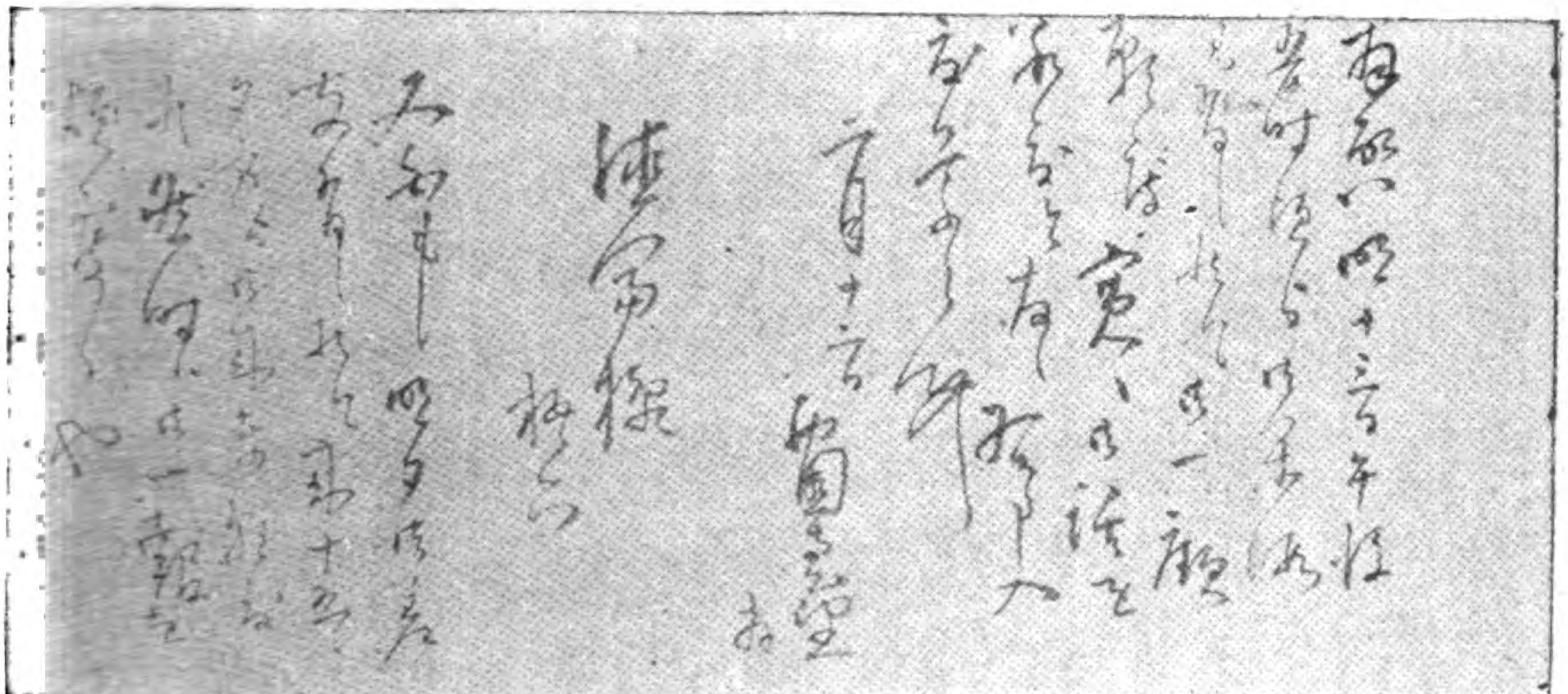
予は何處迄も藩閥政府とは絕對反對にして、憲政樹立の急務は、唯だこれを打破するにありと考へ、その爲には全力を盡し

た。然るに山縣内閣が松方内閣となるや議會と政府との衝突に依り、遂に解散となり、二十五年二月には愈々總選擧となつた。

此時陸奥伯は内閣に在つたが、彼は寧ろ伴食に過ぎず、一切の仕事は内務大臣品川子爵と、次官たる白根男爵がやつた。所謂る世にも名高き松方内閣選擧大干渉とは此事である。

## 第五十三　明治二十五年の選擧大干渉

松方内閣と云ふも、首相の松方公は何れかと云へば、常識に富んだ穩健なる人で、とても選擧干渉などを自らなす人でもなく、又たなす事を好む人でもない。併し内務大臣品川子爵は、吉田松陰先生の愛弟子にて血性男子である。彼は反對



西園寺公の書牘(明治二十一年頃)

黨を見る事、恰も朝敵を見るが如く、明治二十五年の選擧干渉は、戊辰の初、鳥羽、伏見の役に於けると同樣に考へ、敵を退治するには、手段方法などを撰ぶ處では無いといふ事にて、殆んど露骨なる大干渉をした。

當時予は熊本縣なる予の先輩、山田武甫翁の熱心なる希望に應じ、相伴つて下縣し、翁と共に熊本縣下を遊説し、九死一生の目に逢うた。當時横井小楠門下の安場男爵は、福岡縣知事として九州探題となり、熊本縣は同じく横井門下、松平正直君これを率ゐ、しかもその退治せらるゝものは、熊本は無論、福岡縣の柳河邊に於ける在野黨は、概して横井小楠門下と云ふ能はずんば、その類であつたから、謂はゞ同じ仲間の戰さとも云ふべきで、保元、平治の亂もこれには過ぎずと思はれた。

予は當時熊本から玉名郡を振出しに島原に渡り、島原から口の津を經て天草に赴き、天草から風波の爲に、途中の小嶼に停泊し、漸く葦北郡佐敷に至り、それより球磨川に傍うて溯り、人吉に至り、又た人吉から球磨川を下りて八代に。八代から益城、宇土を經て熊本に歸つた。

球磨川下りの時などは、人吉の壯士等が鐵砲、刀などを携へ、時々舟中から兩岸に向け發砲して過ぎた。斯くて選擧の結果は、概して民黨の爲に不利であつたが、しかも熊本では大極に山田翁一人當選する事が出來た。當時山田翁の歌に、

殊更らにかき亂さずば山里の
水もかく迄濁らさらまじ

とあつたが、全くその通りであつた。

## 第五十四　選擧後の歸東

扨愈々選擧も濟んで歸京する事となつたが、隣縣の福岡縣は最も亂暴で、野田卯太郎、永江純一氏なども、頗る危險の目に逢ひ、永江氏の如きは、足を傷けられ、遂にその爲に一生跛となつた程である。斯る次第であつたから、同志の者が心配の餘、予に智慧をつけた。それは明朝春日驛（今の熊本驛）から出發すると宣言しつゝ、今夕池田驛（今の上熊本驛）から出發し、吾々同志が護衛して門司まで送り屆けるといふ事に取極めた。然るに同夜は山田翁宅に案内せられ、薩摩汁などの御馳走があり、愈々停車場に馳付けた處、最早や汽車は出た後にて、今更ら致方無く、停車場の茶店に一泊する事となつた。當時茶店は未だその普請が成就せず、別に寢具なども無く、隙洩る一月の夜風には隨分閉口した。而して護衞の一人たる高田露氏は、今更ら相濟まずと、頻りに予に向つて謝罪つた。これは拙者が意地が汚たなく、御身が立たんとしたのに、今一杯と薩摩汁を喫した爲に、此の失策を來したのである」など云ひ、孰れも一笑した。

斯くて高田露、井上敬次郎、高木第四郎、阿部充家等諸氏相伴ひ、門司にて下車すべき處を、故に一驛前なる小倉に下車し、其處にて晝食をしたゝめんとしたるに、如何なる間違ひか、飛んでもない處に飛込み、今更ら歸へるに歸へられず、怪しげなる婦人等が、狼藉として寢こゐる室の附近にて、兎も角も食事をなし、漸く船に辿りつけば、その船には選擧干渉の親

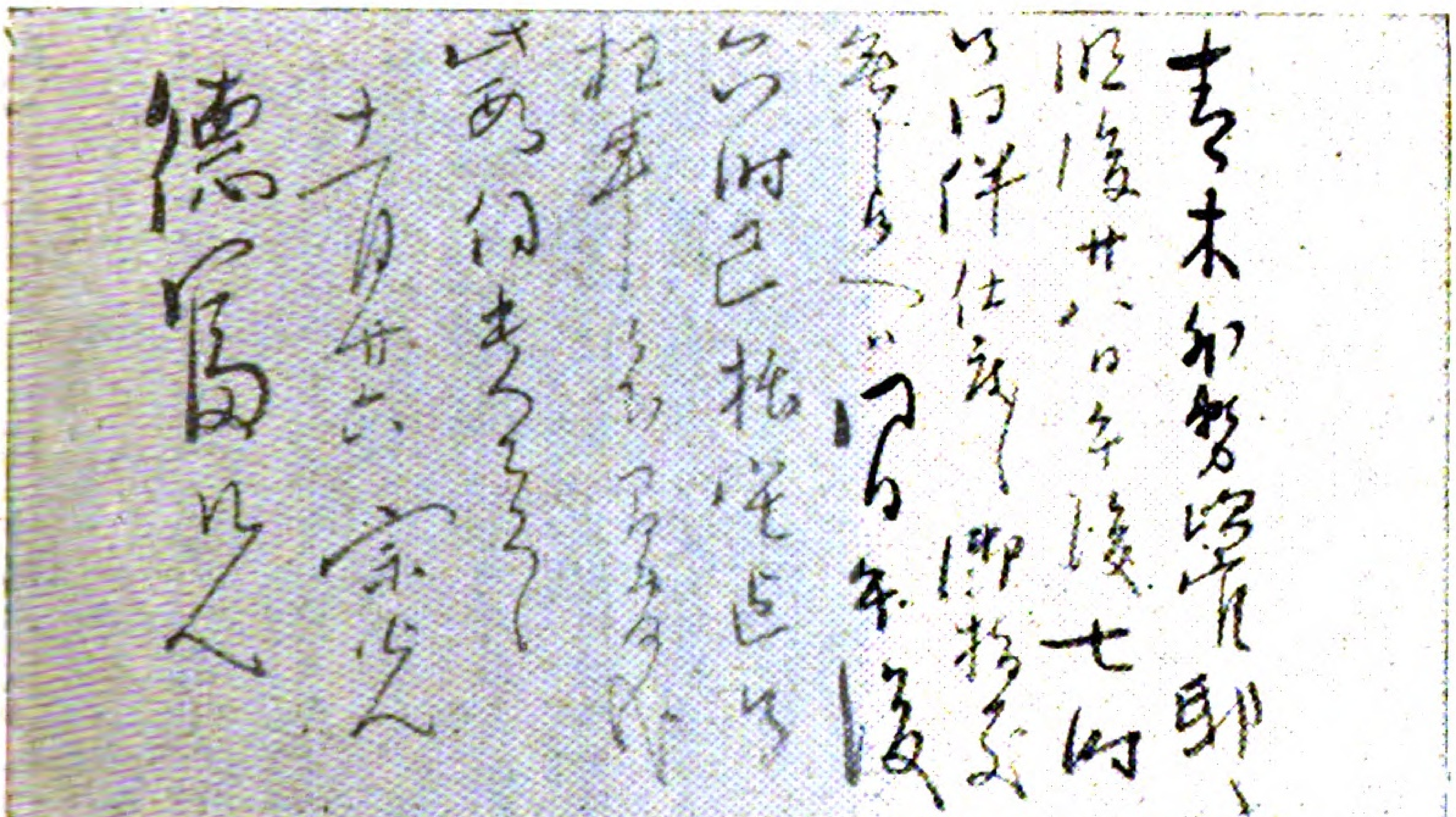
玉安場、松平等孰れも先着し、安場男の如きは槍の穗を杖に据ゑ、それを杖きながら跛足を引ずり、甲板を往來し、意氣軒昂の有樣であつた。

而して此の小さき船中には、佐賀縣にて落選したる松田正久氏なども乘船してゐた相だが、氏は三等船客の中に混じ、毛布を被つて寢てゐたから、誰もそれと氣付く者が無かつた。即ち同志者たる予なども、一向それとは氣が付かなかつた。

（昭和四年七月三十一日　民友社に於て）

## 第五十五　陸奥宗光伯と予

總選擧の結果は無論吏黨が多數で、民黨は少數であつた。併し禍は内から生じた。松方内閣に於て農商務大臣陸奥伯の如きは、當初から選擧干渉に反對であつた。彼は自ら松方内閣の副總理でなければ、參謀長を努むべき資格の人であつた。然るに對議會策に就いては、内務大臣品川子、次官白根男等の手に掻き集められ、陸奥伯は殆んど口を容れ、手を下すの餘地は無かつた。その不平知る可しだ。予は第一議會の際に、陸奥伯が妥協に骨折りたるを快からず思うてゐたが、今松方内閣に居ながら、其の政策に反對したるを見て、自然舊交を回復するの止むなきに至つた。



陸奥宗光伯書牘（明治二十年頃）

陸奥伯は内閣の内情を、その儘予に語つたから、『國民新聞』の政治記事は、恰もX光線もて照すが如く、内閣の状況は暴露せられた。從つて政治新聞としての『國民新聞』が、聲價を擧げたる事は、半ば陸奥伯の賜と云つてもよからう。斯くて松方内閣に於ける

内相品川、農相陸奥は、殆んど相搏つの姿となつて、双方共に總選擧の後、臨時議會の前、即ち明治二十五年三月の中旬に辭職した。從つて從來政府と妥協したる自由黨、殊に土佐派の自由黨なども、悉く民黨に復歸した。

× × ×

斯くて種々の經緯があつたが、二十五年八月には、第二の伊藤内閣が出來、元老總幕出揃の内閣となつた。即ち樞密院議長伊藤公が首相となり、黒田伯は遞信大臣となり、山縣公が司法大臣となり、而して陸奥伯は外務大臣となつた。この内閣の成立に就いては、陸奥伯なども餘程骨折つたらしかつた。當時伯は西ケ原の邸からよく山下町の帝國ホテルに出掛け、予も亦屢々伯と會見した。當時伯はランドルフ、チャーチルの演説集等をポケットに入れ、閑を偸んでそれを讀んでゐた。

伊藤公は當時小田原の滄浪閣に居たが、陸奥伯は屢々これを訪問し、種々獻策してゐた。伯の語る處に依れば、『折角伊藤に意見を注入し、愈々ものになつたと考へて歸へれば、間もなくそれが取消されて、元の木阿彌となる事がある。これは寔に困つたものである。要するに伊藤を動かさんとすれば、巳代治を動かす他は無い。今日では伊藤なども元氣が抜けて、若者の巳代治などに動かされてゐる次第であれば、なかなか一氣呵成に物事をやると云ふ事は六ケ敷い』と嘆息してゐた。

實に陸奥伯は聰明と云ふ程度を通越した程の明敏なる人で、井上侯が中心勢力である時には、侯を動す爲に、自分では高慢ちきの鈍物であると心中では冷笑しつゝも、表向きは青木周藏子と結托し、又たその胸中では、巳代治などは相手ともしたかつたであらうが、伊藤公を動かす爲には、巳代治の歡心をとる事も辭せなかつた樣だ。

× × ×

そは兎も角も、陸奥伯は此の如くにして、外務大臣の要職に就き、初めて錐が嚢中に置かれた。これから穎脱するのは當然の事である。予は初から藩閥政府に反對するのが目的であるから、陸奥伯が松方内閣と葛藤を生じた時に、陸奥伯と接近したのは勿論であるが、扨愈々第二の伊藤内閣が出來上つて見れば、これ又た松方内閣よりも文明的ではあるが、依然たる藩閥内閣には相違ない。從つて又た予と陸奥伯との政治的關係は、追々疎遠とならざるを得なかつた。

それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た昔同樣自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、殊に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於ては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

× × ×

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも内地雜居反對の論者が尠く無かつた。これは政府部内にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、徹してそれであつた。予は當初より内地雜居論者であつたが、併し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に歸着した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約に從へば、凡有る外人は居留地以内に封込まれ、その爲に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手嚴く、徹底的にやるといふ事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困まらしめて、自ら兜を拔がしむるに如かずといふ意見であつた。この意見は改進黨も、保守黨も、頑固黨も期せずして一致し、此に所謂る六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干渉に依つて出で來り、西郷侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又たその中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

## 第五十六　自由黨と予

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から滿腔打破一點張りであつたから、自由黨の態度を齒がゆく思ひ、これを新吏黨などと名付けて盛んに攻撃した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題した中に『星亨何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亨氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直な事が此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身に書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亨と德富猪一郎との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、それ程星派で咎立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執着する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝罪を云つて、其儘濟した方が、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣鋭の予は、斯樣なる損德の打算杯を考慮する餘裕も無く、此方も愈々喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して遂一論談するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

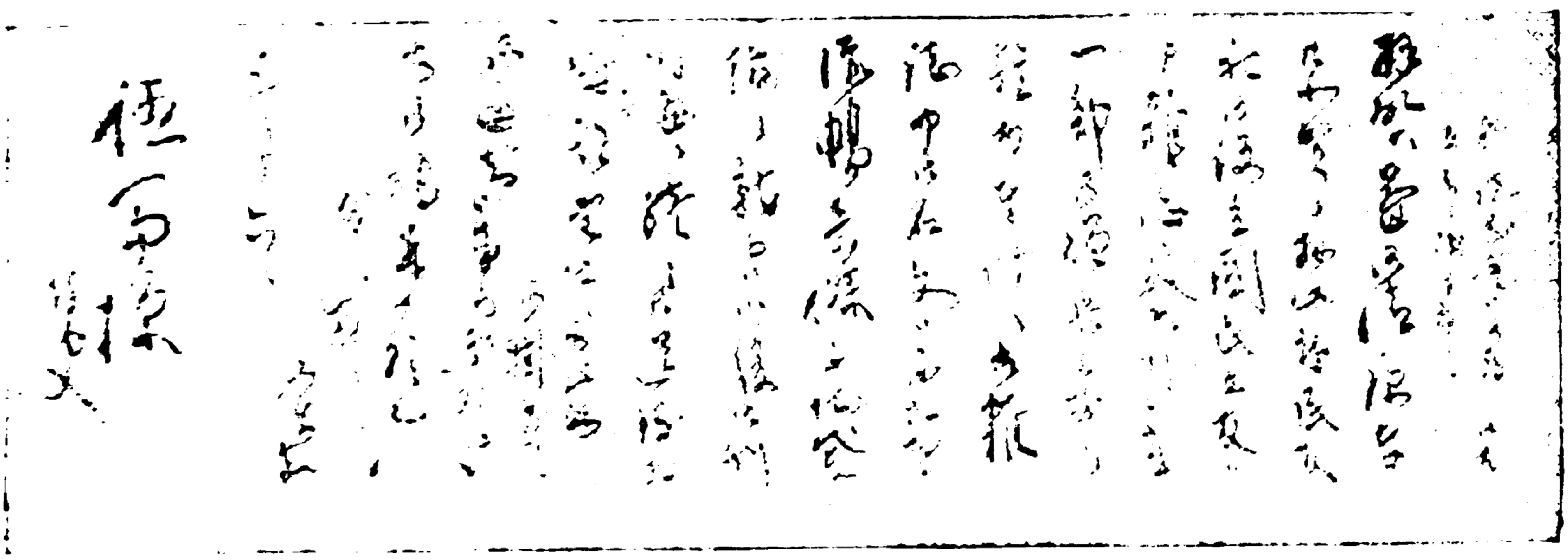
斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絶交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、扨困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派新聞、雜誌の攻撃及び身體に關する危險等は暫く措き、地方の自由黨員には、國民新聞不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、それを回復するには十數年の歳月も猶ほ不足であつた。

此の如くにして陸奥伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政

治上では甚だ疎遠と云ふよりも、寧ろ反對の側に立つ事となり、陸奥伯の如きは、嘗かねて文明的急進論者の徳富氏が、非内地雜居論者など〻肩を並べて、乃公等の政策を妨害するとは怪しからぬ』と云ふ事にて、予に對しても多大の遺憾の情を含んでゐた樣であるが、明治三十年の八月伯が病むや、予は故に西ケ原の邸に見舞うたが、併し岡崎邦輔君等が『只今接見しては伯が亢奮するから』との注意に依り、殘念ながら相見ずして去つた。伯は『徳富氏に逢つたらば、一議論試むる積りだ』と云つてゐた相だが、予も實は伯の此の世を去る以前に、從來の經緯に就いて、相語りたき事が尠くなかつた。若し次の世があらば、或は相見て呵々大笑するかも知れない。

（昭和四年八月三日　民友社に於て）

## 第五十七　陸實氏と予



陸實氏書牘（明治二十年頃）

當時の在野黨は六派聯合と稱して居たが、其の六派は何であつた乎。兎に角自由黨を除くの外、其他の野黨は、主義に於ても、歴史に於ても、孰れも是迄何等の縁故は無く、寧ろ互に鎬を削つてゐたものであつたが、所謂る條約斷行論、即ち對外硬と云ふ點に於て一致した。而して此の團體には、政府黨及び當時に於ては、準政府黨とも云ふべき自由黨の外の新聞、雜誌は、孰れもその同盟に加擔した。されば其勢ひは殆んど全國を席捲せんとした。

新聞雜誌方面に於ては、表立つては專ら志賀重昂氏等が當任幹事として骨折つたが、内輪の畫策は專ら、日本新聞社長陸實氏がやつてゐた。陸氏は狷介不羈、氣節を以つて立つ昂々乎たる東北の一男兒として知られ、又た莊重勁拔の文章に秀でたる記者として知られてゐたが、予はそれだけを以つて、陸氏を稱贊する者は、皮相觀の甚であると思ふ。

君は善き意味に於て、なか〳〵謀を好んだる策士であつた。而して君の手は政界の裏面には、たか〳〵よく動いた。而して餘の事は兎も角、政治上に就いては、可成り融通も利いて居た。君は谷、鳥尾、三浦等と云ふ國粹論者、若くは保守論者たる將軍連とも懇意であつた。又た神鞭知常、高橋健三氏等とは兄弟同樣の親みを持つてゐた。而して井上毅、杉浦重剛、小村其他政界の浪人者、有志家等へも、知己朋友が多かつた。其中に於て、予も又たその一人に數ふべきであつたらう。

予は當時專ら此の運動に就いては、陸君と相談した。而して相談する毎に、陸君の思慮はなか〳〵周到で、吾等の如き粗枝大葉の者が、とても追付くところでは無いと考へた事が、幾度かあつた。而して種々の文案等を起草する時なども、予と陸君とは何時も其の委員であつた樣だ。曾つて予が檢束と書いたのを、陸君が束縛に改めては如何だらう抔とて、予も一議にも及ばずそれに同意した事があつた。斯る文句の上でもなか〳〵注意深かつた。

×　　×　　×

此の機會に於て、予と陸君との交りに就いて語るであらう。

予は明治十九年の夏、双方の友人和田正修君と共に、君を牛込揚場町の寓所に訪うた。當時君は尙ほ明治政府の小役人であつた。官報局であつた乎、制度取調局であつた乎、それは覺えて居ないが、高橋健三氏が官報局長として、多分君はその局員の一人であつたと思ふ。予が『將來之日本』の出で來るや、當時新に發行せられたる『出版月評』なる、新刊書評論を專門とする雜誌に、貫牢野史と題して、その批評を揭げたものがあつた。予は一讀して、多分それが陸氏である事を感付いた。貫牢と云ふは陸君の名、實の字を二つに割いたものであらう。併しその事は當人には訊さずに濟んだ。

## 第五十八『日本』と『國民』

やがて君は官を辭し、靑木貞三君等の後援に依つて、初めに『東京電報』なる新聞を發刊し、明治二十二年二月憲法發布の頃から、之を『日本』と改題し、發刊した。而して君はこの社長であつた。

『國民新聞』は、明治二十三年二月に發刊したから、正しく一

年遅れたる弟である。然るに此の二新聞は、その主義主張、趣味嗜好等に於ては、互に氷炭相容れぬ程に反對してゐるに拘らず、孰れも殆んど商賣氣を拔きにしたる書生流の新聞で、孰れもその讀者は實業家とか、金持ちとかで無く、寧ろ論客、志士、其他世の中と共に俯仰しない、特色ある人々を得意とする事に於て一致してゐた。而して社員の見分や風儀は、互ひに異つてゐたが、社の組織と云ひ、社と社員との關係と云ひ、孰れも互に有志家の團體を持つてゐた事に於て一致してゐた。

× × ×

併し何と云つても『日本』は歐化主義の失敗したる時に蹶起し、天下の反動の氣運に乘じて出で來り、しかもその援護者は有力者のみにて、社友とも云ふ可き人々の中には、陸軍の將軍連の外、副島伯などの老先生もあり、又た大學出の古き學者達もあり、地方に於ては有力なる——暴力團とは云はざるも——その名を聞いてだに、人をして慴伏せしむるに足る壯士團體等もあり、なか〱それに向つて競爭すると云ふ事は、容易の業では無かつた。

× × ×

固より日本新聞社には、福本日南等の如き、如何なる問題で
あらうが、如何なる文體であらうが、向う所敵無き健筆家があ
る。又た詩人としては天下一品と云はれたる、國分青厓氏など
があり、又た文學方面には正岡子規、繪畫方面には中村不折、
又た海外の投書家としては、池邊三山等があり、實に濟々たる
多士であつた。

× × ×

予は陸羯南とは初から懇意の間柄であつたが、日本新聞社中の
人々は、恐らくは予を異端者として、必らずしも蛇蝎視せざる
迄も、中にはそれに幾き者があつたかも知れない。

然るに六派聯合、對外硬以來、種々の相談にて親しく其の社
にも往來する事となり、偶々『國民新聞』が、發行停止となつ
たる先は、予は深井英五君を伴ひ、神田雉子町なる日本新聞社
に赴き、吾等の原稿を『日本』に掲載した事もあつた。是は何
人も意外としたる所であるが、政治的熱は時としては異分子さ
へも、融和せしむる事があり、時としては同一分子さへも、分
解せしむる事がある。

右の次第にて、『國民新聞』と『日本』とは、從來の行掛りな

ら議論より、文章の總てに至る迄、互ひに其の兩極を代表してゐたが。而してその讀者も若し極端を云へば『日本』は、頑固老人の爲めに愛讀せられ、『國民新聞』は、青年子弟の爲めに愛讀せらるといふ傾向があつたに關はらず、社會に於ては、兩々相對して居た。

× × ×

但た予は當時他の新聞は相手とせず、常に『日本』を相手としてゐた。其の紙數なども、略々伯仲の間にあつたと思ふ。併し正確の事は分らぬが、『日本』六、『國民』四、若くは『日本』五半、『國民』四半と云ふ位の所であつたと思ふ。然るに日露戰爭後、間も無く、陸君は病の爲に日本新聞社を他に讓渡し、自分は鎌倉極樂寺の幽邃にて、病を養つてゐたが、其時『日本』の記者の若干が、國民新聞社に收容されたるを見て、陸君は予に書を與へ、

『汝何ぞ楚人の多きや』

と云ふ文句を拔き來つて、其の感慨を述べ來つた。併し讀者たる予が、其の手紙に打たれたる感慨は、作者たる君の感慨よりも深かつたであらうと思ふ。君はやがて逝き、予は其の後碌々として今日に至りたるが、しかも今や君とは異りたる意味に於て、又た方法に於て、予も又た『國民新聞』と別れたる事は、今更ら實に人事は、決して豫想通りに行くものでないと云ふ教訓をしみ〴〵と味ひ得た。

## 第五十九　對外硬と對外自主

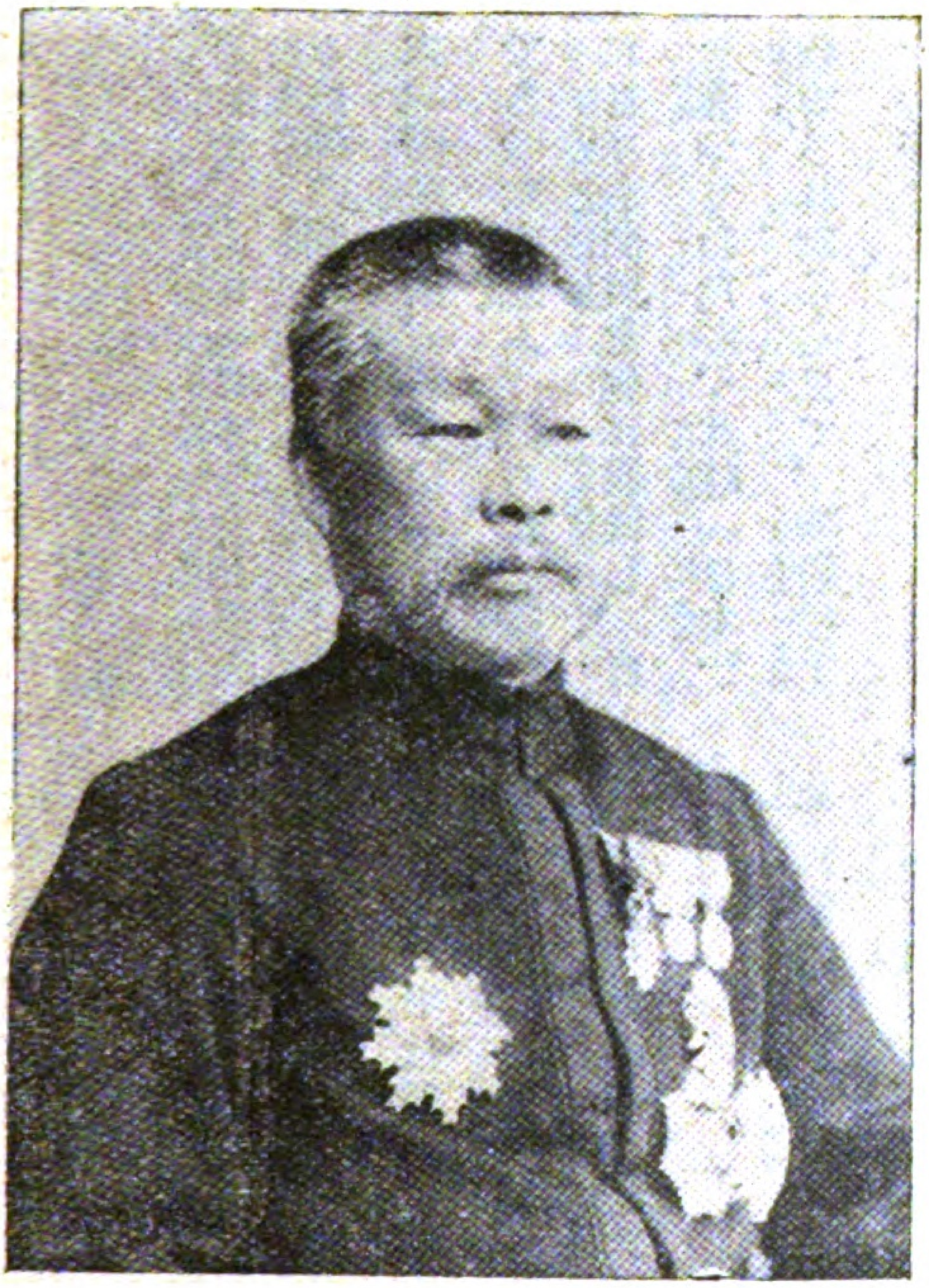
尚ほ對外硬と云ふ事に就いては、予一個人としては、聊か腑に落しがたく覺えた。自分は對外政策は、かうとか何とか豫じめ定むべきものでは無い。唯だ外交は何處迄も他國に追隨する外交で無く、自國の外交は、自國を主としての外交であらねばならぬ。其處で予は自主的外交の文字が、最も適當であると信じてゐる。

予は當時に於て既に内地雜居贊成者であつた。又た當時に於て、既に或る範圍に於ては、ローマ字の採用又た宜しからするの論者であつた。予は日本が勝手次第に支那の文字や、支那の文學や、支那の制度を自由に利用したる如く、歐米の文明に就いても、又た然かすべきものと信じてゐた。されば同じ對外硬の仲間でも、内地雜居反對論者等とは、大いにその意見を異

にしてゐた。

此に於て予は對外硬なる總稱の下に、彼等の仲間に卷込まれてしまはん事を慮り、自分では自主的外交なる文字を作し、これを以て標語となさんと試みた。而して予自らは、多忙であつたから、旨を社中の或人に告げて『自主的外交』なる小冊子を、國民新聞社の同體異名なる民友社から刊行した。

斯る次第で對外硬の名は、その時限りの文字として、消失せたが、自主的外交の文字は、今日に於ても猶ほ生命ある文字として、現存してゐる。此の運動の間に、予は前にも述べたる如く、所謂る貴族的急進論者、即ち歐化主義者の人々、若くは舊自由黨の方面に於ける人々等、尠からさる友人を失うたが、他方に於ては、又た是迄緣も由縁も無かつた人々と交際するの便宜を得た。例へば此の六派聯合の運動の際に、近衛公とか、三條公とか、谷將軍とか云ふ人々は勿論、やがては品川彌二郎子、高島鞆之助子、樺山資紀伯等と云ふ、薩長の人々とも、面接し、若くは交際する事を得た。然るに此の運動は、東洋の風雲急を告げ、朝鮮に於ける日淸の衝突が、目睫の間に迫り來りたる爲に、やがて條約勵行問題から一轉てし、朝鮮に於ける自主的外交の問題となり、其爲に運動は愈々實際問題に接近し來つた。



樺山資紀伯肖像

吾社は本來武斷政治に反對し、文治主義を主張し、交戰主義に反對して、平和主義を主張した。しかも朝鮮問題に就いて、淸國の態度甚だ横暴にして、動もすれば朝鮮を併呑して、吾を威嚇せんとするの勢を示し、吾が帝國の國防上一大危險の迫りたるを見るや、吾社は猛然として、朝鮮に向け出兵を主張した。若し『國民新聞』が唯一なる出兵論の唱導者で無かつたならば、少くともその一で

あつたに相違は無い。而してやがて豐島沖の海戰となり、成歡、牙山の役となり、清國に對する宣戰の詔勅は發布せられ、此に於て從來の政爭は、全く一時中止の姿となつた。

(昭和四年八月二十日　民友社に於て)

## 第六十　二十七八年役と予

明治二十七八年戰役は、日本の歷史にとつても、又た予一個の歷史にとつても、孰れも重大事件であつた。而して予が一生にとつては、又たこれが一大回轉機であつた。予は是迄藩閥政府を相手に、最後迄戰ひたる一人である。此に最後迄と云ふは、議會開會前後から、從來の民權論者にも、往々藩閥政府と妥協したものがあつたからだ。

然るに一度二十七八年役が起るや、予は藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ、擧國一致清國に衝る事を當面の急務とし、それに向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犧牲とした。世間では此事に就いて、予の事を彼是非難したる人もあつたが、それは各々の量見で致方が無い事として、予自身としては、苟も公人として世に立つからには、大勢に順應して、大勢を率ゐると云ふ事は、當然の事であらうと思ふ。況んや此の二十七八年の役たるものは、吾等自らその張本人たるを以つて居らざるも、尠くともその急先鋒の一人たる事に於てをやだ。

× × ×

當時何れの新聞も此事に熱心したが、殊に福澤諭吉翁は、最も熱心であつて、確か一萬圓の軍資金を獻納したやに覺えて居る。

予は是迄印刷を秀英舍に一任して居たが、新聞が盛大になるに從つて、段々不便を感じたから、新に印刷機械を買入る丶などの準備をなし、聊かながらも吾社には貯蓄もあり、又た印刷機械買入れの爲に、或る鑛山業者から若干の資金を借り受けたれば、その事に着手せんとする間際に、此の事件が突發した。故に夫等の爲に用意したる一切の資金を、悉く此の事件に投じ去つた。予は政府に資金を獻納する程の力は無かつた。されど予の力の有らん限りを以つて、吾が新聞を此の事件の爲に提供する事とした。

恐らくは其爲に從軍記者の數は各社を通じて、吾社ほど多數の人を出した社はあるまいと思ふ。先づ最初に朝鮮には阿部

家君、又た畫報記者としては久保田米僊君、その子米齋君、金僊君等も、追々出掛けた。其他社員、社友及び臨時徴發の人人を加へれば、前後を通じて殆んど三十人にもなつたかと思ふ。軍隊の通譯たる熊谷直亮君、又た出征したる梅田又次郎君等は、社外の通信員として、前者は枕戈生、後者は一老兵の名にて、他の新聞の容易に追隨する能はざる通信を送つた。而して松原岩五郎君の如きは、釜山より陸路京城に出掛けて、第一軍桂師團に從ひ、遂に海城の籠城迄もした。又た古谷久綱君などは第二軍に從ひ、軍隊中の最も年少者として、頗る重寶がられた。又た國木田獨歩は千代田艦に搭乘し、所謂『愛弟通信』——通信文を其弟國木田收二君に宛てゝ、書翰體に認めたるもの——等に依つて、頗る異彩を放つた。而して又た久保田君の繪畫通信は、その方面に於ては、最も他に先んじ、且つ卓越の技倆があつたから、やがて平壤陷落後は歸朝し、廣島大本營にて、御前揮毫の光榮を忝くする事になつた。

× × ×

『國民新聞』は是迄は軍隊仲間にも評判が善くなく、又た所謂る薩長人士の如きは、極めて少數なる松方公其他を除けば、徳富などは國を賣る逆賊で無ければ、その手先き位に考へられてゐたものであつたが、予が此の戰爭に對し、凡有る犧牲を顧へ
り見ず、奉公の誠を致さんとする態度は、追々彼等も諒とする
處となり、その中には意外の方面に、意外の友人も出で來つた。
その中で最も先に擧ぐべきは川上將軍であらう。當時の川上將
軍は、參謀次長であつて、參謀總長は、有栖川宮熾仁親王であ
り、事實川上將軍は參謀本部の首腦であつた。
予を將軍に介して呉れたのは、吉井一三君、同志社出身の予
の後輩であつた。彼も小芋の一人であつたから、此際種々の親
芋連中に、予を紹介して呉れたのであらう。併しそれよりもよ
り多く予を紹介したのは、『國民新聞』が、戰爭に對する俊敏な
る働きであつた。從來予は川上將軍とは、何等の緣故も無かつた
と云はんよりも——川上將軍の予に對して如何に思うてゐたか
は知らぬが——予としては、川上將軍には決して好感を持たな
かつた。と云ふ譯は、予は父の友として曾我老將軍と懇意であ
つた。而して老將軍と共同して、『日本國防論』なるものを、明
治二十一二年の頃『國民之友』に掲げて、手厳く當時の陸海軍
に對する批評を試みた。而して曾我將軍等は、當時の參謀次長

川上操六、陸軍次官桂太郎等に排斥せられたる人々であれば、その人々が彼等に對して好感を持つ筈は無つた。

× × ×

桂、川上と云へば、陸軍の花形であつたが、當時桂將軍は第三師團長として名古屋に在り、中央では殆んど川上將軍の一人舞臺であつた。尤も川上將軍にも油斷のならぬ相手があつた。それは上には山縣元帥てふ巨頭を戴き、下には陸軍次官兒玉源太郎てふ豪の者が控えて居た。併し陸軍大臣としては大山公爵があり、彼の沈默の中に於ける常識と、威信とは、極めて統一し難く、極めて混和し難き陸軍をば、兎も角も纏めて居た。而して俊敏なる川上將軍の上には勿論、その傍ら及びその下には、兒玉とか寺内とか、種々の山縣派の小姑共が居り、又た野津とか山路とか、なか〳〵手に負はぬ前輩若しくは同輩の人達もあつたが、然も將軍はその間に、上手く操

を取つて居た。

## 第六十一　川上將軍と予



川上大將肖像

而して川上將軍の最も

とも云ふべきは、當時の

たる伊藤公と妥協して居た事であつた。これは單に川上將軍の力からばかりでは無く、伊藤公の力からも、所謂る心あれば水心と云ふやうな事であつたらう。謂ば山縣派に對する伊藤、川上の攻守同盟とも云ふべきものであつたかも知れ無い。

而して川上將軍は參謀次長の職權からして、鐵道にも關係を持ち、鐵道會議の議長として、世間の政客及び實業家など丶接觸を保つてゐたから、單りサーベル連中ばかりで無く、その

外にも、輕視し難き勢力を扶植しつゝあつた。

× × ×

予は川上將軍と一見舊の如く、忽ち親しくなつた。而して當時予は社長でもあり、主筆でもあり、探訪者でもあつたから、種を取るには川上將軍の宅に如くは無き事を知つて、殆んど毎朝出掛け無い事はなかつた。宅は今大橋新太郎氏の邸宅の一部であつた。當時は參謀次長の宅としては、寧ろ見窄らしい程であつた。玄關の次に應接間が二つあつたが、それも薄き襖や板戸で隔てゝゐたから、その話はよく隣室に聞えてゐた。

× × ×

予は川上將軍から種を取るばかりで無く、その會見を待つ間、その應接室の控室にて、多くの人々と出會し、その雜談中から往々大切なるヒントを得た。その中で今猶ほ記憶してゐるのは、高島嘉右衛門氏が將軍を訪ねて、種々話をしてゐる中に、傍で聽けば、『易を引いて見たが、戰には勝つが、併し心配の事がある。それは招かざるの客三人あり。云々の卦が出たから、御注意あつて然るべきであらう』など〻話してゐた。將軍も固よりであつたらうが、予も又た『當るも八卦、當らぬも八卦と云ふが、斯るたわいも無き話をするとは、扨も好奇きの親爺である』と思うてゐた。然るにその翌年、所謂る三國干渉が出で來り、此に於て『招かざるの客三人』なるもの〻意味が、漸く分つた。此等は偶中と云へば偶中であるが、又た不思議と云へば、不思議とも云ふ事が出來よう。

× × ×

序ながら又た話して置く事がある。當時高島、樺山等の諸將軍は、松方内閣の沒落以來、暫らく閑地に在つたが、吾等對外硬論者は屢々その門を叩いて、意見を開陳した事があつた。然るに宣戰の詔勅出ると間も無く、樺山提督は軍令部長となつて戰地に去つた。

× × ×

予は或日紀尾井坂の邸に伯の子愛輔君を訪ね、四方山の話をしてゐた。然るに愛輔君は、端なく予に豐島沖の戰に就いて話つた。予は恥しき事ながら、その時迄は此事を知らなかつた。君は恐らくは予も知つてゐるものとして、話したかの如くであつた。これを聞いた予の驚きは知るべきであつたが、予はさあらぬ態に聞流し、殊更に落着き拂つてしばらく話込み、而して門

を出づるや否や、車を傭うて大急ぎに急がしたが、生憎その車夫がヨボヨボで、殆んど辛抱しきれぬ程であつたが、さりとて車を降りて駈け出す事も出來ず。兎や角社に歸へり行くや否や、直に號外を出して奇勝を報じた。

　これは一例であるが、予は吾が身體を殆んど千百にして、凡有る方面に駈けずり廻つてゐた。予がその通りであれば、社中の面々が緊張してゐた事は、云ふ迄も無かつた。此の如くにして『國民新聞』の盛名は、隆々として毎戰毎に世に擧つた。而して發刊當初から殆んど七千程度を上下してゐたものが、戰爭中は一萬臺を越え、一萬五千臺を越え、殆んど二萬を越ゆるに至つた。

（昭和四年八月二十一日　民友社に於て）

# 第六十二　大本營の移動と予

　扨八月には大本營も愈々廣島迄進轉する事となつた。予は當初から身も魂も、此の戰爭に打込んで居たから、廣島に赴く決心をした。併し赴くに就いても、大本營と共に動く事を便利と考へ、その事に就いて川上將軍に懇談した。將軍は參謀次長で、兵站總監を兼ねてゐたから、その位の事は何んでもあるまいと考へたが、予は所謂る御用記者でないばかりで無く、當時の伊藤内閣には、最も激烈なる反對者であつたから、如何に戰爭がおつ始まつたとはいへ、伊藤内閣は依然予を反對新聞記者の巨なる一人と見、予も又た擧國一致とはいひつゝも、伊藤内閣には、今猶ほ釋然たらざる氣分を持つて居た。

　故に如何に川上將軍が、予と親しく居つたればとて、表向き予のみを特別取扱になすわけにもゆかず、さりとて予の懇願を無下に斷るわけにも參り兼ねたと見え、出發の數日前、予に赤い徽章を與へた。當時徽章は三種に分れ、金色の徽章は高等官、銀色の徽章は判任官、赤色の徽章は使用人、從卒等の類であつた。即ち予はその仲間に伍して出掛ける事となつた。併し汽車の中では赤色を佩けてゐたとはいへ、隆々とした一室を予一人にて占領し、極めて樂であつた。

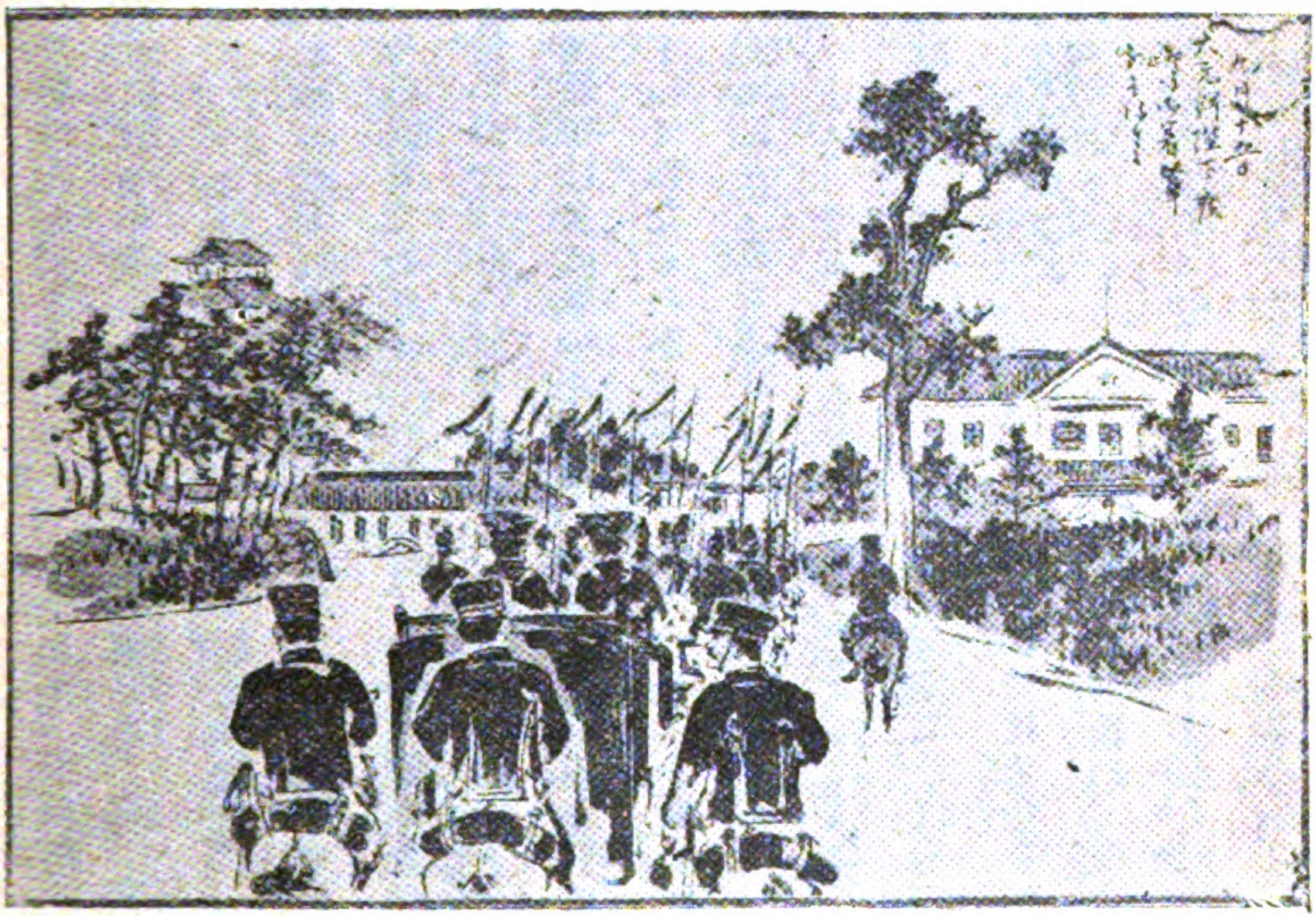
　第一日は名古屋に大元帥陛下御一泊在らせられ、從つて一般の名古屋停車場から、再び特別汽車に乘込むに際し、大山陸軍大臣は、供奉の一人に予を群集の中から見出し、

『貴君は如何にして此處に來つた乎』

と、頗る驚異の眼を瞠つてゐた。

斯くて吾等は廣島大手町元安川の橋際に、吾社の出張所を構へ、其處を足溜りとして、予は日夕廣島中を馳け廻つた。當時川上將軍は吉川旅館に居を構へ、樺山提督は長沼旅館に居を構へ、孰れも予等と同じ大手町であつたから、往復には頗る便宜を得た。

又た當時の廣島は東京を持參して廣島に收縮したる樣であつたから、東京に比すれば、凡有る便宜があつた。予が廣島滯在中、最も屢々往來したのは、川上將軍、樺山將軍、野戰運輸通信長官寺內伯、野戰衛生長官石黑子爵、野戰監督長官野田男爵、米田侍從、松方公、山本權兵衛伯――當時大佐やがて少將となる――伊集院五郎――後元帥當時大佐若しくは少將――其他川上將軍の部下である、參謀本部附の諸將校が主なるものであつた。



廣島御着輦の圖

× × ×

而して廣島に於て臨時議會の開かるゝや、全國の政客は悉く廣島に集り、なか〳〵賑やかな事であつた。吾等の出張所も、社員の戰地より往來する者、本社より往來する者、滯在する者、なか〳〵の雜沓にて、恰も一箇の寄宿舍以上であつた。而して長谷場純孝、宗像政等の諸友は、代議士として廣島に來り、又た廣島から戰地に行くに際しても、何れも予等の出張所をその足溜りとした。

併し或時はその家は予等の占有を許さず、一軍隊に徵發せられ、軍隊と同居した事もあつた。その同居者の中に、梅田又次郎、加賀美重三郎等の連中もあり、加賀美

などこれを縁として、一生予に師事し、其子の名さへも徳富と命名ける程であつた。――因みに云ふ彼は今より數日前、其の郷里山梨縣に於て病没した――されば予がこの出張所を縮名して、臨時本部と云つたのは、決して不思議は無かつた。今から考へて見れば、明治二十七年の秋の初めより、二十八年の春の終りに至る迄、予の廣島に於ける生活は、予の一生の中にて最も愉快なる時期であつた。

當時予と終始行動を一にしたるは、即ち今日本銀行副總裁である深井英五氏であつた。君は予に先發して廣島に出掛けた。有體に云へば、予は君を予の理想的の新聞記者に作り上げようと思つたが、その方面では予は聊か予の考が間違である事を悟つた。君は寧ろ小心に過ぐると云ふべき程、確實性に富んだ人であつて、山氣たる事とか、冒險的の事とかは好まない。頭腦は全く論理的に出來てゐて、自ら先づ解りて、而して後人を解らしむる箏と云ふ手際は、望むべきで無かつた。併し君の英語の知識は極めて確實であつて、君の翻譯でさへあれば、一々原文と對照せずとも安心であり、又た問題を與へれば、それを研究的に調査し、調査的に研究し、徹底せしむるに就いては、普通の新聞記者の及ぶ所で無く、殊に如何たる難題でも、君に理解の出來無い事は無かつたから、粗枝大葉の予に取つては、恰好補佐、機密などゝいふ點には、予の誂向きでは無かつたにしろ、無二の調法なる人であつたに相違は無い。

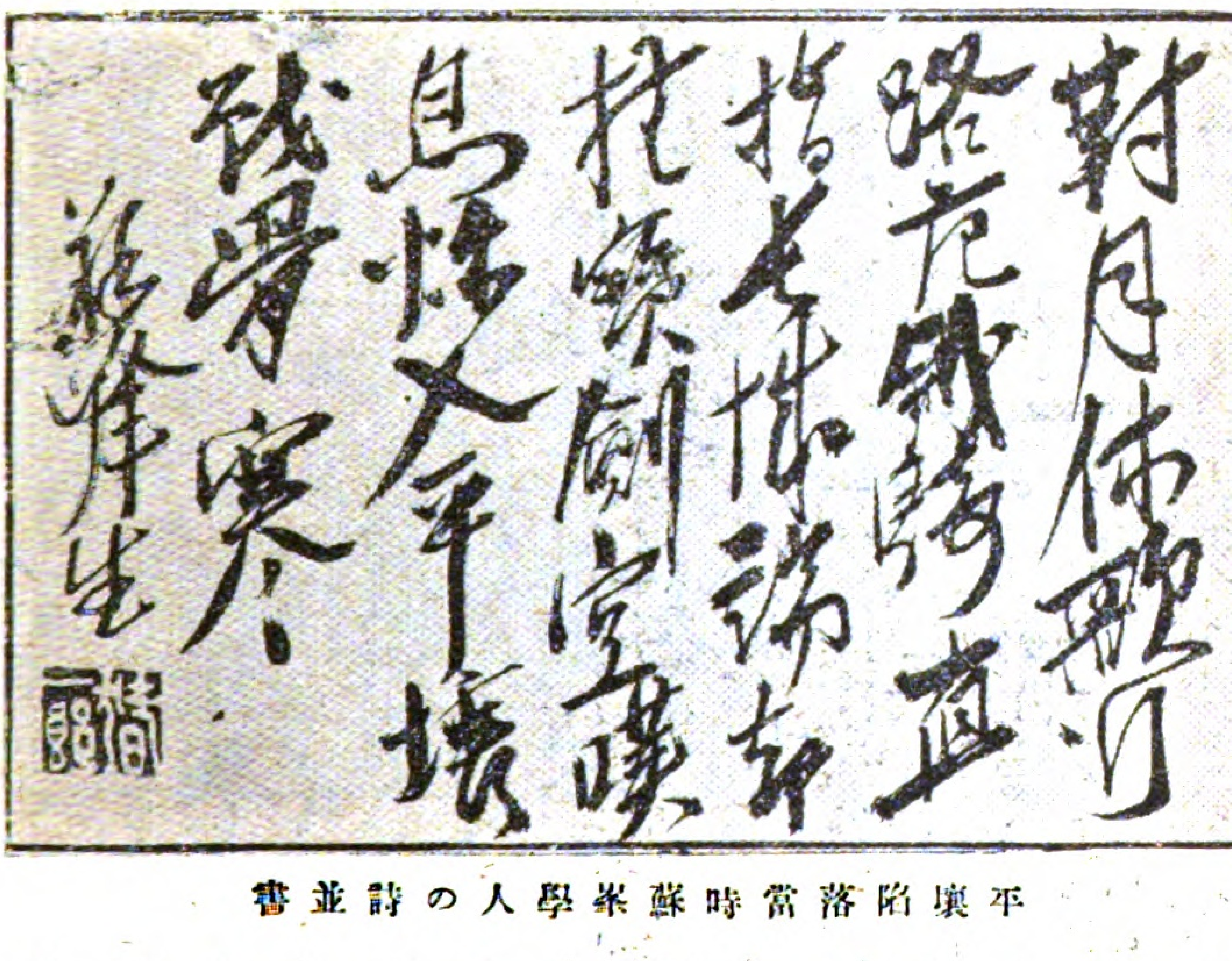
其處で予はつら〳〵考ふるに、君を日常的の探訪とか、通信とかに使用するのは、材を用ゐる所以で無いと悟つた。しかも當時川上將軍から、大本營に英語を解する者が欲しいとて、その推薦を頼まれたを幸に、君を推薦する事とし、斯くて深井君は、毎日銀色の徽章を佩け、大本營に出掛ける事とした。

戰爭も愈々佳境に入り、吾等の考では、山海關を經て北京に攻め入も、決して遠くは無いと考へたから、此際寧ろ大本營を遼東半島に進むる事が、士氣を鼓舞、操作する上に於ても、必要であると考へ、予は頻りにその論を以つて、朝野の間に遊説した。併し當時の廟議は、大元帥陛下の御渡韓などゝ云ふ事は、到底期待すべき事でないと云ふことになり、此に於て小松宮殿下が御名代として、大本營を率ゐ、愈々旅順口に出掛くる事となつた。これが明治二十八年四月の事であつた。

(昭和四年八月二十二日　民友社に於て)

## 第六十三　猛然旅順より還る

大本營が東京から廣島に移るときには、予は從卒の資格で表向は隨行したが、大本營が廣島から旅順に進轉する時には、大びらに將校同樣、一のキャビンを占むることとなつた。予は深井英五氏を同行することゝしたが、なか〳〵それを許可しない。實は川上將軍の方では予一人さへも、反對黨の新聞記者として、伴ひ行く事は骨折りであつたに相違は無い。然るに二人に於ては當惑知る可きだ。併し予は胸中考ふる處があつたから、深井君に『兎も角も船に乗込み、予のキャビンに居り給へ。』と云ひ、愈々予も大總督宮小松宮殿下、其他歴々の諸將校の後から乗込んで見ると、予のキャビンには、當時唯一の御用新聞『東京日日』の記者某が乘込んでゐる。當時の『日日新聞』は、內閣書記官長として、その威權赫々、普通の大臣は殆んどその鼻息を仰ぐ程の、伊東巳代治氏の所有であつたから、反對新聞の記者たる予を伴ふからには、當然の權利として、『日日』の記者が割込み來つたのは怪しむに足らない。併し船客の都合で猶ほ一人囑託か何かの名義の男が入込んで來た。其處で最初は予一人と思うて居たのが、四人となつた。普通ならば二人前のベッドが上下にあつたが、それに四人を押込めることは、容易でなかつた。しかも露骨に云へば、深井君は密航者である。食堂に出る事も出來ない譯で、此事を知つた爲であらう乎否乎は暫らく措き、船が出發すると間もなく、人員點檢となり、愈々事が面倒にならんとして來



平壤陷落當時蘇峯學人の詩並書

た。元來運輸通信長官寺内伯は、軍規、軍律などゝいふことには、別して嚴重なる人にて、予は廣島當時から廉克の二字を奉つてゐた程である。果してその廉克を發揮して來た。

其處で予は密かに川上將軍に見え、此處然るべく工夫ありて、貰つて、深井氏を大本營の囑託としたこともあるから、再び囑託として貰ひ度いと頼んだ。將軍は委細心得、その爲に深井氏は無事であつたが、扨て船が旅順口に着いて以來も、他の從軍記者は支那の廢屋に高粱を敷き、その上に起居したるに、予と深井氏のみは、港に繫ぎたる威海丸に在りて、贅澤なる生活をしてゐるのを見て、同業者間には頗る議論も起つたらしいが、予等は或は金州方面に赴くやら、或は營口に赴き、それから陸路海城に赴き、海城から蓋平を經て、再び營口に歸へる等、旅行に日を暮してゐたから、夫等の問題も自然に消失せた。

當時予等の船威海丸が、樂を奏して馬關海峽を過る時には、恰度李鴻章が伊藤、陸奥の兩全權と、講和談判最中であつた。斯くてその調印のことは、船が威海衛を經由した際、獨逸の軍艦からこれを聞いた。而して旅順口に居る間に、三國干渉の話をチラと耳にはしたが、しかも予は馬關條約に依りて、遼東半島は既に吾有となつた事を知つてゐるから、せめて吾が領土だけでも檢分したいと思つて、おめ／＼と旅順口に滯在せず、斯く歩廻つたわけである。

予は日本内地以外には、今度初めて足を踏出したもので、遼東半島の旅行は、予に取つて實に愉快であつた。固より交通機關とても無く、又た所謂る支那内地の旅行に必要なる、洲形の馬車さへも無く、徒歩をするか、さもなくば普通の荷車に毛布を一枚敷いて、それに乘り行くかの外は無かつた。

尤も當時は休戰最中で、兵站部の連絡はあつたから、予等は兵站部から兵站部へと、その線路を辿つて歩いたのだ。當時四月の下旬で、遼東半島には初めて春が訪れ、大木の柳は漸く芽をふき、北方特有の花たる杏花は、今を盛りと咲きつゝあつた。廣き野原に何物も目を遮へぎるものなく、悠々として春風に吹かれながら、吾が新領土とも思ふ、大陸の土を踏みつゝ旅行した事は、予にとつては實に大なる愉快でもあり、満足でもあつた。

予は後來樺山公と政友として、尋常ならざる關係を持つてゐたが、不思議にも公と逢つたのは、遼東半島の蓋平に於てゞあつた。當時海城に駐屯したる樺山公は、海城を去つて蓋平に宿泊し

團司令部を置いてゐた。

當時予は若氣の至りで、至る處の將校や兵隊と喧嘩をしたが、蓋平でも又たその事があつた。予等は蓋平に到着して、某聯隊長を訪問した。彼は碁でも打つてゐたらしかつたが、『用事があつて只今逢へない』と云つた。予は『新聞記者が面會を求めるのは、當前のことだ。其方に用事があれば、此方も用事がある。是非只今面會したい。』と繰返した。處がその聯隊長は、餘程癪に障つたと見えて、顔は見せなかつたが、大變な聲にて怒鳴りつけた。併し予の癪に障つたことは、より以上であつた。予はそのことを寧ろ師團長に訴ふ可く、桂公を訪問した。而してその始末を語つたが、桂公は如何にも尤もだと云ふ樣なる顔をしてこれを聽き、話が四方山に亙り、海城籠城の話から、岫巖、牛莊の占領の話、或は外國宣教師を懐柔したる話等を詳細に聞き、兼ねて吾社の從軍記者、松原岩五郎氏から、市民將軍と人の稱したことを聽知つてゐたが、此に至つて果して聞くところに違はざるを思ひ、久振りにわけの分つた軍人と語る事を得て、其日は珍らしく西洋料理まがひの御馳走に與つた。斯くて再び營口に歸へり、御用船にて旅順口に歸つた。

歸つて見れば、出發當時の形勢とは打つて變り、恰も火の消えたる狀態で、これは何事である乎と聞けば、愈々遼東還附であると云ふ事にて、予は實に涙さへも出ない程口惜しく覺えた。予は露西亞や獨逸や佛蘭西が憎くは無かつた。彼等の干涉に腰を折つた、吾が外交當局者が憎かつた。一口に云へば伊藤公及び伊藤内閣が憎かつた。

かねて伊藤内閣とは外交問題で戰つたが、今更らながら眼前に遼東還附を見せつけられたには、開いた口が塞らないと云ふばかりでは無かつた。此の遼東還附が、予の殆んど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以來、予は精神的に殆んど別人となつた。これと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ如何なる正義公道も、半文の價値も無いと確信せしめた。

そこで予は一刻も他國に返還したる土地に居るを屑しとせず、最近の御用船を見附けて歸へる事とした。而して土産には旅順口の波打際から、小石や砂利を一握り手巾に包んで持ち歸つた。せめてこれが一度は日本の領土となつた記念として。

（昭和四年八月二十三日　民友社に於て）

成瀬無極著

# 疾風怒濤時代と現代獨逸文學

菊判上製三一〇頁

定價貳圓五拾錢
郵税廿二錢

獨逸文學史上、若きゲエテの時代、ウェルテル時代、狂飈颶風期、醱酵期、天才崛起時代などと呼ばれる「シュトゥルム・ウント・ドラング」期とはどういふ時代であつたか、如何にしてこの疾風怒濤から靜朗な古典主義の精神が生れ、浪漫派の青い花が咲き出たか。大戰後世界文壇を風靡した表現主義は畢竟新らしい疾風怒濤的革命運動ではなかつたか。著者は眞摯な學的良心を以てこれ等の問題の解決に努めてゐる。

## 最新刊

**自然**

**一 疾風怒濤の自然觀** （一）若きゲエテの自然觀 （イ）ウェルテル （ロ）ファウスト原本 （二）シルレルの素朴的と感情的 **二 浪漫主義の自然觀** （一）疾風怒濤と浪漫主義 （二）自然感と自然哲學 **三 表現主義の自然觀** （一）表現主義の思潮史的位置 （二）「混沌の花」と「微笑呼吸歩行」

**神**

**一 疾風怒濤の宗教觀** （一）敬虔主義と啓蒙主義 （二）ハアマンからゲエテへ（イ）非合理主義 （ロ）北方の魔者 （ハ）南方の魔者 （ニ）若きゲエテ **二 浪漫主義の宗教觀** （一）靈魂不滅説 （イ）ヘルデルの輪廻説 （ロ）クライスト、ジャン・パウル、ノヴァアーリス等の靈魂不滅觀 （二）純粹無形の憧憬と成立宗教への轉向 （イ）シュライエルマッヒェルの宗教論 （ロ）ノヴァーリスの仲介説者 **三 表現主義の宗教觀** （一）浪漫主義より表現主義へ （二）新らしき神への摸索 （三）死の概念 （四）二つの魂 （五）惱みを通して光明へ

**人間**

**一 浪漫的人間の三型** （一）ドン・ホアン （イ）熱情的超人主義 （ロ）耽美的非道德主義 （二）オフテルディンゲン （イ）青い花の騎士 （ロ）音樂巡禮 （三）タンホイゼル （イ）自我分裂の諸相 （ロ）靈肉の分裂 （ハ）理想と現實との矛盾 （ニ）浪漫的反語 **二 疾風怒濤より表現主義に至る倫理問題の開展へ** （一）全人、自由人の理想 （二）天才崇拜と能動主義 （三）人間性の秘密 （四）人間愛と人間憎惡

**藝術**

**結論** （一）内面的形式の問題 （二）形式破壞の藝術 （イ）形式解體 （ロ）形式破壞 （ハ）表現主義的樣式。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た昔同様自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、殊に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於ては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

×　×　×

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも内地雜居反對の論者が尠く無かつた。これは政府部内にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、概してそれであつた。予は當初より内地雜居論者であつたが、併し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に歸着した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約面に依れば、凡有る外人は居留地以内に封込まれ、その外に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手廣く、手嚴しく、徹底的にやるといふ事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困まらしめて、自ら兜を拔がしむるに如かずといふ意見であつた。この意見は改進黨も、保守黨も、硬固黨も期せずして一致し、此に所謂る六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干渉に依つて出で來り、西郷侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又たこの中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

## 第五十六　自由黨と予

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から藩閥打破一點張りであつたから、自由黨の態度を歯がゆく思ひ、これを新吏黨などと名付けて盛んに攻撃した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題した中に『星亨何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亨氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直な事が此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身に書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亨と德富猪一郎との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、それ程星派で咎立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執着する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝罪を云つて、其儘濟したなら、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣鋭の予は、斯樣なる損德の打算抔を考慮する餘裕も無く、此方も愈々喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して逐一論談するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絶交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、扨困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派新聞、雑誌の攻撃及び身體に向ける危險等は暫く措き、地方の自由黨員には、國民新聞不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、それを回復するには十數年の歳月も猶ほ不足であつた。

此の如くにして陸奥伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政

それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た昔同様自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、殊に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於ては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

× × ×

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも内地雜居反對の論者が尠く無かつた。これは政府部内にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、概してそれであつた。予は當初より内地雜居論者であつたが、併し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に結着した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約面に依れば、凡有る外人は居留地以內に封込まれ、その外に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手痛く、手嚴しく、徹底的にやると云ふ事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困まらしめて、自ら兜を拔がしむに如かずといふ意見であつた。この意見は急進黨も、保守黨も、頑固黨も期せずして一致し、此に所謂る六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干涉に依つて出で來り、西鄕侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又た其の中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

## 第五十六　自由黨と予

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から藩閥打破一點張りであつたから、自由黨の態度を齒がゆく思ひ、これを新吏黨などと名付けて盛んに攻擊した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題した中に『星亨何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亨氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直な事が此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身に書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亨と德富猪一郞との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、それ程星派で咎め立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執着する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝罪を云つて、其儘濟した方が、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣鋭の予は、斯樣なる損德の打算抔を考慮する餘裕も無く、此方も愈々喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して逐一論談するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絕交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、却て困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派新聞、雜誌の攻擊及び身體に對する危險等は暫く措き、地方の自由黨員には、國民新聞不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、それを回復するには十數年の歲月も猶ほ不足であつた。

此の如くにして陸奥伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政

それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た當時同様自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、殊に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於ては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

× × ×

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも内地雜居反對の論者が尠く無かつた。これは政府部内にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、概してそれであつた。予は當初より内地雜居論者であつたが、但し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に歸着した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約面に依れば、凡有る外人は居留地以内に封込まれ、その外に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手廣く、手嚴しく、徹底的にやるといふ事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困まらしめて、自ら兜を拔がしむるに如かずといふ意見であつた。この意見は急進黨も、保守黨も、頑固黨も期せずして一致し、此に所謂る六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干渉に依つて出で來り、西郷侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又たその中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

## 第五十六　自由黨と予

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から藩閥打破一點張りであつたから、自由黨の態度を齒がゆく思ひ、これを新吏黨など と名付けて盛んに攻撃した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題した中に『星亨何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亨氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直な事が此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身に書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亨と德富猪一郎との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、これ程星派で咎立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執着する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝辭を云つて、其儘濟したが、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣鋭の予は、斯樣なる損德の打算抔を考慮する餘裕も無く、此方も愈々喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して逐一論駁するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絶交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、扨困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派新聞、雜誌の攻撃及び身體に關する危險等は暫く措き、地方の自由黨員には、國民新聞不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、これを回復するには十數年の歲月も猶ほ不足であつた。

此の如くにして陸奥伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政

それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た當時同様自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、殊に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於ては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

× × ×

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも内地雜居反對の論者が尠く無かつた。これは政府部内にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、概してそれであつた。予は當初より内地雜居論者であつたが、併し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に結着した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約面に依れば、凡有る外人は居留地以内に封込まれ、その外に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手嚴く、手嚴しく、徹底的にやるといふ事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困まらしめて、自ら兜を拔がしむるに如かずといふ意見であつた。この意見は急進黨も、保守黨も、頑固黨も期せずして一致し、此に所謂六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干渉に依つて出で來り、西郷侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又たその中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

## 第五十六　自由黨と予

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から藩閥打破一點張りであつたから、自由黨の態度を齒がゆく思ひ、これを新吏黨などと名付けて盛んに攻擊した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題した中に『星亨何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亨氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直な事が此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身に書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亨と德富猪一郎との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、これ程星派で咎立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執着する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝罪を云つて、其儘濟したが、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣鋭の予は、斯樣なる損德の打算抔を考慮する餘裕も無く、此方も愈々喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して遂一論談するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絕交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、扨困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派新聞、雜誌の攻擊及び身體に關する危險等は暫く措き、地方の自由黨員には、國民新聞不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、これを回復するには十數年の歲月も猶ほ不足であつた。

此の如くにして陸奥伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政

治上では甚だ疎遠と云ふよりも、寧ろ反對の側に立つ事となり、陸奥伯の如きは、『かねて文明的急進論者の徳富氏が、非内地雜居論者など〻肩を並べて、乃公等の政策を妨害するとは怪しからぬ』と云ふ事にて、予に對しても多大の遺憾の情を含んでゐた樣であるが、明治三十年の八月伯が病むや、予は故に西ケ原の邸に見舞うたが、併し岡崎邦輔君等が『只今接見しては伯が亢奮するから』との注意に依り、殘念ながら相見ずして去つた。伯は『徳富氏に逢つたらば、一議論試むる積りだ』と云つてゐた相だが、予も實は伯の此の世を去る以前に、從來の經緯に就いて、相語りたき事が尠く無つた。若し次の世があらば、或は相見て呵々大笑するかも知れない。

（昭和四年八月三日　民友社に於て）

## 第五十七　陸實氏と予



陸實氏書牘（明治二十年頃）

當時の在野黨は六派聯合と稱して居たが、其の六派は何であつた乎。兎に角自由黨を除くの外、其他の野黨は、主義に於ても、歷史に於ても、孰れも是迄何等の緣故は無く、寧ろ互に鎬を削つてゐたものであつたが、所謂條約斷行論、即ち對外硬と云ふ點に於て一致した。而して此の團體には、政府黨及び當時に於ては、準政府黨とも云ふべき自由黨の外の新聞、雜誌は、孰れもその同盟に加擔した。されば其勢ひは殆んど全國を席捲せんとした。

新聞雜誌方面に於ては、表立つては專ら志賀重昂氏等が常任幹事として骨折つたが、內輪の畫策は專ら、日本新聞社長陸實氏がやつてゐた。陸氏は狷介不群、氣節を以つて立つ昂々乎たる東北の一男兒として知られ、又た莊重勁拔の文章に秀でたる記者として知られてゐたが、予はそれだけを以つて、陸氏を評價する事は、實際氣の毒であると思ふ。

君は善き意味に於て、なか〱謀を好んだる策士であつた。而して君の手は政界の裏面には、なか〱よく動いた。而して餘の事は兎も角、政治上に就いては、可成り融通も利いて居た。君は谷、鳥尾、三浦等と云ふ國粹論者、若くは保守論者たる將軍連とも懇意であつた。又た神鞭知常、高橋健三氏等とは兄弟同樣の親みを持つてゐた。而して井上毅、杉浦重剛、小村其他政界の浪人者、有志家等へも、知己朋友が多かつた。其中に於て、予も又たその一人に數ふべきであつたらう。

予は當時專ら此の運動に就いては、陸君と相談した。而して相談する毎に、陸君の思慮はなか〱周到で、吾等の如き粗枝大葉の者が、とても追付くところでは無いと考へた事が、幾度かあつた。而して種々の文案等を起草する時なども、予と陸君とは何時も其の委員であつた樣だ。曾つて予が極東と書いたのを、陸君が東亞に改めては如何だらう抔とて、予も一議にも及ばずそれに同意した事があつた。斯る文句の上でもなか〱注意深かつた。

×　×　×

此の機會に於て、予と陸君との交りに就いて語るであらう。予は明治十九年の夏、双方の友人和田正修君と共に、君を牛込揚場町の寓所に訪うた。當時君は尚ほ明治政府の小役人であつた。官報局であつた乎、制度取調局であつた乎、それは慥と覺えて居ないが、高橋健三氏が官報局長として、多分君はその局員の一人であつたと思ふ。予が『將來之日本』の出で來るや、當時新に發行せられたる『出版月評』なる、新刊書評論を專門とする雜誌に、貫宇野史と題して、その評評を掲げたものがあつた。予は一讀して、多分それが陸氏である事を感付いた。貫宇と云ふは陸君の名、實の字を二つに割いたものであらう。併しその事は當人には訊さずに濟んだ。

## 第五十八　『日本』と『國民』

やがて君は官を辭し、青木貞三君等の後援に依つて、新に『東京電報』なる新聞を發刊し、明治二十二年二月憲法發布の頃から、之を『日本』と改題し、發刊した。而して君はその社長であつた。

『國民新聞』は、明治二十三年二月に發刊したから、正しく一

年遲れたる弟である。然るに此の二新聞は、その主義主張、趣味嗜好等に於ては、互に氷炭相容れぬ程に反對してゐるに拘らず、孰れも殆んど商賣氣を抜きにしたる書生流の新聞で、孰れもその讀者は實業家とか、金持ちとかで無く、寧ろ論客、志士、其他世の中と共に俯仰しない、特色ある人々を得意とする事に於て一致してゐた。而して社員の見分や風儀は、互ひに異つてゐたが、社の組織と云ひ、社と社員との關係と云ひ、孰れも互に有志家の團體を持つてゐた事に於て一致してゐた。

× × ×

併し何と云つても『日本』は歐化主義の失敗したる時に蹶起し、天下の反動の氣運に乘じて出で來り、しかもその援護者は有力者のみにて、社友とも云ふ可き人々の中には、陸軍の將軍連の外、副島伯などの老先生もあり、又た大學出の古き學者達もあり、地方に於ては有力なる――暴力團とは云はざるも――その名を聞いてだに、人をして懾伏せしむるに足る壯士團體等もあり、なか〳〵それに向つて競爭すると云ふ事は、容易の業では無かつた。

固より日本新聞社には、福本日南等の如き、如何なる問題で
あらうが、如何なる文體であらうが、向う所敵無き健筆家があ
る。又た詩人としては天下一品と云はれたる、國分青厓氏など
があり、又た文學方面には正岡子規、繪畫方面には中村不折、
又た海外の投書家としては、池邊三山等があり、實に濟々たる
多士であつた。

× × ×

予は陸君とは初から懇意の間柄であつたが、日本新聞社中の
人々は、恐らくは予を異端者として、必らずしも蛇蝎視せざる
迄も、中にはそれに幾き者があつたかも知れない。

然るに六派聯合、對外硬以來、種々の相談にて親しく此の社
にも往來する事となり、偶々『國民新聞』が、發行停止となつ
たる先は、予は深井英五君を伴ひ、神田雉子町なる日本新聞社
に赴き、吾等の原稿を『日本』に掲載した事もあつた。是は何
人も意外としたる所であるが、政治的熱は時としては異分子さ
へも、融和せしむる事があり、時としては同一分子さへも、分
解せしむる事がある。

右の次第にて、『國民新聞』と『日本』とは、從來の行掛りあ

ら議論より、文章の總てに至る迄、互ひに其の兩極を代表してゐたが。而してその讀者も若し極端を云へば『日本』は、頑固老人の爲めに愛讀せられ、『國民新聞』は、青年子弟の爲めに愛讀せらるといふ傾向があつたに關はらず、社會に於ては、兩々相對して居た。

×　×　×

但だ予は當時他の新聞は相手とせず、常に『日本』を相手としてゐた。其の紙數なども、略々伯仲の間にあつたと思ふ。併し正確の事は分らぬが、『日本』六、『國民』四、若くは『日本』五半、『國民』四半と云ふ位の所であつたと思ふ。然るに日露戰爭後、間も無く、陸君は病の爲に日本新聞社を他に讓渡し、自分は鎌倉極樂寺の幽邃にて、病を養つてゐたが、其時『日本』の記者の若干が、國民新聞社に收容されたるを見て、陸君は予に書を與へ、

『漢何ぞ楚人の多きや』

と云ふ文句を援き來つて、其の感慨を述べ來つた。併し讀者たる予が、其の手紙に打たれたる感慨は、作者たる君の感慨よりも深かつたであらうと思ふ。

君はやがて逝き、予は其の後碌々として今日に至りたるが、しかも今や君とは異りたる意味に於て、又た方法に於て、予も又た『國民新聞』と別れたる事は、今更ら實に人事は、決して豫想通りに行くものでないと云ふ教訓をしみ〴〵と味ひ得た。

## 第五十九　對外硬と對外自主

尚ほ對外硬と云ふ事に就いては、予一個人としては、聊か說明しがたく覺えた。自分は對外政策は、かうとか何とか豫じめ定むべきものでは無い。唯だ外交は何處迄も他國に追隨する外交で無く、自國の外交は、自國を主としての外交であらねばならぬ。其處で予は自主的外交の文字が、最も適當であると信じてゐる。

予は當時に於て既に内地雜居贊成者であつた。又た當時に於て、既に或る範圍に於ては、ローマ字の採用又た苦しからずとするの論者であつた。予は日本が勝手次第に支那の文字や、支那の文學や、支那の制度を盛に利用したる如く、歐米の文明に就いても、又た然かすべきものと信じてゐた。されば同じ對外硬の仲間でも、内地雜居反對論者等とは、大いにその意見を異

にしてゐた。

此に於て予は對外硬なる總稱の下に、彼等の仲間に卷込まれてしまはん事を慮り、自分では自主的外交なる文字を作し、これを以て標語となさんと試みた。而して予自らは、多忙であつたから、旨を社中の或人に告げて『自主的外交』なる小册子を、國民新聞社の同體異名なる民友社から刊行した。

斯る次第で對外硬の名は、その時限りの文字として、消失せたが、自主的外交の文字は、今日に於ても猶ほ生命ある文字として、現存してゐる。此の運動の間に、予は前にも述べたる如く、所謂る貴族的急進論者、即ち歐化主義者の人々、若くは舊自由黨の方面に於ける人々等、尠からざる友人を失うたが、他方に於ては、又た是迄緣も由緣も無かつた人々と交際するの便宜を得た。例へば此の六派聯合の運動の際に、近衞公とか、三條公とか、谷將軍とか云ふ人々は勿論、やがては品川彌二郎子、高島鞆之助子、樺山資紀伯等と云ふ、薩長の人々とも、面接し、若くは交際する事を得た。然るに此の運動は、東洋の風雲急を告げ、朝鮮に於ける日清の衝突が、日睫の間に迫り來りたる爲に、やがて條約勵行問題から一轉して、朝鮮に於ける自主的外交の問題となり、其爲に運動は愈々實際問題に接近し來つた。



樺山資紀伯肖像

吾社は本來武斷政治に反對し、文治主義を主張し、交戰主義に反對して、平和主義を主張した。しかも朝鮮問題に就いて、清國の態度甚だ横暴にして、動もすれば朝鮮を併呑して、吾を威嚇せんとするの勢を示し、吾が帝國の國防上一大危險の迫りたるを見るや、吾社は猛然として、朝鮮に向け出兵を主張した。若し『國民新聞』が唯一なる出兵論の先導者で無かつたならば、尠くともその一で

あつたに相違は無い。而してやがて豐島沖の海戰となり、成歡、牙山の役となり、淸國に對する宣戰の詔勅は發布せられ、此に於て從來の政爭は、全く一時中止の姿となつた。

（昭和四年八月二十日　民友社に於て）

## 第六十　二十七八年役と予

明治二十七八年戰役は、日本の歷史にとつても、又た予一個の歷史にとつても、孰れも重大事件であつた。而して予が一生にとつては、又たこれが一大回轉機であつた。予は是迄藩閥政府を相手に、最後迄戰ひたる一人である。此に最後迄と云ふは、議會開會前後から、從來の民權論者にも、往々藩閥政府と妥協したものがあつたからだ。

然るに一度二十七八年役が起るや、予は藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ、擧國一致淸國に衝る事を當面の急務とし、それに向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犧牲とした。世間では此事に就いて、予の事を彼是非難したる人もあつたが、それは各々の意見で致方が無い事として、予自身としては、苟も公人として世に立つからには、大勢に順應して、大勢を率ゐると云ふ事は、當然の事であらうと思ふ。況んや此の二十七八年の役たるものは、吾等自らその張本人たるを以つて居らざるも、尠くともその急先鋒の一人たる事に於てをやだ。

×　×　×

當時何れの新聞も此事に熱心したが、殊に福澤諭吉翁は尤も熱心であつて、確かの事は記憶せぬが、一萬圓の軍資金を獻納したやに憶えて居る。

予は是迄印刷を秀英舍に一任して居たが、新聞が盛大になるに從つて、段々不便を感じたから、新に印刷機械を買入るゝなどの準備をなし、聊かながらも吾社には貯蓄もあり、又た印刷機械買入れの爲めに、或る鑛山業者から若干の資金を借り受けたれば、その事に着手せんとする間際に、此の事件が突發した。故に夫等の爲めに用意したる一切の資金を、悉く此の事件に投じ去つた。予は政府に資金を獻納する程の力は無かつた。されど予の力の有らん限りを以つて、吾が新聞を此の事件の爲めに提供する事とした。

恐らくは其爲めに從軍記者の數は各社を通じて、吾社ほど多數の人を出した社はあるまいと思ふ。先づ最初に朝鮮には阿部充

家君、又た出張記者としては久保田米僊君、その子米斎君、金僊君等も、追々出掛けた。其他社員、社友及び臨時徴發の人人を加へれば、前後を通じて殆んど三十人にもたつたかと思ふ。軍隊の通譯たる熊谷直亮君、又た出征したる梅田又次郎君等は、社外の通信員として、前者は枕戈生、後者は一老兵の名にて、他の新聞の容易に追随する能はざる通信を送つた。而して松原岩五郎君の如きは、釜山より陸路京城に出掛けて、第一軍桂師團に從ひ、遂に海城の籠城迄もした。又た古谷久綱君などは第二軍に從ひ、軍隊中の最も年少者として、頗る重寳がられた。又た國木田獨歩は千代田艦に搭乗し、所謂『愛弟通信』――通信文を其弟國木田收二君に宛てゝ、書翰體に認めたるもの――等に依つて、頗る異彩を放つた。而して又た久保田君の繪畫通信は、その方面に於ては、最も他に先んじ、且つ卓越の技倆があつたから、やがて平壌陥落後は歸朝し、廣島大本營にて、御前揮毫の光榮を忝くする事になつた。

× × ×

『國民新聞』は是迄は軍隊仲間にも評判が善くなく、又た所謂薩長人士の如きは、極めて少數なる松方公其他を除けば、德富などは國を賣る逆賊で無ければ、その手先き位に考へられてゐたものであつたが、予が此の戰爭に對し、凡有る犠牲を顧へり見ず、奉公の誠を致さんとする態度は、追々彼等も諒とする處となり、その中には意外の方面に、意外の友人も出で來つた。その中で最も先に擧ぐべきは川上將軍であらう。當時の川上將軍は、參謀次長であつて、參謀總長は、有栖川宮熾仁親王であり、事實川上將軍は參謀本部の首腦であつた。

予を將軍に介して呉れたのは、吉井一三君、同志社出身で予の後輩であつた。彼も小芋の一人であつたから、此際種々の親芋連中に、予を紹介して呉れたのであらう。併しそれよりもより多く予を紹介したのは、『國民新聞』が、戰爭に對する俊敏なる働きであつた。從來予は川上將軍とは、何等の緣故も無かつたと云はんよりも――川上將軍の予に對して如何に思うてゐたかは知らぬが――予としては、川上將軍には決して好感を持たなかつた。と云ふ譯は、予は父の友として曾我老將軍と懇意であつた。而して老將軍と共同して『日本國防論』なるものを明治二十一二年の頃『國民之友』に掲げて、手酷く當時の陸海軍に對する批評を試みた。而して曾我將軍等は、當時の參謀次長

川上操六、陸軍次官桂太郎等に排斥せられたる人々であれば、その人々が彼等に對して好感を持つ筈は無つた。

×　×　×

桂、川上と云へば、陸軍の花形であつたが、當時桂將軍は第三師團長として名古屋に在り、中央では殆んど川上將軍の一人舞臺であつた。尤も川上將軍にも油斷のならぬ相手があつた。それは上には山縣元帥てふ巨頭を戴き、下には陸軍次官兒玉源太郎てふ豪の者が控えて居た。併し陸軍大臣としては大山公爵があり、彼の沈默の中に於ける常識と、威信とは、極めて統一し難く、極めて混和し難き陸軍をば、兎も角も纏めて居た。而して俊敏なる川上將軍の上には勿論、その傍ら及びその下には、兒玉とか寺内とか、種々の山縣派の小姑共が居り、又た野津とか山路とか、なか〳〵手に負はぬ前輩若しくは同輩の人達もあつたが、然も將軍はその間に、上手く舵を取つて居た。

## 第六十一　川上將軍と予



川上大將肖像

而して川上將軍の最も強味とも云ふべきは、當時の首相たる伊藤公と妥協して居た事であつた。これは單に川上將軍の力からばかりでは無く、伊藤公の力からも、所謂魚心あれば水心と云ふやうな事であつたらう。謂ば山縣派に對する伊藤、川上の攻守同盟とも云ふべきものであつたかも知れ無い。

而して川上將軍は參謀次長の職權からして、鐵道にも關係を持ち、鐵道會議の議長として、世間の政客及び實業家など、接觸を保つてゐたから、單りサーベル連中ばかりで無く、その以

外にも、輕視し難き勢力を扶殖しつゝあつた。

× × ×

予は川上將軍と一見舊の如く、忽ち親しくなつた。而して當時予は社長でもあり、主筆でもあり、探訪者でもあつたから、種を取るには川上將軍の宅に如くは無き事を知つて、殆んど每朝出掛け無い事はなかつた。宅は今大橋新太郎氏の邸宅の一部であつた。當時は參謀次長の宅としては、寧ろ見窄らしい程であつた。玄關の次に應接間が二つあつたが、それも薄き壁や板戶で隔てゝゐたから、その話はよく隣室に聞えてゐた。

× × ×

予は川上將軍から種を取るばかりで無く、その會見を待つ間、その應接室の控室にて、多くの人々と出會し、その雜談中から往々大切なるヒントを得た。その中で今猶ほ記憶してゐるのは、高島嘉右衛門氏が將軍を訪ねて、種々話をしてゐる中に、傍で聽けば、『易を引いて見たが、戰には勝つが、併し心配の事がある。それは招かざるの客三人あり。云々の卦が出たから、御注意あつて然るべきであらう』など、話してゐた。將軍も固よりであつたらうが、予も又た『當るも八卦、當らぬも八卦と云ふが、斯るたわいも無き話をするとは、扨も好奇きの親爺である』と思うてゐた。然るにその翌年、所謂る三國干涉が出で來り、此に於て『招かざるの客三人』なるものゝ意味が、漸く分つた。此等は偶中と云へば偶中であるが、又た不思議と云へば、不思議とも云ふ事が出來よう。

× × ×

序ながら又た話して置く事がある。當時高島、樺山等の薩將軍は、松方内閣の沒落以來、暫らく閑地に在つたが、吾等對外硬論者は屢々その門を叩いて、意見を開陳した事があつた。然るに宣戰の詔勅出ると間も無く、樺山提督は軍令部長となつて戰地に去つた。

× × ×

予は或日紀尾井坂の邸に伯の子愛輔君を訪ね、四方山の話をしてゐた。然るに愛輔君は、端なく予に豐島沖の戰に就いて話つた。予は恥しき事ながら、その時迄は此事を知らなかつた。君は恐らくは予も知つてゐるものとして、話したかの如くであつた。これを聞いた予の驚きは知るべきであつたが、予はさあらぬ態に聞流し、殊更に落着き拂つてしばらく話込み、而して門

を用ゆるや否や、車を備うて大急ぎに急がしたが、生憎その車夫がヨボ〳〵で、殆んで辛抱しきれぬ程であつたが、さりとて車を降りて駈け出す事も出來ず。兎や角社に歸へり行くや否や、直ちに號外を出して奇勝を報した。

これは一例であるが、予は吾が身體を殆んど千百にして、凡ゆる方面に驅けずり廻つてゐた。予がその通りであれば、社中の面々が緊張してゐた事は、云ふ迄も無かつた。此の如くにして『國民新聞』の盛名は、隆々として實戰毎に世に擧つた。而して發刊當初から殆んど七千程度を上下してゐたものが、戰爭中は一萬臺を越え、一萬五千臺を越え、殆んど二萬を越ゆるに至つた。

（昭和四年八月二十一日　民友社に於て）

## 第六十二　大本營の移動と予

扨八月には大本營も愈々廣島迄進轉する事となつた。予は當初から身も魂も、此の戰爭に打込んで居たから、廣島に赴く決心をした。併し赴くに就いても、大本營と共に動く事を便利と考へ、その事に就いて川上將軍に懇談した。將軍は參謀次長で、兵站總監を兼ねてゐたから、その位の事は何んでもあるまいと考へたが、予は所謂御用記者でないばかりで無く、當時の伊藤内閣には、最も激烈なる反對者であつたから、如何に戰爭がおつ始まつたとは云へ、伊藤内閣は依然予を反對新聞記者の中なる一人と見、予も又た擧國一致と云ひつゝも、伊藤内閣には、今猶ほ釋然たらざる氣分を持つて居た。

故に如何に川上將軍が、予と親しく作つたればとて、表向き予のみを特別取扱ひにするわけにもゆかず、さりとて予の懇願を無下に斷るわけにも參り兼ねたと見え、出發の數日前、予に赤い徽章を與へた。當時徽章は三種に分れ、金色の徽章は高等官、銀色の徽章は判任官、赤色の徽章は使用人、從卒等の類であつた。卽ち予はその仲間に伍して出掛ける事となつた。併し汽車の中では赤色を佩けてゐたとは云へ、隆々とした一室を予一人にて占領し、極めて樂であつた。

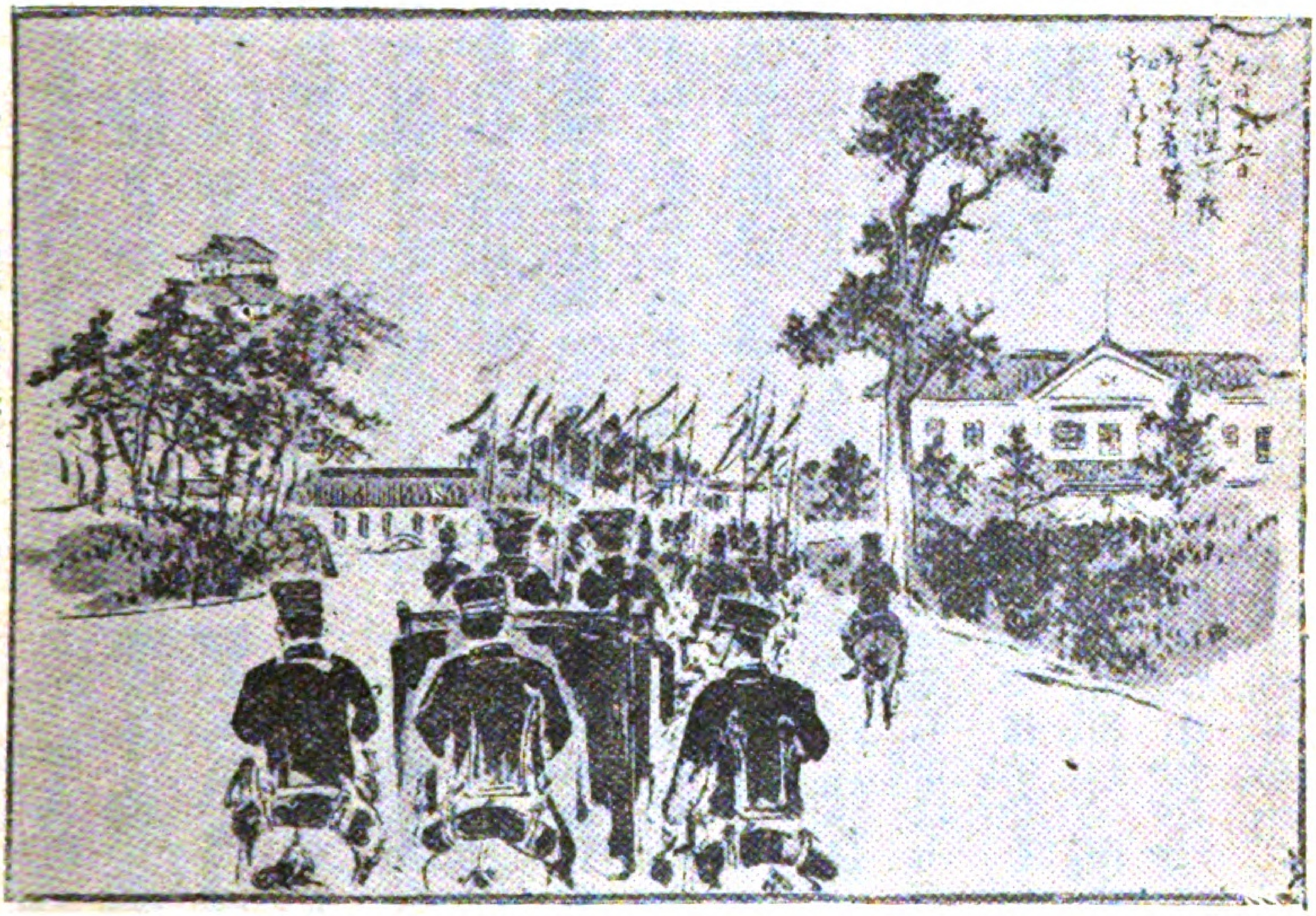
第一日は名古屋に大元帥陛下御一泊在らせられ、從つて一般の名古屋停車場から、再び特別汽車に乘込むに際し、大山陸軍大臣は、供奉の一人に予を群集の中から見出し、

『貴君は如何にして此處に來つたか』

と、頗る驚異の眼を擬つてゐた。

斯くて吾等は廣島大手町元安川の橋際に、吾社の出張所を構へ、其處を足溜りとして、予は日夕廣島中を馳け廻つた。當時川上將軍は吉川旅館に居を構へ、樺山提督は長沼旅館に居を構へ、孰れも予等と同じ大手町であつたから、往復には頗る便宜を得た。

又た當時の廣島は東京を持參して廣島に收縮したる樣であつたから、東京に比すれば、凡有る便宜があつた。予が廣島滯在中、最も屢々往來したのは、川上將軍、樺山將軍、野戰運輸通信長官寺內伯、野戰衞生長官石黑子爵、野戰監督長官野田男爵、米田侍從、松方公、山本權兵衞伯――當時大佐やがて少將となる――伊集院五郞――後元帥當時大佐若しくは少將――其他川上將軍の部下である、參謀本部附の諸將校が主なるものであつた。



廣島御着輦の圖

×　×　×

而して廣島に於て臨時議會の開かるゝや、全國の政客は悉く廣島に集り、なか／＼賑やかな事であつた。吾等の出張所も、社員の戰地より往來する者、本社より往來する者、滯在する者、なか／＼の雜沓にて、恰も一箇の寄宿舍以上であつた。而して長谷場純孝、宗像政等の諸友は、代議士として廣島に來り、又た廣島から戰地に行くに際しても、何れも予等の出張所をその足溜りとした。

併し或時はその家は予等の占有を許さず、一軍隊に徵發せられ、軍隊と同居した事もあつた。その同居者の中に、梅田又次郞、加賀美重三郞等の連中もあり、加賀美

なども之れを緣として、一生予に師事し、其子の名さへも德富と命名ける程であつた。――因みに云ふ彼は今より數日前、其の郷里山梨縣に於て掩沒した――されば予がこの出張所を紹介して、亂暴本部と云つたのは、決して不思議は無かつた。今から考へて見れば、明治二十七年の秋の初めより、二十八年の春の終りに至る迄、予の廣島に於ける生活は、予の一生の中にて最も愉快なる時期であつた。

當時予と終始行動を一にしたるは、即ち今日本銀行副總裁である深井英五氏であつた。君は予に先發して廣島に出掛けた。有體に云へば、予は君を予の理想的の新聞記者に作上げようと思つたが、その方面では予は聊か予の考が間違である事を悟つた。君は寧ろ小心に過ぐると云ふべき程、確實性に富んだ人であつて、山氣たる事とか、冒險的の事とかは好まない。頭腦は全く論理的に出來てゐて、自ら先づ醉うて、而して後人を醉はしむる筆と云ふ手際は、望むべきで無かつた。併し君の英語の知識は極めて確實であつて、君の飜譯でさへあれば、一々原文と對照せずとも安心であり、又た問題を與へれば、それを研究的に調査し、調査的に研究し、徹底せしむるに就いては、普通の新聞記者の及ぶ所で無く、殊に如何なる難題でも、君に理解の出來難い事は無かつたから、粗枝大葉の予に取つては、[illegible]介補遺、機縁などゝいふ點には、予の誂向きでは無かつたにしろ、無二の調法なる人であつたに相違は無い。

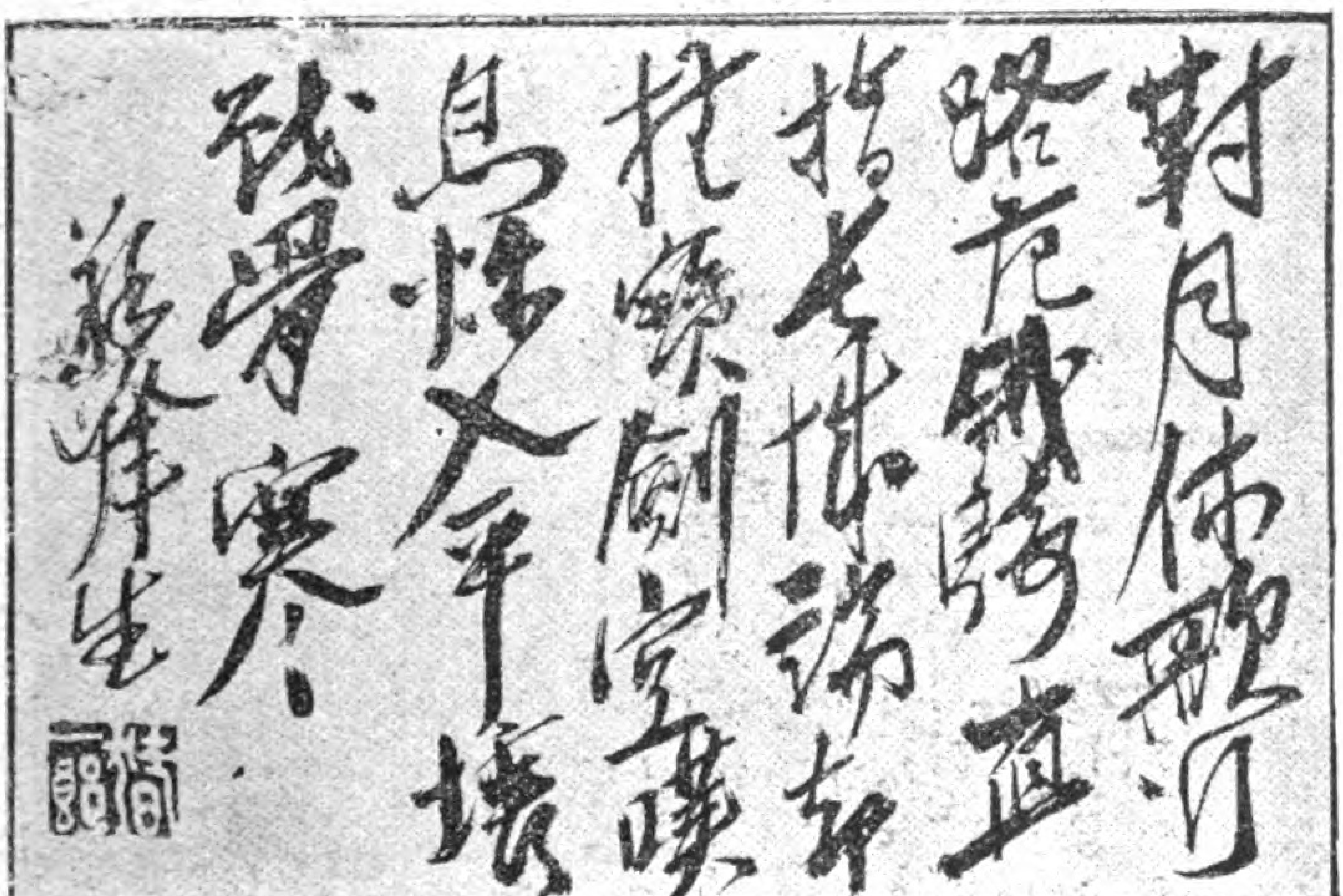
其處で予はつら〳〵考ふるに、君を日常的の探訪とか、通信とかに使用するのは、材を用ゐる所以で無いと悟つた。しかも當時川上將軍から、大本營に英語を解する者が欲いとて、その推薦を頼まれたを幸に、君を推薦する事とし、斯くて深井君は、毎日銀色の徽章を佩け、大本營に出掛ける事とした。

戰爭も愈々佳境に入り、吾等の考では、山海關を經て北京に攻め入るも、決して遠くは無いと考へたから、此際寧ろ大本營を遼東半島に進むる事が、士氣を鼓舞、振作する上に於ても、必要であると考へ、予は頻りにその論を以つて、朝野の間に遊說した。併し當時の廟議は、大元帥陛下の御渡海などゝ云ふ事は、到底期待すべき事でないと云ふことになり、此に於て小松宮殿下が御名代として、大本營を率ゐ、愈々旅順口に出掛くる事となつた。これが明治二十八年四月の事であつた。

（昭和四年八月二十二日　民友社に於て）

# 第六十三　猛然旅順より還る

大本營が東京から廣島に移るときには、予は從卒の資格で表向は随行したが、大本營が廣島から旅順に進轉する時には、大びらに將校同様、一のキャビンを占むることとなつた。予は深井英五氏を同行することゝしたが、なか〳〵それを許可しない。實は川上將軍の方では予一人さへも、反對黨の新聞記者として、伴ひ行く事は骨折りであつたに相違は無い。然るに二人に於ては當惑知る可きだ。併し予は胸中考ふる處があつたから、深井君に『兎も角も船に乗込み、予のキャビンに居り給へ。』と云ひ、愈々予も大總督宮小松宮殿下、其他歴々の諸將校の後から乗込んで見ると、予のキャビンには、當時唯一の御用新聞『東京日日』の記者某が乗込んでゐる。當時の『日日新聞』は、内閣書記官長として、その威權赫々、當通の大臣は殆んどその鼻息を仰ぐ程の、伊東巳代治氏の所有であつたから、反對新聞の記者たる予を伴ふからには、當然の權利として、『日日』の記者が割込み來つたのは怪しむに足らない。併し船客の都合で猶ほ一人囑託か何ぞかの名義の男が入込んで來た。其處で最初は予一人と思うて居たのが、四人となつた。普通ならば二人前のベッドが上下にあつたが、それに四人を押込めることは、窮屈でなかつた。しかも露骨に云へば、深井君は密航者である。食堂に出る事も出來ない譯だ。



平壤陷落當時蘇峯學人の詩並書

此事を知つた爲であらう乎否乎は暫らく措き、船が出發すると間もなく、人員點檢となり、愈々事が面倒にならんとして來

た。元來運輸通信長官寺内伯は、軍規、軍律などゝいふことには、別して嚴重なる人にて、予は廣島當時から嚴克の二字を奉つてゐた程である。果してその嚴克を發揮して來た。

其處で予は密かに川上將軍に見え、此處然るべく工夫ありて、一付つて、深井氏を大本營の囑託としたこともあるから、再び囑託とし「貰ひ度い」と頼んだ。將軍は委細心得、その爲に深井氏は無事であつたが、扨て船が旅順口に着いて以來も、他の從軍記者は支那の廢屋に高粱を敷き、その上に起居したるに、予と深井氏のみは、港に繋ぎたる威海丸に在りて、贅澤なる生活をしてゐるのを見て、同業者間には頗る議論も起つたらしいが、予等は或は金州方面に赴くやら、或は營口に赴き、それから陸路海城に赴き、海城から蓋平を經て、再び營口に歸へる等、旅行に日を暮してゐたから、夫等の問題も自然に消失せた。

當時予等の船威海丸が、樂を奏して馬關海峽を過る時には、恰度李鴻章が伊藤、陸奥の兩全權と、講和談判最中であつた。斯くてその調印のことは、船が威海衞を經由した際、獨逸の軍艦からこれを聞いた。而して旅順口に居る間に、三國干渉の話をチラと耳にはしたが、しかも予は馬關條約に依りて、遼東半島は既に吾有となつた事を知つてゐるから、せめて吾が領土だけでも檢分したいと思つて、おめ／＼と旅順口に滯在せず、斯く走廻つたわけである。

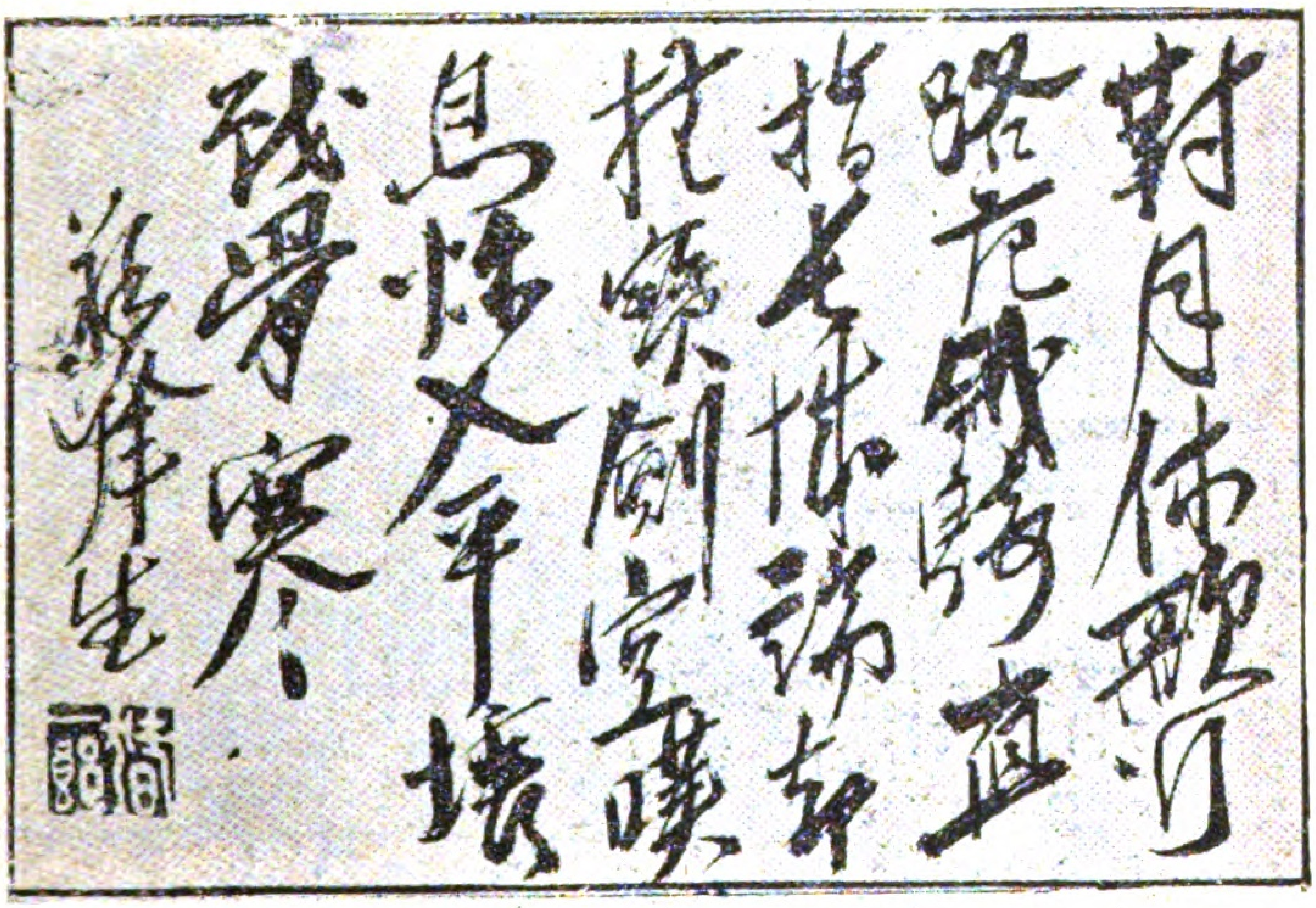
予は日本内地以外には、今度初めて足を踏出したもので、遼東半島の旅行は、予に取つて實に愉快であつた。固より交通機關とても無く、又た所謂る支那内地の旅行に必要なる、淵紋形の馬車さへも無く、徒歩をするか、さもなくば普通の荷車に毛布を一枚敷いて、それに乘り行くかの外は無かつた。

尤も當時は休戰最中で、兵站部の連絡はあつたから、予等は兵站部から兵站部へと、その線路を辿つて歩いたのだ。當時四月の下旬で、遼東半島には初めて春が訪れ、大木の梢は漸く萌えふき、北方特有の花たる杏花は、今を盛りと咲きつゝあつた。廣き野原に何物も目を遮へぎるものなく、悠々として春風に吹かれながら、吾が新領土とも思ふ、大陸の土を踏みつゝ旅行した事は、予にとつては實に大なる愉快でもあり、滿足でもあつた。

予は後來桂公と政友として、尋常ならざる關係を持つてゐたが、不思議にも公と逢つたのは、遼東半島の蓋平に於てゞあつた。當時海城に籠城したる桂公は、海城を去つて蓋平に臨し

# 第六十三　猛然旅順より還る

大本營が東京から廣島に移るときには、予は從卒の資格で表向は隨行したが、大本營が廣島から旅順に進轉する時には、大びらに將校同樣、一のキャビンを占むることとなつた。予は深井英五氏を同行することゝしたが、なか〳〵それを許可しない。實は川上將軍の方では予一人さへも、反對黨の新聞記者として、伴ひ行く事は骨折りであつたに相違は無い。然るに二人に於ては當惑知る可きだ。併し予は胸中考ふる處があつたから、深井君に『兎も角も船に乘込み、予のキャビンに居り給へ。』と云ひ、愈々予も大總督宮小松宮殿下、其他歷々の諸將校の後から乘込んで見ると、予のキャビンには、當時唯一の御用新聞『東京日日』の記者某が乘込んでゐる。當時の『日日新聞』は、內閣書記官長として、その威權赫々、普通の大臣は殆んどその鼻息を仰ぐ程の、伊東巳代治氏の所有であつたから、反對新聞の記者たる予を伴ふからには、當然の權利として、『日日』の記者が、割込み來つたのは怪しむに足らない。併し船客の都合で猶ほ一人囑託か何かの名義の男が入込んで來た。其處で最初は予一人と思うて居たのが、四人となつた。普通ならば二人前のベツドが上下にあつたが、それに四人を押込めるとは、容易でなかつた。しかも露骨に云へば、深井君は密航者である。食堂に出る事も出來ない譯で



平壌陥落當時蘇峯學人の詩並書

此事を知つた爲であらう乎否乎は暫らく措き、船が出發すると間もなく、人員點檢となり、愈々事が面倒にならんとして來

た。元來運輸通信長官寺内伯は、軍規、軍律などゝいふことには、別して嚴重なる人にて、予は廣島當時から嚴克の二字を奉つてゐた程である。果してその嚴克を發揮して來た。

其處で予は密かに川上將軍に見え、此處然るべく工夫ありて一骨つて、深井氏を大本營の囑託としたこともあるから、再び囑託として一皆ひ度い旨と頼んだ。將軍は委細心得、その爲に深井氏は無事であつたが、扨て船が旅順口に着いて以來も、他の從軍記者は支那の廢屋に高粱を敷き、その上に起居したるに、予と深井氏のみは、港に繋ぎたる威海丸に在りて、餘澤なる生活をしてゐるのを見て、同業者間には頗る議論も起つたらしいが、予等は或は金州方面に赴くやら、或は營口に赴き、それから陸路海城に赴き、海城から蓋平を經て、再び營口に歸へる等、旅行に日を暮してゐたから、夫等の問題も自然に消失せた。

當時予等の船威海丸が、樂を奏して馬關海峽を過る時には、恰度李鴻章が伊藤、陸奥の兩全權と、講和談判最中であつた。

斯くてその調印のことは、船が威海衞を經由した際、獨逸の軍艦からこれを聞いた。而して旅順口に居る間に、三國干渉の話をチラと耳にはしたが、しかも予は馬關條約に依りて、遼東半島は既に吾有となつた事を知つてゐるから、せめて吾が領土だけでも檢分したいと思つて、おめ〳〵と旅順口に滯在せず、斯く走廻つたわけである。

予は日本內地以外には、今度初めて足を踏出したもので、遼東半島の旅行は、予に取つて實に愉快であつた。固より交通機關とても無く、又た所謂る支那內地の旅行に必要なる、轎形の馬車さへも無く、徒歩をするか、さもなくば普通の荷車に毛布を一枚敷いて、それに乘り行くかの外は無かつた。

尤も當時は休戰最中で、兵站部の連絡はあつたから、予等は兵站部から兵站部へと、その線路を辿つて步いたのだ。當時四月の下旬で、遼東半島には初めて春が訪れ、大木の梢は漸く芽をふき、北方特有の花たる杏花は、今を盛りと咲きつゝあつた。廣き野原に何物も目を遮へぎるものなく、悠々として春風に吹かれながら、吾が新領土とも思ふ、大陸の上を踏みつゝ旅行した事は、予にとつては實に大なる愉快でもあり、滿足でもあつた。

予は從來桂公と政友として、尋常ならざる關係を持つてゐたが、不思議にも公と逢つたのは、遼東半島の蓋平に於てゞあつた。當時海城に籠城したる桂公は、海城を去つて蓋平に[illegible]

團司令部を置いてゐた。

當時予は若氣の至りで、至る處の將校や兵隊と喧嘩をしたが、蓋平でも又たその事があつた。予等は蓋平に到着して、某聯隊長を訪問した。彼は碁でも打つてゐたらしかつたが、『用事があつて只今逢へない』と云つた。予は『新聞記者が面會を求めるのは、當前のことだ。其方に用事があれば、此方も用事がある。是非只今面會したい。』と繰返した。處がその聯隊長は、餘程癪に障つたと見えて、顏は見せなかつたが、大變な聲にて怒鳴りつけた。併し予の癪に障つたことは、より以上であつた。予はそのことを寧ろ師團長に訴ふ可く、桂公を訪問した。而してその始末を語つたが、桂公は如何にも尤もだと云ふ樣なる顏をしてこれを聽き、話が四方山に亘り、海城籠城の話から、岫巖、牛莊の占領の話、或は外國宣教師を懷柔したる話等を詳細に聞き、兼ねて吾社の從軍記者、松原岩五郎氏から、市民將軍と人の稱したことを察知つてゐたが、此に至つて果して聞くところに違はさるを思ひ、久振りにわけの分つた軍人と語る事を得て、其日は珍らしく西洋料理まがひの御馳走に與つた。斯くて再び營口に歸へり、御用船にて旅順口に歸つた。

歸つて見れば、出發當時の形勢とは打つて變り、恰も火の消えたる狀態で、これは何事である乎と聞けば、愈々遼東還附であると云ふ事にて、予は實に涙さへも出ない程口惜しく覺えた。予は露西亞や獨逸や佛蘭西が憎くは無かつた。彼等の干涉に腰を折つた、吾が外交當局者が憎かつた。一口に云へば伊藤公及び伊藤內閣が憎かつた。

かねて伊藤內閣とは外交問題で戰つたが、今更らながら眼前に遼東還附を見せつけられたには、開いた口が塞らないと云ふばかりでは無かつた。此の遼東還附が、予の殆んど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以來、予は精神的に殆んど別人となつた。これと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ如何なる正義公道も、半文の價値も無いと確信せしめた。

そこで予は一刻も他國に返還したる土地に居るを屑しとせず、最近の御用船を見附けて歸へる事とした。而して土産には旅順口の波打際から、小石や砂利を一握り手巾に包んで持ち歸つた。せめてこれが一度は日本の領土となつた記念として。

(昭和四年八月二十三日　民友社に於て)

# 世界大衆文學全集

## 第二十二回配本（十二月）二册

羅貫中著◇佐藤春夫譯（各册五拾錢）

# 平妖傳

支那文學の權威平妖傳は、全く神斧鬼鑿の業と稱され、羅貫中入神の一大傑作である。其内容の妙諦に至つては、水滸傳、三國誌、西遊記を凌駕し、一册を以て千萬册に匹敵するといふ靈篇である。然し悲しい哉我平易な國語に譯了する至難は、嘗て此賜物を我々に授け得なかつたのであるが、今や支那文學界の重鎭佐藤春夫氏の巨腕に依つて、ここに見事大成の榮譽を得たのである。實に本全集の偉大なる誇りで即ち讀者諸賢の誇であることは欣快至極である。

大デュマ著◇大佛次郎譯

# 鐵假面

琥珀玉中の飛蟲が琥珀と共に永存する如く、大デュマ傑作中の帝王篇「鐵假面」は世界人が等しく讃詞を極むる程あつて、古今東西を通じて稀有の大構想、スケエルの雄大、多數人物の飛躍、性格描寫の妙、筋の端倪なき變幻と展開、實に一言雙句血と熱の一大結晶篇である。豪華一世を蔽ふルヰ十四世の王朝爛熟期に、大膽なる王位簒奪の企謀を背景に、ダルタニヤン及三銃士が鬢髮に霜を頂く半生の思出に、勇略縱橫、剛勇快絶に祖國の名譽と正義の爲に奮ひ起ち、鐵假面の謎を氷解し遂に累卵の危地より佛蘭西を救ふ、怪奇、勇壯、凄絶の譚である。本篇の特殊の興味は大半會話中に存し、映畫等の如何なる苦心も其表現の出來得ぬ處に眞價がある。殊に大衆文壇の重鎭大佛次郎氏の絢爛なる譯筆は正に飜譯界の壓卷である。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

## 創作集 鐵

旋盤の響・ダイナモの唸り・ハンマアの火花・北海の怒濤とウインチの軌と、こゝには凡ゆる職場のプロレタリアの全面貌が、克明に、大膽に、作者が體驗によつて得た階級的認識によつて整理されつゝ勇ましくも展開躍動する。問題の長篇「鐵」以下十五篇。

**内容**

鐵。ガトフ・フセグダア。畸形兒。赤い灯。二ツの心臓。賣られた彼等。暴風を貫く呼び聲。妹へ。黒いあざ。老朽船。ルンペンの日記。トンネル長屋。吹雪。海へ行く。海の反逆。墓穴を掘る。

**岩藤雪夫著**

最新刊

四六判並製 三八〇頁

定價壹圓五拾錢（送料拾八錢）

## 創作集 毆る

階級的抑壓と、女性としての迫害と、二重の桎梏に抗して立つプロレタリア女性の生活を描いて、冷徹、リアル、しかも火の如き階級的熱意は脈々として全篇を貫く。虐げらるゝ者の血と涙と、苦闘を通じて明日への勝利を暗示する「毆る」外十七篇の力作集。

**内容**

毆る。夜風。西向の檻房。投げすてよ！。古戸棚。荷車。愚なる女の日記。私の友人。生活。非幹部派の日記。足音。出札口。嘲る。新婚。足。施療室にて。勞働。森の中。

**平林たい子著**

最新刊

四六判並製 三四四頁

定價壹圓五拾錢（送料拾八錢）

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

# 現代日本文學全集

十二月上旬配本

## 第二十篇

# 上田敏集　厨川白村集　阿部次郎集

明治大正昭和三代の文學全般に亙つて傑作の一切を網羅することは我が『現代日本文學全集』の特色の一つだ。見よ！此三大批評家の全面容を。

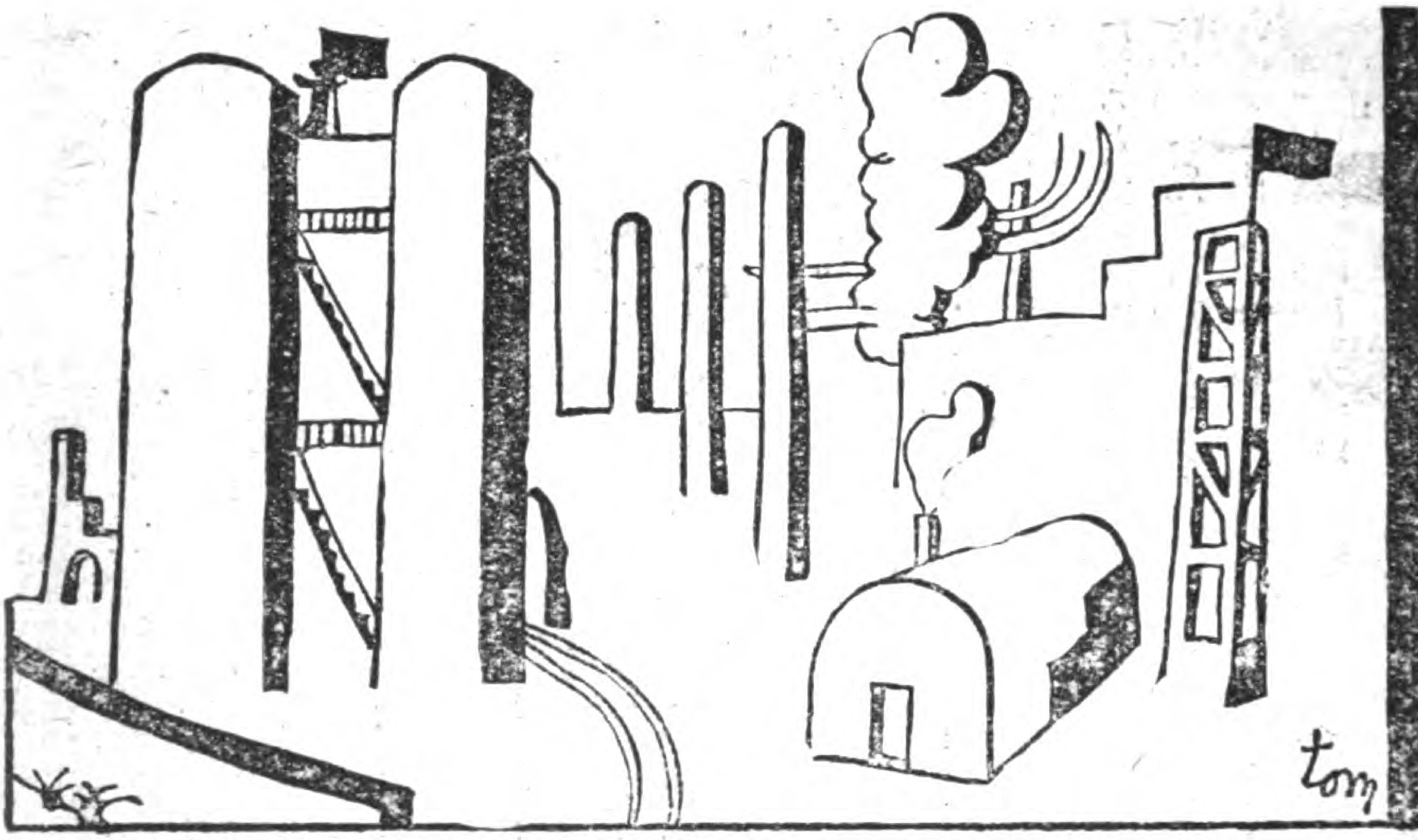
### 内容

**上田敏集**　詩聖ダンテ　伊曾保物語考　希臘思潮を論ず　典雅沖靜の美術　細心精緻の學風　幽趣微韻　印度文學　象徴詩釋義　自由詩　みじか夜　よひやみ　南露春宵　足弱車　黒瞳　第四賢人　ハルレム　石工　鬱金草賣　五本の指　胡弓　煉金道士　サバトの門立　法王の祈禱　椰子の樹　ちやるめら　燕の歌　床　薄暮の曲　落葉　わすれなぐさ　山のあなた　瞻望　小曲　鷺の歌　伴奏　故國　黄昏　印度古詩　お月様のなげきぶし　温室　俊傑　兩替橋　薔薇連禱（其他）

**厨川白村集**　文藝思潮論　小泉先生　わかき藝術家のむれ　象牙の塔を出て　藝術としての漫畫　近代の戀愛觀　惡魔の宗教（其他）

**阿部次郎集**　ニイチェのツァラツストラ解釋並びに批評　ダンテの「神曲」とニイチェの「ツァラツストラ」　社會生活の内面的根據　當來社會の根本原理　人格と世界　ルツェルンの春　斷片　聖フランシスとステンダール　蝦と蟹　早春の賦　靜寂　雜草（其他）

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二




# 敷設列車

平林たい子

折々はつとする様な生温い風が裾をひいて通る。

洮昂線敷設列車は洮南を距る四十六粁の地點で六月を迎へた。

支那人の工夫達は皮膚の脂肪の分泌が妙に促されたのを感じた。彼等は針の目の様に大きくなつた毛穴にこまかい粘土の埃を吸ひ込んで、夕暮、宿營車の位置まで逆行して來る敷設列車の背中に飛乘つた。彼等は疲れ切つて疊まりさうになつてゐた。敷設機の櫓は新しい軌道の上で左右に躍る。

「君達あ三號の宿營車に寝てゐるだらう？　一寸きくがね、この頃炊事車の棚に置く食料品が始終なくなつてしようがないんだ。心當りやないかね」

搖れて居る材料車の上に寝てゐた鮫島といふ技手が突然起上つて來て一人の工夫に云つた。

「知りません」

話しかけられた工夫は車輛の動搖につれて彈ね上りながら不機嫌に横を向いた。すると傍にゐた三十過ぎの扁つたい顏の工夫が口を出した。

「そんな事あ炊事の苦力に任せといたらいゝでせう」

「いや俺は炊事頭の王に頼まれてこないだから詮議してゐるんだ。事務車の方から豫算

が喧しいんでなあ。君達が知らないんなら知らないんでいゝさ。」
鮫島は何か傷けられて髯の中で風の樣に笑つた。
十封度のハンマーを振上げて一日犬釘打ちをやつた工夫達は體の關節關節が銷びた機械の樣に軋む樣な氣がしてゐた。彼等にはそんな餘裕のある話をもちかけて來る人間の生理狀態が不思議にさへ思へて眼を細くしてまじ〳〵顏を見た。
遠い埃に燻つてゐる地平線の上に銅貨の樣に變色した太陽が懸つてゐた。
二輛の裝甲車を挾んだ宿營車が通風孔を耳の樣に立てゝ紐みたいにつながつてゐる。そこまで來ると材料車を押してゐる機關車は亂暴に速力を遞つて急停車を試みた。が、惰力で十間程も走り過ぎた。激しい動搖。足もとをさらはれながら工夫等は自分の宿營車の前で彈力をもつて飛下りた。

土匪襲來の噂を、十日に一度づつ聯絡して來る後の建築列車が運んで來た。四五日前から裝甲車の四角な鋼鐵の蓋が吊上つてあいた。夜になると二つの窓からライオンの目の樣な探照燈が光り出した。それは土匪への防備の意味も三分は含まれてゐたが、七分はいよ〳〵苦しい作業にさしかゝつて來た苦力達の逃亡を防ぐためである。
恐しい勢で噴出する青い光線は遠くなる程幅廣くなつた。帶の樣な光線の先で蒙古の荒寥とした平原を照し出した。そこには一本の樹木もなく一個の岩もなかつた。たゞ、同じやうに小さい起伏を繰返してゐる乾き切つた土ばかりがあつた。
支那人達に食はせる食糧品は麻袋に入れて炊事車の側の天幕の中に積んである。生溫い日が續くので下積の穀物がむれ始めた。その香と麻袋の蛹の樣な香とがまぢつて終日あたりに漂つた。女の膚の樣な艶をもつた白菜は天幕の裾から幾株も轉がり出たまゝになつてゐた。それがベタ〳〵に腐りはじめて皮膚病みたいにひろがつて行く。
貨車を二段に區切つた宿營車もこの頃蠶室の樣にむん〳〵する。
工夫達は夕食後食糧天幕のあたりをぶら〳〵歩くのが一日中での樂しみであつた。彼等は青ざめた光線を見てゐると體に染まりついてゐる苦しい日中の勞働の記憶を暫く忘れることが出來た。それからいろいろな鬱積してゐる感情を手繰り出して行つた。
いつも戰亂の巷になる故郷を持つてゐる彼等は土地や財產といふものに執着する習慣を持つてゐない。彼等はこの目で世の中を眺めた。そして張作霖に激しい敵意をもち上海の×××の紡績工場のストライキをきつかけとする排日や排英の運動に私かな心をよせてゐた。
しかしその後その運動がどうなつたか、四月×鐵道株式會社の建築に應じて四平街を發つて以來、一枚の支那新聞を手に入れる機會もなかつた。
洮南では敷設列車に乘込む前日二度も嚴しい身體檢査が行はれた。
彼等の懷中からは不穩な傳單の代りに汽車中でかぢつた水瓜の種の

殘りがこぼれ落ちた。そのあとでメンタルテストがあつた。

「洮昂鐵道を敷設するといふことはいゝことだと思ふか、惡いことだと思ふか」

「滿鐵の苦力に對する待遇に對してどんな感想を持つてゐるか」

四百人の苦力達はこの二つの質問に對して一人も碌な返事をしなかつた。ある者は洮昂鐵道がどういふ目的のもとに何者が敷かうとしてゐるかそんなことは無茶苦茶で應募して來てゐた。或る者は——ある考を持てゐたが、何にも知らない様なポカンとした顔を答とした。

彼等は夕暮事務車へ行つて老牌といふ煙草を一個づつ受とつて來てゐた。それは東亞煙草から賣出してゐる一個一錢二三厘にしか當らない最下等の卷煙草である。

「あんな星をかり／＼食つたらさぞうまからうなあ」

ある者は糖分の缺乏のために、明に氷砂糖を聯想しながらそんな他愛もない事を言ふ。食糧天幕の傍で敷設機のワイヤロープが風にギイ／＼動く音をきいてゐると話はやつぱり日常の仕事の上の事に落ちて行く。彼等はこの頃毎日、人間業ではとても出來ない様な能率を現場監督に要求されてゐるのである。彼等は一本のマッチへ五人もで口を突出した。こゝでは一本のマッチさへも自由に手に入らない。煙草の屑を詰め込んで出來てゐるその煙草は燃える端から火の子になつて暗がりでちら／＼散つた。

「ぢやあその一千三百萬圓といふ工費を×××が支拂へないことを承知で×鐵道株式會社はこの工事を引受けた譯なんだな」

「うん、さうなんだよ。×鐵道株式會社にとつちやあ拂へないでくれた方がいゝわけなんだ。そこで××の××が生じるわけだからなあ」

張といふ若い工夫が說明してきかせた。

「ふーむ。」

長い辮髮を下げてゐる老人が感嘆した。そのあとで啖の引掛つた咳をした。

「鼠！ 鼠！」

探照燈の一端が廻つて來て天幕に觸れた時だまつて煙を吐いてゐた一人が叫んだ。

「鼠だよ。そこの天幕の中に鼠が居たんだよ」

「びつくりするぢやないか。この氣狂ひめ！ 鼠をうまれてはじめて見たのかい」

マッチを擦ると天幕のズック布に足をかけて逃げやうとしてゐた七八匹の鼠があかりに怯えて襤褸の様に固まつた。天幕は風をはらんで内側へ向いて腹の様にふくらんでゐた。それはたよりなくつて鼠にはよぢ昇れない。白菜が轉がり落ちて來た。

鼠は蛆の様な白い歯をむき出してキイキイ鳴いた。

「人間も草も木もない所に鼠がゐるなんて薄氣味悪いねえ」

「なあに列車の荷物の中へもぐり込んで來たんだよ」

一人が材料車の上へハンマーを探しに行つてゐる間に鼠は彼等の注意と注意との間の稲妻の樣な隙をうかゞつて逃げた。

彼等は理由なく、鼠にも劣つた人間の樣に自分のことを考へた。そして宿營車へ戻つて行つた。

生物の香をかぎつけた數多の野鼠が風で起つた地面の小さい起伏にかくれて光線をよけながら移動して來つゝあつた。晝は空き叺や材木の下にかくれ、夜になると列車の中へ通風孔や扉口から這ひ込んだ。疊を敷いた室にねてゐる技師や會計や技手達は用心のために扉へ鍵をかけて寢たが工夫達はさういふわけには行かなかつた。這はなければ頭がつかへる宿營車の中には炭酸ガスがいつも充滿してゐた。警務部員がやかましいので夜十時半までは閉めてねる扉を、十時過ぎると誰かゞ棚から降りて來て突破る意志をもつてゐるかのやうにやけに外側へ蹴る。すると黃瓦斯の樣な濕氣が廣々とした蒙古の大氣の中へ快く散つて行く。彼等はそれから水泳や扇風機の夢を見ながら朝まで一團りの豚肉みたいに崩れて眠るのである。——鼠はその扉口から侵入した。

ポケットにある饅頭の皮や人間の唾の附着した煙草の吸口を引き出して奪ひ合つた。炊事車に下つてゐる牛の片股はたかつてゐる鼠のために左右に搖れた。フライパンの中で固つたヘットの上には米粒の樣な齒のあとが無數に印された。棚からは毎夜卷いた圖面が落ちた。晝行はれる人間の生存競争に代つて夜になると鼠の生存競争がそこで行はれた。

一號の宿營車には清潔な青々した香のいゝ疊が敷いてある。

技手の伊東は建築列車からの電話で不承々々に床を離れた。滿洲地圖の下にある電話機に顏をよせてゐる時、囑託醫の山田が入つて來た。山田は虎の樣な横縞のある靴下の足を投げ出して髭を剃りはじめた。

「もし〱さうです。さうです。軌條百二十噸機械油五罐……えいゝや、……失敬」

電話の終るのを待つて山田が言つた。

「君、×××の盜難つて奴にや參つたねえ。さすがの僕もとう〱洗面所の窓に置いたペルペット石鹼を昨夜中にとられてしまつたよ。」

「僕も昨日あそこで齒ブラシをとられた。しかし、ありやあ鼠の仕業だよ。」

伊東はやゝ不機嫌に答へた。彼には山田の派手な靴下が堪らなく軟弱に見えた。大きく言へば、日本といふ祖國の食糧問題、人口問題の解決の戰士として、軍人に勝るとも劣らない使命をもつてこの蒙古の野に出張してゐる帝國臣民が、ハルビンのダンスホールに通ふ英國人の利職屋の樣なあの靴下は何だ！　彼は故郷の下關の聯隊で工兵伍長だつた。

食堂車でも盜難の話が出た。油がにぢみ出てゐる吊ランプの笠の下

で彼等は帽子を被つたまゝ飯をかつ込んだ。そして更に奴の仕業を人間の仕業の樣に言ふことに興味を覺えた。奉天の馬賊が疊まで剝がして盜んで行つたといふ話にまで脫線して行つた。その次には大連で朝盜まれた毛布が晝小盜市場に陳列してあつたといふ經驗談が出た。×××は子供が大きくなると先づ何よりも先に物を盜む方法を敎へるといふ話が出た。

「丁、お前も敎はつたか」

入齒をガク〳〵動かしてゐた聯絡係の畑が給仕のために立つてゐる×××に言つた。

「不如！（まさか）」

丁は苦笑した。皆笑つた。

霧が薄く地面を這つてゐる。列車の尻の方で長い汽笛が鳴り出した。現場への發車相圖だ。食堂車の日本人達も立ち上つた。

「兎に角、三號の宿營車の張つてやつに注意してゐて下さい。あいつの顏は、ありや普通の支那人の顏ぢやないですよ。盜癖のある顏だ。たしかに。」

鮫島は敷設機の方へ歩き出し乍ら庶務の笹島に囁いた。彼は平生自分に敬意を表さない張に對してある憎しみと怖れをもつてゐたので、盜癖を鼠のせいにしないで、そんな風に言ひたかつた。敷設機の前に突出したクレーンはロープの先の爪で重い栗材の枕木を一本づつ自分の背中に運んだ。

肩の破れたシャツを着た支那人達が、クレーンを休ませない爲に栗材をかついで走つた。

「軌條はどうした！　軌條は！」

車上で叫んでゐた鮫島は、その時一本の軌條を『かけもち』でかついで來る四人のうちの中の工夫が三號の宿營車の張だつたのを見た。

「間拔け！　發車ぢやないか。早く！　早く……」

彼は張の眼の据つた顏を見るとふつと言葉をやめた。

太陽が霧の中で卵の黃味の樣に尖つた。栗材を積み終へると、クレーンは何チエーンかの軌條を象の鼻の樣に巧にまき上げる。

鮫島は張に對する自分の心に反撥した。そして思ひ切つて機械油の罐に掛けてゐた片足で、吊上つたワイヤロープを見上げてゐる張の頭を蹴つた。

「張！　貴樣はいつも油ばかり賣りやがつて、なんでも知つてるぞ。」

張はひよろ〳〵とよろけて石炭の山に尻もちをついた。今一つ蹴られた。しかし尻餅をついたまゝ顏色も變へずに落ちた手拭と帽子を拾つた。そして長い足で橇の後に飛乘つた。

「アッハッハハハ……獨活の大木みたいな奴ですね。あいつは」

彈丸ケースのバンドを腰で締めてゐた警務部員木川が嘲笑した。そして荷造箱にたてかけておいた銃をとりながら言つた。それは鮫島にこびる音を多分に伴つてゐた。

張の後から乘つた洪といふボールド締めの工夫がこの男を振返つて

ちらりと見た。張は聞えないのか枕木の上をまたいで行つた。

「張！」

洪は材料車の上を歩いて行く彼を呼んだ。

「君は苦力達に信頼されやうと思へば、あんな時大人しくしてゐちや駄目だ」

張は振返つたが返事をしなかつた。

敷設車を押してゐる機關車は後に材料と工夫を載せた長い鋼鐵車を牽いて動き出した。霧の奥で相圖の汽笛が長く猛獸の樣に喚く。機關車は性急な強い呼吸を吐きながら新しい線路の上で躍つた。そして平原を二つに裂いて進んで行つた。

線路と並行してトンボの様に空に向いて續いてゐる電話柱が一本一本投げつけられる様に後へ走り去る。敷設機の屋根の下で木川はポケットから出したウェストミンスターの箱を鮫島にさし出した。それを軌條に腰掛けてゐる張と洪は遠くから見てゐた。二人ともシャツの右肩が擔ぎ物の爲に破れてゐた。そこから赤く擂りむけた肉が腫れてもり上つてゐる。

「あの警務部員はこの頃まで公主嶺の獨立守備隊で上等兵勤務だつた奴ださうだよ。いかにも××らしい圖々しい顏をしてゐるぢやないか」

「へーえ、あいつが。さうか」

張は今年の一月末まで公主嶺の或るロシヤ人の家に、×××煤鐵公司ストライキの煽動犯人としてかくれてゐた。罷業によつて自然に發生した熔鑛爐の冷却を損害二十萬圓に該當する「建造物破棄罪」として×支官憲から追跡されてゐるのだ。

「先刻鮫島が俺のことを何でも知つてるぞつて言つたね。ありやあどういふ意味なんだらう」

「いや、さう深い意味ぢやないらしいんだ。監督達はこの頃頻々として起るコソ泥について君を疑つてるらしい」

「へえ、そいつは初耳だ。だつて君、一寸したものをちよい〱盗んで行くのはありや支那人ぢやなくて野鼠だよ。先刻野積の枕木を動かしたらうざ〱する程鼠が飛出して逃げたぜ。枕木の下の土を掘つて、そこに豚の脂だのパンの破片だのをいつぱいくわへ込んであつたよ」

「要するに君を變な奴だと思つてゐるんだよ。氣をつけなくつちやあ」

張は笑つて言つた。

「だから俺は少しは毆られたつておど〱してゐてやるんだ。苦力の信用を得るにや先づ監督の信用を得なけりやこゝぢやすぐ失敗するよ。シッシッ鮫島が來た」

列車が現場に留ると敷設機掛りの苦力をのぞく他の工夫たちは車上から飛降りた。そして蟻の様に散つて自分の部署にとまつた。

自分で軌條と枕木とを敷いてその線路の上を漸進して行く敷設車の後部で多くの工夫達は敷設整理の仕事を分擔した、洪達十二名で一組のボールト掛りは、犬釘打ちの前でスナパーを掴つて手早く廻して行つた。

ぬるい湯の様なしめつぽい風がだん〳〵強くなつて來る。

午後、後のボールト掛りは二十米ばかりの前方で三人の工夫が十人程の現場監督に亂打されてゐるのを見た。一人の監督が振り下したのは確に曲線直しに使ふ鐵のバールであつた。吹きまくる埃の中で毆られてゐる人間の姿は影繪の様に薄くなつたりはつきりしたりした。さういふことは今までにも無數にあつたが今日といふ今日は我慢がしかねた。無智と貪慾との鬪りの様に考へられてゐる苦力達も眼近を彈きかへす強い感情だけは何處の國の勞働者にも劣らず持合はせて居つた。彼等は持つてゐたスナパーを線路の上に投げて走り出した。が、途中から引返してスナパーを拾つて行つた。

「待て、待て、もつと計劃的にやらなくつちや。向うには××があるぢやないか！」

後で叫んでゐる洪の聲をきかず彼等は走つた。そして逃げおくれた二人の監督を麻の空き袋の様に地面に打つ倒れるまでたゝきのめした。警務部員が走つて來た時には、もう彼等はあらい呼吸を鎭めながら軌條の繼ぎ目で何事もなかつた様にスナパーを廻してゐた。

「おや鼠がいつぱい走つて來るぞ。凄えもんだなあ」

夕暮に近かつた。卷ゲートルの足でチョコ〳〵枕木を渡つて來た伊東の言葉で後にゐた老人が顏をあげた。

「鼠がたくさん來る方角からはきつと洪水が來るつてことをきいたことがあるが……はてな」

彼は古紙の様に額へ卷いた辮髮に手をかざして地平線を望んだ。遠い地平線の上には黑い、髭の様な一塊の雲が浮いてゐた。それは風に吹き流されてゐる形であつた。その方角にも激しい風があるらしい。その空の下を灰色の艶のある毛をもつた野鼠の一群が風と同じ方向へ無數に走つて行きつゝあつた。彼等はピョン〳〵はね上りながら巾ひろいベルトの様に地面の色をかへて流れた。鼠の群が湧いて來る地平線の彼方は埃で充血したやうに赤くなつてゐた。何かの不吉がそちらの空に生じつゝある様に思はれた。

彼等は暫く軌道から目を離して不安な鼠の群を見た。六月が來たのに一本の草も生へず、一條の川も見えないたつた一色のこの平原を、彼等はこの時程、無慈悲に、憎々しく、抵抗しがたい、人間の感情を皆吸ひとつてしまふ乾燥を持つたものゝ様に感じた事はなかつた。鼠の群はその風景にさらに焦立たしい灰色をそへて眞直くに走つて行きつゝあつた。

夕食の時後部の材料置場から他の用事のついでに電話で列車上の逃亡犯人がそちらの工事場へ紛れ込んで行つた形跡があるといふことを

言つて來た。どこの工事場にもよくあることで大して氣にとめる必要はなかつたが、ぢやあやつぱりこの頃のコソ泥は鼠ばかりの仕業ぢやないのかしらと現場監督達は言つた。

「仕事はこの頃また馬鹿に捗らないんだねえ。鐵道局の方ぢやあどうしても八月までに街基まで完成させなけりや責任者を更迭させちまふつて言つてるさうだよ」

電話を受けた技師は不機嫌に言ひ放いて狹い卓の前を行つたり來たりした。その傍で鮫島と今一人の技手とが張が怪しいとか戀といふ老人が妙に目が凄いとかで爭つてゐた。二人の支那人は偶然に二人とも三號の宿營車に寢てゐた。

「よし、それぢやあ盜難だの何だのをひつくるめて大々的に××しをやつてやらうぢやないか。さうでもしなけりやこれ以上能率を擧げる方法はありやあせんよ」

×鐵道株式會社が東三省總司令へ手交した工事請負契約附屬書には、この工事が民國十四年四月までに完成しなければ工費仕拂を三年間延期されても差支へない旨が書いてある。その代り約束期限内に完成させた曉、完成から六ケ月間に奉天政府が工費を仕拂はなければその債權を直に借款として移しても差支へないといふ今一枚の附屬書が總司令から×鐵道株式會社に手交されてあつた。四月といへばあと約十ケ月である。その間には四ケ月といふ結氷期があり嫩江の鐵橋架設といふ難工事も挾まれてある。しかも×鐵道株式會社にとつては、約束期限に完成しないといふ事の結果は、工費受取が三ケ年延びるといふ小さな不利益にとゞまらず借款の好機を永久に取逃すことにもなるのである。

借款の好機を失ふといふことはこの鐵道から上る利潤の分け前にあづかれないといふ消極的な不利益ばかりではなかつた。それは東支線へ北上する貨物を南下させて×鐵道株式會社へ吸收したいといふ長い間の食慾を滿たす千載一遇を取失ふことでもあるのだ。洮昂鐵道局に假寓してゐる×鐵鐵道部の工作課出張所が焦るのは當然である。

「××し」が開始されることになつた。

夕暮一塊だつた雲が空の中央で暗い森の様にひろがつた。夜の八時、埃が泥濘みたいに平原を掩つた。それは空氣の濁流の様になだれを打ち、奔流になつて流れ、渦をまいて風に衝突して行つた。その底の方で一聯の列車が地面低く這つて昆蟲の死體の様に停止してゐた。突然裝甲車の機關銃口が外へ角度を動かした。

「やけに吹きやがるなあ」

壁にかけてある銃を外す音がした。裝甲車の重い扉が錆れた様にあき、また重量につれて戻つて行つて突當つた。そこには武裝した二人の警務部員が物臭く銃身をつかんでほうり出された様に立つてゐた。

「三號の奴等は皆外へ出ろ！」

風の中では、人間の聲の小さい音波は吹きとばされて一區づつの紋か何かの様にばら〳〵に散つた。二人は更に聲をはげました。

「外の宿營車は皆扉を閉めるんだぞ。今日から扉をあけといて寢るこたあ絕對ならん！」

三人は革の長靴で步き出した。足音が近づくに從つて舊型の貨車の扉が內に吸はれる樣にポーンポーンと閉つて行く。それは田螺が防禦のために蓋をするやうなものであつた。

「三號の奴等！　出ろ！」

一人がどなつてゐる間に二人は銃をたてかけておいて一つ／＼の宿營車の扉に外から錠を下げて行つた。三號の「油を搾る」時外の奴等に飛出されないための用心である。

「貴樣等あ監督を甘く見やがつて勝手な眞似ばかりしやがつたが。今日はどうするか見て居れ！」

さま／＼な服裝で降りて來た支那人に向つて今一度どなつた。監督より少し體格のよい彼等の顏は警務部員等のちやうど額の上にある。三人はどなりながら、心の中でもう鉋屑の樣にくる／＼卷いてしまつた何かを感じた。厭な役目だなといふ氣持が言合せた樣に三人を苦々しくしてゐた。

「先づ手前え達にきくが、この頃雜品を鼠の樣にチョイ／＼引張り込む奴はどいつだ」

この男は以前に旅順監獄で看守をやつたことがあるので揚子、齒磨、石鹼などを引つくるめて「雜品」といふ監獄語をつい使つて言つた。いつの間にか彼は囚人の前に立つてゐた時の心持を甦らせてゐた。

他の二人はこの男が照れもしないで豫定通りの事を言つてゐるのが何だか滑稽になつた。そして「鼠の樣に」とはこの場合何てまづい比喩だらうと考へた。

「鼠の樣に引張り込む？　フンそりやあ、大人、鼠が引込むんだもの、鼠の樣に引張り込むのはあたりまへでせう。私だつてほら、この の入齒をこないだの晩拔いといてとられつちまつたんですよ。盜まれたのは貴方がたばかりぢやありませんぜ。」

成る程さういへば、さう言ふこの老人の澁色の入齒がなくなつてゐる。醜い齒莖が脣の裏に時々堤防の樣に見えかくれた。彈力のない脣は獨立性を失つて、これだけ喋る間にも折々中の方へ折れ込まうとした。

警務部員は內側へ頻に彎曲して來る自分の氣持を押しかへした。

「何言つてやがる。支那人が泥棒だつていふこたあ天下の事實だ。他や未だ泥棒しねえ支那人を見た事あねえ。この老いぼれめ。こつち出て來い。」

探照燈の眩しい青の光線が、彼等の全身に染料の樣に注ぎかゝる。たてかけてある銃を、ある氣持をもつておいつと見つめてゐた若い工夫があつた。どなつてゐる途中でフッと警務部員はそれに氣がついた。彼にはそれがあまりに重大な發見だつたので反射的にスッと視線をそらした。

「あつ、こいつだな。逃亡犯人は」

彼は何故ともなくさう思つた。外らした視線に通じる神經の底の方で、銃身に蛇の樣に卷きついてゐる、その男の白熱光の樣な强い視線をはつきり感じることが出來た。今にもその視線がクレーンの樣に銃をまき上げてしまひさうだ。

彼はある頂點にゐる瞬間を感じた。

次の瞬間彼は突嗟に×をとり上げた。そして××をその工夫のゐる方へ向けた。

（一行削除）

それは過失であつたか故意であつたか彼自身にもわからない。彼はたゞ埃の渦いてゐる地面に動いてゐる肉體を見た。それが幻影の樣でもあつた。

「なんだ！　なんだ！」

數字のついてゐる扉から出て來た監督達の手には黑い××××があつた。彼にはしかし遠い彼方の人影の樣にも思はれた。

こゝはどこだ。蒙古か。そして俺は。彼ははじめて、その男を×つ必要が自分自身の內部には何んにもなかつた事に氣がついた。自分の存在が砂の樣に崩れた。そして鐵骨の樣に心に殘つたものを明に見た。あゝそれは自分自身の意志ではない。それは誰かの――たしかにそれは自分を雇つてゐる×鐵道株式會社の全苦力に對する意志である。彼は自分に對する恐しい距離の樣なものを感じた。彼はひよろひよろと步き出した。後で知つてゐる支那語をきゝながら。

×××た男は×に××××てうめいてゐた。

警務部員等はもう命令されたことをこれ以上履行する勇氣を失つて、白い顏をして事務車の方へ步き出した。

「あつはつはつは。やつたね。江之島のやつ、あれでなか〳〵思ひ切つたところもあるんだねえ。時にやあいゝよ。」

警務部員等は技師のぼやけた笑顏のうしろにそれとなく、この方角へ步いて來た江之島の姿をおづ〳〵探した。

三號車の一應の搜索のために工夫達は列車の一番尻につながつてゐる物置車へ移されることになつた。

扉をひらくとばら〳〵と鼠が逃げる。輸送して來たまゝの機械類が御造箱でかこはれたまゝ何個も積重ねてあつて眞暗だ。

風はます〳〵吹きつのつてゐる。すぐ傍に鼻を突き出してゐるクレーンでワイヤロープが切れさうに搖れて、先にぶら下つてゐる爪は錘の樣に重々しく空氣をまぜた。

二十八人の工夫は狹い入口から押し込まれた。もう外で錠が下りたらしい。

「……ひでえことをするんだなあ。とんだ所へたぶらかされてやつて來たものさ」

「あいつがまづかつたんだよ。あいつはこないだつから××が二挺苦力側にありさへすりやあこんな工事場はいつでも引くりかへして見せるつて俺に始終言つてゐたんだ。俺や氣がつかなかつたが、さつき、鐵砲があつたのであいつがきつと變なそぶりをしたんだらう。それを氣取られたんだよ」

「ねえ、ねえ」

とそれらの聲を制して若い聲が隅の方から起つた。

「×××××てものはこんな時に起すもんぢやないかしらん」

それはたつた今誰の頭にもあつた考であつた。彼等の中には十人に一人位しか文字の讀める者はなかつたが、人に雇はれて働く者の本能で、今年の一月から各所に起つた×××××騷ぎのことは聞き知つてゐた。

話は自然にそちらへ動いて行つた。

「ちやうど今はいゝ時機なんだ。」

と說明したのは張だつた。

彼はそれから×鐵道株式會社と××××との契約をかいつまんでわかる樣に話してきかせた。

「俺達を皆首にして追返してゐた日にやあ、新しい苦力を募集して連れて來るまでに一と月位すぐたつちまふよ。それに仕事にや慣れてゐないしさ」

「此頃の技手達の焦りかたで皆はそのことはうす〳〵知つてゐた。それから話はもう既に××××が始まり、四百人が四百人とも皆煽動に乘り、監督達が皆降參してしまつたかの樣にせり上つて行つた。

「口で言つて見りあ簡單な樣だがね、實際にやつてみるとなか〳〵さう巧く行かないんだ。だから、決して監督に氣附かれちや駄目だよ。それから仲間を一人でも多くふやすこと。この二つを當分守らなけりやあ、却つてひどい目に會ふぞ」

張は却つて皆の氣持を押へつけるためにこんな事を言はなければならなかつた。そして張の言つた事は間違ひなかつた。四百人はおろかこの二十八人の中にさへ、あの消極的で我慢強い、生活慾の弱い、貝殼の樣の形に適應して生きる貝の身の樣な支那苦力の一面の性格をそなへた人間が幾人か存在したのだ。

暗い中で、ある者は喋つてゐる男が誰であるか全く見當がつかない。そして言つてゐる言葉の意味もわからない。いや、そんな事をきくのが煩いのだ。睡い。さういふ男達は變に脂が出て來る足を布靴から脫いで箱に腰かけたまゝ人によりかゝつて眠り出した。過去のことは忘れた。先のことはわからない。たゞ現在が紐の樣にふん伸びて行きさへすればそれでいゝのだ。彼等はさういふ要求しか持つてゐなかつた。そして曖昧な顏の一端に涎を流しながら、腰かけてゐる箱を誰かに交代してやることも考へずたゞ眠つた。

夜が更けて來ると足もとでキイ〳〵鼠がないた。夜があけ切らないうちに扉があいた。

「さあ、出ろ！　野郎共！　少しは懲りたか。」

若い工夫たちは昨夜中に出來た一つの塊を腹の中へ持つてそれぞれの仕事へ蜘蛛の様に散つて行つた。

三　杆前進――

空が一面に曇つて平原の色が變つた。急に濕度が高くなつた空氣をとほして日本人の高聲がドラの様に濁る。工夫達は天幕を疊み待避線の軌條と枕木とを掘りかへした。

南京米の麻袋が座布團の様に輕々と投げとばされる。地面には鼠があけた穴からこぼれた細い南京米が砂の様に散亂した。

苦力達は重い石油罐をかついでクレーンの下へ集つて來て散つて行つた。

敷設車はもう石炭をたいて競技前の競馬馬の様に出發をあせつた。炊事車の窓から石炭殼が灰神樂を立てゝなだれ落ちる。と同時に捨てゝある野菜の皮や茶殼から蜂程もある蒙古蠅がグワンと舞上る。彼等は洮南からこの列車について繁殖しながらこゝまでやつて來たのだ。野積の枕木を動かす毎に灰色の瓜の様な鼠が走り出す。

冷藏庫、日本人達の行李、米の叺、金庫、食卓それらは一つづつクレーンにくわへられて空中に吊上り、角砂糖の様に材料車の上に落ちて積重つた。やがて宿營車が材料車のうしろへ連結された。

いよいよ出發だ。暫くの停車で錆びた軌道の上を宿營車が動き出した。工夫達は材料の上や宿營車の戸口で、へだたつて行く宿營地點を見送つた。

また三杆奥へ入るのだ。悔いても悔いつくせない悔恨が詰つてゐる頭を、彼等は速力がまき起す風にさらした。もう洮南からは大分遠くなつてしまつた。女も、酒も、休息も飽食もない埃の蒙古を一と抱へもある大きな太陽とたつた一色で塗り潰された平原とにはもう飽き飽きした。だが、といつて、こゝまで來てはどうすることも出來ない。勞働、勞働、勞働、それがもう十ケ月も監督の壁の様にこの先へ續かうといふのだ。

×傷の苦い工夫は貨車の棚の上で手まりの様にはね上つた。彼は列車が先へ進んでゐるのか後へ戻つてゐるのか少しも見當がつかなかつた。そして自分が何のためにどこへ行きつゝあるのかもわからなかつた。たゞ眞暗な板の上で時々動搖につれて彈ね上つた。

目的地點で汽車が止つた。それは昨日の現場である。出發の時と反對の作業が小人數で行はれた。天幕が骨格をひろげる。

敷設車は宿營車から切離れて自分の軌道をつくりながら一分間十米づつ進む。百貫も積重つた背中の軌條が一本づつ二十秒おきに左側の轉送機に辷り込んで滑らかに動いて行く。右側の轉送機ではロールが冷靜に廻つて枕木が載つて行つた。ドツドツドツドツと折々横へ蒸氣を吐いた。ボールト掛りは軌條の繼ぎ目で背をかゞめてボールトを、引つ掛けたスナパーで締めて行くのである。それは、樂に出來得るだけの能力でやつておけばいゝといふわけには行かなかつた。眠

が痛む。目が霞む。掌のマメが擦れる。一分間に十米進む先頭の敷設車との間が少し長くなつたと思ふとすぐ現場監督が近づいて來る。後から犬釘打ちが迫つて來る。しかし犬釘打も後の曲線直しに迫ひつゞけられた。そしてまたその曲線直しも水準作業に追ひつゞけられた。最後の仕上げをやつて行く水準作業は後で追ふものがないにも拘らず曲線直しとの間に伸びる距離をちゞめるために焦つた。それらは、皆、そこに働く當事者以外の者の磁力によつて動かされた。彼等は大きな磁石の下に吸ひよせられた鐵粉の様なものであつた。個々の鐵粉達の動きは即ち一つの磁石の動きだつたのである。

頭が妙に熱い。遠い地平線が眞中を軸として上下に緩く揺れる。その度に見渡す限りひろがつてゐるボール紙の様な地面が西へ向けてさつと傾斜する。——最初にこの錯覺に捕はれたのは敷設車を押してゐる機關車の機關助手だつた。彼はあまりの暑さに帽子を脱いで石炭の上へ投げた。熱いボイラーの傍にゐると何だか吐き氣を催ほして來る。仕方なしに横から顔を出して押されて行く敷設車の作業を見てゐた。が、何ともどかしく感じられることだらう。いやになつてしまつた。まるでみゝずみたいに土をなめて行く様な鹽梅だ。彼は腹の中でそんな罵倒の言葉を考へた。

そのうちにひろい平原が波の様に躍り出した。堪らなくなつて石炭の上へ顔を伏せてしまつた。

「おい／＼、どうしたい。おい」

「あゝ、苦しい。苦しい。」

彼はやつとさう言つた。

同様なことが後の曲線直しの中の一人にも起つた。

その男はたら／＼汗を流して、鐵のバールを線路から一尺も離れた砂利の上に、弓弦の様なのろまな曲線を描いて投げおろしたり持上げたりしてゐた。

「ヤーンチョイ」といふ掛聲をかけてゐた監督が變だと思つて傍へ寄ると彼は熱くさい臭氣を發して苦しさうにもたれかゝつた。

「鼠咬症といふやつかも知れないな」

明に、未ださういふ病状の患者を手にかけた事がないらしい口調で、囑託醫山田は彼等を診てから言つた。そして事務車の戸棚から持つて來たヨード丁幾を五六日前に鼠に咬まれたのだといふ小さい傷痕に塗りつけた。傷痕にはもう赤茶色の皮が出來てゐた。しかし、彼等の熱は昇るばかりであつた。翌日になると、あちらの宿營車からも、こちらの宿營車からも同じ病人の訴へが出た。その中には鼠に咬まれたことのない者もまぢつてゐた。

「變だなあ。ワイルス氏病の症状に似てゐる様でもあるが……」鼠がワイルス氏病を運ぶといふことは彼も勿論知つてゐたが、ワイルス氏病は秋でなければ發病しない病氣の様に彼は醫學校で習つてゐた。

その翌日になると病人が頭の上へ枕代りに押込んでゐた半天や褲子が薄黄色に染まつて來た。それは、こゝの暗さに慣れた者の目にしか見えなかつた。

山田は暗い宿營車の入口で臭氣を我慢しながら幾度か病人の顏を覗き込んだ。その顏は黄色に變つて來てゐる樣でもあり、少しも變つてゐない樣でもあつた。が、何しろ日焦で油紙の樣になつてゐるので判別しがたかつた。

「たしかにワイルス氏病だ」

四日目にやつと彼は、血清の藥品がこの列車に用意してないことと、炊事車の窓に金網が張つてないこととを同時に思ひながら病名を斷定した。その時にはもう三十人の同じ病人が洮南へ汽車をかへすことを懇願しながらのたうち廻つてゐた。

「我不去……」

病人たちは熱にうかされて時々うわ言を言つた。「俺は行かん！」といふ意味であつた。

「離這兒有多少里地」

それは「此處から幾里あるんだい」といふ意味である。

「好！　好！　行かんでもいゝよ。そんな里程の事なんぞ心配するな。もう直きに洮南へかへるんだよ」

健康な工夫が棚から下を覗き込んで慰めたが、さう言ふ自分自身が涙ぐんだ。

翌日になるとその慰めた人間も同じ病氣にかゝつてうわ言を言つた。病人はアスピリンと水ばかり呑まされて唇がかさ〳〵に白く乾いた。

毎日曇つて依然として風が吹いた。一時來なくなつた鼠の襲撃が急に激しくなつて來た。

勝に乘じた歩兵の樣に、生物の臭氣を目當てに馳けよつて來た。健康な工夫達が宿營車にゐる間は投げつけられる鐵片や石炭の塊に脅えて物の下にかくれた。が、靜かな時がやつて來ると扉口や通風孔から誰にもはゞからずどん〳〵侵入した。そしてねてゐる病人の顏の上や脫いだシャツの上に馳け寄つて食物を求めた。

遂に二人の死人が出た朝病人は百九十人に達した。出發の敷設車の上には工夫の姿がまばらになつた。しかし、列車は髯の樣に散る黒煙を吐いて威丈高に出發した。それは充ちあふれる戰鬪意志をもつた戰鬪艦の姿に見えた。

風の方向が變つた。一丁程離れた地點で石油を掛けて二個の死體をやいてゐた煙がす早く地面を這つた。それが綿みたいにきれ〳〵に宿營車の横腹へ吹きつけた。千里の平原を吹いて來た風は測り知れない巾と丈とを持つて未だ千里や二千里は吹きとばし得る樣な揮力を持つてゐた。空を吹き拂つて除け、大地を紙みたいに吹きめくる意志を持つてゐるかの樣に天と地との間に充滿して空氣を運び去つた。

（二行削除）

洗滌へ引返したい」といふ氣持が、恐しい勢で繁殖しつゝあつた。それと一緒に、苦力達の間だけの秘密のつながりが、どの宿營車にも種痘の様に移殖され終つた。

いよ〳〵、×××が來たと彼等は思つた。

ある朝、彼等は、約束にしたがつて、ジヤツキや敷設機の部分品の鐵輪が轉つてゐる物搬車の後へ集つて行つた。

「おい〳〵、何してゐるんだ。貴樣裏切るのか！」

一人の工夫が、バケツへ石炭を盛つて通り過ぎやうとする炊事の苦力に聲をかけた。

「何？」

と呼ばれた苦力はのろくさい目でその男を見た。

「貴樣とぼけてゐるのか？　今日から一せいに仕事をやらんことにきのふきめたぢやないか」

「仕事をやらん事に？そんな事あきかんよ」

彼はバケツを下げて行つてしまつた。

「可笑しいなあ。打合はせが通じてゐない筈はないんだが……」

すると向うから、右肩へ襤褸片をのせて、枕木をかつぐ身支度をした一とかたまりがやつて來る。彼は走り出さうとして石炭搬場の傍にあつたシヤベルに躓いた。

「待ち給へ……」

彼は辛うじて言つた。

「君達にやゆうべの打合せが通じて居なかつたかね。」

「打合はせつて何だい」

「へえ！　ぢや通じてゐないんだね。けふからいよ〳〵、病人を洗滌へ歸して治療すること、俺達の仕事に時間の制限をつけることを要求して一齊に×××まうつていふんだよ。ちつ、しやうがないなあ」

物搬車の後にはセメン樽へ腰かけたり鐵板の上へ掛つたりした二十人ばかりの苦力が風に顔をそむけながら、取り殘された立木の様に背をかゞめて立つてゐた。

「これつきりか！」

そこへ走つて來た男の問には誰も答へず、彼等はいかにも、さうして立つてゐることが自分の意志でないらしい物臭い顔を、汚い首の上で靜かに廻轉して來た。そして霧の様な光のない視線を漠然と投げかけた。

男は何か考へついてまた走り去つた。

その時物搬車の向うで汽笛が鳴つた。短く斷續されてゐる列車は生命を吹きかへした様に、頭の上から煙を放散し、胸腹から蒸氣を勢よく噴き出した。技師が走つて來た。

「こらつ、誰にだまされてこんなことを始めやがつたんだ。言ひこえことがあつたら一人前の仕事をやつておいてから言つたらいゝぢやないか。さあ、早く來い。發車だ」技手は狼狽をかくさずただめる様につけ加へた。

「大人しく言ひさへすりや大抵の事はきいてやるよ」工夫達はその聲

に吊り上げられて腰で割れてゐる袍子を振りながらぞろ〳〵歩き出した。三人ばかりの男が宿營車の方から走つて來た時にはもう工夫は一人もゐなかつた。

計畫は皆失敗した。夜は宿營車に外から錠が下りて出られないので、彼等は相談の場所をいつも進行して來る列車の上にきめてゐた。其處で集合場所などを打合はせる筈になつてゐた日にかぎつて、技手が二人も乘合はせてしまつたことが聯絡の斷たれた原因であつた。それに、××××がこの場合どういふ意義をもつのかも大部分の人間にわかつてゐなかつた。それは先に立つた數人だけの獨り合點に終つてゐたのであつた。しかし能率の低下で焦り切つてゐる彼等は、この小さい出來事に對して何の制裁も加へるわけに行かなかつた。たゞ、張のうしろに一人の警務部員がいつも尾きそふことになつた。

「これで手心がわかつたさ。今度はうまくやつて見せるよ」

計劃に始めから加はつてゐた工夫達はたゞ一言さう言合つた。間もなく後の建築列車がいくらかの藥品を積んで來た。病人たちは何に利くのかわからない散藥や水藥をとにかく呑まされ、數日間は氣のせいか、誰が多少樂になつた樣に想つた。

「×××みたいな奴等なんだもの、あゝしてほつときやすぐ治つちやふよ」技師は仕事の能率のことばかり頭にあるので、病人を後部へ送りかへすことにはあくまで反對だつた。

四日の後、宿營車は見渡す限りの草原の中まで進んで行つた。麥に似た去年の雜草が枯れて倒れてゐる平原の眞中で、苦力達が、新しく×××少年の××に石油をかけて火をつけた。その火が枯草に移つて三日三晩燃えつゞけた。

誰の所有でもない平原の火は風の誘ふ方向に向つて、晝は白い煙になつて吹きなびき、夜は赤く空の埃にうつつた。いつ風向が變るともわからないので、宿營車のまわりだけの草刈りが行はれた。

いつの間にか苦力達に對する不安が去ると待遇はもと通りに戻つてゐた。或る日、地面に草があるから冷えないだらうといふ理由で、始めから寢てゐた病人達だけは、石炭の俵を敷いた天幕へ移すことになつた。

苦力の間には決定的に戰ふだけの勇氣も持てず、といつていろ〳〵な不滿のやり場がない。さういふ幾日かが過ぎた。技師はその間に探照燈を作りかへたり、吊りランプを提げる樣に工夫したりして、夜業を始める計劃をはじめた。

ワイルス氏病はもう蔓延の時期は過ぎてゐた。かゝつた人間だけが、ぽつぽつ死んで行つた。

そのうちに雨が降りはじめた。永い雨もよひの後に來た雨だけに、四日降りつゞいても未だやまうとはしない。

雨が降り出すと長い地平線が消えて空の端は平原の果に垂れ落ちて來た樣に見えた。土の色が變り、埃をかむつてゐた貨物車は黑い艶を

現して、雫を垂らしながらぬれた線路の上に停止してゐた。

ある日の晝過ぎ、行く手の雨の中から夥しい牛車の列がさしかゝつて來た。

恐しく髯の濃い蒙古人が銃を背負つて先頭に丈の低い蒙古馬を走らせて來た。それが一隊の指揮者でゝもあるらしかつた。そのうしろから不格好な俵を積んだ木製の輪の車が、一頭づつの牛をつないで悠然と並んで來た。それは泰來氣から模古氣を經て東支鐵道に積込まれハルピンに送られる大豆と高粱であつた。

支那人達はこんな平原の中で初めて出會つた人間と毎日同じ場所で會ふ貨物車の樣に素つ氣なく別れる事が何だか悲しい樣な氣がした。

「お前達はどこへ行くんだい」

人懷しい目つきでそんな事をきいた。

すると先頭に立つてゐた男が手眞似まぢりに、あちらから洪水が來るので後戻りして東屏鎭を迂廻するのだと答へた。

「洪水が來る」といふ言葉が傳はると、皆の注意は一時に牛車の列から剝げてとれた。めつたに雨が降らない代りに、蒙古の雨は降り出すと必ず洪水を伴ふものだといふ事は、かね〴〵誰でもきいてゐた。彼等は今それが單なる言ひ傳へでなく、ほんとうにあることだつた事を知つたのである。今になつてみると鼠の夥しい襲來も首肯された。

「嫩江の氾濫かな」

技手が電話柱へ昇つて行つて片手で望遠鏡を目にあてた。が、レンズの中には、雨足の堆積で出來上つたもやもやの樣な雲しか見えなかつた。よく見てゐるとそれが光つた水の樣にも見えた。

「速刻東南へ引返して水害を避けること。其處で病人を全部×鐵道株式會社病院へ入れること」

こんどは、全部の苦力の熱烈な支持を得た單純な要求が、三十過ぎの賢といふ大人しい工夫に代表されて、その夜、口頭で事務車に申出された。

苦力達は明日の荷積の用意をするでもなく宿營車の中で履く布靴をはいたまゝ拔き捨てゝあるペンキ塗りの木標の上に上つてゐた。そこで事務車から出て來る賢を待つてゐた。三度電話のベルが鳴つた。

日本人達も洮南へ引返したいといふ氣持だけは工夫達に劣らず持つてゐた。たゞ、工夫達が、壓迫して來るものにあくまで力で對して要求を通さうとしてゐるのとちがつて彼等は、上役達の同情や理解に自分達の要求をとほさうと考へた。

彼等は鐵道局へ電話をかけた。鐵道局では洪水なんぞある筈はないと言つた。そして、昂々溪とハルピンの氣象台へ電報を打つて天氣を問ひ合はせた。

暫くすると鐵道局の方から敷設の進行狀態について電話をかけて來た。技師はそれを言はれることを何よりも苦痛に思ひながら實際の粁の數字よりも三粁多い數字を電話口で言つた。その際はつい小くつて

に吊り上げられて腰で割れてゐる袍子を揺りながらぞろ〳〵歩き出した。三人ばかりの男が宿營車の方から走つて來た時にはもう工夫は一人もゐなかつた。

計畫は皆失敗した。夜は宿營車に外から錠が下りて出られないので、彼等は相談の場所をいつも逆行して來る列車の上にきめてゐた。其處で集合場所などを打合はせる筈になつてゐた日にかぎつて、技手が二人も乘合はせてしまつたことが聯絡の斷たれた原因であつた。それに、××××がこの場合どういふ意義をもつのかも大部分の人間にわかつてゐなかつた。それは先に立つた數人だけの獨り合點に終つてゐたのであつた。しかし能率の低下で焦り切つてゐる彼等は、この小さい出來事に對して何の制裁も加へるわけに行かなかつた。たゞ、張のうしろに一人の警務部員がいつも尾きそふことになつた。

「これで手心がわかつたさ。今度はうまくやつて見せるよ」

計劃に始めから加はつてゐた工夫達はたゞ一言さう言合つた。間もなく後の建築列車がいくらかの藥品を積んで來た。病人たちは何に利くのかわからない散藥や水藥をとにかく呑まされ、數日間は氣のせいか、體が多少樂になつた樣に想つた。

「××××みたいな奴等なんだもの、あゝしてほつときやすぐ治つちやふよ」技師は仕事の能率のことばかり頭にあるので、病人を後部へ送りかへすことにはあくまで反對だつた。

四日の後、宿營車は見渡す限りの草原の中まで進んで行つた。麥に似た去年の雜草が枯れて倒れてゐる平原の眞中で、苦力達が、新しく×××少年の××に石油をかけて火をつけた。その火が枯草に移つて三日三晩燃えつゞけた。

誰の所有でもない平原の火は風の誘ふ方向に向つて、晝は白い煙になつて吹きなびき、夜は赤く空の埃にうつつた。いつ風向が變るともわからないので、宿營車のまわりだけの草刈りが行はれた。

いつの間にか苦力達に對する不安が去ると待遇はもと通りに戻つてゐた。或る日、地面に草があるから冷えないだらうといふ理由で、始めから寢てゐた病人達だけは、石炭の俵を敷いた天幕へ移すことになつた。

苦力の間には決定的に戰ふだけの勇氣も持てず、といつていろ〳〵な不滿のやり場がない。さういふ幾日かが過ぎた。技師はその間に探照燈を作りかへたり、吊りランプを提げる樣に工夫したりして、夜業を始める計劃をはじめた。

ワイルス氏病はもう蔓延の時期は過ぎてゐた。かゝつた人間だけが、ぽつぽつ死んで行つた。

そのうちに雨が降りはじめた。永い雨もよひの後に來た雨だけに、四日降りつゞいても未だやまうとはしない。

雨が降り出すと長い地平線が消えて空の端は平原の果に垂れ落ちて來た樣に見えた。土の色が變り、埃をかむつてゐた貨物車は黒い艶を

現して、雫を垂らしながらぬれた線路の上に停止してゐた。
ある日の晝過ぎ、行く手の雨の中から夥しい牛車の列がさしかゝつて來た。
恐しく髯の濃い蒙古人が銃を背負つて先頭に丈の低い蒙古馬を走らせて來た。それが一隊の指揮者でゞもあるらしかつた。そのうしろから不恰好な俵を積んだ木製の輪の車が、一頭づつの牛をつないで悠然と並んで來た。それは泰來氣から模古氣を經て東支鐵道に積込まれハルピンに送られる大豆と高粱であつた。
支那人達はこんな平原の中で初めて出會つた人間と毎日同じ場所で會ふ貨物車の様に素つ氣なく別れる事が何だか悲しい様な氣がした。
「お前達はどこへ行くんだい」
人懐しい目つきでそんな事をきいた。
すると先頭に立つてゐた男が手眞似まぢりに、あちらから洪水が來るので後戻りして東屛鎭を迂廻するのだと答へた。
「洪水が來る」といふ言葉が傳はると、皆の注意は一時に牛車の列から剝げてとれた。めつたに雨が降らない代りに、蒙古の雨は降り出すと必ず洪水を伴ふものだといふ事は、かねぐ\誰でもきいてゐた。彼等は今それが單なる言ひ傳へでなく、ほんとうにあることだつた事を知つたのである。今になつてみると鼠の夥しい襲來も首肯された。
「嫩江の氾濫かな」
技手が電話柱へ昇つて行つて片手で望遠鏡を目にあてた。が、レンズの中には、雨足の堆積で出來上つたもやもやの様な雲しか見えなかつた。よく見てゐるとそれが光つた水の様にも見えた。
「速刻東南へ引返して水害を避けること。其處で病人を全部〆鐵道株式會社病院へ入れること」
こんどは、全部の苦力の熱烈な支持を得た單純な要求が、三十過ぎの賢といふ大人しい工夫に代表されて、その夜、口頭で事務車に提出された。
苦力達は明日の荷積の用意をするでもなく宿營車の中で賑く布團をはいたまゝ拔き捨てゝあるペンキ塗りの木標の上に上つてゐた。そこで事務車から出て來る賢を待つてゐた。三度電話のベルが鳴つた。
日本人達も洮南へ引返したいといふ氣持だけは工夫達に劣らず持つてゐた。たゞ、工夫達が、壓迫して來るものにあくまで力で對して要求を通さうとしてゐるのとちがつて彼等は、上役達の同情や理解で自分達の要求をとほさうと考へた。
彼等は鐵道局へ電話をかけた。鐵道局では洪水なんぞある筈はないと言つた。そして、昂々溪とハルピンの氣象台へ電報を打つて天氣を問ひ合はせた。
暫くすると鐵道局の方から敷設の進行狀態について電話をかけて來た。技師はそれを言はれることを何よりも苦痛に思ひながら實際の粁の數字よりも三粁多い數字を電話口で言つた。その際はつい小くつて

不鮮明だつたかも知れなかつた。

「え？」「え？」と相手は幾度かきゝかへした後「馬鹿々々しい話だ―」と嘲つた。

「君達やあ一體、この國家的な仕事を一私人の人情や情實で勝手に振うつていふのかね。洪水が何だね。苦力が何だね。契約期間内に完成するかしないかといふ×鐵道株式會社の肩にかゝつてゐる重大な問題の前に、一體、そんなことがどれだけの價値を持つてゐるといふんだい！」

技師はさういふ言葉を感覺する右の耳が熱くなつた。電話はそのあとで、「もし洪水が出るとすれば、材料や既設線の損害を少くする用心をする樣に」と命令した。電話器の奧の奧の方に古めかしい尻上りの入字髭をぼんやり描きながら彼は決然と電話を切つた。彼は叱責されて勇氣づいた。

「君達の要求のお答は今後五日の間にすることにしよう。だがね、ま、いゝや……」

と妙な音をうしろへつけて言つた。

彼はその三日の間に、××××に對する用意をするつもりであつた。何といつても、先日の經驗で彼は苦力達の團結力を甘く見てゐたのである。彼は技師の表面の返答の外に、彼が少しも工夫達の要求を容れる意志を持つてゐないことを見てとつて扉の外へ出た。

苦力達に要求された方法はたつた一つであつた。その方法は、もはや、公式的な「×××××」である筈はなかつた。彼等は×××××現場で監督に不意打を食はせて自分達だけで列車を引返す方法を考へはじめた。翌日も雨が降つた。その次の日のことであつた。

事務車に殘つた四人の日本人と宿營車の病人達とは意外な時刻に列車が戻つて來る響を足下の軌道に感觸した。やがて霧の中から現れた列車は後に連結されてゐる筈の敷設車を牽いてゐなかつた。機關車は體が輕くなつたので軌道を蹴る樣にはね上つた。氣の立つた工夫達が前方の材料車の上に立ちはだかつて口々に何か喚いてゐた。それが風の抑揚に從つて海鳴りの樣に遠くなつたり近くなつたりした。日本人達は軌道の上へ駈け出しこの異樣な列車へ望遠鏡を向けていそいでレンズを廻した。いくら廻して見てもその列車の上には一人の日本人も見當らなかつた。

日本人が杭の樣に立つてゐる目の前の待避線に機關車が熱い風を撒き散して轟然と辷り込んで來た。すると手にバールを握つた工夫達が停車し切らないうちに飛び降りた。

後から降りた三人の工夫が、今朝出發の時に事務部員が腰に從へてゐた×××××××××、××重さうに提げてゐるのを見た時、日本人ははじめて事の成り行きを知つた。折惡しく裝甲車の當直員は風邪で宿營車に寢て居り、裝甲車の扉は閉つてゐてあかなかつた。

朝まで無氣力で大人しかつた支那人達の肉體の上には、何か嶮しい變化がやつて來た樣にしか日本人には見えなかつた。忽ち電話線が

切られて觸角の樣にブラ下つた。新しい××××は走つて行つて監督達の宿營車の前に銃をかついで立つた。その中にはロープで縛られて

（二行削除）

宿營車が前進する日の朝の樣に支那人達は天幕をたゝみ、積んであつた穀物を材料車の上に投げ込んだ。

石炭をシャベルで掻込む者、列車の車輪を覗いて檢車する者、機關車へ給水車を挽いて行つて給水する者、彼等はいつもと同じに忙しく働いた。いつもそこいらをぶら〳〵歩いてゐる長靴を履いた監督のゐない事だけがいつもと違つてゐた。彼等は一つの仕事がすむと喚聲をあげた。

炊事車からは豚を團りのまゝ燒く煙があがつた。事務車へ乘り込んだ工夫は老牌や金口などを窓から抛いてゐる工夫達の方へ兩手でつかんで投げた。それでまた喚聲が上つた。あつちでもこつちでもマッチを擦つた。彼等はマッチを一個づつ受けとつて用もないのにシュッと擦つて投げた。

そこへ大きな金庫を戸口から五人がかりで轉して來た。

「何だい。そりや」

「こりや金庫さ」

金庫は後から蹴られても前から蹴られてもビクともしなかつた。

「一體何が入つてゐるんだね」

「金や書類なんかを盗まれたり燒いたりしない樣に入れとくんだよ」

「ふうん、便利なもんだな」

また蹴つて見たが鋼鐵で武裝してゐる金庫はビクともしなかつた。却つて足の方が痛くなつた。

やがて、再び機關車から煙があがつて、激しい呼吸が始つた。そして、汽笛も鳴らさずに動き出した。病人をのせた幾つもの宿營車が次々に運動を後へ傳へて行つた。汽車は現場と反對の洮南へ向いて出發した。機關車の前には日本人が建設した直線では最長であると誇つた直線の線路が洮南の方向を指して遠い一點に凝集してゐた。

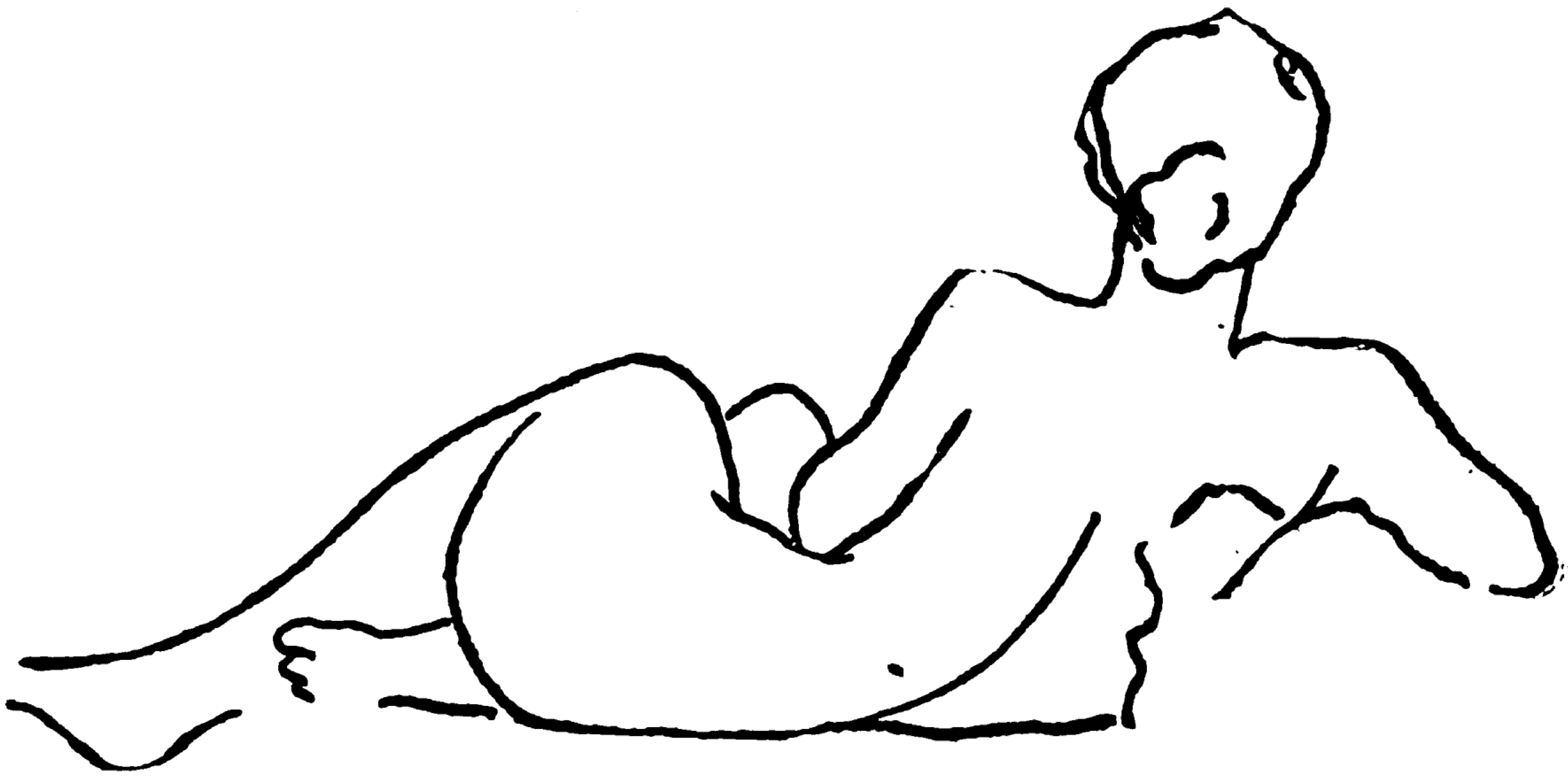
後では、彼等には少しも用事のない、やたらに重かつた金庫が豆ころの樣に小さくなり、便所の屋根が低くなり、野積の枕木と軌條とが枯草で出來た地平線と合した。ロールで送られて來る樣に、次から次から新しい地面が地平線を軸にして流出して來た。

「天亮了！　天亮了！」

彼等は「夜があけた！」といふ歌をうたひ出した。

汽車は夕暮に向つて走り、闇に向つて走り、曉に向つて走り、また、光線の中を走つて通り拔けた。彼等は病人の世話や炊事や運轉の仕事を分擔して役員をつくり不完全ながら委員會も成立させた。

五日目の朝、事務車の抽出しで誰かゞ信號に使つた赤木綿の小旗を發見した。それが煙突の前の照明器の上に、誰かの手によつて結びつけられた。



# 卍（まんじ）

谷崎潤一郎

## その二十八

そんで夫は、そんな書き付け手に觸れるのも汚らはしい思ひましてんけど、何んせ相手が非常識な人間のことやさかい、此の男にこんなもん持たしといたら何するか分らん、此れはどないぞして取つてしもた方がええ思て、「お話はよう分りました、あんたの仰つしやる通りやとしたら、頼まれいでも夫たるもんの責任として放つとけしません。けど僕としても、あんたとは今日始めてお目にかかつたばつかりやし、疑がふ云ふ譯ではないが、一應家内の云ふことも聞いてみんことには片手落ちになる。就いては此の書き付け暫く貸しといて貰へませんか。此れ眼の前へ突き付けてやつたら、身に覺えのあることならきつと白狀しますやろけど、さうでもなかつたら中中剛情な奴ですさかい」云ひましたら、貸すとも貸さんとも云はんといて、急に大事さうにそれ膝の上に置いて、「しかしあんたは、もし園子さんが白狀しなさつたらどう云ふ處置お取りになるのんです」云ひますのんで、「どう云ふ處置取ろと、そらその時の都合次第やさかい今から明言する譯に行かん。僕はあんたに頼まれたから家内を詰問するのんやない。僕はあんたの利益の

ために働くのんやなうて、僕自身の面目、自分の家庭の幸福のために働くのんや云ふことを承知して下さい」云うたところが、何んや嫌アな顔して、「僕かて何んにも、自分のために働いて欲しい云ふのんやあれしませんが、今度の事は、あんたの利害と僕の利害とが偶然一致してる思たのんで、伺うたのんです。あんたかてそれは認めなさるやろ」云ひますよつて、「そんなこと僕は考へる餘裕もなし、又考へたうもありません。失禮ながら、僕はあんたとぐるになつてそんな事件の中へ捲き込まれたうないのんです。僕は自分の自由意志で自分の妻を處分するだけです」云うてやつた。すると「ああ、さうですか、そんなら仕方ありませんが」云うて、又ニヤニヤと薄氣味わるい笑ひ方して、「ほんま云うたら、僕かてあんたには縁もゆかりもないのんですから、こんなこと頼みに來られる義理やないのんですけど、そいでも僕、もし園子さんが光子と一緒に逃げるやうなことあつたら、困るのんは自分ばかりやない、それ知つてながら默つてたらあんたに對しても不親切や思て來たのんですが」云ひながら、チロチロ人の顔のぞき込んで、「そないなつたら、あんたかて嫌でも應でも事件の中へ捲き込まれてしまひますで」云ひますのんで、「いや、御好意は分りました。御親切に對しては感謝します」云うてやりますと、「ただ感謝する云はれただけでは困るのんです。一體あんたは、まさか園子さんに逃げられるやうなへマな事しなさらんやろ思ひますが、そいでも萬一逃げられた場合にはどないなさいますか、逃げたもんには未練ない云うてアキラメておしまひになりますか、それとも何處迄でも追ひかけて行つて取り戻そ云ふお積りですか、そこのとこをハッキリきめといて下さい」云ひますよつて、「僕は自分の行動に就いて、その時になつて見んと分らんこと今から他人に約束したり、それに制肘しられたりするのんイヤやのんです。まして夫婦のあひだのことは飽くまで夫婦のあひだだけで解決つけます」云ひましたら、「しかしあんたは、どんな事あつてもよもや園子さんを離縁なさるやうなことありますまいな」云ふのんですて。その云ひ方が變に厚かましいて、しつこうにねちねち絡み着いて來ますのんで、自分の妻を離縁しようとしまいと、餘計なお世話やないか、何もあんたがそんな心配する必要ありますまい云うてやりましたら、「いや、そいでもあんたは園子さんの實家に恩義ある筈や」とか、「ちよつとやそつとの不都合があつたから云うて、園子さんを追ひ出したら義理が濟まんやろ」とか、多分光子さんから聞いたのんですやろが、そんな内輪の事情までちやんと知つてて、「あんたも立派な紳士やよつて、まさかそんな不德義なことしなされへんやろ思ひます」云うたりするのんで、夫もしまひには腹に据ゑかねて、「あんたは一體何しに來たのんや。何んのためにそんな關係もないこといつ迄もべちやべちや

しやべつてるのんや。あんたに注意して貰はんかて僕は僕で紳士の道守りますけど、それがあんたの利害と一致するかどうかは保証する譯に行けしませんから、どうぞその積りでゐて下さい」云うたら、「ふん、さうですか、そんなら折角ですが此の書き付けお貸しすること出來ません」云うて、膝の上に置いてあつたのんを丁寧に封筒い入れて、内ぼところい收ふのんやさうです。夫はそれが欲しかつたことは欲しかつたけど、そんな行きがかりになつてしもたらもうしやうがない、却つて弱味見せたらあかん思て、「ええ、ええ、僕も斷つて拜借しようとは思ひませんから、御自由にお持ち歸り下さい。但し一言お斷りしておきますが、あんたがそれを、僕の手を經て僕の家内に示すことを拒まれる以上は、家内が事實を否定した場合に、僕としてもその書き付けに信を置くこと出來んかも知れない。僕は當然、初對面のあんたより家内の方を信じますから」云うてやつた。そしたら獨りごとのやうに、「とかく夫が細君に甘いのが間違ひの起る原やのんですな」云うて、「なあに、此の書きつけと同じもんが園子さんのとこいも行つてますよつて、何處ぞ捜しなさつたらきつと出て來ますで。尤もそんなことしなさらんかて、、、、、、ところ出さして見なさつたら、今でも、、、ある筈です。それが何よりの證據やありませんか。」――――と、そないな憎まれ口云うて、「お忙しいとこえらいお邪魔しました」と、わざと落ち着いて挨拶して出て行きますのんで、それを廊下まで送つて行つて、呆れた奴や思ひながら部屋に戻つてほつとしてますと、ものの五分ぐらゐした時分、又コッコッとドーアをノックして、「やあ、唯今は失禮しましたが、ちよつと、あのう、もう一遍お邪魔さして貰ひます」云うて、何と思たのんか、今度は妙にニコニコとあいそ笑ひしながら、そのほん五分ぐらゐのあひだにまるで人間變つたみたいな表情して這入つて來ましてん。それが夫には又氣味わるうて、ぎよつとしながら默つて見てましたら、テーブルの前い來て、お時儀して、「おかけなさい」とも云はんうちに今腰かけてた椅子にかけて、「さつきは僕が惡かつたです。僕は今、命にかけてもと思ふ人を取るか取られるか、大事な瀬戸際にあるもんですから、自分のことにばつかり眼エくらんで、あんたの感情を尊重する餘裕失うてました。何も惡意あつてあんなこと云うたんやありませんから、さつきのことは水に流して下さい」云ひますよつて、「それをわざわざ云ひに來なさつたんですか」云ひますと、「はあ、さうです、外い出てから考へてみたら、自分が惡かつた云ふこと分りましたのんで、何んや知らん氣イ濟まんもんですから詫まりに來ました」云うて、「それは御丁寧なことです」云うてやつても、「はあ、……」云うたなり、まだモヂモヂと腰かけて、けつたいな作り笑ひして、「實はあのう、かうしてこんなことお

願ひに來たりお詫びに上つたりしますのんも、よくよく苦しい立ち場に置かれて思案に餘つた結果やのんですが、どうぞ僕の此の、切ない、溺る瀨ない、泣くにも泣けん胸の中を推量して下さいませんか。それさい察して貰へたらさつきの書き付けお貸ししてもよろしいのんです」云ひますのんで、「察してくれ云うて、どんな工合に察したらええのんですか」云ひましたら、「正直なとこ、僕は何より、あんたが園子さんを離緣しなさるやうになるのんを恐れるのんです。そないなつたら園子さんヤケ糞起して、ますます光子と、、、、、しもて、僕が結婚する望み尙のことないやうになつてしまふ。僕かてあんたがめつたにそんなことしなされへん思ひますけど、どない考へても心配やのんは、園子さんが光子連れ出して逃げる場合です。何遍も何遍もくどいやうですが、よつぽど監督嚴重にして下さらんと、きつと近いうちに逃げるにきまつてますのんで、一遍そんなことあつたら、たとひあんたが心のうちでは園子さん赦してやろ思ひなさつても、世間の手前さうも出來んやうになるかも分らん。それ考へたら僕は危險がもう眼の前い迫つてる氣イして、夜もおちおち寢られへんのんです。」――そない云うて、「どうぞ、どうぞ、お願ひします」と、額をテーブルへ擦りつけるやうにお時儀して、「さう云ふ譯ですから、自分の都合のええことばつかり云ふ勝手な奴やとお思ひになりますやろけど、僕の窮境察して下さつて、此れから後、どんな事あつても園子さん逃がさんやうに責任持つて監督する、そいでもまさか括り附けとく譯にも行けしませんさかい、逃げられることないとは限りませんけど、そないなつても追ひかけて行つてきつと家い引き戾す云ふこと約束して下さい。それさい『うん』云うて下さつたら此の書き付けお預けします」云うて、「今更こんなこと念押さんかて、あんたは園子さん非常に愛しなさる、決して離緣しなさらんことはよう分つてるのんですが、それを一と言あんた御自身の口から聞かして欲しいのんです。あんたかて僕を哀れんで下さつたら、お腹の中でちやんときまつてること云うて下さつてもええやありませんか。」――夫はそれ聞いてるうちに、つくづく此の男イヤ味な奴ッちや、初めからもつと素直に、人の感情さんやうに云へるもんを、わざとほじくり返すやうな餘計なこと云うて、顏色見い見い態度いろいろに變へたりして、何ちゆうけつたいな男やらう、これなら女に好かれる筈ないよつて、光子さんかて嫌になんなさつたかも知れん、よつぽど損な性質に生れついた人間や。そない思たら今度はほんまに可哀さうになつて來て、「そしたらあんたも此の書き付け將來明るみい出すやうなことせん云うて誓うてくれますか、そして僕が必要と認めるあひだ保管さしてといてくれますか、それ承知なら僕もあんたの條件容れてもよろしいです」云うたら、「此の

書き付けは、そこにも書いたある通り双方合意の上でないと人に見せられんやうになつてるのんですが、既に園子さんの方に背信行爲あつたと認めますのんで、僕があんた方困らしてやろ云ふ氣イあつたら、此れ種にしてどんな事でも出來んことあれしまへん。けど僕そんな卑怯な眞似する人間でないことは、此れわざわざあんたのとこい持つて來てお預けするのでも分るやありませんか。なあに、相手に誠意なかつたら何んぼこんなもん書かしても反古と同じですよつて、お役に立つのんならどうぞ持つて行つて使て下さい。僕の方はただ、さつきの二箇條さい約束して下されば滿足やのんです」云ひますさかい、さう話分つてくれたら結構や、そんならそれと、何んで初めから云はんのんやろ思ひながら、「そいでは確かにお預りします」云うて受け取ろとしますと、「ちよつと待つて下さい」云うて、「甚だ恐縮ですが、後日のために一と筆預かり證文書いて貰へませんやろか」云ふのんやさうです。そいでそれも承知しました云うて、「右正ニ御預リ致候也」と書いてやりましたら、「その後へもう一と筆書き足して下さい」云ふのんで、「何を書くのんです」云うたら、「下名ハ右證書ヲ保管中左ノ條件ヲ遵守スルコトヲ誓フ、一、下名ハ下名ノ妻ガ妻タル者ノ行爲ニ悖ルコトナキヤウ責任ヲ持ツテ監督ス、二、下名ハ如何ナル場合ニ於イテモ決シテ妻ヲ離縁セズ、三、下名ハ所有主ヨリ請求サレタル時ハ何時ニテモ保管中ノ證書ヲ提示シ、若シクハ返却スベキ義務アルモノトス、四、下名ガ保管中ノ證書ヲ紛失シタルトキハ、何等カ他ニ所有主ヲ滿足セシムル保證ヲ與ヘザル限リ、第一條及ビ第二條ニ規定シタル義務ヨリ解除セラルルコトナシ、――」それを、一遍にすらすら云ふのんと違て、一つ書いてしまふと又考へて、「あ、もう一と筆願ひます」云うて、だんだんそんな工合に書き足さすのんで、何んや、馬鹿馬鹿しい、三百代言みたいなこと云ふ奴や思て、面白半分に好きなやうなこと云はして、その通り書いてやつて、「では此の後い但し書きを一つ入れますで。――但シ、下名ノ保管スル證書ガ虚構ノ事實ニ基ケルモノナル時ハ凡ベテノ約束ヲ無效トス、――なあ、こない書いといても差し支ひあれしませんやろ？」云うて、はつとしたらしうどぎまぎしてる樣子でしてんけど、さつさと構はんと書いてしもて渡してやつたら、急に又未練出たやうにぐづぐづしながら、そいでも仕方なしに書き付け置いて行きましてんと。

　夫はそこまで一と息に話して來て、「どうや、此の書き付けお前書いたのんに違ひないのんか。お前の方にも此れと同じもん行つてるのんなら出して見なさい」云ひながら、じつと返答待つてますのんで、私は默つて立ち上つて、鍵のかかつてる抽き出し開けて、そこに隱してあつたもう一通の方持つて來て、無言のままテーブルの上い置きまし

てん。

## その二十九

「ふーん、此れある以上は此の書き付けニセ物やないのんやなあ？」そない云はれても、やつぱり默つて頷いて見せますと、夫は私がどんな氣持ちでゐるのんか見當つかんもんですさかい、疑ひ深さうに眼エぱちぱちさして、「そしたら此の誓書に書いたあることみんなほんまの事實やのんか」云ふのんです。「そら、ほんまのこともあるねんけど、うそのこともあるねん。」――――私はさつき夫の話聞きながら、もうこないなつたら隱し立てしたかてしやうがない、いつそ綿貫の計略の裏掻いて、自分に都合ええことも惡いことも、何んでも彼んでも殘らず打ッちやけて、あとは成り行きに任してやろ、ひよッとしたら案じるより生むが易うて、どんなうまいことあるかも分れへんと、すつくり腹きめてましたのんで、先づ第一に綿貫の秘密すつぱ拔いてやつて、そやさかい光子さん妊娠してはる云ふのんうそや云ふここ、さつき夫が會うた時は お腹にいろいろなもん詰めてなさつたのんや云ふこと、あの笠屋町の宿屋にしたかて、常時彼處にゐなさるのんでも何んでもないこと、此の誓文書かされた時は綿貫にあんじよう嵌められて、脅迫されたのんや云ふこと、自分が欺されてたことから夫欺してたこと迄、なんでも二時間ぐらゐかかつて一切合財話してやりましたら、「ふん、ふん」云うて、別にびつくりしたやうな樣子もせんと、ときどき溜め息つきながらしまひまで聞いてしもて、「そしたらお前の嘘云うたことちよつともうそないねんなあ？　綿貫云ふ男にそんな秘密あること確かやねんなあ？」云うて、「ほんま云うたら、自分の方にもちやあんと調べ届いてる」云ふのんです。それが、夫が綿貫に會うたのんは四五日前のことですのんに、そいから今日まで知らん顏して事件伏せといた云ふのんは、何んや綿貫云ふ奴の素振りが怪しい、何ぞもつと深い譯あるのんやないか云ふ氣イしたのんで、私に打つかる前に一應取り調べてやろ思て秘密探偵に頼んだとこが、そんな商賣大阪にかつて仰山あれしませんさかい、此なひだ光子さんが頼みなさつたのんと同じとこへ行つてしもたのんで、「その人なら大概のこと分つてます、前に調べたことあります」云うて、その場で直きに答へてくれた。そいで綿貫が訪ンねて來た日の夕方には、もう一と通り棚上つてしもてたのんですが、夫はあんまり意外やのんで同名異人の間違ひやないか知らん思ひましてんけど、探偵の方には光子さんとのいきさつまで分つてて疑がふ餘地あれしませんし、………そないなつて來ると、今度は光子さん妊娠してなさる云ふことや、笠屋町の家のことや、私と光子さんとの關係や、なんとも腑に落ちんことだらけです

よつて、また改めて光子さんの方調べさした。その報告の屆いたのん今朝のことで、そいでも夫はまだ半信半疑でしたさかい、自分で樣子見て來てやろ思てさつき不意に笠屋町訪ンねてやつた云ふのんです。

「そしたらあの時、お腹に物詰めてはつたこと分つてたん？」私はわざと打ち解けた調子でそない云うてやりましたけど、夫はそれには答へんと、「僕はお前の今日の態度いつもより柔順で正直なこと認める。けどその正直さは過去の罪惡後悔してるためやのんかどうか、それハツキリ云うて見なさい」云ひますねん。「お前かて自分の過去の行ひが、どないに汚れた、人間の道に外れてるもんか云はんかて分つてるやろ。僕もそんな不愉快なことほぜくり返す氣イないねんよつて、これから後、本氣で罪の償ひをする決心あるかないか、それ聞かしてくれたらええ。どうせ綿貫との約束やかい眞面目に守る必要もないねんけど、兎に角僕はお前離縁せん云ふことあの男の前で誓うた。それに考へてみたら僕自身にも手落ちあつた。夫としての監督怠つてた云ふ綿貫の云ひぐさにも一應理窟ないことないし、光子さんの家の方から苦情申し込まれたら、お前より先に僕手エついて詫まらんならん思てるぐらゐやし、こんな事になつたのんは夫婦共同の責任みたいに感じてる。第一新聞にでも出ることあつたら、何んとしてお前の親たちに云ひ譯せう。それも普通の意味での戀愛やとか三角關係やとか云ふのんやつたら、まだ話しよも同情のしよもあるけど、此の證文に書いたあるやうなこと、誰が讀んだかて氣違ひとより思エへんで。一旦そんな習慣ついたら眼エさめたかて中中取り返しつけへんけど、今のうちやつたらまだどないぞなるやろさかい、よう落ち着いて考へてみて御覽。ま、そない思ふのん身贔屓かも分れへんが、お前の云ふのん聞いてみたら、もともと綿貫云ふ奴の、、性から起つたことで、ほんまに惡いのん彼の男一人や。お前かて光子さんかてあんた男に係り合はなんだら、まさかそんなこと覺えもせエへんやろし、……德光さんの家かて、それ分つたらどない思やはるやろ。僕今迄光子さん惡いのんや、あの兒不良少女やよつてお前にロクでもないこと敎せるのんや思ててんけど、親の身になつたら、綿貫云ふ男八つ裂きにしても飽き足らん思やはるやろ。何處へ出しても恥かしない器量自慢の娘持つてて、あんな奴に見込まれるやなんて、僕とこよりも一つ不仕合はせや。………」夫は私の激し易い性質に逆らうたらいかん思てますのんで、理性に訴へるより感情的に動かすやう努めてて、それが一種の手や云ふことは見え透いてますねんけど、親のことやかい持ち出されて、殊に光子さんのこと、そないに不憫らしう云はれましたら、自分の胸に思てることと一緒やのんで、急に悲しいになつて來て、眼エに一杯涙溜め溜め聞いてますと、「なあ、そやないか？」と、夫は涙で光

つてる頬べた覗詰めながら、「泣いてばつかりゐても分れへんさかい、よう分別して、今度こそ最後の、うそのないお前の考へ云うてみなさい。僕はお前がどうしても家出する云ふのんなら、そら仕方ない思てる。けど、ほんまの僕の氣持ち云うたら、憎いのんあの男だけで、お前も光子さんも可哀さうな目に遇うたんや思てるねん。かりにお前と離別せんならんことになつても、お前が今みたいな眞似つづけてたら、いつ迄立つてもその『可哀さうな』云ふ心持ち殘つてて、僕も長いこと苦しまんならんし、お前にしたかて、、光子さんと、、譯にも行けへんやないか。そしたら離別してもせいでも、どうせお前のその惡い癖直さんならん。僕の監督離れたかて、そないなことして世間許しとく筈ないさかい、仰山の人に心配かけた上自分も恥掻いて壓制的に止めさされるか、そないならんうち自分で悟つて直すやうにするか、孰方なとお前の心がけ次第やで。」「そんでもうち、……こないになつたのん因果やさかい、……死んであんたに詫まります！」突然私がそない云うたのんで、夫はビクリとして飛び上るやうな恰好しましてんけど、その時私はわッと泣きながらテーブルい俯伏してしまひましてん。「……どうせうちもう取り返しのつかん、、のんです、……こないになつたら誰にかて見放されるのん當り前やし、生きてたかて世間に顔向け出來へんさかい、……どうぞうち死なして頂戴、こんな腐つた人間にあんたかて未練ないやろし、……」「…誰がお前見放す云うた？見放したもんなら意見する筈ないやないか？」「そないに云うてくりやはるのん有り難い思ひますけど、今更うち一人ええ兒になつて光子さんあんなりに放つてしもたら、どないに難儀しやはるこッちやら、……あんたかて一番光子さん可哀さうや云やはつたやないか。」「そら云うた、云うたからこそお前等救ひ出そとしてるのんや。……まあ、お聞き、お前飛んでもない考へ違ひしてるで。お前みたいな意味でどないに、、捧げたかつてちよつとも難儀救てやることになれへんで。僕はお前のことばつかり心配してるのんやあれへんで。德光さんとこいも行て、よう譯話して、一切あの男近づけんやうに嚴重に監督して、お前との交際も遠慮して貰ふやうに注意するのんが、僕の義務やと思てるねん。そないしてこそ光子さんのためやないか。」「なんたみたいなことしなはつたら、うちより先に光子さん死にやはるし。……」「なんでや？ なんで死ぬのんや？」「何んででも死にやはる。……今迄かつて死ぬ死ぬ云うてはつたんやうやうのことで止めててんもん。……そやさかいうちも一緒に死にます。死んで社會い詫まります。」「馬鹿なこと云ひな！ そんなことして僕や親たちに迷惑かけて、それが何んで謝罪になるねん！」

## その三十

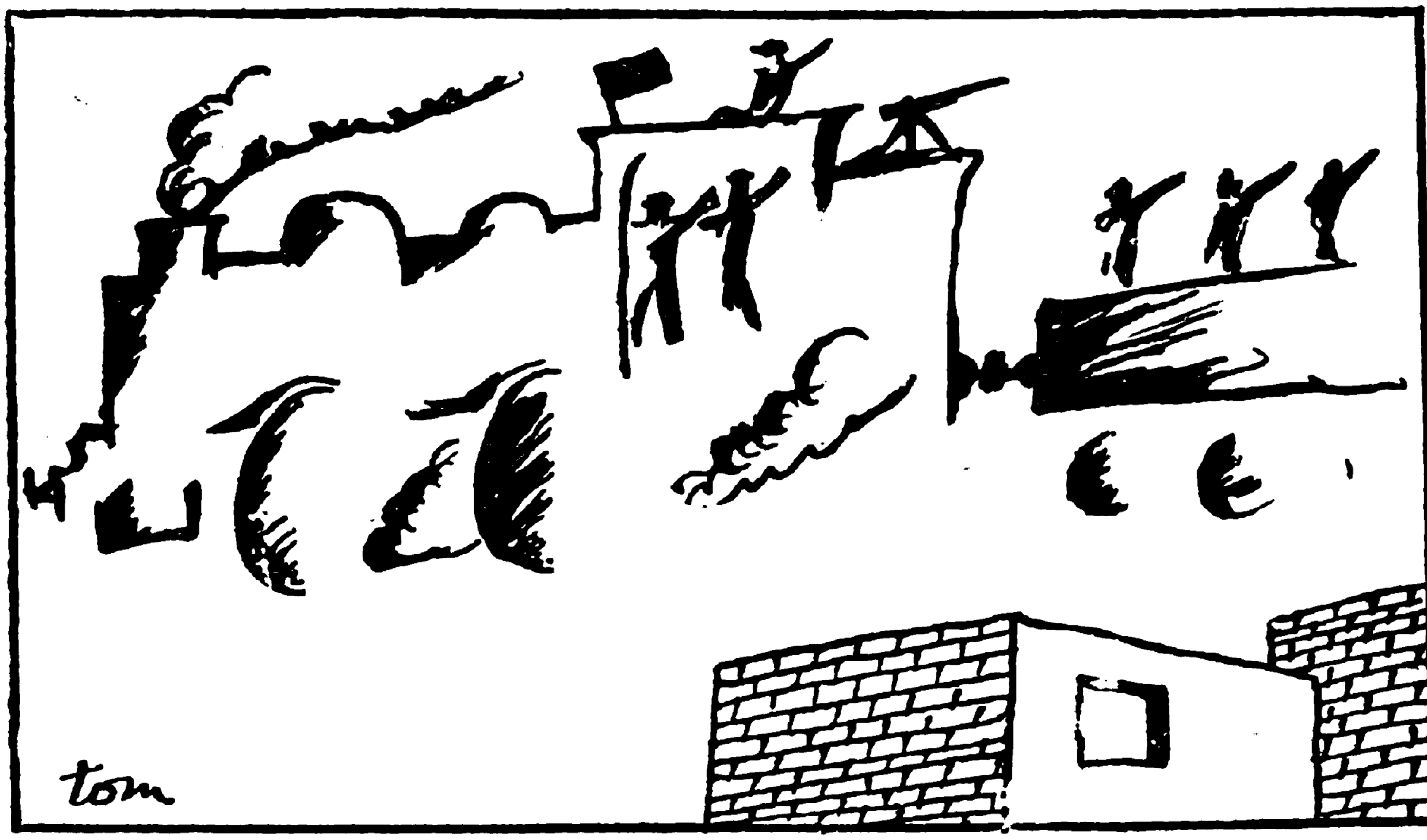
私は夫が何んちうても耳に入れんと、「いいえ、死にます、死なして頂戴」云うてテーブルい俯伏したなり、やんちやな兒オみたいに泣いてましてん。もう此の場合「死ぬ」云うて、、てやるのん一番ええ。それより外に方法ない。………そら、夫の云ふやうに、元ッちうたら綿貫悪いのんにきまつてますねんけど、（五十四字削除）……今の私の氣持ち云うたらそれぐらゐになつてますのんで、何んでその（九字削除）こと出來ますやろ。私の頭の中にあるんは、どないしたら此いから先も今迄のやうに會うて行くこと出來るやろかと、そればつかり考へてますのんで、正直に云うたら、自分の望み、、、、、、は夫に離緣しられるん一番恐い。前には夫、、したこともありますねんけど、此の人の、になつてたからこそ、却つて（十字削除）自由な行動取ること出來たやうなもんの、、とこいでも返されたら一歩も外へ出られんやうになるやろ。そやさかい何んとでもして、、、、しまはなあかん。どうせ此處まで知れてしもた以上、自分と光子さんとの關係納得さして、それ承認してくれたら、自分は夫大事にする、きつと夫婦仲も圓滿に行く（三十三字削除）、綿貫の奴どんな妨害したとこで、證據の書き付け此方い取つてしもたあるし、あんな男の云ふことやつたら信用するもんないやろし、（二十一字削除）、たとひ光子さん何處ぞい、、行きやはつても、（十一字削除）、ちやんとした家庭の奥様同志どないに仲好うしてたかて誰が何ちふもんあるやろ。（三十字削除）、前とちよつとも變つたことないばつかりか、前より、、しつくりと行くのんやし、三人より外誰も知つてるもんなかつたら、、、、に係はる云ふこともないねんよつて、無闇に事荒立てるよりその方が何んぼ優しか分れへん。夫は私に無鐵砲な事しられたら、自分の（九字削除）心配第一やのんで、お腹の中では私以上に離緣恐れてて、事勿れ主義に傾いてることよう分つてますさかい、「そないに束縛するのんなら、、、、、、ほんまに、、してやるぞ」云ふとこ見せて、そいからそろそろ注文持ち出して、（十二字削除）。――と、私はあらかた、、、、、、二日かかつても三日かかつてもきつとしまひには云ふこと聽かしてやるつもりで、なるべく反感挑發せんやうに、何云はれてもただ大人しいに無言のうちに涙ぐみながら、堅い決心隱してるみたいに割りと落ち着いてましたのんで、それが夫にはなほ氣味わるうて、その晩はとうど夜の明けるまで一睡もせんと傍に着いてて、何所いまで一緒に來るのんです。そいで明くる日は一日事務所休んでしもて、御飯も二階い運ばすやうにして、じつと睨み合ひしたなり、ときどき顔色うかがうては、「こないにして

たら體つづけへんさかい、一と寢して頭休めてから、ゆつくり考へ直してみて御覽」とか、「兎に角死ぬやの家出するやの云ふこと、思ひ止まる云ふ約束してくれ」とか云ひますねんけど、私は默つていや、いやして見せるばつかりで、心のうちでは、此處まで來たらもう（二十二字削除）大丈夫や思てましてん。ところがその又明くる日の朝、夫はどうしても一時間か二時間事務所へ出んならん用あるのんで、留守の間は絶對に外い出エへんし、電話もかけへん云ふこと誓ふか、それイヤやつたら大阪い連れて行く云ひますよつて、「うちかてあんた一人で出したら心配やさかい附いて行きます」云ひましたら、「何が心配やのんや」云ひますのんで、「うちに内證で德光さんとこい云ひつけ口でもしに行かれたら、それこそ生きてられへん」云ひますと、「僕かつてそんな、お前に納得させへんうちに無斷で不意討ち喰はすやうなこと絶對にせエへん。僕がそれ誓たらお前も誓うてくれるか」云ひますねん。そいで私も、「あんたさい意地の惡いことせエへん云ふのんなら、留守のあひだぐらゐじつとして待つてますさかい、安心して仕事して來て頂戴。うちもその間に一と休みしますわ」云うて、夫出してやりましたのんが九時頃のことで、暫く寢台に横になつてましてんけど、妙に興奮してしもてて寢られるどこやあれしません。それに夫から、大阪い着いたら直ぐ電話かかつて、そいから三十分置きぐらゐにチョイチョイかかつて來さすさかい、何んや知らん氣分落ち着かんと、部屋の中往つたり來たりしながらいろいろなこと考へてましたら、そのうちにふつと思ひついた云ふのんは、毎日毎日こんな工合に根競べしてたら、又綿貫がどないなわるさせんとも限らんし、光子さんかて一昨日あんなり別れてしもてどない思てはるか、昨日かて一日待つてやつたやろ。どうで口先で「死ぬ、死ぬ」云うたぐらゐでは、、利けへんさかい、いつそ（十九字削除）、早よ埒明くやろ。それもあんまりえらい騷ぎにならんやうに、奈良とか京都とか、何處ぞ近いとこい逃げてやろ。そいでお梅どん頼んで、わざとビックリしたみたいに夫のとこい駈け込んでもろて、「今お宅の奧さんと家のとうちゃんと何處そこい逃げはりました。家い知れたらえらいことになりますさかい早よ摑まへとくたはれ」云うて、もうちよつとで死ぬ云ふとこで夫連れて來て貰ふ。………それやつたら（九字削除）今日逃いたら機會あれへん。………と、そない思ひましてんけど、電話じやうたいかかつて來るのんで外へ出る譯に行けしませんさかい、「あのなあ、詳しい話會うてからするよつて、大急ぎでちよつと家まで來てほしい」云うて、電話で光子さん呼んどいて、「今光子さん來なさるけど、直き行にやはるさかい、旦那さんにそんなこと云うたらいかんで」と、女子衆に口止めしといて待つてましたら、そいから二十分ぐらゐして來や

はりましてん。

電話かかつて來るうちは夫大阪にゐるちふこと確かやのんで、却つて安心ですねんけど、そいでも不意に歸つて來たら裏口から出て貰お思て、光子さんの日傘と草履庭の方い廻しといて、逃げる時の用心に下の座敷で會うたのんですが、光子さんは初めから心配さうな靑い顏して、昨日一日見なんだ間にえらい窶れてなさつて、私の話聞きなさるともう涙ぐみながら、「そしたらあれから姉ちゃんの方にもそんなことあつてんなあ」云ひなさつて、自分もあの日の夕方から昨日にかけてさんざん綿貫にいぢめられた。綿貫の云ふのんには、「あんたと姉さんとグルになつて僕欺そとしてるさかい、僕の方もその裏搔いて此ないだ今橋の事務所い行つて、姉さんのことみんな主人に話して來てやつた。そやさかい笠屋町に様子探りに來たのんや。あないして姉さん連れて行かれてしもたら、もうなんぼ待つてたかて來る筈あれへん。」――

（つゞく）




# 海港章

横光利一

## 一

市街戰のあつたその日から流言が海港の中に渦卷いた。暗殺される外人の家の柱に白墨のマークが附いた。工務局では復讐のために大擧して襲ふであらう群集を豫想して、各國義勇團に出動準備を命令した。市街の要路は警官隊に固められた。拔劍したまま馳け違ふ騎馬隊の間を裝甲車が辷つていつた。義勇隊を乘せた自動車、それを運轉する外國婦人、機關銃隊の間を飛ぶ傳令。――市街は全く總動員の狀態に變化し始めた。警官はピストルのサックを脱して騒ぐ群集の中へ潜入した。すると、核をくり拔くやうに中からロシアの共産黨員が引き出された。辻々の街路に立つて排外演説をする者が續出した。群集は警官隊の拔劍の間から食み出してその周圍を取り包んだ。警官は鞭を振り上げて群集を追ひ散らさうとした。が、群集はただげらげら笑つてますます増加するばかりであつた。

參木は殆ど昨夜から眠ることが出來なかつた。彼は支那服を着たまま露路や通りを歩いてゐた。彼はもう市街に何が起つてゐるのかを考へなかつた。ただ彼はときどきぼん

やりした映畫に焦點を與へるやうに、自分の心の位置を測定した。すると、遽に彼の周圍が音響を立て始め、投石のために窓の壞れた電車が、をつけて街の中から辷つて來た。それはふと彼に街のどこかの一角で市街戰の行はれたことを響かせながら行き過ぎる。彼は再び彼自身が日本人であることを意識した。しかし、もう彼は幾度自身が日本人であることを知らされたか。彼は母國を肉體として現してゐることのために受ける危險が、このやうにも手近に迫つてゐる此の現象に、突然牙を生やした獸の成長を人の中から感じ出した。と、彼は自分の身體が母の體內から流れ出る光景と同時に、彼の今歩きつつある光景を考へた。その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日本の肉體の時間にちがひないのだ。そして恐らくこれからも。しかし、彼は彼自身の心が肉體から放れて自由に彼に母國を忘れしめやうとする企てをどうすることが出來るであらう。だが、彼の身體は外界が彼を日本人だと强ひることに反對することは出來ない。心が闘ふのではなく皮膚が外界と闘はねばならぬのだ。すると、心が皮膚に從つて闘ひ出す。武器が街のいたる所で光つてゐる中を參木は再び歩きながら、、、のために、、、、、、させてゐる群集の顏を感じ出した。それらの群集は銃劍や機關銃の金屬の流れの中で、個性を失ひ、その失つたことのためにますます、、、、、、、、、、、、、、。此の民族の運動の中で、參木は本能のままに自殺を決行しやうとしてゐる自分に氣がついた。彼は彼をして自殺せしめる母國の動力を感じると同時に、彼が自殺をするのか彼が自殺をせしめられるのかを考へた。しかし、何故に此のやうに彼の生活の行くさきざきが暗いのであらう。彼は彼の考へることが、自身が自身で考へてゐるのではなく、彼が母國のために考へさせられてゐる自身を感じる。最早や彼は彼自身で考へたい。それは何も考へないことだ。彼が彼を殺すこと——此の彼の見えない希望の前では、銃器が火藥をつめて街の中に潜んでゐた。群集は排外の唾を飛ばして工部局の方へ流れていつた。と、道路の兩側に蜂の巣のやうに並んでゐた消防隊のホースの口から、水が群集を目がけて噴き出した。その急流のやうな水の放射が群衆の開いた口の中へ突き刺さると、ばたばた倒れる人の中から礫が降つた。辻々の街路で警官に守られてゐた群集は騷ぎを聞くと、一齊にその中心へ向つて溢れ出した。

參木はこれらの膨脹する群集から脫れながら、再び昨日のやうに秋蘭の姿を探してゐる自分を感じた。彼は彼の前で水に割られては盛り返す群集の鋒を見詰め、倒れる旗の傾斜を見、投げられる礫の間で輝く耳環に延び上つた。と、ふと浮き上る彼の心は彼が昨日秋蘭を見る前と同樣の浮沈を續け出すのを彼は感じると、やがてホースの水の中

から飛び出るであらう彈丸を豫想した。もしいま一度彈丸が發射されたら、此の海港の內外の混亂は何人と雖も豫想することが出來ないのだ。しかし、そのとき、群衆の外廓は後方で膨れる力に押されながら、ホースの陣列を踏み潰した。と、發砲が命令された。銃砲の音響が連續した。參木は崩れ出す群衆の壓力を骨格に受けると、今まで前進してゐた通路の人波に卷き込まれたまま逆流し始めた。その流れは電車を喰ひ留め、兩側の外人店舖に投石し、物品を掠奪しながら暴徒となつて四方の街路へ擴つていつた。と、參木の前の群衆は急に停止すると、一人の支那人を取り包んで毆り出した。彼らは彼を「犬」だと叫んだ。彼らの叫んでゐる間に、もう彼は、、、、、、、、、、、、手は一方の街へ流れる群衆の先端で、、、、、、、、高々と振り廻され、足はその反對の街路へ向つて群衆の角のやうに動いていつた。そのがくがく搖れて通る足の上方の二階では、抱き合つた、、の踊り子達の踊る姿が窓の中で廻つてゐた。と、その窓を狙つて、礫の雨が舞ひ込んだ。騎馬隊の警官が群衆に向つて馳けて來た。その後から新製の裝甲車が試射欲に觸角を慄はせながら、辷つて來た。道路に滿ちた群衆は露路の中へ流れ込むと、壓迫された水のやうに再びはるか向うの露路口に現れ、また街路に滿ちながら、警官隊の背後から嘲笑を浴びせかけた。

　これらの群衆は暫くは警官隊の騎馬の鼻さきを愚弄しながら、だんだん總商會のホールの方へ近づいていつた。そこでは、前から集合してゐた商會總聯合會と、學生團體との聯合會議が開催されてゐるのである。附近の道路には數萬の男女の學生が會議の結果を待つて默つてゐた。議題は學生團の提出した外人に對する罷市敢行の決議にちがひないのだ。もし此の會議が通過すれば、全市街のあらゆる機關は停止するのだ。さうして、恐らくそれは間もないことであらう。參木にはこれら共產黨と資本家團體との一致の會合が、二日の後に開催される外人團の納稅特別會議に對する威嚇であることは分つてゐた。しかし、それにしても、もしその日の納稅特別會議が——外人の手で支那商人の首を一層確實に締めつける關稅引上げの議案を通過させれば、——參木には、その後の市街の混亂は全世界の表面に向つて氾濫し出すにちがひないと思はれた。すると、新たに流れて來た群衆は再び發砲された憤激の波を傳へながら、會場の周圍の群衆へ向つて流れ込んだ。群衆の輪は一つの波と打ち合ふ每に、動搖しながら會場の中へ波立つた。恐らく、その波の打ち寄せる鬨々とした刺戟の度に、提出された議題はその輪の中心で急速な進行を示してゐるにちがひないのだ。參木は前から此の群衆の渦の中心に秋蘭の潜んでゐるのを感じてゐた。しかし、彼はそのどこに彼女がゐるかを見るために、動搖する渦

の色彩を眺めてゐたのだ。すると、彼の皮膚は押し詰つた群衆の間を流れて均衡をとる體溫の層を感じ出した。と、彼は彼ひとりが異國人だと思ふ胸騒ぎに締めつけられた。彼は彼と秋蘭との間に群がる群衆の幅から無數の牙を感じると、次第にその團塊の中に流れた體溫からはぢき出されていく自分を見た。

## 二

參木が漸く群衆の中から放れて家へ歸ると、甲谷は先に歸つて待つてゐた。甲谷は云つた。

「もう僕はここにゐたつて駄目だ。四五日すれば材木が着くんだが、着いたら宮子を連れてシンガポールへ逃げ出さうと思つてゐる。」

「それで宮子は承知したのか。」

「いや、承知はまだだ。材木の金がとれるか宮子が落ちるか、とにかくどつちか一つが駄目なら、俺は自殺だ。」

「どつちも駄目だ。明日からは銀行も危くなるのは定つてゐるんだ。」

「そんなら、自殺も出來ないね。」

笑ふ後から滲み出る甲谷の困惑した顏色を、參木は默つて眺めてゐた。恐らく甲谷には參木の流れる冷たい心理の中へ足を踏み込むことは出來ないにちがひない。しかし、參木は甲谷の健康な欲望の波動から、過去の暖い日を幻燈のやうに感じ出した。すると、競子の顏が部屋の隅々から現れ出した。甲谷は云つた。

「とにかく、われわれはかうしてはゐられない。何かしなけりや

「何をするんだ。」

「それが分れば困りやしないよ。」

「君は宮子を落せばいいんぢやないか。」

「しかし、君はどうするんだ。」

「俺か。」

參木はもう一度秋蘭に逢ひたいだけだ。然もその可能は明後日に開かれる特別會議の夜だけに、かすかに盜見するほどのことであつた。しかし、參木は此の混亂の中で、最後の望みがどちらも女を見たいと思ふ鋭い事實だと氣がつくと、笑ひ出した。彼は云つた。

「君、あの宮子を君は突き飛ばすことは出來ないのか。」

「出來ない。あの女は僕を突き飛ばしてゐるだけだ。あの女には僕はシンガポールの材木をすつかり食はれてしまはなきア、駄目らしい。」

「君が出て來たときには、フイリッピン材を蹴飛ばさなきア歸らないと云つてたが、皮肉にも程度がある。もう僕は君にあの女をすすめるのはいやだ。あの女は君の裏と表をひつくり返して了つてゐる。」

「いや、ひつくり返つてゐるのは俺だけぢやない。此の街まで今は逆ま

さまになつてるんだ。これぢや、俺ひとりでどう立ち上らうと知れてゐる。とにかく、もういつぺんいつてひつくり返つてくるまでだ。」

甲谷は睡さうに立ち上ると、ポケットから競子の手紙を出して出ていつた。その手紙の中には、踊らうとしてゐる競子を邪魔してゐるものは此の開港の混亂だと書いてあつた。

——踊れなくしたのは誰だ、と參木は思つた。すると、彼の日日見せつけられた暴徒の擴つた黑い翼の記憶の中から、芳秋蘭の顏が樣々な變化を見せて現れ出した。

## 三

宮子は甲谷に誘はれるままに車に乘つた。彼女は彼女を取り卷く外人達が、今は義勇兵となつて街々で活動してゐる姿を見たかつたのだ。しかし、甲谷はもう彼女に叩かれ續けた自尊心の低さのために、今はますます叩かれる準備ばかりをしてゐなければならなかつた。二人は車を降りた。河岸の夜の公園の中では、いつものやうに春婦らがベンチに並んでうな垂れてゐた。髮のめぐつた白けた女達の皮膚の間から、噴水が舌のやうに上つてゐた。甲谷は雨の上つた菩提樹の葉影を洩れる瓦斯燈の光りに宮子の表情を確めながら、結婚の話をすすめ出した。

「もう僕は何もかも云つて了つて云ふことはないんだが、同じ云ふなら、もう一度云つたつて惡くはなからう。」

「まア、さういつもあなたはあたしばかりを攻めなくたつて、良ささうなもんだわね。」

「それで實は、もう僕も何から何までさらけ出して話すんだが、ひとつ、賴む。」

宮子は甲谷の肩にもたれかかると笑ひ出した。

「あたし、あなたは嫌ひぢやないの。だけど、さうあなたのやうに、いつもいつも同じことを云はれちや、あたしだつてをかしくなるわ。」

甲谷がベンチに腰を降ろすと宮子もかけた。甲谷は靴さきに浮ぶ支那船の燈火を蹴りつけながら、過去に饒舌つた言葉の石碑の間をすり抜けやうとして藻搔き出した。すると、對岸に繫つたマストの林の中から、急に搖れ上つた暴徒の一團が、工場の中へ流れ込んだ。發電所のガラスが穴を開けた。銃口が窓の中で火花を噴いた。と、黑々とした暴徒の影が隣りの煙草工場の方へ流れていつた。海上からは對岸のマストを狙つて、モーターボートの青いランプの群れが、縮ばるやうに馳け始めた。

甲谷は此の遠景の騒ぎの中から、宮子の放心してゐる心をひき抜くやうに彼女を搖つた。

「あちらはあちら、こちらはこちらだ。ね、君、君とかうして坐つてかうして話してゐても、僕には君の舌ばかりより見えないんだが、もういい加減に僕に安心させてくれたつて、」
「まア、あんなに嫉が出たわ。御覧なさいよ。あれは英米煙草だわ。もう此の街もお了ひだわ。」
「街なんかどうならうといゝぢやないか。いづれこの街は初めから僕の入つてる街なんだ。君は僕と一緒にシンガポールへ逃げてくれ給へ。」
「だつて、あたしにや此の街ほど大切な所はないんですもの。あたしここから出ていつたら、鱗の乾いた魚みたいよ。もうどすることも出來なくなればあたし死ぬだけ。あたし覺悟はいつだつてしてるんだけど、でも、あたし此の街はやつぱり好きだわ。」
甲谷は乘り出す調子が脱れて來ると、跳け込むやうにベンチの背中を掴んで周章て出した。彼は云つた。
「もうそんなことは考へないでくれないか。たゞ結婚してくれれば萬事こちらで良くしていく。それなら良からう。それなら、僕は。」
「だつて、あたし、だいいち結婚なんかしてみたいと思つたことたんてないんですもの。あたしもし結婚したければ、あなたが始め仰言つて下すつたとき、さつさとお返事してゐてよ。いくらあたしだつて、さうはあなたのやうに氣取つてばかりはゐられないわ。」
「そりや、いくら惡口云はれたつて、もう僕は氣取つてたんかゐる暇がないんだが、とにかく、これぢや、いくら君を廻つてぐるぐるしたつて、これはたゞ延つてゐると云ふだけだ。何んでもない。」
「あたしは駄目なの。あたし、自分が一人の男の傍にくつついて生活してゐる所なんか、想像が出來ないわ。あたし男の方を見てゐると誰だつて男のやうに見えるのよ。これで結婚なんかしてゐたらあなたから逃げ出されるにきまつてゐるわ。それよりあたしはあたしの流儀で、困つてゐる澤山の男の方にちやほやして騙してゐるの。あたしに騙されたと思ふものは、そりや馬鹿なの。だつて、今騙されたと思つて口惜しがつてる男なんか、日本にだつてゐやしないわ。あなたにしたつて、あたしがどんな女だかつて云ふことぐらゐ、一と目見ればお分りになりさうなもんぢやないの。それにあたしにお嫁入の話なんか仰言つて、あたしが冗談にして了ふことだつて、これでたいていのことぢやないことよ。」
波がよせると、それが冷たい幕のやうに甲谷の身體に沁み透つた。彼は彼女から腕を放した。切られた鎖のやうに沈む彼の心の斷面で、まだ見たこともない女の無數の影が入り交つた。が、その影の中で、宮子の顔はますます明瞭に浮き上つた。

「駄目だ。」と甲谷は云ふと、不意に彼女を抱きよせようとした。が、後ろのベンチで、春婦の群れが蟻のやうに塊つて眺めてゐた。彼は溜息を洩らすと、再び宮子から放れて背を延ばした。と、逆に宮子の身體が倒れて來た。彼は宮子を抱きよせながら、此の急激な彼女の變化に打たれて默つてゐた。宮子は云つた。

「あなた、あたしに暫くかうしてゐさせて頂戴。あたしときどき誰かにかうしてゐないと、駄目な性質なの。あたし、あなたのお心はもう分つたわ。だけど、駄目よあたしは。あなたは早くお綺麗な方を貰つてシンガポールへお歸りなさいな。あたしは誰にでもこんなことをする性質なの。」

宮子のイミタチオンの靴先が輕く甲谷の靴を蹴る度に、甲谷の腕は弛んで來た。彼は彼女がただ彼を慰める新らしい方法を、用ひだしただけだと氣がついたのだ。

彼は云つた。

「君の優しさは前から僕は知つてゐたんだが、此の上迷はすことは御免してくれ。ただもう僕は君が好きで仕方がないんだ。」

「あなたはあなたに似合はず、今夜はつまらないことばかり仰言るのね。あの樹の上を御覽なさいな。義勇兵が馳けててよ。それにあなたは、」

甲谷は宮子を芝生の上へ突き飛ばすと、立ち上つた。が、彼は彼女が、彼にそのやうにも怒らせやうと企んだ彼女の罠へ落ち込んだ自分を感じると、再び宮子の前へ坐り出した。

「君、もう慰めるのは、やめてくれ。僕には一生頭が上らないんだ。ただ僕の悪いのは、君を好きになつたと云ふことだけだ。それに君は……」

宮子は髮を振りながら芝生の上から起き上つた。

「さア、もう、歸りませうね。あたし、あなたがあたしを愛してゐて下さるんだと思ふと、もういつでも我ままになつちやうの。ね、だから、もう何もあたしには仰言らないで、」

しかし、甲谷は完全に振り落された男がここに轉げてゐるのだと氣がつくと、もう動くことも出來なくなつた。宮子は公園の入口の方へひとりときどき振り向きながら歩いていつた。芝生の上に倒れてゐる甲谷の頭の上の露臺では、火のついた煙草工場が爆竹を續け出した。

## 四

海港の支那人の活躍は縮つて來た。支那商業團體の各路商會聯合會、納税華人會、總商會の總ては一致團結して罷市贊成に署名を終へたのだ。學生團は戸毎の商店を廻り歩いて營業停止を勸告した。罷市

の宣傳が到る所の壁の上で新しい聲となつた。電車が停り、電話が停つた。各學校は開期不明の休校を宣言した。市街の店舗は一齊に大戸を降ろし、市場は閉鎖された。

　その日の夕刻、騷擾の分水嶺となるべき工部局の特別納稅會議が市政會館で開かれた。戒嚴令を施かれた會館の附近では、銃劍をつけた警官隊と義勇隊とが數間の間を隔いて廻つてゐた。會議の時刻が近づくと、晝間市中に波立つた流言の豫告のために、會館の周圍は息をひそめて靜まり出した。徘徊する義勇兵の眼の色が輝き出した。潜んだ爆彈を索り續ける警官が建物と建物との間を出入した。水道栓に縛りつけられたホースの陣列の間を、靜に裝甲車が通つていつた。やがて、議員達は武裝したまま陸續と議場の入口へ集つて來た。

　丁度參木の來たのはそのときであつた。會館附近の交通遮斷線の外では、街々の道路から流れて來た群集は、街路の廣場に溜り込んだまま、何事か待ち受けるかのやうに互に人々の顏を見合つてゐた。參木はそれらの人溜りの中を擦り抜けながら、その中に潜んでゐるにちがひない秋蘭の顏を搜していつた。もし彼女が彼との約束に似た暗默の言葉を忘れないなら、彼が彼女を此の附近で搜し續けてゐることも忘れない筈であつた。しかし、彼は歩いてゐるうちにだんだん周圍の群集と同樣に、不意に何事か湧き起つて來るであらう豫感を感じ出した。すると、群集はぢりぢり遮斷線からはみ出して會館へ向つて迫り出した。騎馬の警官がその亂れる群集の外廓に從つて、馬を躍らせた。スコットランドの隊員を積み上げた自動車が拔劍を逆立てたまま、飛ぶやうに疾走した。と、急に、群集の一角が靜まつた。すると、今まで騷いでゐた群集は奇怪な風を吸ひ込むやうに次から次へと默つていつた。と、全く音響の停つた瞬間、その一帶の沈默の底から、どことも知れず流れる支那人の靴音だけがかすかに參木の耳へ聞えて來た。しかし、間もなく、それは何の意味も示さぬただ沈默そのものにすぎないことを知り始めると、再び群集は騷ぎ出した。すると、その騷ぎの中から搖れて來る言葉の波は漸次に會議の流會を報らせて來た。それなら、これで支那商人團の希望は達したわけだ、と參木は思つた。と、やがてその流會の原因は定員不足を理由としてゐることまで、寄り集つた人波の呟きから判つて來た。參木は極力會議を流會させることを宣言してゐた秋蘭の笑顏を感じた。今は彼女はこの附近のどこかの建物の中で、次の畫策に沒頭してゐるにちがひない。しかし、もしそれにしても、なほ此のうへ海港の罷市が持續するなら、困憊するものは逆に支那商人に變つていくのだ。――もし支那商人の一團が困憊するなら、なほ罷市の持續を必要とする秋蘭一派の行動とは、當然衝突し出すのは定つてゐた。

參木は思つた。これは何か起ると、謀みが。――その謀みはなほ商業團體と群集とを結束させんがための謀みであることは、分つてゐた。しかし、その手は、――その手も今はただ、、をして再び、、させれば、それで良いのだ。

しかし、參木には自身の頭腦の廻轉が、自分にとつて無駄な部分の廻轉ばかりを續けてゐることに氣がついた。彼はただ今は死ねば良いのだ。死にさへすれば。それにも拘らず秋蘭を見たいと思ふ願ひがちりちり後をつけて來るのを感じると、彼はますます自身の中で跳梁する男の影と蹴り合ひを續けるのだ。ふとそのとき彼は梅雨空に溶け込む液の濃密な街角から、閃めく耳環の色を感じた。と、彼はその一點を見詰めたまま、洞穴を造つた人溜の間を魚のやうに歩き出した。しかし、彼はその街角へ行きつくまでに、急に停つた。もしその耳環が秋蘭であつたなら、と思ふ彼の心が突然彼女と逢つた後のことを考へ出したのだ。全く彼は彼女と逢つたとしても、爲すべきことは何もないのだ。それなら、――いや、それより、彼女が此の街の混亂の最中にどうして自分を搜しに來るであらうか。彼は壁に脊中をひつつけると、彼女が自分を搜しに來るであらうと想像したがる自身の心を締めつけ出した。しかし、もし彼女が自分の言葉を忘れないなら、――締めつける後から湧き上つて來る手に負へない愛情に、最早や彼はにやにや笑ひ出した。すると彼は歩き出した。どこへ歩いて行くのだらうと思つてみても足だけが頭を運んで人の中を動いていく。

そのとき、前方の込み合つた街路を一隊の×國騎馬隊が彼の方へ馳けて來た。と、兩側の屋内から不意に銃聲が連續した。騎馬隊の先頭の馬が突つ立つた。と、なほ鳴り續けてゐる音響の中で、馬は弛むかに地に倒れた。投げ出された騎手、、、、馳、、、。後に續いた數頭の馬はぐるぐる廻りながら、首を寄せた。と、急に一頭の馬は露路の中へ躍り込んだ。亂れ出した馬の首の上で銃身が輝やくと、屋内を向けて發砲し始めた。馬は再び群衆の中を廻り出した。群衆は四方の露路の中から溢れて來ると躍る馬の周圍で喊聲を上げ始めた。群つた礫が馬を目がけて降り注いだ。馬は倒れた、馬の上を飛び越えると、押し出る群衆を蹴りつけて馳け出した。

參木の周圍では、群衆は彼ひとりを中に挾んだまま、馬の進退に從つて溶液のやうに膨脹し、收縮した。その度に、彼はそれらの流動する群衆の羽根に突き飛ばされ、卷き込まれながら、だんだん露路口の壁の方へ叩き出されていつた。

騎馬隊が逃げていくと、群衆は路の上いつぱいに詰まりながら、狼狽へた騎馬隊の眞似をしてはしやぎ出した。銃砲の煙りが發砲された屋内から洩れ始めた。と、工部局の方から近かづいて來た機關銃隊

が、突然、群衆の中へ發砲した。群衆は跳ね上つた。と、聲を失つた頭の群れが、暴風のやうに搖れ出した。沈沒する身體を中心に眞つ二つに裂け上つた人波の中で、彈丸が風を立てた。露路口は這ひ込む人の身體で膨れ上つた。閉ざされた戸は穴を開けて眼のやうに光り出した。その下で、逃げ後れた群衆は壁にひつついたまま、唸り出した。

參木は押しつけられた胸の連結の中から、ひとり反對に道路の上を見廻した。彼はそこに倒れて動かぬ人の群れの中から、秋蘭の身體を探さうとして延び上つた。馬の倒れた大きな首の傍で、倒れた人の身體が轉がりながら藻搔いてゐた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。霞のやうな煙がそれらの、、の上を這ひながら、來檢の通る度に廻つてゐた。しかし、參木には、最早や日々見せられた倒れる、、の音響や混亂のために、眼前の此れらの動的な風景がただ日常普通の出來事のやうにしか見えなかつた。だが、彼は彼の心が外界の混亂に無感動になるに從ひ、その混亂した外界の上を自由に這ひ廻る愛情の鮮かな擴がりを、明瞭に感じ出した。

街路の上から群衆の姿が少くなると、騎馬隊へ向けて發砲した家の周圍が工部局巡捕によつて包圍まれた。機關銃が据ゑられた。と、その一軒の家屋を消毒するかのやうに、眞暗な屋内めがけて彈丸がぶち込まれた。墜落する物音、唸り聲、石に衝つて跳ね返る彈丸の律動と一緒に、戸が見る間に穴を開けていつた。機關銃の音響が停止すると、戸が蹴りつけられて脫された。ピストルを上げた巡捕の一隊が、欄干からぶら下つたままだ搖れ續けてゐる看板の文字の下を、潛り込んだ。すると、間もなく、三人のロシア人を中に混へた支那青年の一團が、ピストルの先に護られて引き出された。

參木は露路の片隅からそれらの引き出された青年達を見詰めてゐた。もし秋蘭がその中に、と思ひながら——間もなく、檢束された一團は自動車に乘せられると、機關銃隊に送られて工部局の方へ馳けていつた。銃器が去つたと知ると、また群衆は露路の中から滲み出て來た。彼らは燈の消えた道路の上から、、を露路の中へ引き摺り込んだ。板のやうに張りきつた、、の頭は引き摺られる度毎に、筆のやうに頭髮に含んだ、でアスファルトの上へ黑いラインを引き始めた。と、一臺の外人用の自動車が辷つて來ると、、、の上へ乘り上げた。箱の中で、茉莉の花束に隱れて接吻してゐた男女の顏が、亂れ出した。と、礫が顏へ投げつけられた。自動車は歪んだ、、を轢き飛ばすと、ぐつたり垂れた顏を搖りながら疾走した。

參木は群衆の中から擦り抜けると突堤の方へ歩いていつた。彼はもう秋蘭を探す重みに全身の疲れを感じた。疲れ出すと、今まで何も無いものを有ると思つて探し廻つた幻影に溺れ始め、こそこそ稚物の臨

を歩いてゐる自身の身體だけが、急に心の重みとなつて返つて來た。

## 五

その夜、參木は遲く宮子の部屋の戸を叩いた。ピジヤマ姿の宮子は支那服をひつかけたまま出て來ると、默つて參木を長椅子に坐らせた。參木は片手で失敬の眞似をしながらいきなり横に倒れると、眼を瞑つた。宮子はウイスキーを彼に飲ませた。彼女は彼の傍に坐ると彼の蒼ざめた顏を見詰めたまままいつまでも默つてゐた。隣家の廊下を通る燭臺の火が、窓のガラスに石榴の影を辷らせつつ消えていつた。參木は眼を開けると彼女に云つた。

「君、今夜だけは、赦してくれ給へ。」

「だつて、寢臺はあちらにあるわ。あちらへいつて、」

口へあてがふ宮子のコツプの底を見詰めながら、彼は片手で宮子の手を強く握つた。宮子は云つた。

「あなたは今夜へんよ。あたし、さきから天地がひつくり返つたやうな氣がしてゐて、何のことだかわかんないわ。」

しかし、宮子は急に潑溂とし始めると、鏡の前で顏を叩いた。ひつかけた皮襖が宮子の肩からづり落ちた。

「あたし、あなたがいらつしやる前まであなたの夢を見てゐたの。そしたらあなたがいらつしやるんでせう。あたしそれまであなたと何をしてたとお思ひになつて。」

鏡の前から戻つて來ると、宮子は參木の頭を膝の上へ乘せながら、顏を近々と擦り寄せた。

「あなた、もう元氣をお出しになつて。あたし、あなたの疲れてらつしやるお顏を見るのはいやなのよ。」

參木は起き上つた。彼は宮子の手を掴むと云つた。

「とにかく、つまらん。」

「何が、」

「もういつぺん默つて寢させておいてくれ給へ。」

參木はまた倒れると眼を瞑つた。宮子は彼の身體を激しく搖り出した。

「駄目ぢやないの。あたしを叩き起して自分が眠るなんて、まだあたしはあなたの奧さんぢやないことよ。」

すると、參木は傍にあつたウイスキーをまた一杯傾けた。

「さう、さう。結構だわ。あたし、あなたのわがまゝなんか、初めつから認めてやしないのよ。だから、あたしはあなたなんかに同情したことなんか、一度もないの。人の顏を見ると顰めつ面ばかり續けて、つまんないことばかり考へて、もうそんなことはお止しなさいよ。あ

たしあなたなんかを好きになつちや、お了ひだわ。」

突かれ出すと、參木には醉ひがだんだん廻つて來た。彼は云つた。

「どうも失禮。これでどうやら、君に叱られてゐるのも分つて來た。」

「當りまへよ。あなたなんかに愛嬌なんか見せていたゞかなくたつて、街にごろごろしてゐるわ。あたしなんか見てちやうだい。馬鹿なことは一人前に馬鹿だけど、面白さうなことだけは知つてるの。」

宮子は不機嫌さうに外方を向くと煙草をとつた。參木は豫想とは反對に、急に怒り出した宮子の樣子に氣がつくと、またぐつたりと横に倒れた。宮子は床に落ちてゐる皮襖を足で跳ね上げた。彼女は立ち上ると寢室の方へ歩いていつた。參木は云つた。

「君、もう暫く僕の傍にゐてくれ給へ。さうすると、僕はだんだん賢くなる。」

「いやよ、あたしあなたのお相手なんか、まつぴらだわ。」

「ときどきはかう云ふ男も君の傍にゐたつて惡くはなからう。人には怒るもんぢやない。朝早くから夜中まで僕は今日は幾回死にぞこなつたかしれないんだ。たまに疲れて來たんだから、君、疲れたときには、人は一番親しい所へ轉がり込むもんだ。さう怒らずに、もう暫くここにゐさせてくれ給へ。」

宮子はドアの前に立つたまゝ參木の方へ向き直つた。

「あなたは今夜はどうかしててよ。」

「僕はそれを白狀したくつて來たんだが、もう云ふのはいやになつた。これ以上馬鹿になるのは神さまに對してすまんと思ふ。」

「さうよ。あなたは。神さまにだけぢやないことよ。あたしにだつてすまないわ。競子さんのことを考へてらつしやるのも結構だけど、それぢや競子さん、もつたいないわ。」

「競子は競子、これはこれさ、僕はふわふわした男だからふわふわして了はなきアをさまらないんだ。それで今夜はのるかそるか、ひとつ無茶をやらうと思つてやたんだが、たうとうそれも失敗だ。どうもおれは、饒舌り出すと、こりや饒舌るな。」

「饒舌りなさいよ、饒舌りなさいよ。あなたのして來たこと、仰言つてよ。」

宮子は參木の傍へピッタリくつつくと、彼の頭をかかへて搖り始めた。參木は搖られる頭の中で今日一日のして來たことを考へた。すると、ますます自分の身體が自分の上へ乘りかかつて來る重々しさを、感じ出した。と、彼は身體を抛り出すやうに饒舌り出した。

「僕は支那の婦人に感心して、一ケ月の間自尊心と喧嘩し續けて、たうとう頭を叩かれたのが、今夜なんだ。それから僕は死のうと思つた。しかし今死ぬなら支那人に殺される方が良い。、、、、一人でも殺さ

れたら、、、、、、、、、、、、、、とまア僕は考へた。僕は愛國主義者だから、同じ死ぬなら、、のために死んでやらうと思つたんだが、所が、なかなか支那人は殺してくれぬ。殺されないなら死んだつて國の爲にはならないし、同じ死ぬなら殺されやう、と思つてゐるうちに、いつまでたつたつて殺されないから、死ぬことだつて出來やしない。」

「まアまア、結構な御身分ね。あたし嫌ひよ、そんな話は。」

「それから、ここだ、僕が何ぜ殺されないかと考へた。すると僕は此んな支那服を着流してうろつき廻つてゐたからなんだ、しかし、それなら何ぜ支那服なんか着て歩くと君は思ふかも知れないが、此の支那服を着てないと相手の女と逢つたつて、役には立たぬ。そこが僕の新しい苦悶なんだ。」

「あんまり馬鹿にしないで頂戴、あたし聞いてゐますのよ。あたしはさきまであなたの夢まで見てたのに、ちよつとぐらゐは考へて下すつたて、いいことよ。」

「しかし、かうして考へてみると、まア、馬鹿な話は馬鹿な話さ。所が、そいつを眞面目に考へてゐたんだから、ちよつとはどうかしてるんだ。頭と云ふものは、馬鹿になり出すと、つまり、馬鹿な方へばかりだんだん頭が良くなり出す。譬へば君にした所で、甲谷と結婚しないことなんて、馬鹿な方へ頭が成長したからだ。」

「さうよ。あたし、あなたなんかに眼が眩んで、たうとうお嫁さんになりそこねたわ。これもあなたよ。甲谷さんに仰言つといて。だけど、甲谷さんも甲谷さんだわ。あたしにあなたを紹介するなんて、あたしよりまだ馬鹿ね。あたしあなたと結婚するまでは甲谷さんとは結婚しないの。これがあなたへの復讐よ。あなたは甲谷さんへ氣兼ねして、あたしから逃げることばかり計畫してらつしやるんでせう。だけどなくちやあたしにそんな、支那の女のことなんか、まア、つまんな眞似をなさるのね。それならあたしだつて、愛國主義者になることくらゐ何んでもないわ。」

宮子は立ち上ると、ひき抜いた白蘭花で圓卓の上を叩き出した。參木は、ここにもひとり馬鹿がゐたのかと氣がつくと、心が樂しげに酒の上で浮き上つた。

「おい君、ここへ來てくれ、愛國主義者は一番美しいのだ。僕は君に同情する。恐らく僕は君を一番理解してゐるにちがひなからう。理解がなければ愛なんてものはない。だから君、來たまへ、僕は君が好きなんだ。」

宮子は近寄る參木を突き飛ばした。參木は後の壁へよろけかかると、また宮子の肩へ手をかけた。

「よして頂戴。あたしは支那人ぢやなくつてよ。」

「支那人であらうが猫であらうが、かまふものか、愛國主義者を出したからには、日本にとつちや恩人さ。われわれ下級組員に愛國主義者以外の何がある。」

參木は宮子のピジャマの足を掬ふやうに抱き上げると、絨毯の眞中できりきり速度を加へて廻り出した。と、足が曲つた。二人は倒れた。宮子は參木の胸から投げ出されると、そのまゝ動かずに倒れてゐた。參木は仰向きになつたまゝ、まだ廻り續ける周圍の花壁の中から突然絞り出された母の顏を、樂しげに眺め出した。

六

海港の罷市は特別會議が流會したにも拘らず、ますます深刻に進んでいつた。支那銀行は翌日から盡く休業した。錢莊發行の小切手が不通になつた。金塊市場が閉鎖された。爲替市場の混亂から外國銀行は無力になつた。さうして、此の全く破壊され盡した海港の金融機能の内部では、ただ僅に對外爲替の音だけが、外國銀行の奥底で鼓動のやうに響いてゐるにすぎなくなつた。

しかし、斃れたものはそれだけでなかつた。海港の殆ど全部の工場は閉鎖された。群がる埠頭の苦力が罷業し始めた。ホテルのボーイが逃げ始めた。警察内の支那人巡捕が脱出した。車夫が、運轉手が、郵便配達が、船内の乗組員が、その他あらゆる外人に雇はれてゐるものが、——

船は積み込んだ貨物をそのまゝに港の中でぼんやりと浮き始めた。新聞の發行が不能になつた。ホテルでは音樂師が客に料理を運び出した。パン製造人がゐなくなつた。肉も野菜もなくなり出した。さうして、外人達はだんだん支那人の新しい強さに打たれながら、海港の中で籠城し始めた。

參木は人通りの殆どなくなつた街の中を歩くのが好きになつた。雜閙してゐた市街が急に森のやうに變化したことは、彼には市街が一層新しく雜閙し始めたかのやうに感じられた。義勇隊は出沒する暴徒の爆彈を乘せたトラックを追つ駆け廻した。時々夜陰に乘じて、白い手袋を揃へた支那人の自轉車隊が秘密な策動を示しながら、建物と建物との間を風のやうに辷つていつた。外國婦人は疲れた義勇隊の背後で彼らに食物を運搬した。閉め切られた街並みの戸の隙間からは、外を窺ふ眼だけがぎろぎろ光つてゐた。

しかし、參木は頻々として暴徒に襲はれ續ける、、街の噂を聞き始めると、だんだん足がその方へ動いていつた。、、街では婦女や子供を避難所へ送つた後で、町會組織の警備隊が勇ましく街を守つて徹宵を續け出した。すると、彼の身體の中で、秋蘭を愛した記憶の斷片が

體に彼自身の中心を改め始めた。と、彼は頻りに襲はれるやうに、道から外れた。が、また彼は、、街の食糧の斷絶を聞いては出かけた。、、暗殺の流言を聞いては出かけた。暴徒の流れ込んだ形跡を感じるとまた出かけた。さうして、彼はいつの間にか、、、街の外郭に從つてぐるぐる廻り續けてゐる斥候のやうな自體を感じた。その度に、危害を受けた、、の増加していく話の波が、締めつけるやうに襲つて來た。

或る日、參木と甲谷はいつもの店へ食事をしに出て行くと、食料のなくなつたために拒絶された。米をひそかに運んでゐた支那人が發見されて殺されたと云ふ。それに卵もなければ肉もなかつた。勿論、野菜類にいたつては、缺乏しなければ不思議であつた。

甲谷は外へ出ると參木に云つた。

「これぢや、餓ゑ死するより仕樣がないね。銀行は有つたつて石ばかりだし、波止場に材木は着いてても揚げてくれるものはなし、宮子にはやられるし、米も食へぬとなれば、君、かう云ふ慘酷な手は、神さまが知つてたのかね神さまが。」

しかし、參木には昨夜からの空腹が、彼の頭にまで攻め昇るのを感じた。と、彼は彼をして空腹ならしめてゐるものが、ただ僅に自身の身體であることに氣がついた。もし今彼の身體が支那人なら、彼は手を動かせば食へるのだ。それに——彼は個士だが、鐵よりも堅牢に自身の肉體の中を貫いてゐるのを感じ出した。

甲谷は云つた。

「君、君の休業中の手當は出るのかね。俺の金はもうないよ。暫く君の手當をあてにするから、そのつもりでゐてくれ給へ。」

「さうだ、手當のことは忘れてゐた。いづれ何とかなるだらう。出なけりや、今度は、、、が罷業をするさ。」

「すると、その罷業はどうなるのだ。罷業をしたつてお先きに支那人にされてちや、罷業にもならんぢやないか。」

「そしたら、支那人と、、だ。」

「すると、俺を食へなくしたのも、君だとなるのか。」

「もう食ふ話だけは、やめてくれ。僕は腹がすいて、たまらんのだ。」

「しかし、休業中の手當を、、、にだけ出しといて、支那人には出さぬとなると、こりや、俺もいつまでたつたつて食へないかもしれない」

二人は兩側の家々の戸の上に、「外人を、、せよ。」と書かれた紙片の貼られたのを讀みながら、步いていつた。

「とにかく、殺されるために、食べなくちや、」と參木は云つた。

「いや、此の上殺されちや、お了ひだよ。」二人は笑つた。參木は笑ひながら、ふと甲谷と宮子とを媒介してゐる自分の位置について考へた。すると、ここでも彼は不必要な自分の身體に突きあたらねばなら

なかつた。彼は云つた。
「君は宮子が本當に好きか。」
「好きだ。」
「どれほど好きだ。」
「俺はあ奴が俺を蹴れば蹴るほど好きになるのだ。まるで俺は、蹴られるのが好きなと同じことだ。」
「それで君は結婚して、もし不幸な事でも起ればどうするつもりだ。」
「所が、俺の不幸なのは今なんだ。今より不幸なことはありやしないのだ。」
參木は競子をひそかに愛してゐた昔の自分を考へた。そのとき、甲谷は競子の兄の權利として、絶えず參木の首を掴んでゐた。が、今は、彼は甲谷の首を逆に掴み出したのだ。彼は云つた。
「君、君はお杉をどう思ふ。」
「あれか、あれは俺にとつちや捨石だよ。」
「あれは君にとつちや捨石かも知れないが、僕にとつちや細君の候補者だつたのだ。お杉を攻撃したのは君だらう。」
甲谷の顏は赧くなつた。が、彼は赧さのままでなほ反り出すと、參木に云つた。
「ふん、俺の捨石になる奴なら、誰の捨石にだつて、ならうぢやないか。」
參木は自分の捨石になり出す宮子のことを考へながら、その捨石の、また捨石になり出した甲谷の顏を、新しく眺めてみた。彼は云つた。
「とにかく、僕にはお杉より適當な女は見當らぬのだ。君の捨石を拾つたつて、君に不服はないからね。」
「君、もう冗談だけは、よしてくれ。俺は飯さへ食へないときだ。これからひとつ馳け廻つて、君、飯一食を捜すんだよ。」
參木は默つた。すると、暫く忘れてゐた空腹が再び頭を擡げて來た。彼は乞食の胃袋を感じた。頭が胃袋に從つて活動を始め出した。と、彼は芳秋蘭を思ひ出した。——これが秋蘭のしたかつたことなのだ。——彼は彼女の牙の鋭さを見詰めるやうに、自分の腹に刺し込んで來る空腹の度合を計りながら、食物の豐富な街の方へ歩いていつた。

## 七

參木と甲谷の廻つた所はどこも白米と野菜に困つてゐた。明日になれば長崎から食料が着くと云ふ。二人は明日までに空腹を滿たすためには、暴徒の出沒する危險區劃を通過しなければならなかつた。しかし今はその行く先にも食物があるかないかさへ分らないのだ。參木は甲

谷を安全な街角から家へ歸すとひとり食物を捜しに出かけていつた。

宮子の所へ叄木の着いたのは、もう夕刻に近かつた。宮子は叄木を見ると、いきなり云つた。

「あなた、今日ここへ暴徒が出たの。、、、がシヤツまで裂かれて逃げてつたわ。昨日は昨日で血だらけになつた、、、が自動車で運ばれたの。それに今夜は水道が危いさうよ。でも、ほんとに、あなた、よくいらしつて下さつたわね。もう暫くお歸りになつちやいやよ。あたし、今夜はどうしたつて歸さないの。」

叄木は長椅子へ腰を降ろすと云つた。

「君、何か食べるものをくれ給へ、僕は夕べからまだ何も食べてゐないんです。どこいつたつて食ひ物の品切で、仕方がないから君の所にあつたらひとつと思つて來たんだが、君、ひとつ、頼みます。」

「ぢや、あなたは、あたしのためにいらしつて下すつたんぢやなかつたのね。」

「それは別です。此の次です。今日は乞食に來たんだからつまんない考へは、此の次にしてくれ給へ。」

「まア、嬉し、」と宮子は云ふと、戸棚の中からパンを出した。

「あなた、御覧なさいな、これはイギリスの義勇兵があたしのために、わざわざ持つて來てくれたものなのよ。それにあなたは、あたしん所へこれを盗らうつていらしつて下すつたのね。」

「君の仰言ることはもう充分わかつてゐます。たゞそれを僕が貰へるのか貰へないのか、それだけ教へてくれ給へ。貰へないならこれからまたどつかへいかなくちや。僕は思はせ振りはだい嫌ひだ。」

「そりや、あげるわ。あたしが食べなくたつて、かまはないわ。だけど、これはあたしにとつちや、ここ暫くの露命なのよ。それをあなたがたゞパンだと思つてお盗りになつちや、あたしのこれまでの苦心は臺無しだわ。」

「ぢや、僕がどうすればいいんです。」

「そんなことは、お考へになつたら分るぢやないの。あたしはあなたを虐めてゐるのよ。何ぜあなたがあたしに虐められていらつしやるのか、御存知ないの。あたしはこないだから、あなたをどんなに待つてたかしれやしないのよ。それにあなたがいらしつて下すつて、まア嬉しいと思つたら、パンをくれ、でせう。そりや、あなたにはそれで結構よ。だけど、あたしにしてみれば、あるパンだつて上げたかないわ。」

「ぢや、歸らう。」と叄木は云ふと、帽子を探して立ち上つた。宮子はパンをテーブルの上に降ろすと云つた。

「まア、あなたは、それでお歸りになるつもり。」

「歸る。僕は僕の腹の空いてるとき、僕の腹の空き加減を話さなくつ

でもすむ所は、ここだけだと思つて來たんです。それに君は、イギリスの義勇兵がどうだとか、何んだか譯の分りもせぬものを、考へろだとか、そんなことを考へてゐられるなら、こんな所へなんか、來るものか。」

「まア、仰言つたはね。あたしはあなたに自分の食べるパンまで上げる義務なんか、ちつともないのよ。歸つてちやうだい。」

參木はドアの方へ歩き出した。が、何をここまで來て云ひ合つたのか、ただ今はパンを盜りさへすれば、それで良いのだ。――しかし、彼の足は口論の惰力でもう引き返すことが出來なかつた。彼は階段を降りて表へ出た。すると、宮子はスリッパを飛ばしながら彼の後から馳けて來た。

「參木さん、あたし、あなたにはかなはないわ。何んてあなたは馬鹿なんでせう。もうあたし、あなたから何をされたつていいから、パンだけ上つて歸つてちやうだい。あたし、あなたはいやだ。」と宮子は云ふと、參木の腕をかかへて戻つていつた。

「ぢや、パンだけは、いただきますよ。」

「パンでも何んでも、あなたの召上りたいものは荒してちやうだい。あたし、あなたみたいな變人には、もう何も云はないことに定めちやつたの。」

部屋へ戻ると、參木はパンを兩手の上に乘せながら、笑つて云つた。

「此れか、露命は。馬鹿に輕いね。」

「早く上つて了つてよ。あたし、パンなんかに嫉きもち燒かされたんだと思ふと、見るのもいやなの。」

ふと參木は、いつの間にかパンをかかへて笑ひ出してゐる自分の顏を感じると、一層大きく笑ひ出した。

「いつたいこれは、悲劇か喜劇か、もう僕には分らない。パンを食べてゐられる間は厭世主義者で、食べられなくなると、他人のパンまで奪ひとつて、さてまたこれで滿腹すると、厭世主義者で。これぢや、僕の腹は厭世主義者の工場だ。いづれその中に、罷業する奴が出て來るだらう。そしたら、潰れる。それまで待つててくれ給へ。」

宮子はバタやソセーヂを急がしさうに並べながら、參木に云つた。

「もう、辯解なさらなくたつて、分つてゐてよ。あたしはあなたが生きてさへゐて下されば、もうそれで充分なの。あたしこんな優しい心がけになつたことなんて、一度もないわ。だから、もうびくびくなさらないで、上つてちやうだい。」

參木はパンを置いて立ち上ると、急に宮子の傍へ近寄つて背後から彼女を抱いた。彼女はそのまま動き停ると、反り返つた。手に持つた銀の盆がリキュールを入れたコップを辷らせながら、下つていつた。

と、參木は、秋蘭が彼に接吻したときの輕蔑した眼の色を思ひ出した。彼は再び宮子を放すと、パンを持つた。宮子は彼に背中を見せたまま、田舍娘のやうに靜に默つて立つてゐた。

「君、リキユール、」と參木は云つた。

宮子はくるりと向き返ると、參木を睨んで云つた。

「あなたは、あたしを馬鹿にしにいらしつたの。」

「君、もう駄目だつて、怒つたつて、僕はパンをここに持つてるんだ。これさへ持てば。」

「あなたは、あたしを、怒らせたくつていらしつたの。」

「僕が何にしに來たかと云ふことは、もう云つたぢやないですか。もうこれから僕は、ただ君に感謝さへすればそれでいいんです。」

「もうあたし、あなたが嫌ひだ。歸つてちやうだい。歸つてちやうだい。」

「君は僕の頭を、さきからつまらない方へばかり延したがつてゐるんです。僕が君に感謝をしやうと思つてもさせなくして了ふのは、君なんだ。」

參木はパンをち切つて食べ始めた。宮子は彼の傍へ馳け寄ると、いきなりパンを拂ひ落した。參木はころころ絨氈の上を轉げて卓の下で停つたパンを眺めながら、歎息した。

「もう僕は、此のパンも斷念した。」

彼は長椅子へひつくり返ると、足を投げ出して眼を瞑つた。

「歸つて、歸つて、」

宮子の激しく突つく力に搖られながら、參木は宮子と結婚したものの日々の生活を想像した。それは恐らく此のやうに氣使はしい感情の逆行し合ふ連續の中で、日々の時間を擦り減らしていくだけにちがひないのだ。——と、だんだん動かされてゐた彼の身體は急に床の上へ轉がつた。が、もう彼は動くのもうるさかつた。そのまゝ床に倒れて眼を開くと、また彼の視線はいつの間にかパンの上を見詰めてゐた。すると、もう幾時間すればあのパンが口の中へ這入るだらうかと彼は考へた。このままかうしてゐれば、宮子の機嫌のなほるまで、あのパンは動かないにちがひないが、それも自分のかうして動かぬ限り、宮子は動かないにちがひないのだ。しかし、それより何故に自分の身體は宮子の方へ動かないのか。——彼は彼女の方へ動かぬ自分の身體と彼女の身體との空間に、絶えず秋蘭の浮き上つて來るのを感じ續けた。さうして、それは同時に、彼とパンとの距離を此のまゝいつまでも近づけやうとはしないのだ。

參木は怒りのために蒼ざめてゐる宮子の前から起き上ると、默つて外へ出ていつた。外はもう眞暗であつた。所々に塊つた苦力達は全く

人通りのなくなつた道路の上に足を投げだして、虱をとつてゐた。冬枯れの蔓のやうに絡まり合つた鐵條網の針の中を、義勇隊の自動車が拔劍の花を咲かせて辷つていつた。と、アスファルトの上の潰れた落花生を舐めてゐる子供の傍に、紫色の人の足だけが轉げてゐた。

參木は泥溝に沿つて歩き出した。彼はふとお杉のゐる街の方を眺めてみた。と、もう彼は長い間お杉のことを忘れてゐたのに氣がついた。自分のために首を切られたお杉、自分のために甲谷の爪にかかつたお杉、自分を愛して自分に愛せられるのを忘れたお杉、お杉はいつたい此の自分の考へてゐる時間の中で、何を考へてゐるのであらう。――しかし、彼の斷滅する感傷が次第に泥溝の岸邊に從つて凋んで來ると、忽ち空腹がお杉を飲み込んで膨れ出した。彼は身體が透明になるのを感じた。骨のなくなつた身體の中で前と後の風景が入り交つた。彼は橋の上に立ち停ると、ぼんやり泥溝の水面を見降した。水面では、押し上げて來る緩慢な潮に擦れ合ふ舟端が、ぎしぎし鳴つて搖れてゐた。その並んだ舟の中には、手をつけるものを失つた都會の捨てられた排泄物が、どこからか流れる燈火に金色に光りながら、平板な板のやうに澱々と擴がつてゐた。そのとき、參木は河岸の街角から現れて來た人影が、もつれながら彼の方へ近づくのを感じた。すると、その人の塊りは急に聲をひそめて動き停つた。彼は險惡な空氣の舞ひ上るのを沈めるやうに、後ろを振り向かうとしたがる自身を撫でながら、そのまま水面を眺めてゐた。が、いつまでたつても停つた人の氣配は動かなかつた。彼は後を振り返つた。すると數人の男が彼を取り卷いて立つてゐた。彼はまた欄干に肘をつくと男の群れに脊を向けた。と、二本の手が靜に後から彼の脇腹に刺さつて來た。彼の身體は欄干の上へ浮き上つた。彼は欄干に腰を降ろすと、その男の首をかかへて周圍の首を眺め出した。と、突然、停つてゐた人の塊りは彼に向つて殺倒した。瞬間、彼は空の裂けるのを感じた。同時に、彼は逆さまに風の斷面の中へ落ち込んだ。

ふと、參木は停止した自分の身體が舟端を掴んでゐるのに氣がついた。――しかし、ここは――彼は足を延ばすと、それは舟の中であつた。彼は周圍を見廻すと、排泄物の描いた新しい平面が首まで自分の身體を浸してゐた。彼は起き上らうとした。が、さて起きて何をするのかと彼は考へた。生きて來た過去の重い帶が黒い斑點を浮べて通り過ぎた。彼はそのまま排泄物の上へ仰向きに倒れると、眼を閉ぢた。と、再び頭が自由に動き出すのを彼は感じた。彼は彼の頭がどこまで動くのか動く後から追つ驅け出した。と、彼は、自分の身體が自身の身體の比重を計るかのやうに排泄物の中に倒れてゐるのに氣がつくと、にやりにやりと笑ひ出した。（ある長篇の第五篇、及び前篇終り）



# 大地

里見弴

## 七の一

すつかり自分の設計で、普請中も三日にあげず通つてはそこゝと指圖し、どうやら思つたやうに建つたのだが、はいつてみると、急に御大家の主人になりすましたやうな傲りも出、廣いだけに人手もかゝつたりして、月々の費用に追ひ倒され、結局は住み切れなくなつて、もとの本阿彌の借家住居も、逗子まで落ちのびて行つたやうなわけで、麴町の停車場に近い昌造の持家は、その後ずつとひとに貸してあつた。そこも、然し、震災の破損が存外ひどく、間もなく借家人は出て行き、空家になつたまゝで、修繕費のあてがないためにほつたらかしになつてゐたのを、それも無駄だといふので、土地、家屋を抵當に、またもや金を借り足して、職人を入れる運びになつたのは、ついこの十日ばかり前のことだつた。

四月初旬の快晴で、薄着になつた氣の輕さから、昌造は、家ぢう、少な子供までつれ出して、散歩がてら、その右京町のうちの、修繕の捗り具合を見に出かけた。地震後の銀座と云はれたほどで、こゝ半年ばかりの間に、いつもの二年分そこ〲の商賣をした

らうと思はれる四谷通りは、花時を控えて、一層景氣づいてゐた。呉服屋の前には、赤、青の幟などはためき、カフエでは、諜間から、甲高に蓄音器を鳴らした。人道の、ぎくしやくした鈴掛の枝さきには、海老茶がゝつた若葉が、ちよびッと芽吹きかけてゐた。

子供たちには、丁度おやつの刻限だつたので、津ノ守の色街に近い鮨屋へでもよらうと、横町へ切れ込んだ拍子に、ぱつたり顔を合せたのが、健吉だつた。

「やア」

訥々として、更にとりとめのないこの兄が、どうしたことか、ぽうッと顔を赤くしてゐた。

「どこに？」

「いや、ちよつとそこまで……」

下の子の手を引いて、あとから來たおしげが、いやに改つたお辭儀をして、そのまゝ行きすぎやうとするのを呼び止めて置いて、

「どうだい、鮨を食はふつてんだが、附合はないかい？」

「うん、まア、今、腹がいつぱいだ」

たんとなく、濁つた口の利き様だつたのを、遠慮と釋つて、

「いゝぢやないか。ちよつとまア腰かけるだけでも……」

「いや、また今度にしようよ」

そのうち、子供に引ッ張られるまゝに、六七歩さきへ行つたおしげの後姿に目をつけながら、いくらか聲を落して、「それより、ちよいと君に話したいことがあるんだがね……」

「いつ？」

「いつッて、……君、これからどつかイ行くのかい？」

「ちよつと右京町の普請を見て來ようつて、出かけて來たんだがね……！」

「ぢア、そのあとはどうだい？」

「いゝよ」

「おしげさんたち、先に歸せるかね？」

「あゝ、いゝとも。どうせ少いのは、往復はちつと無理だらうから、自動車に乘つけて、先に歸しちまやア いゝんだが、然し、一體どこで君と落ち合ふのさ」

「さうすればね、うちでもちよつと話しにくいことなんだから、松葉へ來てくれないか。僕ア、その間に一軒用達をして、先へあすこイ行つて待つてらア」

松葉といふのは、四谷に住んでゐた頃、うちで客と飲んだりした揚句、今から逃ッ走りするのも億劫、といふやうな場合に、ぶらりと出て、盡ない歡興をつゞけるところにしてゐた津ノ守の待合で、同時に健

吉にも、舊くからの馴染らしかつた。そこへ誘はれるとすれば、話というのも、新情人の御披露くらゐがおちではないか、といふ氣もしたが、それにしては、今日の健吉の樣子に、珍しく、へんに改まつたやうなところもあつた。

「先にいつて、僕の方もさう永くはかゝらないんだけど、……まア、兎に角行かう」

「あゝ、ぢア、待つてるよ」

「鮨を食つて、うちを見て、と、……さうだなア、大抵一時間半かそこらしたら行けるだらう」

「うん、そのくらゐ、丁度いゝや」

互に帽子には手も觸れずに、頷き合つて別れたが、おしげたちは、そこからもう五六間しかない鮨屋へはいつて了ひ、昌一だけが、紺暖簾の下に顔を覗かして、見迎へてゐた。

「いらッしやい！」

三和土の上に、小椅子の足を軋ませて引きよせ、端の席につくと、

「あなた、なんかさう仰有らないと……」

「お前たちの分は、もう頼んぢやつたんだね？」

「えゝ、お先に……」

「ぢア、あたしはね……」

誂へを云つてから、おしげの方へ笑ひかけて、「健ちやんつて人も、いゝ人だねえ、赤い顔をしてゐたぢアないか」

「さうですか？」

おしげは、子供の胸へ手巾をかけてやつたりしながら、目も向けてよこさなかつた。

「氣がつかなかつたかい？」

「えゝ。でも、どうしてです？」

「どうしてつて、健ちやんがこの横町から出て來れア、大抵行つてた先のあてはつかうッてもんぢアないか」

「さうですかねえ」

この頃のおしげにしても、特別また冷淡だつた。昌造も默つて了ひ、やがて、歯に冷い鮨を噛んだ。

## 七の二

約束の時間よりだいぶおくれて、昌造は、五時ちかく松葉へはいつて行つた。導かれたのは、淺い谷に臨んで、眞下を見れば、十階と云つてもいゝほどの、奥二階の六疊だつた。茶碗が一つ載つたきりの卓袱臺の前に、胡座で、健吉は、黒い革表紙の懷中日記に、英語か羅馬綴りか、兎に角横文字で、熱心に書き込みながら、

「や、來たね」
「待つたかい？」
「うん、さうでもない」
案内にたつた女中が、やれお見限りだの、誰それがよく噂をしてゐるのと、月並な世辭を並べるのに、うはの空ながら、一々言葉を返して、どうやら一段落ついた頃、健吉も、エヴー・シャープの手をとめ、帳面には護謨の輪をかけてから、始て顔をあげた。
「どうだつたい？　うちは」
「あゝ、だいぶ出來てた」
「おしげさんたちは……？」
「今、そこで、自動車を拾つて、乘つけて歸してやつた」
そんなことを云つてゐるところへ、別の女中が、昌造の分の茶と、絞り手拭を運んで來た。顔を拭いて、
「あゝ、突ッ立つてたらくたびれた」
よく晴れた日の暮がた、急に來る冷さに、健吉は掌を揉んで、
「おい、お絹さん。火が少し貧弱だね」
「あら、さうですか」
と、伸びあがつて見て、「おや／＼。……持つて參りませう」
「赤いやつをね」
「はい。……そいから藝者衆はどういたしませうね」
「まだ／＼。あとでこつちで云ふから……」
「ぢア、なんか、あつさりしたもんで、お銚子もつて參りませうか」
「それも、ちよつとまア待つて貰はうよ、――少し用談があるんだから」
その「用談」といふ言葉を、云ひ方で、いくぶん巫山戯た意味に響かせた。
「どうでせう、まア、御兄弟で、お仲のいゝこと」
ケツケツケ、、、と聞えるやうな、空々しい笑聲を殘して、女中が出て行つた。
紫檀色に塗つた華櫚の角火鉢を持ちあげ、投げ出した膝の上を越して、昌造との間へ直した。灰ならしの痕もなく、淺くたゞ突ッ込んだ炭が、あらかたもうたち消えしかけてゐた。火箸を把つて、昌造は、まづ炭を片よせ、ぐる／＼と渦に、眞中から灰を柔らげだした。
近くに風呂の煙筒でもあるのか、石炭の煙臭い匂が、締めきつた障子のなかまで微に流れ込んで來た。健吉は、クン／＼、二度ばかり鼻の奥を鳴らし、序に、威勢よく洟をかんだ。そのあと、手巾をひと折りするごとに、うんと鼻の下を長くして、赤くなるほどひどく、横にひッこすつたが、火箸を隅に差して、ぢッとその樣子を見てゐる昌造

と、ふと目が合ふと、靜な笑ひ顔になつて、
「なんだい」
「うん？」
「何をそんなに、一生懸命見てるんだよ」
「ふーん」
意味なく、昌造も笑つた。——何か、夕方らしく、氣力のぬけきつた氣持だつた。
「なんだい？　話つて」
また暫くしてから、昌造が、さう大して訊きたい氣もなく、たゞ場所ふさげに、その言葉を置いてみた。
「まア待てよ。いま火を持つて來るから……」
一軒ぴよこんと突ッ立つた二階家だけに、いよ〳〵落ち込むまでの陽が、いつまでも未練らしく障子を染めてゐた。それが、下からだんだんに、寒々とかげつて行つた……。
たッたッたッ、たゝた、と足音が近づいて、
「どうも」
で、襖をあけ、「お待遠樣」
「馬鹿に火の用心のいゝうちだなア」
「え？」
それでも、すぐ氣がつくと、また例の笑ひ顔でうけて、「ぼかと來ると、忽ち、……現金なもんですわねえ」
「下手だなア」
「だいじよぶよ。すぐ熾るからみていらつしやい」
「ちよいと借せよ」
「だいじよぶですッたらね」
「ぢア、吸殼、とつてけよ」
「これから、今、ひらうところぢアありませんかね」
すつかりすますと、臺十能を押しやり、それまで中腰でゐたのが、昌造のまん前にぺたりと坐り込んで了つて、まづ自分の掌先を遠火にかざし、こすり合せた。
「どうです、御覧なさいな、すぐ熾つて來たでせう？」
「してみると、お前、やきもちやきだね？」
「あら、世帶もちがいゝつて云ふんぢアありませんか。ねえ、加アさん」
「さ、用談だ。早く階下イ行けよ！」
そこで始めて昌造が、無愛想な口を利いた。
「うん」
急に健吉も真面目顔になつて、「呼ぶまで、君たちも來なくつていゝ

ない。ルオールのことでは他に僕よりよく知つてゐる人がゐる。

○

僕の云ひたいのはある藝術家についてだ。

日本では今プロレタリアの文藝でないと、本當の生命のある文學ではないやうに思つてゐる人が多いらしい。しかし本當のことを云ふとプロレタリアの人々の生命を正しく生かすことが人類の生長に役に立つ仕事だから、その點で、その爲に役に立つ文學も價値があるが、人類の生長はあらゆる方面に人間が働くことを要求し、あらゆる方面に人間の心が働くことを要求してゐるのだから、プロレタリア文藝以外でももつと人類の生長に役に立つものは大いに尊敬せらるべきで、このことを本當に知らないものは、人類の生長に役に立つものまで否定して得意になる愚をほこりにしてゐる。

プロレタリアのために人類があるのではなく、人類のためにプロレタリアが人間らしく生られるやうになることが必要なのだ。つまりプロレタリアの人々の内にある天命も個性も生ることが、人類の生長に必要なことだから、プロレタリア文學が存在の價打があるのだ。つまりプロレタリアの文學の價値は何處にあるかと云ふと、各個人の生命が健全に生きることが必要であり、又各個人が自分に一番適當な仕事をたのしみをもつて自發的にやつてゆけるやうになることが必要だから、その內心の要求から生れるプロレタリア文學だけが、文學としては價値があるのだ。

だからプロレタリア文學の主張者たちが、個人の內心の要求を無視する傾きのあることは、本末を轉倒してゐるのだ。

このことは今のぼせてゐる人達にはわからないであらうが、いづれわかる時が來ると思つてゐる。

それと同時に、プロレタリアではない人間の書いたものでも、人類の生長に何等かの意味で役立つものは十分價値があるものである。人類は大きな木のやうなものだから、あらゆる枝、あらゆる根が生長することが、大きな木に必要なやうに、人類にとつても、あらゆる方面で、人々が働き、そして自己の仕事をより完成に近づけてゆくことが必要なのだ。しかしそれは金もうけや、位置の高まることを意味してゐないことは當然である。自己の所謂、天職を何處までも果してゆくことが必要なのである。だから本當の畫家の仕事の出來るものは、その方で、うんといゝ畫をかいてゆけばいゝのだ。なまぢつかの畫をかくものは人生の娛樂を供給するものとして役に立つだけであるが、しかし本當の藝術家は各個人の生命に生長力を與へる。生命の源からくる血を各個人に供給する一つの泉になる。

さう云ふ泉になつた藝術こそ人類的な藝術と云へる。

階級闘爭專門家は、かう云ふ文藝の存在を否定する。しかしそれは事實を無視した議論であり、文學の發生した第一の原因を見ないものだ。文學の生れた最初のものは歌である。そしてそれは異性を求める歌か、生命力のあふれた闘爭の歌である。しかしその闘爭は階級意識

から生れてゐない。狩りの歌や、敵と戦ふ時の歌だ。野蠻人が饑えて狩をする前にうたつておどるのを活動で見たが、勇氣を鼓舞する、生命の唄だ。階級と云ふものは人爲的なものであり、人間の弱點から生れたものだ。人間か萬能なら階級は生れない。人間は殺されやすいものであり、死にやすいものだから、生るためにはいかなる屈辱もしのび、勞働も辭さない。そして一方人間は他人を奴隷にしても樂をしたい虫のいゝ根性がある。だから學校に通ふ子供時代から腕力の強いものは、餓鬼大將になる。そして弱いものは迎合してやむを得ず服從を強ひられる。そのかはり弱いものは餓鬼大將をやつつけることもある。之等は自然ではあるが、しかしそのよくないずるい性質が、社會の病所を利用して發達しすぎた今日では、社會の關係は自然とは隨分ちがつて來てゐる。金をもうけるなぞと云ふことは、人間の生れつきに知つてゐることではない。こんなことをかくと切りがないが、僕の云ひたいのは、文學は自然の聲である所に特色があると云ふことだ。だから純粹の文學は詩である。人間の本來の生命からあふれた詩聲なしには文學も、藝術も生れないことを自分は斷言出來ればいゝのだ。そして社會は、どう云ふ時に文學の材料になり得るかと云ふと、その人間の本來の生命を壓迫する時に、文學の材料になり得るのだ。なぜかと云ふと、人間が生きやうとする時、それに邪魔になるものには無關心ではゐられないから、本氣になつてそれにぶつからないではゐられないから。

だからプロレタリアの人々が今の社會に無關心でゐられないのは當然である。彼等は生きる力が強ければ強い程、今の社會とぶつかるのはやむを得ない。だから今の社會のことが問題になるのは當然だ。檻のなかの動物が檻が氣になるのは當然なことだ。生命力の強い動物程、檻が氣になるであらう。尤もあまりに檻になれたものは存外平氣かも知れない。プロレタリアの作家の内でも、純粹のプロレタリアの人より、學生上りの世間知らずの人の方が早く過激になると云ふことは當然なことでもある。

しかしどつちにしろ、文學の生れる目的は社會を破壞することではなく、本心を生かすといふ點にあるのだ。だから文學上の偉大な作はその人の本心のまゝに生きやうとする力の偉大さに比例するのだ。

トルストイ、ドストエフスキーのやうな人間が今のロシヤの文壇にゐないと云ふのは、二人に比敵する程、強大な力をもつて根本から根氣よく生きやうとする人が居ないと云ふことになる。

ロシヤの今の社會で滿足する作家は段々社會的に關心を持たなくなるであらう。そして最も非社會的な作品をつくるであらう。さうでない人だつたら、その社會の缺點を最も痛切に感じてゐる人にちがひない。

人間は身體がわるくなければ身體のことは忘れてゐる。社會がよければ社會のことは忘れる。金に困らない作家は今の社會にはあまり不服を感じないから、社會のことはさう問題にならないのは當然であ

る。

しかしそれはその人の素質にもよる。

こゝで自分は一歩進んで云ふが、文學にとつては社會のことをかくのが目的ではないのだ。社會のことをかくのは生命の生きやうと思つても、生きられない程度がかきたいからだ。つまり嵐にまげられた木は嵐の強さを示したいからまがるのではなく、まがりたくはないが、仕方がなしにまがる、しかしいつでも起き上らうとしてゐる。見る人は嵐の強さによつて木の強さを知り、其處に力を感じる。

我等は文學以外のものでは人間の本心を知ることが出來ないのだ。少くも今の我等にとつては、人間の言葉を通して本心にふれ得るものは文學以外にはないのだ。

所が、近頃はその文學にさへ人間の本心は不必要になりかけてゐる。プロレタリア文學の政治意識、通俗小說の讀者意識は、やゝもすると人間の本心をごまかす。

自分の好きなものを好きと云へなかつたり、自分でそらぞらしいことを知つてゐながら、だまされて見たりする。それでは困る。本當のプロレタリア文學はますます人間の本心をかゝなければならない。通俗小說はますます人間の本心にふれるやうにしないといけない。それが出來れば、本當の文學になる。

○

文學は何のために存在するか。

それはいろいろの方面から說明出來ると思ふ。自分はそれをこゝでは腦の細胞の生理的性質から說明して見たい。

之には多くの獨斷があるかも知れない。しかし僕には自明の事實だと思つてゐる。そしてかう云ふ見方をする人がゐないのが、自分には不思議に思へる。

僕は人間がなんのために存在してゐるか知らない。しかし草木は何のために存在するか知らないが、たゞ自然の許された範圍で生長しやうとしてゐることだけはわかる。それは草木の性質だ。

人間も自分の身體をよくしたいと思ふのは、さうするのが氣持がいゝからに過ぎない。身體を丈夫にすると氣持がわるかつたら、人間は身體を丈夫にしやうなぞとは思はないであらう。腹がへると飯が食ひたくなるから食ふ。食ひたくないやうに出來てゐたら食はないだらう。

小說だつてさうだ。よみたいからよむので、よみたくなかつたらよまない。

だから問題はなぜよみたいかにある。

階級鬪爭をしたいから飯を食ふのではない。又小說をよむのではない。

腹がへるから飯を食ふのだ。なぜ腹がへると飯が食ひたいのか。それはわからないが、生きる爲にそれが絕對に必要だと云ふことはわかる。

なぜ小説をよむか。この方はさう簡單にはわからないであらう。

しかしそれは讀まないと、心が空虚になるからだ。退屈するからだ。何故退屈したり、心が空虚になつたり、淋しくなつたりするか。腹がへるのには生理的原因があるやうに、人間が孤獨にしてゐては淋しくつて仕方がないことにも生理的原因があるにちがひない。

自分は說明する必要のない程自明なことを云ふ。筋肉が發達することが筋肉のよろこびであるやうに、腦の細胞も發達したがつてゐる。そしてそれには他人の腦の細胞の動きに自分の腦の細胞を共鳴させることが必要なのである。つまり人間の腦と云ふものは一人でも發達するがそれでは不完全で、矢張りいろ〳〵の人の腦の細胞の動きをとり入れて、そして自分の腦をより完全に發達さしたい代物に出來てゐると思ふのだ。

だから自分の腦の細胞よりも、よりよく動ごく腦の細胞の活動に接することがよろこびなのだ。之は運動競技についても、畫や音樂についても同じことが云へる。その他、いろ〳〵の人のことをきくよろこびも、つまりはそれによつて自分の腦が發達するよろこびなのだと僕には思へるのだ。

音樂や畫については他日にゆづるとして、文學はその點、一番露骨なものと思ふ。心を動かさずに文學をかくことは出來ないと思ふ。しかしその心の動かし方が、人によつても、時によつてもいろ〳〵である。頭が緻密に動く人もあれば、粗雜に切り動かない人もある。緻密に動いても一部切り動かないで、他は眠らされてゐる人がある。碁や將棋の名人だとか、骨董にこつてゐる人だとか、又ある專門のこと許りやつてゐる學者なぞ、その方には頭が實におどろく程動いてゐるが他は動かない。だから他の人には中々通じない。なぜあすこに石をおいたのか、それがわかるためには一生碁をやらなければならないでは困る。さう云ふ人も一人や二人、何百萬人に一人位ゐはあつて面白い。勿論さう云ふ人の心がけを聞くのは面白い。誰にもわかることがあるが、專門的な話になつてはとてもわからない。文學はさう特殊的であつては困る。文學者はもつと一般的に、全部的に頭を動かし、鋭えてゆくことが必要だ。

人間の腦はより賢くなりたいと云ふ本能をもつてゐる。いろ〳〵のことを深かく知りたい、又出來るだけ緻密に動きたいと同時に、出來るだけ大きく、活潑に、闊々と動きたい。

文學はこの要求に（無意識的ではあるが）應じて生れて來たものと見ることが出來る。

だから文學は子供の時から、生理的に要求されるものである。

どの階級に屬するものも、ともかく儂は食はなければならない。そのやうにどんな人間でも、他人と話をせずに、自分の理解はつきりすると云ふことはないのだ。又他人と話をせずにゐられない。そしてその話の要求を出來るだけ完全に滿さうとするのが文學である。そしてその文學の要求は、腦の細胞が生理的に要求する要求で、腦に賢くな

りたい、すべての腦の細胞が出來るだけ活動したいと云ふ要求にすぎないのだ。

だから我々の尊敬する作家と云ふものは、我々よりも、よく頭を動かしてゐる作家であることが必要なのだ。それは全的に我々よりもよりよく頭を動かしてゐる人ならばなほいゝ、しかし部分的でも、我等の腦をよりよくしてくれる力がある人なら存在の價値があるのだ。

なぜさう我等の腦が完全に生きたがつてゐるか。それは我等がさうつくられてゐるからと云ふより仕方がない。

文學に我等の腦を生々せる力がある限り文學はいつになつてもこの世に存在するものであらう。

神には文學は不必要だ。完全にいつでも腦の細胞が動くものには文學は不必要以上だ。だが他人から教はるものがあり、他人の頭の動きにあはせて自分の頭を動かすことが時には必要であるやうな人間がつくられてゐる以上、文學は存在する價値がある。

どんな流派に屬さうと、どんな主義に屬さうと、この目的に叶ふ文學は存在の價値があるのは當然である。その他の文學はあれば、健全な胃の腑からは食慾を起されることは出來ないであらう。(二九、一〇一九)

# 蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　徳富猪一郎

やらしつくり喰合はぬ所があるかの如く感じ、その爲に彼等の傍には近付いたが、彼等の仲間とはならなかつた。併し當初の關係は、最後迄順縁、逆縁、種々の意味に於て取り續いた。

予は陸奥伯がその身を民間黨に投ぜん事を、期待と云はんよりも寧ろ希望して居た。併し陸奥伯は却つて山縣内閣の働き役者となり、恐らくはその力に依つて土佐派を懐柔し、遂に第一議會の解散を見ずして終はるに至らしめた。これに就いては、當時の予は寧ろ不平であり、不服であつた。

× × ×

予は何處迄も藩閥政府とは絶對反對にして、憲政樹立の急務は、唯だこれを打破するにありと考へ、その爲には全力を盡し

## 第五十二　所謂る自治黨

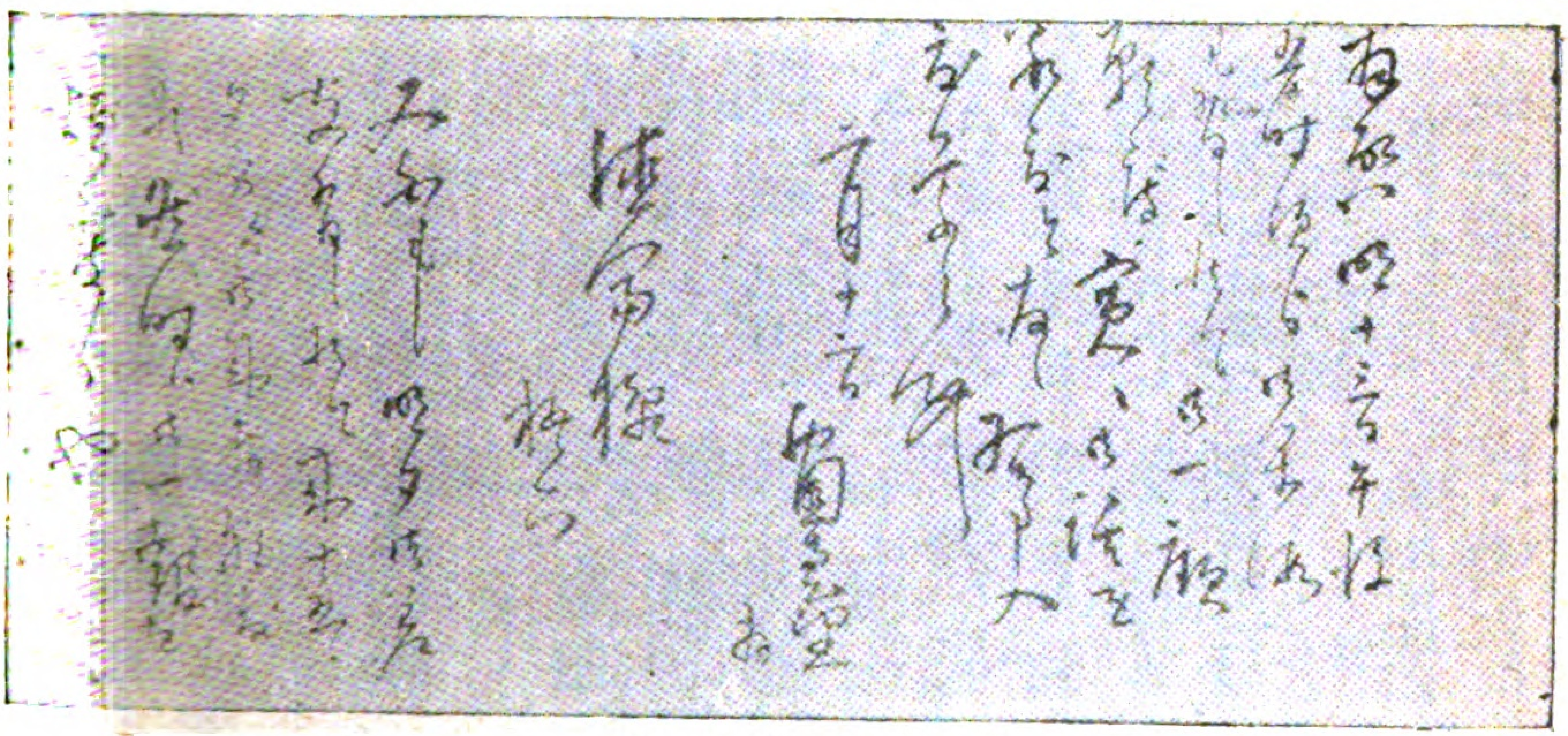
語後に戻る。明治二十年『國民之友』は、發刊以來の傾向よりすれば、予は當時世の所謂る自治黨と稱する、井上侯の仲間に加入すべきであつた。この仲間は井上侯を首領として、青木、野村、陸奥、西園寺、光明寺三郎、其他の新進氣鋭の士等、その中に數ふべき者多かつた。彼等は世の所謂る歐化主義者にして、予の言葉で云へば、貴族的急進主義者であつた。予は從つてその連中には、悉くとは云はぬが、大概ね親しかつた。就中、井上、西園寺、陸奥、青木等の人々とは、最も親しかつた。併し予は彼等の所謂る貴族的歐化主義が、予の平民主義と何處

た。然るに山縣内閣が松方内閣となるや議會と政府との衝突に依り、遂に解散となり、二十五年二月には愈々總選擧となつた。

此時陸奥伯は内閣に在つたが、彼は寧ろ伴食に過ぎず、一切の仕事は内務大臣品川子爵と、次官たる白根男爵がやつた。所謂る世にも名高き松方内閣選擧大干渉とは此事である。

## 第五十三　明治二十五年の選擧大干渉

松方内閣と云ふも、首相の松方公は何れかと云へば、常識に富んだ穩健なる人で、とても選擧干渉などを自らなす人でもなく、又たなす事を好む人でもない。併し内務大臣品川子爵は、吉田松陰先生の愛弟子にて血性男子である。彼は反對



西園寺公の書牘（明治二十一年頃）

黨を見る事、恰も朝敵を見るが如く、明治二十五年の選擧干渉は、戊辰の初、鳥羽、伏見の役に於けると同樣に考へ、敵を退治するには、手段方法などを撰ぶ處では無いといふ事にて、殆んど露骨なる大干渉をした。

當時予は熊本縣なる予の先輩、山田武甫翁の熱心なる希望に應じ、相伴つて下縣し、翁と共に熊本縣下を遊説し、九死一生の目に逢うた。當時横井小楠門下の安場男爵は、福岡縣知事として九州探題となり、熊本縣は同じく横井門下、松平正直君これを率ゐ、しかもその退治せらるゝものは、熊本は無論、福岡縣の柳河邊に於ける在野黨は、概して横井小楠門下と云ふ能はずんば、その類であつたから、謂はゞ同じ仲間の戰さとも云ふべきで、保元、平治の亂もこれには過ぎずと思はれた。

予は當時熊本から玉名郡を振出しに島原に渡り、島原から口の津を經て天草に赴き、天草から風波の爲に、途中の小嶼に停泊し、漸く葦北郡佐敷に至り、それより球磨川に傍うて溯り、人吉に至り、又た人吉から球磨川を下りて八代に。八代から益城、宇土を經て熊本に歸つた。

球磨川下りの時などは、人吉の壯士等が鐵砲、刀などを携へ、時々舟中から兩岸に向け發砲して過ぎた。斯くて選擧の結果は、概して民黨の爲に不利であつたが、しかも熊本では大極に山田翁一人當選する事が出來た。當時山田翁の歌に、

殊更らにかき亂さずば山里の
水もかく迄濁らさらまじ

とあつたが、全くその通りであつた。

## 第五十四　選擧後の歸東

扨愈々選擧も濟んで歸京する事となつたが、隣縣の福岡縣は最も亂暴で、野田卯太郎、永江純一氏なども、頗る危險の目に逢ひ、永江氏の如きは、足を傷けられ、遂にその爲に一生跛となつた程である。斯る次第であつたから、同志の者が心配の餘、予に智慧をつけた。それは明朝春日驛（今の熊本驛）から出發すると宣言しつゝ、今夕池田驛（今の上熊本驛）から出發し、吾々同志が護衛して門司まで送り屆けるといふ事に取極めた。然るに同夜は山田翁宅に案内せられ、薩摩汁などの御馳走があり、愈々停車場に駈付けた處、最早や汽車は出た後にて、今更ら致方無く、停車場の茶店に一泊する事となつた。當時茶店は未だその普請が成就せず、別に寢具なども無く、隙洩る二月の夜風には隨分閉口した。而して護衛の一人たる高田露氏は、今更ら相濟まずと、頻りに予に向つて謝罪つた。「これは拙者が意地が汚たなく、御身が立たんとしたのに、今一杯と薩摩汁を喫した爲に、此の失策を來したのである」などゝ云ひ、孰れも一笑した。

斯くて高田露、井上敬次郎、高木第四郎、阿部充家等諸氏に相伴ひ、門司にて下車すべき處を、故に一驛前なる小倉に下車し、其處にて晝食をしたゝめんとしたるに、如何なる間違ひか、飛んでもない處に飛込み、今更ら歸へるに歸へられず、怪しげなる婦人等が、狼藉として寢てゐる室の附近にて、兎も角も食事をなし、漸く船に辿りつけば、その船には選擧干渉の親

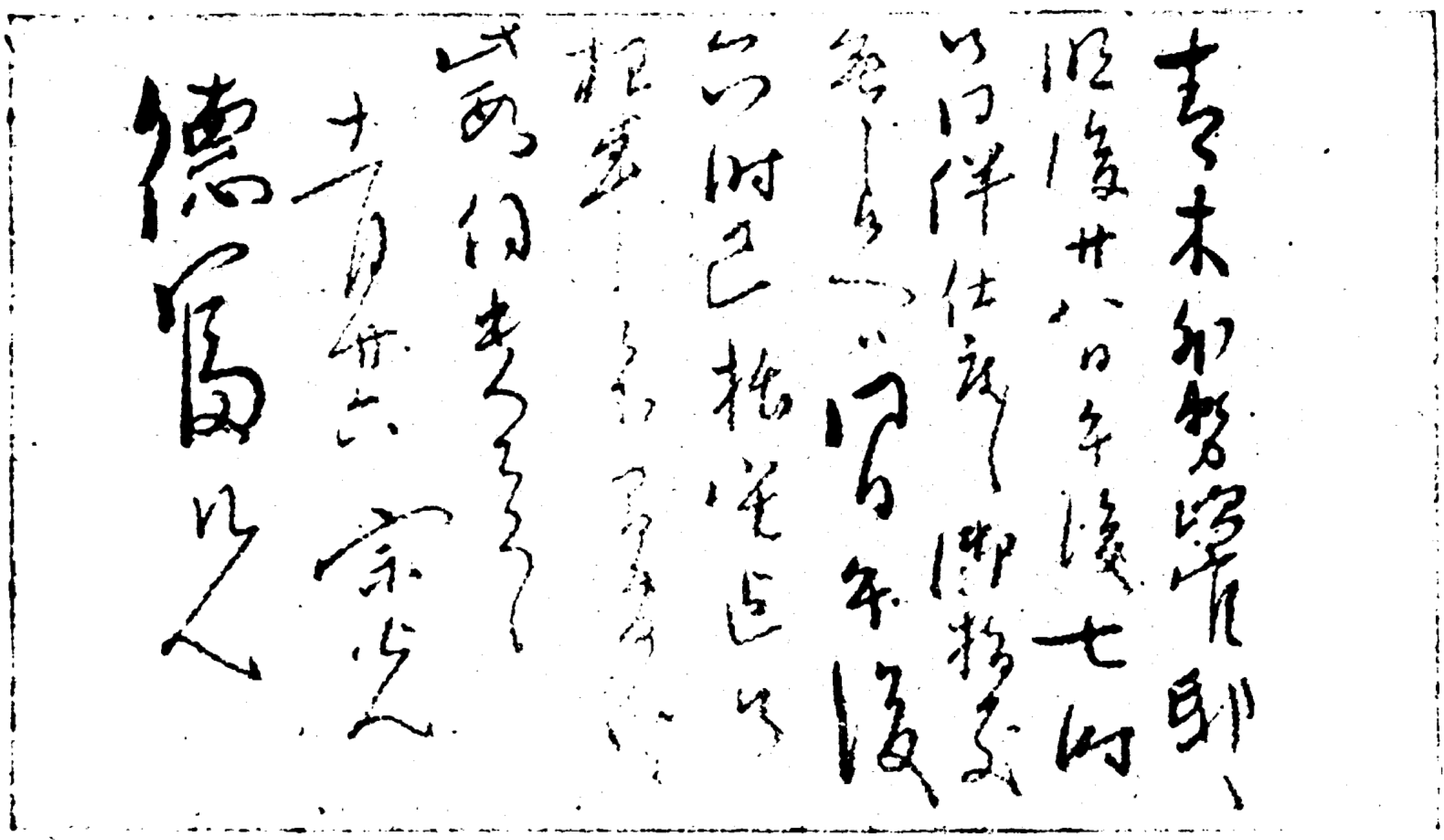
汪安場、松平等孰れも先着し、安場男の如きは槍の穂を杖に据ゑ、それを杖きながら跛足を引ずり、甲板を往来し、意氣軒昂の有様であつた。

而して此の小さき船中には、佐賀縣にて落選したる松田正久氏なども乗船してゐた相だが、氏は三等船客の中に混じ、毛布を被つて寝てゐたから、誰もそれと氣付く者が無かつた。即ち同志者たる予なども、一向それとは氣が付かなかつた。

（昭和四年七月三十一日　民友社に於て）

## 第五十五　陸奥宗光伯と予

總選擧の結果は無論吏黨が多數で、民黨は少數であつた。但し禍は内から生じた。松方内閣に於て農商務大臣陸奥伯の如きは、當初から選擧干渉に反對であつた。彼は自ら松方内閣の副總理でなければ、參謀長を努むべき資格の人であつた。然るに對議會策に就いては、内務大臣品川子、次官白根男等の手に攬き集められ、陸奥伯は殆んど口を容れ、手を下すの餘地は無かつた。その不平知る可しだ。予は第一議會の際に、陸奥伯が妥協に骨折りたるを快からず思うてゐたが、今松方内閣に居ながら、其の政策に反對したるを見て、自然舊交を回復するの止むなきに至つた。



陸奥宗光伯書牘（明治二十年頃）

陸奥伯は内閣の内情を、その儘予に語つたから、『國民新聞』の政治記事は、恰もX光線もて照すが如く、内閣の狀況は暴露せられた。從つて政治新聞としての『國民新聞』が、聲價を舉げたる事は、[illegible]ば陸奥伯の賜と云つてもよからう。斯くて松方内閣に於ける

内相品川、陸相陸奥は、殆んど相撲つの姿となつて、双方共に總選擧の後、臨時議會の前、即ち明治二十五年三月の中旬に辭職した。從つて從來政府と妥協したる自由黨、殊に土佐派の自由黨なども、悉く民黨に復歸した。

× × ×

斯くて種々の經緯があつたが、二十五年八月には、第二の伊藤内閣が出來、元老總幕出揃の内閣となつた。即ち樞密院議長伊藤公が首相となり、黒田伯は遞信大臣となり、山縣公が司法大臣となり、而して陸奥伯は外務大臣となつた。この内閣の成立に就いては、陸奥伯なども餘程骨折つたらしかつた。當時伯は西ケ原の邸からよく山下町の帝國ホテルに出掛け、予も亦屢々伯と會見した。當時伯はランドルフ、チヤーチルの演説集等をポケツトに入れ、閑を偸んでそれを讀んでゐた。

伊藤公は當時小田原の滄浪閣に居たが、陸奥伯は屢々これを訪問し、種々獻策してゐた。伯の語る處に依れば『折角伊藤に意見を注入し、愈々ものになつたと考へて歸へれば、間もなくそれが取消されて、元の木阿彌となる事がある。これは實に困つたものである。要するに伊藤を動かさんとすれば、巳代治を動かす他は無い。今日では伊藤なども元氣が拔けて、若者の巳代治などに動かされてゐる次第であれば、なか〳〵一氣呵成に物事をやると云ふ事は六ケ敷い』と嘆息してゐた。

實に陸奥伯は聰明と云ふ程度を通越した程の明敏なる人で、井上侯が中心勢力である時には、侯を動す爲に、自分では間頓ちきの鈍物であると心中では冷笑しつゝも、表向きは青木周藏子と結托し、又たその胸中では、巳代治などは相手ともしなかつたであらうが、伊藤公を動かす爲には、巳代治の歡心を上る事も辭せなかつた樣だ。

× × ×

それは兎も角も、陸奥伯は此の如くにして、外務大臣の要職に就き、初めて雛が籠中に置かれた。これから顯脱するのは當然の事である。予は初から藩閥政府に反對するのが目的であるから、陸奥伯が松方内閣と葛藤を生じた時に、陸奥伯と接近したのは勿論であるが、扨愈々第二の伊藤内閣が出來上つて見れば、これ又た松方内閣よりも文明的ではあるが、依然たる藩閥内閣には相違ない。從つて又た予と陸奥伯との政治的關係は、追々疎遠とならざるを得なかつた。

それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た皆同様自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、殊に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於ては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

× × ×

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも内地雜居反對の論者が尠く無かつた。これは政府部内にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、概してそれであつた。予は當初より内地雜居論者であつたが、併し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に詰着した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約面に依れば、凡有る外人は居留地以内に封込まれ、その外に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手廣く、手嚴しく、徹底的にやると云ふ事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困まらしめて、自ら兜を抜がしむるに如かずといふ意見であつた。この意見は急進黨も、保守黨も、頑固黨も期せずして一致し、此に所謂る六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干渉に依つて出で來り、西郷侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又たその中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

## 第五十六　自由黨と予

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から藩閥打破一點張りであつたから、自由黨の態度を齒がゆく思ひ、これを新吏黨などと名付けて盛んに攻撃した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題した中に『星亨何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亨氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直な事が此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身に書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亨と德富猪一郎との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、それ程星派で咎立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執着する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝辭を云つて、其儘濟した方が、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣鋭の予は、斯様なる損德の打算抔を考慮する餘裕も無く、此方も愈々喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して逐一論駁するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

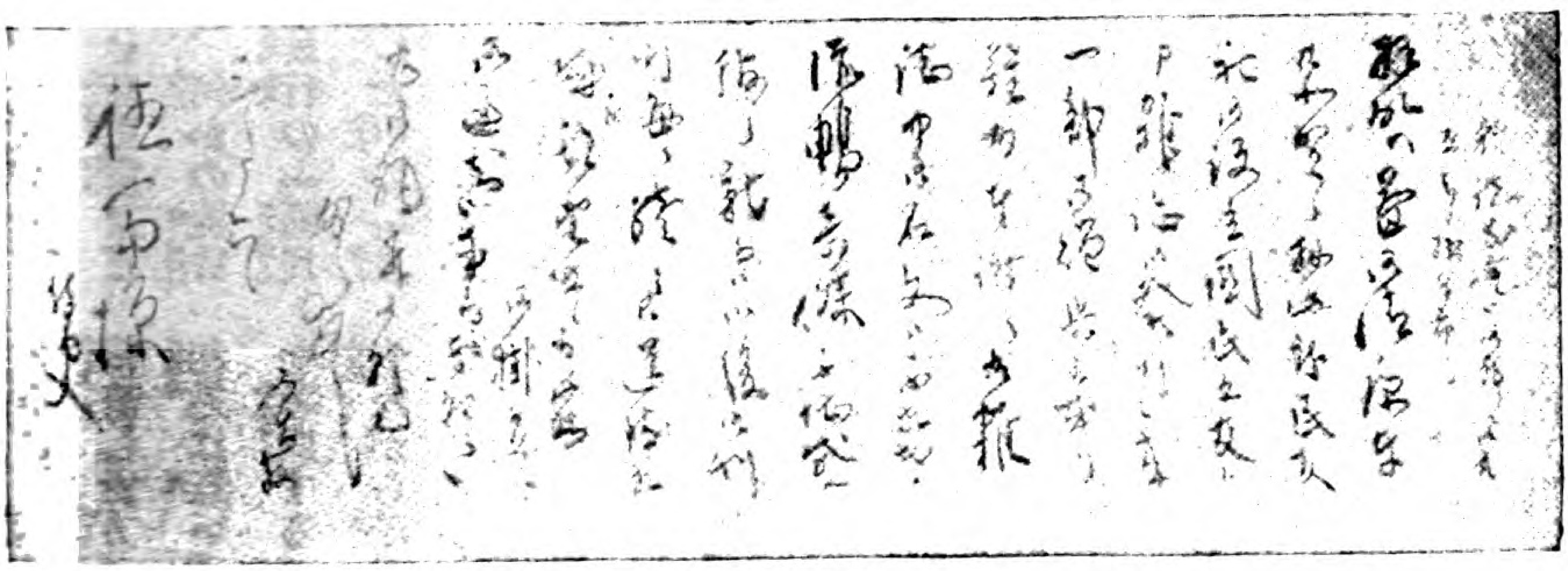
斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絶交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、扨困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派新聞、雜誌の攻撃及び身體に關する危險等は暫く措き、地方の自由黨員には、國民新聞不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、それを回復するには十數年の歳月も猶ほ不足であつた。

此の如くにして陸奥伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政

治上では甚だ疎遠と云ふよりも、寧ろ反對の側に立つ事となり、陸奥伯の如きは、『かねて文明的急進論者の徳富氏が、非内地雜居論者など〻肩を並べて、乃公等の政策を妨害するとは怪しからぬ』と云ふ事にて、予に對しても多大の遺憾の情を含んでゐた樣であるが、明治三十年の八月伯が病むや、予は故に西ケ原の邸に見舞うたが、併し岡崎邦輔君等が『只今接見しては伯が亢奮するから』との注意に依り、殘念ながら相見ずして去つた。伯は『徳富氏に逢つたらば、一議論試むる積りだ』と云つてゐた相だが、予も實は伯の此の世を去る以前に、從來の經緯に就いて、相語りたき事が尠く無つた。若し次の世があらば、或は相見て呵々大笑するかも知れない。

（昭和四年八月三日　民友社に於て）

## 第五十七　陸實氏と予



陸實氏書牘（明治二十年頃）

當時の在野黨は六派聯合と稱して居たが、其の六派は何であつた乎。兎に角自由黨を除くの外、其他の野黨は、主義に於ても、歷史に於ても、孰れも是迄何等の緣故は無く、寧ろ互に鎬を削つてゐたものであつたが、所謂條約斷行論、即ち對外硬と云ふ點に於て一致した。而して此の團體には、政府黨及び當時に於ては、準政府黨とも云ふべき自由黨の外の新聞、雜誌は、孰れもその同盟に加擔した。されば其勢ひは殆んど全國を席捲せんとした。

新聞雜誌方面に於ては、表立つては專ら志賀重昂氏等が常任幹事として骨折つたが、內輪の畫策は專ら、日本新聞社長陸實氏がやつてゐた。陸氏は狷介不群、氣節を以つて立つ昂々乎たる東北の一男兒として知られ、又た莊重勁拔の文章に秀でたる記者として知られてゐたが、予はそれだけを以つて、陸氏を評價する事は、實際氣の毒であると思ふ。

×　×　×

君は善き意味に於て、なか〳〵謀を好んだる策士であつた。而して君の手は政界の裏面には、なか〳〵よく動いた。而して餘の事は兎も角、政治上に就いては、可成り融通も利いて居た。君は谷、鳥尾、三浦等と云ふ國粹論者、若くは保守論者たる舊將軍連とも懇意であつた。又た神鞭知常、高橋健三氏等とは兄弟同樣の親みを持つてゐた。而して井上毅、杉浦重剛、小村其他政界の浪人者、有志家等へも、知己朋友が多かつた。其中に於て、予も又たその一人に數ふべきであつたらう。

予は當時專ら此の運動に就いては、陸君と相談した。而して相談する毎に、陸君の思慮はなか〳〵周到で、吾等の如き粗枝大葉の者が、とても追付くところでは無いと考へた事が、幾度かあつた。而して種々の文案等を起草する時なども、予と陸君とは何時も其の委員であつた樣だ。曾つて予が檢束と書いたのを、陸君が束縛に改めては如何だらう抔とて、予も一議にも及ばずこれに同意した事があつた。斯る文句の上でもなか〳〵注意深かつた。

×　×　×

此の機會に於て、予と陸君との交りに就いて語るであらう。

予は明治十九年の夏、雙方の友人和田正修君と共に、君を牛込揚場町の寓所に訪うた。當時君は尚ほ明治政府の小役人であつた。官報局であつた乎、制度取調局であつた乎、それは覺えて居ないが、高橋健三氏が官報局長として、多分君はその局の一人であつたと思ふ。予が『將來之日本』の出で來るや、當時新に發行せられたる『出版月評』なる、新刊書評論を專門とする雜誌に、置字野史と題して、その評を掲げたものがあつた。予は一讀して、多分それが陸氏である事を感付いた。置字と云ふは陸君の名、實の字を二つに割いたものであらう。併しその事は當人には訊さずに濟んだ。

## 第五十八　『日本』と『國民』

やがて君は官を辭し、青木貞三君等の後援に依つて、新たに『東京電報』なる新聞を發刊し、明治二十二年二月憲法發布の前から、之を『日本』と改題し、發刊した。而して君はその社長であつた。

『國民新聞』は、明治二十三年二月に發刊したから、正しく一

年遅れたる弟である。然るに此の二新聞は、その主義主張、趣味嗜好等に於ては、互に氷炭相容れぬ程に反對してゐるに拘らず、孰れも殆んど商賣氣を抜きにしたる書生流の新聞で、孰れもその讀者は實業家とか、金持ちとかで無く、寧ろ論客、志士、其他世の中と共に俯仰しない、特色ある人々を得意とする事に於て一致してゐた。而して社員の見分や風儀は、互ひに異つてゐたが、社の組織と云ひ、社と社員との關係と云ひ、孰れも互に有志家の團體を持つてゐた事に於て一致してゐた。

× × ×

併し何と云つても『日本』は歐化主義の失敗したる時に蹶起し、天下の反動の氣運に乘じて出で來り、しかもその援護者は有力者のみにて、社友とも云ふ可き人々の中には、陸軍の將軍連の外、副島伯などの老先生もあり、又た大學出の古き學者達もあり、地方に於ては有力なる――暴力團とは云はざるも――その名を聞いてだに、人をして慴伏せしむるに足る壯士團體等もあり、なか〳〵それに向つて競爭すると云ふ事は、容易の業では無かつた。

× × ×

固より日本新聞社には、福本日南等の如き、如何なる問題であらうが、如何なる文體であらうが、向う所敵無き健筆家がある。又た詩人としては天下一品と云はれたる、國分青厓などがあり、又た文學方面には正岡子規、繪畫方面には中村不折、又た海外の投書家としては、池邊三山等があり、實に濟々たる多士であつた。

× × ×

予は陸君とは初から懇意の間柄であつたが、日本新聞社中の人々は、恐らくは予を異端者として、必らずしも蛇蝎視せざる迄も、中にはそれに幾き者があつたかも知れない。

然るに六派聯合、對外硬以來、種々の相談にて親しく其の社にも往來する事となり、偶々『國民新聞』が、發行停止となつたる先は、予は深井英五君を伴ひ、神田雉子町なる日本新聞社に赴き、吾等の原稿を『日本』に掲載した事もあつた。是は何人も意外としたる所であるが、政治的熱は時としては異分子さへも、融和せしむる事があり、時としては同一分子さへも、分解せしむる事がある。

右の次第にて、『國民新聞』と『日本』とは、從來の行掛りな

ら議論より、文章の總てに至る迄、互ひに其の兩極を代表してゐたが。而してその讀者も若し極端を云へば『日本』は、頑固老人の爲めに愛讀せられ、『國民新聞』は、青年子弟の爲めに愛讀せらるといふ傾向があつたに關はらず、社會に於ては、兩々相對して居た。

×　×　×

但だ予は當時他の新聞は相手とせず、常に『日本』を相手としてゐた。其の紙數なども、略々伯仲の間にあつたと思ふ。併し正確の事は分らぬが、『日本』六、『國民』四、若くは『日本』五半、『國民』四半と云ふ位の所であつたと思ふ。然るに日露戰爭後、間も無く、陸君は病の爲に日本新聞社を他に讓渡し、自分は鎌倉極樂寺の幽邃にて、病を養つてゐたが、其時『日本』の記者の若干が、國民新聞社に收容されたるを見て、陸君は予に書を與へ、

『漢何ぞ楚人の多きや』

と云ふ文句を拔き來つて、其の感慨を述べ來つた。併し讀者たる予が、其の手紙に打たれたる感慨は、作者たる君の感慨よりも深かつたであらうと思ふ。

君はやがて逝き、予は其の後碌々として今日に至りたるが、しかも今や君とは異りたる意味に於て、又た方法に於て、予も又た『國民新聞』と別れたる事は、今更ら實に人事は、決して豫想通りに行くものでないと云ふ教訓をしみ〴〵と味ひ得た。

## 第五十九　對外硬と對外自主

尙ほ對外硬と云ふ事に就いては、予一個人としては、聊か腑
しがたく覺えた。自分は對外政策は、かうとか何とか豫じめ定
むべきものでは無い。唯だ外交は何處迄も他國に追隨する外交で無く、自國の外交は、自國を主としての外交であらねばならぬ。其處で予は自主的外交の文字が、最も適當であると信じてゐる。

予は當時に於て既に内地雜居贊成者であつた。又た當時に於て、既に或る範圍に於ては、ローマ字の採用又た苦しからずとするの論者であつた。予は日本が勝手次第に支那の文字や文
那の文學や、支那の制度を自に利用したる如く、歐米の文明に就いても、又た然かすべきものと信じてゐた。されば同じ對外硬の仲間でも、内地雜居反對論者等とは、大いにその意見を異

にしてゐた。

此に於て予は對外硬なる總稱の下に、彼等の仲間に捲込まれてしまはん事を慮り、自分では自主的外交なる文字を作し、これを以て標語となさんと試みた。而して予自らは、多忙であつたから、旨を社中の或人に告げて『自主的外交』なる小冊子を、國民新聞社の同體異名なる民友社から刊行した。斯る次第で對外硬の名は、その時限りの文字として、消失せたが、自主的外交の文字は、今日に於ても猶ほ生命ある文字として、現存してゐる。此の運動の間に、予は前にも述べたる如く、所謂る貴族的急進論者、即ち歐化主義者の人々、若くは舊自由黨の方面に於ける人々等、尠からざる友人を失うたが、他方に於ては、又た是迄縁も由縁も無かつた人々と交際するの便宜を得た。例へば此の六派聯合の運動の際に、近衛公とか、三條公とか、谷將軍とか云ふ人々は勿論、やがては品川彌二郎子、高島鞆之助子、樺山資紀伯等と云ふ、薩長の人々とも、面接し、若くは交際する事を得た。然るに此の運動は、東洋の風雲急を告げ、朝鮮に於ける日清の衝突が、目睫の間に迫り來りたる爲に、やがて條約勵行問題から一轉して、朝鮮に於ける自主的外交の問題となり、其爲に運動は愈々實際問題に接近し來つた。

吾社は本來武斷政治に反對し、文治主義を主張し、交戰主義に反對して、平和主義を主張した。しかも朝鮮問題に就いて、清國の態度甚だ横暴にして、動もすれば朝鮮を併呑して、吾を威嚇せんとするの勢を示し、吾が帝國の國防上一大危險の迫りたるを見るや、吾社は猛然として、朝鮮に向け出兵を主張した。若し『國民新聞』が唯一なる出兵論の先導者で無かつたならば、尠くともその一で



樺山資紀伯肖像

あつたに相違は無い。而してやがて豐島沖の海戰となり、成歡、牙山の役となり、淸國に對する宣戰の詔勅は發布せられ、此に於て從來の政爭は、全く一時中止の姿となつた。

（昭和四年八月二十日　民友社に於て）

## 第六十　二十七八年役と予

明治二十七八年戰役は、日本の歷史にとつても、又た予一個の歷史にとつても、孰れも重大事件であつた。而して予が一生にとつては、又たこれが一大回轉機であつた。予は是迄藩閥政府を相手に、最後迄戰ひたる一人である。此に最後迄と云ふは、議會開會前後から、從來の民權論者にも、往々藩閥政府と妥協したものがあつたからだ。

然るに一度二十七八年役が起るや、予は藩閥政府も、議場も何もかも打忘れ、擧國一致淸國に衝る事を當面の急務とし、それに向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犧牲とした。世間では此事に就いて、予の事を彼是非難したる人もあつたが、それは各々の意見で致方が無い事として、予自身としては、苟も公人として世に立つからには、大勢に順應して、大勢を率ゐると云ふ事は、當然の事であらうと思ふ。況んや此の二十七八年の役たるものは、吾等自らその張本人たるを以つて居らざるも、尠くともその急先鋒の一人たる事に於てをやだ。

× × ×

當時何れの新聞も此事に熱心したが、殊に福澤諭吉翁は尤も熱心であつて、確かの事は記憶せぬが、一萬圓の軍資金を獻納したやに覺えて居る。

予は是迄印刷を秀英舍に一任して居たが、新聞が盛大になるに從つて、段々不便を感じたから、新に印刷機械を買入るゝなどの準備をなし、聊かながらも吾社には貯蓄もあり、又た印刷機械買入れの爲に、或る鑛山業者から若干の資金を借り受けたれば、その事に着手せんとする間際に、此の事件が突發した。故に夫等の爲に用意したる一切の資金を、悉く此の事件に投じ去つた。予は政府に資金を獻納する程の力は無かつた。されど予の力の有らん限りを以つて、吾が新聞を此の事件の爲に提供する事とした。

恐らくは其爲に從軍記者の數は各社を通じて、吾社ほど多數の人を出した社はあるまいと思ふ。先づ最初に朝鮮には阿部充

家君、又た書報記者としては久保田米僊君、その子米齋君、金僊君等も、追々出掛けた。其他社員、社友及び臨時徴發の人人を加へれば、前後を通じて殆んど三十人にもたつたかと思ふ。軍隊の通譯たる熊谷直亮君、又た出征したる梅田又次郎君等は、社外の通信員として、前者は枕戈生、後者は一老兵の名にて、他の新聞の容易に追随する能はざる通信を送つた。而して松原岩五郎君の如きは、釜山より陸路京城に出掛けて、第一軍桂師團に從ひ、遂に海城の籠城迄もした。又た古谷久綱君などは第二軍に從ひ、軍隊中の最も年少者として、頗る重寶がられた。又た國木田獨歩は千代田艦に搭乘し、所謂る『愛弟通信』——通信文を其弟國木田收二君に宛てゝ、書翰體に認めたるもの——等に依つて、頗る異彩を放つた。而して又た久保田君の繪畫通信は、その方面に於ては、最も他に先んじ、且つ卓越の技倆があつたから、やがて平壤陷落後は歸朝し、廣島大本營にて、御前揮毫の光榮を忝くする事になつた。

× × ×

『國民新聞』は是迄は軍隊仲間にも評判が善くなく、又た所謂る薩長人士の如きは、極めて少數なる松方公其他を除けば、徳富などは國を賣る逆賊で無ければ、その手先き位に考へられてゐたものであつたが、予が此の戰爭に對し、凡有る犧牲を顧へり見ず、奉公の誠を致さんとする態度は、追々彼等も諒とする處となり、その中には意外の方面に、意外の友人も出で來つた。その中で最も先に舉ぐべきは川上將軍であらう。當時の川上將軍は、參謀次長であつて、參謀總長は、有栖川宮熾仁親王であり、事實川上將軍は參謀本部の首腦であつた。

予を將軍に介して吳れたのは、青井一三君、同志社出身予の後輩であつた。彼も小芋の一人であつたから、此際種々の大芋連中に、予を紹介して吳れたのであらう。併しそれよりもより多く予を紹介したのは、『國民新聞』が、戰爭に對する俊敏なる働きであつた。從來予は川上將軍とは、何等の緣故も無かつたと云はんよりも——川上將軍の予に對して如何に思うてゐたかは知らぬが——予としては、川上將軍には決して好感を持たなかつた。と云ふ譯は、予は父の友として曾我老將軍と懇意であつた。而して老將軍と共同して、『日本國防論』なるものを、明治二十一二年の頃『國民之友』に揭げて、手嚴く當時の陸海軍に對する批評を試みた。而して曾我將軍等は、當時の參謀次長

川上操六、陸軍次官桂太郎等に排斥せられたる人々であれば、その人々が彼等に對して好感を持つ筈は無つた。

× × ×

桂、川上と云へば、陸軍の花形であつたが、當時桂將軍は第三師團長として名古屋に在り、中央では殆んど川上將軍の一人舞臺であつた。尤も川上將軍にも油斷のならぬ相手があつた。それは上には山縣元帥てふ巨頭を戴き、下には陸軍次官兒玉源太郎てふ豪の者が控えて居た。併し陸軍大臣としては大山公爵があり、彼の沈默の中に於ける常識と、威信とは、極めて統一し難く、極めて混和し難き陸軍をば、兎も角も纏めて居た。而して俊敏なる川上將軍の上には勿論、その側ら及びその下には、兒玉とか寺內とか、種々の山縣派の小姑共が居り、又た野津とか山路とか、なかなか手に負はぬ前輩若しくは同輩の人達もあつたが、然も將軍はその間に、上手く權衡を取つて居た。



川上大將肖像

## 第六十一　川上將軍と予

而して川上將軍の最も強味とも云ふべきは、當時の首相たる伊藤公と妥協して居た事であつた。これは單に川上將軍の力からばかりでは無く、伊藤公の力からも、所謂る魚心あれば水心と云ふやうな事であつたらう。謂ば山縣派に對する伊藤、川上の攻守同盟とも云ふべきものであつたかも知れ無い。

而して川上將軍は參謀次長の職權からして、鐵道にも關係を持ち、鐵道會議の議長として、世間の政客及び實業家など〻接觸を保つてゐたから、單りサーベル連中ばかりで無く、その以

外にも、輕視し難き勢力を扶植しつゝあつた。

× × ×

予は川上將軍と一見舊の如く、忽ち親しくなつた。而して當時予は社長でもあり、主筆でもあり、探訪者でもあつたから、種を取るには川上將軍の宅に如くは無き事を知つて、殆んど毎朝出掛け無い事はなかつた。宅は今大橋新太郎氏の邸宅の一部であつた。當時は參謀次長の宅としては、寧ろ見窄らしい程であつた。玄關の次に應接間が二つあつたが、それも薄き壁や板戸で隔てゝゐたから、その話はよく隣室に聞えてゐた。

× × ×

予は川上將軍から種を取るばかりで無く、その會見を待つ間、その應接室の控室にて、多くの人々と出會し、その雜談中から往々大切なるヒントを得た。その中で今猶ほ記憶してゐるのは、高島嘉右衛門氏が將軍を訪ねて、種々話をしてゐる中に、傍で聽けば、『易を引いて見たが、戰には勝つが、併し心配の事がある。それは招かざるの客三人あり。云々の卦が出たから、御注意あつて然るべきであらう』などゝ話してゐた。將軍も固よりであつたらうが、予も又た『當るも八卦、當らぬも八卦と云ふが、斯るたわいも無き話をするとは、扨も好奇きの親爺である』と思うてゐた。然るにその翌年、所謂る三國干渉が出で來り、此に於て『招かざるの客三人』なるものゝ意味が、漸く分つた。此等は偶中と云へば偶中であるが、又た不思議と

云へば、不思議とも云ふ事が出來よう。

× × ×

序ながら又た話して置く事がある。當時高島、樺山等の薩派
軍は、松方内閣の沒落以來、暫らく閑地に在つたが、吾等對外
硬論者は屡々その門を叩いて、意見を開陳した事があつた。然
るに宣戰の詔勅出ると間も無く、樺山提督は軍令部長となつて
戰地に去つた。

× × ×

予は或日紀尾井坂の邸に伯の子愛輔君を訪ね、四方山の話を
してゐた。然るに愛輔君は、端なく予に豐島沖の戰に就いて話
つた。予は恥しき事ながら、その時迄は此事を知らなかつた。
君は恐らくは予も知つてゐるものとして、話したかの如くであ
つた。これを聞いた予の驚きは知るべきであつたが、予はさあ
らぬ態に聞流し、殊更に落着き拂つてしばらく話込み、而して門

を出づるや否や、車を傭うて大急ぎに急がしたが、生憎その車夫がヨボヽヽで、殆んど辛抱しきれぬ程であつたが、さりとて車を降りて馳け出す事も出來ず。兎や角社に歸へり行くや否や、直に號外を出して奇勝を博した。

これは一例であるが、予は吾が身體を殆んど千百にして、凡有る方面に馳けずり廻つてゐた。予がその通りであれば、社中の面々が緊張してゐた事は、云ふ迄も無かつた。此の如くにして『國民新聞』の盛名は、隆々として會戰毎に世に擧つた。而して發刊當初から殆んど七千程度を上下してゐたものが、戰爭中は一萬臺を越え、一萬五千臺を越え、殆んど二萬を越ゆるに至つた。

(昭和四年八月二十一日　民友社に於て)

## 第六十二　大本營の移動と予

扨八月には大本營も愈々廣島迄進轉する事となつた。予は當初から身も魂も、此の戰爭に打込んで居たから、廣島に赴く決心をした。併し赴くに就いても、大本營と共に動く事を便利と考へ、その事に就いて川上將軍に懇談した。將軍は參謀次長で、兵站總監を兼ねてゐたから、その位の事は何んでもあるまいと考へたが、予は所謂る御用記者でないばかりで無く、當時の伊藤内閣には、最も激烈なる反對者であつたから、如何に戰爭がおつ始まつたとは云へ、伊藤内閣は依然予を反對新聞記者の重なる一人と見、予も又た擧國一致と云ひつゝも、伊藤内閣には、今猶ほ釋然たらざる氣分を持つて居た。

故に如何に川上將軍が、予と親しく在つたればとて、表向き予のみを特別取扱ひにするわけにもゆかず、さりとて予の懇願を無下に斷るわけにも參り兼ねたと見え、出發の數日前、予に赤い徽章を與へた。當時徽章は三種に分れ、金色の徽章は高等官、銀色の徽章は判任官、赤色の徽章は使用人、從卒等の類であつた。即ち予はその仲間に伍して出掛ける事となつた。併し汽車の中では赤色を佩けてゐたとは云へ、廣々とした一室を予一人にて占領し、極めて樂であつた。

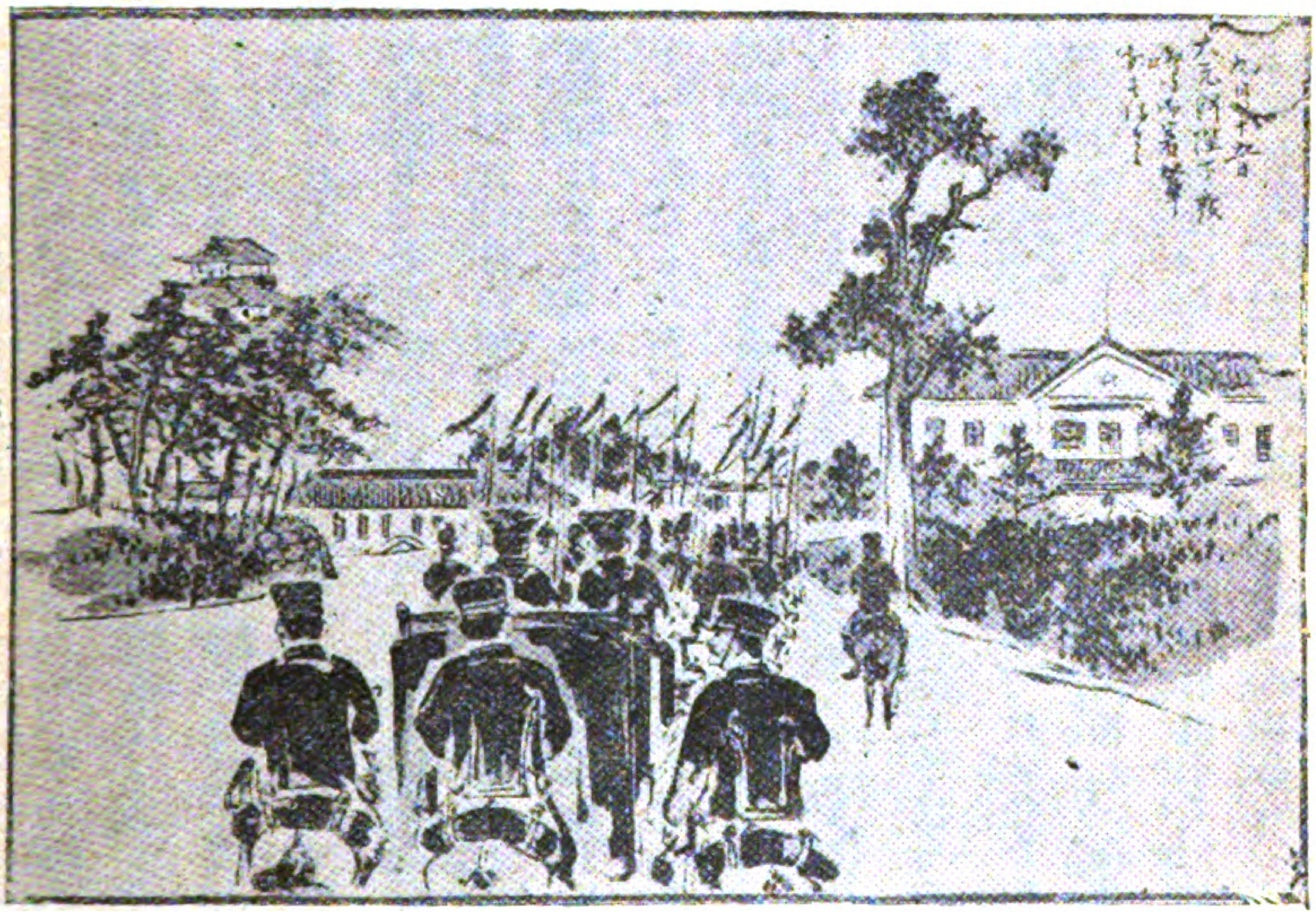
第一日は名古屋に大元帥陛下御一泊在らせられ、從つて一行は名古屋停車場から、再び特別汽車に乘込むに際し、大山陸軍大臣は、供奉の一人に予を群集の中から見出し、

『貴君は如何にして此處に來つた乎』

と、頗る驚異の眼を擬つてゐた。

斯くて吾等は廣島大手町元安川の橋際に、吾社の出張所を構へ、其處を足溜りとして、予は日夕廣島中を馳け廻つた。當時川上將軍は吉川旅館に居を構へ、樺山提督は長沼旅館に居を構へ、孰れも予等と同じ大手町であつたから、往復には頗る便宜を得た。

又た當時の廣島は東京を持參して廣島に收縮したる樣であつたから、東京に比すれば、凡有る便宜があつた。予が廣島滯在中、最も屢々往來したのは、川上將軍、樺山將軍、野戰運輸通信長官寺内伯、野戰衛生長官石黑子爵、野戰監督長官野田男爵、米田侍從、松方公、山本權兵衛伯——當時大佐やがて少將となる——伊集院五郎——後元帥當時大佐若しくは少將——其他川上將軍の部下である、參謀本部附の諸將校が主なるものであつた。



廣島御着輦の圖

× × ×

而して廣島に於て臨時議會の開かるゝや、全國の政客は悉く廣島に集り、なか〳〵賑やかな事であつた。吾等の出張所も、社員の戰地より往來する者、本社より往來する者、滯在する者、なか〳〵の雜沓にて、恰も一箇の寄宿舍以上であつた。而して長谷場純孝、宗像政等の諸友は、代議士として廣島に來り、又た廣島から戰地に行くに際しても、何れも予等の出張所をその足溜りとした。

併し或時はその家は予等の占有を許さず、一軍隊に徴發せられ、軍隊と同居した事もあつた。その同居者の中に、梅田又次郎、加賀美重三郎等の連中もあり、加賀美

なぜこれを緣として、一生予に師事し、其子の名さへも德富と命名ける程であつた。――因みに云ふ彼は今より數日前、其の郷里山梨縣に於て病沒した――されば予がこの出張所を綽名して、亂暴本部と云つたのは、決して不思議は無かつた。今から考へて見れば、明治二十七年の秋の初めより、二十八年の春の終りに至る迄、予の廣島に於ける生活は、予の一生の中にて最も愉快なる時期であつた。

當時予と終始行動を一にしたるは、即ち今日本銀行副總裁である深井英五氏であつた。君は予に先發して廣島に出掛けた。有體に云へば、予は君を予の理想的の新聞記者に作上げようと思つたが、その方面では予は聊か予の考が間違である事を悟つた。君は寧ろ小心に過ぐると云ふべき程、確實性に富んだ人であつて、山氣たる事とか、冒險的の事とかは好まない。頭腦は全く論理的に出來てゐて、自ら先づ醉うて、而して後人を醉はしむる筆と云ふ手際は、望むべきで無かつた。併し君の英語の知識は極めて確實であつて、君の翻譯でさへあれば、一々原文と對照せずとも安心であり、又た問題を與へれば、それを間常時に調査し、調査的に研究し、徹底せしむるに就いては、啻通の新聞記者の及ぶ所で無く、殊に如何なる難題でも、君に理解の出來無い事は無かつたから、相杖大事の予に取つては、縱令敏速、機敏などゝいふ點には、予の誂向きでは無かつたにしろ、無二の調法なる人であつたに相違は無い。

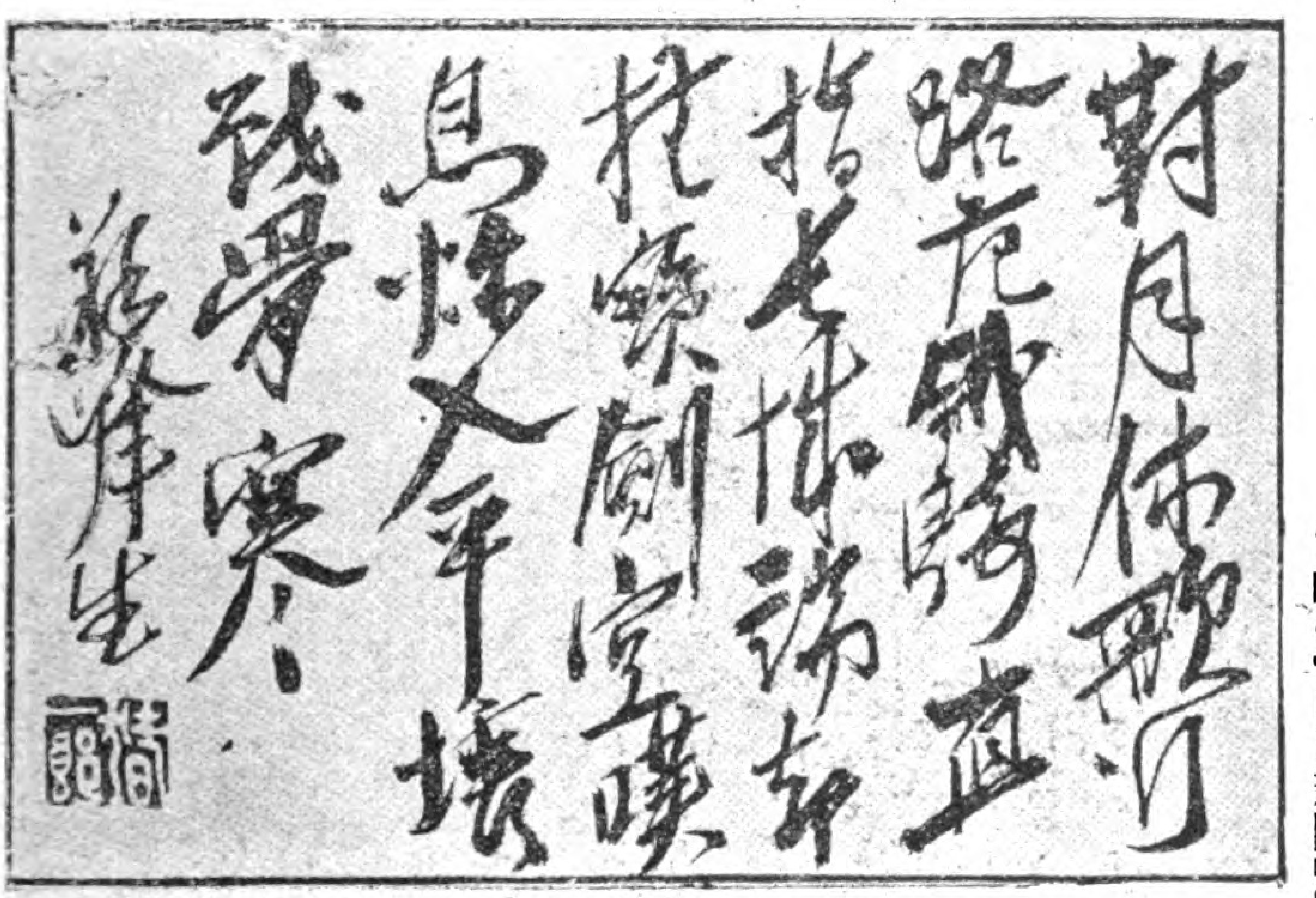
其處で予はつらつら考ふるに、君を日常的の探訪とか、通信とかに使用するのは、材を用ゐる所以で無いと悟つた。しかも當時川上將軍から、大本營に英語を解する者が欲しいとて、その推薦を頼まれたを幸に、君を推薦する事とし、斯くて深井君は、毎日銀色の徽章を佩け、大本營に出掛ける事とした。

戰爭も愈々佳境に入り、吾等の考では、山海關を經て北京に攻め入も、決して遠くは無いと考へたから、此際寧ろ大本營を遼東半島に進むる事が、士氣を鼓舞、振作する上に於ても、必要であると考へ、予は頻りにその論を以つて、朝野の間に遊説した。併し當時の廟議は、大元帥陛下の御渡韓などゝ云ふ事は、到底期待すべき事でないと云ふことになり、此に於て小松宮殿下が御名代として、大本營を率ゐ、愈々旅順口に出掛くる事となつた。これが明治二十八年四月の事であつた。

（昭和四年八月二十二日　民友社に於て）

# 第六十三　猛然旅順より還る

大本營が東京から廣島に移るときには、予は從卒の資格で表向は隨行したが、大本營が廣島から旅順に進轉する時には、大びらに將校同樣、一のキヤビンを占むることとなつた。予は深井英五氏を同行することゝしたが、なか〳〵それを許可しない。實は川上將軍の方では予一人さへも、反對黨の新聞記者として、伴ひ行く事は骨折りであつたに相違は無い。然るに二人に於ては當惑知る可きだ。併し予は胸中考ふる處があつたから、深井君に『兎も角も船に乘込み、予のキャビンに居り給へ。』と云ひ、愈々予も大總督宮小松宮殿下、其他歴々の諸將校の後から乘込んで見ると、予のキャビンには、當時唯一の御用新聞『東京日日』の記者某が乘込んでゐる。當時の『日日新聞』は、内閣書記官長として、その威權赫々、普通の大臣は殆んどその鼻息を仰ぐ程の、伊東巳代治氏の所有であつたから、反對新聞の記者たる予を伴ふからには、當然の權利として、『日日』の記者が割込み來つたのは怪しむに足らない。併し船客の都合で猶ほ一人囑託か何かの名義の男が入込んで來た。其處で最初は予一人と思うて居たのが、四人となつた。普通ならば二人前のベッドが上下にあつたが、それに四人を押込めることは、容易でなかつた。しかも露骨に云へば、深井君は密航者である。食堂に出る事も出來ない譯だ。



平壤陷落當時蘇峯學人の詩並書

此事を知つた爲であらう乎否乎は暫らく措き、船が出發すると間もなく、人員點檢となり、愈々事が面倒にならんとして來

た。元來運輸通信長官寺内伯は、軍規、軍律など﹅いふことには、別して厳重なる人にて、予は廣島當時から厳克の二字を奉つてゐた程である。果してその厳克を發揮して來た。

其處で予は密かに川上將軍に見え、此處然るべく工夫ありて、一旦、深井氏を大本營の囑託としたこともあるから、再び囑託として貰ひ度い」と頼んだ。將軍は委細心得、その爲に深井氏は無事であつたが、扨て船が旅順口に着いて以來も、他の從軍記者は支那の廢屋に高粱を敷き、その上に起居したるに、予と深井氏のみは、港に繋ぎたる威海丸に在りて、贅澤なる生活をしてゐるのを見て、同業者間には頗る議論も起つたらしいが、予等は或は金州方面に赴くやら、或は營口に赴き、それから陸路海城に赴き、海城から蓋平を經て、再び營口に歸へる等、旅行に日を暮してゐたから、夫等の問題も自然に消失せた。

當時予等の船威海丸が、樂を奏して馬關海峡を過る時には、恰度李鴻章が伊藤、陸奥の兩全權と、講和談判最中であつた。斯くてその調印のことは、船が威海衞を經由した際、獨逸の軍艦からこれを聞いた。而して旅順口に居る間に、三國干渉の話をチラと耳にはしたが、しかも予は馬關條約に依りて、遼東半島は既に吾有となつた事を知つてゐるから、せめて吾が領土だけでも檢分したいと思つて、おめ〱と旅順口に滯在せず、駈く走廻つたわけである。

予は日本内地以外には、今度初めて足を踏出したもので、遼東半島の旅行は、予に取つて實に愉快であつた。固より交通機關とても無く、又た所謂る支那内地の旅行に必要なる、清國形の馬車さへも無く、徒歩をするか、さもなくば普通の荷車に毛布を一枚敷いて、それに乘り行くかの外は無かつた。

尤も當時は休戰最中で、兵站部の連絡はあつたから、予等は兵站部から兵站部へと、その線路を辿つて歩いたのだ。當時四月の下旬で、遼東半島には初めて春が訪れ、大木の柳は漸く芽をふき、北方特有の花たる杏花は、今を盛りと咲きつ﹅あつた。廣き野原に何物も目を遮へぎるものなく、悠々として春風に吹かれながら、吾が新領土とも思ふ、大陸の上を踏みつ﹅旅行した事は、予にとつては實に大なる愉快でもあり、滿足でもあつた。

予は後來桂公と政友として、尋常ならざる關係を持つてゐたが、不思議にも公と逢つたのは、遼東半島の蓋平に於てゞあつた。當時海城に從軍したる桂公は、海城を去つて蓋平に赴任し

團司令部を置いてゐた。

當時予は若氣の至りで、至る處の將校や兵隊と喧嘩をしたが、蓋平でも又たその事があつた。予等は蓋平に到着して、某聯隊長を訪問した。彼は碁でも打つてゐたらしかつたが、『用事があつて只今逢へない』と云つた。予は『新聞記者が面會を求めるのは、當前のことだ。其方に用事があれば、此方も用事がある。是非只今面會したい。』と繰返した。處がその聯隊長は、餘程癪に障つたと見えて、顏は見せなかつたが、大變な聲にて怒鳴りつけた。併し予の癪に障つたことは、より以上であつた。予はそのことを寧ろ師團長に訴ふ可く、桂公を訪問した。而してその始末を話つたが、桂公は如何にも尤もだと云ふ樣なる顏をしてこれを聽き、話が四方山に亘り、海城籠城の話から、岫巖、牛莊の占領の話、或は外國宣教師を懷柔したる話等を詳細に聞き、兼ねて吾社の從軍記者、松原岩五郎氏から、市民將軍と人の稱したことを總知つてゐたが、此に至つて果して聞くところに違はざるを思ひ、久し振りにわけの分つた軍人と語る事を得て、其日は珍らしく西洋料理まがひの御馳走に與つた。斯くて再び營口に歸へり、御用船にて旅順口に歸つた。

歸つて見れば、出發當時の形勢とは打つて變り、恰も火の消えたる狀態で、これは何事である乎と聞けば、愈々遼東還附であると云ふ事にて、予は實に淚さへも出ない程口惜しく覺えた。予は露西亞や獨逸や佛蘭西が憎くは無かつた。彼等の干涉に腰を折つた、吾が外交當局者が憎かつた。一口に云へば伊藤公及び伊藤內閣が憎かつた。

かねて伊藤內閣とは外交問題で戰つたが、今更ながら眼前に遼東還附を見せつけられたには、開いた口が塞らないと云ふばかりでは無かつた。此の遼東還附が、予の殆んど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以來、予は精神的に殆んど別人となつた。これと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ如何なる正義公道も、半文の價値も無いと確信せしめた。

そこで予は一刻も他國に返還したる土地に居るを屑しとせず、最近の御用船を見附けて歸へる事とした。而して土產には旅順口の波打際から、小石や砂利を一握り手巾に包んで持ち歸つた。せめてこれが一度は日本の領土となつた記念として。

（昭和四年八月二十三日　民友社に於て）

## 創作集 鐵

旋盤の響・ダイナモの唸り・ハンマアの火花・北海の怒濤とウインチの軌と、こゝには凡ゆる職場のプロレタリアの全面貌が、克明に、大膽に、作者が體驗によつて得た階級的認識によつて整理されつつ勇ましくも展開躍動する。問題の長篇「鐵」以下十五篇。

**内容**

鐵。ガトフ・フセグダア。畸形兒。赤い灯。ニッの心臓。賣られた彼等。暴風を貫く呼び聲。妹へ。黒いあざ。老朽船。ルンペンの日記。トンネル長屋。吹雪。海へ行く。海の反逆。墓穴を掘る。

**岩藤雪夫著**

最新刊

四六判並製　三八〇頁

定價壹圓五拾錢（送料拾八錢）

## 創作集 毆る

階級的抑壓と、女性としての迫害と、二重の桎梏に抗して立つプロレタリア女性の生活を描いて、冷徹、リアル、しかも火の如き階級的熱意は脈々として全篇を貫く。虐げらるゝ者の血と涙と、苦闘を通じて明日への勝利を暗示する「毆る」外十七篇の力作集。

**内容**

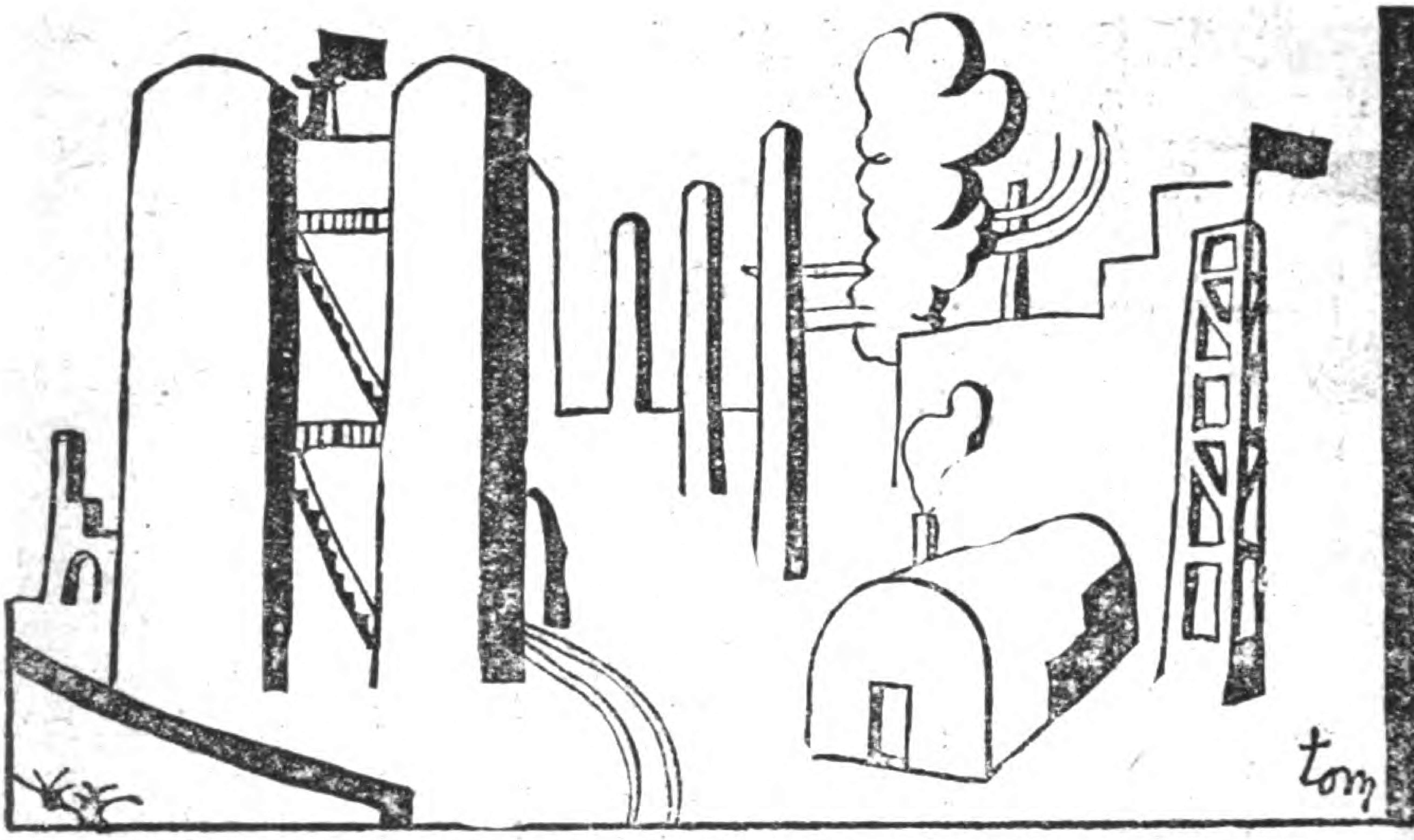
毆る。夜風。西向の檻房。投げすてよ！。古戸棚。荷車。愚なる女の日記。私の友人。生活。非幹部派の日記。足音。出札口。嘲る。新婚。足。施療室にて。勞働。森の中。

**平林たい子著**

最新刊

四六判並製　三四四頁

定價壹圓五拾錢（送料拾八錢）




# 敷設列車

平林たい子

折々はつとする様な生温い風が裾をひいて通る。

洮昂線敷設列車は洮南を距る四十六粁の地點で六月を迎へた。

支那人の工夫達は皮膚の脂肪の分泌が妙に促されたのを感じた。彼等は針の目の様に大きくなつた毛穴にこまかい粘土の埃を吸ひ込んで、夕暮、宿營車の位置まで逆行して來る敷設列車の背中に飛乘つた。彼等は疲れ切つて疊まりさうになつてゐた。敷設機の櫓は新しい軌道の上で左右に躍る。

「君達あ三號の宿營車に寢てゐるだらう？　一寸きくがね、この頃炊事車の棚に置く食料品が始終なくなつてしようがないんだ。心當りやないかね」

搖れて居る材料車の上に寢てゐた鮫島といふ技手が突然起上つて來て一人の工夫に云つた。

「知りません」

話しかけられた工夫は車輛の動搖につれて彈ね上りながら不機嫌に横を向いた。すると傍にゐた三十過ぎの扁つたい顔の工夫が口を出した。

「そんな事あ炊事の苦力に任せといたらいゝでせう」

「いや俺は炊事頭の王に賴まれてこないだから詮議してゐるんだ。事務車の方から豫算

が喧しいんでなあ。君達が知らないんなら知らないんでいゝさ。」
鮫島は何か傷けられて髯の中で風の樣に笑つた。

十封度のハンマーを振上げて一日犬釘打ちをやつた工夫達は體の關節關節が錆びた機械の樣に軋む樣な氣がしてゐた。彼等にはそんな餘裕のある話をもちかけて來る人間の生理狀態が不思議にさへ思へて眼を細くしてまじ／＼顏を見た。

遠い埃に煙つてゐる地平線の上に銅貨の樣に變色した太陽が懸つてゐた。

二輛の裝甲車を挾んだ宿營車が通風孔を耳の樣に立てゝ紐みたいにつながつてゐる。そこまで來ると材料車を押してゐる機關車は亂暴に速力を遮つて急停車を試みた。が、惰力で十間程も走り過ぎた。激しい動搖。足もとをさらはれながら工夫等は自分の宿營車の前で彈力をもつて飛下りた。

土匪襲來の噂を、十日に一度づつ聯絡して來る後の建築列車が運んで來た。四五日前から裝甲車の四角な鋼鐵の蓋が吊上つてあいた。夜になると二つの窓からライオンの目の樣な探照燈が光り出した。それは土匪への防備の意味も三分は含まれてゐたが、七分はいよ／＼苦しい作業にさしかゝつて來た苦力達の逃亡を防ぐためである。

恐しい勢で噴出する靑い光線は遠くなる程幅廣くなつた。箒の樣な光線の先で蒙古の荒寥とした平原を照し出した。そこには一本の樹木もなく一個の岩もなかつた。たゞ、同じやうに小さい起伏を繰返してゐる乾き切つた土ばかりがあつた。

支那人達に食はせる食糧品は麻袋に入れて炊事車の側の天幕の中に積んである。生溫い日が續くので下積の穀物がむれ始めた。その香と麻袋の蛹の樣な香とがまぢつて終日あたりに漂つた。女の腐の樣な艶をもつた白菜は天幕の裾から幾株も轉がり出たまゝになつてゐた。それがベタ／＼に腐りはじめて皮膚病みたいにひろがつて行く。

貨車を二段に區切つた宿營車もこの頃蠶室の樣にむん／＼する。

工夫達は夕食後食糧天幕のあたりをぶら／＼步くのが一日中での樂しみであつた。彼等は靑ざめた光線を見てゐると體に染まりついてゐる苦しい日中の勞働の記憶を暫く忘れることが出來た。それからいろいろな鬱積してゐる感情を手繰り出して行つた。

いつも戰亂の巷になる故鄕を持つてゐる彼等は土地や財產といふものに執着する習慣を持つてゐない。彼等はこの目で世の中を眺めた。そして張作霖に激しい敵意をもち上海の×××の紡績工場のストライキをきつかけとする排日や排英の運動に私かな心をよせてゐた。しかしその後その運動がどうなつたか、四月×鐵道株式會社の募集に應じて四平街を發つて以來、一枚の支那新聞を手に入れる機會もなかつた。

洮南では敷設列車に乘込む前日二度も嚴しい身體檢査が行はれた。彼等の懷中からは不穩な傳單の代りに汽車中でかぢつた水瓜の種の

殘りがこぼれ落ちた。そのあとでメンタルテストがあつた。
「洮昂鐵道を敷設するといふことはいゝことだと思ふか、惡いことだと思ふか」
「滿鐵の苦力に對する待遇に對してどんな感想を持つてゐるか」
四百人の苦力達はこの二つの質問に對して一人も碌な返事をしなかつた。ある者は洮昂鐵道がどういふ目的のもとに何者が敷かうとしてゐるかそんなことは無茶苦茶で應募して來てゐた。或る者は──ある考を持てゐたが、何にも知らない樣なポカンとした顏を答とした。
彼等は夕暮事務車へ行つて老牌といふ煙草を一個づつ受とつて來てゐた。それは東亞煙草から賣出してゐる一個一錢二三厘にしか當らない最下等の卷煙草である。
「あんな星をかり〳〵食つたらさぞうまからうなあ」
ある者は糖分の缺乏のために、明に氷砂糖を聯想しながらそんな他愛もない事を言ふ。食糧天幕の傍で敷設機のワイヤロープが風にギイ〳〵動く音をきいてゐると話はやつぱり日常の仕事の上の事に落ちて行く。彼等はこの頃毎日、人間業ではとても出來ない樣な能率を現場監督に要求されてゐるのである。彼等は一本のマッチへ五人もで口を突出した。こゝでは一本のマッチさへも自由に手に入らない。煙草の屑を詰め込んで出來てゐるその煙草は燃える端から火の子になつて暗がりでちら〳〵散つた。
「ぢやあその一千三百萬圓といふ工費を×××が支拂へないことを承知で×鐵道株式會社はこの工事を引受けた譯なんだな」
「うん、さうなんだよ。×鐵道株式會社にとつちやあ拂へないでくれた方がいゝわけなんだ。そこで××の××が生じるわけだからなあ」
張といふ若い工夫が說明してきかせた。
「ふーむ。」
長い辮髮を下げてゐる老人が感嘆した。そのあとで咳の引掛つた聲をした。
「鼠！　鼠！」
探照燈の一端が廻つて來て天幕に觸れた時だまつて煙を吐いてゐた一人が叫んだ。
「鼠だよ。そこの天幕の中に鼠が居たんだよ」
「びつくりするぢやないか。この氣狂ひめ！　鼠をうまれてはじめて見たのかい」
マッチを摺ると天幕のズック布に足をかけて逃げやうとしてゐた七八匹の鼠があかりに怯えて襤褸の樣に固まつた。天幕は風をはらんで內側へ向いて腹の樣にふくらんでゐた。それはたよりなくつて鼠にはよぢ昇れない。白菜が轉がり落ちて來た。
鼠は蛆の樣な白い歯をむき出してキイキイ鳴いた。
「人間も草も木もない所に鼠がゐるなんて薄氣味惡いねえ」
「なあに列車の荷物の中へもぐり込んで來たんだよ」

一人が材料車の上へハンマーを探しに行つてゐる間に鼠は彼等の注意と注意との間の稲妻の様な隙をうかゞつて逃げた。

彼等は理由なく、鼠にも劣つた人間の様に自分のことを考へた。そして宿營車へ戻つて行つた。

生物の香をかぎつけた數多の野鼠が風で起つた地面の小さい起伏にかくれて光線をよけながら移動して來つゝあつた。晝は空き叺や材木の下にかくれ、夜になると列車の中へ通風孔や扉口から這ひ込んだ。

疊を敷いた室にねてゐる技師や會計や技手達は用心のために扉へ鍵をかけて寢たが工夫達はさういふわけには行かなかつた。這はなければ頭がつかへる宿營車の中には炭酸ガスがいつも充滿してゐた。警務部員がやかましいので夜十時半までは閉めてねる扉を、十時過ぎると誰かゞ棚から降りて來て突破る意志をもつてゐるかのやうにやけに外側へ蹴る。すると毒瓦斯の様な温氣が廣々とした蒙古の大氣の中へ快く散つて行く。彼等はそれから水泳や扇風機の夢を見ながら鼾をまで一團りの豚肉みたいに崩れて眠るのである。――鼠はその扉口から侵入した。

ポケツトにある饅頭の皮や人間の唾の附着した煙草の吸口を引き出して奪ひ合つた。炊事車に下つてゐる牛の片股はたかつてゐる鼠のために左右に揺れた。フライパンの中で固つたヘツトの上には米粒の様な歯のあとが無數に印された。棚からは徹夜書いた圖面が落ちた。晝行はれる人間の生存競爭に代つて夜になると鼠の生存競爭がそこで行はれた。

一號の宿營車には清潔な青々した香のいゝ疊が敷いてある。

技手の伊東は建築列車からの電話で不承々々に床を離れた。滿洲地圖の下にある電話機に顔をよせてゐる時、囑託醫の山田が入つて來た。山田は虎の様な横縞のある靴下の足を投げ出して髭を剃り始めた。

「もし／＼さうです。さうです。軌條百二十噸機械油五罐……えゝいゝや、……失敬」

電話の終るのを待つて山田が言つた。

「君、×××の盗難つて奴にや參つたねえ。さすがの僕もとう／＼洗面所の棚に置いたペルペツト石鹸を昨夜中にとられてしまつたよ。」

「僕も昨日あそこで歯ブラシをとられた。しかし、ありやあ鼠の仕業だよ。」

伊東はやゝ不機嫌に答へた。彼には山田の派手な靴下が堪らなく軟弱に見えた。大きく言へば、日本といふ祖國の食糧問題、人口問題の解決の戰士として、軍人に勝るとも劣らない使命をもつてこの蒙古の野に出張してゐる帝國臣民が、ハルピンのダンスホールに通ふ英國人の利職屋の様なあの靴下は何だ！　彼は故郷の下關の聯隊で工兵伍長だつた。

食堂車でも盗難の話が出た。油がにぢみ出てゐる吊ランプの笠の下に

で彼等は帽子を被つたまゝ飯をかつ込んだ。そして鼠の仕業を人間の仕業の様に言ふことに興味を覺えた。奉天の馬賊が疊まで剝がして盗んで行つたといふ話にまで脱線して行つた。その次には大連で朝盗まれた毛布が晝小盗市場に陳列してあつたといふ經驗談が出た。×××は子供が大きくなると先づ何よりも先に物を盗む方法を敎へるといふ話が出た。

「丁、お前も敎はつたか」

入歯をガク〳〵動かしてゐた聯絡係の畑が給仕のために立つてゐる×××に言つた。

「不如！（まさか）」

丁は苦笑した。皆笑つた。

霧が薄く地面を這つてゐる。列車の尻の方で長い汽笛が鳴り出した。現場への發車相圖だ。食堂車の日本人達も立ち上つた。

「兎に角、三號の宿營車の張つてやつに注意してゐて下さい。あいつの顔は、ありや普通の支那人の顔ぢやないですよ。盗癖のある顔だ。たしかに。」

鮫島は敷設機の方へ歩き出し乍ら庶務の笹島に囁いた。彼は平生自分に敬意を表さない張に對してある憎しみと怖れをもつてゐたので、盗癖を鼠のせいにしないで、そんな風に言ひたかつた。敷設機の前に突出したクレーンはロープの先の爪で重い栗材の枕木を一本づつ自分の背中に運んだ。

肩の破れたシャツを着た支那人達が、クレーンを休ませない為に栗材をかついで走つた。

「軌條はどうした！　軌條は！」

車上で叫んでゐた鮫島は、その時一本の軌條を『かけもち』でかいで來る四人のうちの中の工夫が三號の宿營車の張だつたのを見た。

「間抜け！　發車ぢやないか。早く！　早く……」

彼は張の眼の据つた顔を見るとふつと言葉をやめた。

太陽が霧の中で卵の黄味の様に曇つた。栗材を積み終へると、クレーンは何チエーンかの軌條を象の鼻の様に巧にまき上げる。

鮫島は張に對する自分の心に反撥した。そして思ひ切つて機械油の罐に掛けてゐた片足で、吊上つたワイヤロープを見上げてゐる張の頭を蹴つた。

「張！　貴様はいつも油ばかり賣りやがつて、なんでも知つてるぞ」

張はひよろ〳〵とよろけて石炭の山に尻もちをついた。今一つ蹴られた。しかし尻餅をついたまゝ顔色も變へずに落ちた手拭と帽子を拾つた。そして長い足で梯の後に飛乗つた。

「アッハッハハ……獨活の大木みたいな奴ですね。あいつは」

彈丸ケースのバンドを腰で締めてゐた警務部員木川が嘲笑した。そして荷造箱にたてかけておいた銃をとりながら言つた。それは鮫島にこびる音を多分に伴つてゐた。

張の後から乘つた洪といふボールド締めの工夫がこの男を振返つて

ちらりと見た。張は聞えないのか枕木の上をまたいで行つた。

「張！」

洪は材料車の上を歩いて行く彼を呼んだ。

「君は苦力達に信頼されやうと思へば、あんな時大人しくしてゐちや駄目だ」

張は振返つたが返事をしなかつた。

敷設車を押してゐる機關車は後に材料と工夫を載せた長い鋼鐵車を牽いて動き出した。霧の奥で相圖の汽笛が長く猛獸の樣に吠く。機關車は性急な强い呼吸を吐きながら新しい線路の上で躍つた。そして平原を二つに裂いて進んで行つた。

線路と並行してトンボの樣に空に向いて續いてゐる電話柱が一本一本投げつけられる樣に後へ走り去る。敷設機の屋根の下で木川はポケットから出したウエストミンスターの箱を鮫島にさし出した。それを軌條に腰掛けてゐる張と洪は遠くから見てゐた。二人ともシャツの右肩が擔ぎ物の爲に破れてゐた。そこから赤く擂りむけた肉が腫れてもり上つてゐる。

「あの警務部員はこの頃まで公主嶺の獨立守備隊で上等兵勤務だつた奴ださうだよ。いかにも×××らしい圖々しい顔をしてゐるぢやないか」

「へーえ、あいつが。さうか」

張は今年の一月末まで公主嶺の或るロシヤ人の家に、×××煤鐵公司ストライキの煽動犯人としてかくれてゐた。肥料によつて自然に發生した熔鑛爐の冷却を損害二十萬圓に該當する「建造物破棄罪」として×支官憲から追跡されてゐるのだ。

「先刻鮫島が俺のことを何でも知つてるぞつて言つたね。ありやあどういふ意味なんだらう」

「いや、さう深い意味ぢやないらしいんだ。監督達はこの頃頻々として起るコソ泥について君を疑つてるらしい」

「へえ、そいつは初耳だ。だつて君、一寸したものをちよい／＼盗んで行くのはありや支那人ぢやなくて野鼠だよ。先刻野積の枕木を動かしたらざく／＼する程鼠が飛出して逃げたぜ。材木の下の土を掘つて、そこに豚の脂だのパンの破片だのをいつぱいくわへ込んであつたよ」

「要するに君を變な奴だと思つてゐるんだよ。氣をつけなくつちやあ」

張は笑つて言つた。

「だから俺は少しは毆られたつておど／＼してゐてやるんだ。苦力の信用を得るにや先づ監督の信用を得なけりやこゝぢやすぐ失敗するよ。シッシッ鮫島が來た」

列車が現場に留ると敷設機掛りの苦力をのぞく他の工夫たちは車上から飛降りた。そして蠅の樣に散つて自分の部署にとまつた。

自分で軌條と枕木とを敷いてその線路の上を漸進して行く敷設車の後部で多くの工夫達は敷設整理の仕事を分擔した、洪達十二名で一組のボールト掛りは、犬釘打ちの前でスナパーを握つて手早く廻して行つた。

ぬるい湯の樣なしめつぽい風がだん／＼强くなつて來る。

午後、後のボールト掛りは二十米ばかりの前方で三人の工夫が十人程の現場監督に亂打されてゐるのを見た。一人の監督が振り下したのは確に曲線直しに使ふ鐵のバールであつた。吹きまくる埃の中で毆られてゐる人間の姿は影繪の樣に薄くなつたりはつきりしたりした。さういふことは今までにも無數にあつたが今日といふ今日は我慢がしかねた。無智と貪慾との團りの樣に考へられてゐる苦力達も眼近を彈きかへす强い感情だけは何處の國の勞働者にも劣らず持合はせて居つた。彼等は持つてゐたスナパーを線路の上に投げて走り出した。が、途中から引返してスナパーを拾つて行つた。

「待て、待て、もつと計劃的にやらなくつちや。向うには××があるぢやないか！」

後で叫んでゐる洪の聲をきかず彼等は走つた。そして逃げおくれた二人の監督を麻の空き袋の樣に地面に打つ倒れるまでたゝきのめした。警務部員が走つて來た時には、もう彼等はあらい呼吸を鎭めながら軌條の繼ぎ目で何事もなかつた樣にスナパーを廻してゐた。

「おや鼠がいつぱい走つて來るぞ。凄えもんだなあ」

夕暮に近かつた。卷ゲートルの足でチョコ／＼枕木を渡つて來た伊東の言葉で後にゐた老人が顏をあげた。

「鼠がたくさん來る方角からはきつと洪水が來るつてことをきいたことがあるが……はてな」

彼は古雜巾の樣に額へ卷いた辮髮に手をかざして地平線を望んだ。

遠い地平線の上には黑い、髮の樣な一塊の雲が浮いてゐた。それは風に吹き流されてゐる形であつた。その方角にも激しい風があるらしい。その空の下を灰色の艶のある毛をもつた野鼠の一群が風と同じ方向へ無數に走つて行きつゝあつた。彼等はピョン／＼はね上りながら巾ひろいベルトの樣に地面の色をかへて流れた。鼠の群が湧いて來る地平線の彼方は埃で充血したやうに赤くなつてゐた。何かの不吉がそちらの空に生じつゝある樣に思はれた。

彼等は暫く軌道から目を離して不安な鼠の群を見た。六月が來たのに一本の草も生へず、一條の川も見えないたつた一色のこの平原の彼等はこの時程、無慈悲に、憎々しく、抵抗しがたい、人間の感情を皆吸ひとつてしまふ乾燥を持つたものゝ樣に感じた事はなかつた。鼠の群はその風景にさらに焦立たしい灰色をそへて眞直ぐに走つて行きつゝあつた。

夕食の時後部の材料置場から他の用事のついでに電話で刑事上の逃亡犯人がそちらの工事場へ紛れ込んで行つた形跡があるといふことを

言つて來た。どこの工事場にもよくあることで大して氣にとめる必要はなかつたが、ぢやあやつぱりこの頃のコソ泥は鼠ばかりの仕業ぢやないのかしらと現場監督達は言つた。

「仕事はこの頃また馬鹿に捗らないんだねえ。鐵道局の方ぢやあどうしても八月までに街基まで完成させなけりや責任者を更迭させちまふつて言つてるさうだよ」

電話を受けた技師は不機嫌に言ひ放いて狹い卓の前を行つたり來たりした。その傍で鮫島と今一人の技手とが張が怪しいとか聽といふ老人が妙に目が凄いとかで爭つてゐた。二人の支那人は偶然に二人とも三號の宿營車に寢てゐた。

「よし、それぢやあ盜難だの何だのをひつくるめて大々的に××しをやつてやらうぢやないか。さうでもしなけりやこれ以上能率を擧げる方法はありやあせんよ」

×鐵道株式會社が東三省總司令へ手交した工事請負契約附屬書には、この工事が民國十四年四月までに完成しなければ工費仕拂を三年間延期されても差支へない旨が書いてある。その代り約束期限内に完成させた曉、完成から六ケ月間に奉天政府が工費を仕拂はなければその價額を直に借款として移しても差支へないといふ今一枚の附屬書が總司令から×鐵道株式會社に手交されてあつた。四月といへばあと約十ケ月である。その間には四ケ月といふ結氷期があり嫩江の鐵橋架設といふ難工事も挾まれてある。しかも×鐵道株式會社にとつては、約束期限に完成しないといふ事の結果は、工費受取が三ケ年延びるといふ小さな不利益にとゞまらず借款の好機を永久に取逃すことにもなるのである。

借款の好機を失ふといふことはこの鐵道から上る利潤の分け前にあづかれないといふ消極的な不利益ばかりではなかつた。それは東支鐵へ北上する貨物を南下させて×鐵道株式會社へ吸收したいといふ長い間の食慾を滿たす千載一遇を取失ふことでもあるのだ。洮昂鐵道局に假寓してゐる×鐵鐵道部の工作課出張所が焦るのは當然である。

「××し」が開始されることになつた。

夕暮一塊だつた雲が空の中央で暗い森の樣にひろがつた。夜の八時、埃が濃霧みたいに平原を掩つた。それは空氣の濁流の樣になだれを打ち、奔流になつて流れ、渦をまいて風に衝突して行つた。その底の方で一聯の列車が地面低く這つて昆蟲の死骸の樣に停止してゐた。突然裝甲車の機關銃口が外へ角度を動かした。

「やけに吹きやがるなあ」

壁にかけてある銃を外す音がした。裝甲車の重い扉が開かれた樣にあき、また重量につれて戻つて行つて突當つた。そこには武裝した二人の警務部員が物臭く銃身をつかんでほうり出された樣に立つてゐた。

「三號の奴等は皆外へ出ろ！」

風の中では、人間の聲の小さい音波は吹きとばされて一匹づつの蚊か何かの樣にばら〱に散つた。三人は更に聲をはげました。

「外の宿營車は皆扉を閉めるんだぞ。今日から扉をあけといて寢るこたあ絶對ならん！」

三人は革の長靴で歩き出した。足音が近づくに從つて貨車の扉が内に吸はれる樣にボーンボーンと閉つて行く。それは田螺が防禦のために盖をするやうなものであつた。

「三號の奴等！　出ろ！」

一人がどなつてゐる間に二人は銃をたてかけておいて一つ〳〵の宿營車の扉に外から錠を下げて行つた。三號の「油を搾る」時外の奴等に飛出されないための用心である。

「貴樣等あ監督を甘く見やがつて勝手な眞似ばかりしやがつたが。今日はどうするか見て居れ！」

さま〴〵な服裝で降りて來た支那人に向つて今一度どなつた。監督より少し體格のよい彼等の顔は警務部員等のちやうど額の上にある。三人はどなりながら、心の中でもう鉋屑の樣にくる〳〵卷いてしまつた何かを感じた。厭な役目だなといふ氣持が言合せた樣に三人を苦々しくしてゐた。

「先づ手前え達にきくが、この頃雜品を鼠の樣にチョイ〳〵引張り込む奴はどいつだ」

この男は以前に旅順監獄で看守をやつたことがあるので楊子、齒磨、石鹸などを引つくるめて「雜品」といふ監獄語をつい使つて言つた。いつの間にか彼は囚人の前に立つてゐた時の心持を甦らせてゐた。

他の二人はこの男が照れもしないで豫定通りの事を言つてゐるのが何だか滑稽になつた。そして「鼠の樣に」とはこの場合何てまづい比喩だらうと考へた。

「鼠の樣に引張り込む？　フンそりやあ、大人、鼠が引込むんだもの、鼠の樣に引張り込むのはあたりまへでせう。私だつてほら、こゝの入齒をこないだの晩拔いといてとられつちまつたんですよ。盜まれたのは貴方がたばかりぢやありませんぜ。」

成る程さういへば、さう言ふこの老人の澁色の入齒がなくなつてゐる。醜い齒莖が唇の裏に時々堤防の樣に見えかくれした。彈力のない唇は獨立性を失つて、これだけ喋る間にも折々中の方へ折れ込まうとした。

警務部員は内側へ頻に彎曲して來る自分の氣持を押しかへした。

「何言つてやがる。支那人が泥棒だつていふこたあ天下の事實だ。俺や未だ泥棒しねえ支那人を見た事あねえ。この老いぼれめ。こつち出て來い。」

探照燈の眩しい青の光線が、彼等の全身に染料の樣に注ぎかゝる。たてかけてある銃を、ある氣持をもつておいつと見つめてゐた若い工夫があつた。どなつてゐる途中でフッと警務部員はそれに氣がついた。彼にはそれがあまりに重大な發見だつたので反射的にスッと視線をそらした。

「あつ、こいつだな。逃亡犯人は」
彼は何故ともなくさう思つた。外らした視線に通じる神經の底の方で、銃身に蛇の樣に卷きついてゐる、その男の白熱光の樣な強い視線をはつきり感じることが出來た。今にもその視線がクレーンの樣に銃をまき上げてしまひさうだ。
彼はある頂點にゐる瞬間を感じた。
次の瞬間彼は突嗟に×をとり上げた。そして××をその工夫のゐる方へ向けた。
（一行削除）
それは過失であつたか故意であつたか彼自身にもわからない。彼はたゞ埃の渦いてゐる地面に動いてゐる肉體を見た。それが幻影の樣でもあつた。
「なんだ！　なんだ！」
數字のついてゐる扉から出て來た監督達の手には黑い××××があつた。彼にはしかし遠い彼方の人影の樣にも思はれた。
こゝはどこだ。蒙古か。そして俺は。彼ははじめて、その男を×つ必要が自分自身の內部には何んにもなかつた事に氣がついた。自分の存在が砂の樣に崩れた。そして鐵骨の樣に心に殘つたものを明に見た。あゝそれは自分自身の意志ではない。それは誰かの――たしかにそれは自分を雇つてゐる×鐵道株式會社の全苦力に對する意志である。彼は自分に對する恐しい野獸の樣なものを感じた。彼はひよろひよろと歩き出した。後で罵つてゐる支那語をきゝながら。
×××た男は×に××××てうめいてゐた。
警務部員等はもう命令されたことをこれ以上履行する勇氣を失つて、白い顏をして事務車の方へ歩き出した。
「あつはつはつは。やつたね。江之島のやつ、あれでなかなか思ひ切つたところもあるんだねえ。時にやあいゝよ。」
警務部員等は技師のぼやけた笑顏のうしろにそれとなく、この方角へ歩いて來た江之島の姿をおづおづ探した。
三號車の一應の搜索のために工夫達は列車の一番尻につながつてゐる物置車へ移されることになつた。
扉をひらくとばらばらと鼠が逃げる。輸送して來たまゝの機械類が荷造箱でかこはれたまゝ何個も積重ねてあつて眞暗だ。
風はますます吹きつのつてゐる。すぐ傍に鼻を突き出してゐるクレーンでワイヤロープが切れさうに揺れて、先にぶら下つてゐる爪は錘の樣に重々しく空氣をまぜた。
二十八人の工夫は狹い入口から押し込まれた。もう外で錠が下りたらしい。
「……ひでえことをするんだなあ。とんだ所へたぶらかされてやつて來たものさ」

「あいつがまづかつたんだよ。あいつはこないだつから××が二挺苦力側にありさへすりやあこんな工事場はいつでも引くりかへして見せるつて俺に始終言つてゐたんだ。俺や氣がつかなかつたが、さつき、鐵砲があつたのであいつがきつと變なそぶりをしたんだらう。それを氣取られたんだよ」

「ねえ、ねえ」

とそれらの聲を制して若い聲が隅の方から起つた。

「××××てものはこんな時に起すもんぢやないかしらん」

それはたつた今誰の頭にもあつた考であつた。彼等の中には十人に一人位しか文字の讀める者はなかつたが、人に雇はれて働く者の本能で、今年の一月から各所に起つた××××騒ぎのことは聞き知つてゐた。

話は自然にそちらへ動いて行つた。

「ちやうど今はいゝ時機なんだ。」

と說明したのは張だつた。

彼はそれから×鐵道株式會社と××××との契約をかいつまんでわかる樣に話してきかせた。

「俺達を皆首にして追返してゐた日にやあ、新しい苦力を募集して連れて來るまでに一と月位すぐたつちまふよ。それに仕事にや慣れてゐないしさ」

「此頃の技手達の焦りかたで皆はそのことはうすうす知つてゐた。それから話はもう既に×××××が始まり、四百人が四百人とも皆煽動に乘り、監督達が皆降參してしまつたかの樣にせり上つて行つた。

「口で言つて見りあ簡單な樣だがね、實際にやつてみるとなか〳〵さう巧く行かないんだ。だから、決して監督に氣附かれちや駄目だよ。それから仲間を一人でも多くふやすこと。この二つを當分守らなけりやあ、却つてひどい目に會ふぞ」

張は却つて皆の氣持を押へつけるためにこんな事を言はなければならなかつた。そして張の言つた事は間違ひなかつた。四百人はおろかこの二十八人の中にさへ、あの消極的で我慢強い、生活慾の弱い、貝殼の螺の形に適應して生きる貝の身の樣な支那苦力の一面の性格をそなへた人間が幾人か存在したのだ。

暗い中で、ある者は喋つてゐる男が誰であるか全く見當がつかない。そして言つてゐる言葉の意味もわからない。いや、そんな事をきくのが煩いのだ。睡い。さういふ男達は體に脂が出て來る足を布靴から脫いで箱に腰かけたまゝ人によりかゝつて眠り出した。過去のことは忘れた。先のことはわからない。たゞ現在が紐の樣にふん伸びて行きさへすればそれでいゝのだ。彼等はさういふ要求しか持つてゐなかつた。そして曖昧な顏の一端に涎を流しながら、腰かけてゐる箱を誰かに交代してやることも考へずたゞ眠つた。

夜が更けて來ると足もとでキイ〳〵鼠がないた。夜があけ切らないうちに扉があいた。

「さあ、出ろ！　野郎共！　少しは懲りたか。」

若い工夫たちは昨夜中に出來た一つの塊を腹の中へ持つてそれぞれの仕事へ蠅の様に散つて行つた。

三　粁　前進――

空が一面に曇つて平原の色が變つた。急に濕度が高くなつた空氣をとほして日本人の高聲がドラの様に濁る。工夫達は天幕を疊み待避線の軌條と枕木とを掘りかへした。

南京米の麻袋が座布團の様に輕々と投げとばされる。地面には鼠があけた穴からこぼれた細い南京米が砂の様に散亂した。

苦力達は重い石油罐をかついでクレーンの下へ集つて來て散つて行つた。

敷設車はもう石炭をたいて競技前の競馬馬の様に出發をあせつた。炊事車の窓から石炭殻が灰神樂を立てゝなだれ落ちる。と同時に捨てゝある野菜の皮や茶殻から蜂程もある蒙古蠅がグワンと舞上る。彼等は洮南からこの列車について繁殖しながらこゝまでやつて來たのだ。野積の枕木を動かす毎に灰色の瓜の様な鼠が走り出す。

冷藏庫、日本人達の行李、米の叺、金庫、食卓それらは一つづつクレーンにくわへられて空中に吊上り、角砂糖の様に材料車の上に落ちて積重つた。やがて宿營車が材料車のうしろへ連結された。

いよ〱出發だ。暫くの停車で錆びた軌道の上を宿營車が動き出した。工夫達は材料の上や宿營車の戸口で、へだたつて行く宿營地點を見送つた。

また三粁奥へ入るのだ。悔いても〱悔いつくせない悔恨が詰つてゐる頭を、彼等は速力がまき起す風にさらした。もう洮南からは大分遠くなつてしまつた。女も、酒も、休息も飽食もない埃の蒙古。一と抱へもある大きな太陽とたつた一色で塗り潰された平原とには、もう飽き〱した。だが、といつて、こゝまで來てはどうすることも出來ない。勞働、勞働、勞働、それがもう十ヶ月も監督の壁の様にこの先へ續かうといふのだ。

×傷の苦い工夫は貨車の棚の上で手まりの様にはね上つた。彼は列車が先へ進んでゐるのか後へ戻つてゐるのか少しも見當がつかなかつた。そして自分が何のためにどこへ行きつゝあるのかもわからなかつた。たゞ眞暗な板の上で時々動揺につれて彈ね上つた。

目的地點で汽車が止つた。それは昨日の現場である。出發の時と反對の作業が小人數で行はれた。天幕が骨格をひろげる。

敷設車は宿營車から切離れて自分の軌道をつくりながら一分間に一米づつ進む。百貫も積重つた背中の軌條が一本づつ二十秒おきに左側の轉送機に辷り込んで滑らかに動いて行く、右側の轉送機ではロールが冷靜に廻つて枕木が駈つて行つた。ドツドツドツドツと折々横へ唾を吐いた。ボールト掛りは軌條の繼ぎ目で背をかゞめてボールトを、引つ掛けたスナパーで締めて行くのである。それは、樂に出來得るだけの能力でやつておけばいゝといふわけには行かなかつた。眠

が痛む。目が霞む。掌のマメが擦れる。一分間に十米進む先頭の敷設車との間が少し長くなつたと思ふとすぐ現場監督が近づいて來る。後から犬釘打ちが迫つて來る。しかし犬釘打も後の曲線直しに迫ひつゝけられた。そしてまたその曲線直しも水準作業に迫ひつゝけられた。最後の仕上げをやつて行く水準作業は後で迫ふものがないにも拘らず曲線直しとの間に伸びる距離をちゞめるために焦つた。それらは、皆、そこに働く當事者以外の者の磁力によつて動かされた。彼等は大きな磁石の下に吸ひよせられた鐵粉の様なものであつた。個々の鐵粉達の動きは即ち一つの磁石の動きだつたのである。

頭が妙に熱い。遠い地平線が眞中を軸として上下に緩く揺れる。その度に見渡す限りひろがつてゐるボール紙の様な地面が西へ向けてさつと傾斜する。――最初にこの錯覺に捕はれたのは敷設車を押してゐる機關車の機關助手だつた。彼はあまりの苦さに帽子を脱いで石炭の上へ投げた。熱いボイラーの傍にゐると何だか吐き氣を催ほして來る。仕方なしに横から顔を出して押されて行く敷設車の作業を見てゐた。が、何ともどかしく感じられることだらう。いやになつてしまつた。まるでみゝずみたいに土をなめて行く様な繼續だ。彼は腹の中でそんな罵倒の言葉を考へた。

そのうちにひろい平原が波の様に躍り出した。堪らなくなつて石炭の上へ顔を伏せてしまつた。

「おい／＼、どうしたい。おい」

「あゝゝ、苦しい。苦しい。」

彼はやつとさう言つた。

同様なことが後の曲線直しの中の一人にも起つた。

その男はたら／＼汗を流して、鐵のバールを線路から一尺も離れた砂利の上に、弓弦の様なのろまな曲線を描いて投げおろしたり持ち上げたりしてゐた。

「ヤーンチョイ」といふ掛聲をかけてゐた監督が變だと思つて傍へ寄ると彼は熱くさい臭氣を發して苦しさうにもたれかゝつた。

「鼠咬症といふやつかも知れないな」

明に、未ださういふ病狀の患者を手にかけた事がないらしい口調で、囑託醫山田は彼等を診てから言つた。そして事務車の戸棚から持つて來たヨード丁幾を五六日前に鼠に咬まれたのだといふ小さい傷痕に塗りつけた。傷痕にはもう赤茶色の皮が出來てゐた。しかし、彼等の熱は昇るばかりであつた。翌日になると、あちらの宿營車からこちらの宿營車からも同じ病人の訴へが出た。その中には鼠に咬まれたことのない者もまぢつてゐた。

「變だなあ。ワイルス氏病の症狀に似てゐる様でもあるが……」鼠がワイルス氏病を運ぶといふことは彼も勿論知つてゐたが、ワイルス氏病は秋でなければ發病しない病氣の様に彼は醫學校で習つてゐた。

その翌日になると病人が頭の上へ枕代りに押込んでゐた牛天や褲子が薄黄色に染まつて來た。それは、こゝの暗さに慣れた者の目にしか見えなかつた。

山田は暗い宿營車の入口で臭氣を我慢しながら幾度か病人の顏を覗き込んだ。その顏は黄色に變つて來てゐる樣でもあり、少しも變つてゐない樣でもあつた。が、何しろ日焦で油紙の樣になつてゐるので判別しがたかつた。

「たしかにワイルス氏病だ」

四日目にやつと彼は、血清の藥品がこの列車に用意してないことと、炊事車の窓に金網が張つてないことゝを同時に思ひながら病名を斷定した。その時にはもう三十人の同じ病人が洮南へ汽車をかへすことを懇願しながらのたうち廻つてゐた。

「我不去……」

病人たちは熱にうかされて時々うわ言を言つた。「俺は行かん！」といふ意味であつた。

「離道兒有多少里地」

それは「此處から幾里あるんだい」といふ意味である。

「好！　好！　行かんでもいゝよ。そんな里程の事なんぞ心配するな。もう直きに洮南へかへるんだよ」

健康な工夫が棚から下を覗き込んで慰めたが、さう言ふ自分自身が怒ぐんだ。

翌日になるとその慰めた人間も同じ病氣にかゝつてうわ言を言つた。病人はアスピリンと水ばかり呑まされて唇がかさ〳〵に白く乾いた。

毎日曇つて依然として風が吹いた。一時來なくなつた匪の襲撃が急に激しくなつて來た。

勝に乘じた歩兵の樣に、生物の臭氣を目當てに馳けよつて來た。健康な工夫達が宿營車にゐる間は投げつけられる鐵片や石炭の塊に脅えて物の下にかくれた。が、靜かな時がやつて來ると扉口や通風孔から誰にもはゞからずどん〳〵侵入した。そしてねてゐる病人の顏の上や脫いだシャツの上に馳け寄つて食物を求めた。

遂に二人の死人が出た朝病人は百九十人に達した。出發の敷設車の上には工夫の姿がまばらになつた。しかし、列車は鬚の樣に散る黑煙を吐いて威丈高に出發した。それは充ちあふれる戰鬪意志をもつた戰鬪艦の姿に見えた。

風の方向が變つた。一丁程離れた地點で石油を掛けて二個の死體をやいてゐた煙がすばやく地面を這つた。それが綿みたいにきれ〳〵に宿營車の横腹へ吹きつけた。千里の平原を吹いて來た風は測り知れない巾と丈とを持つて未だ千里や二千里は吹きとばし得る樣な押力を持つてゐた。空を吹き拂つて除け、大地を紙みたいに吹きめくる意志を持つてゐるかの樣に天と地との間に充滿して空氣を運び去つた。

(二行削除)

洮南へ引返したい」。といふ氣持が、恐しい勢で繁殖しつゝあつた。それと一緒に、苦力達の間だけの祕密のつながりが、どの宿營車にも種痘の樣に移殖され終つた。

いよ〳〵、×××が來たと彼等は思つた。

ある朝、彼等は、約束にしたがつて、ジヤツキや敷設機の部分品の鐵輪が轉つてゐる物置車の後へ集つて行つた。

「おい〳〵、何してゐるんだ。貴樣裏切るのか！」

一人の工夫が、バケツへ石炭を盛つて通り過ぎやうとする炊事の苦力に聲をかけた。

「何？」

と呼ばれた苦力はのろくさい目でその男を見た。

「貴樣とぼけてゐるのか？　今日から一せいに仕事をやらんことにきのふきめたぢやないか」

「仕事をやらん事に？そんな事あきかんよ」

彼はバケツを下げて行つてしまつた。

「可笑しいなあ。打合はせが通じてゐない筈はないんだが……」

すると向うから、右肩へ襤褸片をのせて、枕木をかつぐ身支度をした一とかたまりがやつて來る。彼は走り出さうとして石炭貯場の傍にあつたシヤベルに躓いた。

「待ち給へ……」

彼は辛うじて言つた。

「君達にやゆうべの打合せが通じて居なかつたかね。」

「打合はせつて何だい」

「へえ！　ぢや通じてゐないんだね。けふからいよ〳〵、病人を洮南へ歸して治療すること、俺達の仕事に時間の制限をつけることを要求して一齊に××××まうつていふんだよ。ちつ、しやうがないなあ」

物置車の後にはセメン樽へ腰かけたり鐵板の上へ昇つたりした十人ばかりの苦力が風に顏をそむけながら、伐り殘された立木の樣に背をかゞめて立つてゐた。

「これつきりか！」

そこへ走つて來た男の問には誰も答へず、彼等はいかにも、さうして立つてゐることが自分の意志でないらしい物臭い顏を、汚い首の上で靜に廻轉して來た。そして霧の樣な光のない視線を漠然と投げかけた。

男は何か考へついてまた走り去つた。

その時物置車の向うで汽笛が鳴つた。短く切斷されてゐる列車は生命を吹きかへした樣に、頭の上から煙を放散し、胸腹から蒸氣を勢よく噴き出した。技師が走つて來た。

「こらつ、誰にだまされてこんなことを始めやがつたんだ。言ひたいことがあつたら一人前の事をやつておいてから言つたらいゝぢやないか。さあ、早く來い。我儘だ」技手は狼狽をかくさずなだめる樣につけ加へた。

「大人しく言ひさへすりや大抵の事はきいてやるよ」工夫達はその顏

に吊り上げられて腰で割れてゐる椅子を揺りながらぞろ〱歩き出した。三人ばかりの男が宿營車の方から走つて來た時にはもう工夫は一人もゐなかつた。

計畫は皆失敗した。夜は宿營車に外から錠が下りて出られないので、彼等は相談の場所をいつも逆行して來る列車の上にきめてゐた。其處で集合場所などを打合はせる筈になつてゐた日にかぎつて、技手が二人も乘合はせてしまつたことが聯絡の斷たれた原因であつた。それに、××××がこの場合どういふ意義をもつのかも大部分の人間にわかつてゐなかつた。それは先に立つた數人だけの獨り合點に終つてゐたのであつた。しかし能率の低下で焦り切つてゐる彼等は、この小さい出來事に對して何の制裁も加へるわけに行かなかつた。たゞ、張のうしろに一人の警務部員がいつも尾きそふことになつた。

「これで手心がわかつたさ。今度はうまくやつて見せるよ」

計劃に始めから加はつてゐた工夫達はたゞ一言さう言合つた。間もなく後の建築列車がいくらかの藥品を積んで來た。病人たちは何に利くのかわからない散藥や水藥をとにかく吞まされ、數日間は氣のせいか、體が多少樂になつた樣に思つた。

「×××みたいな奴等なんだもの、あゝしてほつときやすぐ治つちやふよ」技師は仕事の能率のことばかり頭にあるので、病人を後部へ送りかへすことにはあくまで反對だつた。

四日の後、宿營車は見渡す限りの草原の中まで進んで行つた。麥に似た去年の雜草が枯れて倒れてゐる平原の眞中で、苦力達が、新しく×××少年の××に石油をかけて火をつけた。その火が枯草に移つて三日三晩燃えつゞけた。

誰の所有でもない平原の火は風の誘ふ方向に向つて、晝は白い煙になつて吹きなびき、夜は赤く空の埃にうつつた。いつ風向が變るともわからないので、宿營車のまわりだけの草刈りが行はれた。

いつの間にか苦力達に對する不安が去ると待遇はもと通りに戻つてゐた。或る日、地面に草があるから冷えないだらうといふ理由で、始めから寢てゐた病人達だけは、石炭の俵を敷いた天幕へ移すことになつた。

苦力の間には決定的に戰ふだけの勇氣も持てず、といつていろ〱な不滿のやり場がない。さういふ幾日かが過ぎた。技師はその間に探照燈を作りかへたり、吊りランプを提げる樣に工夫したりして、夜業を始める計劃をはじめた。

ワイルス氏病はもう蔓延の時期は過ぎてゐた。かゝつた人間だけが、ぼつぼつ死んで行つた。

そのうちに雨が降りはじめた。永い雨もよひの後に來た雨だけに、四日降りつゞいても未だやまうとはしない。

雨が降り出すと長い地平線が消えて空の端は平原の果に垂れ落ちて來た樣に見えた。土の色が變り、埃をかむつてゐた貨物車は黑い艶を

現して、雫を垂らしながらぬれた線路の上に停止してゐた。
ある日の晝過ぎ、行く手の雨の中から夥しい牛車の列がさしかゝつて來た。

恐しく髯の濃い蒙古人が銃を背負つて先頭に丈の低い蒙古馬を走らせて來た。それが一隊の指揮者でゝもあるらしかつた。そのうしろから不格好な俵を積んだ木製の輪の車が、一頭づつの牛をつないで悠然と並んで來た。それは泰來氣から模古氣を經て東支鐵道に積込まれハルピンに送られる大豆と高粱であつた。

支那人達はこんな平原の中で初めて出會つた人間と毎日同じ場所で會ふ貨物車の樣に素つ氣なく別れる事が何だか悲しい樣な氣がした。

「お前達はどこへ行くんだい」

人懷しい目つきでそんな事をきいた。

すると先頭に立つてゐた男が手眞似まぢりに、あちらから洪水が來るので後戻りして東屏鎭を迂廻するのだと答へた。

「洪水が來る」といふ言葉が傳はると、皆の注意は一時に牛車の列から剝げてとれた。めつたに雨が降らない代りに、蒙古の雨は降り出すと必ず洪水を伴ふものだといふ事は、かねぐ〵誰でもきいてゐた。彼等は今それが單なる言ひ傳へでなく、ほんとうにあることだつた事を知つたのである。今になつてみると鼠の夥しい襲來も首肯された。

「嫩江の氾濫かな」

技手が電話柱へ昇つて行つて片手で望遠鏡を目にあてた。が、レンズの中には、雨足の堆積で出來上つたもやの樣な雲しか見えなかつた。よく見てゐるとそれが光つた水の樣にも見えた。

「速刻東南へ引返して水害を避けること。其處で病人を全部×鐵道株式會社病院へ入れること」

こんどは、全部の苦力の熱烈な支持を得た單純な要求が、三十過ぎの賢といふ大人しい工夫に代表されて、その夜、口頭で事務車に提出された。

苦力達は明日の荷積の用意をするでもなく宿營車の中で履く布靴をはいたまゝ抜き捨てゝあるペンキ塗りの木標の上に上つてゐた。そこで事務車から出て來る賢を待つてゐた。三度電話のベルが鳴つた。

日本人達も洮南へ引返したいといふ氣持だけは工夫達に劣らず持つてゐた。たゞ、工夫達が、壓迫して來るものにあくまで力で對して要求を通さうとしてゐるのとちがつて彼等は、上役達の同情や理解で自分達の要求をとほさうと考へた。

彼等は鐵道局へ電話をかけた。鐵道局では洪水なんぞある筈はないと言つた。そして、昂々溪とハルピンの氣象台へ電報を打つて天氣を問ひ合はせた。

暫くすると鐵道局の方から敷設の進行狀態について電話をかけて來た。技師はそれを言はれることを何よりも苦痛に思ひながら實際の粁の數字よりも三粁多い數字を電話口で言つた。その度はつい小くつて

不鮮明だつたかも知れなかつた。

「え？「え？」と相手は幾度かきゝかへした後「馬鹿々々しい話だー」と嘲つた。

「君達やあ一體、この國家的な仕事を一私人の人情や情實で棒に振らうつていふのかね。洪水が何だね。苦力が何だね。契約期間内に完成するかしないかといふ×鐵道株式會社の肩にかゝつてゐる重大な問題の前に、一體、そんなことがどれだけの價値を持つてゐるといふんだい！」

技師はさういふ言葉を感覺する右の耳が熱くなつた。電話はそのあとで「もし洪水が出るとすれば、材料や既設線の損害を少くする用心をする樣に」と命令した。電話器の奥の奥の方に古めかしい尻上りの入字髯をぼんやり描きながら彼は決然と電話を切つた。彼は叱責されて勇氣づいた。

「君達の要求のお答は今後五日の間にすることにしよう。だがね、ま、いゝや……」

と妙な聲をうしろへつけて言つた。

彼はその三日の間に、××××に對する用意をするつもりであつた。何といつても、先日の經驗で彼は苦力達の團結力を甘く見てゐたのである。彼は技師の表面の返答の外に、彼が少しも工夫達の要求を容れる意志を持つてゐないことを見てとつて扉の外へ出た。

苦力達に要求された方法はたつた一つであつた。その方法は、もはや、公式的な「×××××」である筈はなかつた。彼等は×××××現場で臨時に不意打を食はせて自分達だけで列車を引返す方法を考へはじめた。翌日も雨が降つた。その次の日のことであつた。

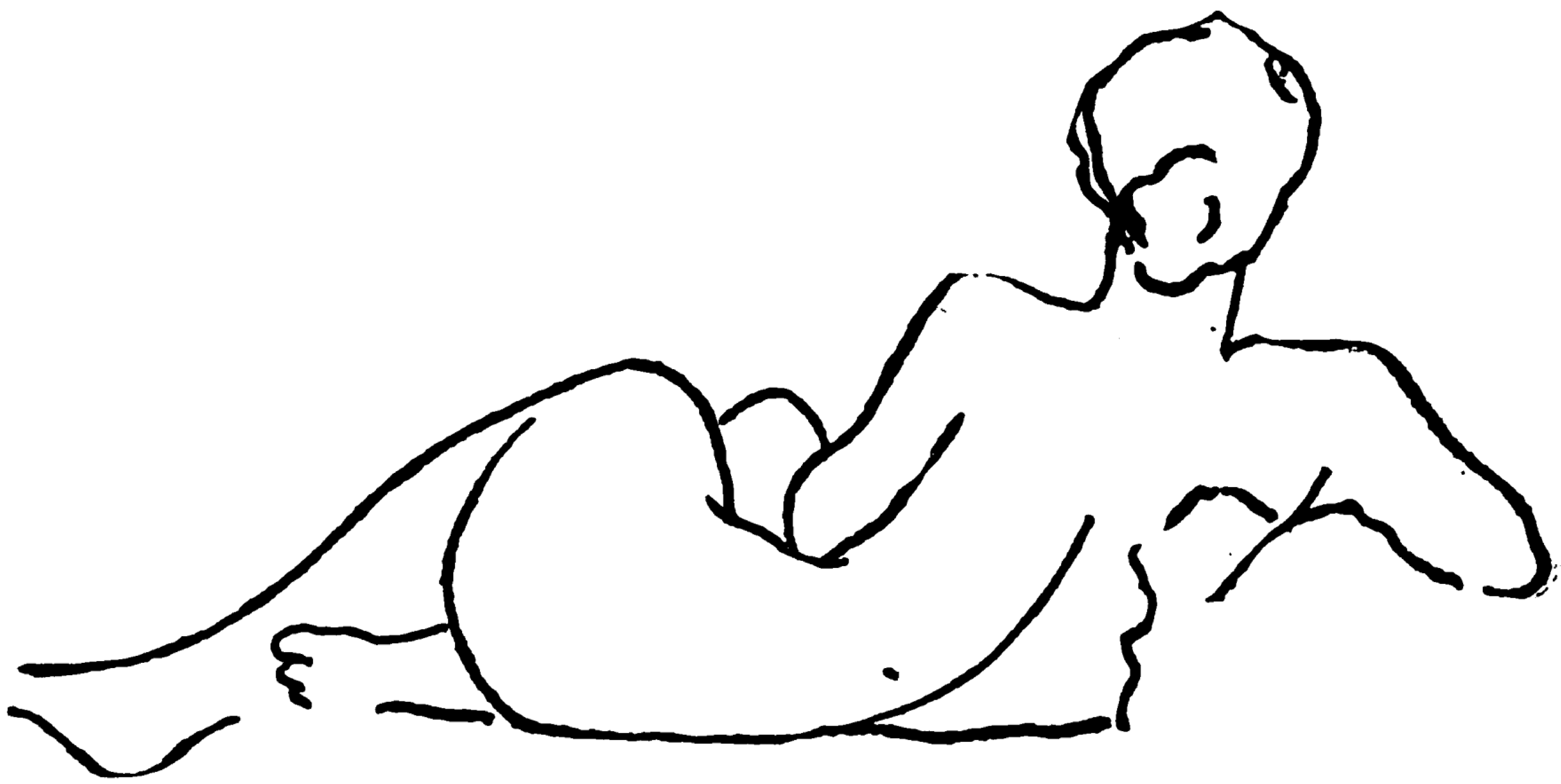
事務車に殘つた四人の日本人と寢臺車の病人達とは意外な時刻に列車が戻つて來る響を足下の軌道に感觸した。やがて霧の中から現れた列車は後に連結されてゐる筈の敷設車を牽いてゐなかつた。機關車は身輕くなつたので軌道を蹴る樣にはね上つた。氣の立つた工夫達が、前方の材料車の上に立ちはだかつて口々に何か喚いてゐた。それが風の抑揚に從つて海鳴りの樣に遠くなつたり近くなつたりした。日本人達は軌道の上へ駈け出しこの異樣な列車へ望遠鏡を向けていそいでレンズを廻した。いくら廻して見てもその列車の上には一人の日本人も見當らなかつた。

日本人が杭の樣に立つてゐる目の前の待避線に機關車が熱い風を撒き散して轟然と辷り込んで來た。すると手にバールを握つた工夫達が停車し切らないうちに飛び降りた。

後から降りた三人の工夫が、今朝出發の時に警務部員が既に置いてゐた××××××××、××重さうに提げてゐるのを見た時、日本人ははじめて事の成り行きを知つた。折惡しく裝甲車の當直員は風邪で寢臺車に寢て居り、裝甲車の扉は閉つてゐてあかなかつた。

昨日まで無氣力で大人しかつた支那人達の顔色の上には、俄か險しい變化がやつて來た樣にしか日本人には見えなかつた。忽ち警戒眼が

切られて觸角の樣にブラ下つた。新しい×××は走つて行つて監督
達の宿營車の前に銃をかついで立つた。その中にはロープで縛られて
（二行削除）
　宿營車が前進する日の朝の樣に支那人達は天幕をたゝみ、積んであ
つた穀物を材料車の上に投げ込んだ。
　石炭をシャベルで掻込む者、列車の車輪を覗いて檢車する者、機關
車へ給水車を挽いて行つて給水する者、彼等はいつもと同じに忙しく
働いた。いつもそこいらをぶら〳〵歩いてゐる長靴を穿いた監督のゐ
ない事だけがいつもと違つてゐた。彼等は一つの仕事がすむと喚聲を
あげた。
　炊事車からは豚を圍りのまゝ燒く煙があがつた。事務車へ乘り込ん
だ工夫は老牌や金口などを窓から働いてゐる工夫達の方へ兩手でつか
んで投げた。それでまた喚聲が上つた。あつちでもこつちでもマッチ
を擂つた。彼等はマッチを一個づつ受けとつて用もないのにシュッと
擂つて投げた。
　そこへ大きな金庫を戸口から五人がかりで轉して來た。
「何だい。そりや」
「こりや金庫さ」
　金庫は後から蹴られても前から蹴られてもビクともしなかつた。
「一體何が入つてゐるんだね」
「金や書類なんかを盗まれたり燒いたりしない樣に入れとくんだよ」
「ふうん、便利なもんだな」
　また蹴つて見たが鋼鐵で武裝してゐる金庫はビクともしなかつた。
却つて足の方が痛くなつた。
　やがて、再び機關車から煙があがつて、激しい呼吸が始つた。そして、
汽笛も鳴らさずに動き出した。病人をのせた幾つもの宿營車が次々に
運動を後へ傳へて行つた。汽車は現場と反對の洮南へ向いて出發した。
機關車の前には日本人が建設した直線では最長であると誇つた直線
の線路が洮南の方向を指して遠い一點に凝集してゐた。
　後では、彼等には少しも用事のない、やたらに重かつた金庫が賽こ
ろの樣に小さくなり、便所の屋根が低くなり、野積の枕木と航條とが
枯草で出來た地平線と合した。ロールで送られて來る樣に、次から次
から新しい地面が地平線を軸にして流出して來た。
「天亮了！　天亮了！」
　彼等は「夜があけた！」といふ歌をうたひ出した。
　汽車は夕暮に向つて走り、闇に向つて走り、曉に向つて走り、ま
た、光線の中を走つて通り拔けた。彼等は病人の世話や炊事や運搬の
仕事を分擔して役員をつくり不完全ながら委員會も成立させた。
　五日目の朝、事務車の抽出しで誰かゞ信號に使つた赤木綿の小旗を
發見した。それが煙突の前の照明器の上に、誰かの手によつて結びつ
けられた。



# 卍（まんじ）

谷崎潤一郎

## その二十八

そんで夫は、そんな書き付け手に觸れるのも汚らはしい思ひましてんけど、何んせ相手が非常識な人間のことやさかい、此の男にこんなもん持たしといたら何するか分らん、此れはどないぞして取つてしもた方がええ思て、「お話はよう分りました、あんたの仰つしやる通りやとしたら、頼まれいでも夫たるもんの責任として放つとけしません。けど僕としても、あんたとは今日始めてお目にかかつたばつかりやし、疑がふ云ふ譯ではないが、一應家内の云ふことも聞いてみんことには片手落ちになる。就いては此の書き付け暫く貸しといて貰へませんか。此れ眼の前へ突き付けてやつたら、身に覺えのあることならきつと白状しますやろけど、さうでもなかつたら中中剛情な奴ですさかい」云ひましたら、貸すとも貸さんとも云はんといて、急に大事さうにそれ膝の上に置いて、「しかしあんたは、もし園子さんが白状しなさつたらどう云ふ處置お取りになるのんです」云ひますのんで、「どう云ふ處置取ろと、そらその時の都合次第やさかい今から明言する譯に行かん。僕はあんたに頼まれたから家内を詰問するのんやない。僕はあんたの利益の

ために動くのんやなうて、僕自身の面目、自分の家庭の幸福のために動くのんや云ふことを承知して下さい」云うたところが、何んや嫌アな顔して、「僕かて何んにも、自分のために働いて欲しい云ふのんやあれしませんが、今度の事は、あんたの利害と僕の利害とが偶然一致してる思たのんで、伺うたのんです。あんたかてそれは認めなさるやろ」云ひますよつて、「そんなこと僕は考へる餘裕もなし、又考へたうもありません。失禮ながら、僕はあんたとぐるになつてそんな事件の中へ捲き込まれたうないのんです。僕は自分の自由意志で自分の妻を處分するだけです」云うてやつた。すると「ああ、さうですか、そんなら仕方ありませんが」云うて、又ニヤニヤと薄氣味わるい笑ひ方して、「ほんま云うたら、僕かてあんたには縁もゆかりもないのんですから、こんなこと頼みに來られる義理やないのんですけど、そいでも僕、もし園子さんが光子と一緒に逃げるやうなことあつたら、困るのんは自分ばかりやない、それ知つてながら默つてたらあんたに對しても不親切や思て來たのんですが」云ひながら、ヂロヂロ人の顔のぞき込んで、「そないなつたら、あんたかて嫌でも應でも事件の中へ捲き込まれてしまひますで」云ひますのんで、「いや、御好意は分りました。御親切に對しては感謝します」云うてやりますと、「ただ感謝する云はれただけでは困るのんです。一體あんたは、まさか園子さんに逃げられるやうなへマな事しなさらんやろ思ひますが、そいでも萬一逃げられた場合にはどないなさいますか、逃げたもんには未練ない云うてアキラメておしまひになりますか、それとも何處迄でも追ひかけて行つて取り戻そ云ふお積りですか、そこのとこをハッキリきめといて下さい」云ひますよつて、「僕は自分の行動に就いて、その時になつて見んと分らんこと今から他人に約束したり、それに制肘しられたりするのんイヤなんです。まして夫婦のあひだのことは飽くまで夫婦のあひだだけで解決つけます」云ひましたら、「しかしあんたは、どんな事あつてもよもや園子さんを離縁なさるやうなことありますまいな」云ふのんですて。その云ひ方が變に厚かましいて、しつこうにねちねち絡み着いて來ますのんで、自分の妻を離縁しようとしまいと、餘計なお世話やないか、何もあんたがそんな心配する必要ありますまい云うてやりましたら、「いや、そいでもあんたは園子さんの實家に恩義ある筈や」とか、「ちよつとやそつとの不都合があつたから云うて、園子さんを追ひ出したら義理が濟まんやろ」とか、多分光子さんから聞いたのんですやろが、そんな内輪の事情までちやんと知つてて、「あんたも立派な紳士やよつて、まさかそんな不徳義なことしなされへんやろ思ひます」云うたりするのんで、夫もしまひには腹に据ゑかねて、「あんたは一體何しに來たのんや。何んのためにそんな關係もないことといつ迄もべちやべちや

しやべつてるのんや。あんたに注意して貰はんかて僕は僕で紳士の道守りますけど、それがあんたの利害と一致するかどうかは保証する譯に行けしませんから、どうぞその積りでゐて下さい」云うたら、「ふん、さうですか、そんなら折角ですが此の書き付けお貸しすること出來ません」云うて、膝の上に置いてあつたのんを丁寧に封筒い入れて、内ぼところい收ふのんやさうです。夫はそれが欲しかつたことは欲しかつたけど、そんな行きがかりになつてしもたらもうしやうがない、却つて弱味見せたらあかん思て、「ええ、ええ、僕も斷つて拜借しようとは思ひませんから、御自由にお持ち歸り下さい。但し一言お斷りしておきますが、あんたがそれを、僕の手を經て僕の家内に示すことを拒まれる以上は、家内が事實を否定した場合に、僕としてもその書き付けに信を置くこと出來んかも知れない。僕は當然、初對面のあんたより家内の方を信じますから」云うてやつた。そしたら獨りごとのやうに、「とかく夫が細君に甘いのが間違ひの起る原やのんですな」云うて、「なあに、此の書きつけと同じもんが園子さんのとこいも行つてますよつて、何處ぞ搜しなさつたらきつと出て來ますで。尤もそんなことしなさらんかて、、、、、、、ところ出さして見なさつたら、今でも、、、ある筈です。それが何よりの証據やありませんか。」――と、そないな憎まれ口云うて、「お忙しいとこえらいお邪魔しました」と、わざと落ち着いて挨拶して出て行きますのんで、それを廊下まで送つて行つて、呆れた奴や思ひながら部屋に戻つてほつとしてますと、ものの五分ぐらゐした時分、又コツコツとドーアをノックして、「やあ、唯今は失禮しましたが、ちよつと、あのう、もう一遍お邪魔さして貰ひます」云うて、何んと思たのんか、今度は妙にニコニコとあいそ笑ひしながら、そのほん五分ぐらゐのあひだにまるで人間變つたみたいな表情して這入つて來ましてん。それが夫には又氣味わるうて、ぎよつとしながら默つて見てましたら、テーブルの前い來て、お時儀して、「おかけなさい」とも云はんうちに今腰かけてた椅子にかけて、「さつきは僕が惡かつたです。僕は今、命にかけてもと思ふ人を取るか取られるか、大事な瀬戸際にあるもんですから、自分のことにばつかり眼エくらんで、あんたの感情を尊重する餘裕失うてました。何も惡意あつてあんなこと云うたんやありませんから、さつきのことは水に流して下さい」云ひますよつて、「それをわざわざ云ひに來なさつたんですか」云ひますと、「はあ、さうです、外い出てから考へてみたら、自分が惡かつた云ふこと分りましたのんで、何んや知らん氣イ濟まんもんですから詫まりに來ました」云うて、「それは御丁寧なことです」云うてやつても、「はあ、………」云うたなり、まだモヂモヂと腰かけて、けつたいな作り笑ひして、「實はあのう、かうしてこんなことお

願ひに來たりお詫びに上つたりしますのんも、よくよく苦しい立ち場に置かれて思案に餘つた結果やのんですが、どうぞ僕の此の、切ない、遣る瀨ない、泣くにも泣けん胸の中を推量して下さいませんか。それさい察して貰へたらさつきの書き付けお貸ししてもよろしいのんです」云ひますのんで、「察してくれ云うて、どんな工合に察したらえぇのんですか」云ひましたら、「正直なとこ、僕は何より、あんたが園子さんを離緣しなさるやうになるのんを恐れるのんです。そないなつたら園子さんヤケ糞起して、ますます光子と、、、、、しもて、僕が結婚する望み尙のことないやうになつてしまふ。僕かてあんたがめつたにそんなことしなされへん思ひますけど、どない考へても心配やのんは、園子さんが光子連れ出して逃げる場合です。何遍も何遍もくどいやうですが、よつぽど監督嚴重にして下さらんと、きつと近いうちに逃げるにきまつてますのんで、一遍そんなことあつたら、たとひあんたが心のうちでは園子さん赦してやろ思ひなさつても、世間の手前さうも出來んやうになるかも分らん。それ考へたら僕は危險がもう眼の前い迫つてる氣イして、夜もおちおち寢られへんのんです。」――そない云うて、「どうぞ、どうぞ、お願ひします」と、額をテーブルへ擦りつけるやうにお時儀して、「さう云ふ譯ですから、自分の都合のええことばつかり云ふ勝手な奴やとお思ひになりますやろけど、僕の窮境察して下さつて、此れから後、どんな事あつても園子さん逃がさんやうに責任持つて監督する、そいでもまさか括り着けとく譯にも行けしませんさかい、逃げられることないとは限りませんけど、そないなつても追ひかけて行つてきつと家い引き戻す云ふこと約束して下さい。それさい『うん』云うて下さつたら此の書き付けお預けします」云うて、「今更こんなこと念押さんかて、あんたは園子さん非常に愛しなさる、決して離緣しなさらんことはよう分つてるのんですが、それを一と言あんた御自身の口から聞かして欲しいのんです。あんたかて僕を哀れんで下さつたら、お腹の中でちやんときまつてること云うて下さつてもええやありませんか。」――夫はそれ聞いてるうちに、つくづく此の男イヤ味な奴ッちや、初めからもつと素直に、人の感情害さんやうに云へるもんを、わざとほじくり返すやうな餘計なこと云うて、顏色見い見い態度いろいろに變へたりして、何ちゆうけつたいな男やらう、これなら女に好かれる筈ないよつて、光子さんかて厭やなんなさつたかも知れん、よつぽど損な性質に生れついた人間や。そない思たら今度はほんまに可哀さうになつて來て、「そしたらあんたも此の書き付け將來明るみい出すやうなことせん云うて誓うてくれますか、そして僕が必要と認めるあひだ保管さしてといてくれますか、それ承知なら僕もあんたの條件容れてもよろしいです」云うたら、「此の

書き付けは、そこにも書いたある通り双方合意の上でないと人に見せられんやうになつてるのんですが、既に園子さんの方に背信行爲あつたと認めますのんで、僕があんた方困らしてやろ云ふ氣イあつたら、此れ種にしてどんな事でも出來んことあれしません。けど僕そんな卑怯な眞似する人間でないことは、此れわざわざあんたのとこい持つて來てお預けするのでも分るやありませんか。なあに、相手に誠意なかつたら何んぼこんなもん書かしても反古と同じですよつて、お役に立つのんならどうぞ持つて行つて使て下さい。僕の方はただ、さつきの二箇條さい約束して下されば滿足やのんです」云ひますさかい、さう話分つてくれたら結構や、そんならそれと、何んで初めから云はんのんやろ思ひながら、「そいでは確かにお預りします」云うて受け取ろとしますと、「ちよつと待つて下さい」云うて、「甚だ恐縮ですが、後日のために一と筆預かり證文書いて貰へませんやろか」云ふのんやさうです。そいでそれも承知しました云うて、「右正ニ御預り致候也」と書いてやりましたら、「その後へもう一と筆書き足して下さい」云ふのんで、「何を書くのんです」云うたら、「下名ハ右證書ヲ保管中左ノ條件ヲ遵守スルコトヲ誓フ、一、下名ハ下名ノ妻ガ妻タル者ノ行爲ニ悖ルコトナキヤウ責任ヲ持ツテ監督ス、二、下名ハ如何ナル場合ニ於イテモ決シテ妻ヲ離緣セズ、三、下名ハ所有主ヨリ請求サレタル時ハ何時ニテモ保管中ノ證書ヲ提示シ、若シクハ返却スベキ義務アルモノトス、四、下名ガ保管中ノ證書ヲ紛失シタルトキハ、何等カ他ニ所有主ヲ滿足セシムル保證ヲ與ヘザル限リ、第一條及ビ第二條ニ規定シタル義務ヨリ解除セラルルコトナシ、——」それを、一遍にすらすら云ふのんと違て、一つ書いてしまふと又考へて、「あ、もう一と筆願ひます」云うて、だんだんそんな工合に書き足さすのんで、何んや、馬鹿馬鹿しい、三百代言みたいなこと云ふ奴や思て、面白半分に好きなやうなと云はして、その通り書いてやつて、「では此の後い但し書きを一つ入れますで。——但シ、下名ノ保管スル證書ガ虚構ノ事實ニ基ケルモノナル時ハ凡ベテノ約束ヲ無効トス、——なあ、こない書いといても差し支ひあれしませんやろ？」云うて、はつとしたらしうどぎまぎしてる樣子でしてんけど、さつさと構はんと書いてしもて渡してやつたら、急に又未練出たやうにぐづぐづしながら、そいでも仕方なしに書き付け置いて行きましてんと。

夫はそこまで一と息に話して來て、「どうや、此の書き付けお前書いたのんに違ひないのんか。お前の方にも此れと同じもん行つてるのんなら出して見なさい」云ひながら、じつと返答待つてますのんで、私は默つて立ち上つて、鍵のかかつてる抽き出し開けて、そこに隠してあつたもう一通の方持つて來て、無言のままテーブルの上い置きまし

てん。

## その二十九

「ふーん、此れある以上は此の書き付けニセ物やないのんやなあ？」

そない云はれても、やつぱり默つて頷いて見せますと、夫は私がどんな氣持ちでゐるのんか見當つかんもんですさかい、疑ひ深さうに眼エぱちぱちさして、「そしたら此の證書に書いたあることみんなほんまの事實やのんか」云ふのんです。「そら、ほんまのこともあるねんけど、いうそのこともあるねん。」――――私はさつき夫の話聞きながら、もうこないなつたら隱し立てしたかてしやうがない、いつそ綿貫の計略の裏掻いて、自分に都合ええことも惡いことも、何んでも彼んでも殘らず打ッちやけて、あとは成り行きに任してやろ、ひよッとしたら案じるより生むが易うて、どんなうまいことあるかも分れへんと、すつくり腹きめてましたのんで、先づ第一に綿貫の秘密すつぽ拔いてやつて、そやさかい光子さん妊娠してはる云ふのんうそや云ふこと、さつき夫が會うた時はお腹にいろいろなもん詰めてなさつたのんや云ふこと、あの笠屋町の宿屋にしたかて、常時彼處にゐなさるのんでも何んでもないこと、此の誓文書かされた時は綿貫にあんじよう嵌められて、脅迫されたのんや云ふこと、自分が欺されてたことから夫欺してたこと迄、なんでも二時間ぐらゐかかつて一切合財話してやりましたら、「ふん、ふん」云うて、別にびつくりしたやうな樣子もせんと、ときどき溜め息つきながらしまひまで聞いてしもて、「そしたらお前の方云うたことちよつともうそないねんなあ？　綿貫云ふ男にそんな秘密あること確かやねんなあ？」云うて、「ほんま云うたら、自分の方にもちやあんと調べ屆いてる」云ふのんです。それが、夫が綿貫に會うたのんは四五日前のことですのんに、そいから今日まで知らん顏して事件伏せといた云ふのんは、何んや綿貫云ふ奴の素振りが怪しい、何ぞもつと深い譯あるのんやないか云ふ氣イしたのんで、私に打つかる前に一應取り調べてやろ思て秘密探偵に頼んだとこが、そんな商賣大阪にかつて仰山あれしませんさかい、此なひだ光子さんが頼みなさつたのんと同じとこへ行つてしもたのんで、「その人なら大概のこと分つてます、前に調べたことあります」云うて、その場で直きに答へてくれた。そいで綿貫が訪ンねて來た日の夕方には、もう一と通り種上つてしもてたのんですが、夫はあんまり意外やのんで同名異人の間違ひやないか知らん思ひましてんけど、探偵の方には光子さんとのいきさつまで分つて疑がふ餘地あれしませんし、………そないなつて來ると、今度は光子さん妊娠してなさる云ふことや、笠屋町の家のことや、私と光子さんとの關係や、なんとも腑に落ちんことだらけです

よつて、また改めて光子さんの方調べさした。その報告の届いたのん今朝のことで、そいでも夫はまだ半信半疑でしたさかい、自分で様子見て來てやろ思てさつき不意に笠屋町訪ンねてやつた云ふのんです。

「そしたらあの時、お腹に物詰めてはつたこと分つてたん？」私はわざと打ち解けた調子でそない云うてやりましたけど、夫はそれには答へんと、「僕はお前の今日の態度いつもより柔順で正直なこと認める。けどその正直さは過去の罪惡後悔してるためやのんかどうか、それハツキリ云うて見なさい」云ひますねん。「お前かて自分の過去の行ひが、どないに汚れた、人間の道に外れてるもんか云はんかて分つてるやろ。僕もそんな不愉快なことほぜくり返す氣イないねんよつて、これから後、本氣で罪の償ひをする決心あるかないか、それ聞かしてくれたらええ。どうせ綿貫との約束やかい眞面目に守る必要もないねんけど、兎に角僕はお前離縁せん云ふことあの男の前で誓うた。それに考へてみたら僕自身にも手落ちあつた。夫としての監督怠つてた云ふ綿貫の云ひぐさにも一應理窟ないことないし、光子さんの家の方から苦情申し込まれたら、お前より先に僕手エついて詫まらんならん思てるぐらゐやし、こんな事になつたのんは夫婦共同の責任みたいに感じてる。第一新聞にでも出ることあつたら、何んとしてお前の親たちに云ひ譯せう。それも普通の意味での戀愛やとか三角關係やとか云ふのんやつたら、また話しよも同情のしよもあるけど、此の証文に書いたあるやうなこと、誰が讀んだかて氣違ひとより思エへんで。一旦そんな習慣ついたら眼エさめたかて中中取り返しつけへんけど、今のうちやつたらまだどないぞなるやろさかい、よう落ち着いて考へてみて御覽。ま、そない思ふのん身贔屓かも分れへんが、お前の云ふの聞いてみたら、もともと綿貫云ふ奴の、性から起つたことで、ほんまに悪いのん彼の男一人や。お前かて光子さんかてあんた男に係り合はなんだら、まさかそんなこと覺えもせエへんやろし、……德光さんの家かて、それ分つたらどない思やはるやろ。僕今迄光子さん悪いのんや、あの兒不良少女やよつてお前にロクでもないこと教せるのんや思ててんけど、親の身になつたら、綿貫云ふ男八つ裂きにしても飽き足らん思やはるやろ。何處へ出しても恥かしない器量自慢の娘持つてて、あんな奴に見込まれるやなんて、僕とこよりも一つ不仕合せや。……………」夫は私の激し易い性質に逆らうたらいかん思てますのんで、理性に訴へるより感情的に動かすやう努めて、それが一種の手や云ふことは見え透いてますねんけど、親のことやかい持ち出されて、殊に光子さんのこと、そない不便らしう云はれましたら、自分の胸に思てることと一緒やのんで、急に悲しいになつて來て、眼エに一杯涙溜め溜め聞いてますと、「なあ、そやないか？」と、夫は涙で光子

つてる頬べた覗詰めながら、「泣いてばつかりゐても分れへんさかい、よう分別して、今度こそ最後の、うそのないお前の考へ云うてみなさい。僕はお前がどうしても家出する云ふのんなら、そら仕方ない思てる。けど、ほんまの僕の氣持ち云うたら、憎いのんあの男だけで、お前も光子さんも可哀さうな目に遇うたんや思てるねん。かりにお前と離別せんならんことになつても、お前が今みたいな眞似つづけてたら、いつ迄立つてもその『可哀さうな』云ふ心持ち殘つてて、僕も長いこと苦しまんならんし、お前にしたかて、、光子さんと、、譯にも行けへんやないか。そしたら離別してもせいでも、どうせお前のその悪い癖直さんならん。僕の監督離れたかて、そないなことして世間許しとく筈ないさかい、仰山の人に心配かけた上自分も恥掻いて壓制的に止めさされるか、そないならんうち自分で悟つて直すやうにするか、孰方なとお前の心がけ次第やで。」「そんでもうち、………こないになつたのん因果やさかい、………死んであんたに詫まります！」突然私がそない云うたのんで、夫はビクリとして飛び上るやうな恰好しましてんけど、その時私はわッと泣きながらテーブルい俯伏してしまひましてん。「……どうせうちもう取り返しのつかん、、のんです、……こないになつたら誰にかて見放されるのん當り前やし、生きてたかて世間に顔向け出來へんさかい、……どうぞうち死なして頂戴、こんな腐つた人間にあんたかて未練ないやろし、……」「…誰がお前見放す云うた？見放したもんなら意見する筈ないやないか？」「そないに云うてくりやはるのん有り難い思ひますけど、今更うち一人ええ兒になつて光子さんあんなりに放つてしもたら、どないに難儀しやはるこッちやら、……あんたかて一番光子さん可哀さうや云やはつたやないか」「そら云うた、云うたからこそお前等救ひ出そとしてるのんや。……まあ、お聞き、お前飛んでもない考へ違ひしてるで。お前みたいな意味でどないに、、捧げたかつてちよつとも難儀救てやることになれへんで。僕はお前のことばつかり心配してるのんやあれへんで。徳光さんとこいも行て、よう譯話して、一切あの男近づけんやうに嚴重に監督して、お前との交際も遠慮して貰ふやうに注意するのんが、僕の義務やと思てるねん。そないしてこそ光子さんのためやないか。」「あんたみたいなことしなはつたら、うちより先に光子さん死にやはるし。……」「なんでや？ なんで死ぬのんや？」「何んででも死にやはる。………今迄かつて死ぬ死ぬ云うてはつたんやうやうのことで止めててんもん。………そやさかいうちも一緒に死にます。死んで社會い詫まります。」「馬鹿なこと云ひな！ そんなことして僕や親たちに迷惑かけて、それが何んで謝罪になるねん！」

# その三十

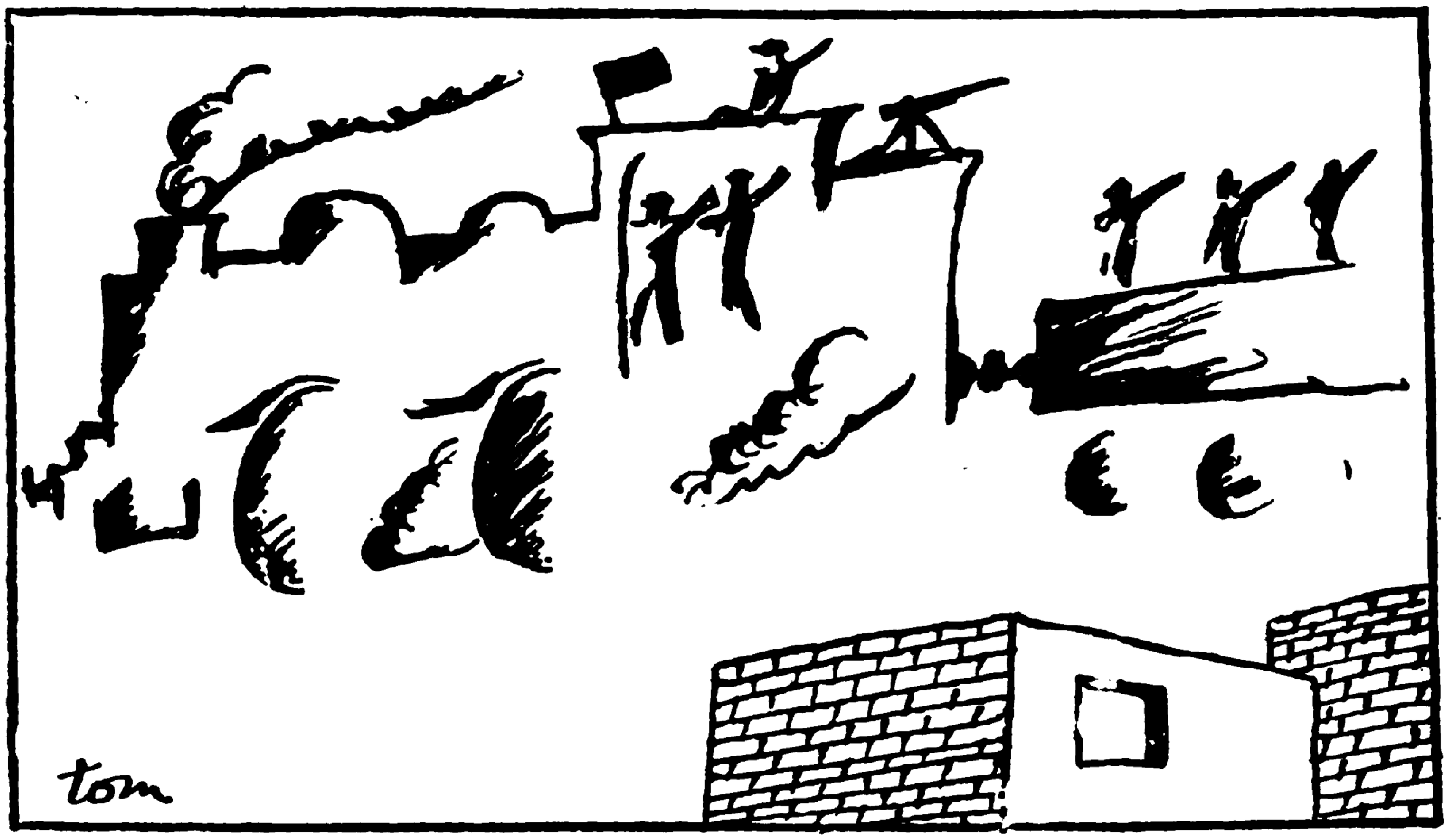
私は夫が何んちうても耳に入れんと、「いいえ、死にます、死なして頂戴」云うてテーブルい俯伏したなり、やんちやな兒オみたいに泣いてましてん。もう此の場合、「死ぬ」云うて、、てやるのん一番ええ。それより外に方法ない。………そら、夫の云ふやうに、元ッちうたら綿貫惡いのんにきまつてますねんけど、（五十四字削除）………今の私の氣持ち云うたらそれぐらゐになつてますのんで、何んでその（九字削除）こと出來ますやろ。私の頭の中にあるんは、どないしたら此いから先も今迄のやうに會うて行くこと出來るやろかと、そればつかり考へてますのんで、正直に云うたら、自分の望み、、、、、、は夫に離縁しられるん一番恐い。前には夫、、したこともありますねんけど、此の人の、になつてたからこそ、却つて（十字削除）自由な行動取ること出來たやうなもんの、、、とこいでも返されたら一歩も外へ出られんやうになるやろ。そやさかい何んとでもして、、、、、、しまはなあかん。どうせ此處まで知れてしもた以上、自分と光子さんとの間柄納得さして、それ承認してくれたら、自分は夫大事にする、きつと夫婦仲も圓滿に行く（三十三字削除）、綿貫の奴どんな妨害したとこで、證文の書き付け此方い取つてしもたあるし、あんな男の云ふことやつたら信用するもんないやろし、（二十一字削除）、たとひ光子さん何處でい、、、行きやはつても、（十一字削除）、ちやんとした家庭の奥様同志どないに仲好うしてたかて誰が何ちふもんあるやろ。（三十字削除）、前とちよつとも變つたことないばつかりか、前より、、、しつくりと行くのんやし、三人より外誰も知つてるもんなかつたら、、、、、に係はる云ふこともないねんよつて、無闇に事荒立てるよりその方が何んぼ優しか分れへん。夫は私に無鐵砲な事しられたら、自分の（九字削除）心配第一やのんで、お腹の中では私以上に離縁恐れてて、事勿れ主義に傾いてることよう分つてますさかい、「そないに束縛するのんなら、、、、、、ほんまに、、してやるぞ」云ふとこ見せて、そいからそろそろ注文持ち出して、（十二字削除）。——と、私はあらかた、、、、、、二日かかつても三日かかつてもきつとしまひには云ふこと聽かしてやるつもりで、なるべく反感挑發せんやうに、何云はれてもただ大人しいに無言のうちに涙ながら、堅い決心隱してるみたいに割りと落ち着いてましたのんで、それが夫にはなほ氣味わるうて、その晩はとうど夜の明けるまで一睡もせんと傍に着いてて、何所いまで一緒に來るのんです。そいで明くる日は一日事務所休んでしもて、御飯も二階い運ばすやうにして、じつと睨み合ひしたなり、ときどき顔色うかがうては、「こないにして

たら聽つづけへんさかい、一と寢して頭休めてから、ゆつくり考へ直してみて御覽」とか、「兎に角死ぬやの家出するやの云ふこと、思ひ止まる云ふ約束してくれ」とか云ひますねんけど、私は默つていやいやして見せるばつかりで、心のうちでは、此處まで來たらもう（二十二字削除）大丈夫や思てましてん。ところがその又明くる日の朝、夫はどうしても一時間か二時間事務所へ出んならん用あるのんで、留守の間は絶對に外い出エへんし、電話もかけへん云ふこと誓ふか、それイヤやつたら大阪い連れて行く云ひますよつて、「うちかてあんた一人で出したら心配やさかい附いて行きます」云ひましたら、「何が心配やのんや」云ひますのんで、「うちに内證で德光さんとこい云ひつけ口でもしに行かれたら、それこそ生きてられへん」云ひますと、「僕かつてそんな、お前に納得させへんうちに無斷で不意討ち喰はすやうなこと絶對にせエへん。僕がそれ誓たらお前も誓うてくれるか」云ひますねん。そいで私も、「あんたさい意地の惡いことせエへん云ふのんなら、留守のあひだぐらゐじつとして待つてますさかい、安心して仕事して來て頂戴。うちもその間に一と休みしますわ」云うて、夫出してやりましたのんが九時頃のことで、暫く寢台に横になつてましてんけど、妙に興奮してしもてて寢られるどこやあれしません。それに夫から、大阪い着いたら直ぐ電話かかつて、そいから三十分置きぐらゐにチヨイチヨイかかつて來ますさかい、何んや知らん氣分落ち着かんと、部屋の中往つたり來たりしながらいろいろなこと考へてましたら、そのうちにふつと思ひついた云ふのんは、毎日毎日こんな工合に根競べしてたら、又綿貫がどないなわるさせんとも限らんし、光子さんかて一昨日あんなり別れてしもてどない思てはるか、昨日かて一日待つてやつたやろ。どうで口先で「死ぬ、死ぬ」云うたぐらゐでは、、利けへんさかい、いつそ（十九字削除）、早よ埒明くやろ。それもあんまりえらい騷ぎにならんやうに、奈良とか京都とか、何處ぞ近いとこい逃げてやろ。そいでお梅どん頼んで、わざとビツクリしたみたいに夫のとこい駈け込んでもろて、「今お宅の奥さんと家のとうちやんと何處そこい逃げはりました。家い知れたらえらいことになりますさかい早よ摑まへとくなはれ」云うて、もうちよつとで死ぬ云ふとこい夫連れて來て貰ふ。……それやつたら（九字削除）今日濟いたら機會あれへん。……と、そない思ひましてんけど、電話じやうたれかかつて來るのんで外へ出る譯に行けしませんさかい、「あのなあ、詳しい話會うてからするよつて、大急ぎでちよつと家まで來てほしい」云うて、電話で光子さん呼んどいて、「今光子さん來なさるけど、直き行にやはるさかい、旦那さんにそんなこと云うたらいかんで」と、女子衆に口止めしといて待つてましたら、そいから二十分ぐらゐして來や

はりましてん。

電話かかつて來るうちは夫大阪にゐるちふこと確かやのんで、却つて安心ですねんけど、そいでも不意に歸つて來たら裏口から出て貰お思て、光子さんの日傘と草履庭の方い廻しといて、逃げる時の用心に下の座敷で會うたのんですが、光子さんは初めから心配さうな青い顏して、昨日一日見なんだ間にえらい窶れてなさつて、私の話聞きなさるともう涙ぐみながら、「そしたらあれから姉ちやんの方にもそんなことあつてんなあ」云ひなさつて、自分もあの日の夕方から昨日にかけてさんざん綿貫にいぢめられた。綿貫の云ふのんには、「あんたと姉さんとグルになつて僕欺そとしてるさかい、僕の方もその裏掻いて此なひだ今橋の事務所い行つて、姉さんのことみんな主人に話して來てやつた。そやさかい笠屋町に様子探りに來たのんや。あないして姉さん連れて行かれてしもたら、もうなんぼ待つてたかて來る筈あれへん。」――

（つづく）




# 海港章

横光利一

## 一

市街戰のあつたその日から流言が海港の中に渦巻いた。暗殺される外人の家の柱には墨のマークが附いた。工務局では復讐のために大擧して襲ふであらう群集を豫想して、各國義勇團に出動準備を命令した。市街の要路は警官隊に固められた。拔劍したまま駈け違ふ騎馬隊の間を裝甲車が走つていつた。義勇隊を乘せた自動車、それを運轉する外國婦人、機關銃隊の間を飛ぶ傳令。――市街は全く總動員の狀態に變化し始めた。警官はピストルのサックを脫して騷ぐ群集の中へ潜入した。すると、核をくり拔くやうに群からロシアの共產黨員が引き出された。辻々の街路に立つて排外演說をする者が續出した。群集は警官隊の拔劍の間から食み出してその周圍を取り包んだ。警官は鞭を振り上げて群集を追ひ散らさうとした。が、群集はただげらげら笑つてますます增加するばかりであつた。

參木は殆ど昨夜から眠ることが出來なかつた。彼は支那服を着たまま露路や通りを步いてゐた。彼はもう市街に何が起つてゐるのかを考へなかつた。ただ彼はときどきぼん

やりした映畫に焦點を與へるやうに、自分の心の位置を測定した。すると、遽に彼の周圍が音響を立て始め、投石のために窓の壞れた電車が、をつけて街の中から辷つて來た。それはふと彼に街のどこかの一角で市街戰の行はれたことを響かせながら行き過ぎる。彼は再び彼自身が日本人であることを意識した。しかし、もう彼は幾度自身が日本人であることを知らされたか。彼は母國を肉體として現してゐることのために受ける危險が、このやうにも手近に迫つてゐる此の現象に、突然牙を生やした獸の成長を人の中から感じ出した。と、彼は自分の身體が母の體内から流れ出る光景と同時に、彼の今歩きつつある光景を考へた。その二つの光景の間を流れた彼の時間は、それは日本の肉體の時間にちがひないのだ。そして恐らくこれからも。しかし、彼は彼自身の心が肉體から放れて自由に彼に母國を忘れしめやうとする企てをどうすることが出來るであらう。だが、彼の身體は外界が彼を日本人だと強ひることに反對することは出來ない。心が鬪ふのではなく皮膚が外界と鬪はねばならぬのだ。すると、心が皮膚に從つて鬪ひ出す。武器が街のいたる所で光つてゐる中を參木は再び歩きながら、、、のために、、、、、、、させてゐる群集の顏を感じ出した。それらの群集に銃劍や機關銃の金屬の流れの中で、個性を失ひ、その失つたことのためにますます、、、、、、、、、、、、、、、、、此の民族の運動の中で、參木は本能のままに自殺を決行しやうとしてゐる自分に氣がついた。彼は彼をして自殺せしめる母國の動力を感じると同時に、彼が自殺をするのか彼が自殺をせしめられるのかを考へた。しかし、何故に此のやうに彼の生活の行くさきざきが暗いのであらう。彼は彼の考へることが、自身が自身で考へてゐるのではなく、彼が母國のために考へさせられてゐる自身を感じる。最早や彼は彼自身で考へたい。それは何も考へないことだ。彼が彼を殺すこと——此の彼の見えない希望の前では、銃器が火藥をつめて街の中に潛んでゐた。群集は排外の唾を飛ばして工部局の方へ流れていつた。と、道路の兩側に蜂の巣のやうに竝んでゐた消防隊のホースの口から、水が群集を目がけて噴き出した。その急流のやうな水の放射が群衆の開いた口の中へ突き刺さると、ばたばた倒れる人の中から礫が降つた。辻々の街路で警官に守られてゐた群集は騷ぎを聞くと、一齊にその中心へ向つて溢れ出した。

參木はこれらの膨脹する群集から脫れながら、再び昨日のやうに秋蘭の姿を探してゐる自分を感じた。彼は彼の前で水に割られては盛り返す群集の渦を見詰め、倒れる旗の傾斜を見、投げられる礫の間で輝く耳環に延び上つた。と、ふと浮き上る彼の心に彼が昨日秋蘭を見る前と同様の浮沈を續け出すのを彼は感じると、やがてホースの水の中

から飛び出るであらう彈丸を豫想した。もしいま一度彈丸が發射されたら、此の海港の內外の混亂は何人と雖も豫想することが出來ないのだ。しかし、そのとき、群衆の外廓は後方で膨れる力に押されながら、ホースの陣列を踏み潰した。と、發砲が命令された。銃砲の音響が連續した。參木は崩れ出す群衆の壓力を骨格に受けると、今まで前進してゐた通路の人波に卷き込まれたまま逆流し始めた。その流れは電車を喰ひ留め、兩側の外人店舖に投石し、物品を掠奪しながら暴徒となつて四方の街路へ擴つていつた。と、參木の前の群衆は急に停止すると、一人の支那人を取り包んで毆り出した。彼らは彼を「犬」だと叫んだ。彼らの叫んでゐる間に、もう彼は、、、、、、、、、、、、、、手は一方の街へ流れる群衆の先端で、、、、、、、、高々と振り廻され、足はその反對の街路へ向つて群衆の角のやうに動いていつた。そのがくがく搖れて通る足の上方の二階では、抱き合つた、、の踊り子達の踊る姿が窓の中で廻つてゐた。と、その窓を狙つて、礫の雨が舞ひ込んだ。騎馬隊の警官が群衆に向つて馳けて來た。その後から新製の裝甲車が試射欲に觸角を慄はせながら、辷つて來た。道路に滿ちた群衆は露路の中へ流れ込むと、壓迫された水のやうに再びはるか向うの露路口に現れ、また街路に滿ちながら、警官隊の背後から嘲笑を浴びせかけた。

　これらの群衆は暫くは警官隊の騎馬の鼻さきを愚弄しながら、だんだん總商會のホールの方へ近かづいていつた。そこでは、前から集合してゐた商會總聯合會と、學生團體との聯合會議が開催されてゐたのである。附近の道路には數萬の男女の學生が會議の結果を待つて雜つてゐた。議題は學生團の提出した外人に對する罷市敢行の決議にちがひないのだ。もし此の會議が通過すれば、全市街のあらゆる機關は停止するのだ。さうして、恐らくそれは間もないことであらう。參木にはこれら共產黨と資本家團體との一致の會合が、二日の後に開催される外人團の納稅特別會議に對する威嚇であることは分つてゐた。しかし、それにしても、もしその日の納稅特別會議が——外人の手で支那商人の首を一層確實に締めつける關稅引上げの議案を通過させれば、——參木には、その後の市街の混亂は全世界の表面に向つて氾濫し出すにちがひないと思はれた。すると、新たに流れて來た群衆は再び發砲された憤激の波を傳へながら、會場の周圍の群衆へ向つて流れ込んだ。群衆の輪は一つの波と打ち合ふ每に、動搖しながら會場の中へ波立つた。恐らくその波の打ち寄せる個々とした刺戟の度に、提出された議題はその輪の中心で急速な進行を示してゐるにちがひないのだ。

　參木は前から此の群衆の渦の中心に秋蘭の潛んでゐるのを感じてゐた。しかし、彼はそのどこに彼女がゐるかを見るために、動搖する渦

の色彩を眺めてゐたのだ。すると、彼の皮膚は押し詰つた群衆の間を流れて均衡をとる體溫の層を感じ出した。と、彼は彼ひとりが異國人だと思ふ胸騷ぎに締めつけられた。彼は彼と秋蘭との間に群がる群衆の幅から無數の牙を感じると、次第にその團塊の中に流れた體溫からはぢき出されていく自分を見た。

## 二

參木が漸く群衆の中から放れて家へ歸ると、甲谷は先に歸つて待つてゐた。甲谷は云つた。

「もう僕はここにゐたつて駄目だ。四五日すれば材木が着くんだが、着いたら宮子を連れてシンガポールへ逃げ出さうと思つてゐる。」

「それで宮子は承知したのか。」

「いや、承知はまだだ。材木の金がとれるか宮子が落ちるか、とにかくどつちか一つが駄目なら、俺は自殺だ。」

「どつちも駄目だ。明日からは銀行も危くなるのは定つてゐるんだ。」

「そんなら、自殺も出來ないね。」

笑ふ後から滲み出る甲谷の困惑した顏色を、參木は默つて眺めてゐた。恐らく甲谷には參木の流れる冷たい心理の中へ足を踏み込むことは出來ないにちがひない。しかし、參木は甲谷の健康な欲望の發顯から、過去の暖い日を幻影のやうに感じ出した。すると、競子の顏が部屋の隅々から現れ出した。甲谷は云つた。

「とにかく、われわれはかうしてはゐられない。何かしなけりや。」

「何をするんだ。」

「それが分れば困りやしないよ。」

「君は宮子を落せばいいんぢやないか。」

「しかし、君はどうするんだ。」

「俺か。」

參木はもう一度秋蘭に逢ひたいだけだ。然もその可能は明後日に開かれる特別會議の夜だけに、かすかに盜見するほどのことであつた。しかし、參木は此の混亂の中で、最後の望みがどちらも女を見たいと思ふ鋭い事實だと氣がつくと、笑ひ出した。彼は云つた。

「君、あの宮子を君は突き飛はすことは出來ないのか。」

「出來ない。あの女は僕を突き飛ばしてゐるだけだ。あの女には僕はシンガポールの材木をすつかり食はれてしまはなきア、駄目らしい。」

「君が出て來たときには、フイリツピン材を蹴飛ばさなきア譯らないと云つてたが、皮肉にも程度がある。もう僕は君にあの女をすすめるのはいやだ。あの女は君の裏と表をひつくり返して了つてゐる。」

「いや、ひつくり返つてゐるのは僕だけぢやない。此の街まで今は遊

さまになつてるんだ。これぢや、俺ひとりでどう立ち上らうと知れてゐる。とにかく、もういつぺんいつてひつくり返つてくるまでだ。」

甲谷は重さうに立ち上ると、ポケットから競子の手紙を出して出ていつた。その手紙の中には、歸らうとしてゐる競子を邪魔してゐるものは此の開港の混亂だと書いてあつた。

——歸れなくしたのは誰だ、と參木は思つた。すると、彼の日日見せつけられた暴徒の擴つた黒い翼の記憶の中から、芳秋蘭の顔が樣々な變化を見せて現れ出した。

三

宮子は甲谷に誘はれるままに車に乘つた。彼女は彼女を取り卷く外人達が、今は義勇兵となつて街々で活動してゐる姿を見たかつたのだ。しかし、甲谷はもう彼女に叩かれ續けた自尊心の低さのために、今はますます叩かれる準備ばかりをしてゐなければならなかつた。二人は車を降りた。河岸の夜の公園の中では、いつものやうに泰姑らがベンチに並んでうな垂れてゐた。髮のめぐつた白けた女達の皮膚の間から、噴水が舌のやうに上つてゐた。甲谷は雨の上つた菩提樹の葉影を洩れる瓦斯燈の光りに宮子の表情を確めながら、結婚の話をすすめ出した。

「もう僕は何もかも云つて了つて云ふことはないんだが、同じ云ふなら、もう一度云つたつて惡くはなからう。」

「まア、さういつもあなたはあたしばかりを攻めなくたつて、良ささうなもんだわね。」

「それで實は、もう僕も何から何までさらけ出して話すんだが、ひとつ、頼む。」

宮子は甲谷の肩にもたれかかると笑ひ出した。

「あたし、あなたは嫌ひぢやないの。だけど、さうあなたのやうに、いつもいつも同じことを云はれちや、あたしだつてをかしくなるわ。」

甲谷がベンチに腰を降ろすと宮子もかけた。甲谷は靴さきに浮ぶ支那船の燈火を蹴りつけながら、過去に饒舌つた言葉の石碑の間をすり拔けやうとして藻搔き出した。すると、對岸に繋つたマストの林の中から、急に搖れ上つた暴徒の一團が、工場の中へ流れ込んだ。發電所のガラスが穴を開けた。銃口が窓の中で火花を噴いた。と、黒々とした暴徒の影が隣りの煙草工場の方へ流れていつた。海上からは對岸のマストを狙つて、モーターボートの青いランプの群れが、縮ぼるやうに馳け始めた。

甲谷は此の遠景の騒ぎの中から、宮子の放心してゐる心をひき拔くやうに彼女を擒つた。

「あちらはあちら、こちらはこちらだ。ね、君、君とかうして坐つてかうして話してゐても、僕には君の舌ばかりより見えないんだが、もういい加減に僕に安心させてくれたつて、」
「まア、あんなに煙が出たわ。御覧なさいよ。あれは英米煙草だわ。もう此の街もお了ひだわ。」
「街なんかどうならうといゝぢやないか。いづれこの街は初めから罅の入つてる街なんだ。君は僕と一緒にシンガポールへ逃げてくれ給へ。」
「だつて、あたしにや此の街ほど大切な所はないんですもの。あたしここから出ていつたら、鱗の乾いた魚みたいよ。もうどうすることも出來なくなればあたし死ぬだけ。あたし覺悟はいつだつてしてるんだけど、でも、あたし此の街はやつぱり好きだわ。」
甲谷は乗り出す調子が脱れて來ると、駈け込むやうにベンチの背中を掴んで周章て出した。彼は云つた。
「もうそんなことは考へないでくれないか。たゞ結婚してくれれば萬事こちらで良くしていく。それなら良からう。それなら、僕は。」
「だつて、あたし、だいいち結婚なんかしてみたいと思つたことたんてないんですもの。あたしもし結婚したければ、あなたが始め仰言つて下すつたとき、さつさとお返事してゐてよ。いくらあたしだつて、さうはあなたのやうに氣取つてばかりはゐられないわ。」
「そりや、いくら惡口云はれたつて、もう僕は氣取つてなんかゐる暇がないんだが、とにかく、これぢや、いくら君を廻つてぐるぐるしつて、これはたゞ廻つてゐると云ふだけだ。何んでもない。」
「あたしは駄目なの。あたし、自分が一人の男の傍にくつついて生活してゐる所なんか、想像が出來ないわ。あたし男の方を見てゐると誰だつて男のやうに見えるのよ。これで結婚なんかしてゐたらあなたから逃げ出されるにきまつてゐるわ。それよりあたしはあたしの流儀、困つてゐる澤山の男の方にちやほやして瞞してゐるの。あたしに瞞されたと思ふものは、そりや馬鹿なの。だつて、今晩瞞されたと思つて口惜しがつてる男なんか、日本にだつてゐやしないわ。あなたにしたつて、あたしがどんな女だかつて云ふことぐらゐ、一と目見ればお分りになりさうなもんぢやないの。それにあたしにお嫁入の話なんか仰言つて、あたしが冗談にして了ふことだつて、これでたいていのことぢやないことよ。」
波がよせると、それが冷たい幕のやうに甲谷の身體に沁み透つた。彼は彼女から腕を放した。切られた鎖のやうに沈む彼の心の斷面で、まだ見たこともない女の無數の影が入り交つた。が、その影の中で、宮子の顔はますます明瞭に浮き上つた。

「駄目だ。」と甲谷は云ふと、不意に彼女を抱きよせようとした。が、後ろのベンチで、春婦の群れが塒のやうに塊つて眺めてゐた。彼は溜息を洩らすと、再び宮子から放れて背を延ばした。と、逆に宮子の身體が倒れて來た。彼は宮子を抱きよせながら、此の急激な彼女の變化に打たれて默つてゐた。宮子は云つた。

「あなた、あたしに暫くかうしてゐさせて頂戴。あたしときどき誰かにかうしてゐないと、駄目な性質なの。あたし、あなたのお心はもう分つたわ。だけど、駄目よあたしは。あなたは早くお綺麗な方を貰つてシンガポールへお歸りなさいな。あたしは誰にでもこんなことをする性質なの。」

宮子のイミタチオンの靴先が輕く甲谷の靴を蹴る度に、甲谷の腕は弛んで來た。彼は彼女がただ彼を慰める新らしい方法を、用ひだしただけだと氣がついたのだ。

彼は云つた。

「君の優しさは前から僕は知つてゐたんだが、此の上迷はすことは御免してくれ。ただもう僕は君が好きで仕方がないんだ。」

「あなたはあなたに似合はず、今夜はつまらないことばかり仰言るのね。あの樹の上を御覽なさいな。義勇兵が馳けててよ。それにあなたは、」

甲谷は宮子を芝生の上へ突き飛ばすと、立ち上つた。が、彼は彼女が、彼にそのやうにも怒らせやうと企んだ彼女の壺へ落ち込んだ自分を感じると、再び宮子の前へ坐り出した。

「君、もう慰めるのは、やめてくれ。僕には一生頭が上らないんだ。ただ僕の惡いのは、君を好きになつたと云ふことだけだ。それに君は……」

宮子は髮を振りながら芝生の上から起き上つた。

「さア、もう、歸りませうね。あたし、あなたがあたしを愛してゐて下さるんだと思ふと、もういつでも我ままになつちやうの。ね、だから、もう何もあたしには仰言らないで、」

しかし、甲谷は完全に振り落された男がここに轉げてゐるのだと氣がつくと、もう動くことも出來なくなつた。宮子は公園の入口の方へひとりときどき振り向きながら歩いていつた。芝生の上に倒れてゐる甲谷の頭の上の遠景では、火のついた煙草工場が發砲を續け出した。

## 四

海港の支那人の活躍は鎭つて來た。支那商業團體の各路商會聯合會、納税華人會、總商會の總ては一致團結して罷市贊成に署名を終へたのだ。學生團は戸毎の商店を廻り歩いて營業停止を勸告した。罷市

の宣耳が到る所の壁の上で新しい壁となつた。電車が停り、電話が停つた。各學校は開期不明の休校を宣言した。市街の店舗は一齊に大戸を降ろし、市場は閉鎖された。

その日の夕刻、騒擾の分水嶺となるべき工部局の特別納税會議が市政會館で開かれた。戒嚴令を施かれた會館の附近では、銃劍をつけた警官隊と義勇隊とが數間の間を隔いて廻つてゐた。會議の時刻が近づくと、諸聞市中に波立つた流言の豫告のために、會館の周圍は息をひそめて靜まり出した。彷徊する義勇兵の眼の色が輝き出した。潜んだ爆彈を索り續ける警官が建物と建物との間を出入した。水道栓に縛りつけられたホースの陣列の間を、靜かに裝甲車が通つていつた。やがて、議員達は武裝したまま陸續と議場の入口へ集つて來た。

丁度參木の來たのはそのときであつた。會館附近の交通遮斷線の外では、街々の露路から流れて來た群集は街路の廣場に溜り込んだまま、何事か待ち受けるかのやうに互に人々の顏を見合つてゐた。參木はそれらの人溜りの中を擦り抜けながら、その中に潜んでゐるにちがひない秋蘭の顏を捜していつた。もし彼女が彼との約束に似た暗默の言葉を忘れないなら、彼が彼女を此の附近で捜し續けてゐることも忘れない筈であつた。しかし、彼は歩いてゐるうちにだんだん周圍の群集と鼓動に、不意に何事か湧き起つて來るであらう豫感を感じ出した。すると、群集はぢりぢり遮斷線からはみ出して會館へ向つて迫り出した。騎馬の警官がその亂れる群集の外廓に從つて、馬を躍らせた。スコットランドの隊員を積み上げた自動車が拔劍を逆立てたまま、飛ぶやうに疾走した。と、急に、群集の一角が靜まつた。すると、今まで騒いでゐた群集は奇怪な風を吸ひ込むやうに次から次へと默つていつた。と、全く音響の停つた瞬間、その一帶の沈默の底から、どことも知れず流れる支那人の靴音だけがかすかに參木の耳へ聞えて來た。しかし、間もなく、それは何の意味も示さぬただ沈默そのものにすぎないことを知り始めると、再び群集は騒ぎ出した。すると、その騒ぎの中から搖れて來る言葉の波は漸次に會議の流會を報らせて來た。それなら、これで支那商人團の希望は達したわけだ、と參木は思つた。と、やがてその流會の原因は定員不足を理由としてゐことまで、寄り集つた人波の呟きから判つて來た。參木は極力會議を流會させることを宣言してゐた秋蘭の笑顏を感じた。今は彼女はこの附近のどこかの建物の中で、次の畫策に沒頭してゐるにちがひない。しかし、もしそれにしても、なほ此のうへ海港の罷市が持續するなら、困憊するものは逆に支那商人に變つていくのだ。──もし支那商人の一團が困憊するなら、なほ罷市の持續を必要とする秋蘭一派の行動とは、當然衝突し出すのは定つてゐた。

參木に思つた。これは何か起ると、謀みが。──その謀みはなほ商業團體と群集とを結束させんがための謀みであることは、分つてみた。しかし、その手は、──その手も今はただ、、をして再び、、させれば、それで良いのだ。

しかし、參木には自身の頭腦の廻轉が、自分にとつて無駄な部分の廻轉ばかりを續けてゐることに氣がついた。彼はただ今は死ねば良いのだ。死にさへすれば。それにも拘らず秋蘭を見たいと思ふ願ひがおりおり後をつけて來るのを感じると、彼はますます自身の中で跳梁する男の影と蹴り合ひを續けるのだ。ふとそのとき彼は梅雨空に溶け込む波の濛密な街角から、閃めく耳環の色を感じた。と、彼はその一點を見詰めたまま、洞穴を造つた人溜の間を魚のやうに歩き出した。しかし、彼はその街角へ行きつくまでに、急に停つた。もしその耳環が秋蘭であつたなら、と思ふ彼の心が突然彼女と逢つた後のことを考へ出したのだ。全く彼は彼女と逢つたとしても、爲すべきことは何もないのだ。それなら、──いや、それより、彼女が此の街の混亂の最中にどうして自分を搜しに來るであらうか。彼は壁に背中をひつつけると、彼女が自分を搜しに來るであらうと想像したがる自身の心を締めつけ出した。しかし、もし彼女が自分の言葉を忘れないなら、──締めつける後から湧き上つて來る手に負へない愛情に、最早や彼はにやにや笑ひ出した。すると彼は歩き出した。どこへ歩いて行くのだらうと思つてみても足だけが頭を運んで人の中を動いていく。

そのとき、前方の込み合つた街路を一隊の×國騎馬隊が彼の方へ馳けて來た。と、兩側の屋内から不意に銃聲が連續した。騎馬隊の先頭の馬が突つ立つた。と、なほ鳴り續けてゐる音響の中で、馬は強かに地に倒れた。投げ出された騎手、、、、、、馳、、、、。後に續いた數頭の馬はぐるぐる廻りながら、首を寄せた。と、急に一頭の馬が露路の中へ躍り込んだ。亂れ出した馬の首の上で銃身が輝やくと、屋内を向けて發砲し始めた。馬は再び群衆の中を廻り出した。群衆は四方の露路の中から溢れて來ると躍る馬の周圍で喊聲を上げ始めた。群つた礫が馬を目がけて降り注いだ。馬は倒れた、馬の上を飛び越えると、押し出る群衆を蹴りつけて馳け出した。

參木の周圍では、群衆は彼ひとりを中に挾んだまま、馬の進退に從つて溶液のやうに膨脹し、収縮した。その度に、彼はそれらの流動する群衆の羽根に突き飛ばされ、卷き込まれながら、だんだん露路口の壁の方へ叩き出されていつた。

騎馬隊が逃げていくと、群衆は路の上いつぱいに詰まりながら、狼狽へた騎馬隊の眞似をしてはしやぎ出した。銃砲の煙りが發砲された屋内から洩れ始めた。と、工部局の方から近かづいて來た機關

が、突然、群衆の中へ發砲した。群衆は跳ね上つた。と、聲を失つた頭の群れが、暴風のやうに搖れ出した。沈沒する身體を中心に眞つ二つに裂け上つた人波の中で、彈丸が風を立てた。露路口は這ひ込む人の身體で膨れ上つた。閉ざされた戸は穴を開けて眼のやうに光り出した。その下で、逃げ後れた群衆は壁にひつついたまま、唸り出した。

參木は押しつけられた胸の連結の中から、ひとり反對に道路の上を見廻した。彼はそこに倒れて動かぬ人の群れの中から、秋蘭の身體を探さうとして延び上つた。馬の倒れた大きな首の傍で、倒れた人の身體が轉がりながら藻搔いてゐた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。霰のやうな塵がそれらの、、の上を這ひながら、來檢の通る度に廻つてゐた。しかし、參木には、最早や日々見せられた倒れる、、の音響や混亂のために、眼前の此れらの動的な風景がただ日常普通の出來事のやうにしか見えなかつた。だが、彼は彼の心が外界の混亂に無感動になるに從ひ、その混亂した外界の上を自由に這ひ廻る愛情の鮮かな擴がりを、明瞭に感じ出した。

街路の上から群衆の姿が少くなると、騎馬隊へ向けて發砲した家の周圍が工部局巡捕によつて包圍まれた。機關銃が据ゑられた。と、その一軒の家屋を消毒するかのやうに、眞暗な屋内めがけて彈丸がぶち込まれた。墜落する物音、唸り聲、石に衝つて跳ね返る彈丸の律動と一緒に、戸が見る間に穴を開けていつた。機關銃の音響が停止すると、戸が蹴りつけられて脱された。ピストルを上げた巡捕の一隊が、欄干からぶら下つたまままだ搖れ續けてゐる看板の文字の下を、潜り込んだ。すると、間もなく、三人のロシア人を中に混へた支那青年の一團が、ピストルの先に護られて引き出された。

參木は露路の片隅からそれらの引き出された青年達を見詰めてゐた。もし秋蘭がその中に、と思ひながら——間もなく、檢束された一團は自動車に乘せられると、機關銃隊に送られて工部局の方へ馳けていつた。銃器が去つたと知ると、また群衆は露路の中から滲み出て來た。彼らは燈の消えた道路の上から、、を露路の中へ引き摺り込んだ。板のやうに張りきつた、、の頭は引き摺られる度毎に、筆のやうに頭髮に含んだ、でアスファルトの上へ黑いラインを引き始めた。と、一臺の外人用の自動車が辷つて來ると、、、の上へ乘り上げた。箱の中で、茉莉の花束に隱れて接吻してゐた男女の顏が、亂れ出した。と、礫が顏へ投げつけられた。自動車は並んだ、、を轢き飛ばすと、ぐつたり垂れた顏を搖りながら疾走した。

參木は群衆の中から擦り拔けると突堤の方へ歩いていつた。彼はもう秋蘭を探す重みに全身の疲れを感じた。疲れ出すと、今まで何も無いものを有ると思つて探し廻つた幻影に溺れ始め、ここそこで建物の間

を歩いてゐる自身の身體だけが、急に心の重みとなつて返つて來た。

# 五

その夜、參木は遲く宮子の部屋の戸を叩いた。ピジヤマ姿の宮子は支那服をひつかけたまま出て來ると、默つて參木を長椅子に坐らせた。參木は片手で失敬の眞似をしながらいきなり横に倒れると、眼を瞑つた。宮子はウイスキーを彼に飮ませた。彼女は彼の傍に坐ると彼の蒼ざめた顏を見詰めたままいつまでも默つてゐた。隣家の廊下を通る燭臺の火が、窓のガラスに石榴の影を辷らせつつ消えていつた。參木は眼を開けると彼女に云つた。

「君、今夜だけは、赦してくれ給へ。」

「だつて、燭臺はあちらにあるわ。あちらへいつて、」

口へあてがふ宮子のコツプの底を見詰めながら、彼は片手で宮子の手を強く握つた。宮子は云つた。

「あなたは今夜へんよ。あたし、さきから天地がひつくり返つたやうな氣がしてゐて、何のことだかわかんないわ。」

しかし、宮子は急に潑溂とし始めると、鏡の前で顏を叩いた。ひつかけた皮襖が宮子の肩からづり落ちた。

「あたし、あなたがいらつしやる前まであなたの夢を見てゐたの。そしたらあなたがいらつしやるんでせう。あたしそれまであなたと何をしてたとお思ひになつて。」

鏡の前から戻つて來ると、宮子は參木の頭を膝の上へ乘せながら、顏を近々と擦り寄せた。

「あなた、もう元氣をお出しになつて。あたし、あなたの疲れてらつしやるお顏を見るのはいやなのよ。」

參木は起き上つた。彼は宮子の手を掴むと云つた。

「とにかく、つまらん。」

「何が、」

「もういつぺん默つて寢させておいてくれ給へ。」

參木はまた倒れると眼を瞑つた。宮子は彼の身體を激しく揺り出した。

「駄目ぢやないの。あたしを叩き起して自分が眠るなんて、まだあたしはあなたの奥さんぢやないことよ。」

すると、參木は傍にあつたウイスキーをまた一杯傾けた。

「さう、さう。結構だわ。あたし、あなたのわがまゝなんか、初めつから認めてやしないのよ。だから、あたしはあなたなんかに同情したことなんか、一度もないの。人の顏を見ると顰めつ面ばかり續けて、つまんないことばかり考へて、もうそんなことはお止しなさいよ。あ

たしあなたなんかを好きになつちや、お了ひだわ。」

　突かれ出すと、參木には醉ひがだんだん廻つて來た。彼は云つた。

「どうも失禮。これでどうやら、君に叱られてゐるのも分つて來た。」

「當りまへよ。あなたなんかに憂欝なんか見せていたゞかなくたつて、街にごろごろしてゐるわ。あたしなんか見てちやうだい。馬鹿なことは一人前に馬鹿だけど、面白さうなことだけは知つてるの。」

　宮子は不機嫌さうに外方を向くと煙草をとつた。參木は豫想とは反對に、急に怒り出した宮子の樣子に氣がつくと、またぐつたりと横に倒れた。宮子は床に落ちてゐる皮靴を足で跳ね上げた。彼女は立ち上ると寢室の方へ歩いていつた。參木は云つた。

「君、もう暫く僕の傍にゐてくれ給へ。さうすると、僕はだんだん賢くなる。」

「いやよ、あたしあなたのお相手なんか、まつぴらだわ。」

「ときどきはかう云ふ男も君の傍にゐたつて惡くはなからう。人には怒るもんぢやない。朝早くから夜中まで僕は今日は幾回死にぞこなつたかしれないんだ。たまに疲れて來たんだから、君、疲れたときには、人は一番親しい所へ轉がり込むもんだ。さう怒らずに、もう暫くここにゐさせてくれ給へ。」

　宮子はドアの前に立つたまま參木の方へ向き直つた。

「あなたは今夜はどうかしててよ。」

「僕はそれを白狀したくつて來たんだが、もう云ふのはいやになつた。これ以上馬鹿になるのは神さまに對してすまんと思ふ。」

「さうよ。あなたは。神さまにだけぢやないことよ。あたしにだつてすまないわ。競子さんのことを考へてらつしやるのも結構だけど、それぢや競子さん、もつたいないわ。」

「競子は競子、これはこれさ、僕はふわふわした男だからふわふわして了はなきアをさまらないんだ。それで今夜はのるかそるか、ひとつ無茶をやらうと思つてやたんだが、たうとうそれも失敗だ。どうもおれは、饒舌り出すと、こりや饒舌るな。」

「饒舌りなさいよ、饒舌りなさいよ。あなたのして來たこと、仰言つてよ。」

　宮子は參木の傍へピッタリくつつくと、彼の頭をかかへて揺り始めた。參木は揺られる頭の中で今日一日のして來たことを考へた。すると、ますます自分の身體が自分の上へ乘りかかつて來る重々しさを、感じ出した。と、彼は身體を抛り出すやうに饒舌り出した。

「僕は支那の婦人に感心して、一ヶ月の間自尊心と喧嘩し續けて、たうとう頭を叩かれたのが、今夜なんだ。それから僕は死のうと思つた。しかし今死ぬなら支那人に殺される方が良い。、、、、一人でも殺さ

れたら、、、、、、、、、、、、、、とまア僕は考へた。僕は愛國主義者だから、同じ死ぬなら、、のために死んでやらうと思つたんだが、所が、なかなか支那人は殺してくれぬ。殺されないなら死んだつて國の爲にはならないし、同じ死ぬなら殺されやう、と思つてゐるうちに、いつまでたつたつて殺されないから、死ぬことだつて出來やしない。」

「まアまア、結構な御身分ね。あたし嫌ひよ、そんな話は。」

「それから、ここだ、僕が何ぜ殺されないかと考へた。すると僕は此んな支那服を着流してうろつき廻つてゐたからなんだ、しかし、それなら何ぜ支那服なんか着て歩くと君は思ふかも知れないが、此の支那服を着てないと相手の女と逢つたつて、役には立たぬ。そこが僕の新しい苦悶なんだ。」

「あんまり馬鹿にしないで頂戴、あたし聞いてゐますのよ。あたしはさきまであなたの夢まで見てたのに、ちよつとぐらゐは考へて下すつたて、いいことよ。」

「しかし、かうして考へてみると、まア、馬鹿な話は馬鹿な話さ。所が、そいつを眞面目に考へてゐたんだから、ちよつとはどうかしてるんだ。頭と云ふものは、馬鹿になり出すと、つまり、馬鹿な方へばかりだんだん頭が良くなり出す。譬へば君にした所で、甲谷と結婚しないことなんて、馬鹿な方へ頭が成長したからだ。」

「さうよ。あたし、あなたなんかに眼が眩んで、たうとうお嫁さんになりそこねたわ。これもあなたよ。甲谷さんに仰言つといて。だけど、甲谷さんも甲谷さんだわ。あたしにあなたを紹介するなんて、あたしよりまだ馬鹿ね。あたしあなたと結婚するまでは甲谷さんとは結婚しないの。これがあなたへの復讐よ。あなたは甲谷さんへ氣兼ねして、あたしから逃げることばかり計畫してらつしやるんでせう。ぢやなくちやあたしにそんな、支那の女のことなんか、まア、つまんない眞似をなさるのね。それならあたしだつて、愛國主義者になることくらゐ何んでもないわ。」

宮子は立ち上ると、ひき拔いた白蘭花で圓卓の上を叩き出した。參木は、ここにもひとり馬鹿がゐたのかと氣がつくと、心が樂しげに酒の上で浮き上つた。

「おい君、ここへ來てくれ、愛國主義者は一番淋しいのだ。僕は君には同情する。恐らく僕は君を一番理解してゐるにちがひなからう。理解がなければ愛なんてものはない。だから君、來たまへ、僕は君が好きなんだ。」

宮子は近寄る參木を突き飛ばした。參木は後の壁へよろけかかると、また宮子の肩へ手をかけた。

「よして頂戴。あたしは支那人ぢやなくつてよ。」

「支那人であらうが鮎であらうが、かまふものか、愛國主義者を出したからには、日本にとつちや慰人さ。われわれ下級社員に愛國主義者以外の何がある。」

參木は宮子のピジヤマの足を掬ふやうに抱き上げると、絨氈の眞中できりきり速度を加へて廻り出した。と、足が曲つた。二人は倒れた。宮子は參木の胸から投げ出されると、そのまま動かずに倒れてゐた。參木は仰向きになつたまま、まだ廻り續ける周圍の花壁の中から突然絞り出された母の顏を、樂しげに眺め出した。

六

海港の罷市は特別會議が流會したにも拘らず、ますます深刻に進んでいつた。支那銀行は翌日から盡く休業した。銀票發行の小切手が不通になつた。金塊市場が閉鎖された。爲替市場の混亂から外國銀行は無力になつた。さうして、此の全く破壞され盡した海港の金融機能の内部では、ただ僅に對外爲替の音だけが、外國銀行の奧底で鼓動のやうに響いてゐるにすぎなくなつた。

しかし、潰れたものはそれだけでなかつた。海港の殆ど全部の工場は閉鎖された。群がる埠頭の苦力が罷業し始めた。ホテルのボーイが逃げ始めた。警察内の支那人巡捕が脱出した。車夫が、運轉手が、野便酷達が、船内の乘組員が、その他あらゆる外人に雇はれてゐるものが、——

船は積み込んだ貨物をそのままに港の中でぼんやりと浮き始めた。新聞の發行が不能になつた。ホテルでは音樂隊が客に料理を運び出した。パン製造人がゐなくなつた。肉も野菜もなくなり出した。さうして、外人達はだんだん支那人の新しい強さに打たれながら、海港の中で籠城し始めた。

參木は人通りの殆どなくなつた街の中を歩くのが好きになつた。嘗て雜鬪してゐた市街が急に森のやうに變化したことは、彼には市街が一層新しく雜鬪し始めたかのやうに感じられた。義勇隊は出沒する暴徒の爆彈を乘せたトラックを追つ馳け廻した。時々夜陰に乘じて、白い手袋を揃へた支那人の自轉車隊が秘密な策動を示しながら、建物と建物との間を風のやうに辷つていつた。外國婦人は疲れた義勇隊の背後から彼らに食物を運搬した。閉め切られた街並みの戸の隙間からは、外を窺ふ眼だけがぎろぎろ光つてゐた。

しかし、參木は飄々として暴徒に襲はれ續ける、、街の噂を聞き始めると、だんだん足がその方へ動いていつた。、、街では婦女や子供を避難所へ送つた後で、町會組織の警備隊が勇ましく街を守つて警戒を續け出した。すると、彼の身邊の中で、秋蘭を愛した記憶の斷片が

俄に彼自身の中心を改め始めた。と、彼は煙りに襲はれるやうに、道から外れた。が、また彼は、、街の食糧の斷絶を聞いては出かけた。、、暗殺の流言を聞いては出かけた。暴徒の流れ込んだ形跡を感じるとまた出かけた。さうして、彼はいつの間にか、、街の外廓に從つてぐるぐる廻り續けてゐる斥候のやうな自體を感じた。その度に、危害を受けた、、の增加していく話の波が、締めつけるやうに襲つて來た。

或る日、參木と甲谷はいつもの店へ食事をしに出て行くと、食料のなくなつたために拒絶された。米をひそかに運んでゐた支那人が發見されて殺されたと云ふ。それに卵もなければ肉もなかつた。勿論、野菜類にいたつては、缺乏しなければ不思議であつた。

甲谷は外へ出ると參木に云つた。

「これぢや、餓ゑ死するより仕樣がないね。銀行は有つたつて石ばかりだし、波止場に材木は着いてても揚げてくれるものはなし、宮子にはやられるし、米も食へぬとたれば、君、かう云ふ慘酷な手は、神さまが知つてたのかね神さまが。」

しかし、參木には昨夜からの空腹が、彼の頭にまで攻め昇るのを感じた。と、彼は彼をして空腹ならしめてゐるものが、ただ僅に自身の身體であることに氣がついた。もし今彼の身體が支那人なら、彼は手を動かせば食へるのだ。それに——彼は領土が、鐵よりも堅牢に自身の肉體の中を貫いてゐるのを感じ出した。

甲谷は云つた。

「君、君の休業中の手當は出るのかね。俺の金はもうないよ。暫く君の手當をあてにするから、そのつもりでゐてくれ給へ。」

「さうだ、手當のことは忘れてゐた。いづれ何とかなるだらう。出なけりや、今度は、、が罷業をするさ。」

「すると、その罷業はどうなるのだ。罷業をしたつてお先きに支那人にされてちや、罷業にもならんぢやないか。」

「そしたら、支那人と、、だ。」

「すると、俺を食へなくしたのも、君だとなるのか。」

「もう食ふ話だけは、やめてくれ。僕は腹がすいて、たまらんのだ。」

「しかし、休業中の手當を、、にだけ出しといて、支那人には出さぬとなると、こりや、俺もいつまでたつたつて食へないかもしれない。」

二人は兩側の家々の戶の上に、「外人を、、せよ。」と書かれた紙の貼られたのを讀みながら、步いていつた。

「とにかく、殺されるためにや、食べなくちや、」と參木は云つた。

「いや、此の上殺されちや、お了ひだよ。」二人は笑つた。參木は笑ひながら、ふと甲谷と宮子とを嫉妬してゐる自分の存在について[illegible]、た。すると、ここでも彼は不必要な自分の身體に突きあたらねば、

なかつた。彼は云つた。

「君は宮子が本當に好きか。」

「好きだ。」

「どれほど好きだ。」

「俺はあ奴が俺を蹴れば蹴るほど好きになるのだ。まるで俺は、蹴られるのが好きなと同じことだ。」

「それで君は結婚して、もし不幸な事でも起ればどうするつもりだ。」

「所が、俺の不幸なのは今なんだ。今より不幸なことはありやしないのだ。」

參木は競子をひそかに愛してゐた昔の自分を考へた。そのとき、甲谷は競子の兄の權利として、絶えず參木の首を掴んでゐた。が、今は、彼は甲谷の首を逆に掴み出したのだ。彼は云つた。

「君、君はお杉をどう思ふ。」

「あれか、あれは俺にとつちや捨石だよ。」

「あれは君にとつちや捨石かも知れないが、僕にとつちや細君の候補者だつたのだ。お杉を攻撃したのは君だらう。」

甲谷の顏は赧くなつた。が、彼は赧さのままでなほ反り出すと、參木に云つた。

「ふん、俺の捨石になる奴なら、誰の捨石にだつて、ならうぢやないか。」

參木は自分の捨石になり出す宮子のことを考へながら、その捨石の、また捨石になり出した甲谷の顏を、新しく眺めてゐた。彼は云つた。

「とにかく、僕にはお杉より適當な女は見當らぬのだ。君の捨石だつたつて、君に不服はないからね。」

「君、もう冗談だけは、よしてくれ。俺は飯さへ食へないときだ。これからひとつ馳け廻つて、君、飯一食を搜すんだよ。」

參木は默つた。すると、暫く忘れてゐた空腹が再び頭を擡げて來た。彼は乞食の胃袋を感じた。頭が胃袋に從つて活動を始め出した。と、彼は芳秋蘭を思ひ出した。——これが秋蘭のしたかつたことなのだ。——彼は彼女の牙の鋭さを見詰めるやうに、自分の腹に刺し込んで來る空腹の度合を計りながら、食物の豐富な街の方へ歩いていつた。

## 七

參木と甲谷の廻つた所はどこも白米と野菜に困つてゐた。明日になれば長崎から食料が着くと云ふ。二人は明日までに空腹を滿たすためには、暴徒の出沒する危險區劃を通過しなければならなかつた。しかし今はその行く先にも食物があるかないかさへ分らないのだ。參木は甲

谷を安全な街角から家へ歸すとひとり食物を搜しに出かけていつた。

宮子の所へ參木の着いたのは、もう夕刻に近かつた。宮子は參木を見ると、いきなり云つた。

「あなた、今日ここへ暴徒が出たの。、、、がシヤツまで裂かれて逃げてつたわ。昨日は昨日で血だらけになつた、、、が自動車で運ばれたの。それに今夜は水道が危いさうよ。でも、ほんとに、あなた、よくいらしつて下さつたわね。もう暫くお歸りになつちやいやよ。あたし、今夜はどうしたつて歸さないの。」

參木は長椅子へ腰を降ろすと云つた。

「君、何か食べるものをくれ給へ、僕は夕べからまだ何も食べてゐないんです。どこいつたつて食ひ物の品切で、仕方がないから君の所にあつたらひとつと思つて來たんだが、君、ひとつ、頼みます。」

「ぢや、あなたは、あたしのためにいらしつて下すつたんぢやなかつたのね。」

「それは別です。此の次です。今日は乞食に來たんだからつまんない考へは、此の次にしてくれ給へ。」

「まア、嬉し、」と宮子は云ふと、戸棚の中からパンを出した。

「あなた、御覽なさいな、これはイギリスの義勇兵があたしのために、わざわざ持つて來てくれたものなのよ。それにあなたは、あたしん所へこれを盗らうつていらしつて下すつたのね。」

「君の仰言ることはもう充分わかつてゐます。たゞそれを僕が貰へるのか貰へないのか、それだけ教へてくれ給へ。貰へないならこれからまたどつかへいかなくちや。僕は思はせ振りはだい嫌ひだ。」

「そりや、あげるわ。あたしが食べなくたつて、かまはないわ。だけど、これはあたしにとつちや、ここ暫くの露命なのよ。それをあなたがたゞパンだと思つてお盗りになつちや、あたしのこれまでの苦心は臺無しだわ。」

「ぢや、僕がどうすればいいんです。」

「そんなことは、お考へになつたら分るぢやないの。あたしはあなたを虐めてゐるのよ。何ぜあなたがあたしに虐められていらつしやるのか、御存知ないの。あたしはこないだから、あなたをどんなに待つてたかしれやしないのよ。それにあなたがいらしつて下すつて、まア嬉しいと思つたら、パンをくれ、でせう。そりや、あなたにはそれで結構よ。だけど、あたしにしてみれば、あるパンだつて上げたかないわ。」

「ぢや、歸らう。」と參木は云ふと、帽子を探して立ち上つた。宮子はパンをテーブルの上に降ろすと云つた。

「まア、あなたは、それでお歸りになるつもり。」

「歸る。僕は僕の腹の空いてるとき、僕の腹の空き加減を語さなくつ

てもすむ所は、ここだけだと思つて來たんです。それに君は、イギリスの義勇兵がどうだとか、何んだか譯の分りもせぬものを、考へろだとか、そんなことを考へてゐられるなら、こんな所へなんか、來るものか。」

「まア、仰言つたはれ。あたしはあなたに自分の食べるパンまで上げる義務なんか、ちつともないのよ。歸つてちやうだい。」

參木はドアの方へ歩き出した。が、何をここまで來て云ひ合つたのか、ただ今はパンを盜りさへすれば、それで良いのだ。——しかし、彼の足は口論の惰力でもう引き返すことが出來なかつた。彼は階段を降りて表へ出た。すると、宮子はスリツパを飛ばしながら彼の後から馳けて來た。

「參木さん、あたし、あなたにはかなはないわ。何んてあなたは馬鹿なんでせう。もうあたし、あなたから何をされたつていいから、パンだけ上つて歸つてちやうだい。あたし、あなたはいやだ。」と宮子は云ふと、參木の腕をかかへて戻つていつた。

「ぢや、パンだけは、いただきますよ。」

「パンでも何んでも、あなたの召上りたいものは荒してちやうだい。あたし、あなたみたいな變人には、もう何も云はないことに定めちやつたの。」

部屋へ戻ると、參木はパンを兩手の上に乘せながら、笑つて云つた。

「此れか、露命は。馬鹿に輕いね。」

「早く上つて了つてよ。あたし、パンなんかに嫉きもち燒かされたんだと思ふと、見るのもいやなの。」

ふと參木は、いつの間にかパンをかかへて笑ひ出してゐる自分の顔を感じると、一層大きく笑ひ出した。

「いつたいこれは、悲劇か喜劇か、もう僕には分らない。パンを食べてゐられる間は厭世主義者で、食べられなくなると、他人のパンまで奪ひとつて、さてまたこれで滿腹すると、厭世主義者で。これぢや、僕の腹は厭世主義者の工場だ。いづれその中に、罷業する奴が出て來るだらう。そしたら、潰れる。それまで待つてくれ給へ。」

宮子はバタやソセーヂを急がしさうに並べながら、參木に云つた。

「もう、辯解なさらなくたつて、分つてゐてよ。あたしはあなたが生きてさへゐて下されば、もうそれで充分なの。あたしこんな優しい[illegible]かけになつたことなんて、一度もないわ。だから、もうびくびくなさらないで、上つてちやうだい。」

參木はパンを置いて立ち上ると、急に宮子の傍へ近寄つて背後から彼女を抱いた。彼女はそのまま動き停ると、反り返つた。手に持つた眼の鋭がリキユールを入れたコツプを迫らせながら、下つていつた。

と、参木は、秋蘭が彼に接吻したときの輾旋した眼の色を思ひ出した。彼は再び宮子を放すと、パンを持つた。宮子は彼に背中を見せたまま、田舎娘のやうに靜に默つて立つてゐた。

「君、リキユール、」と参木は云つた。

宮子はくるりと向き返ると、参木を睨んで云つた。

「あなたは、あたしを馬鹿にしにいらしつたの。」

「君、もう駄目だつて、怒つたつて、僕はパンをここに持つてるんだ。これさへ持てば。」

「あなたは、あたしを、怒らせたくつていらしつたの。」

「僕が何にしに來たかと云ふことは、もう云つたぢやないですか。もうこれから僕は、ただ君に感謝さへすればそれでいいんです。」

「もうあたし、あなたが嫌ひだ。歸つてちやうだい。歸つてちやうだい。」

「君は僕の頭を、さきからつまらない方へばかり廻したがつてゐるんです。僕が君に感謝をしやうと思つてもさせなくして了ふのは、君なんだ。」

参木はパンをちぎつて食べ始めた。宮子は彼の傍へ馳け寄ると、いきなりパンを拂ひ落した。参木はころころ絨氈の上を轉げて卓の下で停つたパンを眺めながら、歎息した。

「もう僕は、此のパンも斷念した。」

彼は長椅子へひつくり返ると、足を投げ出して眼を瞑つた。

「歸つて、歸つて、」

宮子の激しく突つく力に揺られながら、参木は宮子と結婚したものの日々の生活を想像した。それは恐らく此のやうに氣使はしい感情の逆行し合ふ連續の中で、日々の時間を擦り減らしていくだけにちがひないのだ。——と、だんだん動かされてゐた彼の身體は急に床の上へ轉がつた。が、もう彼は動くのもうるさかつた。そのまま床に倒れて眼を開くと、また彼の視線はいつの間にかパンの上を見詰めてゐた。すると、もう幾時間すればあのパンが口の中へ這入るだらうかと彼は考へた。このままかうしてゐれば、宮子の機嫌のなほるまで、あのパンは動かないにちがひないが、それも自分のかうして動かぬ限り、宮子は動かないにちがひないのだ。しかし、それより何故に自分の身體は宮子の方へ動かないのか。——彼は彼女の方へ動かぬ自分の身體と彼女の身體との空間に、絶えず秋蘭の浮き上つて來るのを感じ續けた。さうして、それは同時に、彼とパンとの距離を此のままいつまでも近づけやうとはしないのだ。

参木は怒りのために蒼ざめてゐる宮子の前から起き上ると、默つて外へ出ていつた。外はもう眞暗であつた。所々に塊つた苦力達は全

人通りのなくなつた道路の上に足を投げだして、虱をとつてゐた。冬枯れの蔓のやうに絡まり合つた鐵條網の針の中を、義勇隊の自動車が拔劍の花を咲かせて辷つていつた。と、アスファルトの上の潰れた落花生を舐めてゐる子供の傍に、紫色の人の足だけが轉げてゐた。

參木は泥溝に沿つて歩き出した。彼はふとお杉のゐる街の方を眺めてみた。と、もう彼は長い間お杉のことを忘れてゐたのに氣がついた。自分のために首を切られたお杉、自分のために甲谷の爪にかかつたお杉、自分を愛して自分に愛せられるのを忘れたお杉、お杉はいつたい此の自分の考へてゐる時間の中で、何を考へてゐるのであらう。――しかし、彼の斷滅する感傷が次第に泥溝の岸邊に從つて凋んで來ると、忽ち空腹がお杉を飲み込んで膨れ出した。彼は身體が透明になるのを感じた。骨のなくなつた身體の中で前と後の風景が入り交つた。彼は橋の上に立ち停ると、ぼんやり泥溝の水面を見降した。水面では、押し上げて來る緩漫な潮に擦れ合ふ舟端が、ぎしぎし鳴つて搖れてゐた。その並んだ舟の中には、手をつけるものを失つた都會の捨てられた排泄物が、どこからか流れる燈火に金色に光りながら、平板な板のやうに波々と擴がつてゐた。そのとき、參木は河岸の街角から現れて來た人影が、もつれながら彼の方へ近づくのを感じた。すると、その人の塊りは急に聲をひそめて動き停つた。彼は險惡な空氣の舞ひ上るのを沈めるやうに、後ろを振り向かうとしたがる自身を撫でながら、そのまま水面を眺めてゐた。が、いつまでたつても停つた人の氣配は動かなかつた。彼は後を振り返つた。すると數人の男が彼を取り卷いて立つてゐた。彼はまた欄干に肘をつくと男の群れに背を向けた。と、二本の手が靜かに後から彼の脇腹に刺さつて來た。彼の身體は欄干の上へ浮き上つた。彼は欄干に腰を降ろすと、その男の顏をかへて周圍の顏を眺め出した。と、突然、停つてゐた人の塊りは彼に向つて殺倒した。瞬間、彼は空の裂けるのを感じた。同時に、彼は逆さまに風の斷面の中へ落ち込んだ。

ふと、參木は停止した自分の身體が舟端を摑んでゐるのに氣がついた。――しかし、ここは――彼は足を延ばすと、それは舟の中であつた。彼は周圍を見廻すと、排泄物の描いた新しい平面が首まで自分の身體を浸してゐた。彼は起き上らうとした。が、さて起きて何をするのかと彼は考へた。生きて來た過去の重い各層が黒い斑點を浮べて通り過ぎた。彼はそのまま排泄物の上へ仰向きに倒れると、眼を閉ぢた。と、再び頭が自由に動き出すのを彼は感じた。彼は彼の頭がどこまで動くのか動く後から追つ馳け出した。と、彼は、自分の身體が自身の身體の比重を計るかのやうに排泄物の中に倒れてゐるのに氣がつくと、にやりにやりと笑ひ出した。（ある長篇の第五篇、及び前篇終り）



# 大地

里見弴

## 七の一

すつかり自分の設計で、普請中も三日にあげず通つてはそこゝと指圖し、どうやら思つたやうに建つたのだが、はいつてみると、急に御大家の主人になりすましたやうな傲りも出、廣いだけに人手もかゝつたりして、月々の費用に追ひ倒され、結局は住み切れなくなつて、もとの本阿彌の借家住居も、逗子まで落ちのびて行つたやうなわけで、驛町の停車場に近い昌造の持家は、その後ずつとひとに貸してあつた。そこも、然し、震災の破損が存外ひどく、間もなく借家人は出て行き、空家になつたまゝで、修繕費のあてがないためにほつたらかしになつてゐたのを、それも無駄だといふので、土地、家屋を抵當に、またもや金を借り足して、職人を入れる運びになつたのは、ついこの十日ばかり前のことだつた。

四月初旬の快晴で、薄着になつた氣の輕さから、昌造は、家ぢう、少な子供までつれ出して、散歩がてら、その右京町のうちの、修繕の捗り具合を見に出かけた。地震後の銀座と云はれたほどで、こゝ半年ばかりの間に、いつもの二年分そこ／＼の商賣をした

らうと思はれる四谷通りは、花時を控えて、一層景氣づいてゐた。與服屋の前には、赤、青の幟などはためき、カフエでは、晝間から、甲高に蓄音器を鳴らした。人道の、ぎくしやくした鈴掛の枝さきには、海老茶がゝつた若葉が、ちよびッと芽吹きかけてゐた。

子供たちには、丁度おやつの刻限だつたので、津ノ守の色街に近い鮨屋へでもよらうと、横町へ切れ込んだ拍子に、ぱつたり顏を合せたのが、健吉だつた。

「やア」

紹々として、更にとりとめのないこの兄が、どうしたことか、ぼうッと顏を赤くしてゐた。

「どこに？」

「いや、ちよつとそこまで……」

下の子の手を引いて、あとから來たおしげが、いやに改つたお辭儀をして、そのまゝ行きすぎやうとするのを呼び止めて置いて、

「どうだい、鮨を食はふつてんだが、附合はないかい？」

「うん、まア、今、腹がいつぱいだ」

たんとなく、濁つた口の利き様だつたのを、遠慮と釋つて、

「いゝぢやないか。ちよつとまア腰かけるだけでも……」

「いや、また今度にしようよ」

そのうち、子供に引ッ張られるまゝに、六七歩さきへ行つたおしげの後姿に目をつけながら、いくらか聲を落して、「それより、ちよいと君に話したいことがあるんだがね……」

「いつ？」

「いつッて、……君、これからどつかイ行くのかい？」

「ちよつと右京町の普請を見に來ようつて、出かけて來たんだがね……」

「ぢア、そのあとはどうだい？」

「いゝよ」

「おしげさんたち、先に歸せるかね？」

「あゝ、いゝとも。どうせ少いのは、往復はちつと無理だらうから、自動車に乗つけて、先に歸しちまやア いゝんだが、然し、一體どこで君と落ち合ふのさ」

「さうすればね、うちでもちよつと話しにくいことなんだから、松葉へ來てくれないか。僕ア、その間に一軒用達をして、先へあすこイ行つて待つてらア」

松葉といふのは、四谷に住んでゐた頃、うちで客と飲んだりした揚句、今から遊ッ走りするのも億劫、といふやうな場合に、ぶらりと出て、盡ない酒興をつゞけるところにしてゐた津ノ守の待合で、同時

吉にも、古くからの馴染らしかつた。そこへ誘はれるとすれば、話といふのも、新情人の御披露くらゐがおちではないか、といふ気もしたが、それにしては、今日の健吉の様子に、珍しく、へんに改まつたやうなところもあつた。

「先につて、僕の方もさう永くはかゝらないんだけど、……まア、兎に角行かう」

「あゝ、ぢア、待つてるよ」

「鮨を食つて、うちを見て、と、……さうだなア、大抵一時間半かそこらしたら行けるだらう」

「うん、そのくらゐ、丁度いゝや」

互に帽子には手も觸れずに、頷き合つて別れたが、おしげたちは、そこからもう五六間しかない鮨屋へはいつて了ひ、昌一だけが、紺暖簾の下に顔を覗かして、見迎へてゐた。

「いらッしやい！」

三和土の上に、小椅子の足を軋ませて引きよせ、端の席につくと、

「あなた、なんかさう仰有らないと……」

「お前たちの分は、もう頼んぢやつたんだね？」

「えゝ、お先に……」

「ぢア、あたしはね……」

誂へを云つてから、おしげの方へ笑ひかけて、「健ちやんつて人も、いゝ人だねえ、赤い顔をしてゐたぢアないか」

「さうですか？」

おしげは、子供の胸へ手巾をかけてやつたりしながら、目も向けてよこさなかつた。

「気がつかなかつたかい？」

「えゝ。でも、どうしてです？」

「どうしてつて、健ちやんがこの横町から出て来れア、大抵行つてた先のあてはつかうッてもんぢアないか」

「さうですかねえ」

この頃のおしげにしても、特別また冷淡だつた。昌造も黙つて了ひ、やがて、歯に冷い鮨を噛んだ。

## 七の二

約束の時間よりだいぶおくれて、昌造は、五時ちかく松葉へはいつて行つた。導かれたのは、深い谷に臨んで、真下を見れば、十階と云つてもいゝほどの、奥二階の六畳だつた。茶碗が一つ載つたきりの卓臺の前に、胡座で、健吉は、黒い革表紙の懐中日記に、英語か羅馬綴りか、兎に角横文字で、熱心に書き込みながら、

「や、來たね」
「待つたかい？」
「うん、さうでもない」
　案内にたつた女中が、やれお見限りだの、誰それがよく噂をしてゐるのと、月並な世辭を並べるのに、うはの空ながら、一々言葉を返して、どうやら一段落ついた頃、健吉も、エヴー・シャープの手をとめ、帳面には護謨の輪をかけてから、肇て顔をあげた。
「どうだつたい？　うちは」
「あゝ、だいぶ出來てた」
「おしげさんたちは……？」
「今、そこで、自動車を拾つて、乘つけて歸してやつた」
　そんなことを云つてゐるところへ、別の女中が、昌造の分の茶と、絞り手拭を運んで來た。顔を拭いて、
「あゝ、突ツ立つてたらくたびれた」
　よく晴れた日の暮がた、急に來る冷さに、健吉は掌を揉んで、
「おい、お稼さん。火が少し貧弱だね」
「あら、さうですか」
と、伸びあがつて見て、「おや〳〵。……持つて參りませう」
「赤いやつをね」
「はい。……そいから藝者衆はどういたしませうね」
「まだ〳〵。あとでこつちで云ふから……」
「ぢア、なんか、あつさりしたもんで、お銚子もつて參りませうか」
「それも、ちよつとまア待つて貰はうよ、——少し用談があるんだから」
　その「用談」といふ言葉を、云ひ方で、いくぶん巫山戲た意味に響かせた。
「どうでせう、まア、御兄弟で、お仲のいゝこと」
　ケツケツケ、、、と聞えるやうな、空々しい笑聲を殘して、女中が出て行つた。
　紫檀色に塗つた華櫚の角火鉢を持ちあげ、投げ出した膝の上を越して、昌造との間へ直した。灰ならしの痕もなく、淺くたゞ突ツ込んだ炭が、あらかたもうたち消えしかけてゐた。火箸を把つて、昌造は、まづ炭を片よせ、ぐる〳〵と渦に、眞中から灰を柔らげだした。
　近くに風呂の煙筒でもあるのか、石炭の煙臭い匂が、締めきつた障子のなかまで微に流れ込んで來た。健吉は、クン〳〵、二度ばかり鼻の奧を鳴らし、序に、威勢よく洟をかんだ。そのあと、手巾をひと折りするごとに、うんと鼻の下を長くして、赤くなるほどひどく、横にひツこすつたが、火箸を濕に差して、ぢツとその樣子を見てゐる昌造

と、ふと目が合ふと、靜な笑ひ顔になつて、
「なんだい」
「うん？」
「何をそんなに、一生懸命見てるんだよ」
「ふーん」
意味なく、昌造も笑つた。——何か、夕方らしく、氣力のぬけきつた氣持だつた。
「なんだい？ 話つて」
また暫くしてから、昌造が、さう大して訊きたい氣もなく、たゞ場所ふさげに、その言葉を置いてみた。
「まア待てよ。いま火を持つて來るから……」
一軒ぴよこんと突ッ立つた二階家だけに、いよ〳〵落ち込むまでの陽が、いつまでも未練らしく障子を染めてゐた。それが、下からだんだんに、寒々とかげつて行つた……。
たッたッたッ、たゝた、と足音が近づいて、
「どうも」
で、襖をあけ、「お待遠樣」
「馬鹿に火の用心のいゝうちだなア」
「え？」
それでも、すぐ氣がつくと、また例の笑ひ顔をうけて、「ぽかと來ると、忽ち、……現金なもんですわねえ」
「下手だなア」
「だいじよぶよ。すぐ熾るからみていらつしやい」
「ちよいと借せよ」
「だいじよぶですッたらね」
「ぢア、吸殼、とつてけよ」
「これから、今、ひらうところぢアありませんかね」
すつかりすますと、臺十能を押しやり、それまで中腰でゐたのが、昌造のまん前にぺたりと坐り込んで了つて、まづ自分の掌先を遠火にかざし、こすり合せた。
「どうです、御覽なさいな、すぐ熾つて來たでせう？」
「してみると、お前、やきもちやきだね？」
「あら、世帯もちがいゝつて云ふんぢアありませんか。ねえ、加アさん」
「さ、用談だ。早く階下イ行けよ！」
そこで始めて昌造が、無愛想な口を利いた。
「うん」
急に健吉も眞面目顔になつて、「呼ぶまで、君たちも來なくつてい、

よ」

「一體、あんたがた、何しに待合にいらつしやつたの？」

「地震後、だいぶ客種がおちたね」

「まつたく。……わるいお客だわ」

と、火鉢の緣へ兩手を突つ張つて、さも重さうに腰を擡げ、「さ、今のうちお風呂イ行つて來よう」

健吉ももう相手にならなかつたが、襖のそとに出ると、急に猫撫聲になつて、

「どうぞ、ごゆつくり」

これでまた、思はず吹き出して、

「馬鹿！」

「ケツケツケヽヽ」

足音を、梯子段の下まで聞きすましてから、健吉は、座蒲團ごと、火鉢のそばへ席をいざらせ、昌造は、形よく炭をつき直してゐた。そのまゝ默り込んでゐる兄弟に近く、薄暮は、障子を蒼み亘らせた……

…。

「なんだい？」

「うん。ちよつとね。どうも少し容易ならないこつてね……」

「うん」

目をあげ、瞳を合せると、

「なんか、思ひあたることがあるかい？」

「ない」

「僕等と違つて、君は感情が烈しいから、云ふのも、實ア心配なんだけれど、さうかつて、默つてゐるわけにもいかないこつたし……」

「なんだい」

「實はね、僕にも、先、おんなじやうな事件があつてね、……亞米利加でさ、……生きた人間にピストルを向けたこともあるんだ。……實際、腹はたつよ。君の性分ぢア、なほだと思ふけど、……腹をたてちア駄目だよ。いゝかい？　だいじよぶかい？」

「一體、どういふんだい」

「ほんとに、腹をたてないね？」

「それア、わからないけど、大抵なことまでは動じないつもりだ」

さうは云つても、昌造は、豫感だけで、顏がすう〱と冷くなつて行くのがわかつた。

「僕でさい、人殺をしかねない氣持になつたんだから……」

「うん。それアもうよくわかつた。……そいで？」

「つまりだね、おしげさんが、とんでもないことをしちやつたらしいんだ」

ぐーん、と唸を生じて、喉を突きぬけたものがあつた。

「らしい、ぢアない。らしいやなんかで、こんな話が出來るもんぢアないんだから……」

「うん。ぢア、なんか……」

「それも、いま云ふけど、君にやア、まるつきりさういふ心あたり、——ツて云ふのもをかしいが……」

「つまり、疑だね」

「うん。まア、……さういつたやうなもんはなかつたかね？」

「なかつた」

「ぢア、さぞ……」

「だけど、……決して負惜を云ふわけぢアないけど、いま君に聞くと同時に、あれも、これもと、思ひあたることがたくさん出て來た。それだのに、どうして今まで疑をもたなかつたかと、不思議な氣がするくらゐだ」

「思ひあたることがあるだらう？」

「ある。一々ある。だけど……」

「うん。それアね、一番初めは、どうも千榮の様子がへんだと思つたんだよ。酔ツぱらふと、ふた言目には、死にたい、死にたい云つたり、どうしても生きてはゐられない、なんて泣きだしたりすることがあるんだ。さうかと思ふと、兄さんのことを云つて、羨しがつたり、ね。これアあとてつきりさうだと思つたから、二三日前の晩さ、夜おそく、二人でわきから歸つて來る途中で、いろ〳〵云つて訊いみたんだけれど、すみませんが、どうぞこれだけは勘辨してくださつて、泣いてあやまるんだ……」

「酒は飲んでたのかい？」

「うん。二人ともいゝ加減酔つてたんだが、……泣かれるとね、……實は、俺にも、今、ちよいと似たやうな事件があるんだけど、……だもんだから、へんにから興奮しちまつてね、君も俺もおんなじ罪を犯してるんぢアないか、それに、……千榮だつてその事件は知つてるんだから、……それだのに君が、俺に打明けないつて法はない、さう云つてね、三光社のなかで抱き合つて泣いちやつたんだよ……」

要するに、實生活上の趣味、とでも云ふべき、くだらないものなのだが、昌造には、その場の様子を、それ以上眼前に浮べてゐられない氣持が、頻に動いて來たので、

「さうしたら、たうとう白狀したんだね？」

「いや、しないんだ。あなたにすまない、あなたにすまないつて、おい〳〵泣いてるばかりなんだ。だけど、こつちからさう云つて訊けば……」

よ」

「一體、あんたがた、何しに待合にいらつしやつたの？」

「地震後、だいぶ客種がおちたね」

「まつたく。……わるいお客だわ」

と、火鉢の縁へ兩手を突つ張つて、さも重さうに腰を擡げ、「さ、今のうちお風呂イ行つて來よう」

健吉もう相手にならなかつたが、襖のそとに出ると、急に猫撫聲になつて、

「どうぞ、ごゆつくり」

これでまた、思はず吹き出して、

「馬鹿！」

「ケツケツケ、、」

足音を、梯子段の下まで聞きすましてから、健吉は、座蒲團ごと、火鉢のそばへ席をいざらせ、昌造は、形よく炭をつき直してゐた。そのまゝ默り込んでゐる兄弟に近く、瀬暮は、障子を蓄み直らせた……。

「なんだい？」

「うん。ちよつとね。どうも少し容易らないこつてね……」

「うん」

目をあげ、瞳を合せると、

「なんか、思ひあたることがあるかい？」

「ない」

「僕等と違つて、君は感情が烈しいから、云ふのも、實ア心配なんだけれど、さうかつて、默つてゐるわけにもいかないこつたし……」

「なんだい」

「實はね、僕にも、先、おんなじやうな事件があつてね、……亞米利加でさ、……生きた人間にピストルを向けたこともあるんだ。……實つ際、腹はたつよ。君の性分ぢア、なほだと思ふけど、……腹をたてちア駄目だよ。いゝかい？　だいじよぶかい？」

「一體、どういふんだい」

「ほんとに、腹をたてないね？」

「それア、わからないけど、大抵なことまでは動じないつもりだ」

さうは云つても、昌造は、豫感だけで、顏がすう／＼と冷くなつて行くのがわかつた。

「僕でさい、人殺をしかねない氣持になつたんだから……」

「うん。それアもうよくわかつた。……そいで？」

「つまりだね、おしげさんが、とんでもないことをしちやつたらしいんだ」

ぐーん、と唸を生じて、脇を突きぬけたものがあつた。

「らしい、ぢアない。らしいやなんかで、こんな話が出來るもんぢアないんだから……」

「うん。ぢア、なんか……」

「それも、いま云ふけど、君にやア、まるつきりさういふ心あたり、——ッて云ふのもをかしいが……」

「つまり、疑だね」

「うん。まア、……さういつたやうなもんはなかつたかね？」

「なかつた」

「ぢア、さぞ……」

「だけど、……決して貸借を云ふわけぢアないけど、いま君に聞くと同時に、あれも、これもと、思ひあたることがたくさん出て來た。それだのに、どうして今まで疑をもたなかつたかと、不思議な氣がするくらゐだ」

「思ひあたることがあるだらう？」

「ある。一々ある。だけど……」

「うん。それアね、一番初めは、どうも千葉の様子がへんだと思つたんだよ。醉ッぱらふと、ふた言目には、死にたい、死にたい云つたり、どうしても生きてはゐられない、なんて泣きだしたりすることがあるんだ。さうかと思ふと、兄さんのことを云つて、羨しがつたり、ね。これアもうてつきりさうだと思つたから、二三日前の晩さ、夜おそく、二人でわきから歸つて來る途中で、いろ〳〵云つて訊いみたんだけれど、すみませんが、どうぞこれだけは勘辨してくださいつて、泣いてあやまるんだ……」

「酒は飲んでたのかい？」

「うん。二人ともいゝ加減醉つてたんだが、……泣かれるとね、……實は、俺にも、今、ちよいと似たやうな事件があるんだけど、……だもんだから、へんにから興奮しちまつてね、君も俺もおんなじ罪を犯してるんぢアないか、それに、……千葉だつてその事件は知つてるんだから、……それだのに君が、俺に打明けないつて法はない、さう云つてね、三光社のなかで抱き合つて泣いちやつたんだよ……」

要するに、實生活上の趣味、とでも云ふべき、くだらないものなんだが、昌造には、その場の様子を、それ以上眼前に浮べてゐられない氣持が、頻に動いて來たので、

「さうしたら、たうとう白狀したんだね？」

「いや、しないんだ。あなたにすまない、あなたにすまないつて、おい〳〵泣いてるばかりなんだ。だけど、こつちからさう云つて訊けば……」

「さう云つて、ッていふのは、つまり、おしげの名を出して、ッていふ意味だね？」
「うん。……さうすれば、それは否定はしないんだ。だから、自分の口から云はないだけのことで、結局まア白狀したもおんなじことになるんだが……」
「然し……」
「あゝ、無論それアさうだ。それだけのことで、勝手にこつちでさうときめ込んでしまうわけにやアいかないさ。僕だつて、それアそんな無茶アしやアしないよ」
「と云ふと、なんかほかに……」
「うん。それアね、實は昨日、伊賀町へ行つて、偶然手紙を見ちやつたんだがね……」
　伊賀町といふのは、千葉、長谷部の二人が、とも〴〵二階借をしてゐるうちを指すものだつた。逗子の方で損んだ世帶道具なども貰つて行つたりして、相應きちんと住みなしてゐるのを、何かの序に立ち寄つて、昌造も、あがつて見て來たことがあつた。
「手紙つて、つまり、おしげからやつたもんだね？」
「さう。……昨日の晝間さ、丁度二人とも留守のところへ行つちやつてね、荷物を預んどいた都合で、急に要用になつて來たのがあつたんで、あがつてつて、あつちこつち探してゐると、ついこないだ千葉にやつたばかりの手提鞄があつて、鍵がおりてるんだ。ところが、……それがどうも、彼方から云やアよく〳〵運がわるいんだが、豫備の鍵が、一緒に附けてやるのを忘れて、僕のこの鍵袋に殘つてたんだ」
云ひながら、袂を探つて、ちよつと見ると鍵入のやうな、なかにＡＢＣの印のある何本かの鍵があつて、その一つ一つの先へ鉾をぶらさげて置く仕掛の革袋を把り出すと、ヂャツガ〳〵と振つてみせて、「これさ、……これにくつ附けたッぱなしになつてたことは、その前から氣がついてて、今度來たら忘れずに渡してやらう、と思ひ思ひ、ついそのまんまになつてたんだがね、偶然それが役にたつたといふのも、云つてみれば、まア、不思議な因緣さ」
「で、どういふ手紙なんだい」
　胸先へ、數知れぬ針を、一面に打ち込まれる思ひで、たらり〳〵と腋の下から脂汗が流れおちた。
「どうつて、別にさう大したことも書いちアないんだがね、……みんな、大抵、どつかで逢ふ打合なんだ。四谷の停車場だとか、なんでも、玉川なんぞへも一緒に行つたことがあるらしいね。……まア、君の前で云ひにくい話だけれど、あゝいふ手紙を書いてゐるとすれば、ちよつとどうも、辯解の餘地はないと思ふね」

「さうかい。有難う。よく云つてくれた……」

兩手を火鉢の縁へ突つ張つたまゝ、昌造は、がくんと首だけのお辭儀をした。――いつの間にか、眞四角に坐つてゐた……。

「いや」

不意を撃たれた態で、健吉も、ぴョこりと頭を跳ませて、「どうも、いやなことを聞かせるんで……」

「うーん」

抑え抑えてゐた息が、思はず伸びると、動悸のために震へた。

「で、君は、どうするつもりだい？」

兄としては、この答が一番心配らしく、少し大袈裟に云へば、恐る恐る、の感じだつた。それもいくらか斟酌されたが、昌造には、そんな思案は、まつたくまだ浮んで來てゐなかつた。

「それは、これからよく考へてみなくつちア」

「然し、君は、感心に慍らないね。憎らしくないのかい」

「これから先、どう變るか知れないが、今ンところは、可哀想だ」

これは見榮や負惜で云つたのではなく、眞實さうだつた。最近二月ほどの、暗く、元氣なく、そわ〱と始終落ちつきを缺いたおしげの樣子、――樣子も樣子だが、その心のうちが、隅から隅まで、今や、手にとるやうにはつきりと、昌造の胸へ映つて來てゐた。映る、といふやうな生優しさではなく、むしろ、塗りつけられた感じで、昌造自身の氣持が暗み、沈み、落ちつきを失はうとしてゐた。それは、一人おしげに止らなかつた。滿潮を賴んでゐる夜更の机を前にして原稿のとぎれ目などに、宙を見詰めて、ぢッと考へ込んでゐる、希望なく救ひのない千葉の顔つき、――その心のなかもあり〱とわかつた。これもまた、おしげのそれと、差別のあるべきものではなかつた……。

「可哀想だ？」

「いやに聖人ぶつた口を利くやうに思はれるかも知れない。でなきやア、齒痒い腑ぬけみたいに見えるかも知れない。だけど、この頃の二人の氣持がよくわかるんだ。買被りだつて云ふかも知れないけど、僕に罪人の氣持だよ。だから、僕ア可哀想なんだ」

「それア、さういふ觀方をすれア、それに違ひないさ。だけど、僕ア、……それア、場合も事情も違ふけど、ずゐぶん腹がたつたな」

「それがほんとなのかも知れないよ。だから、今に僕も、だん〱さうなつてくかも知れないがね、少くも、今は……」

「ほんとに君がそんな氣持なんなら、僕も安心だし、二人だつて、仕合せ、――と云つちアをかしいけれど、まア……」

「然し、困つたことが出來た！」

目をつぶつて、額に掌をあてゝた。火のやうになつてゐた……。

「一體に云ふと、君もちつとうちをあけすぎるんだよ。今夜は仕事をするからつて、わざ〳〵千鶴を呼んどいて、それつきり歸つて來なかつたりするやうなことも、度々あつたやうだがね、……あんな狹いうちで、……亂暴だよ。去年の年尾に上方に行つてた留守だつて、大方君ンとこに泊りッきりでゐたらしいし、いくらおしげさんを信用してるからつて、そんなことは、もうちつときちんとしなくつちアね……」

「うん。それもさうだし、もう一つ根本へ遡つて云へば、僕におこうつてもんがあるのが、抑ものもとの起りさ。重々僕に責があることなんだよ」

「無論もとの起りはさうだがね、一體、男女の間なんて、機會だけだと云つてもいゝくらゐなもんだからね、あんな風に、自由に機會を與へとくつてのが、抑も間違の種だよ」

「さうかな」

「丁度、萬引の罪は、半分は店の方にもある、つていふやうなもんだね」

「うーん」

重く、苦い、へんな土のやうなものを、胸のうちにこね返してゐた啓吉は、暫くして、思ひ切つて、

「もう、、、、、、いつてるのかしら、――そんなこと、君に訊いたつて仕方がないけど」

「どうも、それアさうだらうね」

「正月ごろだつたかしら、自分で、おそい初戀だ、なんて云つてたことがあるんだけど、その時分にやア、まだそこまではいつてない感じだつたがな」

「おしげさんが、自分でさう云つてたのかい？」

「うん。僕の方ぢア、たゞ概念的に、そんな感じの生活を覓めてるんだらう、ぐらゐにしか考へなかつたんだけど……」

「どうも君は、すこウしひとを信用しすぎる態があるな」

「さうだね。少くも、うたぐろ、つて氣持は、とてもたまらないんだ。それくらゐなら、いつそ、上手に騙しといてくれる方がよつぽど有難い」

「さう云ひやア、僕もまアその方だけれど……」

「うちの兄弟に共通した弱味だね。踏ン込まれるとも、こつちからは踏ン込んで行けない、――みんなさういふところがあるね。……然し、君が亞米利加で、ピストルを持ち出したつて話は噂で聞くが、一體、どうしたつこんだい？」

「奴ア幹部の連中さ。僕等よりずつと後に來て、あんまり知つてた人も

ゐないらしかつたから、いろ／＼まア面倒をみてやつてたんだがね、毎日僕ア店へ出なくつちアならないし、見物だア、買ひものだアつて、よく朋子がつれて歩いてやつてたんだよ。そのうちに、まア、へんなことになつちやつたんだね……」

「ふーん。そんなことがあつたのかい」

この、朋子といふ、健吉の先妻は、ぐうたらのやうでゐて、底になんとなく情の篤いところもあり、しつかりした性根もみえて、昌造は、わりに好意をもつてゐた。健吉もまだ若くて、遊び好きで、女が出來て出來て始末に困る、といふ風な時代だつたから、細君にとつては、決して仕合な家庭ではなく、なんのかのと始終ごたついてゐる樣子だつたが、弟でもあり、はたからどうにかなることでもないので、話は聞いても、昌造は、至極冷淡に構へてゐた。夫婦で阿米利加へ渡ることになつたのも、一つには、この家庭生活に一方の活路を開かせやうといふ、文吉あたりの指金に依るところがあつた。それが、渡米後、二年になるかならないに、朋子を離緣する、が、一人では歸せないから一緒に歸る、さういふ前ぶれで、たうとうこれといふ仕事にも取りつかないうちに引きあげて來て了つた。ところが、歸つて來ると、そのまゝまたぐづ／＼に同棲することになつたのも健吉らしかつたが、それから半年ほどして、突然朋子の死が來た……。

昌造一家が逗子に移つてからで、日本橋の瀬村を上京中の宿にしてゐる頃だつたが、電話で健吉に呼ばれて、四谷の、かねて知合の病院に行つてみると、寢床に横へられてゐる朋子の生際や目の周り、小鼻の切れ込みなどが、うつすり紫ずんでゐた。別の部屋で、健吉は、實は藥を服んだのだ、と明して、こゝの院長の診斷では、十中八九までは助る、といふことだから、親類にも誰にも知らせない、君だけ呼んだのだからそのつもりで、といふ話だつた。患者も、わりに元氣に口を利いてはゐたけれど、部屋に罩つた一種の匂ひと、紫ずんだ隈とで、昌造は、どうかな? といふ氣持だつた。それだけに、——健吉の、たゞ一人昌造を招いた氣持もよくわかつてゐながら、永く病室に止まる勇氣はなかつた。——翌日の午後には、朋子の、突ッ張つて了つた體を、そこの院長と二人で抱き抱へて、靜に階段をおりなければならないやうな始末だつた。頭の方に廻つた昌造は、目の下に、屍に紫の色を濃くした顔を見て、暗涙といふのはこれか、と强て思ひあたられたやうな、涙のない涕泣を肚の底に泣いてゐた……。

「さうさ。そのために、急に僕ア、亞米利加から歸つて來る氣になつたんだよ」

「そいで、歸りの船ンなかなんざア、どういふ具合だつたんだい?」

「それさ。そこが俺の弱いところでね、船ンなかで、またもとの夫婦

仲に戻つちやつたのさ」

「さうだらうね。どうも、然し、それア仕方がない。もと〱、離縁しようつて相手を、日本までわざ〱送つて來るつてのが、……なんて云ふかなア……」

「甘いか」

「さう、甘いも甘いが、……つまり、まア、離縁する氣がないもおんなじこつたね」

「君の場合としては、……何しろ、大勢子供があるんだからなア」

「兎に角、まア、二人の氣持をよく訊いてみてからのことにしようよ。それを土臺にして、こつちの考へをきめるより仕樣がないこつたからね。どうだらう？」

「いゝだらう。そいだけ君が落ちついてれアだいじよぶだ」

伸びあがつて、空へ面を突き出してゐるやうな窓障子も、その上は脊髓を吸ふよりほかない暗さだつた。——互の顏も、細な表情までは見わけられなかつた……。

「落ちついてゐる」このひと言を聞くと同時に、どうしたことか、急に昌造は、ぐうッと肚の底からこみあげて來た。兩手を膝に、切れるほど下唇を嚙んだ。顫えをとめようと、下腹ふかくいつぱいに息をのみ込んで、放たなかつた……。

「うつかりしてた」

健吉は、立つて、電氣をつけようとした。

「まだいゝやね」

## 七の三

その晩、恐しくも兄弟は、松葉に始つた醉を惜んで、新たに許可された近くの色街に飲み、更に、——昌造としては初て見た顏の藝者や幇間を、自動車二臺に滿載して、時々瑛龍と二人で身を隱したことのある吉祥寺の宿屋へ、夜更の郊外を飛ばした。

昌造はめちやくちやにはしやいだ。ずらりと敷き並べた床に、、、、、、、。——その上を、大道を濶歩するやうに、往つたり來たりした。地びたが、キー〱、キヤア〱音をあげて蠢動した。ドンクのやうに、山を越え、谷を渉つて轉げ廻つた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

さういふ間にも、きり〱きりッと、あたまへさゝつて來るもの？あつたが、それのある限りは酒をあほつた。さうして、大聲をあげてあばれ廻り、とゞのつまりは、どことも知れない谷底へ轉げ込んだまゝ、鼾睡に陷つて了つた。

翌朝、廣い御所のなかにしやがんでゐると、掃出窓に、朝日が、木

の翅の影をちらくら躍らせてゐた。それに目を据ゑてゐても、陰翳は、一人とみて、十重二十重におッ取り捲き、遠巻にぢり〳〵と迫つて來た。卑怯にも、昌造は、いゝ加減で飛び出して來て、……酒だつた。

けれども、宿酔の胃壁からは、いゝ具合に精酒が吸收されなかつた。液體としての量の感じばかりが胸へ詰り、それへ陰翳の黴菌までがたかつて來た。まるで覺えのない、昨夜のうちへ引きあげたが、眞新しい安普請の二階に夕日がさし込んで、ところッぱげのした白粉の顏が、一人へり二人へりして行く頃には、いよ〳〵もう我が家よりほかに足の向けどころのない氣持だつた。——例令そこに何が待つてゐようとも……。

「歸るよ」

「うん？」

床柱に座布團をかけた枕から、首を擡げ、赤い薄目で、健吉が、「うん？　なんか云つたかい？」

「先に歸るよ」

引きとめやうのない眉間の縦皺だつた。

「さうか」

急に目を大きくして、瞳と瞳とを合せたが、すぐ逸して、「おい、平作！　自動車さう云つてやつてくれよ」

表の格子戸はあけ放しに、薦の塵や、麻縄の切ッぱしが散かり、梯子段をあがると、通り道のない荷物の山だつた。帽子と二重廻しをかけやうとすると、その荷の蔭で、千葉が、行李に細引をかけてゐた。

「あッ、お歸ンなさい」

頷き返しただけで茶の間にはいつて行つた時、割烹着に姐さん被りのおしげが、瀬戸火鉢に肘頭を倚せかけた中腰で、一服吸ひつけかけてゐた敷島を、長いまゝ灰に差して、慌たゞしく立ちあがらうとしてゐた。

「お歸ンなさいまし」

呟くやうに云ひ、小膝をかゞめて摺れ違ふと、トン〳〵と二階へあがつて行つて了つた。

押入の襖は取りはづされ、家財道具は、いつぱい部屋ぢうに散らばつてゐたが、存外うちのなかは靜だつた。——足手纏ひになる子供たちは、どこかへ遊びに出されてゐるのだらう……。

落ちつけやうのない尻を、兎も角も瀬戸火鉢の前に据ゑて、昌造は、ぼかアんと、狭い庭先の、薦にくるまれた荷を見詰めてゐた。藁の色が、夕方らしい空の微光をうけて、支那陶器にある黄色さに、澄み、冴えて、綺麗だつた……。

臺所の方から、女中がはいつて來て、昌造のゐるのに吃驚し、突き膝で、片手を裾に、

「お歸ンなさいまし」

と、低聲に挨拶した。

「うん」

布團も敷かずに、きちんと坐つてゐたのを、胡座に崩して、「子供たちは？」

「御分家さんへ行つておいでです」

壬之助のうちのことだつたが、ひと馴染のわるい子供たちは、つい隣でゐながら、めつたに自分たちだけで遊びに行くやうなこともなかつたので、

「誰かついてつてるのかい」

「はア、お安さんが……」

「そいぢア、こイだけの荷造りを、おしげと千葉君とお前とでやつたのかい」

「いゝえ、先刻まで運送屋さんが來て居りました、お隣のお秀さんも……」

「馬鹿に早手廻しだな。まだいつ越すともきめてないんだらう？」

「さア、いかゞですか……。旦樣に伺つて參りませうか」

皮肉ッ氣は微塵もないのだが、主人を前に置いてのこの言草は、昌造の脣を苦笑ひに歪めさせた。

「いゝよ」

間もなく女中は、何か持つて出て行つた。昌造は煙草をつけて、一本、ゆつくりふかし終つてから、吸殼を灰に差し込む時、そこに立ち並んだほかのへ目が止つた。エヤ・シップの、パラフインかなんかで固めた差込口と敷島、それが、緣の丸味に沿つて、まぜこぜに、所によつて疎に密に、ぐるりとひと廻りしてゐた。そのなかには、さつき吸ひかけてよした、長いまゝの敷島もあつた。——鋭く光る自分の目を、想像の鏡に映してみて、昌造は、忽、淺間しくも情ない氣持になつて行つた……。

（兎に角、今夜は、千葉を歸さずに置いて、みんなが寢てから話を聞かう。それから……）

何も豫め考へて置く必要はない。なまじそんなことをして、自分で自分の考へに捉はれるやうではつまらない。——これが、昨日から、堅く自分自身に掟してゐるところだつたが、一人でゐると、否應なしにそこへあたまが向いて行つた。

（……それアいゝとして、……これで引越も、いつのことになるか、第一、出來るんだか出來ないんだか、……まア、どうだつていゝや…

…」

暫くして昌造は、厠へ立ち、酒くさい小便をしてから、三疊の玄關を通りぬけて、二階へ行きかけたが、いつかそこに千葉がゐなくなつてゐるのに、ぴたりと足を止め、すぐまた思ひ返して、ことさら足音を高めて、元氣らしく階段を踏んだ。が、あがつてみると、隣の健吉のうちの、お秀といふ女中も手傳つて、おしげが床側の地袋から取り出す道具類を、片端から古新聞に包んだりしてゐたし、千葉は千葉で、別に、縁側の突きあたりの戸棚を整理してゐた。

お秀の挨拶に、

「やア、どうも御苦勞様」

と、答へて、懷手のまゝ、ぶらり／＼そこら歩き廻つた。あれはどうします？ だの、これはどう／＼しといてください、だのといふやうな、かういふ場合に、必要よりはむしろ掛聲のやうな意味で取り交され、それによつてなんとなく活氣づけられる應酬といふものが、一切、誰の口からも洩れなかつた。それは、敏捷く烈しい動作が、スロー・モーションで映しだされてゐるやうな、一種、間拔じみた寂しさの畫面だつた……。

昌造は、やがて、妻のそばに立つて、

「さういちどきにやつちまはなくつてもいゝぢやアないか」

「でも、……そちらの御都合はいかゞですか、成可明日か明後のうちに越しちまひたいと思つてるもんですから……」

「でもね、兎に角一遍片づけて、掃き出すなりどうなりしないと、子供たちが歸つて來ても、飯を食はせる場所もないぜ」

「茶の間のものは、あれくらゐにしとかうと思つてるんです」

「だからさ、もうぢき飯の時間なんだから、兎も角ひと區切つけて、うちンなかを片づけちまつたらどうだ、つて、それを云つてるんぢアないか」

「はい。さういたしませう」

すうウと立つて、すぐ階下へおりて行かうとするのを呼び止めて、よその女中の手前、

「おい、こゝはどうする？」

「あとであたしがいたしますから……」

昌造は、電氣をひねつたが、まだ來てゐなかつた。お秀に、

「このまゝそつくり床の間にでも載せといて、あとはまた明日のことにしようよ」

さう云つて、自分から先に立つて運んだ。

ふと見ると、千葉がゐなかつた。昌造の胸に、漠な不安が來た。

……。この場合、二人きりで置くことは危險だ。突き詰めて、どうい

手段を撰ばないとも限らない。――さういふ心配が頭を擡げて來たのだ。

　事が迫つてゐる、とは、恐らく昌造が歸つて來ない前から、およそ二人の心に感じられてゐない筈はなかつた。……昨日、質屋への曲り角で、健吉とおしげとが顏を合せた時の具合、――あとで思へば、華街から出て來たくらゐのことで、顏を赤らめる健吉でもなく、無論おしげの秘密を知つて、これからそれを良人の耳へ入れようとしてゐる自分自身の立場を、氣の弱さから、なんとなく後めたく感じてのことに違ひないのだし、一方またおしげの、まるで慍つてでもゐるやうな無愛想も、健吉が、曾て千葉の雇主であつたばかりでなく、親切氣から、生活の隅々まで立ち入つて面倒をみようといふ風だし、家は堀一枚の隣同士だし、越てから、一番警戒を要する人としてけむッたがつてゐたところへ、昨日のあの樣子で、直覺的に、あ、ばれたな！　といふやうな感じをうけ、そのために急にあゝまで堅くなつて了つたものと察しられた。おまけに、歸りがけ四谷通りで別れる時にも、昌造はなんの氣もつかずに、それから健吉と逢ふ約束になつてゐる、と話してあるのだし、萬々が一の希望は繋いでも、おしげはもう、およそ觀念はしてる筈だつた。昨夜から泊つてゐたのか今朝來たのか、兎に角、それがもう千葉の耳へはいつてゐることも疑ふ餘地はなかつた。

――よしんばまた、前になんにもさういふ事實がなかつたにしても、歸つてからの昌造の目に映つてゐる二人の樣子だけでも、十分その察しはつくことだつた。

　……もう駄目だ！　この氣持から、二人は何をするかわからない。――紫ずんだ朋子の額も思ひ出されて、昌造の不安は、ぢり／＼と胸の底へ焦げつきだした。

　臺の上に出てゐただけのものは、取敢ずみんな床の間と地袋の棚とに載せて了つてから、昌造は、階段の方へ歩みよりながら、

「あんたの方でも、そろ／＼もう御飯だらうし、あと、ざッと掃き出したら、歸つてくれたまいね」

「はア。いゝえ……」

「どうせまた明日もお願ひするんだらうから、ほんとにもういゝぜ。遠慮ぢやないんだぜ」

　階段の途中から、わざとさういふ話聲を高めて、おりて行つた。茶の間はあらかた片づいてゐたが、二人の姿は見えなかつた。臺所を覗くと、おしげは、そこの瓦斯焜爐の前に、長い、竹のさい箸をさまぐりながら、しよんぼり立つてゐた。と、庭木戸から、千葉と女中とがはいつて來て、麺麭の袋を、二人がゝりで、廊下の方へいざらせにかゝつた。

「重いよ。おい、しつかり、しつかり」

いつもの快濶を扮はふとする千葉の言葉は、けれどもまるで音色が違つてゐた。胸の棚の高さが、なんとなく響に現れて、笑ひ聲にもつやがなかつた。——氣の毒になつて、

「だいじよぶだらう、夜露ぐらゐあてたつて」

と、歸つてから始めての言葉をかけたのだが、その自分の聲に、昌造は千葉のそれとおなじ變りを感じなければならなかつた……。

「え丶、でも、萬一降られでもすると大へんですから」

聲をかけられたことは、然し、いくぶん千葉の氣持を樂にしたらしかつた。軒を離れて、ふと上を振り仰ぐと、ぷうッと、頭を拂つて、

「おい、お秀さん！ 氣をつけろよ。階下にも人間がゐるんだぜ、ほんとに！」

「あら！」

若々しい笑ひ聲のなかから、やつと、「どうもすみません……」

と、杜切々々に云ふのが聞えて來た。

靴下の上へ突ッかけた下駄を引きづり引きづり、玄關へ廻ると、千葉は、丁度おりて來たお秀と、二言三言冗談口を利き合つて、入れ違ひ二階にあがつて了つた。臺所の方では、おしげが、

「どうも御苦勞樣でした。奥さんにも、一日御不自由をかけて、……よろしく申しあげといてくださいね、——いづれ明日でもお禮に伺ひますけれど」

「はア、ぢア御免くださいまし」

うちの女中の聲で、

「さようなら。御苦勞樣」

暫くしてから、

「お前ね、ちよつと御分家へ行つて、子供たち、つれて歸つていらつしやい」

「はい」

また暫くすると、玄關を廻つて、おしげが二階へあがつて行かうとするらしい氣配が感じられた。

「おい」

「はア……？」

果して、そつちからの聲だつた。

「ちよつと」

次の三疊をぬけて、茶の間の襖口まで來て立ちどまり、

「なんです？」

「ちよいとこ丶イおいで」

昌造は、努めて優しく呼んで、火鉢の彼方へ膝を突くとすぐ、

よせ、膝を落して、
「なんにも、ちつとも心配することはないんだからね、……いゝかい？ 氣をもまないでおいでよ。いゝね？ わかつたね？」
わざと目と目が合ないやうに、必要以上、耳もとへ口をよせてさう云つた。
更に合點がいかない、といふやうな無言で答へられるのも構はず、また言葉をつゞけて、
「俺アね、ちつとも惱つてなんぞゐやアしないよ。それどころか、可哀想だと思つてるんだ。だから、ほんとに、安心してゐていゝんだよ。わかつたね？ いゝかい？」
おしげもやつと合點々々をして、すぐ立ちあがつた。そして、さも用ありげな急ぎ足で、二階へあがつて行つた。
……呂造はまた不安になつて來た。さつき千葉が首を突ッ込んでゐた戸棚には、加島家に傳はる刀鍛、――といつても、つい先頃の、家城家の買立に買れ殘つた大小ひと腰だけが、――それが藏つてある筈だつた。おまけに、會場から持つて歸つて、そこへ藏つてくれたりしたのも千葉だつた。――そんなことを思ひ出すと、今にも、きやア、とか、うーん、とか、恐ろしい叫び聲が、二階から聞えて來るのではないか、といふやうな氣がして來て、尻のあたりがむづついて、ぢつと坐つてゐられない氣持だつた。息もはづんで來た……。
丁度その時、いゝ按配に、子供たちが玄關から駈け込んで來て、
「マヽは？」
「マヽは？」
と、口々に同じ問ひを放つた。
「二階にゐるよ」
どやどやどや、つと、互に押しのけ掻きのけしながら、梯子段へ殺到した……。

## 七の四

いつもの通り、子供たちだけ先に、ひとたてすまし、その間に呂造は、風呂へはいつた。揃へてあつた寢間着の代りに、普段着を出させて着た。そのあと、子供たちがはいり、千葉がはいつて、大人の食事はだいぶおそくなつた。子供たちはもう二階に寢に行き、茶の間は三人きりだつた。
……不思議な晩餐だつた。初めからお仕舞まで、誰一人、ひと言も口を利かなかつた。さいは汚らしく食ひ殘され、飯も二膳がやつとだつた。
すむとすぐ、おしげは、また[illegible]生の來ない末の子を寢かしつけに、

二階にあがつて行つた。昌造は、獨に煙草に火をつけ、火鉢の上に夕刊を擴げてゐた。

風呂を出てから、このごろ寢泊りが多くなつて、こゝへ置きつけの和服に着更へてゐた千葉が、女中部屋へ立つて行つて、それをまたもとの洋服に更へやうとしてゐる樣子なので、

「千葉君」

と、呼びかけて、「あとでちよつと用事があるんだがね……」

「はい」

「まア、そのまゝでゐたまい」

千葉は二階へ行つた。――十分と辛抱できないで、續いて昌造もあがつて行つた。

客間兼寢室部屋の八疊との境の襖はあけはなして、おしげは彼方むきに、肘枕で、輕く子供の背を叩いてゐた。書齋に使つてゐる六疊の方では、原稿の清書のためにあてがつてある二月堂の机に向つて、千葉が、自分の用箋に何か書いてゐたのを、昌造の足音で、急いで表紙を隱したらしく、三色版の赤い薔薇の輪廓を、具合わるさうになぞつてゐた。――そこへははいらずに、緣側を奥の八疊の方へ行つて、立つたまゝ、低聲に

「ねかしつけたら、お前、すぐ風呂にはいつちやつてくれないか。少し用があつて、そのために、千葉君に待つて貰つてるんだから」

顔を出さずに、たゞ頷いてみせた。――昌造は階下へおりた。

三十分ばかりして、おしげがおりて來て、茶の間は通らずに、すぐ女中部屋へ行き、風呂の加減をみさせてゐる樣子だつた。と、二階でまた、このごろ虫のおこつてゐる嬰兒が泣きだした。

「チョッ」

と、舌をうつて、「しようがないねえ」

「わたくし、參りませうか」

「駄目だよ。……いゝわ、あたし、今日お風呂よすから、お前たちはいつてお了ひ」

ときかけてゐた帶を、また結び直すらしい音がして、おしげは慌たゞしく二階へあがつて行つた。

暫くして、昌造は女中を呼んだ。

「お前たち、風呂がすんだら寢て了つていゝよ。千葉君は、今夜、歸るかどうかわからないけれど、歸つたら、あとは俺が締めとくし、泊るやうなら、自分で床は敷かすから、ちつとも構はないよ。……その前に、俺の部屋に、火を持つてつといてね、布團は、……あとで俺が敷くからいいや」

「はい」

「お前たちも、今日はくたびれたらう。風呂がすんだら、早くお寢」
「は。有難う存じます」
　女中が火を持つてあがつて、二十分ほどしてから、十一時が鳴つた。それを合圖のやうに立ちあがると、昌造は、ひとつうんと、下腹へ力を入れた。それから、靜に二階へあがつて行つた。
　おしげはもとのまゝで、千葉が、もう書きものをすましたとみえて、大きな八角火鉢のそばへより、昌造の單行本の、校正の上に、目をさらしてゐた。朱塗の机の前に、——自分の位置に、昌造はきちんと坐つた。
　暫くして、千葉が、事もなげな、たゞ隣へ氣をかねた低聲で、
「ずゐぶんひどい誤植ですね」
「さうかい」
　別のを机の上へ展べ、赤インキの萬年筆を把りあげて、校正にかゝつた。
　隣では、おしげがそうツと起き返らうとすると、すぐ嬰兒が鼻を鳴す、——さういふことが二三度繰り返へされて、やがて緣側や階段に足音を盜んで、おりて行つた。
　暫くしてはいつて來たのを見ると、寢間着の上から羽織をひツかけた姿に變つてゐた。用がある、と初めから云つてあるのに、と思つたが、無言で、境の襖を閉てよ、と手つきで云ひつけた。その通りにしてから、ぞろ〳〵と寢間着の裾を引いて、そばへよつて來た。
「なんだつて、着物なんぞ着更へちやつたんだ」
　低聲ながら、嚴しかつた。
「さう？」
　と、無邪氣に驚いた目つきで、「着更へて來ませうか」
「それにも及ばないけど、先刻、あとで用があるつて、ちやんとさう云つといたぢアないか」
「あゝ、さうね」
　唇をつぼめ、きゆツと横に曲げて、——これが、いくぶん氣どりぎみに、つんとしてみせる時の、おしげの癖だつた。
「座蒲團もつといで」
「いゝわ」
「よかアないよ。……千葉君、君敷いてるかい？」
「えゝ、頂いてます」
　そのとき立ちかゝつたおしげに、「よござんす。出しませう」
　と、すぐ背に背負つてゐた押入をあけ、一枚とり出して、火鉢の上を渡してやつた。
「へ、はゞかり樣」

おしげは、それを、差向ひになつた男二人の間の、やゝ良人に近いあたりへ置いて、坐つた。千葉も、座蒲團を出すため、身を起した序に、胡座から正座に變へてゐた。

まづおしげの方へ、

「女中たち、寝たかい？」

「えゝ、お先に御免かふむるやうに云つときました」

そのまゝ三人、默りついたやうに、ぢいッと身動きもしなかつた。

昌造は、いつか講演の時にするやうに、ほんの緒だけ、一應胸のうちに言葉を調へて置いて、それから口を切つた。

「君たち二人のことは、君たち二人が一番よく知つてゐるんだから、僕から云ふことはない……」

息がはづんだ。――のみ込んで、ぐッと下腹へ押へつけ、このまゝ暫くは放たなかつた。

「僕は、それを、君たちから聞かうと云ふのぢアない」

と、改めて言葉を起して、「すんで了つたことは、今更もうどうでもいゝ。僕はたゞ、君たちの、今後の方針、と云はうか、――むしろ決心だな、――今後の君たちの決心を聞いてみた上で、ゆつくりこれから相談したいと思ふんだ。相談、と云ふと、或は皮肉に聞えるかも知れないが、僕には、毛頭、そんな氣持はないんだ。かういふ事情の下で、三人が三人、悉く幸福であらうといふことは、恐らく無理な注文だらうけれど、三人の、心おきない、腹藏のない相談によつては、少くも、誰もが、馬鹿げたまねをしないですむだけのことは出來さうに思はれるんだ。僕の一番恐れてゐるのは、その『馬鹿げたまね』で、みんなが、はつきり將來を考へて、これなら、と思ふところへ進んで行けば、それでいゝと思ふんだ。つまり、合理的な、健全な解決を得たいと云ふのが僕の望みなんだ。――どうだね？　いま云つただけのことに、別に異存はあるまいと思ふんだが……」

二人とも、ぢいッと火鉢のなかを見詰めてゐるきりで、身じろぎもしなかつた。

「どうだい、今の僕の提議に、なんか異存があるかい？　……ねえ、千葉君！　なんとか返事をしてくれないか」

ひとつ、ごくりと唾を呑み込み、太く、低い嗄れ聲で、

「ありません」

「ない。さう。……おしげにも無論あらう筈はないが……」

その時、ふと思ひついて、「これは、千葉君に云ふんだが、僕が今夜、かういふ話をもちだすまでに、僕とおしげとの間には、ひと言の打合もしてはないよ。夫婦といふ特權を利用して、君の立場を不利に陥れようとするやうな、さういふからくりなんぞは、決してしてな

いからね。……つまり、今夜僕がこんな話をもちだすことが、君にとつてもし寢耳に水だとすれば、おしげにとつても、等しく寢耳に水な筈で、その間に、僕としては、なんの差別もつけてはないんだ。……たゞ、先刻、夕方だつたか、おしげが、あんまりみじめな、暗い顏つきをしてゐるから、俺アちつとも惱つてなんぞゐないんだから、安心しておいで、といふ意味のことは云つて聞かせたよ。だけど、それ以上、事件の解決なぞについては、ひと言も觸れはしなかつたんだ。いいかい？ その點、君たち二人の立場は、全く公平にしてあるつもりなんだから、それは、豫め、よウく胸に入れて置いてくれたまいね。……わかつたかい？」

自分一人に對して云はれてゐる言葉だけに、今度は千葉も、すぐ頷き返した。

「よし。ぢア、これから、三人とも平等な立場に立つて、お互に腹藏のないところを云ひ合つて、合議の上で、誰一人でもが、――少くも馬鹿げたまねはしないですむやうな、うまい解決をつけようぢアないか。

まづ第一に、僕の立場からものを云はせて貰ふとだね、おしげは、僕の女房なんだし、君たちの目からはどういふ風に見えるか知らないけれど、僕自身の心に三省してみて、決して愛情を失つてゐるとは思はないんだ。然し、僕には、女房以外に、おこうといふものがあつて世の常の細君のやうに、おしげは、僕の愛情を專にしてゐるわけぢアないんだから、その點に對して、おしげから、不服なり非難なりを加へられるとすれば、甘じて僕はその責をうけなければならない、――またうけるつもりだ。僕ア決して身勝手なことは云はないよ。また、子供も大勢あることだから、とかなんとか、そんな風な事情をもちだして、哀願的に、君たちの反省を促すやうなみじめなまねも斷然しないつもりだ。要するに僕は、君たちの間の愛情に對して、壓迫も加へないし、なほさら哀願的な態度には出ない、といふことを、第一にまづ嚥み込んで置いて貰ひたいんだ。――つまりこれが、先刻『平等の立場』と云つたことの、說明のつもりだがね……。

然し、から云つて來ると、或は君たちに、ひよッとして、こんな誤解をうけやアしないかと思はれるんだがね、――と云ふのは、僕の愛情が、既に全くおしげから去つてゐるもんだから、ことさら二人を近づけて、いゝ厄介拂ひをしようとかゝつてゐるんぢアないか、――さう思はれると、大へんに困るんだ。決してそんな氣持はない。もし、おしげが、自發的に僕へ返つて來てくれるんなら、僕はどんなに歡ぶか知れやアしない……」

ぐぐうッと胸へこみあげて來たのを、力一ぱい押し鎮めてゐたが、

からして、三人平等の立場で相談の場合に、僕は、そんな私情、——私の情だね、そんな私情に訴へようとしないだけなんだ。だから、いま云つたことも、君たちが或はもちはしないかと危ぶまれる誤解を除くために、一つの例證として云つただけなんだから、どうぞそのつもりで……。

これでまア、僕の立場から云つときたいことだけは、およそ盡したつもりだけど……」

昌造は、目をつぶつて暫く考へてから、「もしまだほかにあつたら、あとで附け加へるとして、今度は君たちの番だ。……世間普通の仕來りにならつて、男だから、千葉君！　君さきに云ひたまい。……ほんとに、遠慮しないで、腹の底を割つた話をしてくれなきやアなんにもならないよ。いゝね？」

兩手を火鉢の緣に突張り、身を硬くして、昌造は答を待つた。が、目だけは、ぱつたり合つたとき氣おくれが出ては、と思はれたので、伏せて、いくらか火氣の滲みて來る炭火を見詰めてゐた。

……待つても待つても、うんともすんとも、聲は出て來なかつた。云ふべき言葉を胸のうちに調へるにしては、あんまり永すぎる沈默だつた。足のしびれがじん〳〵して來たので、いくらか居住ひを崩し、煙草に火をつけた。

……風だつて來たとみえて、すぐ前の大銀杏が、砂濱に大波の引いて行くやうな、ざアーッといふ響をたて始めた。……時々目をあげてみても、二人とも、まるで石になつて了つたやうに動かなかつた……。

「どうだい、千葉君」

それでまた、暫く待つてみてから、

「思つてるとほり、たゞすらッと云やアいゝぢアないか。相手の思はくやなんか、ちつとも氣にすることアないぜ」

やがて、階下で一時をうつた。少し苛々しかけて來るのを、ぢッと抑えて、（鳴くまで待たう時鳥か……）などゝ胸のうちに呟いてゐた。

「どうしたんだい」

氣持を樂にほぐらかさうと思ひ、今度は、笑ひ聲で云つた。「なんとか云つてくれなきやア、……僕ばかりに喋らしとくんぢア、相談にもなんにもならないぢアないか」

これも利きめはなかつた。いつか、昌造はもう胡座で、忘れまぎれの煙草が、五六本にもなつてゐた。

「ぢア、おしげどうだい。お前から先に云つたら……」

ちよつと上體を前にかけ、足先の重ねをあべこべに直して、……な

んか云ひだすのかと思ふと、そのまゝまた石だつた……。
「困るなア、どうも、さう二人とも默り込んじまつちア。……どうだい、千葉君、煙草でも一本のんでみちア。……あるかい？」
と、袋ごと國華を差しつけると、
「いゝえ、結構です」
「さう。さういふ風に口を利いてさ、自分の思つてることを、すらッと云つちまやアいゝんぢアないか」
それでも駄目だつた。ガタ／＼、ゴト／＼ッと雨戸が鳴りだした。
「ぢア仕様がない、僕の方から訊かう。……かういふ形をとりたくないと思へばこそ、初ッから僕が相談しよう、相談しようつて云つてるのに、二人とも、何を云つても返事ひとつしてくれないんだから……。どうも仕方がない、審問するやうでいやだけれど……」
と、突然千葉が口を開いた。永い時間、咳ひとつしずにゐた人の嗄れのまゝで、低く、
「あたしたちの間を、どういふ風に誤解していらつしやるのか知りませんけれど……」
「誤解？」
むッとして、思はず言葉を遮つたが、すぐ氣がついて「……うん、それで……？」
「あたしたちは、公明正大です」
「公明正大……」
昌造も、ちよつと皮肉な氣持になつて「……といふことは、云ひ直せば、體の關係はありません、つていふくらゐの意味かね？」
すぐ返事の出來ることを、また十分も無駄に待たされた。
「どうなんだい、それでいゝんだらう？」
「えゝ、まア、さうです」
「まアなんぞくッつけなくつたつて、それだけのこつたらう。よし、ぢア、それアわかつた。……ところでだね、僕ア一番初めに、過ぎ去つたことはどうでもいゝつて云つてるんだぜ。それアまア、相談を進める上の、多少の參考にやアなるだらうけれど、今さら聞いたからつて、どうなるもんぢアないんだからね。體の關係があれば訴へる、なければ勘忍してやるの、そんなけちなことは、僕アこれから先も云つた覺えはないぜ……」
と、激昂しかけて、すぐまた自分を取り鎭めた。「だから、公明正大はそれでいゝとして、氣持で、好きは好きなんだらう？……まさか、僕が今晩もち出した話が、聞いてるうちに、思はず二人が顔を見合せて、ぷッと噴きだす、つていふやうな、そんな突飛な話ぢアないだらうと思ふんだ。……それとも、萬が一にもさうなら、遠慮なくさうだと云

つてくれたまいよ。……へんな言葉だが、濡衣だね、——強いてそれを着て貰ふ必要なんぞ、無論ないんだからね。さうだらう？」

それでまたすつかり默り込んで了つた。少しぽん〳〵やッつけすぎたかな、と思ひ、いくぶん宥める調子になつて、

「過去のことは聞かない、これから先のことを相談しよう、つて云ふと、君たちのこれまでの所爲は、悉く僕の思つてる通りだ、といふ風に、無理押しつけに、——それを君たちに承認させちまふことのやうな氣がして、そこが不服なのかも知れないけれど、僕がさう云ふ主意は、決してそんなところにやアないんだぜ。早く云へば、過去のことには、それほど重きを置きたくないんだ。それよりは、これから先をうまく、——うまくつてのもをかしいが、先刻も云ふ通り合理的にだね、——誰もへまなまねをしないやうにだね。——さういふ意味で『うまく』處理したい、そこが僕の主意のあるところなんだ。……過去のことは、君たちだつて、恐らく話しにくいだらうし、僕だつて、正直、聞いて愉快な話でもないんだからね。……それも、聞けばどうにかなるつてんなら、それアどんなに不愉快だらうと、辛抱しなきやアならないけれど、今更どうにもならないつてことだけは、慥な事實だらうぢアないか。さうとすれば、そんな無駄なことはよして、むしろ將來に力を注がう、つて云ふんだよ。ね？　今度はよくわかつたらう？」

「然し、あたしたちは、飽まで公明正大なんです」

思はず昌造は、兩手を絞りあげた。——このあたまの惡さには、とうにも手のつけやうがなかつた。

「だからさ、それはもう……」

「そのことは、あたし、あなたの前で、立派に契ひます」

「さう。それぢア僕も、堅く信じよう」

これは口先ではなかつた。實際昌造は信じた。神を信じるやうに信じた。

暫くしてから、

「そこで、一歩先へ進んでだ、——君たちは、お互に好きなんだらう？……お互に、と云つてはなんだから、一人づゝ訊かう。……千葉君。君は、おしげが好きなんだらう？」

これにまただいぶ時間をとられたが、結局口を開いた時には、わりに勇敢だつた。

「それア、あなたの前で云ひにくいこつてすけれど、ずゐぶんそれア本氣なつもりです。つもりぢアない、實際眞劍です。こればかりは、誰ンだつて負けないと思つてます」

「さうかい。……ぢア、おしげ、お前は？」

體をもじ〳〵させ、苦しさうな、——無論笑ひの部類にははいらない微笑に、痩せた頬を歪めかした。——昌造は、目を逸らして、

「云ひにくかつたら、たゞ、はい、とか、いゝえ、とか、さういふ簡單な言葉でもいゝよ」

「なんてつたらいゝんでせう……」

胴體を、横へ、くの字にし、左で、髪を掻きあげる拍子に、ちらりと目をあげて千葉を見たが、「さうですねえ、……矢つ張り……」

「好きなんだね？」

微笑のまゝ頷いてみせた。

「よろしい。そこで次の問題だが、今度ッから、もう少し早く返事をすることにしようぢやないか。はつきり考へをきめるための時間なら仕方がないけれど……。皮肉でなく、まご〳〵してると、もうぢきほんとに夜が明けるからね。……で、今度は、互にそれほど愛し合つてゐるんだから、今後どういふ生活の方式をとるか、——これは、いま初めてこゝでもちやがるんぢやアない、君たちの間では、相應これまでに考へ盡されてゐる筈の問題なんだが、めい〳〵に、それについての考へを聞かせて貰ひたいと思ふんだ。……まづ、千葉君から、ひとつ……」

五六分待つてみて、とても駄目らしいので、

「この返事はね、大別して、およそ三通りあると思ふんだ。一つは、どんな艱難と戰つても、必ず一緒になる。名稱は、夫婦であらうと愛人であらうと、そんなことは別として、兎に角身をもつて一緒になる。次は、とてもそれだけの勇猛心はない。或は生活のあてがないとか、或は世の非難攻撃に堪えられないとか、まア理由はなんでもいゝが、さういふ將來の障碍が、あんまり明かにわかつてゐるから、むしろこの際あきらめる、思ひ切る、——これだね。次の、第三のやつは、どんな艱難を侵してでも一緒になる、といふほどでもないが、さうかつて諦めちまうのもいやだ。現狀維持で、——つまり法律的に云へば、、の狀態で、いつまでも仲よくして行きたい。——まア、大體、この三つを出ないだらうと思ふんだ。……それとも、なんかまたほかにあつたら、遠慮なく云つて貰ふけど……。そこでだね、この三つのうちのどれを望んでゐるか、——望んでゐるだけぢア足りない——實行しようと決心してゐるか、——僕の方から、かういふ問を發してみたら、一番早手廻しだと思ふんだが、千葉君、ひとつ、それに答へてくれないか」

これ以上は、手の引きやうがないので、昌造は、辛抱よく待つた。……そのうち、退屈でたまらなくなつて、云はないでもいゝことだつたが、

「うーん。まだあつたね、第四のものは、心中だ。どうもやりきれないから死んでしまふ、つてんだが、これはまア、三人よつて相談する今の問題にやアならないやね、——さういふ阿呆らしいまねをしないための相談なんだからね」

また暫くして、

「どうだね、もういゝ加減考へが纏りさうなもんぢアないか」

「あたしは……」

有難い、と思つて膝を進めたが、そこでまたつかへて了つたので、

「うん。君は……?」

「あたしは、無論、今あなたの仰有つた第一の場合、——つまり、飽までも一緒になりたいといふ希望です」

「さう。そいでまア希望だけはわかつたね。そいぢア、續いて、今度は實行の問題だが、——君から僕におしげの離縁を迫つて、もし承諾を得たら、どんな艱難にも非難にも打ち克つて、兎にも角にも二人だけの世界は、春風駘蕩と、いつも幸福に送つて行く、——それだけの確信を以つて、今すぐにでも實行に移れるかい?」

この返事は、てんから、待つだけ無駄と思へたので、續けて、

「いま僕は、もし承諾を得たら、と圓滑な過程を云つといたが、ようく懇談してみた上で、君の決心があやふやだつたり、或は世間智の不足から、夢みたいた生活を思ひ描いたりしてゐるやうな場合、二人のためから云つても、僕が承諾しない……」

「さうだらうと思つてました」

これは癪にさはつた。——なんのかんの口ではさも自由らしい、平等らしいことを云つてゐても、結局のどたん場へ行けば、いやだ! と云ふだけのことなんだらう。長談議も、ただお飾りだけのものか! へん、馬鹿々々しい! ——この氣持が、立派に裏にあるのなら、假令憎らしくとも、まだその反抗の氣勢を買ふことが出來た。そのくらゐなら、まだしも相手として張合があつた。ところが、實際そんなものは、爪の垢ほども持ち合せてゐないくせに、たゞ言葉の組合せ、調子だけで、さも内容ありげに、一本チクリとつッ突いた、その蚊か蚤のやうなやり方が、いよいよもう、叩き、或はひねり潰して了はないふ衝動を、昌造の胸に唆つた。

「默りたまい! こつちで訊く時にやア、蚊のなくほどの聲も出せないくせに、ひとの話の最中に、横口を出すつてことがあるもんか! ……まだ話は先があるんだ。——もし、僕が承諾しない場合だ、君はおしげをつれて駈落するとか、或はいよいよとなつたら、僕を殺しちまうとか、そこまでの決心がついてゐるかどうか、それを訊かうとしてたんだ。……どうだい。希望だけなら、往來で擂れ違ふ女にだつ

て、いろんな希望をもつだらうぢアないか。ちやアんと實行の決心はついてるのかつて訊くんだ。決心だけぢアまだ駄目だ。今すぐこゝで、實行にとりかゝれるかつて云ふんだ。——それン對して、はつきり返事をしたまい！」

例の、空虚な間が、それでも、今度はいくらか縮まつて、

「ほんとうに、心の底からおしげさんを思つてる氣持では、あなたにだつて、僕、負けないつもりです。ですけれど、今ンところ、あたしとして、おしげさんを引き取つたところで、生活のあてもありませんし、おしげさんだつて、子供さんたちの愛に引かされて、結局二人とも幸福つてわけにやアいくまいと思つてるんです……」

冷かにあとを促して、

「そいで？」

「ですから……」

それでまた消えて了ふのを

「ですから、——どうするんだよ」

「結局まア……」

「往生際のわるい男だなア。……結局諦めて手を引くつて云ふのかい」

恨めしさうに、それでも、ちツと見返しただけが、まだしも取柄と、昌造は、猛然とまたその上に睨め返して、

「それとも、希望は第一、だが實行は第三の、現狀維持つてやつでいかうつて云ふのかい。——圖々しい、つて言葉は、さういふのを指して云ふんだが、知つてるかい。

忽ち目を伏せて了つた。

「少し明るくなつて來たやうだし、子供たちでも起きると、また面倒だから、——こゝまで來たら、あとはもうこつちで、どん〱片づけて行くよ。いゝね！」

その「いゝね！」の烈しさで、無理にも頷かせて置いて、

「念のために、もう一度君の返事を綜合して云つとくと、——希望は第一なれども、實行は第二のほか餘地なかるべし。——かういふことになるね？もう一つ云ひ換えれば、おしげを愛するの念は、おさ〱昌造にも劣らざれども、日下自活の道なく、且つおしげは、母として、子女のもとに止まらざるべからざるが故に、玆に斷然、思慕を捨て、愛情を滅するもの也、——まア、證文にでも書くとなれば、こんなことになるんだが、それでいゝね？言葉の實印を捺すね？間違はないね？」

弱々しくも、すぐそれに對して頷いて了つた。

「お前の目前で……」

と、今度はおしげの方へ静かに顔ごと捻向けて、「いま見た通り、聞いた通りだ。この結果に對して、お前として、何か云分なり、異存なりあつたら、千葉君のゐる間に、はつきり云つといた方がいゝ。どうだね？」

「えゝ、別に異存なんてありませんけど、……たゞ、かういふことになつて了つても、あたしは、いつまでも好きです」

「よろしい。よくはつきり云つた」

「それは、僕だつておんなじこつてす。それについて、今こゝに……

……」

と、懐中へ手を入れて、「書いたものを持つてるんですが、これだけはひとつ、手渡しさせてくださいませんか」

「それア、ちよつと待ちたまへよ。……君は、既に、言葉の記名調印を終つたんだぜ。だから、三人會議は既に終つて、今や僕は、改めて、おしげの良人なんだからね。……僕が、その手紙を、おしげに讀ませる必要を認めないとなれば、お斷りするのはこつちの勝手だ。……でお斷りしよう。」

「さうですか。ぢア仕方ありません」

「それから、君と僕との間も、――地震の時からこつち、いろ〳〵のことで一方ならないお世話になつて、その點、僕としては、一生感謝を捧げてもいゝくらゐに思つてゐるんだが、この事件のためには、義絶するよりほかはない……」

「それも覺悟してゐました」

「さうなれば、無論、一生もう君には、僕のうちの敷居は跨がせない。おしげに逢ふこと、文通、その他一切の交渉も、無論これア お斷りだ」

「承知してます」

「ぢア、これでもう、萬事合理的に解決がついたと思ふが……」

「えゝ。ぢア、これで、僕、歸らして頂きます」

さう云つて、いきなり、昌造の前に低く頭を下げた。昌造も、ちよつと可哀想な氣がした。

「ぢア、さア……。絶交した人間から、餘計な差出口かも知れないけれど、眞面目にやつて、ひとつ、うんと立派な人になるんだね。體も大事にしたまいよ」

今度はおしげの方へ、

「ぢア、いろ〳〵どうも……」

おしげは、例の苦しい微笑で、體をもじ〳〵させてゐるばかりだつた。

「おい、挨拶しないか」

「でも、なんだか……」

「先刻のあなたのひと言で、あたしはもう一生幸福です。感謝します」

「あたしも……」

「ぢア、なんにも云ひません。これで……」

「…………」

さよなら、とも云ひにくかつたのだらう、身をくねらせて、曖昧なお辭儀をした。

千葉が立ちあがつた時、片手を深く懷中に突ッ込んでゐた。すぐ昌造も立ちは立つたが、然し、今はもう何をしかけようと、ちつとも驚かない氣持だつた。頭からすつかり嚥んで了つてゐた。短刀ぐらゐ、金火箸ほどにも思へなかつた……。

續いて立ちあがらうとするおしげに、

「お前はまアいゝだらう。俺が行くから」

階段を、護送するやうに、すぐあとへついておりた。玄關で、

「荷物、持つて歸つてもよござんすかしら」

「あゝ、いゝとも、いゝどころぢアない」

「ぢア……」

暗闇を探つて、三疊をぬけ、茶の間へはいつて行つた。昌造もつかつかとあとを追つたが、灯がつくまでは、今度はいくらか身構えてゐた。押入から、ちやんと風呂敷包になつてゐる和服らしいものを取り出して擁えこんだ。

「なんかまだ、大きなもので、持つて行きにくいやうなもんでもあつたら、明日でも長谷部君にことづけてやらう。忘れものも、よく見させとくよ」

「えゝ、これでもうなんにもないつもりです」

もう一度玄關に出て、洋服の外套をはづし、小腋にかい込んだ。その間に昌造が、玄關の雨戸を繰つてみると、そとは、薄明るい曉の色で、いつの間にか、びしよ〱降りになつてゐた。

「雨が降つてるよ」

「えゝ傘はあるんですが、靴で……」

「あゝ、そこらにある下駄、なんでもいゝから穿いてきたまい。……靴は、健ちやんとこイ屆けといてあげらア」

云ひながら、下駄を突ッかけて先に出て、門の閂をあけ、細い雨にうたれて待つてゐた。手當り次第、下駄箱から引きずり出した足駄で、間もなく千葉も出て來た。

「どうもすみません。……ぢア、この足駄、拜借して行きますから」

「あゝ、いゝとも」

「ぢア、これで……」

雨方とも手がふさがつてゐるところから、帽子のまゝで、それだけよけい腰を折つたかと思ふと、のめるやうに、門の隙から、ひよろけ出た。敷石の上に、足駄の歯が、がりがりッと、いやな音をたてた。

「ぢア、さよなら」

昌造は、その、わざとらしいよろけぶりにも、反感どころか、軽い微笑を感じながら、すぐパタンと扉を合せ、門を押し入れた。――雨に濡つて、鐵のうけを睨み加減に拔くと、がゝゝゝがアと、これもいやな音だつた……。

終り

改造社との約により、これで打ち切ることにするが、善魔以來燒りあげて來た力は、――作者に云はせると、この「終り」では甚だもの足りない。姑くこれを一つの「切り」として置いて、近い將來に、なほ、少くも五六章を書き加へて、ほんとうの「終り」にしたいと思つてゐる。いつ、何誌によつて、といふことは、今から約束できないが、愛讀を賜つた諸君に、時にこの旨を告げて、一時擱筆する次第だ。――作者――



# 操守

豐島與志雄

## 一

吉乃は、いつものんきで明るかつた。だから或る男たちは、彼女をつまらないと云つた。のんきで明るいだけなら、人形と同じだ。人形を相手に遊ぶのは、子供か老人—ロマンチックな初心者か、すれつからしの不能者か……。だが普通の者にとつては、酒の後では、煙草の味が一層うまいやうに、何かしら、賑かさが、淋しさが、色つぽさが、あくどさが、媚が、邪慳が、或は……兎に角刺戟が、嬉しいものだ。そこを吉乃は、明るくにこついてゐるばかりで、技巧を弄することもなく、あけつぱなしでのんきで、別に面白さうでもなく、また不愉快さうでもない。だから相手も、面白くもなく、不愉快でもない。それでゐて、彼女は相當に流行妓だつた。

宿醉の頭の中は、霧の夜の風景だ。奇怪な形象が、宙に浮んで、變幻出沒して、朧ろな光が、その間に交錯する。ひどく瞬間的で、その瞬間の各々が、永遠の相を帶びてゐる。然し永遠の相は、霧の中に沒し去つて、その重みのため、瞬間が引歪められ、引歪められ……遂には、空々漠々となる。佗びしい倦怠。平凡なもの、和やかなもの、眠

たげたものが、ぼんやり覗き出す……。記憶の底に、思ひがけなく、一種のはがいさで、吉乃の姿が……。

すらりと背の高い、その肌の綺麗なのが特長で、ほそ面の十人並の顔立……。氣持よく伸びてる首、無意味に高い鼻、しまりのない唇から洩れる金齒の光、わりに不活潑なでも物怖ぢせぬ眼付、それに綺麗な肌を以てして、彼女は、餘りにのんきすぎるか、知惠がまはりかねるか、さういつたおほまかさを具へてゐた。湯にはいるのが樂しみらしく、それも肌をみがくではなく、勝手に湯加減をぬるくしておいて、ぼんやりと、長々と、いつまでもつかつてゐた。「吉乃さんの長湯」といつて、大抵の者は知つてゐる。然しその不精らしさにも似ず、彼女は決して顔には湯を使はなかつた。入浴の時も、嚴寒の朝も、必ず冷水で顔を洗つた。誰かに聞いたのか、或は婦人雜誌ででも讀んだのか、湯は顔の皮膚を害する、殊に白粉の顔の皮膚を害する、といふのを信じてゐた。そして、「顔は表看板だから……。」

それが、おかみさんを微笑ましました。

「……氣質も質素だし、顔もよい方だし、肌も綺麗だし、旦那の一人や二人、出來ない筈はないんだが……。まつたく、看板みたいな妓だ。どこか、足りないんぢやないかしら……。」

相當な流行妓なのに、失禮な言葉だ。がそれよりも、三四人も妓を抱へてるおかみさんとしては、餘りに目先の利かない言葉だ。ありやうは、彼女の勤めぶりを見れば、すぐに分ることだつた。彼女は、好惡の感情を超越してるらしかつた。親疎の感情を超越してるらしかつた。云はゞ、最も公平に商賣をした。ひらのお座敷でも、または……。

意地とか張りとか俠氣とか、長く培はれた傳統は、公平であつてはいけないと敎へてゐる。表面は公平が建前でも、裏面には不公平がのさばつてゐる。それが人情だ。そこに面白味がある。花柳界の表情、見交す眼付……刹那に燃え、刹那に消ゆるものであらうと、その光に輝らされて、或は過去の、或は將來の、別種の深い世界が描き出される。それが、陷穽だ、罠だ、或は逃避所だ。人は獸を眞似て、四個ひで競爭する……公然と。なぜなら、それが人情だから。そしてそれが商賣となつてゐる。人情を無視することを原則とする商法の、埒外に出た特殊の商賣だ。

それが、ひらのお座敷でも。況んや……。

そんなことを吉乃は考へてはゐなかつた。然し、無意識的に、商法の原則を守つてゐた。彼女の眼付は、二重の意志表示をしなかつた。しまりのわるい唇は、どの客にも同じやうに金齒の光を見せた。そしていつも、舌つたるい口の利き方をした。云はゞ、萬人の手の届く

ところに、陳列棚に、正札をつけて商品をのせてゐた。公平な商人は、自分の商品の價値を知つてをり、自分の商品を大事にする。不精なのんきな彼女も、自分の商品を大事にすることは人に劣らなかつた。嘗て病氣を知らない、といふのが彼女の誇りだつた。明るく、手際よく、公平に、取引を濟した。晴々とした商賣だ。

さういふ彼女だつたから、いつも、客の前に出る時も、金入の中には相當の金を用意してゐた。懇意の客から、欲しいものはと聞かれても、たゞ笑つてゐて、何にもねだらなかつた。その代り、出先を馴染の客から呼ばれても、たとひ自由のきく時でも、時間まではお座敷をつとめて、貰つて行くことをしなかつた。そして彼女の唯一の我儘は、どうしても嫌な客の時、お座敷以外は「身體が悪い」ことだつた。そんな時は、金錢には依らなかつた。商人にも、自分の商品を賣るか否かについて、自由意志を持つ權利がある。そして公平な商人は、意志をまげてまで、不當の暴利を貪りはしない。彼女にあつて、不當と云へば云へる利得は、懇意であらうとなからうと、金のありさうな客から、お座敷の約束をつけて貰ふことだつた。時には事後承諾を求めた。そのお約束を、彼女はいろんなことに利用した。あまり暇な晩に、または用事に、または仲間への御禮返しに……。だからおかみさんにとつても、彼女はごく忠實な抱えつ妓だつた。

そのお約束の客の名に、オーさんといふのが次第にふえていつて、朋輩の目についた。

「それごらんなさい、何だかだと云つたつて、やつぱりねえ!……」

吉乃は笑つた。

「さうぢやないわよ。あの人、どうせ、仲間なんだから、丁度いゝのよ。」

謎のやうなことを云つて、それから變に考へこんで、その後で、自分でも不思議さうに、きよとんとした眼を擧げて、また笑つた。

その頃、實際にも、オーさんの足は繁くなつてゐた。

## 二

岡野信二は、吉乃に對して、初めは、快活などこか捨鉢なほど陽氣な態度だつたが、度重るにつれて、妙に無口に、眞面目に、淋しさうになつていつた。心の中に、何か悲痛なものが動いてるやうな風で、それも、愛とか戀とか云つたものではなく、たゞ期待外れの、心が當に迷つてるらしく……。そしてぢつと、彼女の顏を眺めてることが多かつた。

吉乃もそれに氣付いたが、それは、彼女の商賣とは關係のないことだつた。彼女は平然と、自分の職分を守ることが出來た。

そこへ、彼の告白が落ちてきた。

秋の夜の差向ひは、淋しい。しいんとしたなかに、どこからか、爪彈の音が傳はつてきて、夜更けを告げる。中庭で、笹の葉がさらさらと鳴る……。でも吉乃は、明るかつた。甘つたるいのんきな調子で、商賣が不景氣でも、お稽古が充分出來るのが樂しみだと、そして、お稽古仲間だと、遠くで聽いてゝも、誰が彈いてるのか、それが分るやうになるから面白いと、そんなことを云ひ云ひ、爪彈の音色に耳を傾げたりしてゐる。岡野もその方へ、吉乃の言葉へよりも多く耳をかしてゐた。積り重つた傳統的な情緒が、彼を溺らさうとする。彼も溺れようとする。が彼の胸の中には、どす黑い塊りがあつた。眼は熱く潤んでゐる。自分自身をわきから見守り鞭打つてる氣持……。だが、吉乃へは取り縋れなかつた。

「君は逢へば逢ふほど……。」

「馬鹿に見える？」と吉乃は引取つて云つたが……。

彼は、つまつた言葉を涙になして、ぽろぽろとこぼしてゐる。

「さう云つた人があるわ。」

びつくりして、云ひ足して、それから彼女は微笑んだ。

然し彼は顔を擧げなかつた。

「僕は、汚れてるんだ、汚れてるんだ、聞いてくれ……。」

それが、何のことだかと云へば、前から部分的には話してゐた、或る未亡人との關係だつた。ふとしたことから──意志の弱いため──關係して、ずるずるに引續いて、時々は金も貰ふ。自分を唾棄する餘り、貰つた金で遊蕩もする……。それだけだつた。

「そして、そのたびに、お金を貰ふの？」

岡野は、返辭も出來ないで、罪人のやうに、悔ひ改めるやうに、椅子の上に顔を伏せてゐた。

吉乃の、あきれたやうな眼の色が、やがて、澄んで、落付いて、笑みを湛へた。

「それぢや、つまり、あたしたちと同じぢやないの。ちつとも、恥しいことなんかないわ。」

全く、別世界から來た言葉だつた。岡野は顔を擧げた。眼を擧げた。堪へ難い調子で口籠つた。

「でも……でも……さうぢやないんだ……ちがう……。第一、僕は、その金を、何に使つてるか！……」

「自分でもうけたんだもの。何に使はうと、勝手よ。」

「………」

風の吹き過ぎた後の空虚と同じで……。

白々とした顔、ほんのり醉の出てる頰、空を見てるやうなあらはにな

眼付、脣の間から見えてる金歯、そして鼻が無意味に高い……。その首を、伸び伸びと、綺麗な肌を見せながら、卓子に片肱をつき、片方の肩を落して、横坐りに、裾をさばいて……。それへ、岡野は縋りついていつた。

「僕は、君を、好きだ、ほんとに、好きなんだ。……初め、自分を、やけくそから、自分で自分を、溝の中に墮落すやうな氣で、うろつき廻つた。自分を、泥まみれにすることが、汚くすることが、せめて、腹癒せだつた。罪亡しだつた。いろんなところへ行つた。たゞ、自分が汚くなれば、慘めになれば、それが本望で……。然し、君に逢つてから、變に、氣持が荒まない……。癪にさはつた。だから、これでもか、これでもかと……鞘やつて來たんだが……。駄目だ。君は駄目だ。僕の中のものが、こはれていつちまう。そして、忘れられない。だんだん君を好きになつてくる。……どうすればいゝんだ。どうにでもしてくれ。どうすれば……。」

云ひながら、彼の眼には、冷かな裸像が映つてゐた。水色の紗に濾された和らかな電燈の光の中、屏風を背景に、立膝で、長襦袢からぬけ出した上半身……。――「背が高いから、なんだけれど、あたし、そんなに痩せてないでせう。」――肌目のこまやかな、なだらかな肉附で……。それが、愛慾の氣などみぢんもなく、清淨と云へるほど冷かな、大理石の彫像のやうだつた……。

吉乃は少し身を引いて、固くなつてゐた。そして、不似合な長い溜息をもらした。

「酒をのんで、騷ぐといゝわ。……何か彈きませうか……怪しいんだけれど……。」

岡野は夢からさめたやうに、彼女の顏を眺めた。彼女の眼が、ちらと、極り惡さうに光つた。それが彼の顏を輝かした。

「さう、飲まう。醉つ拂つてもいゝね。……そして、誰か、君の好きな人でも呼んだら……。」

「いゝの、ほんとに……。」

氣駄りさうに彼女は笑つた。

「ちやあちよつと、聞いてくるわ。」

そして彼女が立つていくと、岡野はぢつと眼を据ゑてゐたが、急に、卓子の上につゝ伏してしまつた。

……………………

その頃のことを、「青柳」の女中は、一寸不審さうに眼にとめた。元氣な精力的だつた岡野の顏が、肉薄く痩せて、色艶がなくなり、陰鬱な影をたゝへて、それでゐて妙に蒼白く冴えて見えた。その顏を

なほ引緊めて、ひどく眞面目くさい様子でやつて來た。以前は人の氣につかなかつた鼈甲縁の眼鏡が、不調和に目立つた。度は低さうだが、その眼鏡の奥に、彼は視線を隱すやうにしてゐた。何だか、「教會堂にはいつて行く信者さん、」さういつた風なものを思はせた。

座敷は大抵、彼の好きな、奥の階下の六疊。殆んど口を利かなかつた。吉乃が來るまで、一人で默つて酒を飲んでゐた。女中の一寸した冗談口にも、蒼白い顔を赤らめることがあつた。誰でも、だんだん圖々しく場所馴れてくるものだが、彼だけは「丁度その逆様」をいつてるやうだつた。或は、「吉乃さんに眞劍に」なつてきたかも知れなかつた。然し不思議なことには、吉乃が例によつて、ほかに出てゐてなかなかやつて來ないやうな時、彼は次第に氣持がほぐれて、「ふだんの」彼になつて、「朗かに」なることがあつた。

吉乃の方も、少し變つてきた。やはりあけすけではあつたが、その呑氣者の彼女が、奥さん然と「勿體ぶつて澄しこんで」ゐた。嬉しいのか困つてるのか、さつぱり要領を得なかつたが、なんとなく「しつかりしたところ」が出てきた。

そして二人は、いやに「しんみり」してるといふだけで、他の者には譯が分らなかつた。繁々逢つてゐたが、仲はさほど「漕ぐ」もなささうだつた。さほど嬉しさうもない逢ひ方で、さほど名殘惜しさうもない別れ方だつた。

岡野は泊つていくことはめつたになかつた。酒にも餘り醉はなかつた。けれど吉乃の方が、それこそ「ほんとに不思議に、思ひがけなく、」醉つ拂ふことがあつた。そしてそんな時、なぜともなく、「可哀さう」な氣がするのだつた……。

其他のことは、女中にも分らなかつた。

岡野の好きな奥の階下の六疊といふのは、晝間は薄暗くて、穴藏のやうな感じだつたが、小さな池に寒山竹と南天をあしらつた、狹い二坪か三坪の中庭に臨んで、一寸した濡縁がついてゐた。

笹の葉のそよぎに、二人は默つて聽き入ることがよくあつた。聽きやうで、哀切にも響く、無常にも響く、樂しくも響く……。岡野は涙ぐんだ眼付で、吉乃のなごやかな姿を眺めてゐる。許してくれ！　そんな聲が胸の底から起つてくる……。許してくれ！　僕は汚れてるんだ。汚れた身體を、君のところへ運んできた。やはり、淋しかつたんだ。たまらなく惨めだつたんだ。君の側で、心から悔んでやる、呪つてやる、あの女を、澄代を……。この氣持、君には分らないんだ。つまりは同じだと！　嘘だ、嘘だ。、、、、、、、、、と……理屈はさうでも、それが、ちがうんだ。僕のこの惨めな氣持は、どこから來るんだ。完全な取引になつてゐないからだ。幽靈になつて

ゐないからだ。生活の形式になつてゐないからだ。……そんなら、止めろと云ふだらう。あゝ、どんなにか、さつぱりと……。あの、爛れた愛慾、腐つた愛撫……。それが、僕をふみにぢりながら、遊きつけるといふのか。そんなことはない、斷じてない。僕は誓ふ。たゞ、君に逢へさへすれば……。そして君に逢ふためには、僕の身分では、彼女から金を引出すより外仕方がない。あゝ、呪はれてあれ！　僕自身も呪はれてあれ！　たゞ、信じてくれ、僕の心だけは……。僕は誓ふ、何を指してでも誓ふ。どうしたらいゝんだ、どうしたら……。

　その氣持、吉乃にもぼんやり通じてゐた。そして彼女には、彼が心の中でどんなに惱んでるか、よく分つてゐた。けれど、彼のその誓が、背教者の涙と同じやうに、一時的なものだといふことも、また分つてゐた。そしておかしなことには彼自身も、自分のその誓が、若いロマンチックなものだといふことを、知つてゐた。それでゐて、どうにもならなかつた。感情の潮が引いて、おのづから出來る空虚な瞬間、彼は彼女を、敬虔な信頼の眼で眺めた。彼女は彼を、愛に似た憐憫の眼で眺めた。

　さらさらと、笹の葉の音がすると、寒い……。

　岡野はしきりに杯を重ねたが、酒の落着き工合が惡くて、醉はなかつた。

「君は……」口籠つて、おづおづとした眼付で、「君は、いつまでこんなことをしてゐて……。」

「でも、呑氣でいいのよ。」

　上の空の調子で受けて、急に、彼女は眞面目になつた。

「そのうちに、看板を借りやうと思つてるのよ。」

　そして、丸抱へで出てるのと自前で出るのとの違ひを、商賣の自由さの點や、收入の關係など、こまかな數字まで交へて、話しだした。

「それまでには、あなたこそ、あつちの方、早くきりをおつけなさいな。」

「きりをつけたら、どうする……。」

「どうもしないけれど……苦しまないだけでも、いゝぢやないの。」

「…………」

　彼の身内が震へるのが、彼女の眼にもついた。だが、彼女は喰ひこたへた。そして踏みこたへる努力に、自分でもびつくりした。

「きりをつけるよ。立派につけてみせる。」と岡野は云つてゐた。「僕はそれを誓ふ。それだけが、僕自身を救ふ道だ。そして、本當に君に近寄ることになるんだから……。たとひ……。」

「いゝのよ、もう、そんなこと……。その話、よすの。」

　彼の言葉を押つ被せると、彼女は我知らず涙ぐんでゐた。その下か

ら、彼は云ひ張つてゐた。
「いやだ、何もかも云つてしまはないうちは、いやだ。……あんな女のこと、僕は何とも思つてやしない。あんな女……いや、それよりか、君だつて、君をだつて、僕は愛してるかどうか、自分にも分らない。……たゞ、泥の中から、救はれたかつたんだ。そして君に逢ふと、僕の氣持は、晴ればれとしてきた、明るくなつた。それを、どう云つて感謝していゝか、分らない。たゞ、有難い。僕を救つてくれ。僕は君を愛してやしないかも知れない。君も、僕を愛してやしないだらう。それでもいゝ。たゞ、すがすがしい氣持になれば……。その外のことは、許してくれ……。」
　胸の中に熱いものがたまつてくるのを、吉乃は押へつけた。酩酊が立前なんだ。何かゞ壞れれば、凡てが崩れ落ちさうだつた。そんな脆いんぢやないと思つても、不安だつた。無意識的に踏みしめてきた酩酊の道、それが、岡野との關係で、はつきりしかけてきた今となつて……。
　彼女の眼付は、いつになく嚴肅になつた。そして彼女は酒を飲んだ。敵意的に飲んだ。岡野が泣き出しさうな顏をしてゐるのが、おかしかつた。
　岡野は、兩手で頭をかゝへた。
「僕、僕はほんとに誓ふよ。……その證據には、こんど、彼女を、滋代を、引張つてきてみせる。」
「どこに。」
「こゝに。」
「ばか、ばかね、あなたは、ばかなお坊ちやん……。」
　もう彼女は、醉つてゐた。泣いてるのか笑つてるのか、自分でも分らなかつた。

## 三

　元來の呑氣なおほまかな性質が、却つて心棒となつて、それに達者な八重次の助けもあり、時間も短かかつたので、吉乃はわりに樂だつた。何よりも「青柳」の家でないのがよかつた。
　それでも、調子は初めから狂つてゐた。
　眼窩のくぼみが感ぜらるゝ、大きな、ひどく敏活な眼付。それから、喉を使はないなめらかな聲音で、「こんばんは、」と低く、次に調子よく、「前から、あなたのことはきいてゐて、逢ひたいと思つてゐました。」――その二つが、ずつしりと胸にきて、吉乃は默つてお辭儀をした。そしてさすがにぎごちなく、それを、そのまゝ押し通して落付いてしまつた。

色古渡の着物、緞子の帯、目立たない派手好みに、帯留の孔雀石の青緑色が、しつくり付いてゐた。三十五六の、きやしやな美貌で、見やうによつて、ひどく色つぽくも皮肉にもなる眼付――それに一抹の窶れが見えるのは、眼窩のくぼみのせいらしい。そして何のこだはりもなささうに、ひそかに吉乃の様子を窺ふでもなく、程よく席につかして、八重次に三味線を持たして、自分も低くそれにつけた。

「やつぱり、岸の柳とか、菖蒲浴衣とか、あゝいつた軽いものゝ方がいいわね。わたしもともと、吉住の方だけれど……。といふと、大層出來さうだけれど……ほゝゝ。」

そして澄代と八重次とだけで、座をもち續けてくれた。

「こちらも、何か聴かして頂戴よ。」

さう云はれても吉乃は、好意のある八重次の視線に縋つて、明るく笑つただけで濟した。

三味線を置いて、世間話になると、岡野もそれに加はつたので、吉乃はなほ氣持が樂になつた。

澄代は酒も少しは飲めた。

「吉乃さん、こんど、暇な時、わたしの家へも遊びに來て下さいよ。わたし、各方面からのいろいろなお客か、一番樂しみなんだから……。家では、すつかり、門戸開放主義なの。その代り、御馳走はありませんよ。栗太樓のうめぼしくらゐなら……。」

吉乃ははつとした。彼女はその「うめぼし」が好きで、家でよくしやぶつてゐた……。岡野に話したことがあつたらしい。疑念の眼付で、岡野の方を見ると、彼は煙草をそつぽに吹かしてゐた。

「主義はおかしい……。あんなに泥坊を怖がつてゐて……。」

「いやあね、泥坊は別よ。それと雷……。」

茶み上つた様子をして、彼女は吉乃の肩に手をかけてゐた。

「ねえ八重次さん、わたしこんな妹があつたらいゝと思ふわ。似合ふでせう。わたしも背が高い方だし、このひと、おとなしいし、好きよ。」

「あら、そんなあたしは……。こちらの、妹御さん……。おかしいわ……。」

岡野の方を覗きこむ風をして、八重次は吉乃にやさしい視線を送つた。

吉乃は澄代の手の下に、首を縮めてゐた。地位が逆に、こちらが初めからお客のやうな、座敷の空氣ばかりでなく、いやそんなものをすつかり麻痺らして、絡みつくやうなしなやかな澄代の手の感觸が、彼女の自意識を呼びさます。先程からたゞ本能的に見て取つてゐたものが、表面に浮出してくる……。澄代の、袖口を持ちそへて手を胸に押

しあこる嬌姿、自由にしないさうな綺麗な指、頸筋の荒れた皮膚、瞬間に燃え立つたり消えたりする、而も押しの強いその眼差、そしてその底の、疲れのこもつた色つぽさ……。それから、岡野の、そしらぬ顔をしてやたらに煙草を吹かしながら、澄代の擧動の一つ一つに、魅せられたやうに惹きつけられてる視線……。

　違つてゐた！　殆んど咄嗟に、本能的なのを意識的にまで、吉乃はそれを感じた。岡野の云ふのが本當だ。商賣なんかとは、まるで違ふ。別な、自分の知らない、愛慾の世界だ。淸い取引ではない。汚らはしい。一寸した飛沫でも、身體が汚れる……。

　彼女はぞつとして、澄代の手の下から身を引いた。

「わたしが男だつたら、こんなひと、どうしようかしら……。」

　鋭い火花が、瞬間、岡野の方へ投げられて、あとはさりげなく、醉をかぶつた眼付で、彼女は吉乃の方へ寄つてきた。

「逃げてはいやよ。きやうだいだから、ねえ。」そして杯を二つ並べて、「あちらは喧嘩だから、こちらは仲よく……。」

　けんで杯のやりとりをしてゐる八重次と岡野の方へ、笑ひを送つて、自分で銚子を取上げた。

「あら……。」

　八重次が急いで手を出さうとするのを、澄代は遮つた。

「だめ、だめよ。他人禁制……。二人きりで、内緒の話があるの、ねえ。」

　吉乃は、妙に憔悴な眼付と微笑の口許とで、うなづいて、杯を手した。そして此度は自分で、二つの杯に酒をつぎながら、ぢつと、明らさまに岡野の方を眺めやつた。寢ころんで、何かに打ちのめされたやうな彼の姿が、ほんとに惨めに見えた。ばか、ばかな人！　さう叫んでやりたかつた。

　が彼女の耳には、澄代の暖い息がかゝつてゐた。

「こんど、一人でゆつくり來るわ、ねえ。」

　彼女は夢のやうにそれを聞いてゐた。

「そして……。」

　彼女は動かなかつた。白々とした額が、石のやうに冷くなつた。その頬邊を、澄代は指先でつゝついた。それから、煙草の吸ひさしを、だがさすが用心して火は消して……。

　吉乃は飛び上つた。頬邊を押へて、いきなり室から出て行つた。水で頬邊を冷しに行つた。だが、何のこともたかつた。念入りに化粧を直して、戻つてきた。

　皆の視線が彼女を迎へた。その交錯した十字火の中に、彼女は微笑んではいつていつた。矜持！　そういつた氣持が動いた。自分の商品

の價値を知つてる商人の誇りだ。誰が何と云はうと、誰と取引しやうと、滑らかな美しい肉體だ。躓かないでよかつた。よく持ちこたへた。けだもの、畜生！　さういふ叫びを胸の底にひそめて、彼女は、のびのびと首をそらして、善良さうに微笑んでゐた。

「いやーね。」と八重次が彼女の背を叩いた。「あたしの方がびつくりしちやつたわよ。」

澄代の眼が情熱的に光つてゐた。岡野は眼を逸らした。

「御免なさい。」

誰にともなくさう云つて、吉乃は晴れやかに笑つた。

# 編輯だより

◇雨に風に、朝夕に師走の情感が滲み寄る。寒くなつた。本年度の編輯もこゝに終つた。

◇「第二貧乏物語」の休載は淋しい。河上氏は新勞農黨結黨大會を控えた前後多忙のため、本號に不本意な原稿を寄せるよりも、新年號から大いに筆硯を改めて執筆すると意氣込んでゐられる。幸に讀者の諒恕を乞ふ。

◇久しい沈默を破つた山川氏の本格的所論、當面の金解禁から、更に根本的考慮を要する金本位制に關する土方氏の研究、末弘氏の減俸問題の教訓、皆簡迫力ある論文だ。

◇津島財務官が目下諒解を求め、正金が借入交渉中の對手モルガン金融王國に鋭いメスを向けた小島氏も必讀の文字だ。

◇東北帝大教授岩崎卯三氏に委囑した金解禁に因んだ我が金の歴史は非常に興味ある讀物だ。氏は我國金研究のエキスパート。

◇「娛樂と大衆」は刻下の好問題だ。多樣の興趣、示唆豐富。

◇長く愛讀を願つた德富氏の自敍傳、里見氏の「大地」は本號限りで一先づ打切ります。

◇『日本地理大系』第一回「近畿篇」は、目下配本中。既に手にされたる人々の驚嘆はまた一入であらう。寫眞術、製版術は現代工藝最高の技を極め、科學的の用意と獨創的の編輯と、而して印刷裝幀の典雅優美と相待つて、斯種出版物としては全く空前。恐らく又後を絶つことであらう。

◇我が文壇に新しい苗床を作つた永久の先驅者國木田獨歩の『全集』が、今回我社より發梓される。從來餘り世間に知られざる珍什をも偏く輯集され、眞實の意味に於ける全集が出來上る筈である。裝幀高雅、讀書子の座右には必らずなくてはならぬもの。

◇『マルクス全集』の今月配本は「剩餘價値學說史」第一卷（向坂逸郎氏譯）で、『經濟學全集』は、河上肇氏の「マルクス經濟學」と決定して目下印刷準備中。

◇『現代日本文學全集』は、「宇野浩二集、廣津和郎集、葛西善藏集」を配本、次回は「上田敏集、厨川白村集、阿部次郎集」を決定、準備中。

◇有島生馬助氏の「ジョン・ワナメーカ」は、果して我が實業青年の歡迎を受け、重刷また重版。加藤三郎氏の譯補なる「マーシャル・フィルド」も亦青年の强き共感をそゝるべきものであらう。

**改造定價**

| 冊數 | 定價 | 郵税 |
|---|---|---|
| 壹冊 | 五拾錢 | 參錢 |
| 半ケ年 | 參圓 | 郵税不要 |
| 壹ケ年 | 六圓 | 郵税不要 |

**註文の注意**

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和四年十一月十八日印刷納本
昭和四年十二月一日發行

定價五十錢（郵税參錢）

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町四ノ六　山本三生
印刷人　東京府北豐島郡巣鴨町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ六　改造社
振替東京　八四〇二
電話芝(43)一二三一　一二三二　一二三三

豫約募集

豫告

全六卷

一册壹圓二十錢
每卷約四百五十頁

〆切十二月二十五日

# 國木田獨歩全集

**永久の先驅者の生命と風格を見よ**

明治の末期、自然主義の先驅者として新興文壇の大立物であつた國木田獨歩は、年を經るに從つて益々その聲價と尊崇を高めつつある、彼の物を觀る力、純にして鋭い感性、鮮かなる表現の力、是等は多彩なる明治大正の文學史に於てさへ類甚だ稀である。試に彼の一作を取上げて見よ。孰れか先行者の生命と風格と而して豐かなる暗示を以て我等に迫らないものがあらうか。獨歩の光芒は永く延いて明かに我等の世界にも多くの示唆と寄與を爲しつつあるのだ。此の時、眞實の意味に於ける彼の全集を作らうといふ我社の意圖に對して、必らずや大方の協讃を博し得ることと信ずる。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

有川治助著 ◆忽六十版突破◆

# ジョン・ワナメーカ＝人及びその事業

（四六判四一七頁 寫眞八葉入）

價壹圓五拾錢 送料二十錢

世界商道の偉大なる開拓者、讀め!! これぞ現代の巨寶!!

大アメリカが生んだ輝ける商王、近代商業の偉大な開拓者ジョン・ワナメーカの燦然たる大傳記。これぞ新商業の寶典として最高の光りを放つ！彼の鋭く明徹な觀察、燃ゆる希望と強い自信は如何なる苦境、困難、煉獄時代をも敢然と打破して――見よ！貧しい煉瓦燒の一少年ジョンは成功の第一人者となつた！彼の巨大な足跡には學ぶべき多くの眞理と氣魄がある。炫然たる彼が八十年の生涯は世界の商海を照す巨光だ。この一書こそ耀かしい諸君の未來を基礎づける唯一の力であらう。

【容內】

第一篇 商業開拓者としてのワナメーカ ○僕が商人となつたら○商界の新旗幟○新式の店○新舊商業戰ひ○新商業の勝利○躍進的發展

第二篇 商業經營家としてのワナメーカ ○商界の燈臺○通信販賣○廣告の進化○廣告實例○店員の敎育○黃金の鎖○百貨店對策批判○經營指針

第三篇 人としてのワナメーカ ○ワナメーカの幼時○國家か政黨か○遞信大臣となる○官僚主義打破○私營か國營か○ガス會社との報償問題○軍事敎育の獎勵○社會事業と社會運動○生活の聲○等

# ヘンリ・フォード人及びその事業

（五十二版） 有川治助著

定價壹圓廿錢 送料十八錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

# 最新刊

# ボストン

アプトン・シンクレア著
前田河廣一郎
長野兼一郎（共譯）

四六判・四七八頁
定價壹圓五拾錢
送料廿二錢

命懸けで書いた稀有の小說
全世界を震憾した大事件の眞相描寫

世界を震憾したサツコ、ヴアンゼツテ事件を主題に特に現代歷史小說と銘打つたシンクレア一代の大傑作。世界的大都市ボストンを中心に實業界・金融界・政界・警察・裁判・工場・貧民窟・米國のあらゆる社會相に亙る複雜な事件の發展が有りのまゝに描寫されてゐる。著者は眞相の調査に幾多の危險を冐す必要があつた。曰く「小說には眞理以外に主人公といふものはない」と。眞にこれは命懸けで書いた稀有の小說である。所謂「現代文明社會」の眞相が、これほど面白ろく、これほど正確に書かれたものは斷じて他にない。

前田河廣一郎著

# 惡漢と風景

【內容】日本そこかしこ。不思議な殺人。脫獄囚の研究、剝製の經育。ロビンフッド傳。近世大盜女盜傳。大きく動く刹那。

價一・二〇
稅・二〇

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

# 谷崎潤一郎著

フールス判・極美本

最新刊

## 蓼喰ふ蟲

靈も肉も、總てを知悉した中年の夫と婦が、愛憎の坩堝に打ち震ふ無限の苦惱と哀憐の記錄だ。老父と若き女と、ブロンドのマダムはその豐滿な兩腕に媚態をつくつてしなだれかかる。理智と、それを貫く多彩にいろどられた情慾の焰は、ほのかなるエロチシズムの體臭をさへ伴つて讀者に迫ろ。谷崎氏最近の力作。

◇定價貳圓五拾錢（送料廿四錢）

最新刊

## 饒舌錄

四六判並製
價一圓廿錢
送料十八錢

「饒舌錄」は一年の長きに亘りて改造誌上に發表したもので筆の行くまゝに書いたものであるがその間に谷崎氏の文學藝術に對する意見を窺ふべきもの。「九月一日」は此大事變に於ける著者身邊の描寫。「阪神見聞錄」は東京人たる此の文豪の眼に映ぜる阪神人生活。「上海交游錄」と「上海見聞錄」とは隣國支那の文壇と著者の見た上海の紹介。以上何れも將來谷崎氏の評傳でも書かれる時には唯一の好資料たるべきもので、谷崎氏小說の愛讀者の誰にも興味深きもの。附錄の「グリーブ家のバアバラの話」はハアディの名作。何故に特に之を文豪が譯したかは讀者自然に諒解するであらう。

長篇小說 **鮫人** 價二・〇〇 税・二〇

小說集 **赤い屋根** 價二・〇〇 税・三〇

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

**THE KAIZO,** A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.